

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（178）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（X I）

しば はら い せき
芝原遺跡 4

（南さつま市金峰町）

弥生時代・古墳時代編

2013年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上空から見た芝原遺跡



土器集中遺構 4号



古墳時代の出土遺物



丸底甕，銅鏡・破鏡

序 文

この報告書は、万之瀬川の河川改修事業に伴って、平成11年度から平成16年度にかけて実施した、南さつま市金峰町に所在する芝原遺跡の発掘調査の記録（弥生時代・古墳時代編）です。

芝原遺跡では、縄文時代中・後期の遺構・遺物をはじめ、近世まで連綿とした生活跡が発見されました。各時代とも新発見や資料の充実がありましたが、本報告書に掲載している弥生時代終末から古墳時代にかけても、畿内や北部九州・有明海沿岸地域などとの交流をうかがわせる資料が多数出土し、技術の伝播や人の動きなど、今後、万之瀬川周辺地域のみならず、南九州全域の弥生・古墳時代の調査・研究に大いに貢献するものと思われまます。

また、本報告書をもって、芝原遺跡をはじめ、本改修事業に伴って調査された南田代遺跡、古市遺跡、持躰松遺跡、上水流遺跡、渡畑遺跡の発掘調査報告書（全13巻）のすべての刊行を終了しました。

これらの報告書を、県民をはじめ多くの方々に御覧いただき、地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくことにより、国民の共有財産として文化財が保護・活用されることを祈念しております。

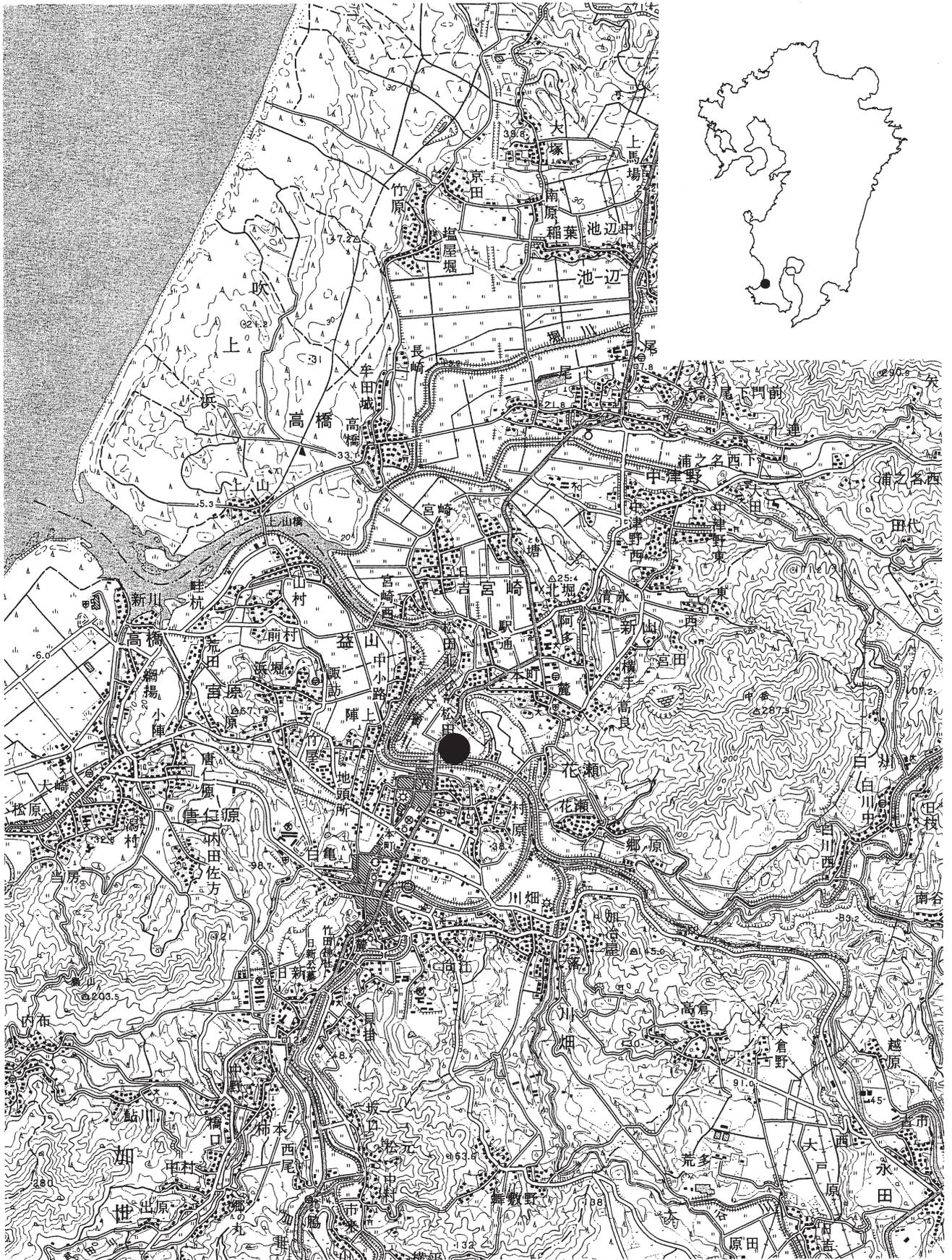
最後に、調査に当たり、御協力いただいた南薩地域振興局建設部（旧伊集院土木事務所）、南さつま市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成25年 3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺 田 仁 志

報 告 書 抄 録

ふりがな	しばはら いせき 4							
書名	芝原遺跡4							
副書名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XI							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	178							
編著者名	関明恵・長野眞一・大久保浩二							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
しばはら いせき 芝原遺跡	みなみ 南さつま市 きん ぼう ちょう 金峰町 おお あぎ みや ぎき 大字宮崎 あぎ しば はら 字芝原 はま きき 濱崎	462209	35-81	31° 25' 40"	130° 19' 37"	1999.10.15 ~ 2000.3.22 2000.4.24 ~ 2001.1.25 2001.5.7 ~ 2002.3.19 2002.5.7 ~ 2003.3.20 2003.5.6 ~ 2004.3.22 2004.5.14 ~ 2004.7.21	49,600	中小河川改修 (万之瀬川)
芝原遺跡	集落跡	弥生時代				井出下式土器 高橋式土器 入来式土器 黒髪式土器 須玖式土器 山ノ口式土器 下大隈式土器 松木蘭式土器 石包丁, 銅鏃, 銅鏡, 石製勾玉	小型仿製鏡, 破鏡	
		古墳時代		竪穴住居跡 竪穴状遺構 土坑 ビット 溝状遺構 焼土遺構 土器集中遺構		中津野式土器 東原式土器 辻堂原式土器 笹貫式土器 庄内・布留式土器 (中～北部九州系) 鉄鏃 砥石		
遺跡の概要	<p>芝原遺跡は、縄文時代中期から近世までの遺構・遺物が発見されている複合遺跡である。これまでに縄文時代遺構編、遺物編、古代・中世・近世編の3冊の報告書を刊行しており、今回の報告は弥生時代・古墳時代編である。</p> <p>弥生時代では、小型仿製鏡と破鏡、銅鏃が出土している。遺構との関わりは不明であるが、南九州においては希少な資料である。</p> <p>古墳時代では、土器集中遺構から在地の中津野式土器を中心とする大量の土器が出土している。これらの中には、中・北部九州地域から搬入されたと考えられる土器やその地域を經由して伝播した製作技法によりつくられたと思われる土器（薄手で軽量の甕など）も出土しており、当時の交易や製作技術の伝播等を考える上で興味深い資料である。</p> <p>このように、芝原遺跡は弥生時代から古墳時代における社会や交易を考える上で貴重な遺跡である。</p>							



芝原遺跡の位置図 (1/50,000)

例言

- 1 本書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う芝原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成11年10月15日～平成12年3月22日、平成12年4月24日～平成13年1月25日、平成13年5月7日～平成14年3月19日、平成14年5月7日～平成15年3月20日、平成15年5月6日～平成16年3月22日、平成16年5月14日～平成16年7月21日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成17年度から平成24年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とした。本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 芝原遺跡の遺物注記の略号は「SHB」である。
- 7 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面にに基づく海拔絶対高である。
- 9 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじた、有限会社スカイサーバイ九州に委託した。
- 10 遺物の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て、関明恵・長野真一が行った。土器の一部は株式会社九州文化財研究所に委託し、監修は関・長野が行った。
- 11 自然科学分析は当センター南の縄文調査室の中村幸一郎が担当した。
- 12 古代・中世編の補遺については、長崎慎太郎の協力を得た。
- 13 遺物の写真撮影は、西園勝彦・吉岡康弘・辻啓明が行った。
- 14 本書の執筆は長野・大久保・関が担当し、編集は関と長野が行った。執筆の分担は次のとおりである。

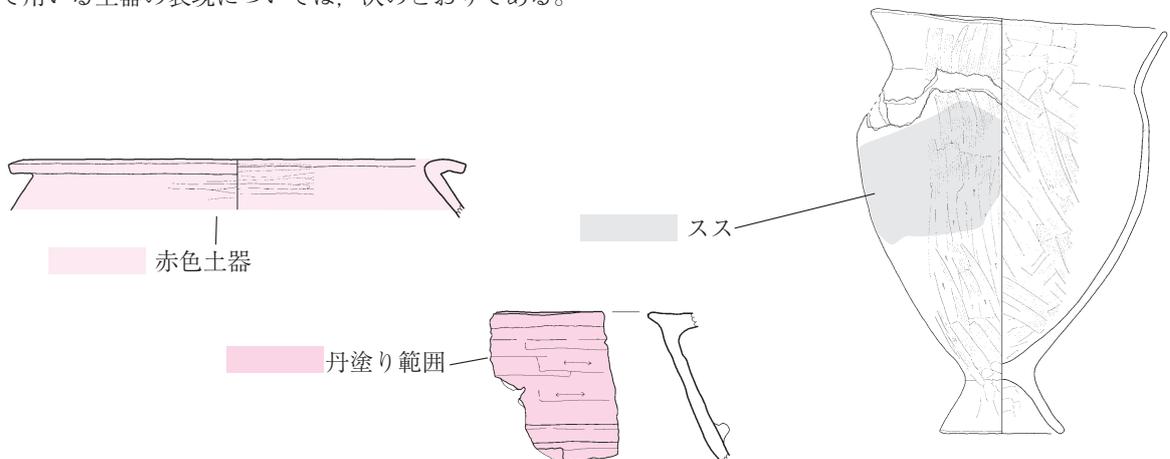
第1章～第2章	……………	大久保
第3章 第1節～第2節	……………	大久保
第3章 第3節 調査の成果		
1 弥生時代	……………	長野・関
2 古墳時代	……………	長野・関
第4章 総括		
第1節	……………	長野
第2節	……………	関
第3節	……………	大久保
補遺	……………	関・長崎・中村
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

凡例

- 1 本書で用いる遺構の表現については、次のとおりである。

■ 焼土・炭化物集中

- 2 本書で用いる土器の表現については、次のとおりである。



本文目次

巻頭カラー

序文

報告書抄録

例言

凡例

目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査	2
第4節 整理・報告書作成	6
第2章 遺跡の位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	11
第3章 調査の方法と成果	17
第1節 調査の方法	17
第2節 層序	18
第3節 調査の成果	19
1 弥生時代の調査	19
2 古墳時代の調査	32
第4章 総括	242
補遺	256
図版	271

挿 図 目 次

第1図	芝原遺跡の調査範囲とグリッド図	9	第48図	竪穴状遺構7号内出土遺物1	71
第2図	年度別調査範囲グリッド図	10	第49図	竪穴状遺構7号内出土遺物2	72
第3図	遺跡周辺の旧地形	13	第50図	竪穴状遺構7号内出土遺物3	73
第4図	周辺遺跡位置図	14	第51図	竪穴状遺構8号および出土遺物	74
第5図	弥生土器1	20	第52図	竪穴状遺構10号	75
第6図	弥生土器2	21	第53図	竪穴状遺構10号内出土遺物	76
第7図	弥生土器3	23	第54図	竪穴状遺構11号	77
第8図	弥生土器4	24	第55図	竪穴状遺構11号内出土遺物および12号	78
第9図	弥生土器5	25	第56図	竪穴状遺構13号および出土遺物	79
第10図	弥生土器6	26	第57図	竪穴状遺構14号および出土遺物	81
第11図	弥生時代土器出土状況図および弥生土器7	27	第58図	竪穴状遺構15号および出土遺物	82
第12図	弥生時代土器出土状況図および弥生土器8	28	第59図	竪穴状遺構16号	83
第13図	弥生土器9	29	第60図	竪穴状遺構16号内出土遺物1	84
第14図	石包丁	30	第61図	竪穴状遺構16号内出土遺物2	85
第15図	銅鏃・銅鏡・鉄鏃・勾玉・垂飾	31	第62図	竪穴状遺構16号内出土遺物3	86
第16図	古墳時代全体遺構図1	36	第63図	竪穴状遺構17号内出土遺物1	87
第17図	古墳時代全体遺構図2	37	第64図	竪穴状遺構17号内出土遺物2	88
第18図	古墳時代遺構配置図1	38	第65図	竪穴状遺構18号および出土遺物	89
第19図	古墳時代遺構配置図2	39	第66図	竪穴状遺構19号	90
第20図	古墳時代遺構配置図3	40	第67図	土坑1号	91
第21図	古墳時代遺構配置図4	41	第68図	土坑2号および出土遺物	92
第22図	古墳時代遺構配置図5	42	第69図	土坑3号および出土遺物	93
第23図	古墳時代遺構配置図6	43	第70図	土坑4～6号および6号出土遺物	94
第24図	古墳時代遺構配置図7	44	第71図	土坑7号および出土遺物	95
第25図	古墳時代遺構配置図8	45	第72図	土坑8～11号および出土遺物	97
第26図	古墳時代遺構配置図9	46	第73図	土坑12～14号	98
第27図	古墳時代遺構配置図10	47	第74図	土坑15号および出土遺物	99
第28図	古墳時代遺構配置図11	48	第75図	土坑16～20号および16・17号内出土遺物	100
第29図	竪穴住居跡1号および出土遺物	51	第76図	土坑21～23号および22・23号内出土遺物	101
第30図	竪穴住居跡2号および出土遺物	52	第77図	土坑24号および出土遺物	103
第31図	竪穴住居跡3号および出土遺物	53	第78図	土坑25～30号および30号内出土遺物	104
第32図	竪穴住居跡4号	54	第79図	土坑31～36号および32号内出土遺物	105
第33図	竪穴住居跡5号	55	第80図	ピット1・2号および出土遺物	106
第34図	竪穴住居跡6号	56	第81図	ピット3号および出土遺物	107
第35図	竪穴住居跡6号内出土遺物	57	第82図	ピット4～6号および出土遺物	108
第36図	竪穴住居跡7号	58	第83図	ピット7～9号および出土遺物	109
第37図	竪穴住居跡7号内出土遺物1	59	第84図	ピット10～13号および出土遺物	111
第38図	竪穴住居跡7号内出土遺物2	60	第85図	溝状遺構	112
第39図	竪穴住居跡7号内出土遺物3	61	第86図	溝状遺構内出土遺物1	113
第40図	竪穴住居跡8号	62	第87図	溝状遺構内出土遺物2	114
第41図	竪穴住居跡8号内出土遺物1	63	第88図	溝状遺構内出土遺物3	115
第42図	竪穴住居跡8号内出土遺物2	64	第89図	溝状遺構内出土遺物4	116
第43図	竪穴状遺構1号	65	第90図	溝状遺構内出土遺物5	117
第44図	竪穴状遺構2・3号および2号内出土遺物	66	第91図	溝状遺構内出土遺物6	118
第45図	竪穴状遺構4号	67	第92図	溝状遺構内出土遺物7	119
第46図	竪穴状遺構5号および出土遺物	68	第93図	焼土遺構	120
第47図	竪穴状遺構6・7号	70	第94図	土器集中遺構1号	122

第95図	土器集中遺構 1号内出土遺物 1	123
第96図	土器集中遺構 1号内出土遺物 2	124
第97図	土器集中遺構 1号内出土遺物 3	125
第98図	土器集中遺構 1号内出土遺物 4	126
第99図	土器集中遺構 2号および出土遺物	127
第100図	土器集中遺構 3号全体図	129
第101図	土器集中遺構 3号 1	130
第102図	土器集中遺構 3号 2	131
第103図	土器集中遺構 3号 3	132
第104図	土器集中遺構 3号断面図	133
第105図	土器集中遺構 3号内出土遺物 1	134
第106図	土器集中遺構 3号内出土遺物 2	135
第107図	土器集中遺構 3号内出土遺物 3	137
第108図	土器集中遺構 3号内出土遺物 4	138
第109図	土器集中遺構 3号内出土遺物 5	139
第110図	土器集中遺構 3号内出土遺物 6	140
第111図	土器集中遺構 3号内出土遺物 7	141
第112図	土器集中遺構 4号 1	143
第113図	土器集中遺構 4号 2	144
第114図	土器集中遺構 4号内出土遺物 1	145
第115図	土器集中遺構 4号内出土遺物 2	147
第116図	土器集中遺構 4号内出土遺物 3	148
第117図	土器集中遺構 4号内出土遺物 4	149
第118図	土器集中遺構 4号内出土遺物 5	150
第119図	土器集中遺構 4号内出土遺物 6	151
第120図	土器集中遺構 4号内出土遺物 7	152
第121図	土器集中遺構 4号内出土遺物 8	153
第122図	土器集中遺構 5号	154
第123図	土器集中遺構 5号内出土遺物 1	155
第124図	土器集中遺構 5号内出土遺物 2	156
第125図	土器集中遺構 5号内出土遺物 3	157
第126図	土器集中遺構 6号および出土遺物 1	158
第127図	土器集中遺構 6号出土遺物 2	159
第128図	土器集中遺構 7号および出土遺物	160
第129図	土器集中遺構 8号	161
第130図	土器集中遺構 8号内出土遺物	162
第131図	古墳時代 土器出土状況図・甕 1	164
第132図	古墳時代 土器 甕 2	165
第133図	古墳時代 土器 甕 3	166
第134図	古墳時代 土器 甕 4	167
第135図	古墳時代 土器 甕 5	168
第136図	古墳時代 土器 甕 6	170
第137図	古墳時代 土器 甕 7	171
第138図	古墳時代 土器 甕 8	172
第139図	古墳時代 土器 甕 9	173
第140図	古墳時代 土器 甕 10	174
第141図	古墳時代 土器 甕 11	175
第142図	古墳時代 土器 甕 12	176
第143図	古墳時代 土器 甕 13	177
第144図	古墳時代 土器 甕 14	178

第145図	古墳時代 土器 甕 15	179
第146図	古墳時代 土器 丸底甕 1	181
第147図	古墳時代 土器 丸底甕 2	182
第148図	古墳時代 土器 壺 1	183
第149図	古墳時代 土器 壺 2	184
第150図	古墳時代 土器出土状況図・壺 3	185
第151図	古墳時代 土器 壺 4	186
第152図	古墳時代 土器 壺 5	187
第153図	古墳時代 土器 壺 6	188
第154図	古墳時代 土器 壺 7	189
第155図	古墳時代 土器 壺 8	190
第156図	古墳時代 土器 丸底壺・小型丸底壺 1	192
第157図	古墳時代 土器 丸底壺・小型丸底壺 2	193
第158図	古墳時代 土器 蓋	195
第159図	古墳時代 土器 鉢 1	196
第160図	古墳時代 土器 鉢 2	197
第161図	古墳時代 土器 鉢 3	198
第162図	古墳時代 土器 鉢 4	200
第163図	古墳時代 土器 鉢 5	202
第164図	古墳時代 土器 高坏 1	203
第165図	古墳時代 土器 高坏 2	204
第166図	古墳時代 土器 高坏 3	205
第167図	古墳時代 土器 埴 1	207
第168図	古墳時代 土器 埴 2	208
第169図	古墳時代 土器 埴 3	209
第170図	古墳時代 土器 埴 4	211
第171図	古墳時代 土器 埴 5	212
第172図	古墳時代 土器 埴 6	213
第173図	古墳時代 土器 埴 7	214
第174図	古墳時代 土器 埴 8	215
第175図	古墳時代 土器 手捏 1	216
第176図	古墳時代 土器 手捏 2	217
第177図	古墳時代 土器 手捏 3	218
第178図	古墳時代 土器 坏蓋	219
第179図	古墳時代 その他	220

補遺

補遺 第①図	縄文時代中期後葉～後期 遺構	256
補遺 第②図	遺構配置図 1	257
補遺 第③図	遺構配置図 2	258
補遺 第④図	遺構配置図 3	259
補遺 第⑤図	遺構配置図 4	260
補遺 第⑥図	古代 遺構	261
補遺 第⑦図	中世 遺構	262
補遺 第⑧図	古代・中世 遺物 1	263
補遺 第⑨図	墨書土器分布図	265
補遺 第⑩図	古代・中世 遺物 2	266
補遺 第⑪図	古代・中世 遺物 3	267

図版目次

巻頭図版 1	上空から見た芝原遺跡	図版34	土器集中遺構内出土遺物13
巻頭図版 2	土器集中遺構 4号	図版35	土器集中遺構内出土遺物14
巻頭図版 3	古墳時代の出土遺物		古墳時代 土器 1
巻頭図版 4	丸底甕, 銅鏡・破鏡		古墳時代 土器 2
		図版36	古墳時代 土器 3
図版 1	芝原遺跡遠景	図版37	古墳時代 土器 4
図版 2	①・②芝原遺跡近景 ③作業風景 ④竪穴住居跡 1号	図版38	古墳時代 土器 5
図版 3	竪穴住居跡①2号 遺物出土状況 ②・③銅鏡 ④鉄鏃	図版39	古墳時代 土器 6
図版 4	竪穴住居跡 ①3号 ②4号	図版40	古墳時代 土器 7
図版 5	竪穴住居跡 ①5号 ②6号	図版41	古墳時代 土器 8
図版 6	竪穴住居跡①7号 ②～④7号内出土遺物 竪穴状遺構⑤6号 ⑥10号 ⑦11号 ⑧13号	図版42	古墳時代 土器 9
図版 7	竪穴状遺構 ①16号 ②14号 ③18号 ④19号 土坑 ⑤1号 ⑥2号	図版43	古墳時代 土器10
図版 8	①土坑5号 ②土坑6号 ③6号内遺物出土状況④ピット8号 ⑤ピット10号 ⑥土器集中遺構2号	図版44	古墳時代 土器11
図版 9	土器集中遺構 ①・②1号 ③～⑤3号	図版45	古墳時代 土器12
図版10	土器集中遺構 ①～③4号 ④7号 ⑤8号	図版46	古墳時代 土器13
図版11	土器集中遺構 ①5号1段 ②2段目 ③3段目 ④A・B-24区土器集中出土状況	図版47	古墳時代 土器14
図版12	土器集中出土状況 ①～③C・D-36・37区 ④E-31区 ⑤D-37区, ⑥A・A'-27区	図版48	古墳時代 土器15
図版13	①溝状遺構 ②焼土遺構	図版49	古墳時代 土器16
図版14	遺物出土状況 ①・②銅鏡 ③銅鏃 ④線刻文のある鉢形土器	図版50	古墳時代 土器16
図版15	弥生土器	図版51	①弥生時代 鋸齒文付壺口縁部 ②古墳時代 坏蓋・坏
図版16	①石包丁 ②鉄鏃・銅鏃・勾玉・管玉	図版52	古墳時代 土器(鋸齒文) 1
図版17	竪穴住居跡内出土遺物	図版53	古墳時代 土器(鋸齒文) 2
図版18	竪穴状遺構内出土遺物	図版54	補遺 1 縄文時代中期後葉～後期集石 ①1号～3号 ②1号 ③3号完掘状況・古代土坑 ④検出状況 ⑤完掘状況 ⑥・⑦出土遺物
図版19	土坑内出土遺物	図版55	補遺 2 ①古代竪穴建物状遺構 ②中世方形竪穴建物跡 ③・④古代の出土遺物 ⑤～⑧中世の出土遺物
図版20	土坑・ピット・溝状遺構内出土遺物 1	図版56	補遺 3 古代 墨書土器・刻書土器
図版21	溝状遺構内出土遺物 2		
図版22	土器集中遺構内出土遺物 1		
図版23	土器集中遺構内出土遺物 2		
図版24	土器集中遺構内出土遺物 3		
図版25	土器集中遺構内出土遺物 4		
図版26	土器集中遺構内出土遺物 5		
図版27	土器集中遺構内出土遺物 6		
図版28	土器集中遺構内出土遺物 7		
図版29	土器集中遺構内出土遺物 8		
図版30	土器集中遺構内出土遺物 9		
図版31	土器集中遺構内出土遺物 10		
図版32	土器集中遺構内出土遺物 11		
図版33	土器集中遺構内出土遺物 12		

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護と活用を図るため、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課、以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川川床遺跡、松ヶ鼻遺跡、持鉢松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が判明した。

この結果を受けて、県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の三者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとした。

芝原遺跡の確認調査は県立埋文センターが担当し、平成10年度に実施した。その結果、予定地において49,600㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受けて、再度三者で協議した結果、本調査は、県立埋文センターが担当し、平成11年度から平成16年度に調査を実施した。

報告書作成作業は、県立埋文センターが担当し、平成17年度から報告書作成作業に着手した。これまで、平成21年度に「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」、平成22年度に「芝原遺跡2 縄文時代遺物編」、平成23年度に「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」を刊行した。そして、平成24年度も継続して作業を実施し、「芝原遺跡4 弥生時代・古墳時代編」（本報告書）を刊行した。

第2節 事前調査

1 分布調査

(1) 調査概要

県土木部は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、県文化財課に照会した。

これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に事業区域内の分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川川床遺跡、松ヶ鼻遺跡、持鉢松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が明らかとなった。

2 確認調査

(1) 調査概要

平成10年8月に県土木部・県文化財課・県立埋文センターの3者で今後の調査の進め方について協議した結果、平成10年度中に芝原遺跡の確認調査を実施することとした。

確認調査は、平成10年11月に実施した。

(2) 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部河川課		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永 和人
調査企画	次長兼総務課長	尾崎 進	
	調査課長	戸崎 勝洋	
	調査課長補佐兼		
	第一調査係長	新東 晃一	
	主任文化財主事	青崎 和憲	
調査担当	文化財主事	安藤 浩	
	文化財研究員	中村 和美	
事務担当	主査	前屋敷裕徳	
	主査	政倉 孝弘	
	主査	溜池 桂子	

3 調査経過

事業区域内に2m×10mを基本としたトレンチを、ほぼ50mおきに13本設定した（第1図）。確認調査面積は339㎡であった。

各トレンチの概要は、表1のとおりである。

表1 各トレンチの概要

トレンチ	遺物	遺構	時代	包含層までの深さ
1	有	有	中世・古墳・縄文後期	20～40cm
2	有	有	中世・古墳・縄文後期	30cm
3	有	有	中世・古代	20cm
4	有	無	中世	85cm
5	有	有	中世	70～85cm
6	有	有	中世・縄文後期	80cm
7	無	無	—	—
8	無	無	—	—
9	無	無	—	—
10	無	無	—	—
11	有	有	中世	20cm
12	有	無	中世	70～110cm
13	有	有	古墳	40cm

表1の結果のとおり、7トレンチから10トレンチを除く9か所のトレンチで、遺物包含層または遺構が確認された。7トレンチから9トレンチの範囲は、土層の堆積状況から旧河道に相当すると判断できた。事業区域内はすでに圃場整備が行われ、中世から古墳時代の包含層は地点によっては残存が悪く、包含層までの深さは極めて浅い状態であった。縄文時代については、やや深い砂層から出土している。

確認調査の結果から、芝原遺跡の範囲はC-1区からB~E-38区(第1図)であり、遺跡面積は49,600㎡である。また、その時代は、縄文時代中・後期、古墳時代、古代、中世(前期・後期)であるが、地点によってその密度が異なっている。

この確認調査の結果を受け、県土木部・県文化財課・県立埋文センターの3者で協議し、現状保存や設計変更が不可能であることから、平成11年度から記録保存のための本調査を実施することとなった。

第3節 本調査

1 調査概要

本調査では、平成11年度及び平成12年度に築堤部分、平成13年度に新堤防と旧堤防の間、平成14年度に新堤防と旧堤防の間及び万之瀬橋橋脚部分、平成15年度に橋梁部及び樋門から新堤防の間、平成16年度に前年度の調査未了部分を調査した。(第2図参照)

2 調査体制

(平成11年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 吉永 和人
 調査企画 次長兼総務課長 黒木 友幸
 調査課長 戸崎 勝洋
 調査課長補佐兼 第一調査係長 新東 晃一
 主任文化財主事 中村 耕治
 調査担当 文化財主事 安藤 浩
 西郷 吉郎
 栗林 文夫
 事務担当 総務係長 有村 貢
 主 事 溜池 佳子

(平成12年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井上 明文
 調査企画 次長兼総務課長 黒木 友幸
 調査課長 新東 晃一
 調査課長補佐 立神 次郎
 主任文化財主事兼 第一調査係長 青崎 和憲
 主任文化財主事 中村 耕治
 文化財主事 栗林 文夫
 文化財研究員 福永 修一
 文化財調査員 橋口 亘
 事務担当 総務係長 有村 貢
 調査指導 鹿児島大学歯学部
 助 手 竹中 正巳
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
 助 手 中村 直子

(平成13年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 井上 明文
 作成企画 次長兼総務課長 黒木 友幸
 調査課長 新東 晃一
 調査課長補佐 立神 次郎
 主任文化財主事兼 第一調査係長 青崎 和憲
 主任文化財主事 中村 耕治
 調査担当 文化財主事 栗林 文夫
 日高 正人
 文化財調査員 橋口 亘
 事務担当 総務係長 前田 昭伸
 主 査 今村孝一郎
 調査指導 鎌倉考古学研究所
 所 員 馬淵 和雄
 鹿児島県立短期大学生生活科学科
 助 教 授 揚村 固
 鹿児島大学教育学部
 助 教 授 日隈 正守
 鹿児島大学歯学部
 助 手 竹中 正巳

(平成14年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 井上 明文
 調査企画 次長兼総務課長 田中 文雄

調査課長 新東 晃一
 調査課長補佐 立神 次郎
 主任文化財主事兼
 第一調査係長 池畑 耕一
 主任文化財主事 中村 耕治
 調査担当 文化財主事 中村 和美
 日高 正人
 最上 優子
 黒川 忠広
 文化財調査員 橋口 亘
 事務担当 総務係長 前田 昭伸
 主 査 脇田 清幸
 調査指導 鹿児島大学歯学部
 助 手 竹中 正巳
 株式会社九州テクノロジーサーチ
 大澤 正巳

(平成15年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 木原 俊孝
 調査企画 次長兼総務課長 田中 文雄
 調査課長 新東 晃一
 調査課長補佐 立神 次郎
 主任文化財主事兼
 第一調査係長 池畑 耕一
 主任文化財主事 中村 耕治
 調査担当 文化財主事 湯之前 尚
 中村 和美
 日高 正人
 元田 順子
 富山 孝一
 最上 優子
 事務担当 総務係長 平野 浩二
 主 事 池 珠美
 調査指導 広島大学文学部
 教 授 河瀬 正利
 西南学院大学
 教 授 高倉 洋彰

(平成16年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 木原 俊孝
 調査企画 次長兼総務課長 賞雅 彰

調査課長 新東 晃一
 調査課長補佐 立神 次郎
 主任文化財主事兼
 第二調査係長 彌榮 久志
 主任文化財主事 長野 眞一
 調査担当 文化財主事 富山 孝一
 拔水 茂樹
 黒川 忠広
 文化財研究員 上床 真
 事務担当 総務係長 平野 浩二

3 調査経過

調査の具体的経過については、調査日誌をもとに主な出来事を月単位で記していきたい。

◇ 平成11年度

平成11年10月15日～

平成12年3月22日 実働83日

〈10月〉

器材搬入。A～E-7～11区のⅢ層掘り下げ。中世の溝検出(B～C-8～10)。

〈11月〉

A・B-3～10区, C～E-4～6区のⅢ層掘り下げ。土坑, 溝状遺構, 堅穴建物検出。C-4区から白磁碗出土。D-4焼土内から青磁稜花皿の完形品出土。

〈12月〉

C・D-1～3区Ⅲ層掘り下げ。A'～C-16～22Ⅲ層上面検出。A'・A-20区で掘立柱建物跡検出。A-18区で土坑墓検出。B・C-18区で鍛冶遺構検出。A'・A-21・22区Ⅲ層掘り下げ。

〈1月〉

A～C-11～16区Ⅲ層上面検出。A～C-11～13区, B・C-14・15区, A～C-16～18区Ⅲ層掘り下げ。B・C-13～15区で畠検出。空中写真撮影(27日)。

〈2月〉

A～C-17・18区, A'～C-19～22区Ⅲ層掘り下げ。B・C-11・12区, A～C-13～17区Ⅳ層掘り下げ。D-15区で炉跡検出。B・C-13・14区Ⅴ層で畠検出。東側調査区埋め戻し(7日)。竹中正巳氏(鹿大歯学部助手)による土坑内人骨の鑑定(15日)。

〈3月〉

A～C-14～16区, A-17・18区Ⅲ層掘り下げ。A～C-17～19区Ⅵ層掘り下げ。縄文後期, 晩期の土器多数出土。調査終了(22日)

◇ 平成12年度

平成12年4月24日～

平成13年 1月25日 実働107日

〈4月〉

器材搬入・オリエンテーション実施(24日)表土の剥ぎ取り,Ⅲ層面検出。

〈5月〉

A～C-24～29区のⅢ層上面検出。溝状遺構,ピット,畝状遺構検出。A・B-20～24区のⅢ層上面検出。近世土坑墓2基検出(古銭有り)。A'～C-11～22区Ⅶ層検出。かまど遺構切り取り保存。

〈6月〉

A'～C-19～22区Ⅳ層掘り下げ。A・B-22～26区Ⅲ層上面でピット,土坑,溝跡,掘立柱建物跡検出。A'～C-21～29区の空中写真撮影。A'～B-27～29区Ⅲ層掘り下げ。A・B-11～17区Ⅳ層掘り下げ。A'～B-15・16区のⅣ層上面で遺構検出。

〈7月〉

A'～C-20～29区Ⅲ層掘り下げ及びⅣ層上面で遺構検出。A'-29区で竪穴建物検出。A'～C-11～21区のⅧ層掘り下げ。B-19区竪穴建物検出。

〈8月〉

B-21～24区,C-22～25区のⅣ層の遺構掘り下げ。C-24～25区で土坑墓3基(人骨3体)検出。B-17～19区Ⅷ層掘り下げ。A～C-20～23区のⅥ層掘り下げ。A'～B-26～29区Ⅳ層の遺構掘り下げ。A・B-20～24区Ⅵ層検出。

〈9月〉

A～C-22～29区Ⅵ層掘り下げ。A-25区で集石検出。A-26区から指宿式土器出土。A'・A-17～19区Ⅱ層掘り下げ,遺構検出,Ⅵ層上面検出,掘り下げ。A～C-21～23区Ⅷ層掘り下げ。

〈10月〉

A・B-26～28区Ⅵ層掘り下げ。A'・B-23～30区Ⅷ層掘り下げ。A～C-21～23区Ⅷ層掘り下げ。

〈11月〉

A'・B-30・31区の表土剥ぎ,Ⅲ層掘り下げ。ピット,井戸跡,土坑,溝跡,掘立柱建物跡検出。

〈12月〉

A'・B-30・31区Ⅲ層検出のピット,土坑,竪穴建物の掘り下げ。Ⅳ層検出。Ⅳ・Ⅴ層重機で剥ぎ取り。

〈1月〉

A'・B-30・31区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取上げ。調査終了(25日)

◇ 平成13年度

平成13年5月7日～

平成14年3月19日 実働174日

〈5月〉

器材搬入・オリエンテーション実施(7日)。E・F

-9・10区表土の剥ぎ取り。E～H-2～5区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。畝跡検出。E～G-2～5区Ⅳ層上面検出。ピット,木棺墓,大溝検出。E～G-7～12区掘り下げ。大溝内人骨出土。土坑墓検出(F・G-8区)。E～G-5～12区のⅡ層・攪乱層掘り下げ。D～F-11～14区の攪乱層,溝の掘り下げ。畝跡検出。

〈6月〉

D～G-12区の大溝内から青磁碗・皿の完形品出土。E-13区の土坑墓から古銭,人骨出土。D～G-6～12区Ⅱ層上面検出の遺構掘り下げ。ピット,芋穴,土坑,掘立柱建物,大溝検出。E-7区の土坑墓から人骨出土。E・F-7・8区Ⅳ層掘り下げ。D・E-13区大溝検出。E・F-16・17区Ⅱ層で畝跡検出。

〈7月〉

E・F-9・10区,D～F-11・12区,D・E-13区,D～F-14区Ⅵ層掘り下げ。D～F-15～23区Ⅱ層掘り下げ。畝跡,土坑,かまど跡検出。

〈8月〉

D～G-15～22区Ⅱ層掘り下げ。E・F-8区で炭化物,鉄滓の入った遺構検出。E・F-17・18区で土器・石器の集積検出。D・E-14区のⅥ層掘り下げ。

〈9月〉

D～F-18～28区Ⅱ層掘り下げ。E・F-15～17区Ⅱ層掘り下げ。畝跡多数検出。D-18区から多口瓶出土。

〈10月〉

D～F-25～31区のⅡ層掘り下げ。D・E-20～26区Ⅲ層検出。C～F-14～17区Ⅵ層掘り下げ。D-24区で焼失建物跡検出。

〈11月〉

C～E-23～31区Ⅲ層掘り下げ。D～F-19～23区Ⅳ層検出の遺構掘り下げ。

〈12月〉

B・C-25～29区Ⅳ層掘り下げ。B・C-30・31区Ⅲ層掘り下げ。C・D-18～21区表土剥ぎ,Ⅱ層掘り下げ。B・C-30・31区で中世土坑墓検出。E-27区で建物に伴う4面底部検出。

〈1月〉

B～E-26～31区Ⅲ層掘り下げ。2×3間の掘立柱建物検出。C・D-20～25区Ⅱ層掘り下げ。C～E-24・25区Ⅳ層上面検出。B・C-17区のⅣ層上面で,かまど跡,古道,ピット検出。空中写真撮影(29日)。

〈2月〉

B～E-24～31区Ⅳ層掘り下げ。かまど跡,ピット検出。遺構の写真撮影。

〈3月〉

C～E-24～28区Ⅳ層掘り下げ。集石、かまど跡等の遺構実測。
調査終了（19日）。

◇ 平成14年度

平成14年5月7日～

平成15年3月20日 実働157日

〈5月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（7日）。C～E-18～25区Ⅵ層掘り下げ。集石検出。D～F-14・15区Ⅵ層上面検出。

〈6月〉

E-22～26区、D-24・25区、C-25区Ⅵ層掘り下げ。B・C-15・16区Ⅲ層掘り下げ。C・D-25区から指宿式土器多数出土。D-25区からサメの歯出土。旧堤防下の試掘実施（14日）。

〈7月〉

D・E-19～24区Ⅳ層掘り下げ。C-18～23区、D-19～22区Ⅷ層掘り下げ。C-15～17区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。D-19区から春日式土器が部分的に集中して出土。C-16区から「開元通宝」出土。橋脚部表土剥ぎ（11日～23日）。

〈8月〉

橋脚部掘り下げ。C・D-20、24・25区Ⅷ層掘り下げ。D～G-30～32区で近世畠跡検出。D-32・33区で製鉄遺構検出。D-34区から成川式土器、須恵器、染付出土。C-36・37区で成川式土器出土。

〈9月〉

C・D-36・37区Ⅲ層掘り下げ。C～F-30～32区Ⅲb層掘り下げ。D～E-32・33区Ⅲ層掘り下げ。E-31区でかまど跡検出。E-32区で竪穴住居検出。

〈10月〉

D～F-30区、C・D-32～34区、C・D-36・37区Ⅲb層掘り下げ。E・F-30～32区、C・D-33・34区、C・D-36・37区Ⅳ層掘り下げ。E-31区の土坑墓から人骨検出。C-32区の方形竪穴建物跡から銅製鏃検出。D-37区から黒髪式土器出土。

〈11月〉

C・D-32・32、36・37区Ⅳ層掘り下げ。C～D-33・34区Ⅷ層掘り下げ。F～H-23～29区表土掘り下げ。C・D-33・34区から市来式土器出土。遺構実測、写真撮影多数。

〈12月〉

E～G-26～29区Ⅲ層掘り下げ、畠跡検出。C～F-32区Ⅶ層掘り下げ。E・F-30・31、C・D-33・34、36～38区Ⅷ層掘り下げ。

〈1月〉

F・G-25～27区Ⅰb層掘り下げ。溝遺構検出。E～G-18～24区Ⅱ層掘り下げ。遺構検出。B・C-

32・33、D-31・32、E・F-30～33区Ⅷb層掘り下げ。C・D-35・36区Ⅹ層掘り下げ。鐘崎式土器出土。

〈2月〉

E・F-32区Ⅷb層掘り下げ。市来式土器多数出土。D・F-30・31区内から指宿式土器、春日式土器多数出土。E・F-30～32、B～D-32・33区Ⅹb層掘り下げ。集石、ピット、土坑検出。D～F-20～24区Ⅹ層掘り下げ。F～G-17～21区Ⅳ層掘り下げ。空中写真撮影（21日）。

〈3月〉

E-30・31区Ⅹ層掘り下げ。指宿式土器多数出土。E・F-24・25区Ⅱ層掘り下げ。E-24区でかまど跡、焼土集中検出。D～F-19～24区Ⅹ層掘り下げ。調査終了（20日）。

◇ 平成15年度

平成15年5月6日～

平成16年3月22日 実働153日

〈5月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（6日）。F・G-15～20区Ⅳ層掘り下げ。F～H-13・14区Ⅲ層掘り下げ。E・F-23～29区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器出土、土坑検出。F-28・29区で集石検出。E・F-26～29区Ⅵ層掘り下げ。E-30区で集石検出。E・F-19～23区の縄文時代後期包含層より、生木、ドングリ等の木の実多数出土。

〈6月〉

F・G-14～18区Ⅱ層掘り下げ。G-16・17区で焼土、炭化物検出。E・F-19～23、26～29、D・E-29・30区Ⅵ層掘り下げ。E・F-26～29区で集石9基、土坑、配石遺構1基検出。A・B-36・37区Ⅱ層掘り下げ。

〈7月〉

E・F-24～26区、D～F-26～30区、D-35、37区Ⅵ層掘り下げ。E・F-27区から磨消縄文土器出土。E-29区、D・E-30区で竪穴住居検出。A～C-35～37区Ⅱ層、D-36区Ⅳ層掘り下げ。

〈8月〉

作業員一部上水流遺跡へ（7日）。E-27～30区Ⅵ層掘り下げ。A～D-32～37区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。D-34～36区Ⅲ層掘り下げ。製鉄炉検出。D-37区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器溜り検出。空中写真撮影（6日）。

〈9月〉

A～C-32～35区Ⅲb層掘り下げ。B-33・34区で溝状遺構、須恵器、土師器溜り検出。B-34・35区で溝状遺構検出。A～C-36・37区Ⅲb層掘り下げ。C・D-37区Ⅳ層掘り下げ。D-37区から成川式土器溜り検出。

〈10月〉

A～C-31～37区Ⅲb層掘り下げ。ピット，土坑検出。A・B-36・37区から銅鏃出土。C-35区から市来式土器，磨製石斧出土。

〈11月〉

B・C-31～35区Ⅲb層掘り下げ。B-33・34区
の古墳時代竪穴住居跡周辺から青銅製の小型倣製鏡出土。B-31区から入佐式土器出土。B・C-31～35区Ⅳ層掘り下げ。ピット，土坑検出。B-31区から市来式土器出土。F-34区の河川堆積層から「寛永通宝」出土。D～F-35～37区Ⅳ層掘り下げ。E-35区で焼土遺構検出。

〈12月〉

C～E-36～38区Ⅳ層掘り下げ。B～C-31～33，A～C-34・35区Ⅵ層掘り下げ。ピット検出。A・B-35区から市来式土器多数出土。

〈1月〉

B・C-31～35区Ⅵa・Ⅵb層掘り下げ。ピット検出。遺構掘り下げ，実測，写真撮影等を行う。Ⅵ層遺物多量に出土のため2mグリッドにて一括取り上げ（9日～）。

〈2月〉

B・C-31～35区Ⅵb，Ⅶ層掘り下げ。阿高式土器，春日式土器出土。B・C-35区から鋸歯状尖頭器出土。D-35区の溝状遺構から染付，滑石製品，龍泉窯系青磁出土。

〈3月〉

B～D-31～35区のⅧ～Ⅹ層掘り下げ。ピット等の検出。B-34区で集石2基検出。A～C-36・37区Ⅵ層掘り下げ。調査終了（22日）。

◇ 平成16年度

平成16年5月14日～

平成16年7月21日 実働37日

〈5月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（14日）。A～C-36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B-36区から完形の縄文土器3点出土。赤色顔料付着の南福寺式土器（鉢形）出土。軽石製加工品出土。

〈6月〉

A～C-36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B-36区から足形土製品出土。

〈7月〉

A～C-36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B・C-36・37区で集石2基検出。北側土層断面清掃，写真撮影（5日）。

調査終了（21日）

第4節 整理・報告書作成

1 作成概要

県土木部・県文化財課・県立埋文センターの3者で報告書作成作業の進め方について協議した結果，中小河川改修事業（万之瀬川）の整理・報告書作成業務を平成25年度までとし，次のように計画した。

平成17年度	整理作業 芝原遺跡・上水流遺跡
平成18年度	整理作業 持鉢松遺跡・芝原遺跡 報告書刊行 上水流遺跡1 「縄文時代後期から弥生時代編」
平成19年度	整理作業 芝原遺跡 報告書刊行 上水流遺跡2 「古墳時代から近世編」
平成20年度	整理作業 渡畑遺跡・芝原遺跡 報告書刊行 上水流遺跡3 「縄文時代前期・中近世遺物編」
平成21年度	報告書刊行 上水流遺跡4 「縄文時代前期末から中期前半編」 渡畑遺跡1 「縄文時代編」 芝原遺跡1 「縄文時代遺構編」
平成22年度	報告書刊行 渡畑遺跡2 「弥生時代から中近世編」 芝原遺跡2 「縄文時代遺物・土器編」
平成23年度	報告書刊行 芝原遺跡3 「縄文時代遺物・石器編」 芝原遺跡4 「弥生・古墳時代遺構編」
平成24年度	報告書刊行 芝原遺跡5 「弥生・古墳時代遺物編」
平成25年度	報告書刊行 芝原遺跡6 「古代・中世・近世編」

上記の計画に従い，平成21年度まで整理作業・報告書の刊行を進めてきたが，平成21年10月13日に3者で再度

協議した結果、報告書の内容と刊行予定を見直し、中小河川改修事業（万之瀬川）の整理・報告書作成業務を平成24年度までとした。

また、古墳時代に関しては遺物量が膨大なため、「古代・中世・近世編」と並行して2年計画で整理作業を進めていくこととし、刊行順を入れ替えた。よって、平成22年度以降の計画を次のように変更した。

平成22年度 報告書刊行
 渡畑遺跡2
 「弥生時代から中近世編」
 芝原遺跡2
 「縄文時代遺物編」

平成23年度 報告書刊行
 芝原遺跡3
 「古代・中世・近世編」
 整理作業
 弥生・古墳時代の遺構・遺物

平成24年度 報告書刊行
 芝原遺跡4
 「弥生時代・古墳時代編」

2 作成体制

(平成17年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 上今 常雄
 作成企画 次長兼総務課長 有川 昭人
 次長兼調査第一課長 新東 晃一
 主任文化財主事兼
 調査第一課第二調査係長 長野 眞一
 作成担当 文化財主事 東郷 克利
 富山 孝一
 廣 栄次
 事務担当 主幹兼総務係長 平野 浩二

(平成18年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 上今 常雄
 (18年7月まで)
 宮原 景信
 (18年8月から)
 作成企画 次長兼総務課長 有川 昭人
 次 長 新東 晃一
 調査第一課長 池畑 耕一

主任文化財主事兼
 調査第一課第二調査係長 中村 耕治
 作成担当 主任文化財主事 繁昌 正幸
 文化財主事 東郷 克利
 富山 孝一
 廣 栄次
 抜水 茂樹
 黒川 忠広
 文化財研究員 上床 真
 事務担当 総務係長 寄井田正秀

(平成19年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 宮原 景信
 作成企画 次長兼総務課長 平山 章
 次 長 新東 晃一
 調査第一課長 池畑 耕一
 主任文化財主事兼
 調査第一課第二調査係長 中村 耕治
 作成担当 文化財主事 溝口 学
 東郷 克利
 富山 孝一
 抜水 茂樹
 森 雄二
 黒川 忠広
 文化財研究員 上床 真
 事務担当 総務係長 寄井田正秀

(平成20年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
 作成主体 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 宮原 景信
 作成企画 次長兼総務課長 平山 章
 次 長 池畑 耕一
 調査第一課長 青崎 和憲
 主任文化財主事兼
 調査第一課第二調査係長 井ノ上 秀文
 作成担当 文化財主事 溝口 学
 佐藤 義明
 木之下 悦朗
 黒川 忠広
 文化財研究員 上床 真
 事務担当 総務係長 紙屋 伸一

(平成21年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
作成主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 山下 吉美
作成企画 次長兼総務課長 齊藤 守重
次 長 青崎 和憲
調査第一課長 中村 耕治
主任文化財主事兼
調査第一課第二調査係長 宮田 栄二
作成担当 文化財主事 溝口 学
小林 晋也
日高 勝博
文化財研究員 上床 真
事務担当 総務係長 紙屋 伸一
主 査 高崎 智博

(平成22年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
作成主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 山下 吉美
作成企画 次長兼総務課長 田中 明成
次 長 中村 耕治
調査第一課長 長野 眞一
調査第一課第二調査係長 八木澤一郎
作成担当 文化財主事 溝口 学
小林 晋也
池畑 耕一
文化財研究員 平屋 大介
事務担当 総務係長 紙屋 伸一
専門員 鳥越 寛晴
調査指導 早稲田大学理工学術院
准 教 授 山本 信夫
鹿児島女子短期大学
教 授 竹中 正巳

(平成23年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
作成主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺田 仁志
作成企画 次長兼総務課長 田中 明成
次 長 井ノ上秀文
調査第一課長 堂込 秀人
調査第一課第二調査係長 大久保浩二

作成担当 文化財主事 関 明恵
長崎慎太郎
有馬 孝一
文化財研究員 平屋 大介
事務担当 総務係長 大園 祥子
主 事 岡村 信吾
調査指導 早稲田大学理工学術院
准 教 授 山本 信夫
鹿児島女子短期大学
教 授 竹中 正巳

(平成24年度)

事業主体 鹿児島県土木部河川課
作成主体 鹿児島県教育委員会
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺田 仁志
作成企画 次長兼総務課長 新小田 譲
次 長 井ノ上秀文
調査第一課長 堂込 秀人
調査第一課第二調査係長 大久保浩二
作成担当 文化財主事 長野 眞一
関 明恵
事務担当 総務係長 大園 祥子
主 事 岡村 信吾
調査指導 鹿児島大学
埋蔵文化財調査センター
准 教 授 中村 直子
福岡市教育委員会
久住 猛雄
鹿児島県考古学会副会長
池畑 耕一

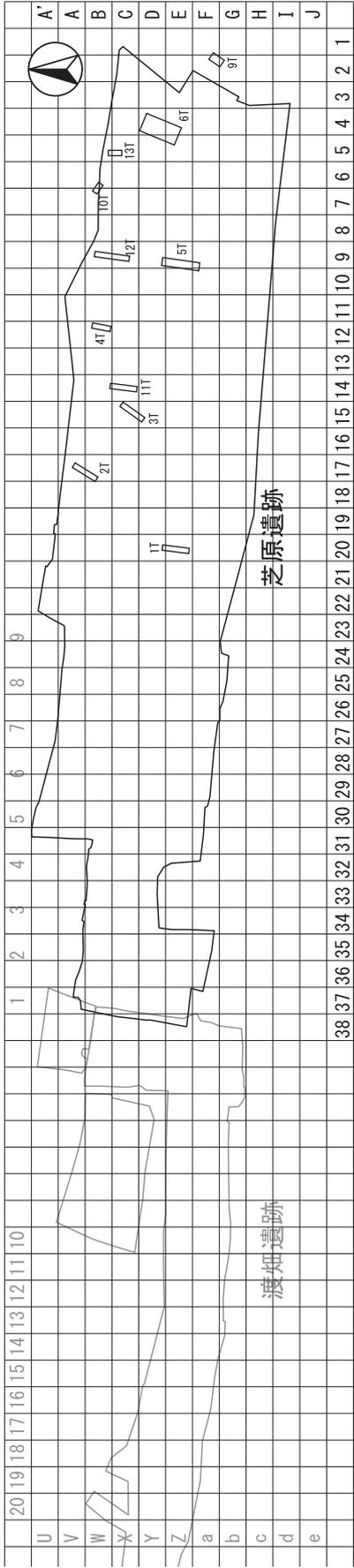
3 作成経過

芝原遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は、平成17年度より実施した。作業は、県立埋文センターにおいて、他の万之瀬河流域の遺跡群の整理作業と同時進行で行った。

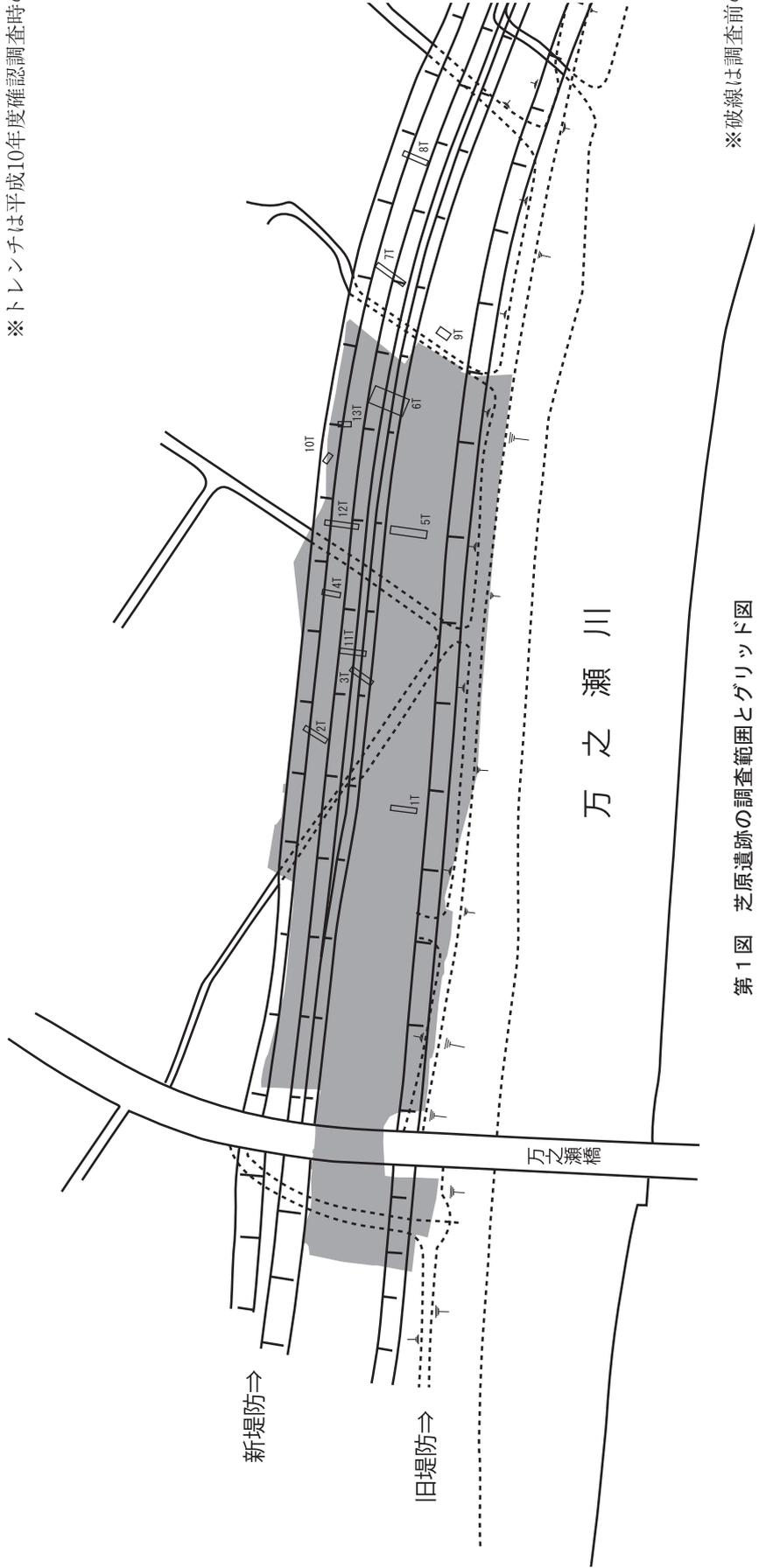
芝原遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡であることから、時代ごとに報告書の刊行計画を立て、出土遺物の洗浄・注記後、時代及び遺構ごとに土器・石器の分類を行った。

遺構は、調査担当者の記述・意見を基に、実測図・写真等から、その埋土・形状・大きさ等を再検討し、遺構の認定を行った。

膨大な遺物や遺構を効率的に処理するために、ジェットマーカーやパソコン・土器実測補助器の活用や、土器・石器の外部への実測委託も行った。

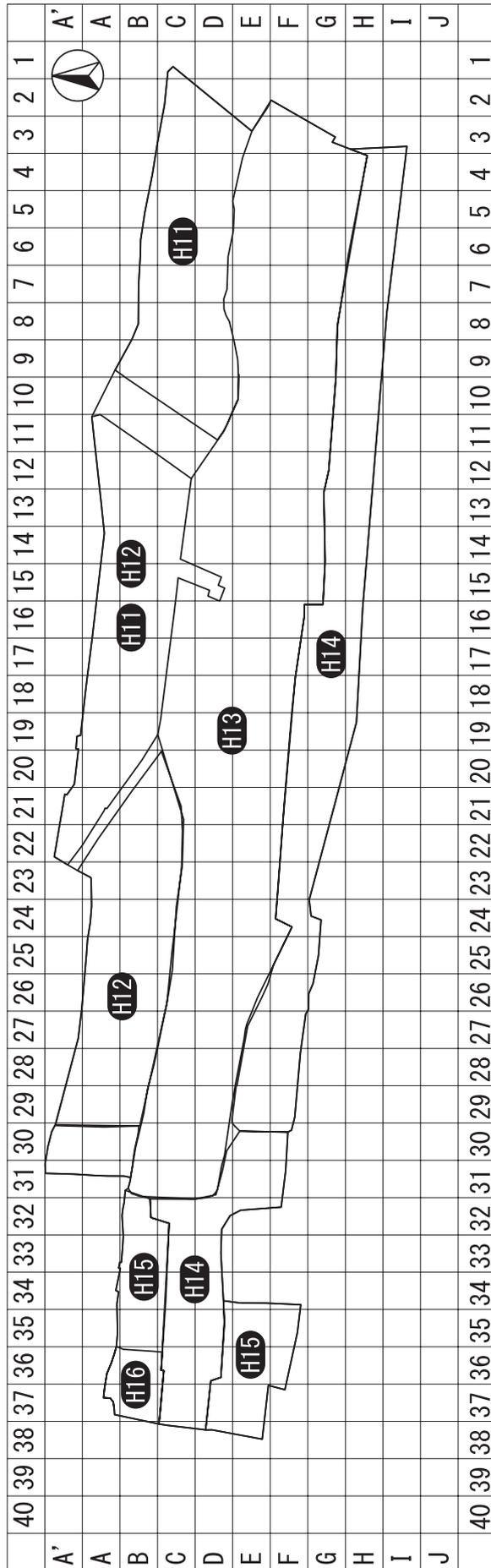


※トレンチは平成10年度確認調査時のもの



第1図 芝原遺跡の調査範囲とグリッド図

※破線は調査前の状況



第2図 年度別調査範囲グリッド図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

芝原遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町大字宮崎に所在し、万之瀬川下流の右岸、標高約4mの自然堤防上に立地する。

南さつま市金峰町の地形は大きく山地・シラス台地・沖積平野・砂丘に分けられる。山地は町の東半分を占め、標高200mを超える山系が南北に縦断する形で連なっており、金峰山や中岳などがある。シラス台地は、錦江湾奥部の始良カルデラ噴出起源の入戸火砕流（シラス）が堆積したものである。

万之瀬川は、鹿児島市錫山に源を發し、南さつま市加世田万世に至る延長36km、流域面積37km²の二級河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており、下流域には沖積平野が広がっている。また、中流域には万之瀬川の蛇行によって浸食されたシラス台地がみられ、こうした砂丘地とシラス台地には、縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

遺跡周辺では万之瀬川が大きく蛇行しており、かつ、加世田川や長谷川などの支流の合流点も近くにあり、周辺の沖積平野は、過去梅雨や台風の時期になるとたびたび水害に遭っている。特に享和三年（1803）の大洪水では河口が移動して現在の流れとなったが、それ以前は南側に蛇行して流れ、現在より約3km南の地点で東シナ海に注いでいたことがわかっている。また、明治35年測量の第3図と現在の航空写真（13頁下）を比較すると、本遺跡東側の村原付近で河川改修（昭和初期）が行われ、低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる。

本遺跡から東を望むと、標高約200m前後の山々が南北を縦断している。このなかでも約7km北東方向にある金峰山は、旧町名（金峰町）の由来ともなった標高636mの薩摩半島中央部における最高峰で、古来より信仰の対象となっている。また、海上航行の際には、薩摩半島南西端にある野間岳と共に、ランドマーク的役割を果たしていた。

第2節 歴史的環境

南さつま市では、旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。これらの中には、学史上極めて重要な遺跡も含まれており、当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを改めて示唆している。ここでは、旧石器時代から近世に至るまでを概観していきたい。

旧石器時代では、金峰町小中原遺跡（17）・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が、金峰町山野原遺跡（9）・加世田平田尻遺跡から細石器が発見されている。平田尻遺跡では礫群も発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、加世田に椿ノ原遺跡（43）がある。ここでは、連穴土坑・集石等の遺構が発見され、隆帯文土器・磨製石斧などの遺物が出土している。特に、出土した丸ノミ状の磨製石斧は椿ノ原型と称されるほど特徴的である。平成9年には国史跡に指定された。また、加世田内山田にある志風頭遺跡では、連穴土坑から完形の隆帯文土器が出土している。この土器の放射性年代測定の結果、11,860±50年BPとされている。また、金峰町中尾遺跡からも同時期の遺物・遺構が確認されている。

縄文時代早期の遺跡には、草創期でも紹介した椿ノ原遺跡が著名である。昭和52年（1977）の発掘調査で出土した土器の中で6類として分類された資料は、早期前葉の土器型式設定を検討する上で重要な資料となった。金峰町小中原遺跡（17）では、前平式土器の円筒形・角筒形土器がまとまって出土している。特に、角筒形土器は、上半分は角筒形を、下半分は円筒形を呈しているものもあり、角筒形の発生を考える上で重要な資料となっている。

縄文時代前期の遺跡には、金峰町阿多貝塚（19）、上焼田遺跡（20）、上水流遺跡（37）がある。阿多貝塚（19）から出土した資料の一部は、「阿多V類土器」（西唐津式土器）と称され、縄文時代前期土器研究に欠かすことのできない資料である。上焼田遺跡では、球状耳飾が出土している。周辺からは、轟式土器が出土しているが、報告書では、轟式土器ではなく曾畑式土器ないしは春日式土器に伴うものとしてまとめている。上水流遺跡からは曾畑式土器が単独に出土しており、石器組成も含めて良好な資料となっている。また、前期末から中期初頭とされる深浦式土器も大量に出土している。

縄文時代中期の遺跡としては、上水流遺跡から大型の集石と大量の春日式土器が出土しており、河川沿いの低地における遺跡の在り方が注目される。石堂遺跡や上焼田遺跡では並木式土器・阿高式土器が出土している。

縄文時代後期の遺跡には、本遺跡の他に先述の上水流遺跡がある。上水流遺跡からは後期前半の指宿式土器や松山式土器が出土している。指宿式土器の底部圧痕からは、従来大隅半島に分布すると考えられていた「スタレ状圧痕」が確認されている。また、本遺跡と隣接する渡畑遺跡からは本遺跡出土の足形土製品と接合する資料が確認されている。

縄文時代晩期の遺跡としては、上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡（45）がある。この遺跡からは、大型土坑等の遺構が検出されている。また、土器や石器の他に、土偶や軽石製岩偶・石棒などの祭祀をうかがわせる資料や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など様々な遺

物が出土している。なお、この上加世田式土器は、近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づける説もある。また、金峰町下原遺跡では、縄文時代晩期終末から弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って朝鮮半島系無文土器・粉痕土器・石包丁等が出土している。

弥生時代から古墳時代にかけて、市内では数多くの遺跡が発見されている。金峰町高橋貝塚(4)は、弥生時代前期を主体とする貝塚で、万之瀬川の支流堀川の右岸、標高11mの洪積世砂丘上にある。昭和37・38年に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代晩期の夜臼式土器と高橋I式土器の共伴関係が確認されたことや、南海産の貝を素材とした貝輪や南海産貝が出土したことなど、学史的に重要な遺跡である。平成18(2006)年には、鹿児島国際大学が隣接する高橋遺跡の発掘調査を実施し、弥生時代に属する遺構を確認した。また、金峰町下小路遺跡(5)は、弥生時代中期の須玖式土器を用いた甕棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が装着されていた。金峰町松木蘭遺跡(8)では弥生時代後期の環濠の可能性のある大溝が松木蘭式土器を伴って発見されている。金峰町中津野遺跡(14)では、床面が3段構造になる竪穴住居跡が発見され、最下段である3段目からは完形品が40個出土しているという。また、ここは中津野式土器の標識遺跡でもある。この中津野式土器は、弥生時代終末の土器とする考えの他に、一部は古墳時代に入る土器があるという説があり、明確には位置付けがなされていない。現状としては、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として認識されている。

古墳時代の遺跡には、加世田小湊にある奥山古墳(六堂会古墳)が特筆される。この遺跡は、昭和6(1931)年に発見され、石棺の内部には赤色顔料が塗られており、ガラス玉や長さ180cmの鉄剣、刀子が副葬されていた。平成17(2006)年に実施された鹿児島大学の再調査の結果、周溝の一部と考えられる遺構が発見され、4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。金峰町白糸原遺跡(25)では、竪穴住居跡19軒が検出され、辻堂原式土器から笹貫式土器にかけての集落であるとされる。上水流遺跡からは竪穴住居跡11軒が検出されている。遺構内から、初期須恵器の出土がみられた。また、中津野遺跡に隣接する南下遺跡では、木製品をはじめ古墳時代の良好な資料が得られている。

古代にも多くの注目される遺跡が発見されている。金峰町小中原遺跡(17)では多くの掘立柱建物跡と「阿多」という字がヘラ書きされた土器などが発見されている。これらのことから阿多郡衙の可能性が考えられている。金峰町山野原遺跡(9)でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。また、祭祀遺構や土師器焼成遺構の可能性が考えられる遺構が発見されており、在地豪族に関わる施設であった可能性が考えら

れている。加治屋遺跡では、土師甕を用いた埋設遺構と竪穴住居跡とされる遺構が確認されている。本遺跡(30)、持鉢松遺跡(28)、上水流遺跡(37)でも墨書土器をはじめ多数の古代遺物が発見されている。

荒平窯をはじめとする中岳山麓古窯跡群は金峰町にあり、9世紀から10世紀にかけて稼働していたと考えられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが、表面採集された遺物が熊本県荒尾市荒尾窯跡群の製品との類似性が高いことから、人的・物的な交流があったと考えられている。

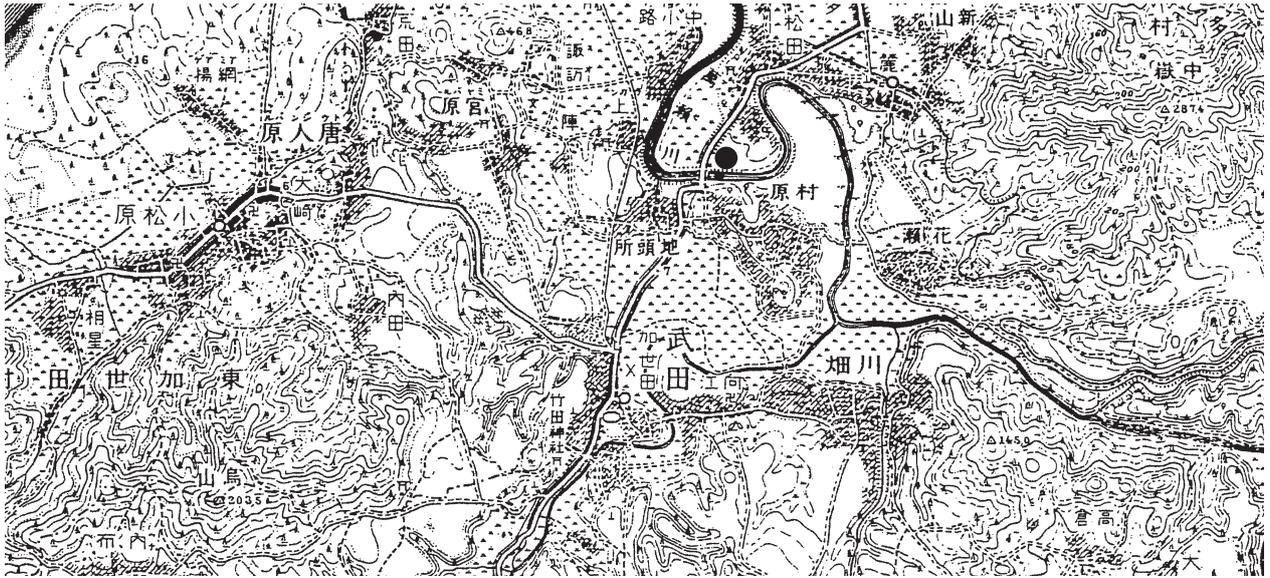
中世には、ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって、阿多郡は唯一大宰府領であった。その後13世紀前半には、金峰町が属する阿多郡は阿多氏・鮫島氏などによって支配を受け、加世田が属する加世田別府は別符氏・塩田氏などによって支配を受けることとなる。城館跡・山城跡も多く所在しており、上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻崎城跡などは発掘調査が行われている。加世田益山の寺園氏宅には、二重の堀があったと伝えられ、現在もその痕跡が残っている(上東2004)。中世のものであるか明らかでないが、館であった可能性も考えられる。白糸原遺跡では、中世末から近世の土坑墓が24基検出された。この中からは、南海産の夜光貝が出土している。加えて、竪穴建物跡や双魚文青磁なども発見されている。

古代から中世においては、本遺跡も属する万之瀬川流域の遺跡群も近年特に注目されている。全国各地の窯で焼かれた陶器類や、中国からの輸入陶磁器類などが多量に出土した持鉢松遺跡や本遺跡を中心に、広範な交流の拠点であったことを示すものであり、今後大いに検討されるべき遺跡群である。

近世においては、前述の上水流遺跡の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼(苗代川系)等が、福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また、万之瀬川河口付近を含む吹上浜海岸では、東南アジアとの取引に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている(橋口1999)。

外城制度(天明4[1784]年、外城から郷に改称)に関しては、行政の中心である地頭仮屋が阿多と田布施の2か所、武士の居住区である麓集落はその周辺にあった。渡畑周辺に点在した阿多麓集落は、享保13年(1728年)の新田川掘削工事の完成後に台地上に移転している。新田開発のため、万之瀬川上流の南九州市川辺町腰ヶ原より16kmに及ぶ用水路を宮崎の台地に引く難工事であった。この時の工事監督は、後の木曾川宝暦治水で奉行を務めている。商人の居住区である野町は、金峰地域では阿多公民館付近と池辺の2か所にあった。また、藩の浄土真宗禁制に対し、かくれ念仏講により信仰が続けられた。

交通網では、薩摩半島を縦貫する近世街道の「伊作筋」



第3図 遺跡周辺の旧地形

(明治35年測量)



上空から見た芝原遺跡周辺

(国土画像情報国土交通省より)



第4図 周辺遺跡位置図

表2 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代						備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	
1	上ノ山後遺跡	南さつま市金峰町高橋上ノ山後			●	●	●	●	
2	上ノ山遺跡	南さつま市金峰町上ノ山			●				
3	草原町遺跡	南さつま市金峰町宮崎				●			
4	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋			●				「九州考古学」18
5	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路			●				
6	牟田城跡	南さつま市金峰町高橋字真門砂入						●	中世城館跡2階堂氏
7	篠田遺跡	南さつま市金峰町尾下						●	
8	松木藪遺跡	南さつま市金峰町尾下松木藪			●				「鹿児島考古」14号
9	山野原遺跡	南さつま市金峰町尾下字山野原	●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(5)(7)
10	鳥追藪遺跡	南さつま市金峰町尾下鳥追藪	●	●		●			
11	尾下遺跡	南さつま市金峰町尾下			●				
12	中津野下原遺跡	南さつま市金峰町中津野下原			●				「鹿児島県考古学紀要」2号
13	平畑遺跡	南さつま市金峰町中津野	●	●	●			●	金峰町埋文報(8)
14	中津野遺跡	南さつま市金峰町中津野 1119			●				
15	中津野城跡	南さつま市金峰町新山						●	別称「江田城」
16	立野原遺跡	南さつま市金峰町新山				●			
17	小中原遺跡	南さつま市金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(5)県埋文報(57)
18	野村原遺跡	南さつま市金峰町中津野				●			
19	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎上焼田		●	●	●			人類学講座第1巻金峰町埋文報(1)
20	上焼田遺跡	南さつま市金峰町宮崎上焼田	●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(15)
21	上花立遺跡	南さつま市金峰町							
22	万之瀬川床遺跡	南さつま市加世田益山万之瀬川川床			●	●			「鹿児島考古」12号
23	上川原遺跡	南さつま市金峰町宮崎上川原			●	●			
24	古城跡	南さつま市金峰町宮崎西						●	別称「古ノ城」
25	白糸原遺跡	南さつま市金峰町宮崎	●	●	●			●	
26	上宮寺跡	南さつま市金峰町松田南						●	坊津一条院の末寺
27	松田南遺跡	南さつま市金峰町花瀬	●		●			●	
28	持鉢松遺跡	南さつま市金峰町松田南	●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(10)県埋文報(120)
29	渡畑遺跡	南さつま市金峰町宮崎字渡畑・渡原	●	●	●	●	●	●	県埋文報(151)(159)
30	芝原遺跡	南さつま市金峰町宮崎字芝原・濱崎	●	●	●	●	●	●	本報告書県埋文報(149)(158)(170)
31	市藪遺跡	南さつま市金峰町宮崎	●					●	
32	阿多城跡	南さつま市金峰町阿多						●	阿多平四郎忠景
33	鶴之城跡	南さつま市金峰町花瀬鶴之城						●	
34	大迫田遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●	金峰町埋文報(14)
35	花瀬今城原遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原	●	●	●				金峰町埋文報(14)
36	上水流D遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●	金峰町埋文報(14)
37	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬上水流・森山	●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(9)県埋文報(113)(121)(136)(150)
38	上水流C遺跡	南さつま市金峰町花瀬	●					●	金峰町埋文報(14)
39	花瀬遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原			●			●	
40	針原遺跡	南さつま市金峰町花瀬	●					●	金峰町埋文報(14)
41	加治屋遺跡	南さつま市加世田川畑岩山	●	●	●	●			県埋文報(82)
42	二頭遺跡	南さつま市加世田川畑3377他	●			●		●	南さつま市埋文報(1)
43	楯ノ原遺跡	南さつま市加世田村原楯ノ原	●	●	●	●		●	国指定遺跡加世田市埋文報(1)(5)(15)(17)(20)
44	永田遺跡	南さつま市加世田川畑永田				●			
45	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田2715他	●	●	●	●	●	●	加世田市埋文報(3)(4)(13)
46	杉本寺跡	南さつま市加世田川畑杉本寺			●				蔵骨器出土(加世田市史掲載)
47	別府城跡	南さつま市加世田武田城ノ山			●	●		●	加世田市埋文報(10)
48	佐方原・内田原遺跡	南さつま市加世田唐仁原佐方原他				●			
49	下東堀遺跡	南さつま市加世田宮原下東堀176他	●	●	●				
50	田武平遺跡	南さつま市加世田益山田武平			●	●			
51	油免・本寺遺跡	南さつま市加世田宮原油免他	●	●	●				県埋文報(148)
52	西荒田遺跡	南さつま市加世田益山西荒田	●	●	●	●			加世田市報(7)
53	宮ノ脇・口畑遺跡	南さつま市加世田宮原宮ノ脇他				●			
54	陣跡	南さつま市加世田益山陣						●	
55	内ノ田遺跡	南さつま市加世田益山内ノ田	●			●		●	
56	中小路遺跡	南さつま市加世田益山中小路・屋郷			●	●		●	加世田市報(6)(19)
57	浜堀遺跡	南さつま市加世田宮原浜堀			●	●			
58	鶴ノ塚陣跡	南さつま市加世田益山宇都						●	
59	上山野遺跡	南さつま市加世田益山上山野			●	●			
60	川ノ畑遺跡	南さつま市加世田益山川ノ畑			●	●			
61	高橋遺跡	南さつま市金峰町高橋字高橋他			●				鹿児島大研究報第5号
62	天神原遺跡	南さつま市金峰町大字宮崎神原	●	●	●				
63	下堀遺跡	南さつま市金峰町大字宮崎上焼田・下堀	●	●	●			●	金峰町埋文報(20)
64	堀川貝塚	南さつま市金峰町大字宮崎下堀	●						「鹿児島考古」10
65	東柳原遺跡	南さつま市加世田益山東柳原			●	●			
66	松ヶ鼻遺跡	南さつま市加世田益山松ヶ鼻				●		●	平成9年度確認調査

と旧南薩鉄道が、渡畑遺跡内で現在の国道270号線と併走していた。「伊作筋」は加世田の村原渡口で渡船し、渡畑を斜行し上宮寺前、伊作峠、谷山を經由して鹿児島と結んだ。南薩鉄道は枕崎市から日置市伊集院を經由し、国鉄線で鹿児島市と連絡していた。大正3年（1914）に始まり、昭和58年（1983）の豪雨災害で翌年廃線となった。

近・現代においては、第二次世界大戦時、加世田の唐仁原・高橋に、陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ、戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

参考文献

- 田畑智子（2002）「鹿児島県万之瀬川流域の地形発達」『大分地理』15.9-14
大分大学教育福祉科学部地理学教室
- 上東克彦（2004）「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩－クンディと果実形水注－」『貿易陶磁研究』24号 日本貿易陶磁学会
- 橋口 亘（1999）「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19号 日本貿易陶磁学会
- 加世田市教育委員会
（1985）「上加世田遺跡1」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（3）
（1987）「上加世田遺跡2」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（4）
（1995）「干河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（12）
（1999）「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（16）

- 金峰町教育委員会
（1978）「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財発掘調査』（1）
（1998）「上水流遺跡－第1次調査－」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（9）
（1998）「持鉢松遺跡 第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（10）
（2000）「小蘭遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（11）
- 鹿児島県教育委員会
（1991）『小中原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（57）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
（2007）『上水流遺跡1』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（113）
（2007）『持鉢松遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（120）
（2008）『上水流遺跡2』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（121）
（2009）『上水流遺跡3』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（136）
（2010）『芝原遺跡1』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（149）
（2010）『上水流遺跡4』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（150）
（2010）『渡畑遺跡1』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（151）



芝原遺跡周辺（下流側から持鉢松・渡畑・芝原の各遺跡）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

平成10年度に行われた確認調査をうけて、平成11年度から平成16年度に本調査を行った。

確認調査の結果、遺跡の範囲は、国家座標X=-174390からX=-174490、Y=-63900からY=-63500であり、調査区を国家座標をもとに10mグリッドを設定して発掘調査を実施した。

第1図に示すように、南北方向にA'、A、B…としてIまで、東西方向に1、2、3、…として38までを付け、A-37区などと呼称することとした。A'-E-1~31区（万之瀬川の新築堤防部分）の調査を平成11年度・12年度に行い、B~H-2~31区（新堤防と旧堤防の間）を平成13年度、C~I-3~38区（新堤防と旧堤防の間及び万之瀬川橋脚部分）を平成14年度、A~C-31~36区及びD~F-34~38区（橋梁部及び樋門から新堤防の間）を平成15年度・平成16年度に調査を行った。

発掘調査は、重機でIa層（表土・耕作土）を除去した後、遺物包含層であるIb層からX層までを人力で掘り下げた。また、場所によりII層以下に無遺物層が認められる場合も重機で除去した。最終的には重機で下層確認のためのトレンチを設定して掘り下げた。

これらの調査の結果、Ib層からX層にまで、縄文時代中期から近世の数多くの遺構、遺物が発見された。

遺物の出土量は膨大であったため弥生時代以降の遺物は基本的に層とグリッドごとに一括して取り上げた。また、縄文時代の遺物は、原則として平板実測及びレベル測定により現位置を記録し取り上げた。ただ、小グリッドごとに一括して取り上げたものもある。

遺構は検出状況を写真で撮影し、位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測後の状況も写真撮影した。図化作業に関しては、作業の効率化のため業者委託を実施した。

2 遺構の検出と認定

各遺物包含層上面を検出した際、精査を行い、土色及び土質の違いから遺構の有無を確認した。また、遺構内外で異なる土の境界をたどり、平面的に遺構の輪郭（平面プラン）を確定していった。

その後、主軸を確認し、土層確認用のベルトを設定し、遺構の掘り下げを行った。その際、埋土の色・質・硬さなどの違いを比較し掘り下げた。

さらに、遺構を検出した層や埋土状況、遺構の形態、遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。

3 整理作業の方法

古代から近世の遺物については、平成22・23年度に分類・選別、接合、補強・復元にかかり、平成23年度に実測・拓本・トレース等を行った。整理作業の具体的経過については、主な作業を年度ごとに記していきたい。

◇平成17年度

洗浄、注記、区・層ごとの分類、レベル入力等

◇平成18年度

注記、区・層ごとの分類、人骨処理、鉄器等のクリーニング等

◇平成19年度

注記、区・層・遺構ごとの分類、人骨処理、鉄器等のクリーニング、石器実測委託等

◇平成20年度

縄文時代遺構内出土土器分類・選別、接合・復元・補強、実測、拓本、縄文時代遺構内出土石器仕分け・選別、実測委託・縄文時代遺構配置図作成、集石トレース、鉄器等のクリーニング等

◇平成21年度

土層図作成・トレース、縄文時代土坑トレース、縄文時代遺構内出土土器実測・実測委託、写真撮影、レイアウト、整理指導、原稿執筆、縄文時代包含層出土遺物接合、復元、形式分類、実測等

「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」刊行

◇平成22年度

縄文時代包含層出土土器選別、実測、実測委託、拓本、復元・補強、トレース、縄文時代包含層出土土器選別、実測、実測委託、トレース、レイアウト、写真撮影、整理指導、原稿執筆、弥生・古墳時代出土土器接合 古代・中世遺物分類等

「芝原遺跡2 縄文時代遺物編」刊行

◇平成23年度

古墳時代から近世までの遺構選別・トレース、遺構内出土遺物実測・トレース、包含層出土遺物実測・トレース、写真撮影、レイアウト、整理指導、原稿執筆、古墳時代遺物分類・接合・復元・実測・トレース等

「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」刊行

◇平成24年度

弥生時代から古墳時代までの遺構選別・トレース、遺構内出土遺物実測・トレース、包含層出土遺物実測・トレース、写真撮影、レイアウト、整理指導、原稿執筆等

「芝原遺跡4 弥生時代・古墳時代編」刊行

報告書作成指導委員会

平成24年11月26日 井ノ上次長ほか8名

報告書作成検討委員会

平成24年11月26日 寺田所長ほか11名

第2節 層序

芝原遺跡は万之瀬川中流の右岸にあり、標高約4mの自然堤防上に立地する遺跡である。表3に平成15年の調査時に作成された本遺跡の基本土層を示す。

万之瀬川は過去に何度も大きな洪水を繰り返しており、その氾濫堆積層などを含んでいるので、遺跡内において必ずしも安定した層序を成している状況ではなかった。加えて各年度ごとに遺跡を分断して調査を進めざるをえなかった結果、各年度の層序の整合がとれない状況も発生した。

例えば平成12年度のB-19区Ⅷ層からは春日式土器が集中して出土しているのに対し、平成13・14年度のⅨ層としたものからは、春日式土器より新しい市来式土器が出土している。このため平成22年度に刊行した「縄文時代遺物編」では、平成12年度の春日式土器出土集中区のみ独立させ、それ以外に関しては一括して取り扱わざるをえなかった。

整理作業を進める中でも、基本土層では中世前期の包含層とされているⅢa層から、近世前期の遺物が多数出土していることが確認され、基本土層の年代に疑問を呈する状況となった。

よって基本土層はあくまでもめやすとし、整理作業は基本土層にある包含層年代には依らず、遺物の年代観による時期決定を優先して作業を進めた。

ちなみにⅡb層の白色砂層については、遺跡を広く覆っていることから、河口を現在の位置に変えた享和三年(1803)の大洪水時のものと仮定すれば、その下位か

ら近世前期の遺物が出土することに矛盾はないことも考えられる。

基本土層以外では、旧堤防部分に縄文時代後期土器を伴う泥炭層がみられた。また、その他の調査区でも河川氾濫時の堆積層とみられる砂層が所々みられた。

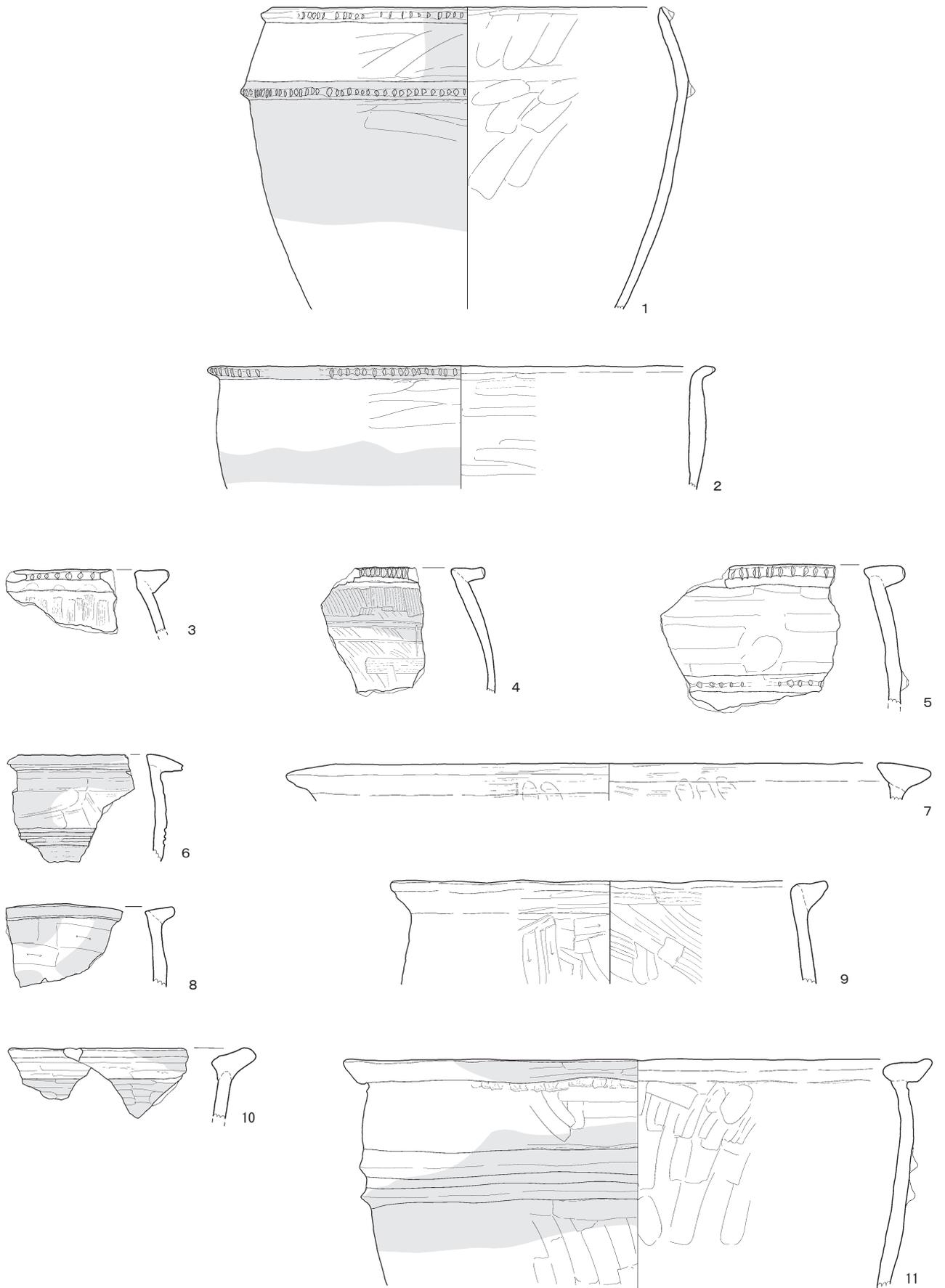
本遺跡では明確な火山灰層はみられなかったが、本遺跡上流の上水流遺跡では、縄文時代晩期包含層であるⅢb層中に、開聞岳起源の「灰ゴラ」がブロック状に含まれていたと報告されている。芝原遺跡では部分的に見られたにせよ、明確なブロック状の堆積は見られなかった。

表3 芝原遺跡の基本土層図(平成15年調査時)

I層	灰褐色土、現表土	
I b層	灰褐色砂質土	中世～近世後期包含層
II a層	茶褐色砂質土 炭化物・赤褐色の焼土を含む	中世中期包含層
II b層	白色砂層 万之瀬川の洪水層	
III a層	黒色砂質土	中世前期包含層
III b層	明黒褐色砂質土	古代、古墳時代包含層
IV層	黄褐色砂質土	弥生時代包含層
V層	暗黄褐色砂質土	
VI a層	黄橙色砂質土	縄文時代後・晩期包含層
VI b層	暗茶褐色砂質土 炭化物多く含む	縄文時代後期包含層
VII層	白色砂層	部分堆積
VIII層	茶褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
IX a層	白色砂層	
IX b層	にぶい黄橙色砂層	
X層	にぶい黄褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
XI層	黄褐色砂質土	

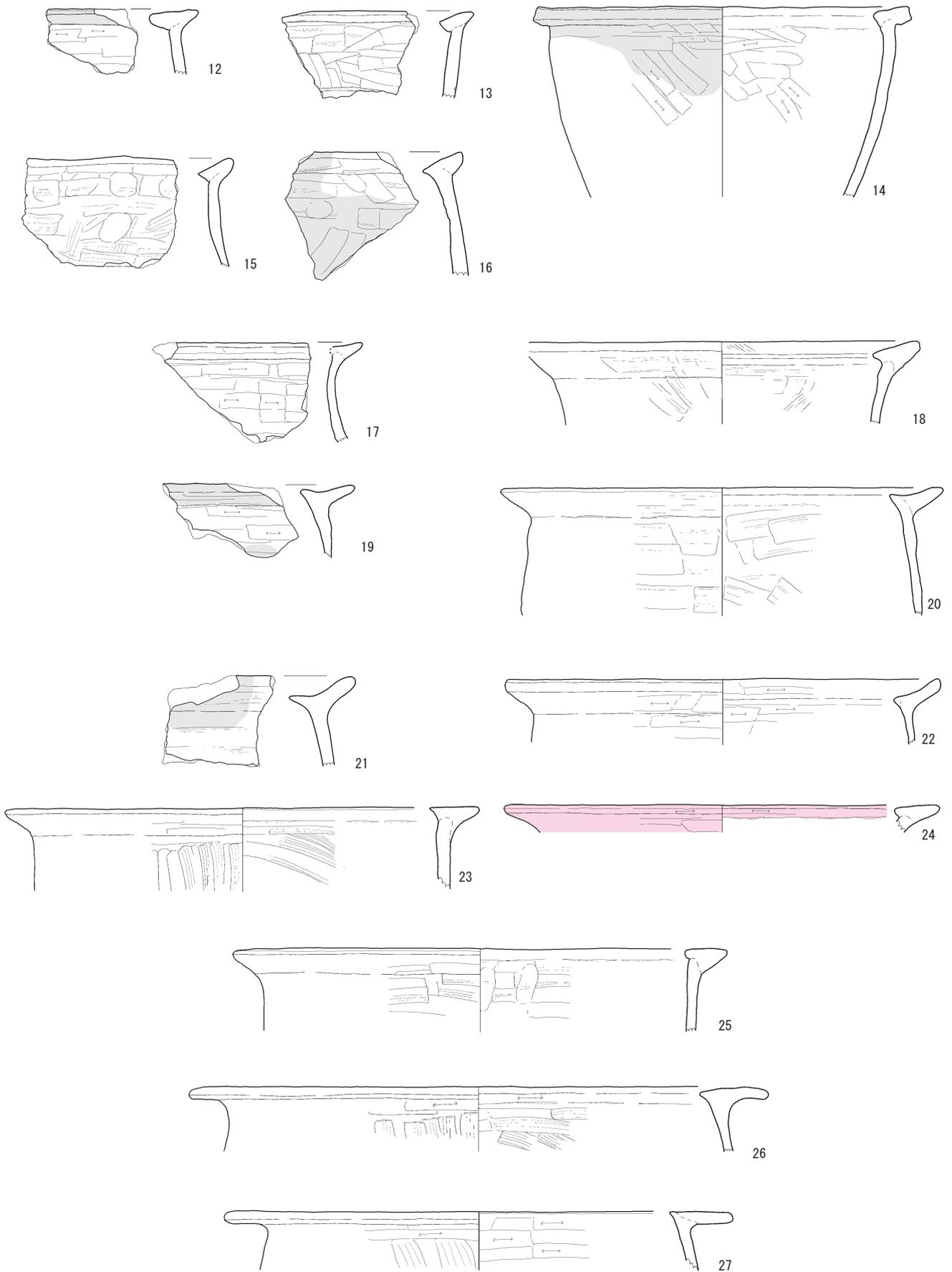


土層堆積状況



第5図 弥生土器 1

0 10cm
(S=1/3)



第6图 弥生土器2

部上位に小さな刻目突帯文を施す。1mm程の赤色粒や黒色鉱物が目立つ胎土で、浅黄橙7.5YRの特徴的な器肌をなす。

Ⅲa類 (第5図6～7)

入来Ⅱ式土器で、中町馬場甕Ⅲa類に該当する。

6は典型的な入来Ⅱ式土器と判断したもので、口縁部が下方へ垂れ、口唇部は浅く凹む。7の復元口径は34.4cmで、口唇部は浅く凹む。

Ⅳa類 (第5図8～11)

黒髪Ⅰ式土器で、中期前葉後半に比定され、中町馬場甕Ⅳa類に該当する。

9は復元口径21.2cmで、厚みのある口縁部が上方へ傾き、胴部が弱く張る。8・10の口縁部も同様の特徴を持つ。11は復元口径32cm、断面三角形の口縁部は上方へ傾き、口唇部が若干凹む。胴部外面はヘラミガキ、内面は縦方向に小さくナデられ、突帯文を中心に多量の煤状炭化物が付着する。

Ⅳb類 (第6図12～20)

黒髪Ⅱ式土器で、中期前葉後半に比定され、中町馬場甕Ⅳb類に該当する。

14は復元口径20.5cm、口縁部は上方へ傾き、口唇部が若干凹む。両面とも丁寧になでて仕上げ、外面に多量の煤状炭化物が付着する。15の外面はヘラミガキ、内面は工具や指等でナデて仕上げる。16の外面はヘラミガキ、内面は工具や指等でナデて仕上げ、15より一回り大型となる。18は口縁部内面の突出が強く、浅黄橙10YRの個性的色調をなす。復元口径21.5cm。17は微細な金雲母を含むもので、内面は横方向に入念にみがかれる。20は復元口径24cmで、口縁部上面の反りが強いもので、内面の突出も明瞭である。1mm程の長石や石英、白色鉱物、黒色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、特徴的なにぶい黄橙10YRを呈す。19は20と酷似し、火山灰性のガラス質粒子を多く含む。

Ⅳc類 (第6図21～22)

黒髪Ⅲ式土器で、口縁部上面の反りがⅡ式よりさらに強くなり、内面の突出も明瞭な一群で、中期前葉後半に比定され、中町馬場甕Ⅳc類に該当する。

21の上面の反りは明確で、22は口縁幅が大きく、上面の反りも強くなる。22の復元口径は23.8cm。

Va類 (第6図23～25)

須玖Ⅰ式土器中段階で、中町馬場甕Va類に該当する。

23は水平な口縁部を持つもので、胴部の張りは強くない。復元口径26cmで、大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。24の復元口径24cm、25の復元口径27.2cm。

Vb類 (第6・7図26～31)

須玖Ⅰ式土器新段階で、中町馬場甕Vb類に該当する。

26は口径32cmでにぶい橙7.5YR、27は口径28cmでにぶい橙5YRの鋤先口縁で、内面の突出が強い。28は口径30cmの鋤先状のL字口縁で、内面突出も明瞭で強い。

器壁は薄く、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し、外面は縦方向の刷毛目調整で、軽量に仕上げる。にぶい黄橙10YR。29の口縁部は胴部から強く外反し、口唇部は平坦面をなす内外面丹塗りの甕で、口径18cmが復元できる。なお、両面とも横方向のミガキ調整で、精選された胎土が使用される。31は復元口径46.3cmの大甕で、甕棺使用が考えられる。にぶい黄橙10YR。30は丹塗りで、微細な金雲母を含む精製胎土を使用する。

Vc類 (第7図32)

須玖Ⅱ式土器古段階で、中町馬場甕Vc類に該当する。

32は火山灰性のガラス質粒子を含む赤色の化粧土を使用し、口縁内部は大きく突出する。

Ⅲb類 (第8図33～39)

山ノ口Ⅰ式土器で、中町馬場甕Ⅲb類に該当する。

34は赤色塗彩されたもので、復元口径が30cm。35は24cm。36は21.6cmで火山灰性のガラス質粒子を多量に含み、煤状炭化物の付着が見られる。37は25cm、38の口径は34cmである。39は復元口径52cmの大甕で、胎土に大粒の金雲母を大量に含む。口縁部はくノ字に外反し、胴部に口縁部同様先端がM字に凹む突帯文を持つ。口縁部はにぶい橙5YR。なお、胎土に含まれる金雲母の特徴から、大隅地域で製作されたと考えられる。

Xc類 (第9図40～43)

山ノ口Ⅱ式土器の寺山・下堀タイプと称されるもので、中町馬場甕Ⅲc類に該当する。

40は復元口径32.5cm。41の復元口径は30.2cmで、胴部は縦方向のミガキで仕上げる。42は復元口径46.5cmの大甕で、口縁部と頸部突帯文間を縦に突帯文で繋いでいる。

X類 (第9図44・45)

立ち上がりの弱いくノ字口縁で、松木蘭式土器古相、中町馬場甕X類に該当する。

45の復元口径31.5cm。

XII類 (第9図46～49)

Ⅷ類より立ち上がりが強くなるくノ字口縁で、松木蘭式土器、中町馬場甕XⅡ類に該当する。

46はくノ字口縁で、屈折部に1条の無刻目突帯文を持つ。赤色粒や白色鉱物を中心に、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、器壁は薄い。47は復元口径44cmの大甕。48も大甕。49の大甕の復元口径60.8cmとなる。

弥生時代壺 (第10～13図)

前期壺 (第10図50～57)

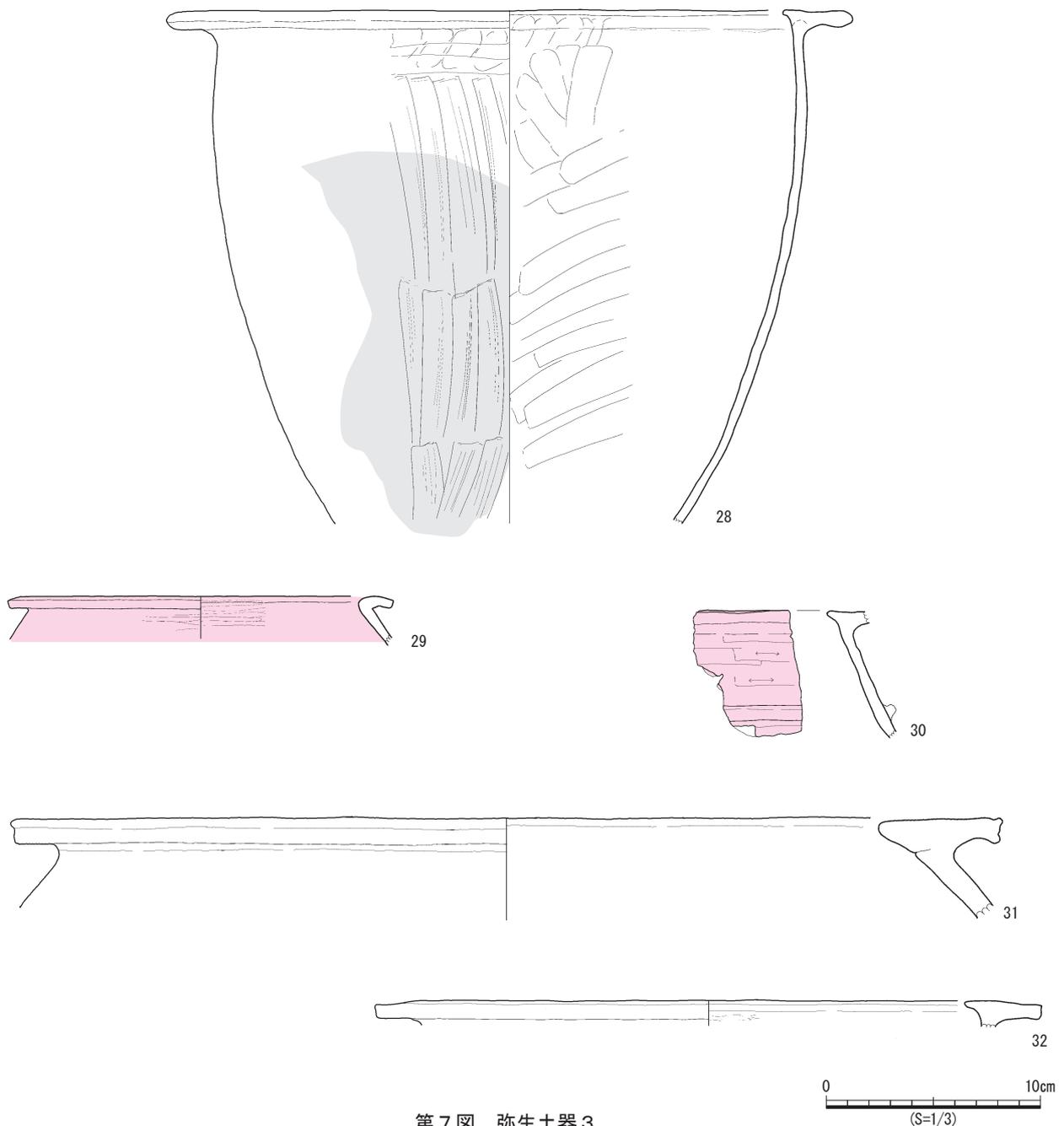
50はヘラ描き沈線文。53の復元口径は13.2cmで、内外ともミガキ仕上げが見られる。54は復元口径16cmで、大粒の金雲母含む。52の頸部と肩部の境界にヘラ描沈線文を施し、胎土に微細な金雲母を含む。51・55は肩部にヘラ描き沈線文を施し、内外ともミガキ仕上げを行う。56はC-36区から出土した壺で、口径11.6cm、高

さ24.2cm, 底径7.6cmの完形品で, 肩部はヘラで削り段差を設け, 並走する沈線文と鋸歯文を施す。胎土は, 2~3mm程の長石や石英を多量に含むいわゆる花崗岩質地域特有のもので, 移入品と見られる。また, 橙2.5YRの器面は, 器面調整も丁寧で, 横方向のミガキ仕上げである。光沢を残している胎土を使用する。57の口径は17.8cmで, 胴下部から底部を欠くが, 肩部には段を有し, 内面胴部以下には輪積み痕が残されるが, 内面口縁部と外面は横方向に入念にヘラでみがかれ, 緩やかな曲線を呈し, 部分的には光沢を残す。赤色粒や白色鉱物, カクセン石等の黒色鉱物, 火山灰性のガラス質粒子を大量に含む胎土を使用し, にぶい橙5YRを呈す。

入来Ⅱ式土器壺 (第12図58~62)

甕Ⅲa類に伴う壺で, 59の口縁形状は入来Ⅱ式土器を踏襲する。58は逆L字状に屈折する口縁部に付随する外側の立ち上がりであるが, 傾きは若干疑問も残る。60の口径は16.5cmで口縁部に櫛描文を施す。61も口縁部に櫛描文を施し, 口縁形状は入来Ⅱ式土器を踏襲する。

62はE-29・30区のⅣ層上部で出土した壺で, 口径17.3cm, 高さ37.6cm, 底径7.1cmで, 胴部の最大径33.7cmで, 内外面共に, 工具でナデた後横方向に繰り返しがかれている。口唇部はM字状で, 肩部に並行沈線文を持つ広口の研磨土器で, 丹塗りされていた可能性が高い。



第7図 弥生土器3

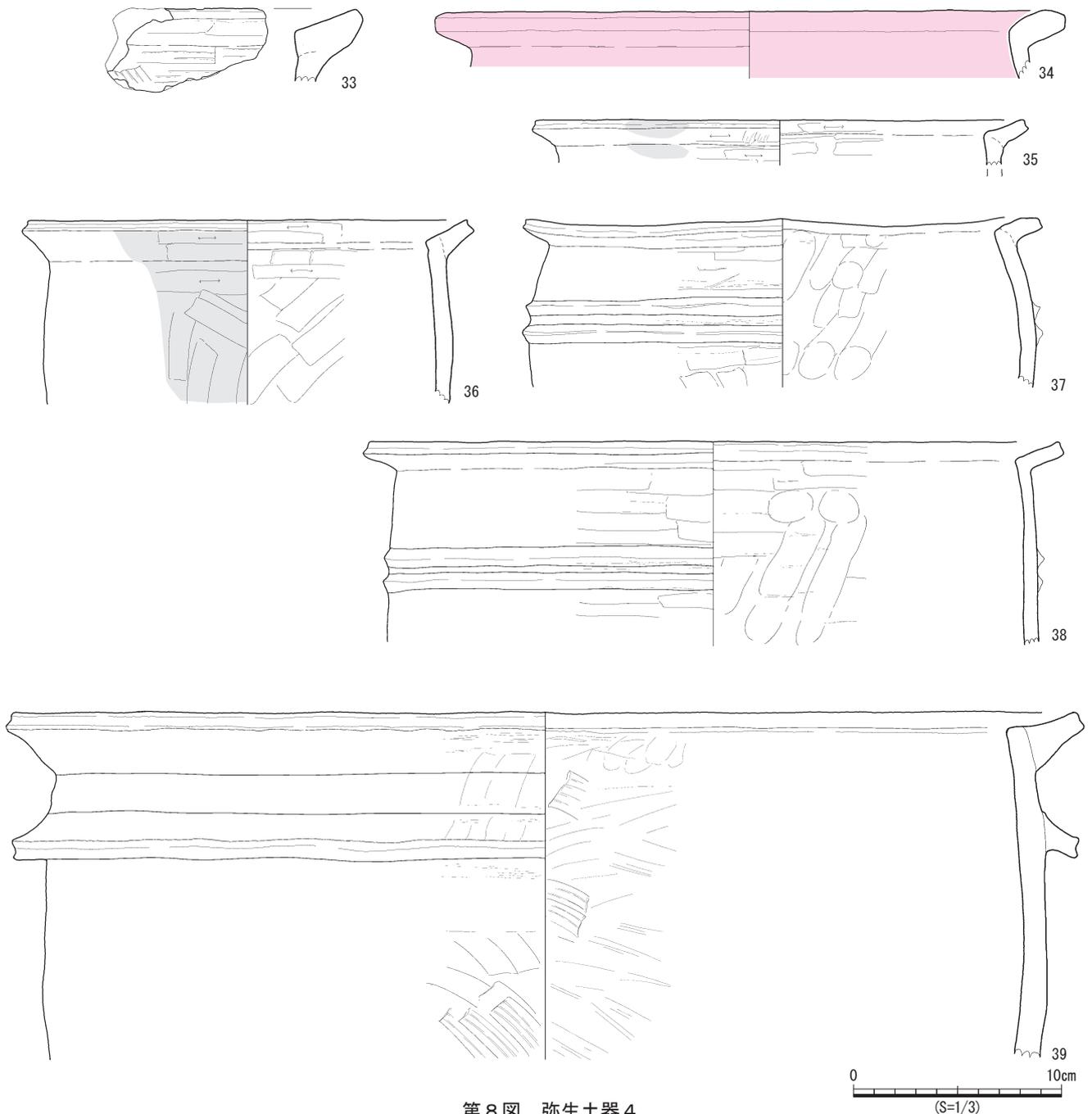
須玖 I 式土器新段階壺 (第13図63～87)

甕 Va 類に伴う壺で、口縁部が大きく外反する、いわゆる垂下口縁タイプの壺で、口縁部上面に櫛描波状文を施すものが抽出される。また、全資料が破損し、碎片化して採取されているが、数個体が存在したと見られる。また、その全てできめの細かい精製胎土が使用される。

63の口唇部は丸く、64では内面端部がヘラで削られ段を持つ。65・76の口唇部は直線的な平坦面に、71・72・78では斜めに平坦面が作られる。66ではヘラ削りした内面端部とさらにその内側に施文し、同様に77・74・81・82・83・84・85でも2重の施文が見られる。70や81の口縁端部は更に垂下する。81の口縁部は木目間の小さい刷

毛目が使用され、85ではやや間隔が大きくなる。また、その全てできめの細かい精製胎土が使用されるが、中でも81・83では多量の火山灰性ガラス質粒子が含まれる。80や82、85にはぶい橙10YR、76や77、85は橙5YRと赤い。86は口縁内面端部に櫛描波状文。口径13.8cm、精製胎土を使用し、丁寧にナデて仕上げる。87は口縁部内面に鋸歯文を巡らし、そのさらに内側に断面三角の突起を持つ壺で、きめの細かい胎土に含まれる微細な金雲母が特徴的で、ぶい橙7.5YRの色調からも搬入品と見られる。

口径が復元できたものについては、76が18cm、77が17cm、79が21.5cm、78が19.6cm、81が22.2cm、80が20cm、83が20.2cm、82が17cm、84が27cm、85が



第8図 弥生土器4



第9図 弥生土器5

22.8cmが復元される。したがって、この種の壺の口径は17cm (77・82), 20cm (78・80・83・88), 22cm (79・81・85), 27cm (84) 等に集約される。

須玖Ⅱ式土器古段階(第13図88・89)

甕Vc類に対応する須玖Ⅱ式土器の広口壺で、88は傾き不明、内面は丁寧にみがき、頸部に暗文が確認できる。89も傾き不明で、両面に暗文が確認できる。

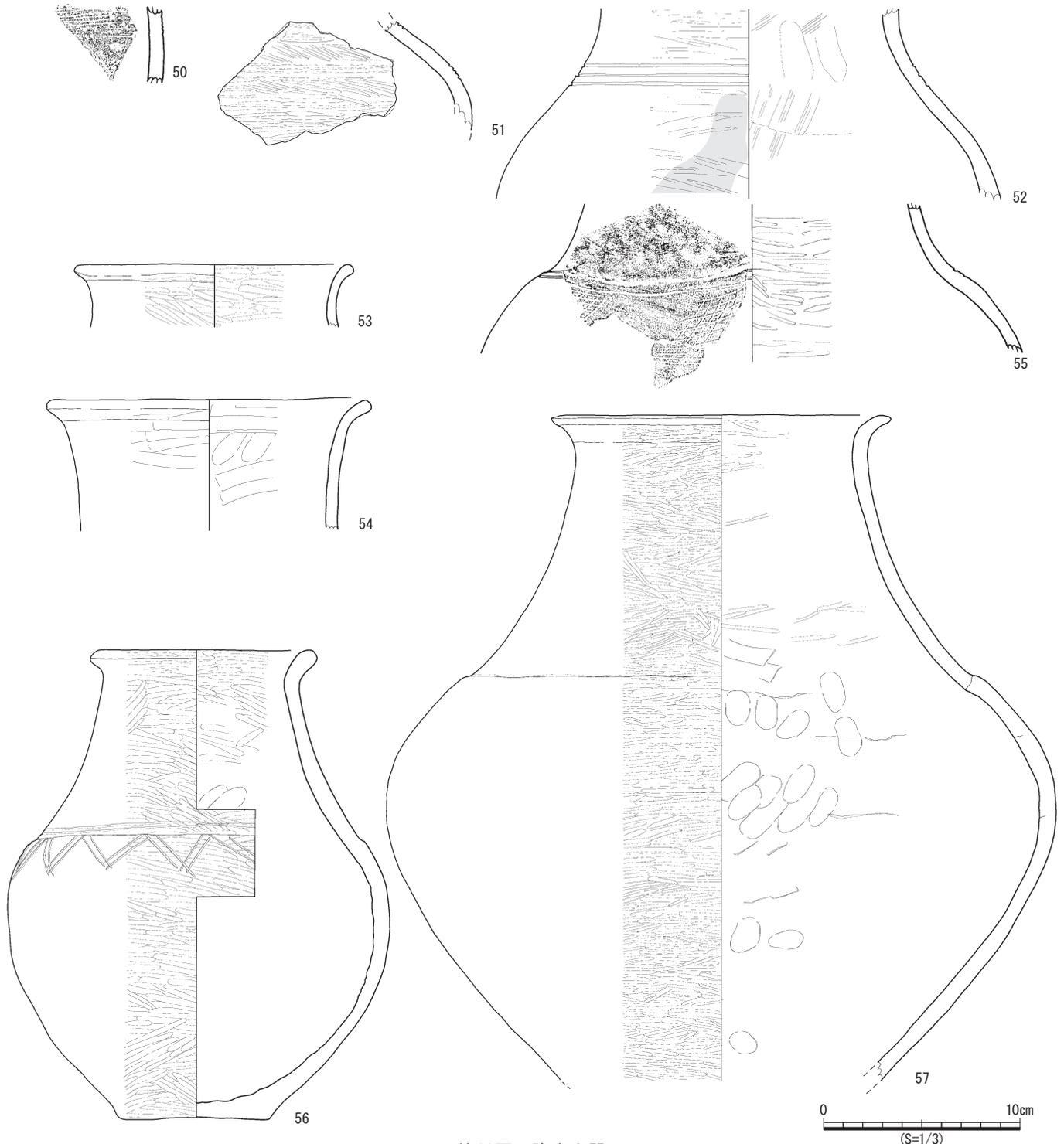
弥生時代底部

前期壺底部 (第13図90・91)

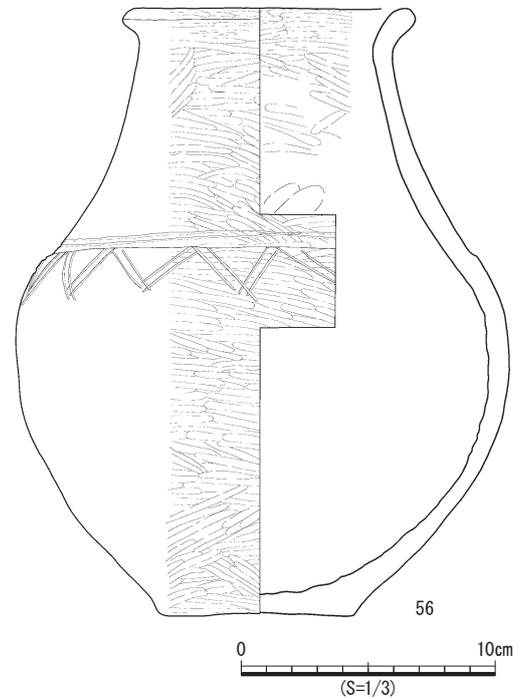
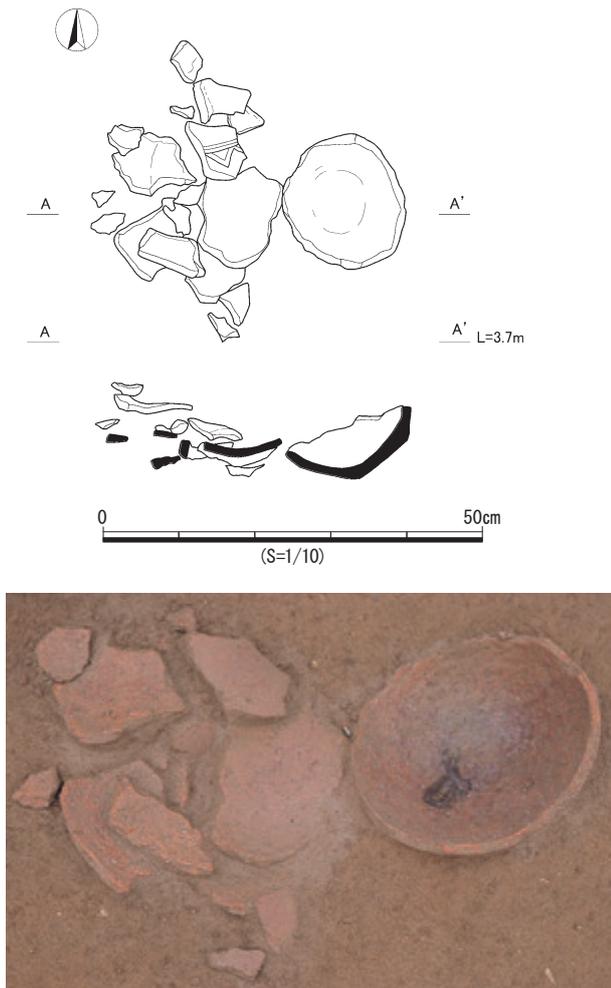
90は、安定した台状やミガキ仕上げから前期壺と判断される。91も類似するが、やや小振りである。なお、火山灰性のガラス質粒子に加え2～3mm程の赤色粒や白色鉱物が目立つ胎土を使用している。

中期甕底部 (第13図94～98)

95の中央部はわずかに凹み、他は平底で充実した脚部



第10図 弥生土器 6



第11図 弥生時代土器出土状況図および弥生土器7

を持つもので、入来Ⅱ式土器及び山ノ口式土器の甕の底部に帰属すると見られる。94は丁寧なナデ仕上げで、端部は凹み、多量の大粒の金雲母を含んでいる。95・99は刷毛目、98は工具ナデ後部分的にミガキ仕上げが見られる。

時期不明（第13図92・93）

2点とも2mm程の白色鉱物を含む胎土を使用し、92はにぶい橙10YR、93はにぶい橙7.5YRとなる。

石包丁（第14図99～103）

使用石材は全て粘板岩で、100と101では精巧な研磨技術が存在したことが垣間見られる。

99は4個の穿孔を持ち、そしてその穿孔部で破損することに加え、V字状の鋭角な刃部をなし且つ、2.8cmと丈が短いことから、研ぎ返しが繰り返されたと推測される。なお、元来背は直で、刃部は緩やかな半月形の可能性がある。100の丈は4cmで、穿孔間で半裁するが半月形であったと見られる。両面は密な研磨で、また両面からの穿孔作業も合致している。なお、欠損後、二次加工を加え、再利用した可能性が高い。101は背と左部が欠損するもので、刃部は片側のみ磨く。なお、両面は密な

研磨で100同様、ほとんど抵抗が感じられない。102は実測表示が表裏逆で、左側穿孔部周辺が残存する。裏面は若干弯曲する。103はほぼ全形を示す資料で、幅8.4cm、丈3.4cm、厚さ0.6cm程である。穿孔及び刃部の研磨は両側から行い、刃部には刃こぼれを伴う二次の使用痕が認められる。

円盤状有孔石製品（第14図104）

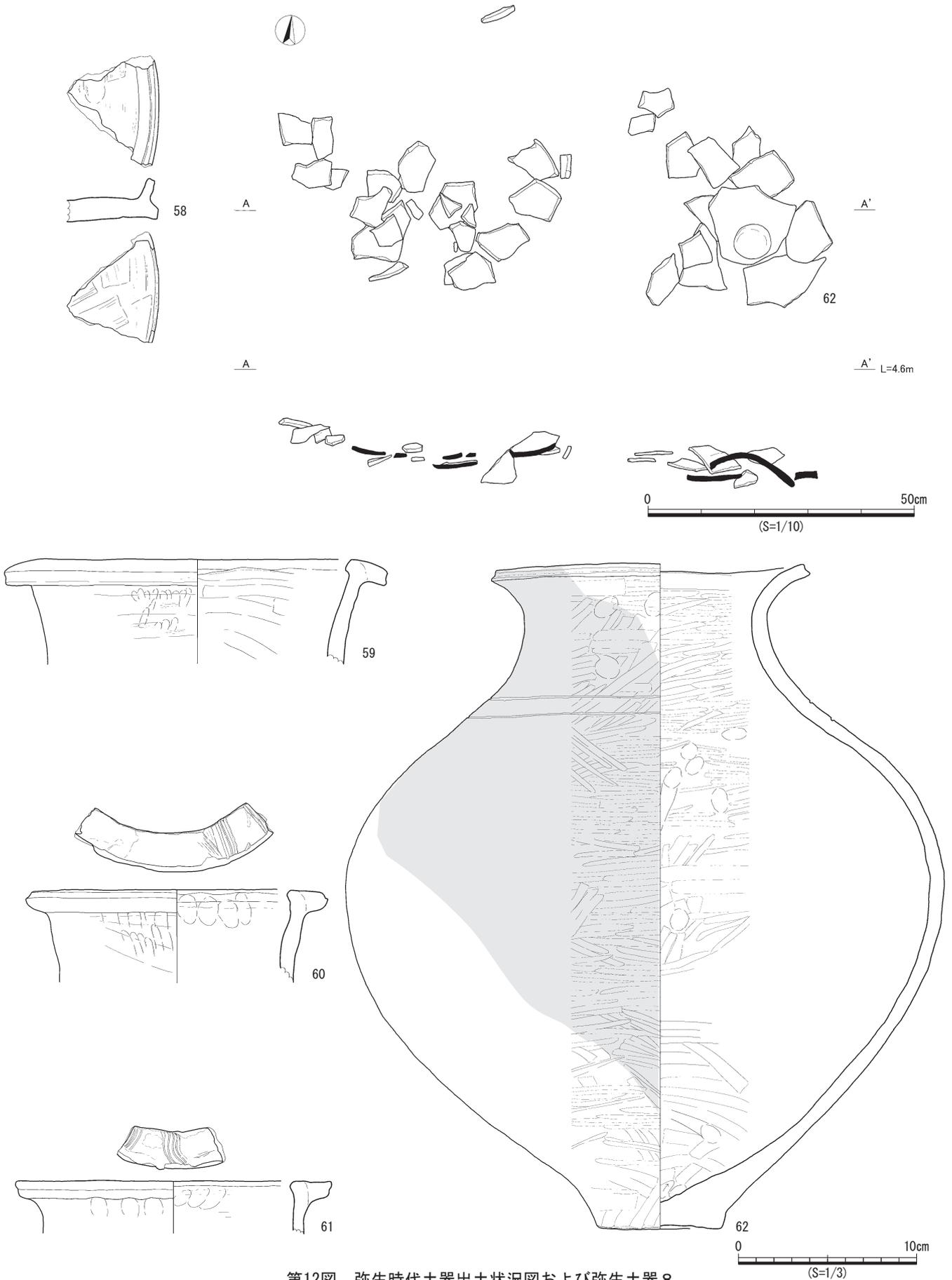
104の1点で、器種は不明であるが、成型状況から円盤状の形状が復元される。2つの穿孔は両側から行っており、側縁部は平坦面を基調とするが、部分的には体部より狭くなり、また、背面の穿孔部を横断して浅い溝状に削り込まれている。使用石材は粘板岩である。

銅鏃（第15図105・106）

105は裏面がスキー状に凹む特徴から、骨鏃系銅鏃の可能性が高い。

銅鏡（第15図107～110）

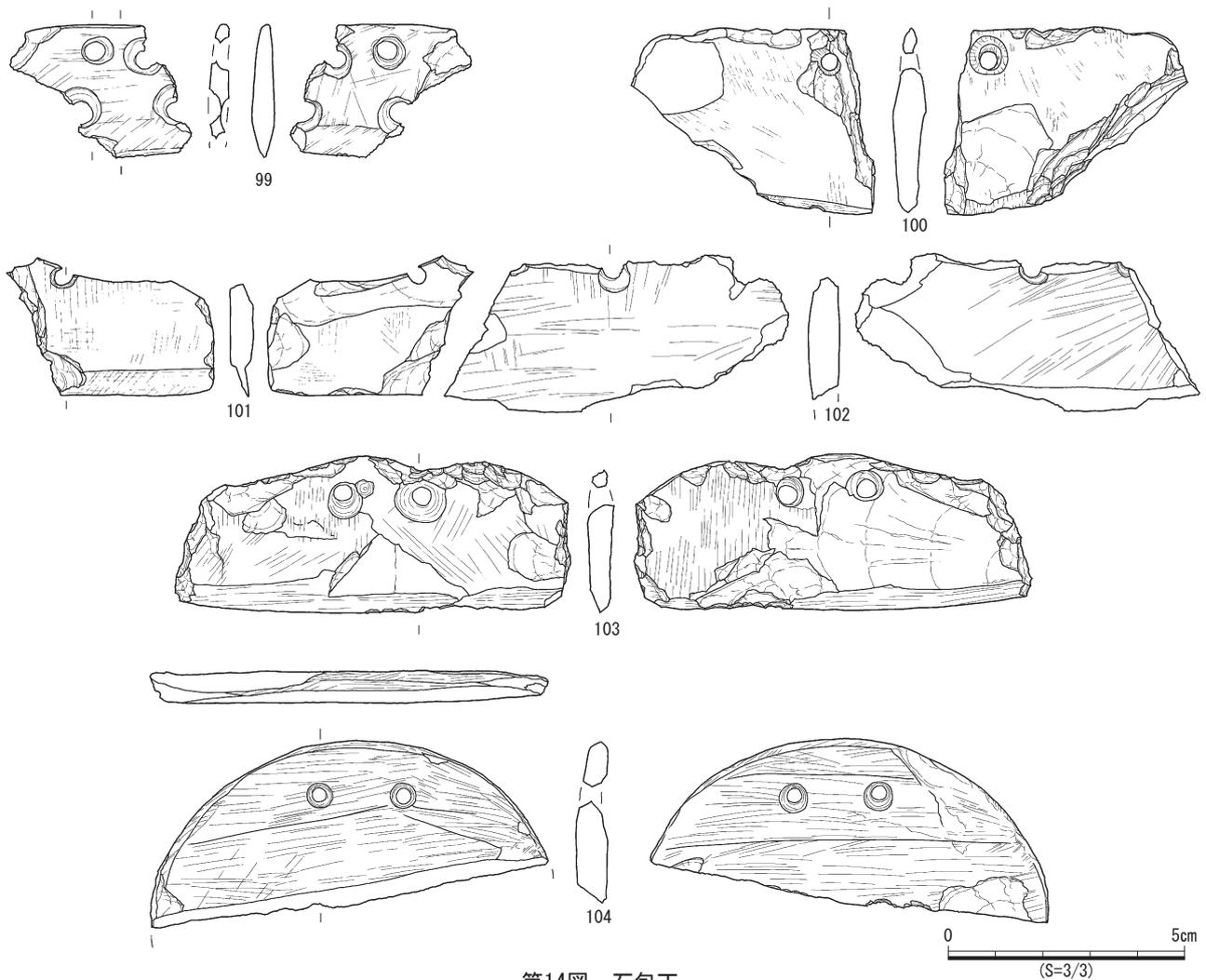
107は破鏡であるが、部位等については不明である。108も破鏡で、図示した右側と下側は両面ともから磨か



第12図 弥生時代土器出土状況図および弥生土器 8



第13图 弥生土器9



第14図 石包丁

れた摩耗面である。109の縁は低い蒲鉾状で、直径4.8cm、円鈕の小型仿製鏡である。110は円鈕、平縁で主文帯は○で構成し、直径8.4cmの小型仿製鏡で、鈕には紐状の繊維が付着している。

①麦之浦貝塚：破鏡：流雲文縁方格規矩鏡

舶載鏡で、唐津市桜馬場遺跡出土と類似。直径14.4cm、外縁部4.9cm、外側に流雲文、内側に鋸歯文が確認できるが、内区は不明。中津野式土器と東原式土器が出土している。

〈註〉「麦之浦貝塚」『本川地区造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』川内市土地開発公社1987

②横瀬遺跡：破鏡：変形渦文鏡（復元径6.5cm）

小型仿製鏡で、外縁部は狭い平縁をなし、直径6.5cm、厚さは1.5～1.8mmとされる。2号竪穴住居の出土とされ、山ノ口式土器や中津野式土器（本遺跡甕1類）様の甕、高坏1型式や長頸壺が出土している。

〈註〉「横瀬古墳」『指宿市埋蔵文化財調査報告書6』指宿市教育委員会1982

③本御内遺跡：破鏡：方格T字鏡

安国寺式土器の袋状口縁壺と出土したとされる破鏡で、

規格等の詳細は報告されないが、方格にT字と四乳はあるが、L字とV字等を欠く、方格T字鏡とされる。

〈註〉「本御内遺跡（舞鶴城跡）」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書12』鹿児島県立埋蔵文化財センター1994

鉄鏃(第15図111～119)

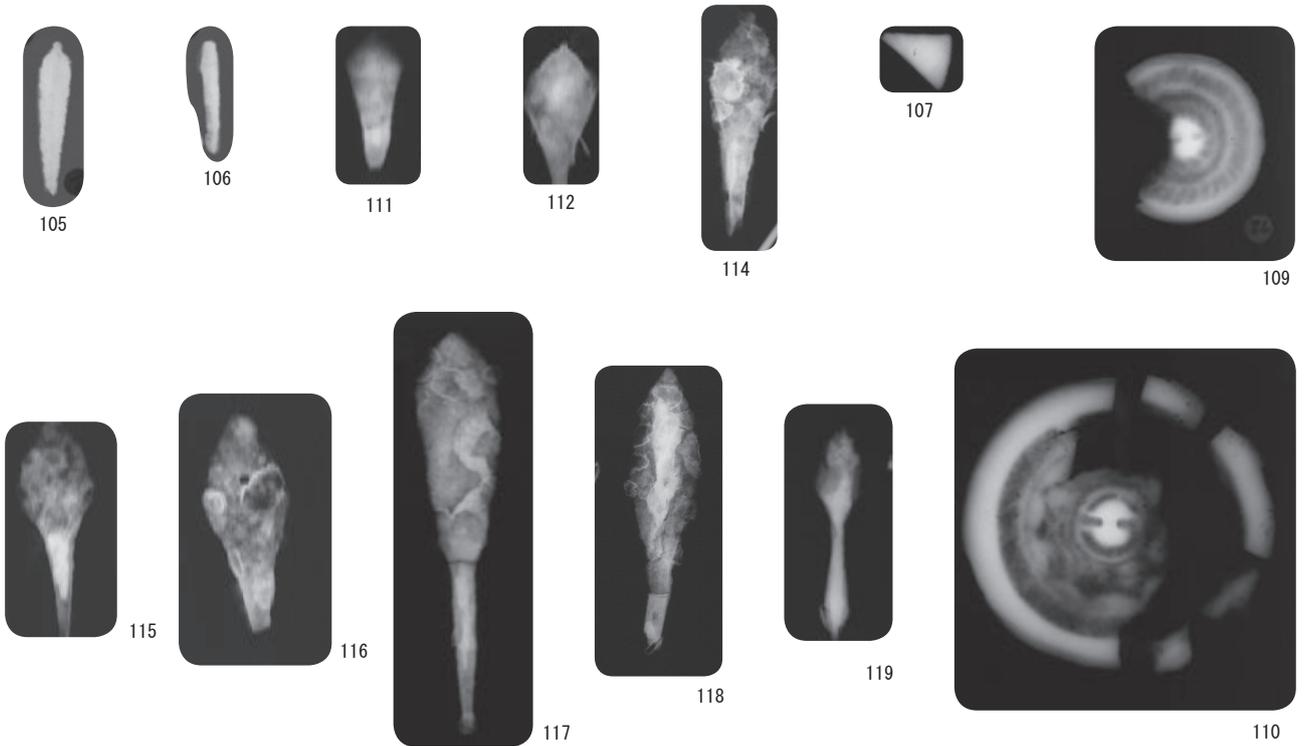
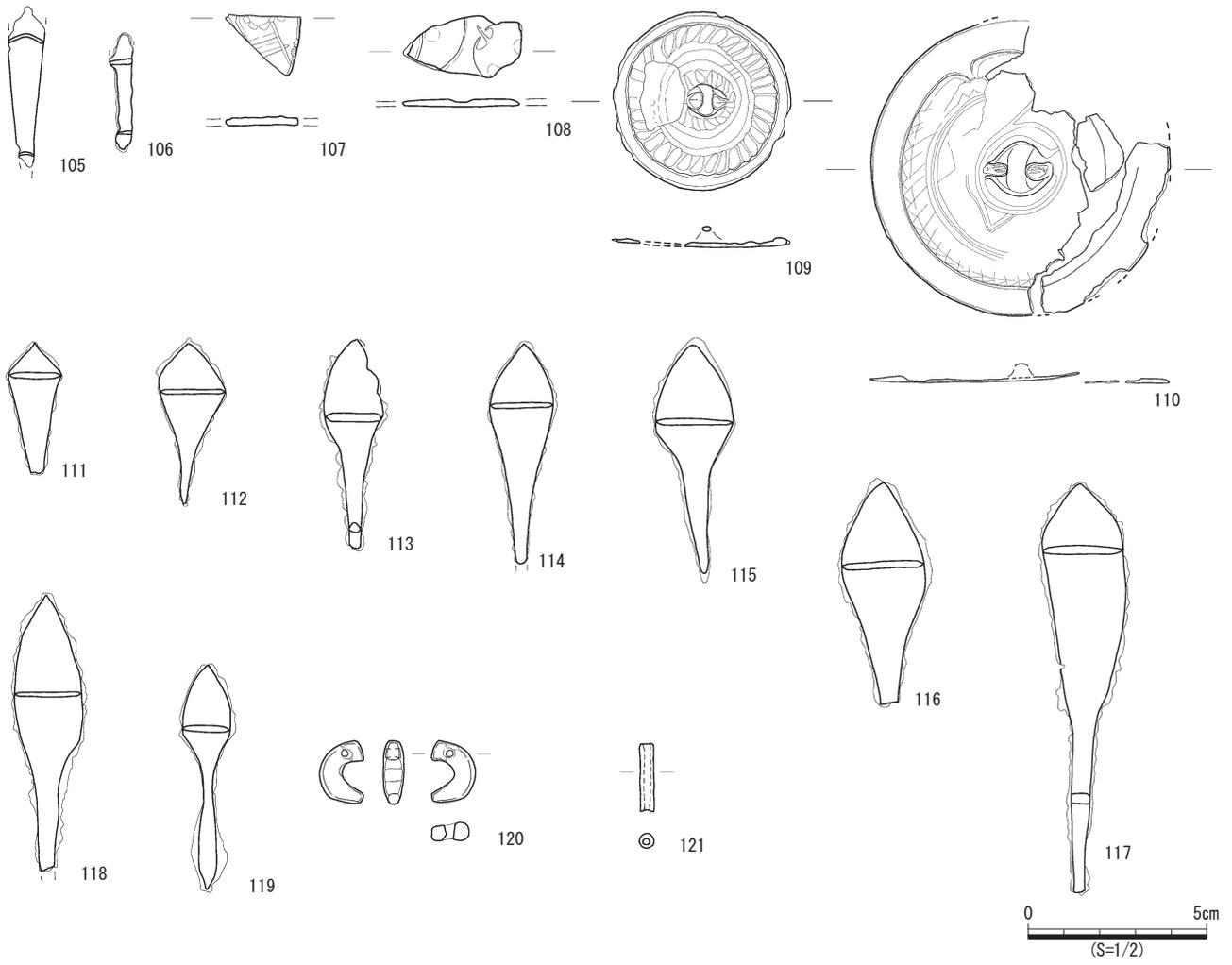
111と112は圭頭鏃、113・114・115・116・117・118は柳葉鏃、119は短頸鏃に属す。基本的には平根式の菱形式鉄鏃である。それぞれ残存状況は異なるが、114と115の全長は約6.3cm・鏃身部約2.1cm。116の鏃身部は4.2cm、茎尻が欠損する。

勾玉(第15図120)

120は明オリブ灰2.5GYの蛇紋岩製で、長さ1.8cm、厚さ0.6cm。孔は両側から穿つ。

管玉(第15図121)

121は灰白5Yで、石材は不明。長さ1.9cm、厚さ0.4cm。



第15図 銅鏃・銅鏡・鉄鏃・勾玉・垂飾

2 古墳時代の調査

(1) 調査の概要

古墳時代の遺構、遺物は、河川氾濫時の堆積層である砂層から検出された。基本層序としてはⅢb層（一部Ⅲ層の場合もある）であるが、一部Ⅳ層からも遺物が出土した。遺構はそのほとんどをⅣ層上面で検出した。しかしながら、調査区の大部分の場所で安定した層序をなしていなかったため、整理作業においては遺構、遺物の年代観を、基本層序によるものより、従来の研究等による遺物の編年をもととする年代観を優先して決定した。

遺構はA'～E-15～37区に集中しており、堅穴住居跡8基、堅穴状遺構19基、土坑36基、ピット13基、溝状遺構1条、焼土遺構1基、土器集中遺構8基が検出された。

堅穴住居跡はA～C-25～36区で検出された。土層が砂層のため住居のプランや柱穴の有無、切り合い関係等を明確につかむことができないものが多かった。また、床面についてもはっきりと捉えることができず、検出は掘り込み面でおこなった。そのため本遺跡では、遺構のプランや柱穴の有無及び配置、遺構内遺物の出土状況などを考慮し、方形もしくは円形プランを呈し、住居に伴う柱穴、遺物を有する遺構を堅穴住居跡とした。

堅穴状遺構はA'～E-20～34区で検出され、特にD、E-20～24区には11基が近在する。複数の堅穴住居の切り合いにより不定型な形状を呈している可能性のある遺構も見られるが、形状が不定型で方形もしくは円形プランを呈しておらず、また、遺構に伴う柱穴がないもの、もしくは柱穴があったとしても住居跡とは考えにくいものについては堅穴状遺構として掲載した。

土坑およびピットはA'～E-19～37区に集中して検出され、特に堅穴住居跡や堅穴状遺構が検出された付近で多数検出されたが、その関連性を明確にすることはできなかった。土坑は、土坑内より該期の土器が廃棄もしくは埋納された状態で出土したものと検出面がⅣ層で埋土中に中世以降の遺物が含まれていないものについて、該期の土坑と認定し掲載した。ピットについては中世以降のピットとの判別が難しく、ピット内に土器が埋納されているものを掲載した。土坑、ピットともに、時期判定がつかなかったものについては、遺構配置図のなかに灰色の線を表示した。

土器集中遺構は、B～D-32～37区で検出された。そのなかでもC、D-36、37区は集中が密であり、完形に近い土器が数多く出土した。このエリアでは包含層内出土遺物の中にも完形の甕型土器や壺型土器が出土しており、包含層内遺物と土器集中遺構に伴う遺物との区別が難しく、一部は包含層出土遺物として取り上げ、本報告の中でも包含層内出土遺物として掲載したが、これらは土器集中遺構に伴うものである可能性が高い。

(2) 遺物の分類

本遺跡の土器群は、中津野式土器を中心に東原式土器で構成している。そのため、甕については中村直子(註1)(1987)の口縁部形態分類を判断の基準としたが、中津野式土器の新段階あるいは、東原式土器への過渡期と見られる土器群が存在している。それらは、中村分類の甕Ⅴ類と甕Ⅵ類の間に位置すると見られる土器群であり、そのため、本遺跡では甕1類、甕2類、甕3類即ち、1類中津野式土器、2類中津野式土器新段階、3類東原式土器とした。なお、既に、過渡期の存在については本田道輝(註2)(2005)が、言及し、八木澤一郎(註3)(2008)は堂園遺跡B地点で過渡期のその検討を行っている。

〈註1〉 中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古』6, 1987

中村の甕5型式は、前段階の甕4型式に比べて外反する口縁部は立ち上がって細くなる。口唇部の厚さは先端までほとんどかわらないかわずかに薄くなり、口唇部はⅢ類、Ⅳ類に比べて小さく収まるとされる。口縁内面の稜線が明瞭なものと不明瞭なものが見られる。また、胴部は、大きく球状に膨らむものと膨らみが緩くなるものがあり、中津野式に比定される。一方、甕6型式の口唇部及び口縁部等の形状はⅤ類に類似するとされ、外面をハケメ原体状の工具で縦方向の擦過（いわゆるカキアゲ）を行うことによって胴部との境に段をもつものとされる。なお、この口縁部と胴部の境界の縦方向の刷毛目は“カキアゲ口縁”と呼ばれ、東原式土器に比定されている。このような形状変化や製作技法の変化に着目し、甕5型式に先行する甕4型式を松木蘭式土器、甕5型式を中津野式土器、甕6型式を東原式土器、甕7型式を辻堂原式土器に比定している。

〈註2〉 本田道輝「第X章下堀遺跡の検討」『下堀遺跡』金峰町教育委員会発掘調査報告書20, 2005本田によると過渡期の甕は、(1)口縁部の立ち上がりが強くなるとともに、内側の稜線が鈍くなる。(2)口縁部つけね（頸部）の厚みが、先端部と変わらなくなる。(3)「カキアゲ口縁」が認められる。(4)胴部に張りが見られるものが多くなる。(5)胴下半部にケズリ痕が見られるようになる。(6)底部成形が雑になるとされる。

〈註3〉 八木澤一郎「第Ⅶ章調査のまとめ第2節弥生時代終末～古墳時代初頭の堂園遺跡」『堂園遺跡B地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書123, 2008

八木澤は、堂園遺跡B地点の甕は、①口縁部内面と胴部とでハケメ調整やヘラナデ調整を方向を違えて強く行い、境界に明瞭な稜線を形成するという中津野式土器の一つの指標を持ちながら、口縁部の外反度合いが弱い土器が多い。②口縁部外

面と胴部との境界に、ヘラナデ調整や指頭押圧調整あるいは胴部上端から口縁下端までカキアゲ調整などが施され、稜線は不明瞭な点も挙げられる。③胴部下半ではヘラナデ調整が雑になり、ケズリ痕が残ること等に着目し、これらを「堂園タイプ」と呼び、過渡期として抽出した。

なお、先記した本遺跡の甕1類は中村分類の甕5型式類に相当し、472や475をその典型例とする。口縁部はやや長めでくノ字に外反し、口唇部は細くなる傾向が見られる。口縁部と胴部との境界は明瞭な稜線が残され、胴部は丸く膨らみ、脚部は総じて低く端部が外側に開く傾向が見られる。甕2類は、447や490をその典型例とする。口縁部の稜線がやや不明瞭となり、所謂カキアゲ口縁は認められないが、胴部との境界にヘラの打ち込み痕が列状に残されるものが多い。甕3類は中村分類の甕6型式類に相当し、口縁部と胴部との境界は刷毛目のカキアゲが明瞭に残るいわゆる「カキアゲ口縁」を特徴とする。

また、丸底甕は、布留式土器及びその影響を反映する地域から搬入されたと判断したもので、注目すべき資料である。

大型壺も中村分類の壺A～Cに準拠し、小型の短頸壺については、小型の丸底壺と、より小型の罎に細分した。なお、罎についても基本的には、中村の罎1型式～罎3型式分類を踏襲しているが、罎1型式の前に罎0型式を設け、さらに罎0型式1と罎0型式2に二分した。

罎0型式1は、口縁部が長く、胴部上位即ち口縁部直下で偏球状に明瞭に屈折する一群で、口縁部に櫛描波状文を施すものが多数を占める。また、器の大部分を口縁部で構成し、中には器高の8割以上を占めるものもあり、赤色に発色するものが多いことから、精製胎土と共に赤色の化粧土を使用した可能性を検証すべき資料も存在している。さらに、丁寧な器面調整が行われており、器壁を薄く仕上げる意図が看取される。次の罎0型式2も器の大部分を口縁部で占めるもので、罎0型式1同様に、胴上部で明瞭に屈折して偏球状の胴部を持つ等の型式学的視点から、罎0型式1から派生したと判断しているものである。

罎1型式は、罎0型式2から派生し、在地化したと判断したもので、短く直線的に立ち上がる口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群と、外に開く口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群がある。中でも、前述の一群は中村分類の罎1型式に該当する。なお、罎0型式及び罎1型式のいずれも、中津野式土器に伴うと判断している。罎2型式は、口縁部が外開きの傾向を示し、胴部が蕪状

に膨らむ丸底で、中には丸底の中心に乳頭状の突起を持つものも見られ、中村編年の東原式土器に位置づけられると認識している。なお、器面調整は横方向のナデが中心で、口縁部での縦方向のヘラミガキ等は見られない。罎3型式についても中村編年に順次、口縁部は坏形を呈し、屈折する胴部の重心は低く、基本的に平底をなすもので、辻堂原式土器～笹貫式土器に比定している。

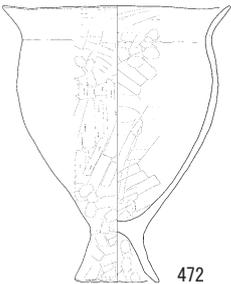
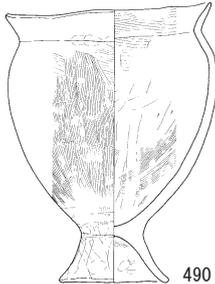
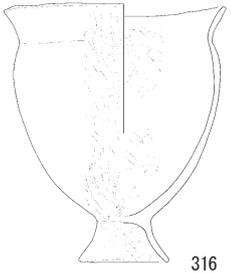
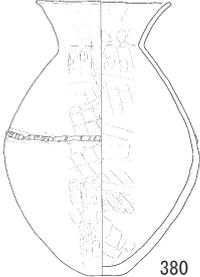
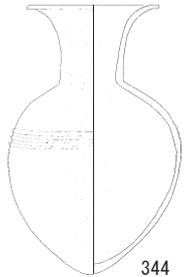
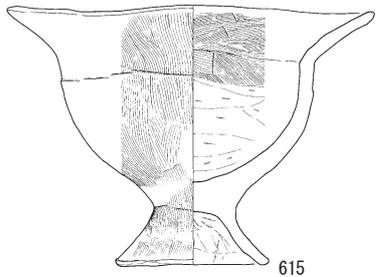
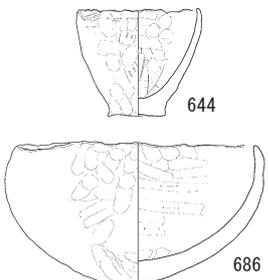
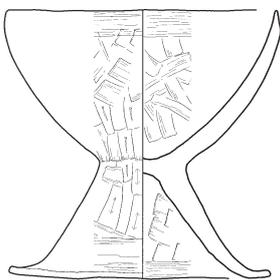
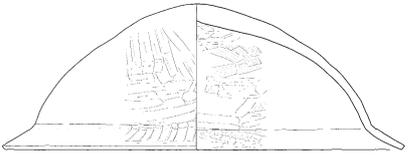
また、甕同様中間形態の存在を主張する本田の壺は、(1)口縁部が頸部から直接が外反する。(2)頸部の締まりが強く、長胴化する。(3)胴部凸帯が低く刻みが雑になる。(4)胴部凸帯の始点と終点不一致なく上下にずれるものが見られるようになる。(5)胴下半部にケズリ痕がみられるようになる。(6)底部が丸底化していくとするとし、これらが、中村の壺B3型式と壺B4型式の間に存在すると指摘しているが、本遺跡の資料からは、その評価までは至っていない。

〈註〉 中村の罎1型式は、短く直行する口縁部と偏球状に明瞭に屈折する胴部を持つもので中津野式土器に、罎2型式は口縁部が外開きの傾向で、胴部が蕪状に膨らんで丸底あるいはその中心に乳頭状の突起を持つもので東原式土器に、罎3型式は口縁部が坏形で、屈折する胴部の重心は低く平底をなすもので辻堂原式土器～笹貫式土器に編年される。

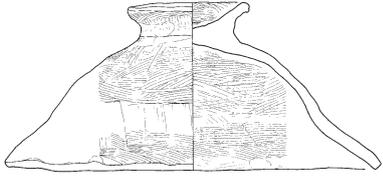
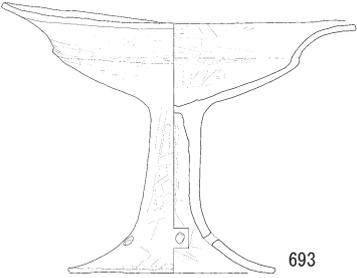
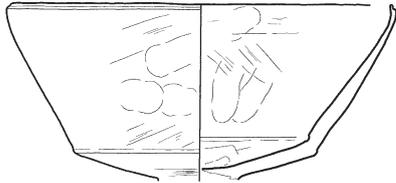
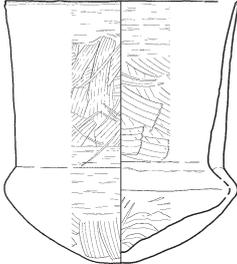
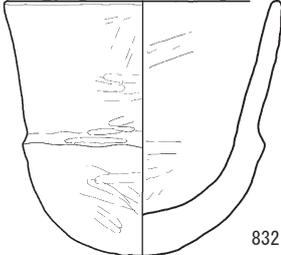
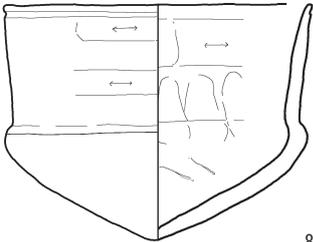
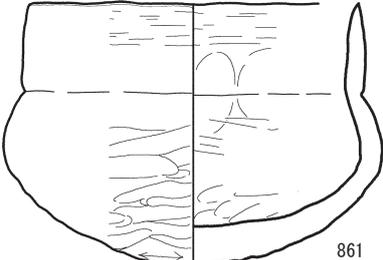
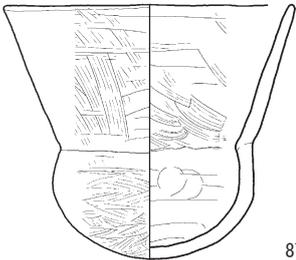
蓋は、ドーム状の身部と大きく外反する口縁部を持ち器高が低く把手を設けないA類と、身部と口縁部の区分が無く笠状に直線的に開き天井部に逆台形状の把手を持つB類に二分した。

高坏も中村分類を踏襲し、高坏1型式は松木蘭式土器、高坏2型式は中津野式土器、高坏3型式は東原式土器、高坏4型式は辻堂原式土器～笹貫式土器とした。なお、高坏2型式については抽出できたが、他の型式の具体的抽出はできていない。

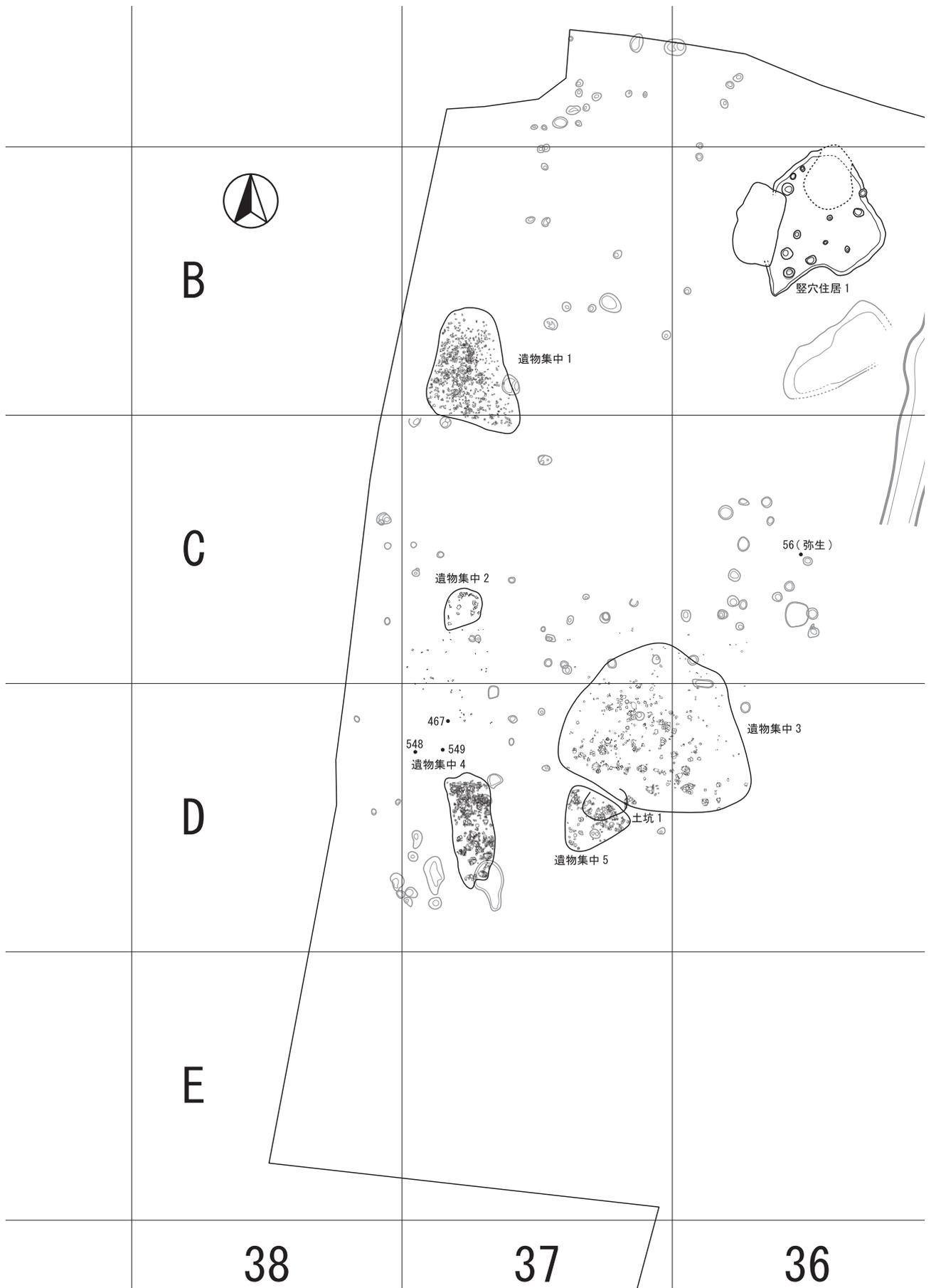
鉢については、口径が器高を越すものを取り扱い、広口で大型の鉢Aと小型の鉢Bに大別し、さらに、鉢Bについては、底部が丸底や平底の鉢B1と、脚部を構成する鉢B2に細分している。なお、鉢B2では、脚の短い一群630、637と脚の長い一群623、624が存在している。

<p style="text-align: center;">甕 1 類</p>  <p style="text-align: right;">472</p>	<p style="text-align: center;">甕 2 類</p>  <p style="text-align: right;">490</p>	<p style="text-align: center;">甕 3 類</p>  <p style="text-align: right;">316</p>
<p>口縁部はやや長めでくノ字に外反口 唇部は細くなる傾向 口縁部と胴部の境界は明瞭な稜線 胴部は丸く膨らむ 脚部は低く端部が外側に開く傾向</p>	<p>口縁部 稜線がやや不明瞭 カキアゲ口縁は認められる 胴部との境界にヘラの打ち込み痕が 列状に残されるものが多い</p>	<p>口縁部は緩やかに外反 もしくは内弯外 反するものは口縁部と胴部との境界 は刷毛目のカキアゲが明瞭に残る 「カキアゲ口縁」を特徴</p>
<p style="text-align: center;">壺 A 類</p>  <p style="text-align: right;">380</p>	<p style="text-align: center;">壺 B 類</p>  <p style="text-align: right;">344</p>	<p style="text-align: center;">鉢 A 類</p>  <p style="text-align: right;">615</p>
<p>黒髪式土器の系譜を引くもの</p> <p>A 2 型式：松木菌式 A 3 型式：中津野式 A 4 型式：東原式</p>	<p>山ノ口式土器の系譜を引くもの</p> <p>B 2 型式：松木菌式 B 3 型式：中津野式 B 4 型式：東原式</p>	<p>広口で大型</p>
<p style="text-align: center;">鉢 B - 1 類</p>  <p style="text-align: right;">644</p> <p style="text-align: right;">686</p>	<p style="text-align: center;">鉢 B - 2 類</p>  <p style="text-align: right;">625</p>	<p style="text-align: center;">蓋 a 類</p>  <p style="text-align: right;">602</p>
<p>小型 底部 丸底, 平底</p>	<p>小型 底部 脚付</p>	<p>ドーム状の身部と大きく外側に外反 する口縁部からなる 器高は低く, 把手を設けない</p>

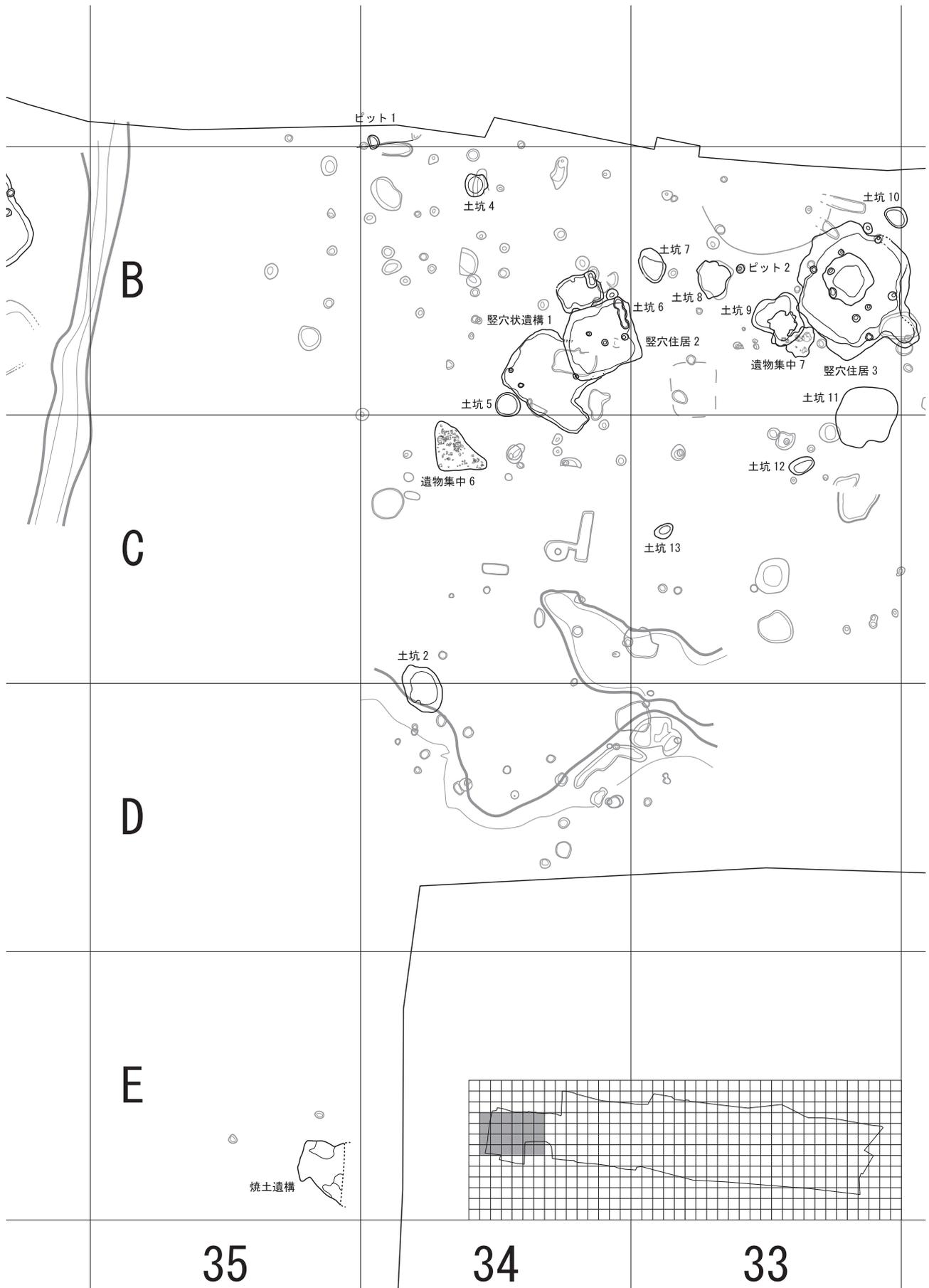
分類表 1

蓋B類	高坏2型式	高坏3型式
 <p style="text-align: right;">607</p>	 <p style="text-align: right;">693</p>	 <p style="text-align: right;">708</p>
<p>身部と口縁部の区分が無く、笠状に直線的に開く形状 天井部に逆台形状の把手を持つ</p>	<p>中津野式</p>	<p>東原式</p>
高坏4型式	埴0型式1	埴0型式2
 <p style="text-align: right;">709</p>	 <p style="text-align: right;">818</p>	 <p style="text-align: right;">832</p>
<p>辻堂原式～笹貫式</p>	<p>口縁部長い 器の大部分を口縁部で構成 櫛描波状文を施すものが多い 口縁部直下で偏球状に明瞭に屈折する 赤色に発色する事例が多い 器面調整丁寧 器壁は薄い</p>	<p>器高の大部分を口縁部で占める 胴部が屈折する</p>
埴1型式	埴2型式	埴3型式
 <p style="text-align: right;">854</p>	 <p style="text-align: right;">861</p>	 <p style="text-align: right;">876</p>
<p>外に開く口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群 (A) と、短く直線的に立ち上がる口縁部と丸底で蕪状の胴部で構成する一群 (B)</p>	<p>口縁部が外開きの傾向 胴部が蕪状に膨らんで丸底を中心に構成 丸底の中心に乳頭状の突起を持つものもある</p>	<p>口縁部は坏形 屈折する胴部の重心は低い 基本的に平底をなす</p>

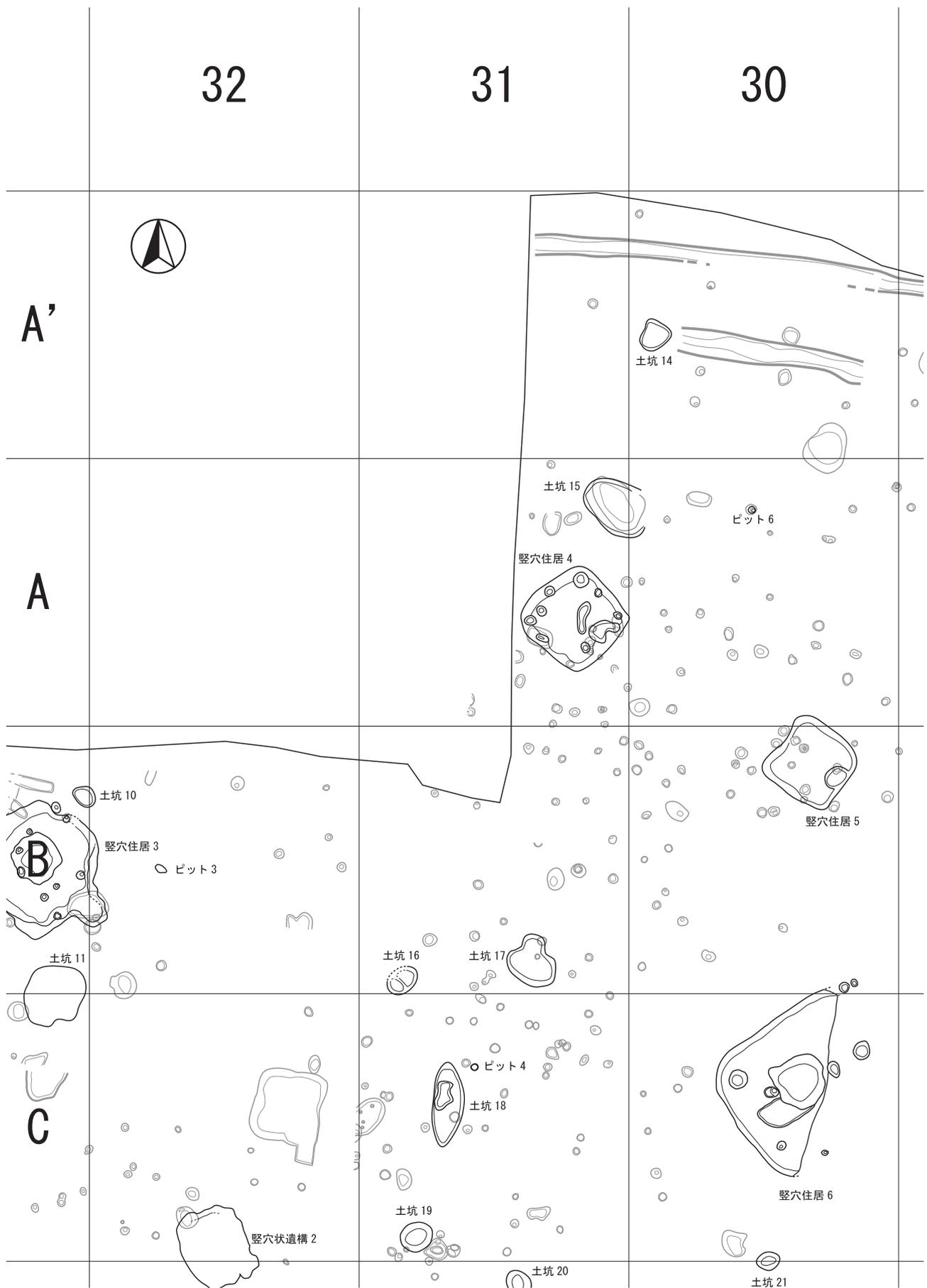
分類表 2



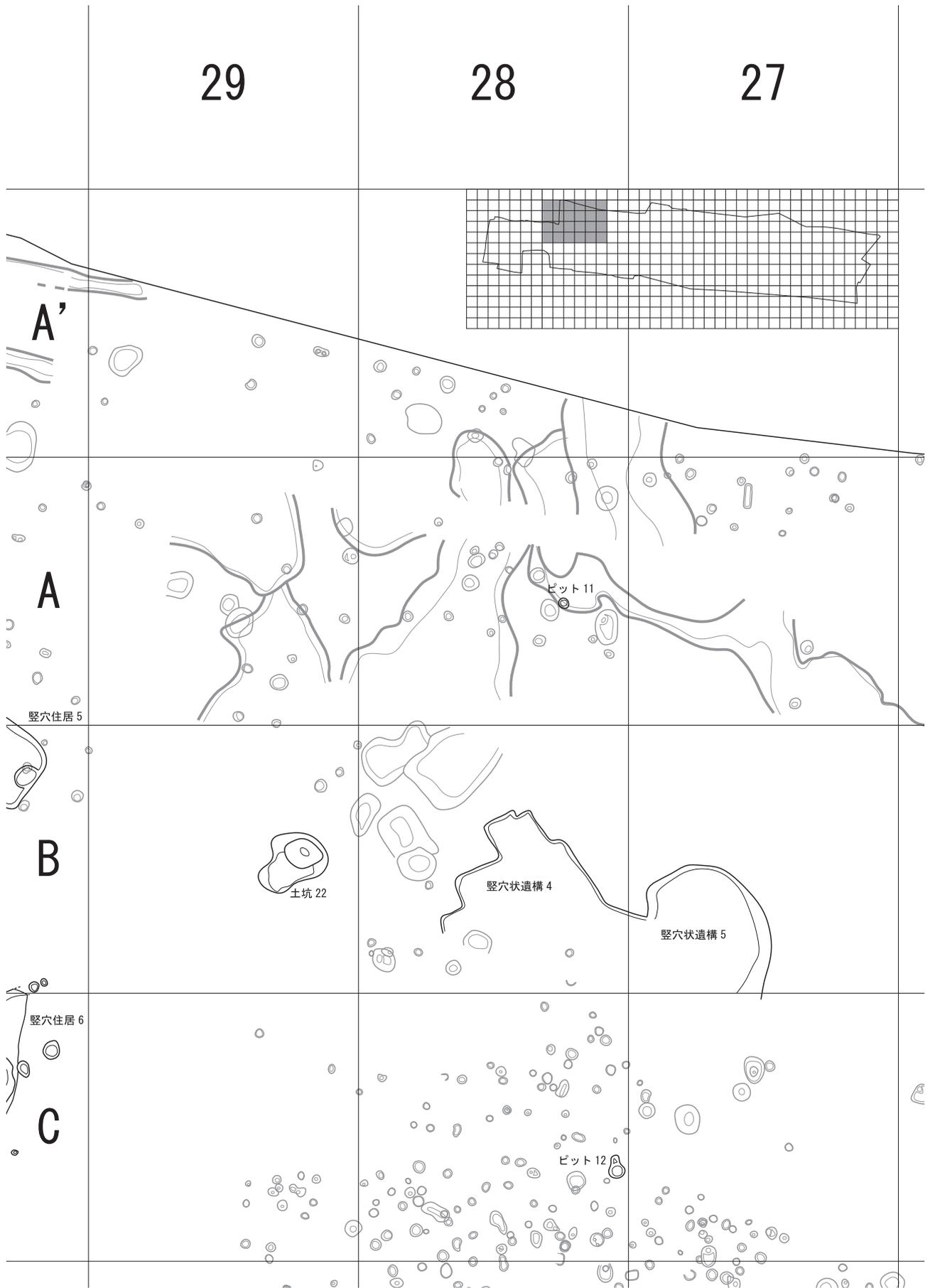
第18図 古墳時代遺構配置図 1



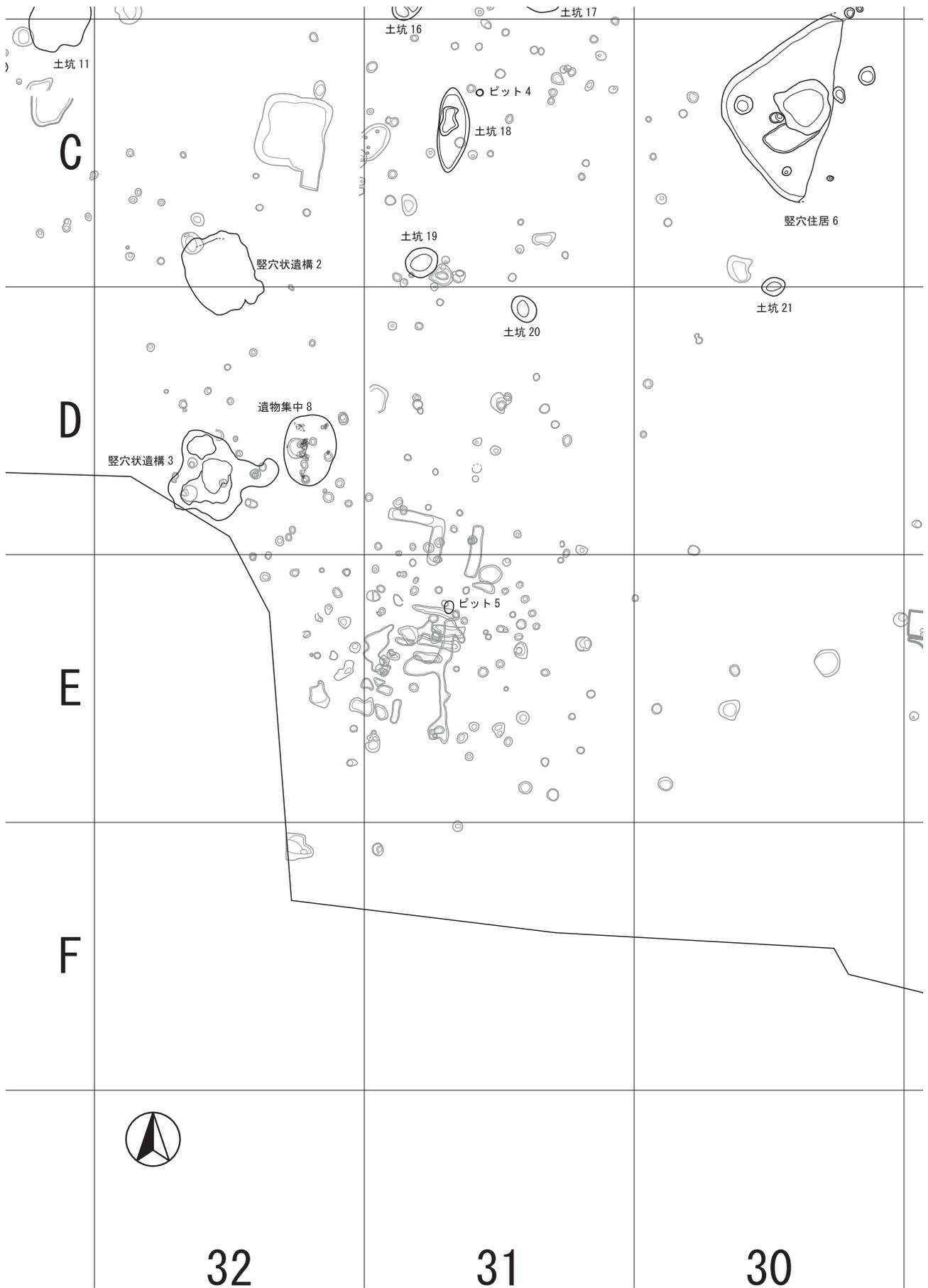
第19図 古墳時代遺構配置図2



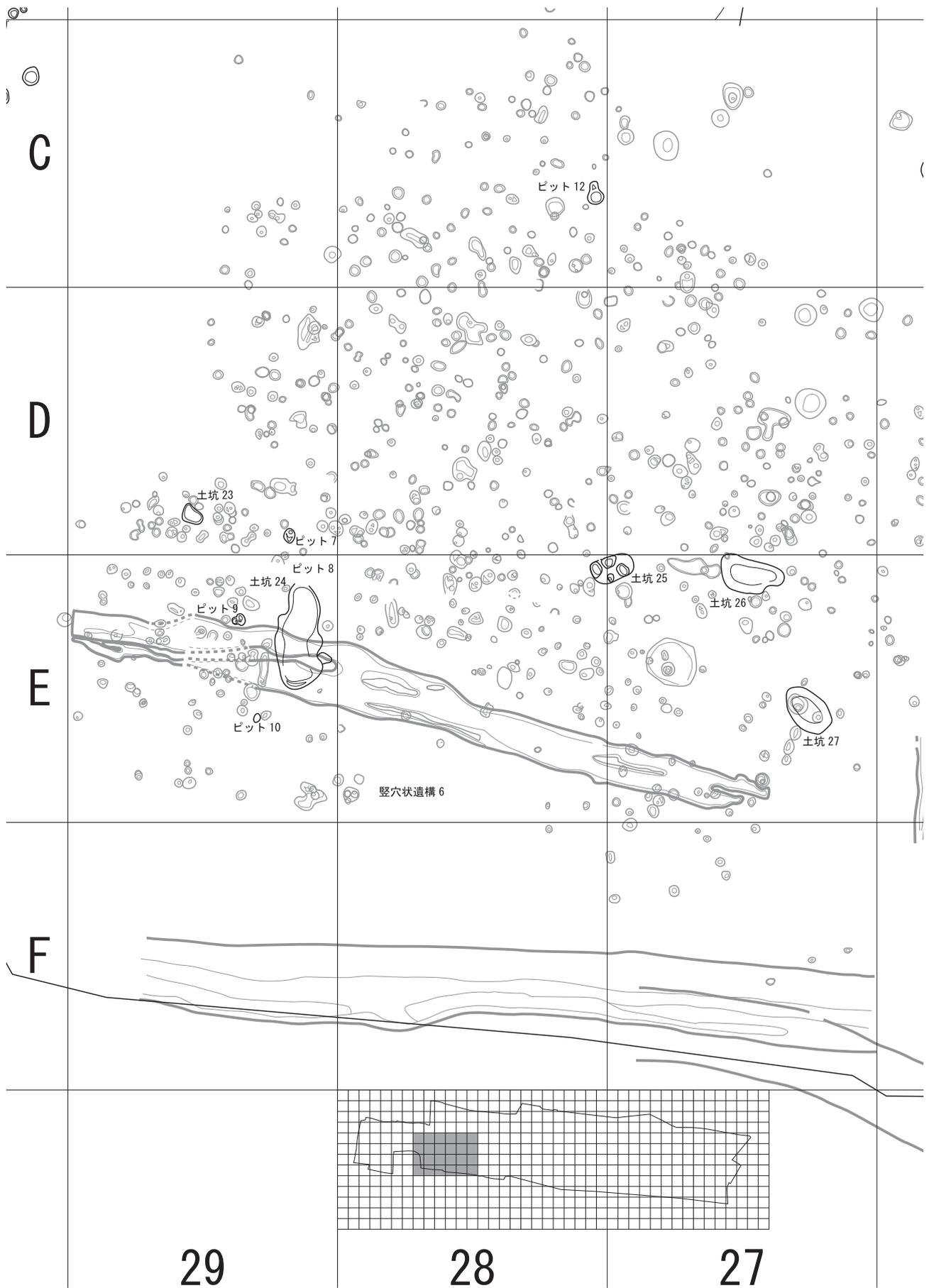
第20図 古墳時代遺構配置図 3



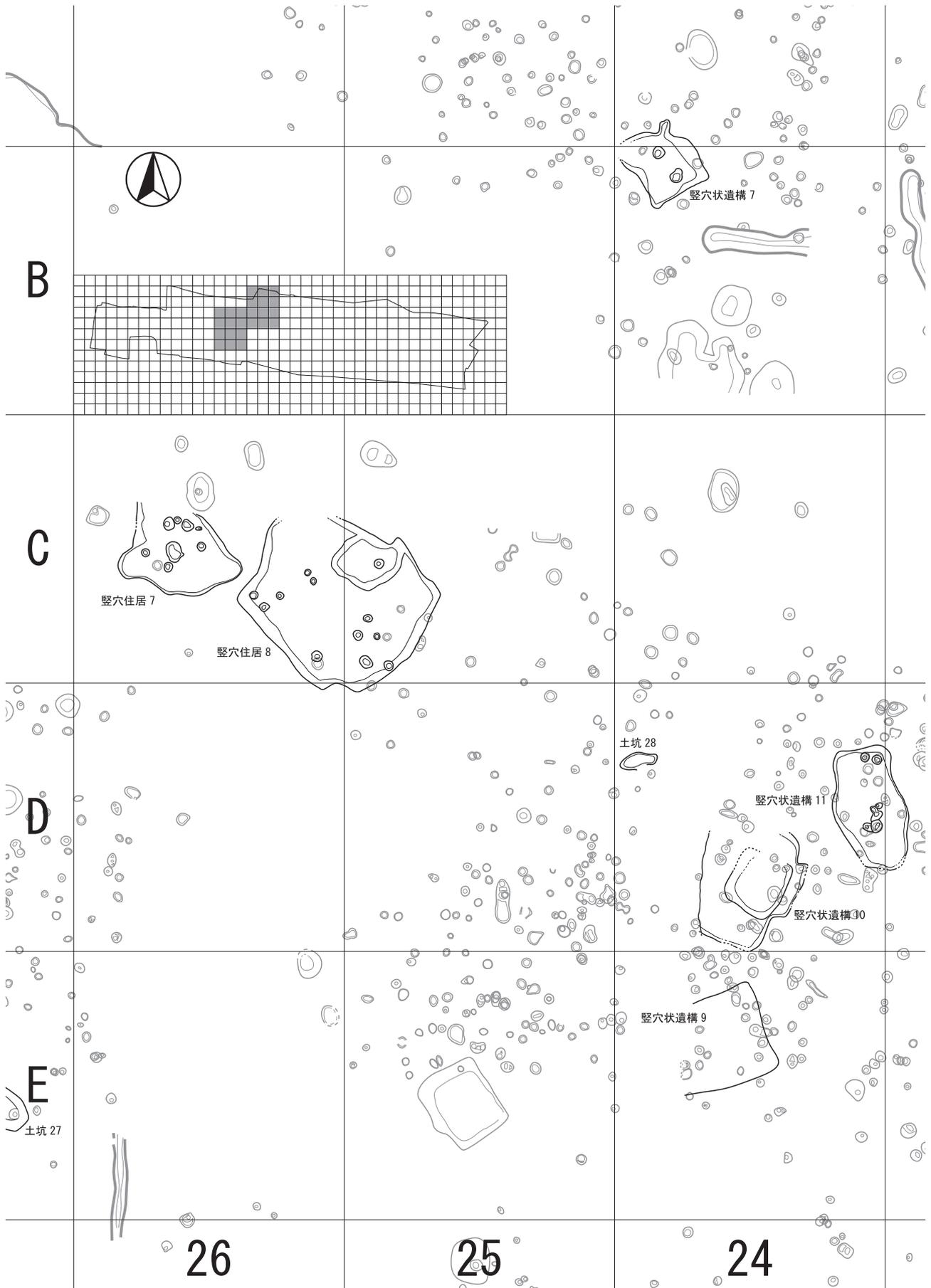
第21図 古墳時代遺構配置図 4



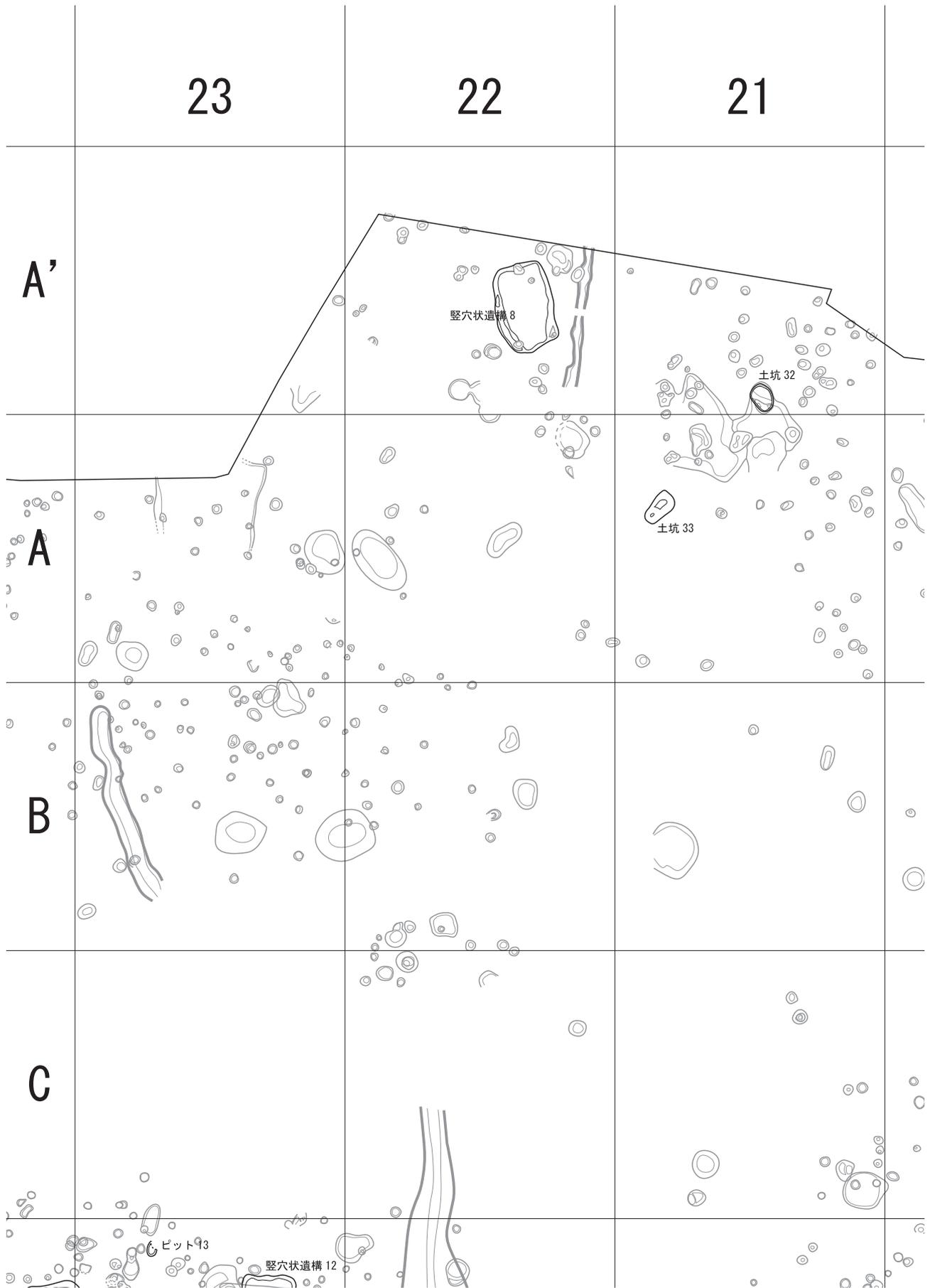
第22図 古墳時代遺構配置図 5



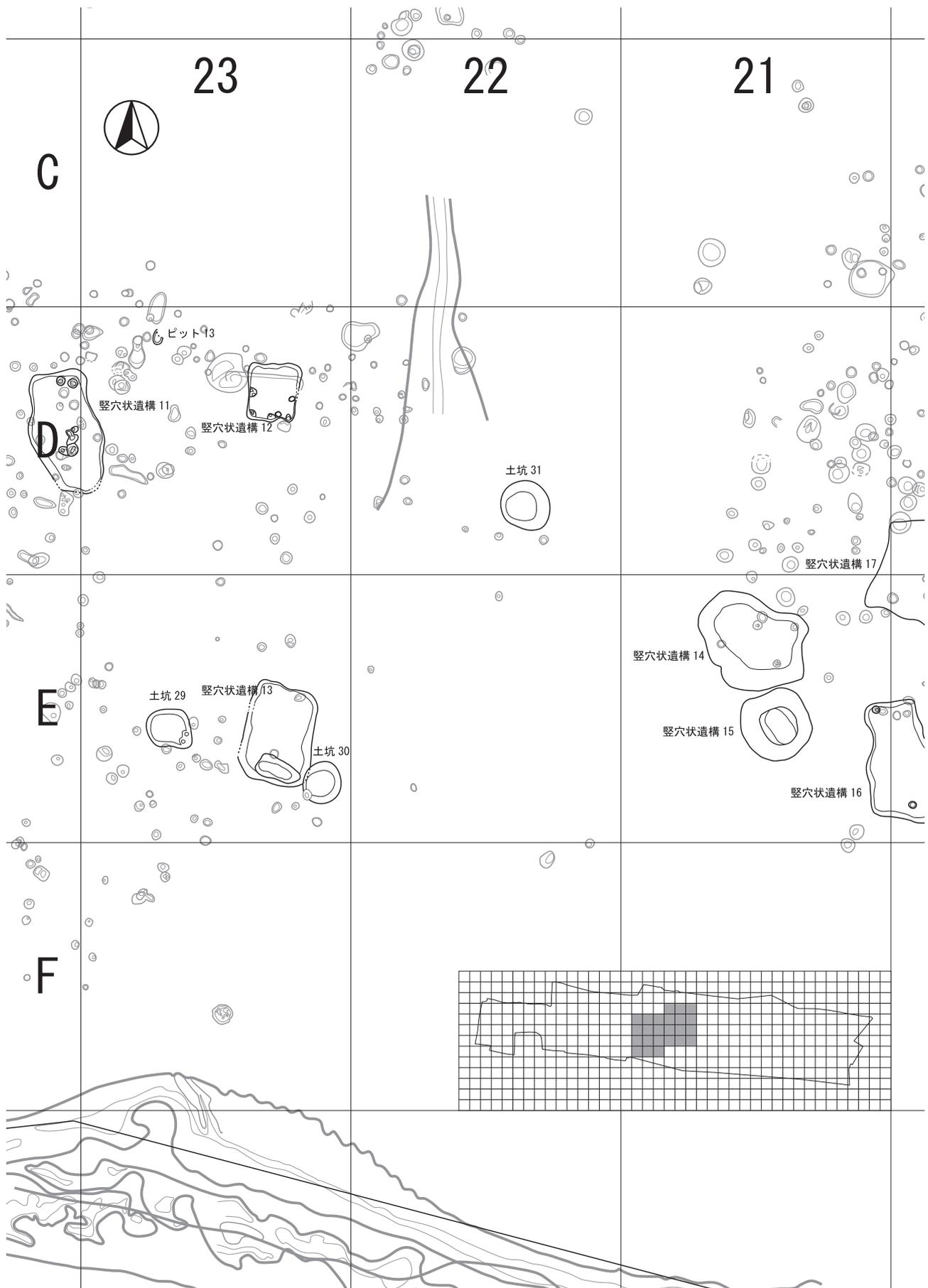
第23図 古墳時代遺構配置図6



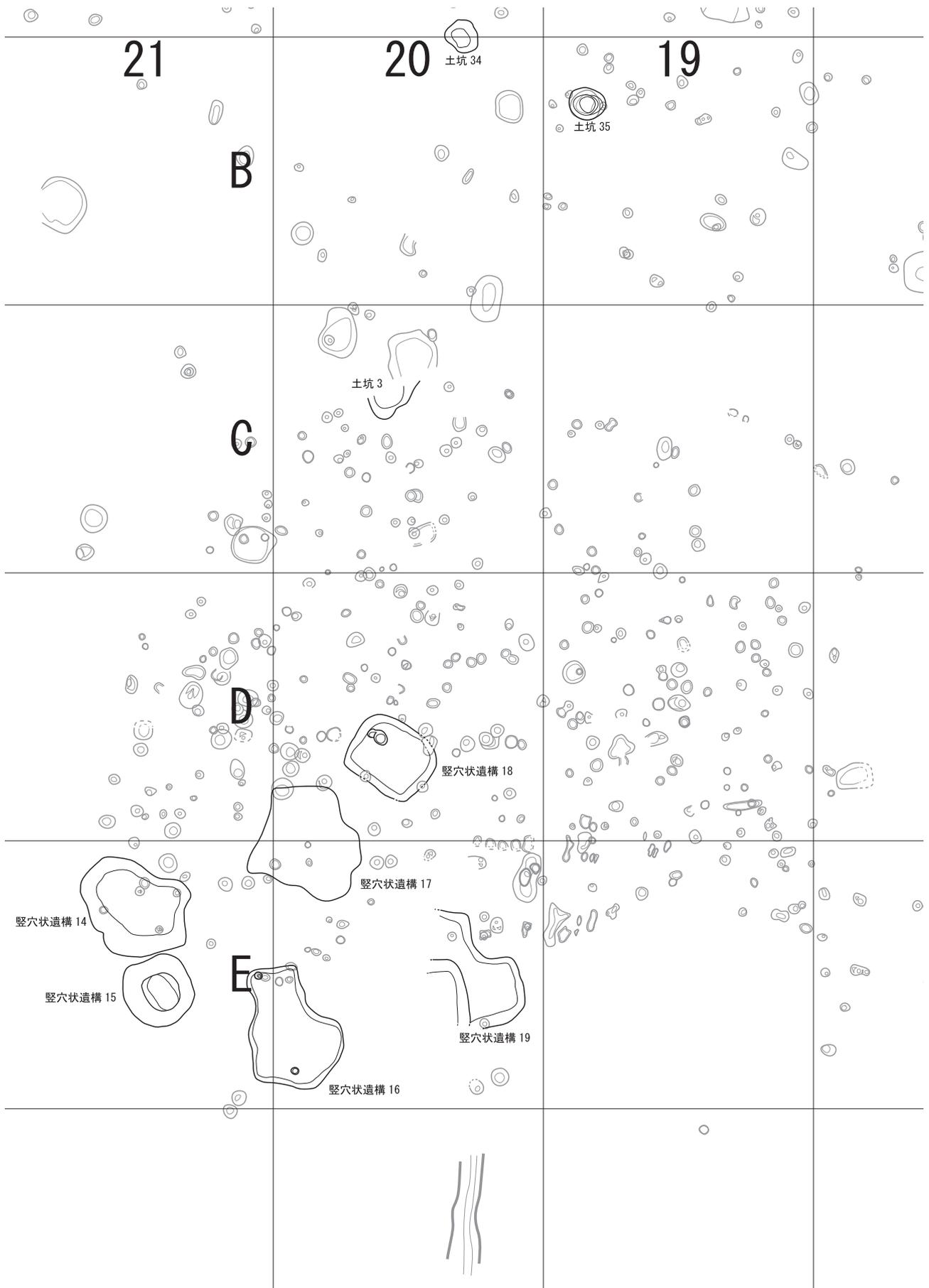
第24図 古墳時代遺構配置図 7



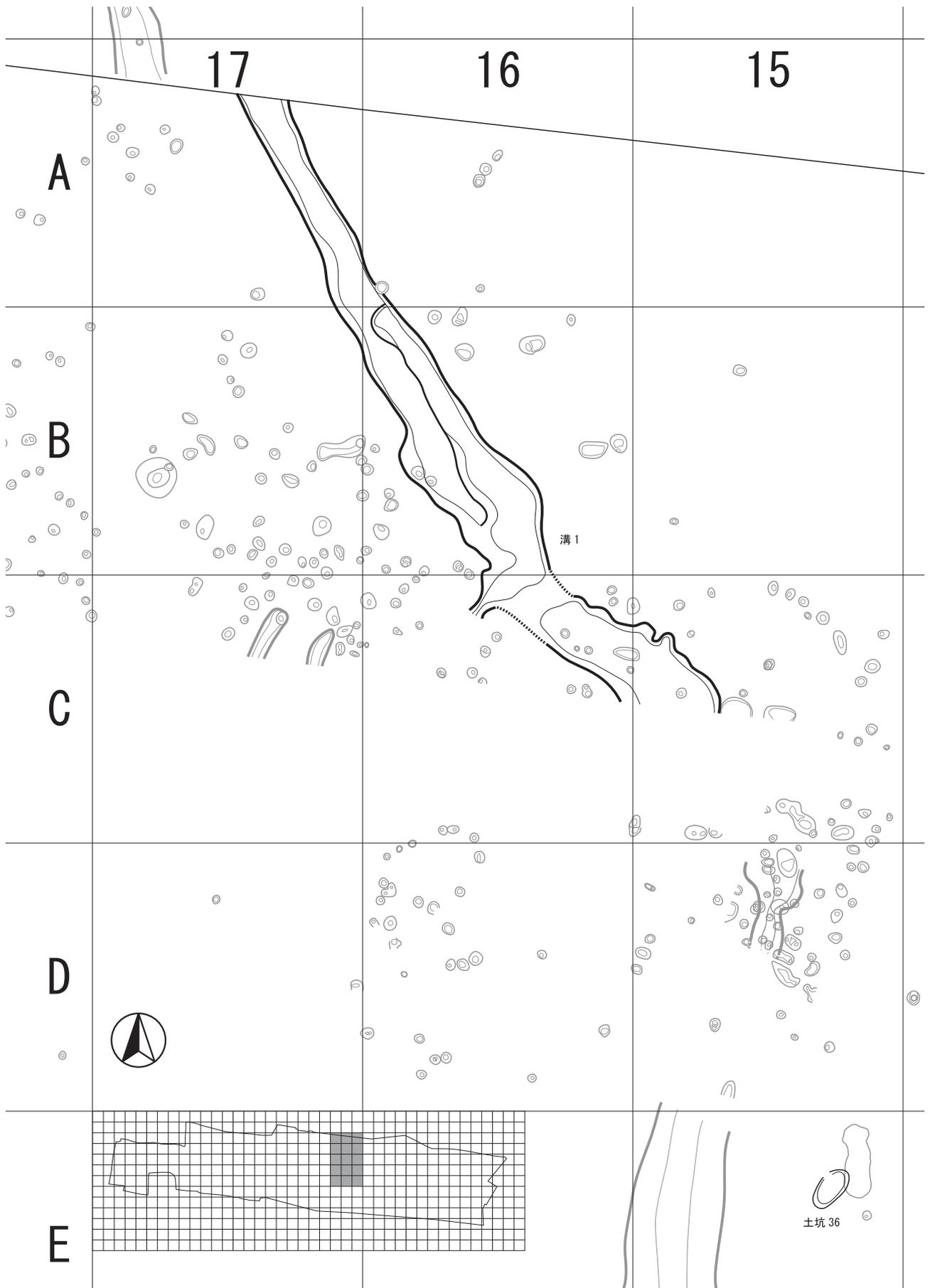
第25図 古墳時代遺構配置図 8



第26図 古墳時代遺構配置図 9



第27図 古墳時代遺構配置図10



第28図 古墳時代遺構配置図11

遺構計測表

竪穴住居跡					付属するpit			
番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	11729	4.40 + a	4.40	0.27	P1	0.43	0.37	0.15
					P2	0.44	0.41	0.27
					P3	0.28	0.28	0.10
					P4	0.39	0.30	0.09
					P5	0.45	0.43	0.21
					P6	0.17	0.14	0.11
					P7	0.24	0.19	0.07
					P8	0.20	0.17	0.08
					P9	0.20	0.18	0.14
					P10	0.25	0.16	0.11
					P11	0.39	0.32	0.21
					P12	0.31	0.26	0.15
2	11536	2.70 1.60	2.50 1.30	0.34 0.14	P1	0.20	0.14	0.22
					P2	0.23	0.22	0.18
					P3	0.26	0.24	0.13
3	11684	5.20	4.35	0.38	P1	0.24	0.20	0.34
					P2	0.21	0.19	0.17
					P3	0.26	0.25	0.14
					P4	0.26	0.23	0.10
					P5	0.32	0.25	0.20
					P6	0.27	0.27	0.31
					P7	0.23	0.19	0.27
					P8	0.32	0.32	0.34
					P9	0.27	0.24	0.22
4	3149	3.30	3.30	0.30	P1	0.58	0.56	0.26
					P2	0.30	0.30	0.16
					P3	0.33	0.25	0.18
					P4	0.38	0.36	0.14
					P5	0.38	0.32	0.19
					P6	0.39	0.36	0.10
					P7	0.48	0.23	0.11
					P8	0.40	0.31	0.13
5	3126	2.90	2.80	0.21	P1	0.35	0.30	0.20
					P2	0.25	0.22	0.25
					P3	0.26	0.24	0.13
6	7389	5.30 + a	5.10 + a	0.55	P1	0.71	0.68	0.29
					P2	0.36	0.30	0.30
					P3	0.53	0.35	0.36
					P4	0.22	0.20	0.11
					P5	0.39	0.35	0.27
					P6	0.28	0.24	0.19
					P7	0.62	0.45	0.31
					P8	0.72	0.61	0.35
7	7453	4.50	3.20 + a	0.53	P1	0.50	0.42	0.09
					P2	0.27	0.26	0.05
					P3	0.44	0.43	0.07
					P4	0.24	0.13	0.05
					P5	0.33	0.31	0.05
					P6	0.30	0.29	0.03
					P7	0.36	0.30	0.07
					P8	0.76	0.54	0.14
8	7452	7.10 + a	5.90	0.63	P1	0.31	0.28	0.17
					P2	0.35	0.30	0.13
					P3	0.28	0.27	0.15
					P4	0.25	0.23	0.19
					P5	0.28	0.23	0.14
					P6	0.41	0.39	0.09
					P7	0.38	0.33	0.23
					P8	0.34	0.26	0.12
					P9	0.25	0.22	0.13
					P10	0.52	0.39	0.25
					P11	0.38	0.32	0.15
					P12	0.37	0.35	0.11

竪穴状遺構					付属するpit				
番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	
1	11718	3.60	2.70	0.33	P1	0.17	0.15	0.04	
					P2	0.21	0.16	0.11	
					P3	0.20	0.16	0.11	
2	9610	2.90	2.40	0.20					
3	9595	3.45	2.90	0.16	張り出し部分		1.30	0.80	?
4	2483	5.80 + a	5.50	0.25					
5	2490	5.22	4.90 + a	0.20					
6	11005	1.85	1.80 + a	0.33	P1	0.46	0.33		
					P2	0.33	0.24		
7	1530	2.70	2.30	0.31	P1	0.35	0.24	0.16	
					P2	0.44	0.40	0.16	
					P3	0.52	0.41	0.20	
8	872	3.30	2.20	0.20	P1	0.44	0.36	0.32	
					P2	0.23	0.20	0.10	
					P3	0.38	0.30	0.30	
					P4	0.21	0.15	0.17	
9	6397	3.70 + a	3.45	-					
10	6818	4.70	3.90 + a	0.45					
11	6821	4.80	2.60	0.50	P1	0.40	0.28	0.16	
					P2	0.48	0.40	0.12	
					P3	0.54	0.20	0.19	
					P4	0.27	0.23	0.13	
					P5	0.34	0.33	0.17	
					P6	0.36	0.34	0.05	
12	8033	2.20	1.90	0.20	P1	0.34	0.25 + a	0.47	
					P2	0.23 + a	0.20 + a	0.45	
					P3	0.30 + a	0.20 + a	0.23	
					P4	0.24	0.19	0.11	
					P5	0.21 + a	0.19 + a	0.30	
					P6	0.24	0.18	0.35	
13	5627	3.60	2.60	0.41					
14	5356	3.90	3.50	0.30					
15	5465	2.56	2.50	0.38					
16	5326	4.60	3.40	0.25	P1	0.30	0.26	0.38	
					P2	0.29	0.25	0.28	
17	6822	3.90	3.80	-					
18	5695	3.10	2.55	0.30	P1	0.78	0.45	0.24	
19	5467	4.20 + a	3.70 + a	0.52					

土坑				
番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	11741	1.47	1.00 + a	0.15
2	9536	1.87	1.34	0.20
3	8666	2.10	1.00 + a	0.31
4	11719	0.85	0.80	0.30
5	11358	0.88	0.85	0.26
6	11448	1.26	0.30	0.17
7	11417	1.30	0.87	0.14
8	11610	1.42	1.27	0.25
9	11450	2.00	1.90	-
10	11555	0.90	0.73	0.12
11	11562	2.24	2.13	0.23
12	11566	0.93	0.57	0.20
13	9406	0.74	0.49	0.28
14	2888	1.17	0.95	0.50
15	2936	2.65	1.90	0.30
16	7390	1.25	0.70 + a	0.58
17	7420	1.95	1.80	0.12
18	7370	3.15	1.15	0.35
19	7417	1.23	1.08	0.13
20	7382	1.05	0.84	0.11
21	7405	0.88	0.68	0.60
22	1943	2.60	1.96	0.62
23	6503	0.80	0.50	0.09
24	10372	4.00	1.50	0.48
25	7436	1.60	0.87	0.56
26	7380	2.37	1.25	0.19
27	10788	2.03	1.20	0.63
28	8452	1.40	0.60	0.20
29	5278	1.65	1.35	0.07
30	5626	1.60	1.42	0.28
31	5514	1.85	1.75	6.70
32	409	1.05	0.77	0.21
33	1414	1.30	0.57	0.47
34	1374	1.25	1.13	0.68
35	1130	1.35	1.20	0.78
36	6830	1.75	0.92	0.10

ピット				
番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	11518	0.55	0.45	0.17
2	11341	0.33	0.28	0.14
3	11405	0.45	0.27	0.21
4	7278	0.27	0.26	0.70
5	9777	0.47	0.35	0.21
6	2974	0.26	0.25	0.37
7	6476	0.54	0.35	0.41
8	10906	0.47	0.20 + a	0.34
9	10430	0.47	0.42	0.36
10	10062	0.34	0.22	0.17
11	1865	0.40	0.36	0.09
12	7218	0.85	0.61	0.28
13	8013	0.40 + a	0.37	0.25

溝(501.521)		
断面	長さ・幅(m)	深さ(cm)
A-A'間	21.00	48
B-B'間	7.50	22
①	1.20	20
②	3.05	30
③	2.70	27

(3) 遺構

竪穴住居跡

竪穴住居跡1号(第29図)

B-36, IV層上面で検出された。長軸約4.4m×短軸4.4m, 深さ27cmを測る。遺構の北東側と北西側の一部は削平を受けており攪乱部分がみられるため, 詳細なプランは不明である。住居に伴うと考えられるピットは12基検出された。遺物は総点数141点出土しているが, そのほとんどが小片で埋土a(暗褐色砂質土)中に含まれていた。そのうち2点を図化した。

122はくノ字に外反する比較的大型の壺の口縁部で, 器台として転用したものと思われる。口径は20cmほどとなる。下位に1条の沈線が残ることから, 頸部との破断は粘土紐の接合位置で行ったことが確認でき, 意図的な行為と解される。きめの細かい精選胎土を使用し, 両面とも刷毛目主体で調整する。123は口径8.6cm, 高さ5.5cmのはほぼ完形の埴で, 赤色粒を含む精選胎土を使用し, 器壁も薄く仕上げる。口縁部に沿って, 2列の鋸歯文が描かれる。

竪穴住居跡2号(第30図)

B-34区, IIIb層上面で検出された。南側の隅は竪穴状遺構1号を切り, 北東側は土坑6号に切られる。プランはほぼ隅丸長方形で長軸2.7m×短軸2.5m, 深さ34cmを測る。その北側には長軸1.6m×短軸1.3m, 深さ約14cmを測る張り出部と思われる小部屋を有する。住居に伴うと考えられるピットは3基検出された。埋土はIII層で, 埋土中より314点の遺物が出土した。そのうち3点を図化した。

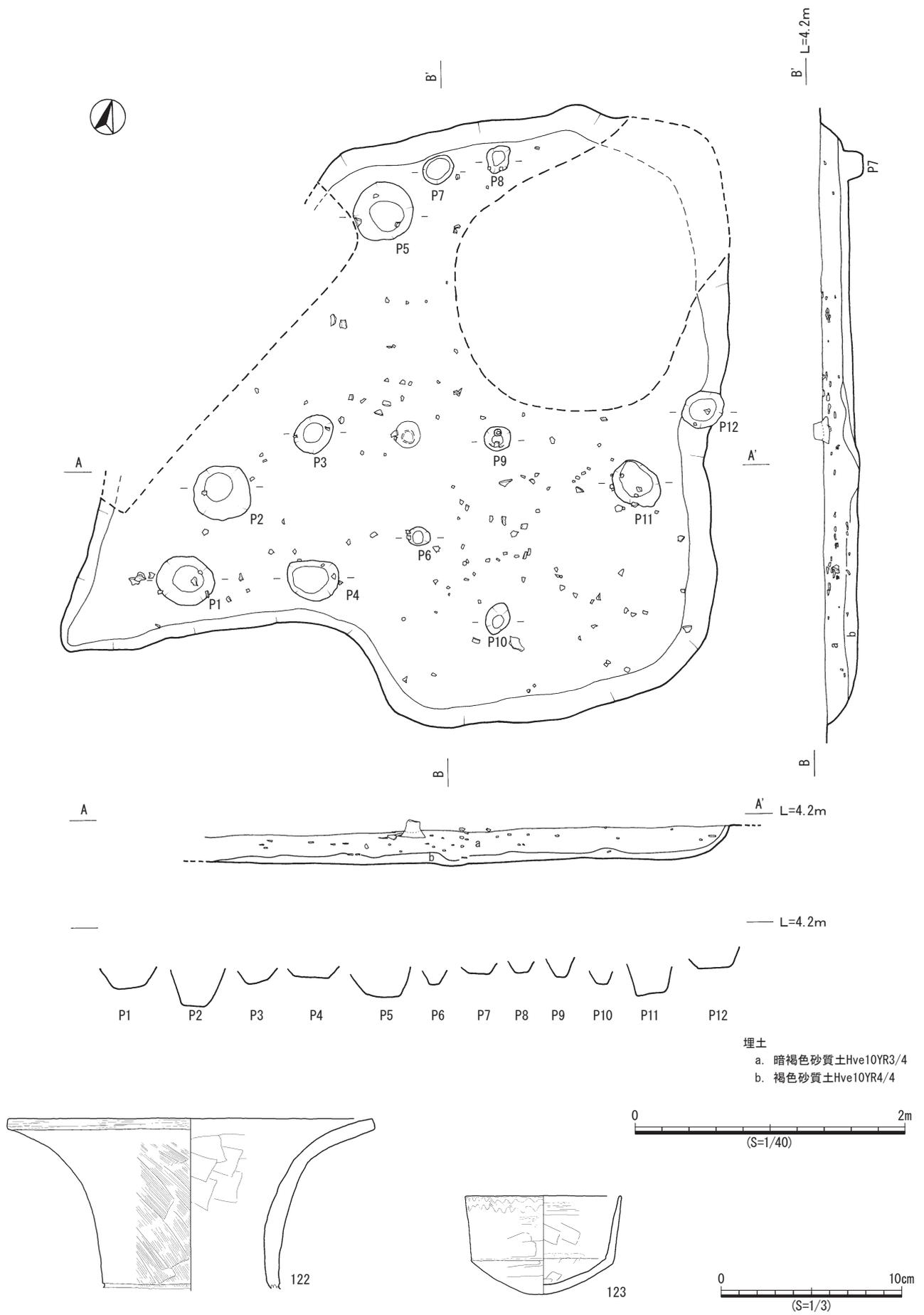
124は口径15cm, 高さ7.9cmの小型丸底壺で, 口縁部は大きく開きながら直行し, 胴部は碗状をなす。なお, 口縁部とは刷毛目のカキアゲで区分するが, 器壁は厚く, 接地面のヘラケズリも不成形で, 総じて粗雑なつくりが見られるが, 精選されたきめの細かい胎土を用いる。淡橙5YRの器肌をなす。125は円鈕の小型仿製鏡である。住居跡の北東側, 壁の立ち上がり付近から出土した。平縁で, 3.5cmほどの径を持つ。126は鉄鏃である。埋土中からの出土で, 茎尻は欠損するが, 鏃身部0.9cmの最小タイプの圭頭鏃である。小型仿製鏡も鉄鏃のどちらも, 住居内から出土した埴と時期差が考えられ, 住居との関連性等の詳細は不明である。

竪穴住居跡3号(第31図)

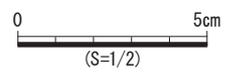
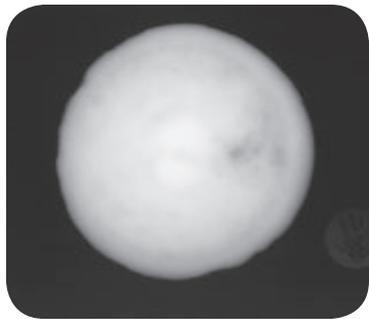
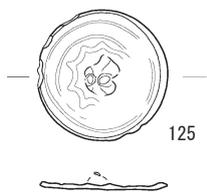
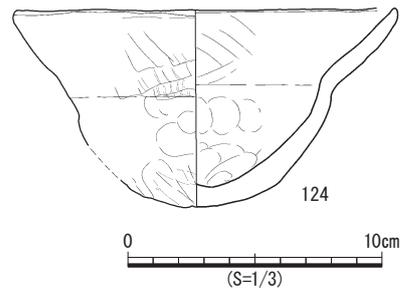
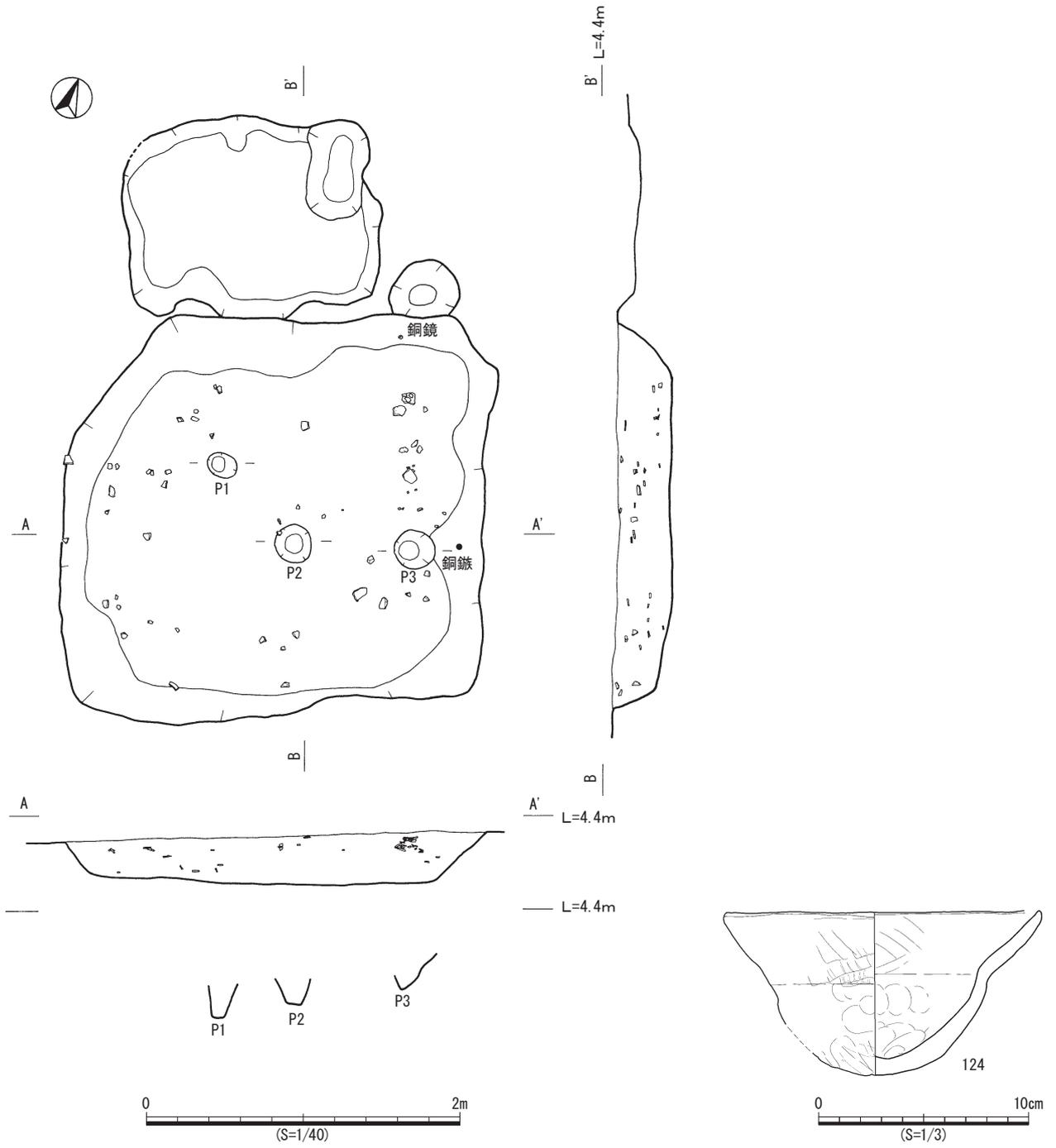
B-33区, IV層上面で検出された。竪穴住居跡2号とは約5mほどと近接しており, 南西側は土坑9号と土器集中遺構7号と接するが, 切り合い関係等詳細は不明である。プランは隅丸方形で, 長軸5.2m×短軸4.35m, 深さ20cmを測る。中心部は一段低くなっており, 直径1.8m, 深さ38cmを測る。住居に伴うと考えられるピットは9基検出された。遺物は約50点出土したが, 小片が多く1点を図化した。

127は復元口径27cmの高杯の坏部で, 坏部途中で屈折し大きく外反する。なお, 脚部は欠損しているが穿孔する事例が多いとされる。外面はヘラケズリが先行し, 内面は丁寧なナデで仕上げている。白色粒子等を多量に含む砂質胎土を使用し, 両面に黒斑が残る。

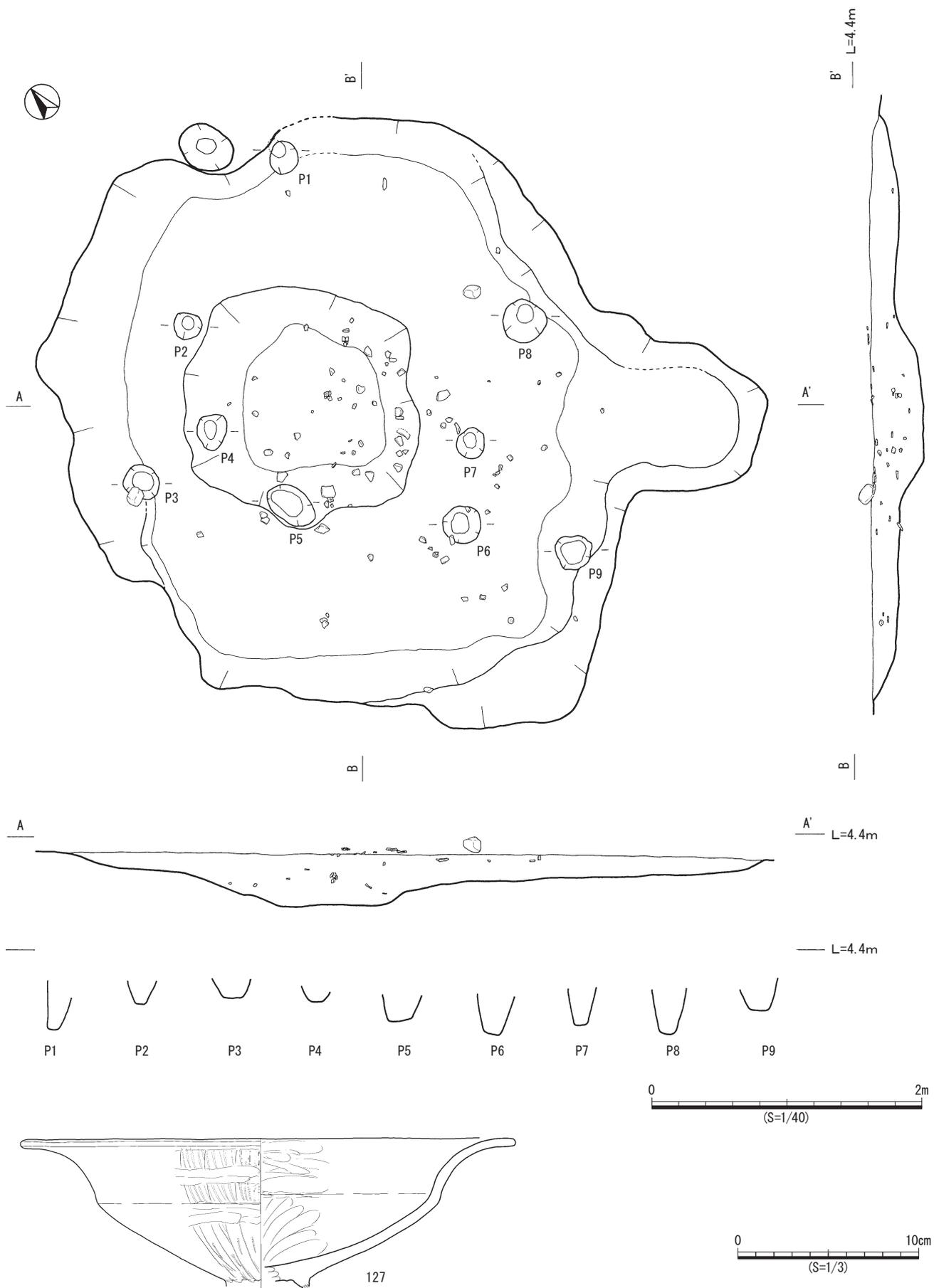




第29図 竪穴住居跡 1号および出土遺物



第30図 竪穴住居跡2号および出土遺物



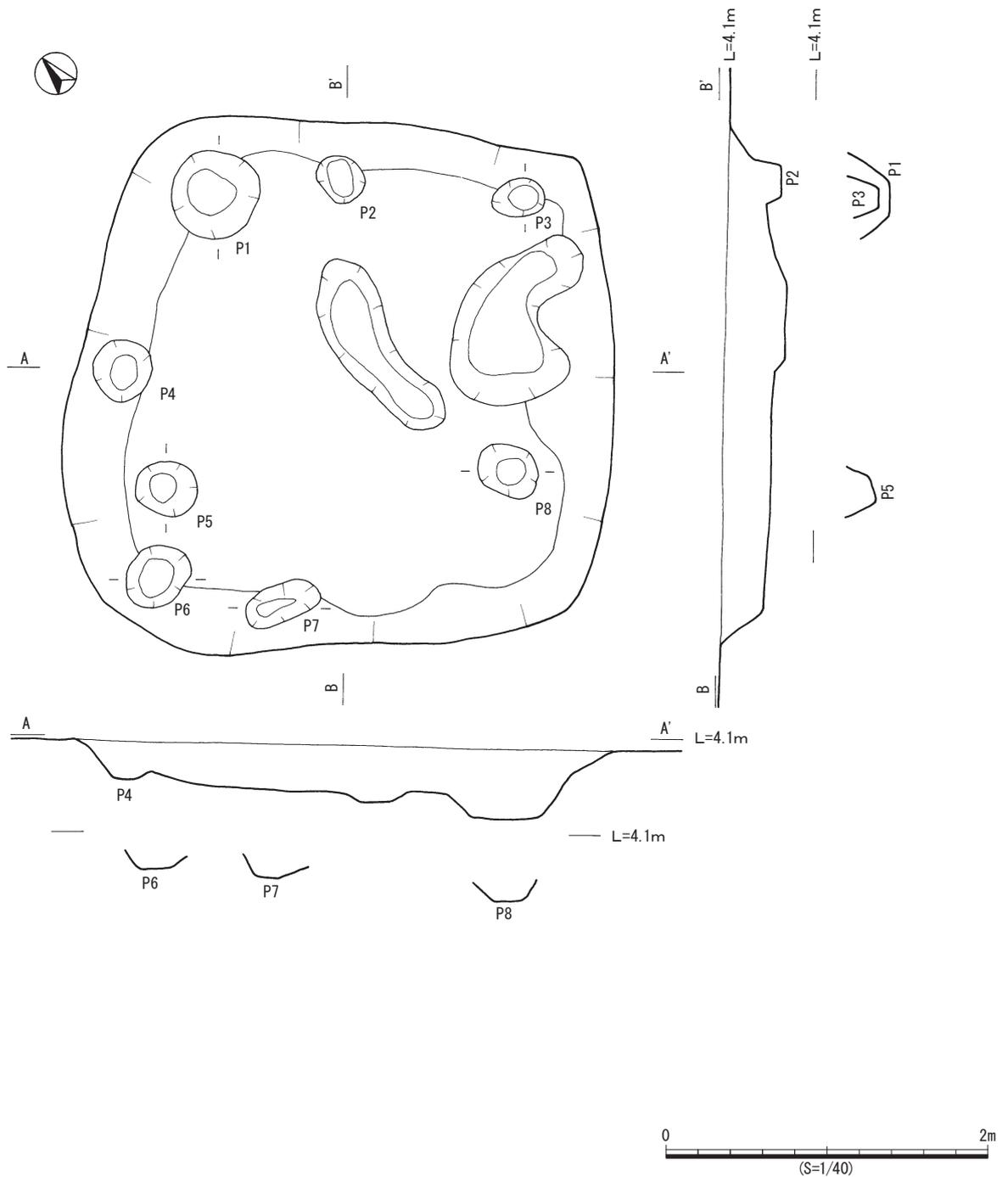
第31図 竪穴住居跡3号および出土遺物

竪穴住居跡4号 (第32図)

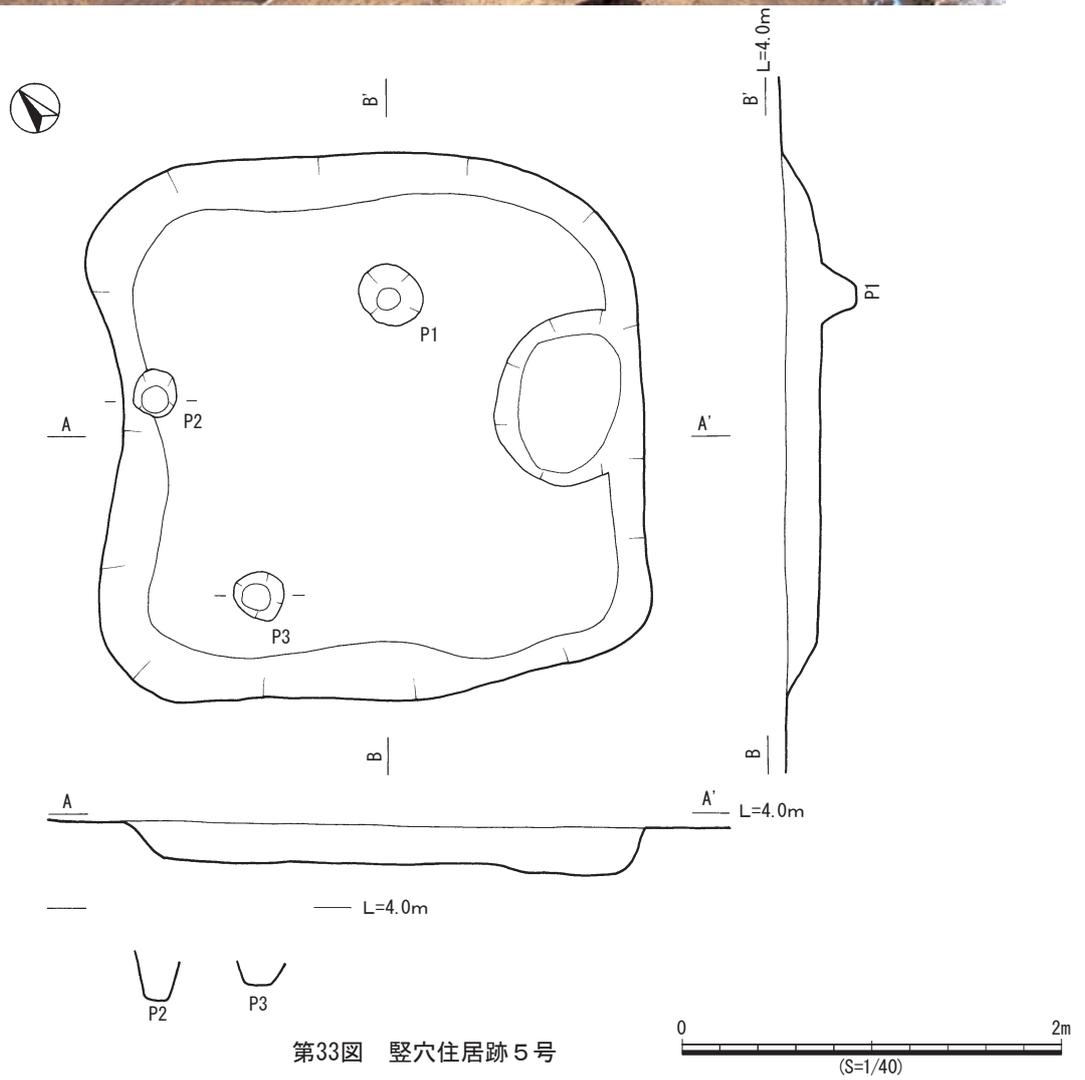
A-31区, IV層上面で検出された。5号竪穴住居まで約8mほどと隣接し, 軸方向も同じ方向を向く。プランは一辺が3.3mの隅丸方形を呈し, 深さは30cmを測る。内面には8基のピットと土坑状の掘り込みを2基有する。出土遺物はなかったが, 検出面や埋土の状況から古墳時代の竪穴住居跡とした。

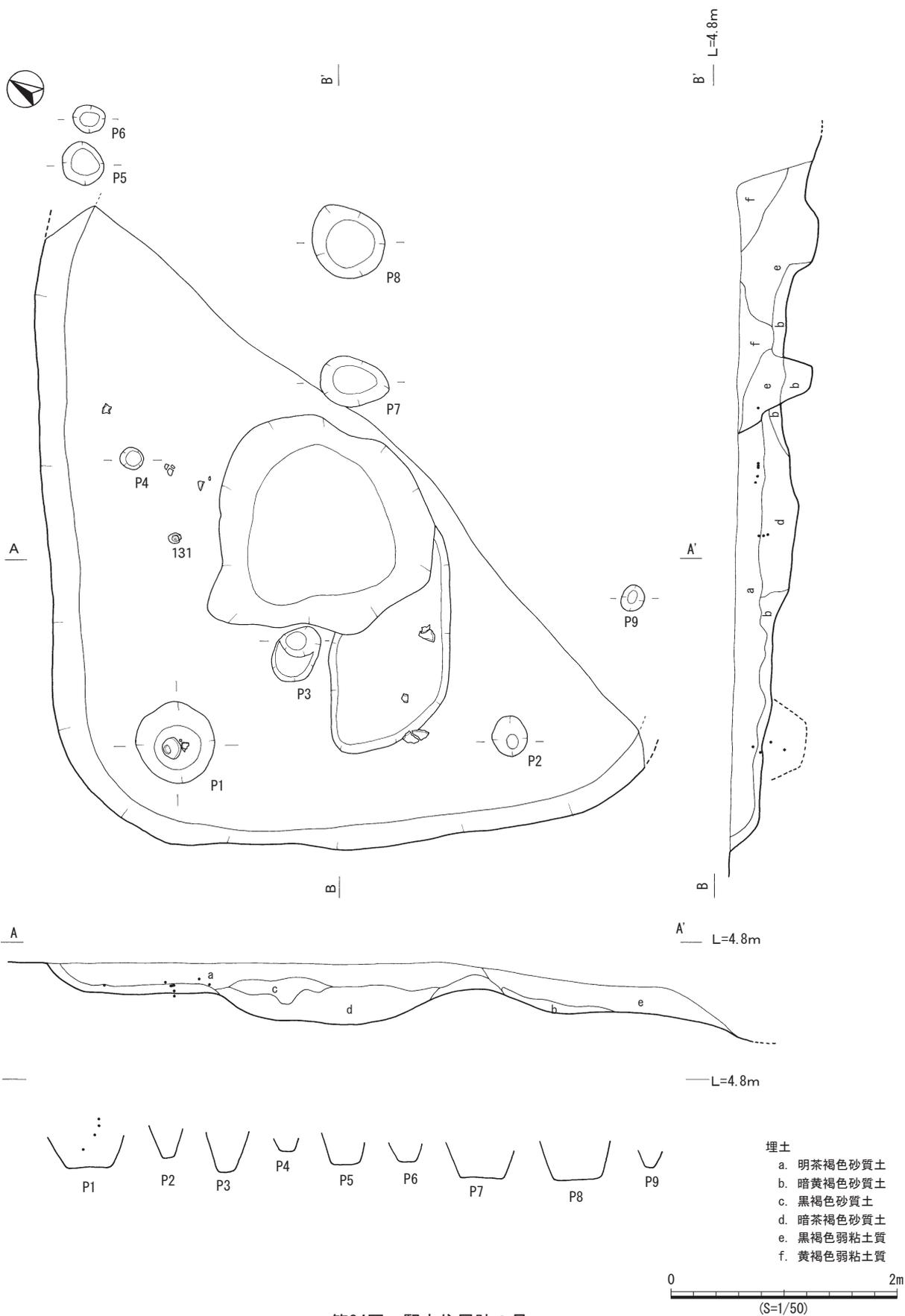
竪穴住居跡5号 (第33図)

B-30区, IV層上面で検出された。4号竪穴住居まで約8mほどと隣接し, 軸方向も同じ方向を向く。プランは長軸2.9m×短軸2.8mの隅丸方形を呈し, 深さ21cmを測る。住居に伴うと考えられるピットは3基検出され, 南東側の隅には浅い土坑状の落ち込みを有する。遺物は小片が多数出土したが, 図化はできなかった。検出面や埋土の状況から古墳時代の竪穴住居跡とした。

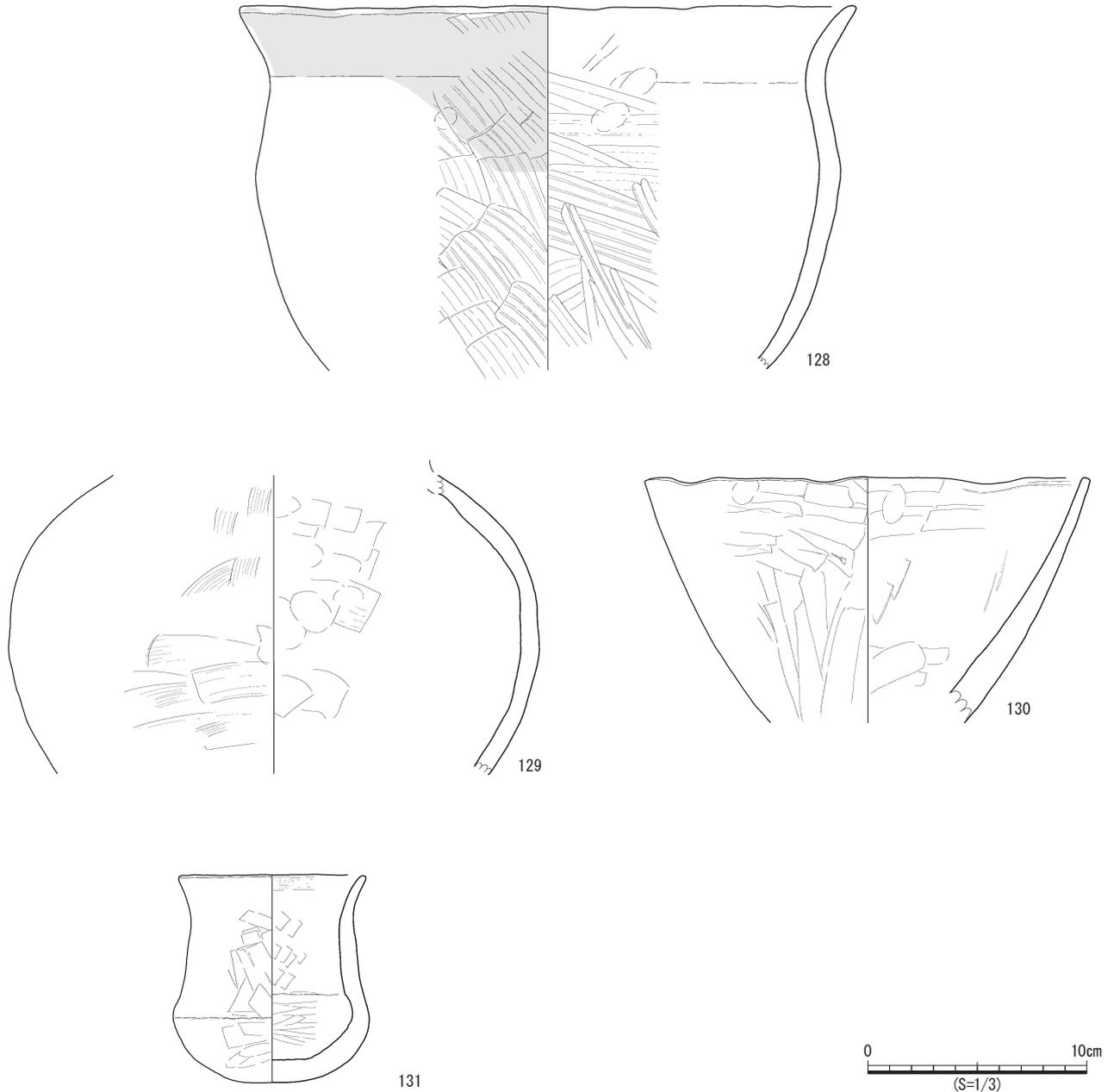


第32図 竪穴住居跡4号





第34图 竖穴住居跡6号

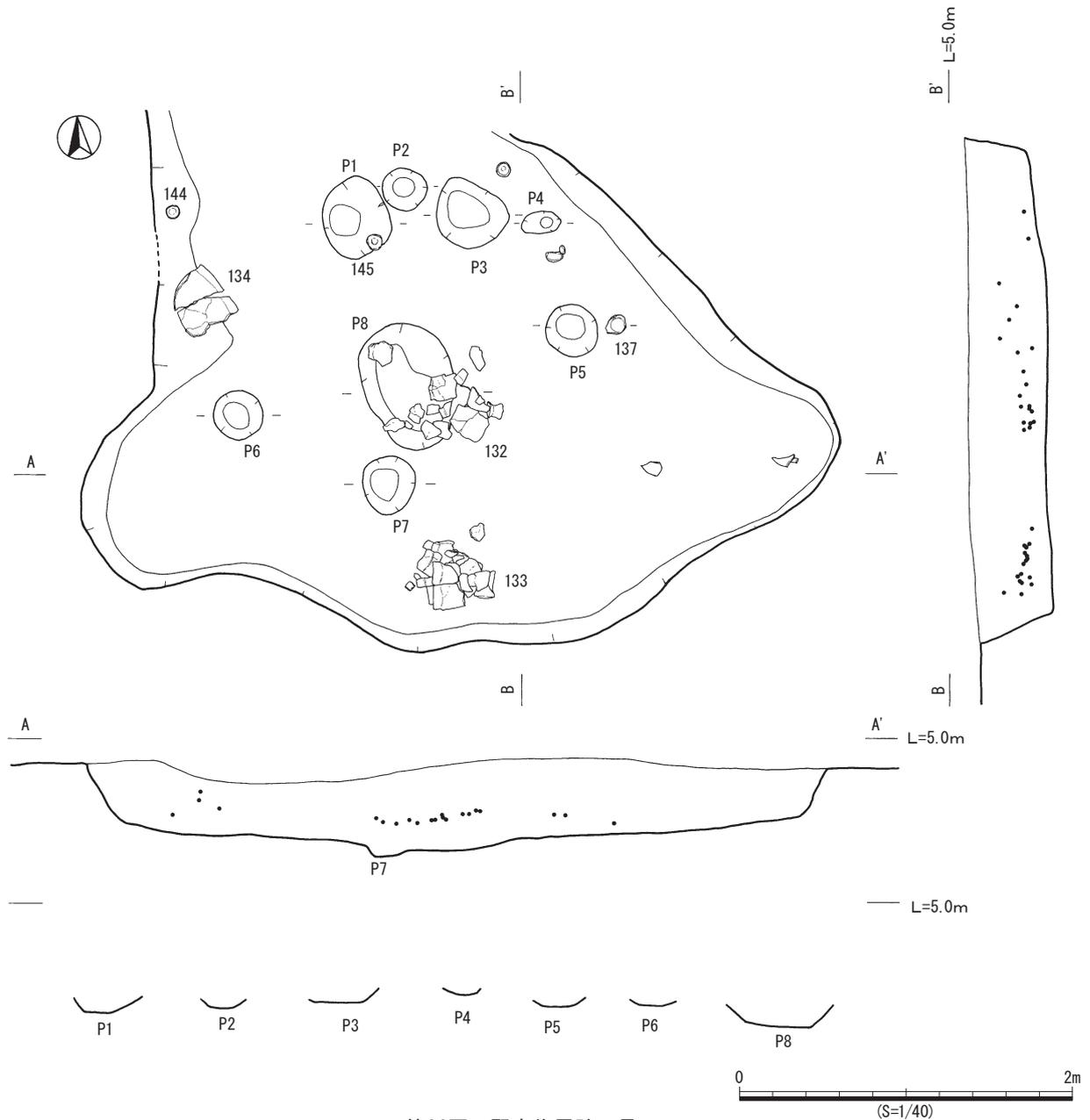


第35図 竪穴住居跡6号内出土遺物

竪穴住居跡6号（第34・35図）

C-30区、IV層上面で検出された。遺構の東側は、近世の自然流路により削平を受けている。そのため、全体的なプランはつかめないが、残存部より想定すると長軸約5.3m×短軸約5.1m、深さ55cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。住居に伴うピットは9基検出され、そのうちピット5～ピット9は近世の自然流路により削平を受けているが、住居に伴うものと思われる。また、中央部には土坑が2基切り合った状態で検出された。遺物は小片が1095点出土しており、そのうち図化できたものは4点である。

128は復元口径28.1cmの厚手の甕で、口縁部との境界付近は刷毛目後ナデで仕上げる。器壁は厚く、重量のある仕上がりで、緩やかな波状口縁の可能性はある。129は球形状の胴部の壺で、器面は丁寧にナデるが、器壁は厚く重量がある。130は口径19.8cmの鉢で、器壁は厚い。内外とも基本は工具ナデで、内面がより丁寧である。131は復元口径8.4cm、高さ9.6cmの小型丸底壺で、口縁部は長く直行し、胴部はいわゆる偏球形で、底部は平底に近い。ヘラケズリや工具ナデを行っているが、器壁は厚く、重量のある仕上がりである。両面ともにぶい橙10YRの器肌をなす。



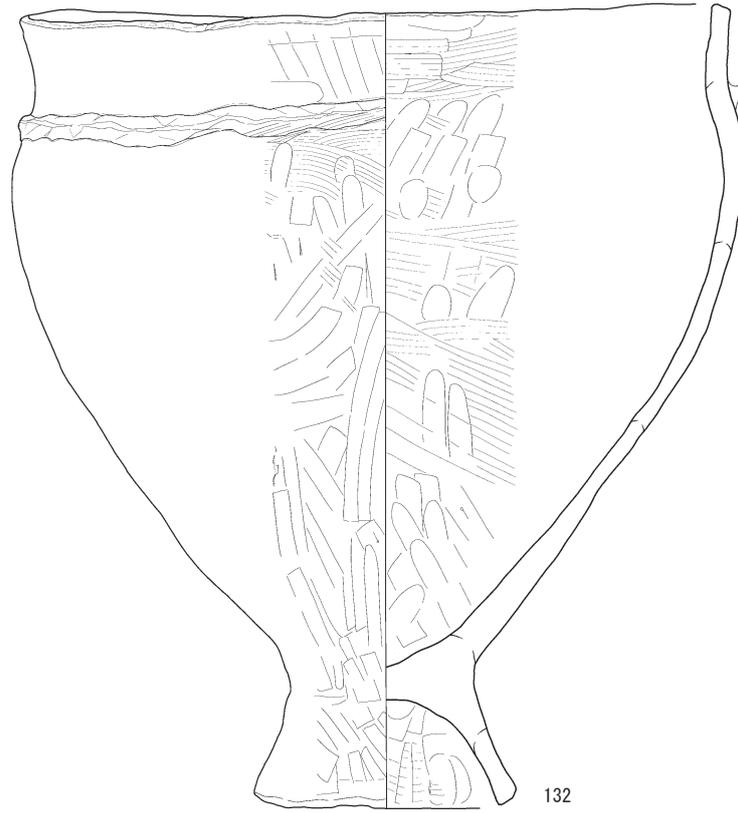
第36図 竪穴住居跡7号

竪穴住居跡7号 (第36～39図)

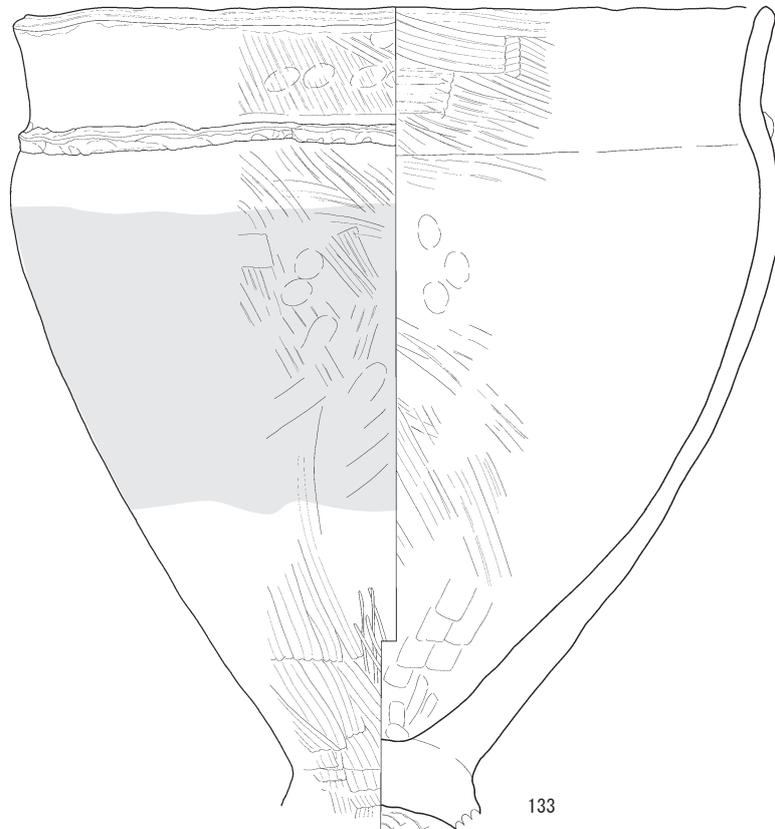
C-26区, IV層上面で検出され, 竪穴住居8号に近接する。プランは歪な形状を呈し, 長軸4.5m×短軸約3.2m, 深さ53cmを測る。遺構の北側は前年度の調査区にあたり, その年度には遺構が確認されていないため, 遺構の詳細な形状等はつかめなかった。住居に伴うと考えられるピットは8基検出された。遺物は内面を下に伏せた状態で重なって出土した甕やほぼ完形の埴など約1816点出土した。そのうち, 15点を図化した。

132～135は甕である。132は口径27.1cm, 高さ32cm, 底径9.1cmのほぼ完形のもので, 器の最大部は胴部であり, 口縁部は若干開きながら立ち上がる。脚部端部は平坦で, 内面天井部は丸い。口縁部は縦方向の刷毛目を

基調とし, その後, 横にナデて仕上げる。胎土粒子は粗く, 器壁の厚い重量のある仕上がりである。133は口径27.5～30cmと歪みをなし, 脚部は破損するが, 32cmほどの高さがある。口縁部は緩やかな波状で, 口縁部と胴部の境に無刻突帯文を持ち, 胴部が口縁部より若干張り出す。内外面とも刷毛目後, 工具ナデや指頭痕で調整される。胴部を中心にベルト状に煤状炭化物の付着が見られ, 外面に2か所, 内面に上位に1か所の黒斑も見られる。器壁は厚く, 特に重量のある甕で, 浅黄橙7.5YRの器肌である。134は脚部を欠損する口径36cmの甕で, 口縁部の立ち上がり, 胴部との境界は刷毛目のカキアゲで段が形成される。両面とも刷毛目調整を主とし, 胴上部付近では×状に重なる調整痕も残される。胴中央部に煤



132



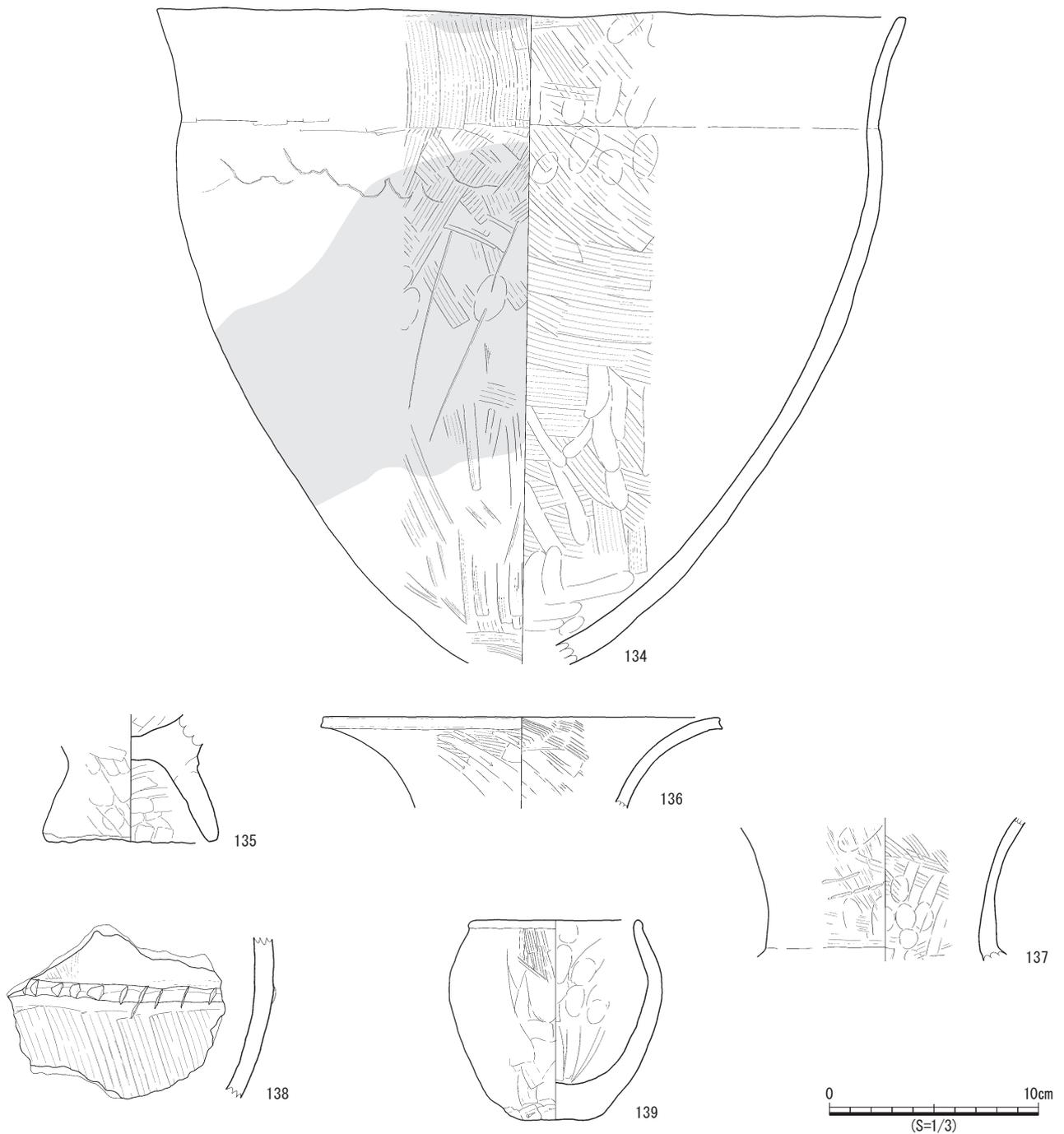
133



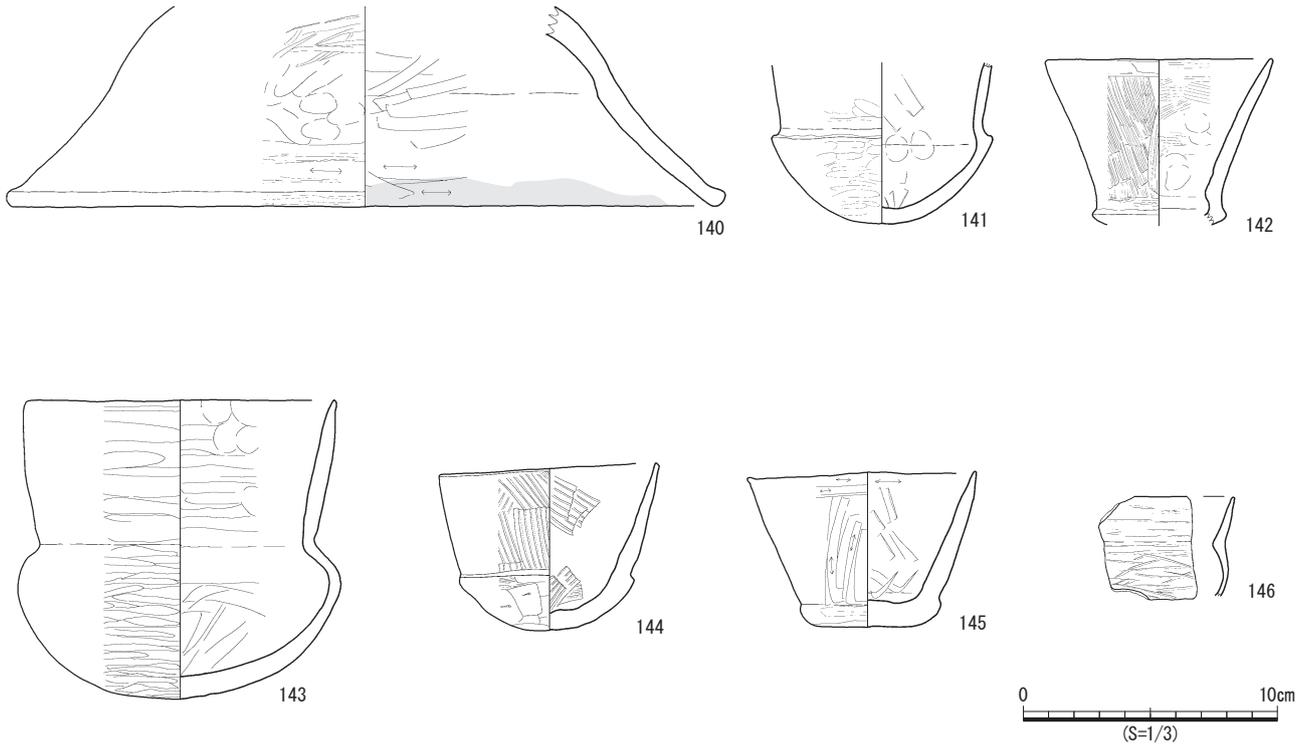
第37図 竖穴住居跡7号内出土遺物1

状炭化物が付着し、赤色粒を含む胎土はにぶい橙5YRを呈す。135は内面に輪積み痕が残る資料で、天井部は平坦面をなす。136～139は壺である。136は口径19cmの壺で、口縁部上方がラップ状に弧を描く様に外反するタイプで、立ち上がりは直に近く、外反部は長くなると思われる。刷毛目後、部分的にナデで仕上げている。きめの細かい精選胎土を使用し、橙5YRの器肌で器壁は薄い。137は上部を欠損する壺の口縁部である。頸部との破断が粘土紐の接合面で行われており、器台に転用されたものと思われる。きめの細かい精選胎土を使用し、器

面は刷毛目、内面はナデで調整する。色調は橙5YRである。138は壺の胴部片である。139は復元口径8.4cm、高さ9.7cmの平底壺で、いわゆる蛸壺状をなす。口縁部は帯状に肥厚し、器壁は底部に近づくにつれ厚くなり、安定感と重量が増す。140は復元口径28cmの蓋で、ドーム状の身部と、下方に緩やかに外反する口縁部で構成する。内面口縁部に煤状炭化物が付着し、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。141～146は埴である。141は直行する口縁で、胴部は上位で屈折して偏球状をなすもので、口縁部と胴部比が近似するタイ



第38図 竪穴住居跡7号内出土遺物2



第39図 竪穴住居跡7号内出土遺物3

ブと見られる。器壁は薄く、砂質の強い胎土を使用し、ヘラミガキにより淡橙5YRと赤く仕上げる。142はラッパ状に大きく開く口縁で、胴部は上位で明瞭に屈折し、そのまま浅い偏球状の胴部を構成する。口径8.9cm、高さ6.3cmが復元され、その間の5cm近くを口縁部で占める。にぶい黄橙10YRと個性的な色調で、硬質な仕上がりをなす。143は口径12.2cm、高さ11.9cmのほぼ完形のもので、大型に区分できる。直行する外開きの口縁部と半球形の胴部で構成し、器面は入念に磨かれる。赤色粒を含む胎土で、底部に黒斑を残し硬質な焼成である。赤色顔料が塗彩された可能性がある。144は口径8.5cm、高さ6.7cmの完形の埴で、直行する外開きの口縁部と半球形の胴部で構成する。白色鈹物を含む胎土で、にぶい橙5YRの器肌は部分的に黒斑を残し、硬質な焼成をなす。145は口径9cm、高さ6.2cmの完形のもので、直行する外開きの口縁部と平底で構成する。胎土は精選されたきめの細かいもので、灰白10YRと白く発色し、底部から口縁部の1/3ほどが赤変している。146は胴部が丸く膨らむタイプで、きめの細かい精選胎土を使用し、橙2.5YRの器肌をなし、器壁は薄い。

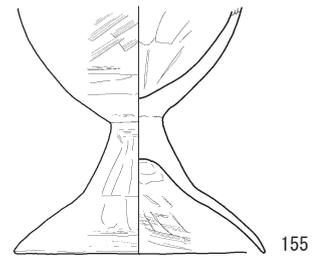
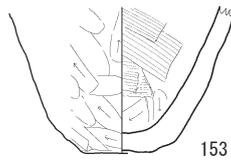
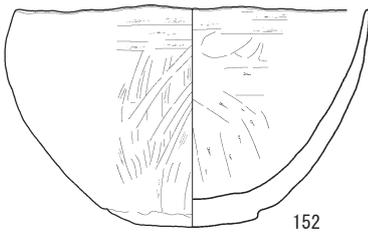
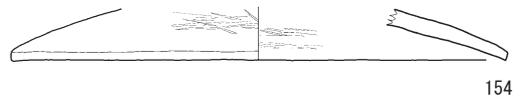
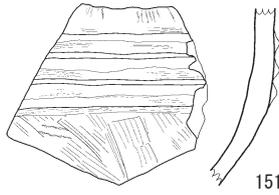
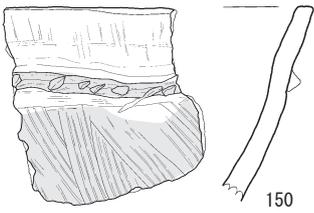
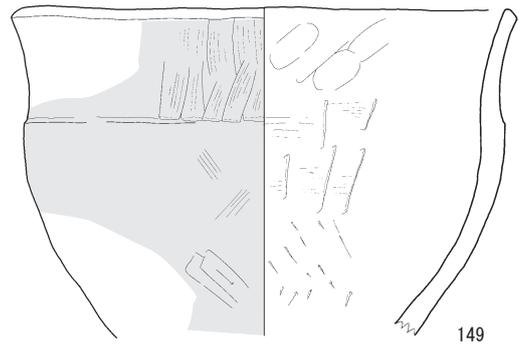
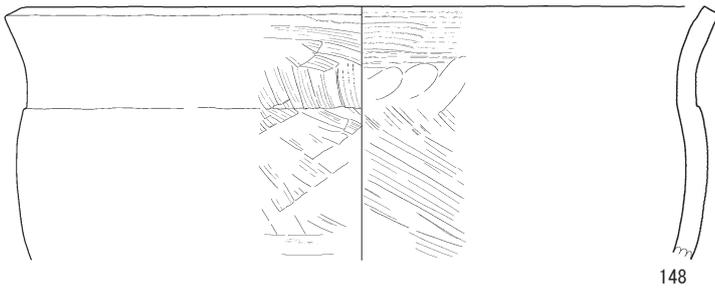
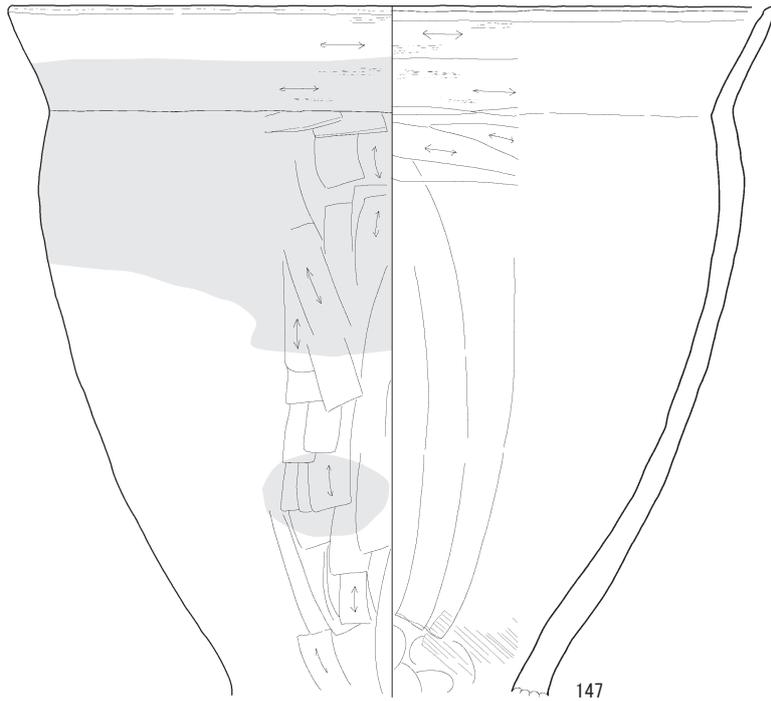
竪穴住居跡8号 (第40～42図)

C-25・26区、IV層上面で検出され、西側は竪穴住居7号と近接する。プランは長軸約7.1m×短軸約6mの不定形な形状を呈し、深さは約63cmを測る。遺構の北側は前年度の調査区にあたり、その年度には遺構が確認されていないため、遺構の詳細な形状等はつかめなかった。内部には土坑状の落込みが2か所みられる。住居に伴うと考えられるピットは12基検出された。遺物は1033点出土し、そのうち15点を図化した。

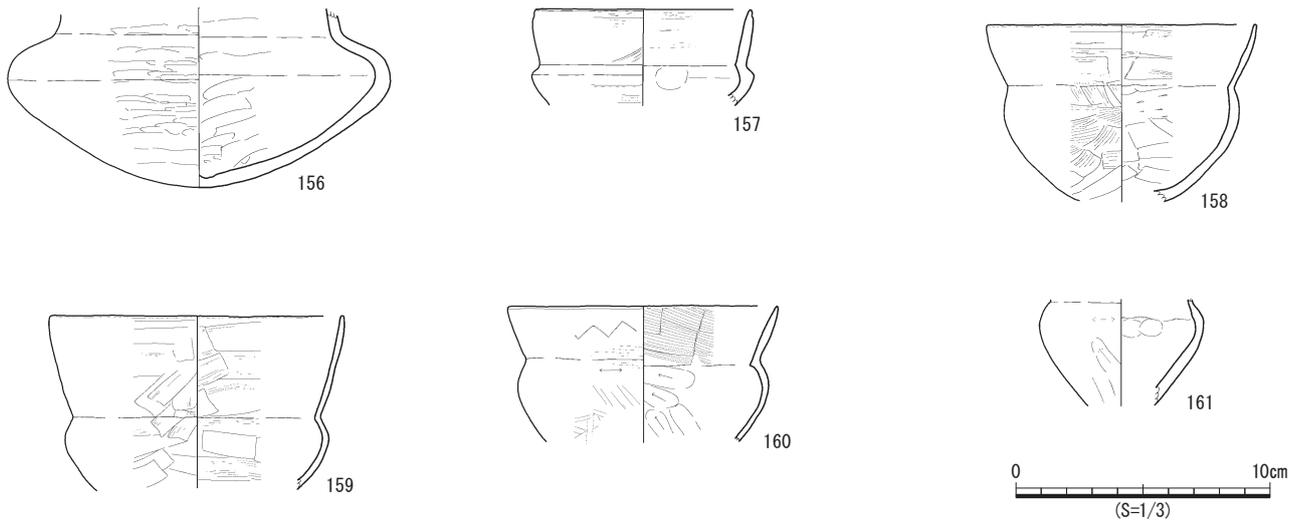
147～150は甕である。147は復元口径30cmほどで、口縁部はくノ字に外反する。なお、口縁部と胴部の境界に残る横方向の痕跡から、刷毛目のカキアゲが先行したことが読み取れる。内外ともににぶい橙10YRで、口縁部から胴中央部に煤状炭化物が付着する。器面調整は丁寧な工具ナデで、火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、キラキラな器面をなす。148は復元口径28.2cmほどで、刷毛目のカキアゲで胴部との境が造られる。砂粒の多い胎土で、特に、赤色粒の混入が目立つ。149は刷毛目のカキアゲで胴部との間に段を設けた後、再度ナデで仕上げたもので、19cmの口径を復元している。リング状の煤状炭化物の付着が見られる。150は傾きが不明であるが、頸部に刻目突帯を持つ甕で、極めて堅牢な焼成が見られる。特に内面では、胎土に含まれる大粒の粒子が発泡する。151は壺の胴部で突帯文が巡る。152は口径14cm、高さ8.6cmの鉢で、5cmほどの平坦な接地面を持つ。口縁部が緩やかに内弯気味に立ち上がる鉢で、器



第40图 竖穴住居跡 8号



第41図 竪穴住居跡8号内出土遺物1



第42図 竪穴住居跡8号内出土遺物2

壁が厚く、重量があり、接地面を起点にヘラケズリ痕跡が明瞭に残される。底部周辺に黒斑が円形に広がる。器肌はにぶい橙7.5YRを呈す。153は平底の小型鉢で、砂質の強い胎土を使用し、重量のある仕上がりをなす。なお、黒色と赤色の2つの破片に分割される。154は高坏の脚部と判断し、19.5cmほどの底径を復元した。火山灰性のガラス質粒子を含む、超微細で精選された胎土を使用し、両面とも丁寧に磨かれ、光沢のある橙5YRの器面を呈している。155は小型器台として取り扱い、中村分類の小型器台A型式に区分する。精選されたきめの細かい胎土を使用し、器壁は薄い。丁寧な工具ナデやミガキ状の仕上げが見られ、器肌は浅黄橙7.5YRをなす。搬入品の可能性が高い。156～161は埴である。156は内側に直線的に立ち上がる口縁部と、偏球状の胴部で構成するもので、精選されたきめの細かい胎土を使用している。器壁は薄く、丁寧な工具ナデやミガキ状の仕上げが見られることから搬入品の可能性が高い。器肌はにぶい橙5YRを呈する。157は復元口径8.6cmの埴で、短い口縁部に偏球形の胴部を持つ（1型式）。口唇部は尖り、工具ナデに指ナデを重ねている。胎土は、精選したきめの細かいものを使用する。158は復元口径10.6cmで、口縁部は外に開き、丸く膨らむ胴部からそのまま丸底に至る（2型式）。器面では刷毛目にナデを重ね、精選したきめの細かい胎土を使用する。器肌はにぶい橙7.5YRをなす。159は復元口径11.6cmの埴で、口縁部は外に開き、丸く膨らむ胴部からそのまま丸底に至る特徴は、158と同じである。器面は丁寧にナデ、精選したきめの細かい胎土を使用し、器壁は特に薄い。器肌は赤みが強く橙2.5YRを呈する。160は復元口径10.5cmの胴部の丸い埴で、口縁部の一部に細沈線による鋸歯文が描かれる。外面は工具ナデ後指ナデ、内面は口縁部に刷毛目が残される。精選された胎土で、器壁は薄く、浅黄橙7.5YRと白い。

161は6.5cmの丸い胴部で、口縁部は短く外に開く形状が想定される。精選された胎土で、器壁は薄く、浅黄橙7.5YRと白い。

竪穴状遺構

竪穴状遺構1号（第43図）

B-34区、IV層上面で検出された。北側の隅を竪穴住居2号により切られる。プランは長軸3.6m×短軸2.7mの隅丸長形状で、深さは33cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは3基検出された。遺物は小片が出土し、図化するには至らなかった。竪穴住居2号との切り合い関係から、2号竪穴住居より古い時期の遺構と考えられる。竪穴住居の可能性も考えられる遺構である。

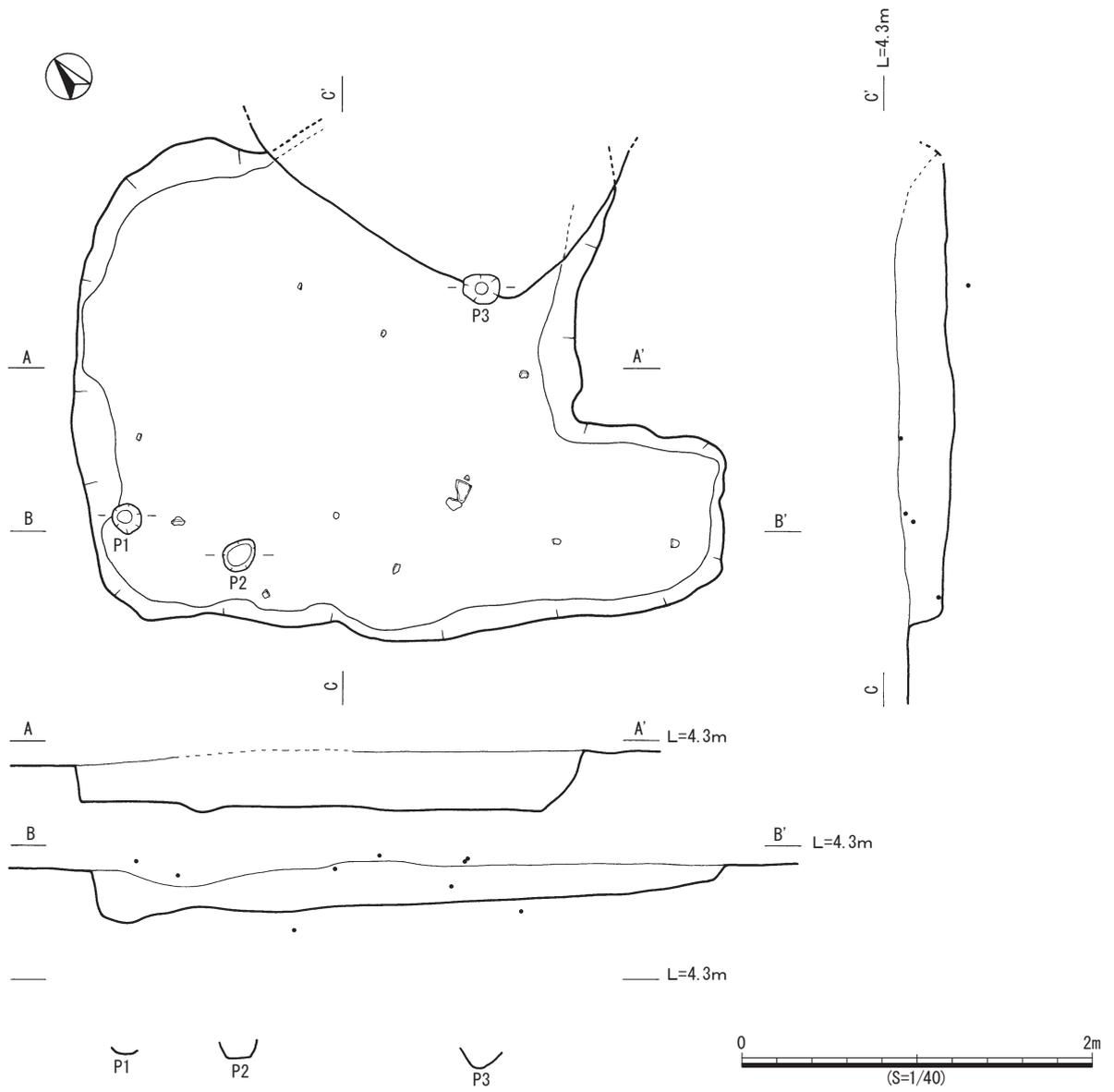
竪穴状遺構2号（第44図）

C・D-32区、IV層上面で検出された。プランは長軸2.9m×短軸2.4mの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。遺物は158点出土したが、そのほとんどが小片で、図化できたものは2点である。

162は埴である。胴部の最大径が17cmほどで、口縁部は直行し、胴部は燕形を呈す。外面はヘラ状工具によるミガキ、内面は工具ナデや指ナデで仕上げ、器壁は厚く、重量がある。胎土は、多量の火山灰性のガラス質粒子を含み、外面が赤褐2.5YR、内面が赤灰2.5YRに発色する。163は底径8.2cmの脚部で、内面天井部は平坦に仕上げる。

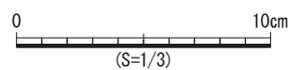
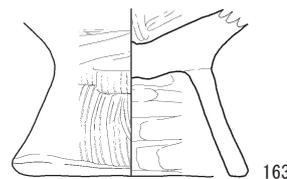
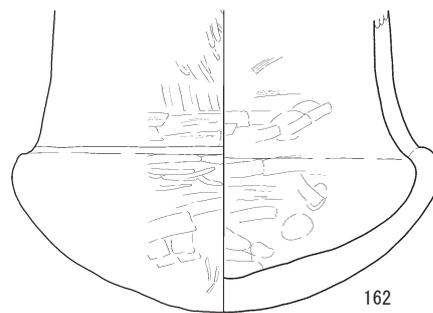
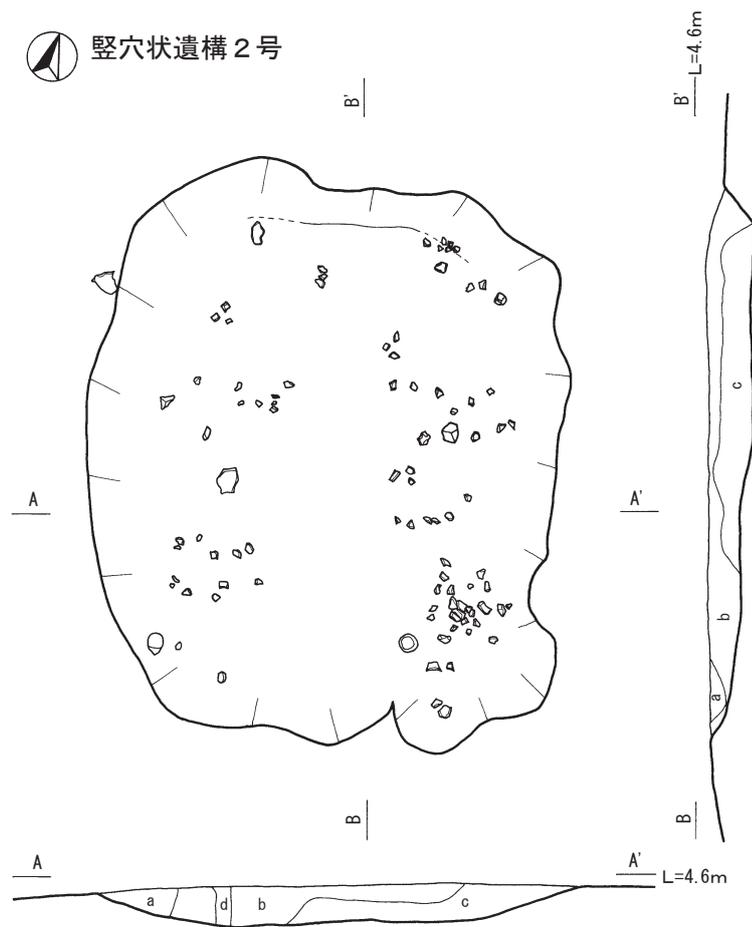
竪穴状遺構3号（第44図）

D-32区、IV層上面で検出された。プランは不定形である。長軸3.45m×短軸2.9mの不定形な形状を呈し、深さは16cmを測る。近隣には土器集中遺構8号が存在する。遺物は168点出土しているが、すべて小片であったため図化できなかった。



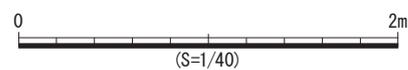
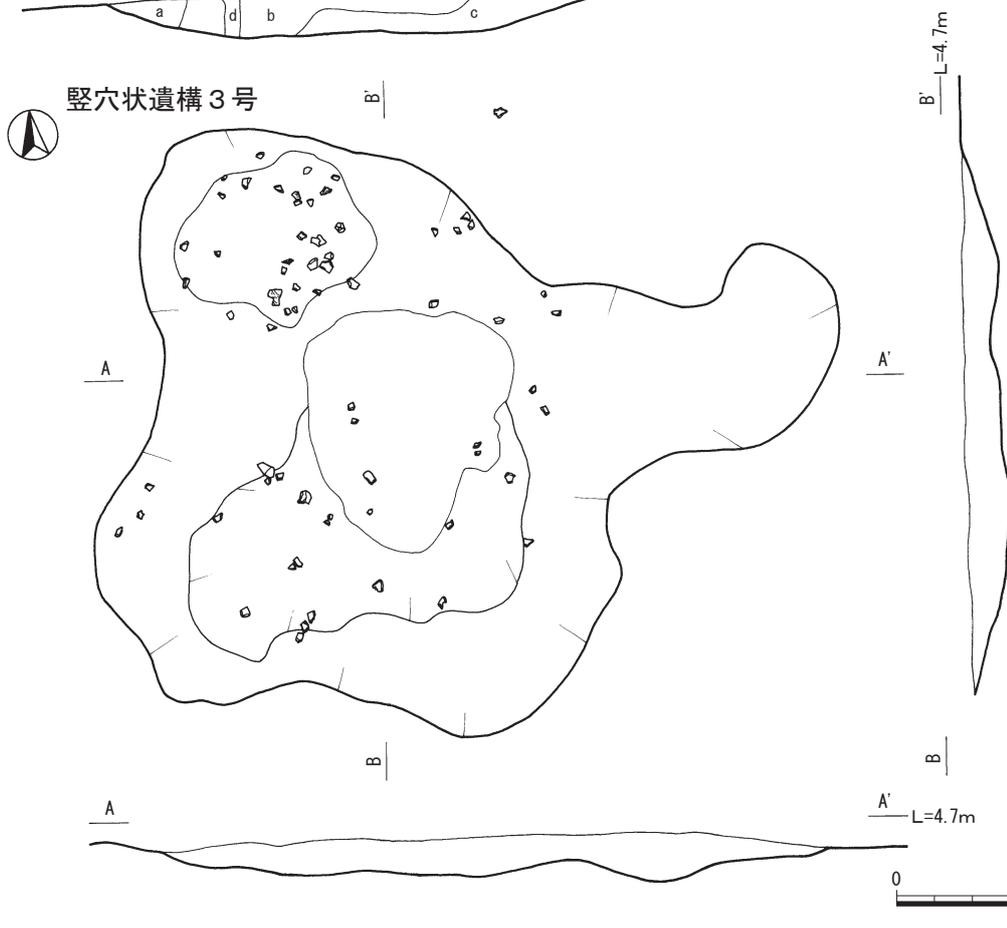
第43図 竖穴状遺構 1号

竖穴状遺構 2号



- 埋土
- a. 黒色砂質土 (N2/)
 - b. 黒褐色砂質土 (10YR3/1)
 - c. 黒色砂質土 (10YR2/)
 - d. 黄橙砂質土 (10YR8/6)

竖穴状遺構 3号



第44図 竖穴状遺構 2・3号および2号内出土遺物

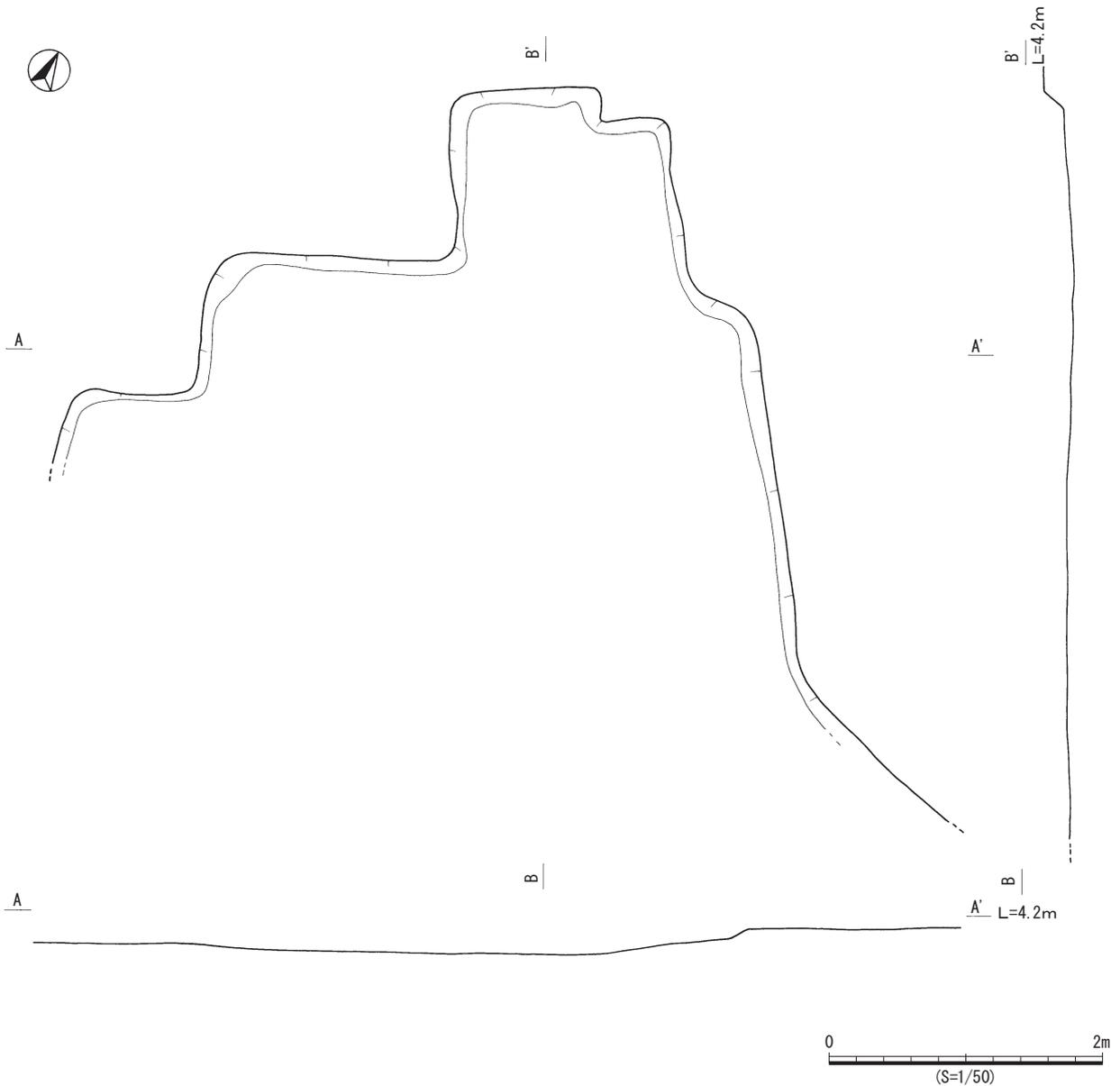
竪穴状遺構 4号 (第45図)

B-27・28区, IV層状面で検出された。東側は5号竪穴状遺構と接するが, 切り合い関係はつかめなかった。南側は調査年度が異なり, 次年度の調査区にあたるが遺構は確認されていない。プランは不定形で, 数基の遺構が切り合っている可能性も考えられる。遺構内にピット等は検出されなかった。遺物は317点出土したが, 小片のため図化できなかった。

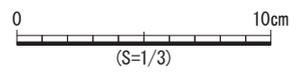
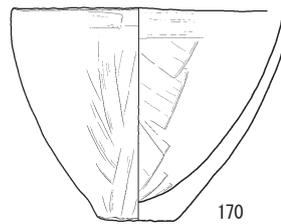
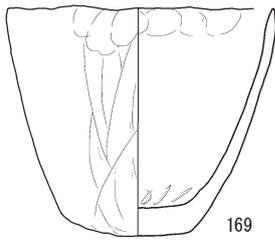
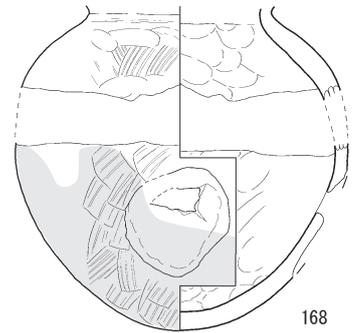
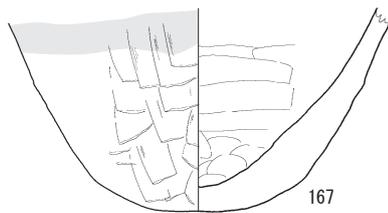
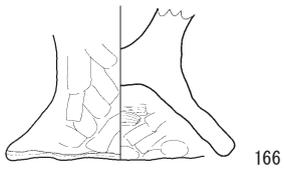
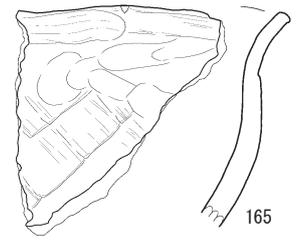
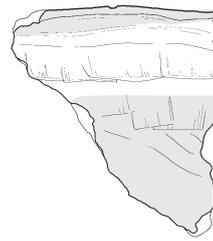
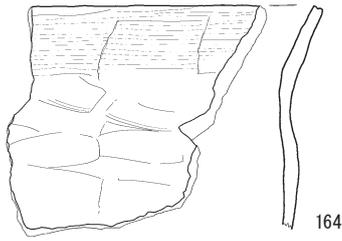
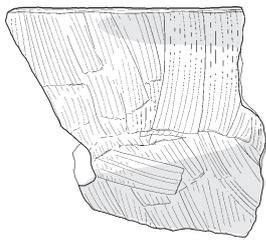
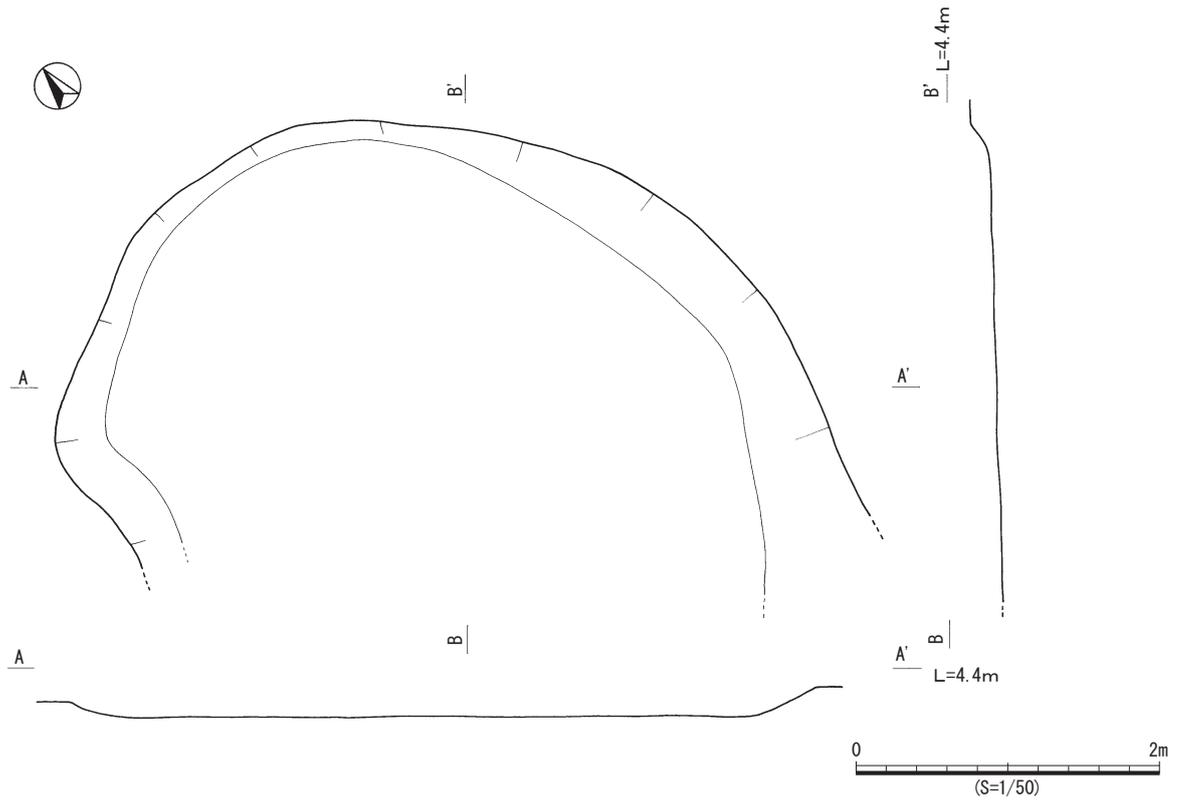
竪穴状遺構 5号 (第46図)

B-27区, IV層上面で検出された。西側は4号竪穴状遺構と接するが, 切り合い関係はつかめなかった。南側は調査年度が異なり, 次年度の調査区にあたるが遺構は確認されていないため, 詳細なプランは不明で, 数基

の遺構が切り合っている可能性も考えられる。遺物は423点出土し, そのうち7点を図化した。前述したように, 本遺構は4号竪穴状遺構と切り合っているため, これら遺物は4号竪穴状遺構のものである可能性も残る。164・165は甕または鉢の口縁部である。164は口縁部に縦方向に施された刷毛目で, 胴部との境界を明確にしている。両面とも浅黄橙7.5YRの器肌で, 器壁は薄く, 軽量の仕上がりを見せる。165は波状で口縁部の短い鉢で, 胴部との境界は刷毛目状工具のカキアゲが明瞭である。煤状炭化物の付着も認められる。166は外反気味に開く小振りの脚部で, 端部は外に丸く収められる。長石等の白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で, 重量のある仕上がりとなる。なお, 内面は煤状炭化物が付着



第45図 竪穴状遺構 4号



第46図 竖穴状遺構5号および出土遺物

する。167は壺の底部で、器壁は厚く重量がある。長石等の白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子を大量に含む。168は小型丸底壺である。図上復元をおこなったもので、口縁部は欠損し、胴部下位には焼成後外面からあげられた穿孔が確認される。外面は細かい刷毛目を重ね、内面はナデで仕上げる。なお、外面の観察からは赤色の化粧土を塗られていた可能性がある。破断面はサンドイッチ状を呈する。169は小型鉢で、口径10.4cm、高さ9.1cmで4.6cmほどの平底をなす。精選されたきめの細かい胎土で、若干軟質な焼成のため器面の風化が著しい。器肌は橙5YRと明るい。170は口径10.6cm、高さ8.5cmほどの完形の鉢で、口唇部は周辺はナデで仕上げる。胎土は赤色粒を含み、やや軟質の焼成である。器肌は淡橙5YRをなす。

竪穴状遺構6号(第47図)

E-28区、IV層上面で検出されたが、詳細な位置情報は不明である。南側はトレンチにより削平されている。プランは残存部分で長軸約1.85m×短軸約1.8mの隅丸方形を呈し、深さは43cmを測る。遺構の中央部には2基のピットが検出された。遺物は214点出土したが、小片で図化できなかつた。

竪穴状遺構7号(第47～50図)

A・B-24区で検出された。プランは長軸2.7m×短軸2.3mの隅丸方形を呈し、深さは約31cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは3基検出された。検出面の層位や埋土の状況、遺物の出土状況などの情報もないため、時期判定が困難であったが、遺物が古墳時代のものであったため、この時期の遺構として認定した。遺物は1035点出土しており、そのうち29点を図化した。

171～177は甕である。171は復元口径28.4cmの甕で、口唇部は狭い平坦面をなし、外面は刷毛目で稜線を形成する。薄手且つ堅牢な焼成で、両面は黄橙10YR、中央は褐灰のサンドイッチ状の破断面である。胴部には煤状炭化物の付着が見られる。胎土では白色鉱物が目立つ。172は復元口径28cmで、2mmほどの白色粒子が大量に含まれる。内面では、口縁部のヘラナデと頸部下位の刷毛目が明確に区分される。173は復元口径31cmの甕の口縁部で、胴部との境界は殆ど見られない。やや軟質な焼成で、2～3mmの白色粒子と大量の火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含む、キラキラとした器面をなしている。174は復元口径30cmの甕の口縁部である。きめの細かい胎土を使用し、器壁は薄く、内外面ともに丁寧な刷毛目調整痕を残すが、特に内面では輪積み痕を明瞭に観察できる。また、特徴的な煤状炭化物付着が見られる。175は復元口径30.4cmの甕で、口唇部は直行し、胴部との境界は刷毛目のカキアゲでかろうじて形成される。重量のある器体で、両面に激しい刷毛目が残される。176は復元口径21cmで、器壁は薄く、赤色粒が目立つ。煤状炭化物は、ベルト状に付着する。胴部との境界は、

刷毛目のカキアゲで区分される。177は復元口径21.4cmの甕で、直行する口縁部で、口唇部は尖り気味にナデ、外面は刷毛目で稜線を形成する。器壁は厚く、硬質且つ堅牢な焼成である。胎土は特に、火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含む、キラキラとした器面をなしている。胴部には縦方向の煤状炭化物(吹きこぼれ)の付着が見られる。

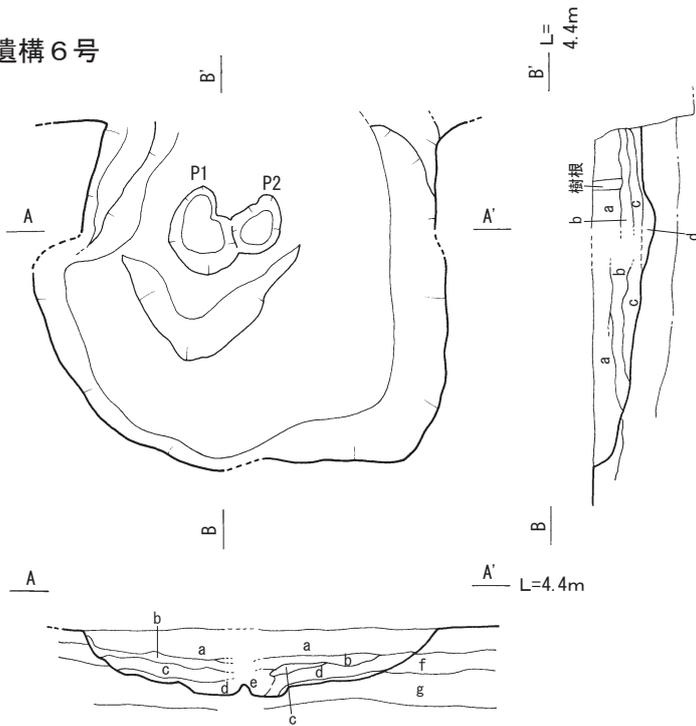
178、179は壺である。178は口径17.8cm、高さ24cmの丸底壺で、外面は口縁部が刷毛目のナデ、胴部がヘラケズリ状の工具ナデ、底部が工具ナデで、内面は刷毛目の工具ナデを主に、底部では指頭痕が残される。胎土は白色粒子と多量の火山灰性のガラス質粒子で構成され、キラキラとした器面を呈している。胴部を取り巻くように煤状炭化物の付着が見られる。179は復元口径18cmの壺で、両面ともにぶい橙5YRで、きめの細かい胎土を使用している。

180～183は鉢である。180は復元口径21.8cmの台付鉢で、脚部の端部は欠損する。口縁部が短く直行するもので、口唇部はナデで丸く収まる。器壁は厚く、重量のある仕上がりで、多量の火山灰性のガラス質粒子を含むことから、特徴的にキラキラとした器面をなす。器肌はぶい橙7.5YRをなす。181は復元口径32.3cmの器壁の薄い鉢で、両面に激しい刷毛目が残される。182は甕あるいは鉢の脚部で、端部は丸く、天井部もドーム状をなす。器壁は厚いが、若干軽量の仕上がりで、多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。183は甕あるいは鉢の脚部で、端部は平坦で、天井部は平坦に近いドーム状をなす。器壁は厚く、重量な仕上がりで、白色粒子等を多量に含む砂質胎土を使用する。

184～188は小型丸底壺である。184は胴部での復元最大径が14.5cm程で、口縁部が直行し、偏球形の胴部の小型丸底壺と見られる。頸部は刷毛目状工具のカキアゲで、外面はミガキ、内面は工具ナデや指ナデで器壁を薄く仕上げる傾向が見られる。胎土は、多量の火山灰性のガラス質粒子を含み、きめは細かい。185は胴部での復元最大径が24.6cmの、小型丸底壺の胴部と見られる。多量の火山灰性のガラス質粒子を含むきめの細かい胎土を用いているが、器壁は厚く、重量がある。186は埴ないし小型丸底壺で、平坦な接地面を持つ。胴部形状は蕪形で、白色粒子等を多量に含む砂質胎土を用い、重量のある仕上がりで、黒斑がある。187は、丸底壺と思われるが詳細な形状は不明。器壁の厚い、重量のある仕上がりで、黒斑がある。188は平底で袋状の胴部形状で、頸部が急激に締まる丸底壺で、きめの細かい胎土を使用し、外面は丁寧なナデられる。なお、破断面では、輪積み痕がそのまま残される。カクセン石等の黒色鉱物や火山灰性のガラス質粒子も含まれる。

189～191は埴である。189は復元口径10cmの器壁の厚いもので、外面はミガキ後ナデで仕上げている。190

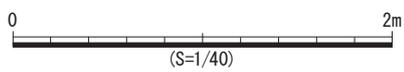
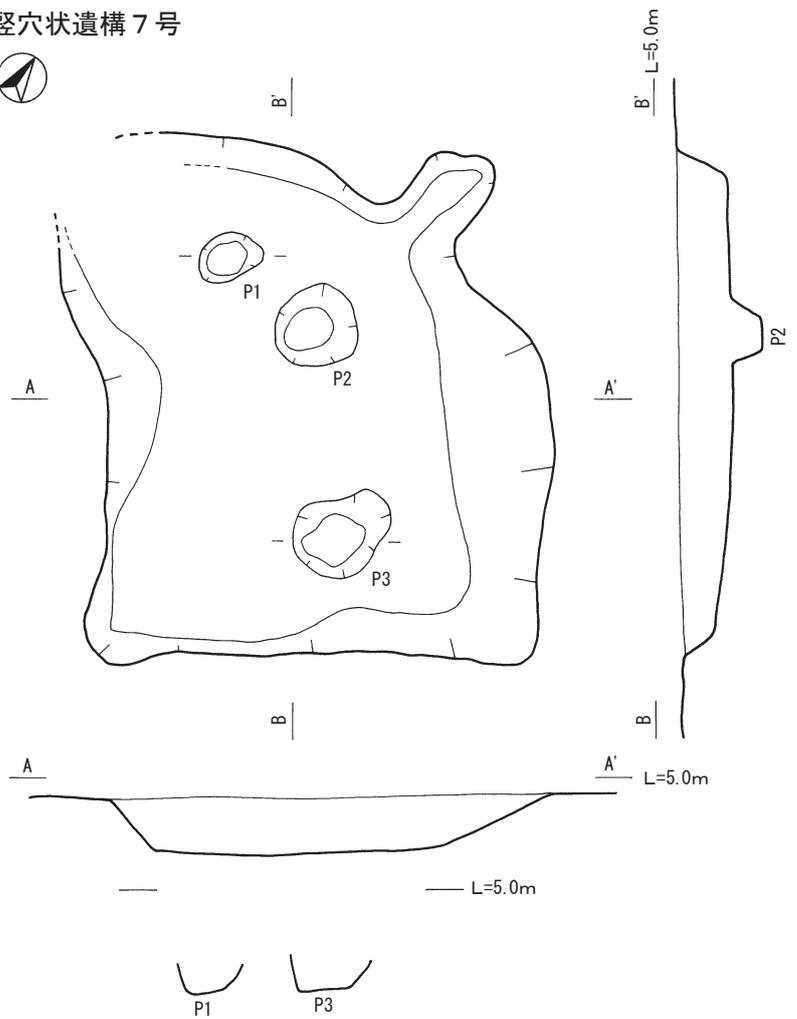
竖穴状遺構 6号



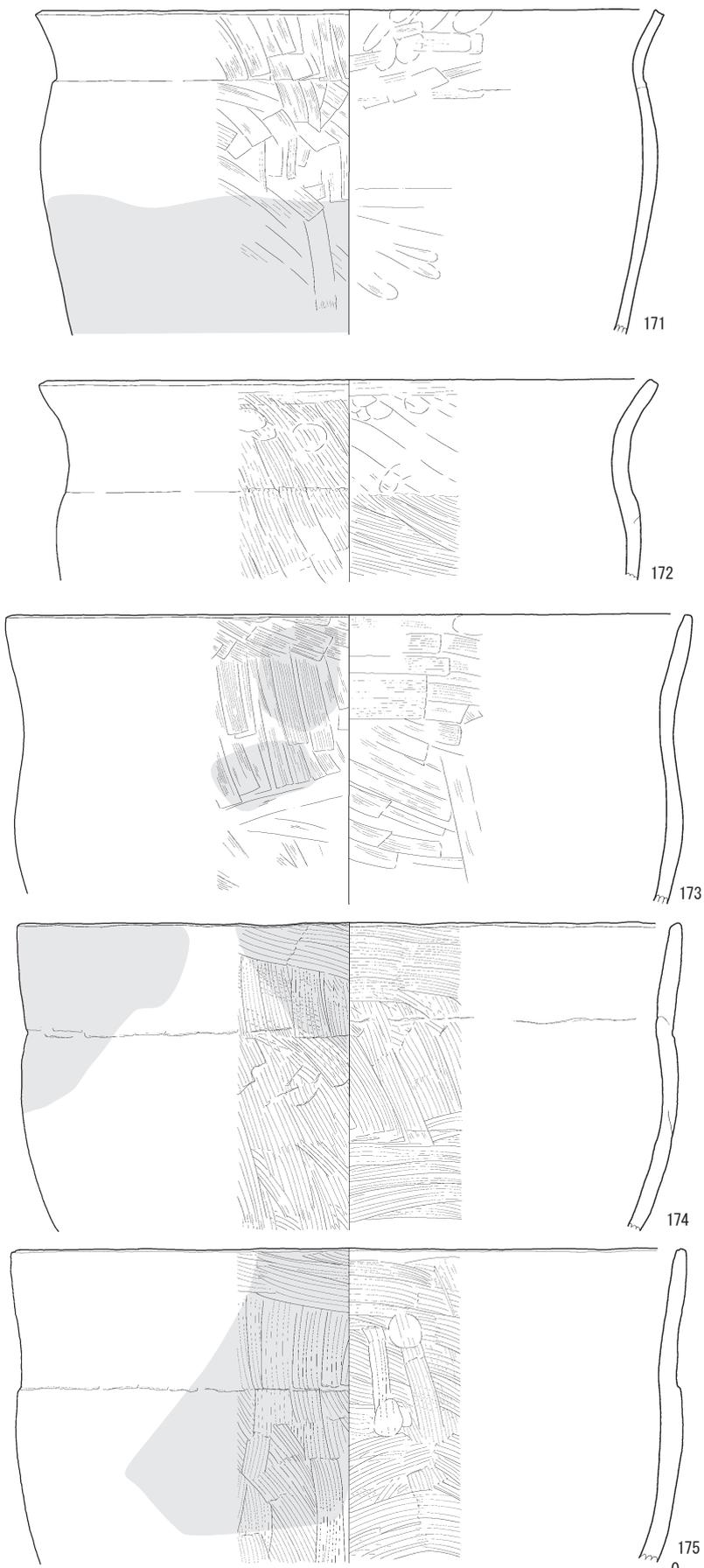
埋土

- a. 褐色砂質土
- b. 暗灰色砂質土
- c. 黒褐色腐植土
- d. 明褐色砂質土
- e. 暗黄褐色シルト質土
- f. 土層褐色砂質土
- g. 暗褐色弱粘質土と褐色シルト質土

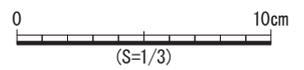
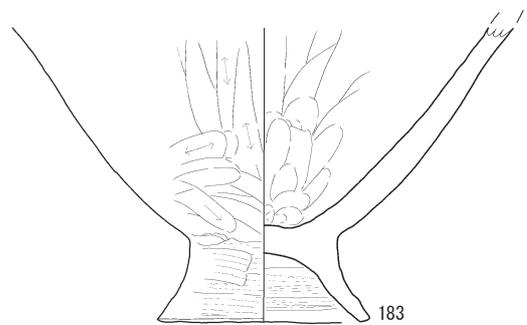
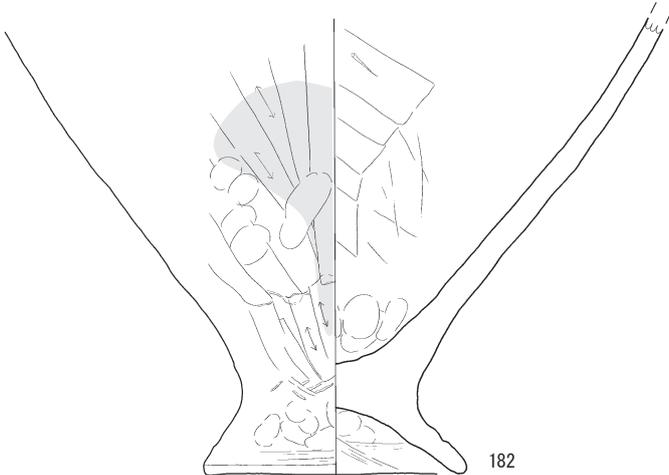
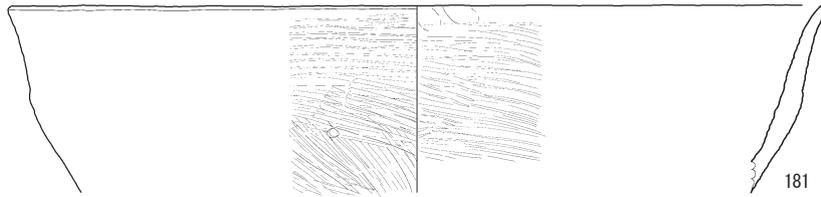
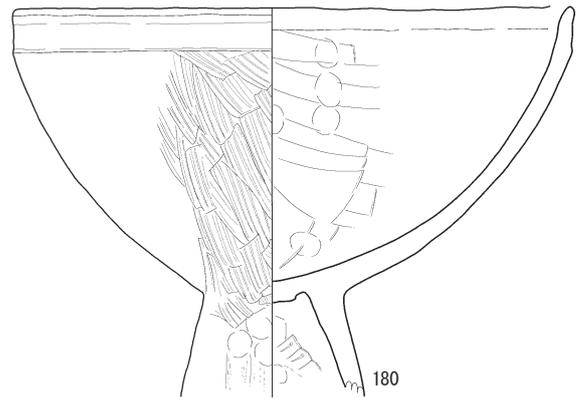
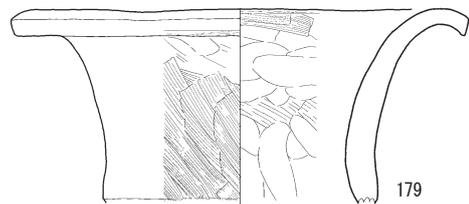
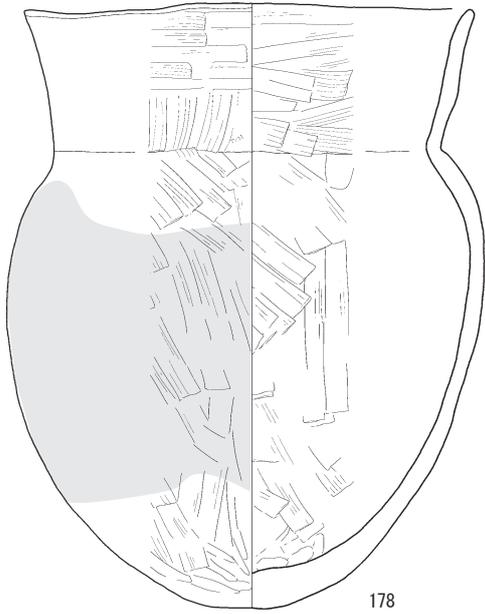
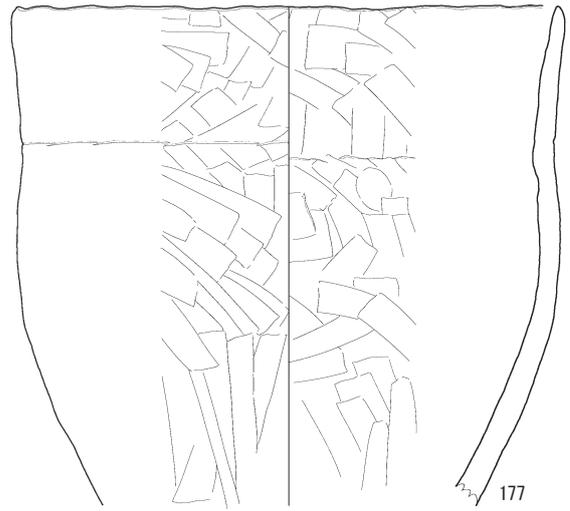
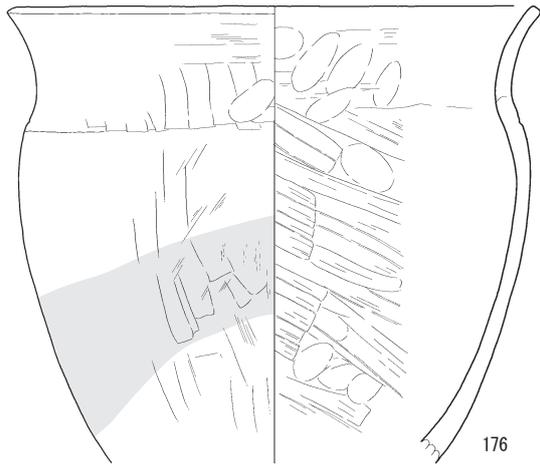
竖穴状遺構 7号



第47図 竖穴状遺構 6・7号



第48図 竪穴状遺構7号内出土遺物1

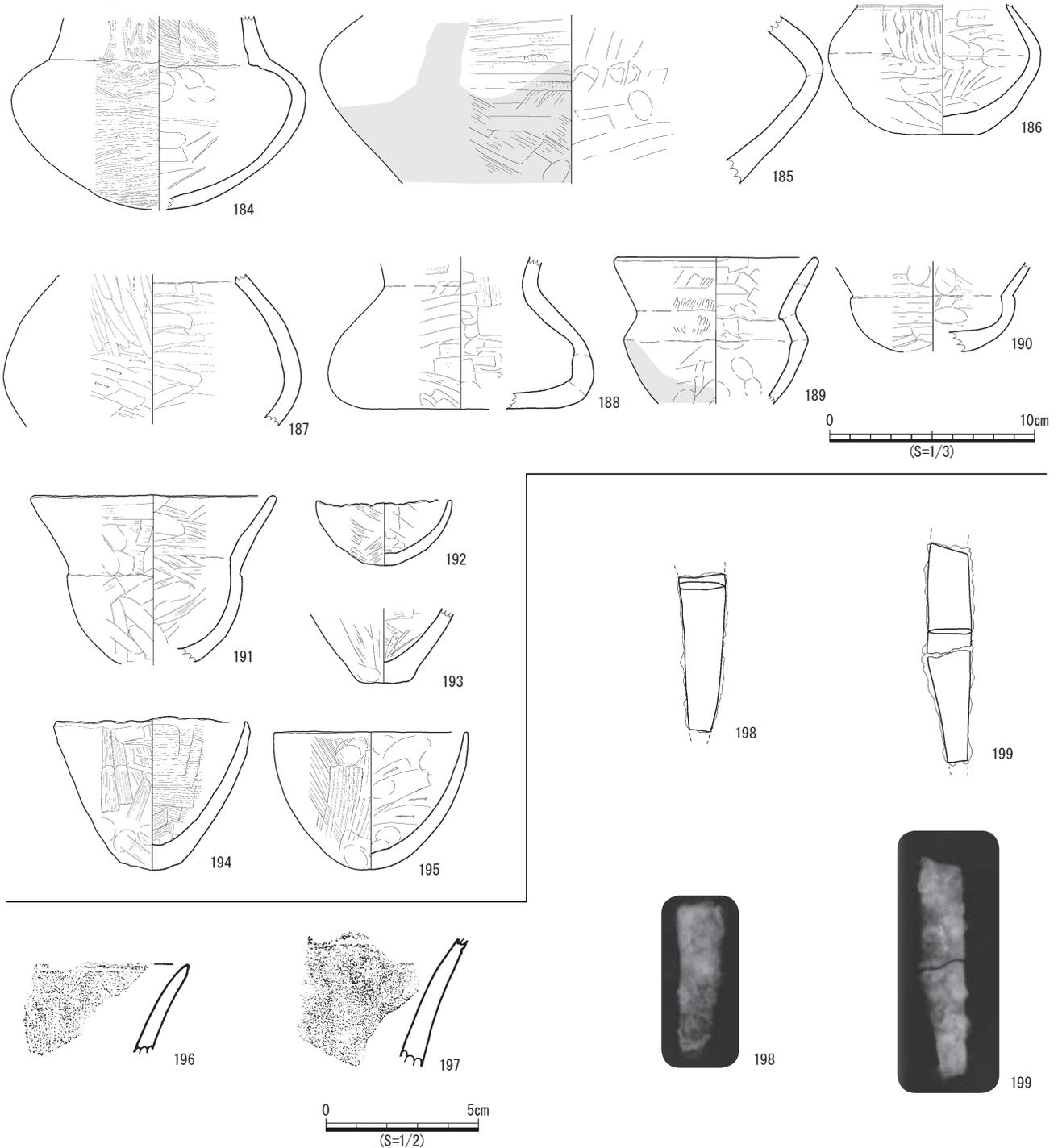


第49图 竖穴状遺構7号内出土遺物2

は口縁部は直線的に外反し、偏球形の胴部で、きめの細かい胎土を用いるが、器壁は厚い。胴部境界は端正な正円である。191は復元口径12cmの器壁の厚い罎で、外面は工具ナデ後指ナデ、内面は工具ナデに一部指ナデが加えられる。火山灰性のガラス質粒子に加え、1～2mmの長石や2～3mmの岩粒を含み、ザラザラとした器面で、橙5YRと赤い。

192～195は小型鉢である。192は口径6.6cm、高さ3.3cmの小型鉢で、外面は工具ナデ、内面は指ナデや指押さえ

が見られる。口縁部は指押さえにより小さな波状をなし、胎土には火山灰に含まれるガラス質粒子を含む。193は小型鉢の底部で、2.5cmほどの丸平な接地面を持つ。両面とも工具ナデであるが、内面は丁寧に指でナデられ、鮮やかな橙5YRで、光沢を保っている。胎土にはガラス質の粒子を含む。194は口径9.1cm、高さ7.6cmの器壁の厚い小型鉢で、接地面中央部がわずかに突出する。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目が明瞭で、内底面は指で押さえられる。やや大粒の赤色粒を含み、ガラス質の



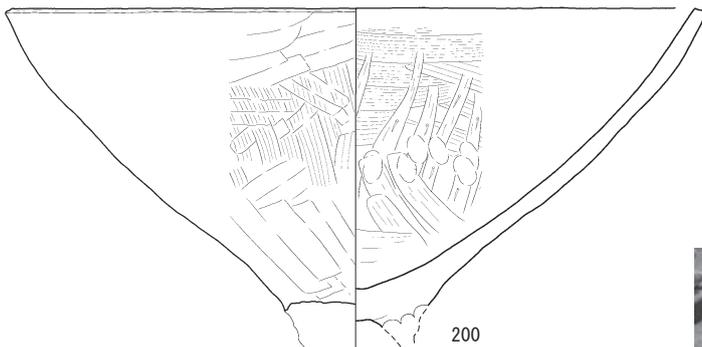
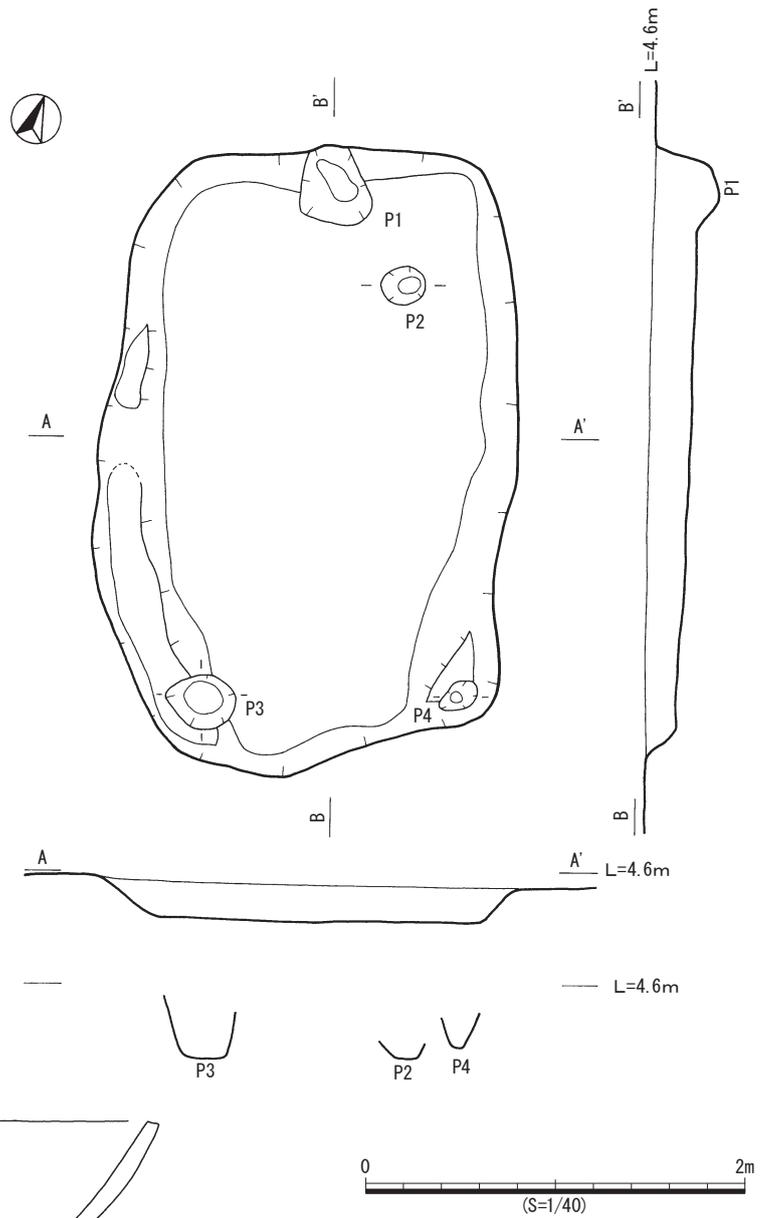
第50図 竪穴状遺構7号内出土遺物3

粒子も確認される。195は復元口径9.4cm, 高さ6.8cmの小型丸底鉢で, 端正な刷毛目が見られる。196, 197は外面に鋸歯文を有する埴の口縁部で, 小片のため口径, 傾き等の詳細は不明である。196の器肌はにぶい橙2.5YRを呈する。197は精選胎土で, 器肌はにぶい橙5YRを呈する。198, 199は混入品と考えられるが, ここで掲載した。198は右側を, 199は左側を刃部とする刀子の可能性が高い。

竖穴状遺構 8号 (第51図)

A'-22区で検出された。検出時の層位や埋土の情報是不明であるが, 遺構内より出土した遺物より古墳時代の遺構と認定した。プランは長軸3.3m×短軸2.2mの長形状のプランを呈し, 深さは20cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは4基検出された。竖穴状遺構としたが, 竖穴住居跡の可能性も考えられる遺構である。遺物は158点出土したが, そのほとんどは小片で, そのうち1点を図化した。

200は口唇部が平坦な鉢で, 脚部を欠損する。復元口径26.8cmの漏斗状の鉢で, 外面は刷毛目後工具でナデ, 内面は刷毛目にヘラケズリを加え, 更に, 部分的にナデで仕上げている。赤色粒や黑色鉾物を含む胎土で, 器面はザラザラとした感じで粗い。



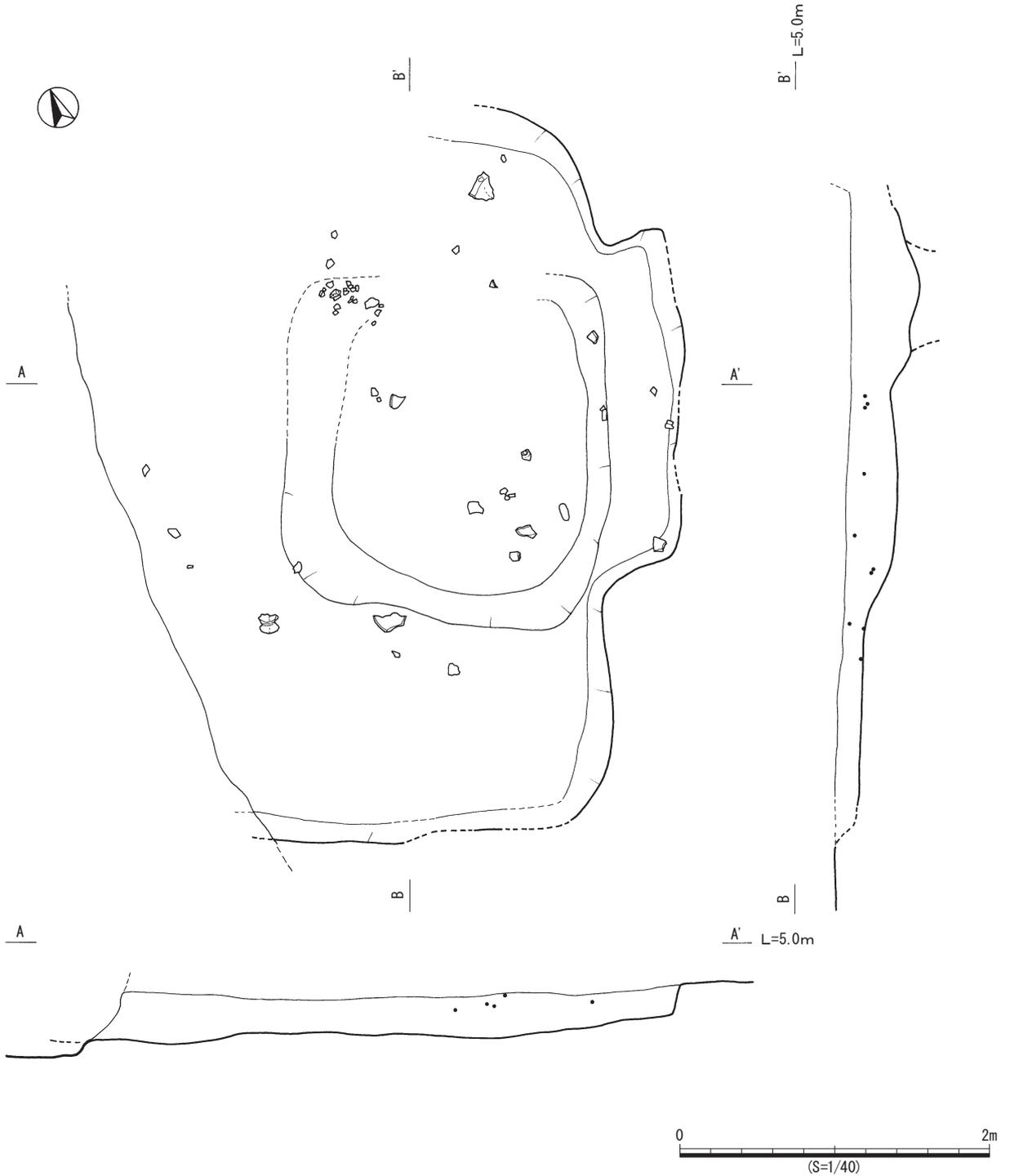
第51図 竖穴状遺構 8号および出土遺物

竪穴状遺構9号 (第24図参照)

E-24区, III層上面で検出された。竪穴状遺構10～13号とは近在する位置にある。埋土はII層である。プランは隅丸方形を呈すると思われる。遺構の深さや埋土の状況, 遺構に伴うピット等の詳細な情報が記載された遺構図がないため, これ以上のことは不明であるが, 検出された層位より古墳時代の遺構と認定した。遺構の位置と形状は第24図 (p44) に掲載した。遺物は452点出土しているが, 全て小片で図化するにいたらなかった。

竪穴状遺構10号 (第52, 53図)

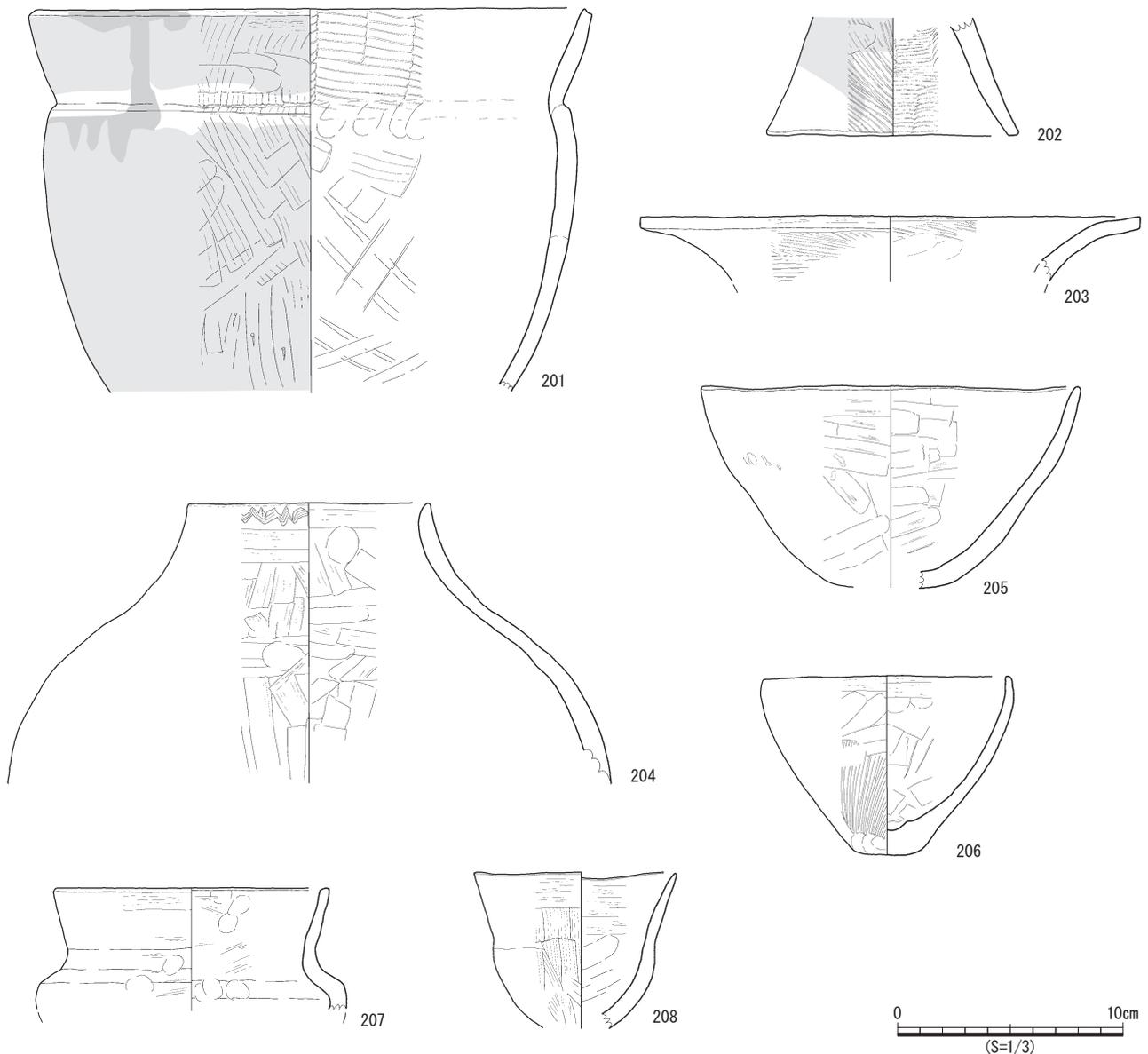
D-24区, III b層上面で検出された。竪穴状遺構9号, 11～13号とは近在する位置にある。西側は後世の溝状遺構で削平を受けており詳細なプランは不明である。中央部には一辺約2mの隅丸方形の浅い落ち込みが見られる。竪穴住居跡の可能性も考えられるが, ピットが検出されなかったため竪穴状遺構とした。遺物は231点出土し, そのうち8点を図化した。



第52図 竪穴状遺構10号

201は復元口径25cmの甕で、外面のくびれは、縦方向の刷毛目により深く明瞭に形成される。口唇部からくびれ部にかけて及びくびれ部直下に、煤状炭化物を縦方向に断ち切る筋状の消失（吹きこぼれ痕）が認められる。202は直線的形状を呈する甕の脚台の裾部で、内外とも短い刷毛目調整が繰り返され、硬質な焼成をなす。203は復元口径22.2cmの壺で、口唇部は平坦で、内外とも刷毛目後ナデ、微細な胎土を用い器肌は橙2.5YRと赤く、軽量の仕上がりとなる。204は復元口径10.8cmの短頸壺で、口縁端部にヘラ描き鋸歯文を描く。外面は縦方向の刷毛目や工具ナデ、内面は横方向の工具ナデで調整しているが、輪積み痕は残される。内外ともににぶい橙7.5YR、破断面の中央は褐灰7.5YRで、サンドイッチ状となる。205は復元口径17.0cm、高さ9cmの鉢で、口縁部は横にナデで尖り気味で、3cm程の平坦な接地面が復

元される。外面上部にはヘラナデ時の粘土だまりが残され、2～3mmほどの岩粒を含む胎土で、硬質な焼成である。206は口径10.5～11.2cm、高さ8cmの完形の小型鉢で、口唇部は丸くナデ、口縁部は内弯気味に仕上げ、接地面は2.5cmほどの円形の平坦面をなす。胎土は微細な白色粒や黒色粒を含み、外面の刷毛目は丁寧で、内底面は指押さえて仕上げる。207は復元口径12.2cmほどの小型丸底壺と見られる。ガラザラな器面で、カクセン石や火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含み、両面ともにぶい橙7.5YRの器肌である。208は復元口径8.4cmの埴で、底部は欠損する。口縁部は、ナデで波状で尖り気味に仕上げる。胴部以下の器壁が厚く、輪台充填による成形との指摘（久住氏）を受ける。器肌は光沢のある明赤褐2.5YRと赤く、硬質で2mmほどの白色粒が見られる。



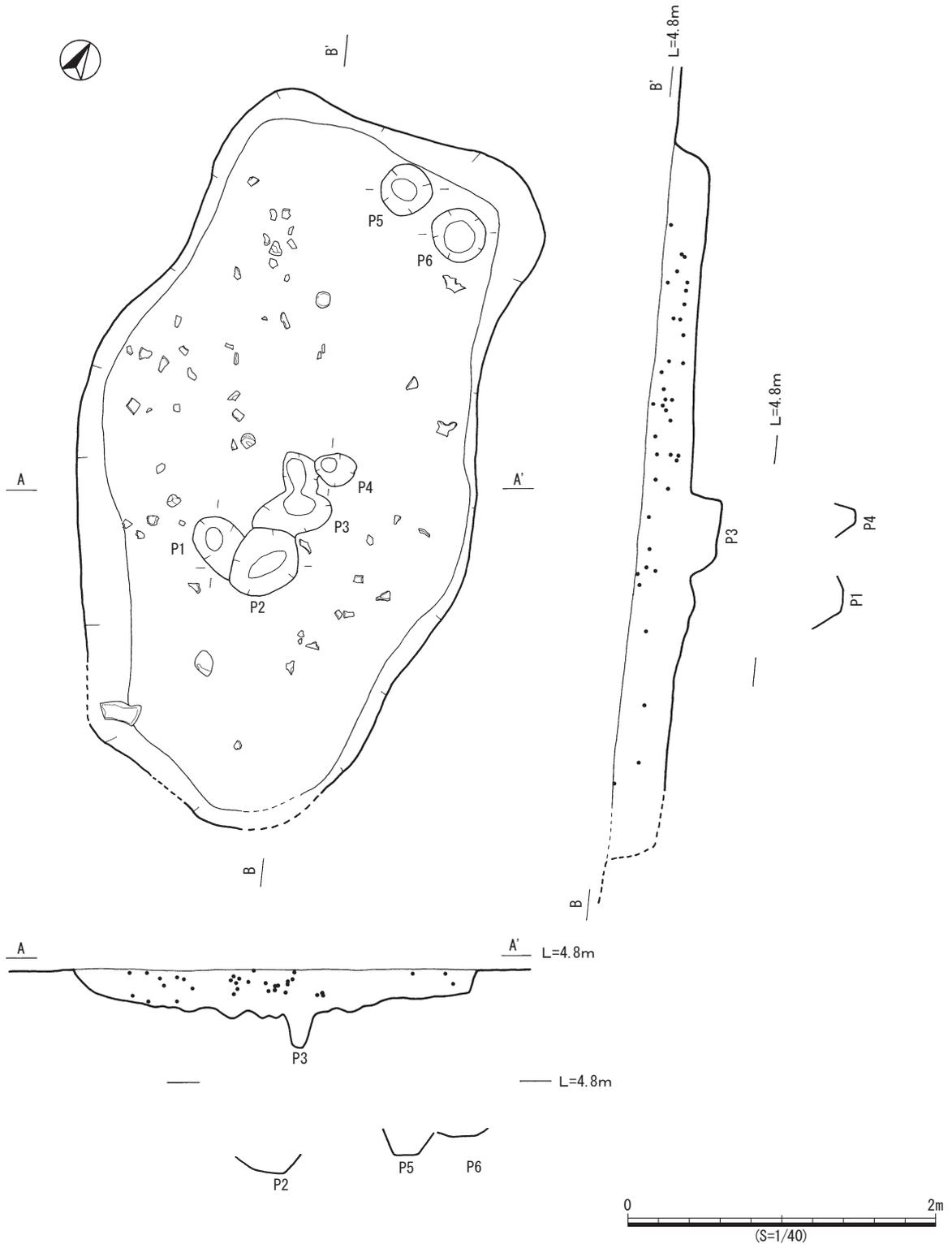
第53図 縦穴状遺構10号内出土遺物

竖穴状遺構11号 (第54, 55図)

D-23・24区, III層上面で検出された。竖穴状遺構9号, 10号, 12号, 13号とは近在する位置にある。プランは長軸4.8m×短軸2.6mの隅丸長方形を呈し, 深さは50cmを測る。遺構に伴うピットは6基検出された。形状は不定形であるが, 竖穴住居の可能性も考えられる。遺物

は埋土中より小片が474点出土した。そのうち6点を図化した。

209は縦方向の刷毛目のカキアゲが明瞭な資料で, 器種及び傾き等は不明である。なお, 内面も横方向の刷毛目調整が行われている。210は底径5.8cmを測る。器種は不明である。211は底径9cmを測る甕の脚部である。212



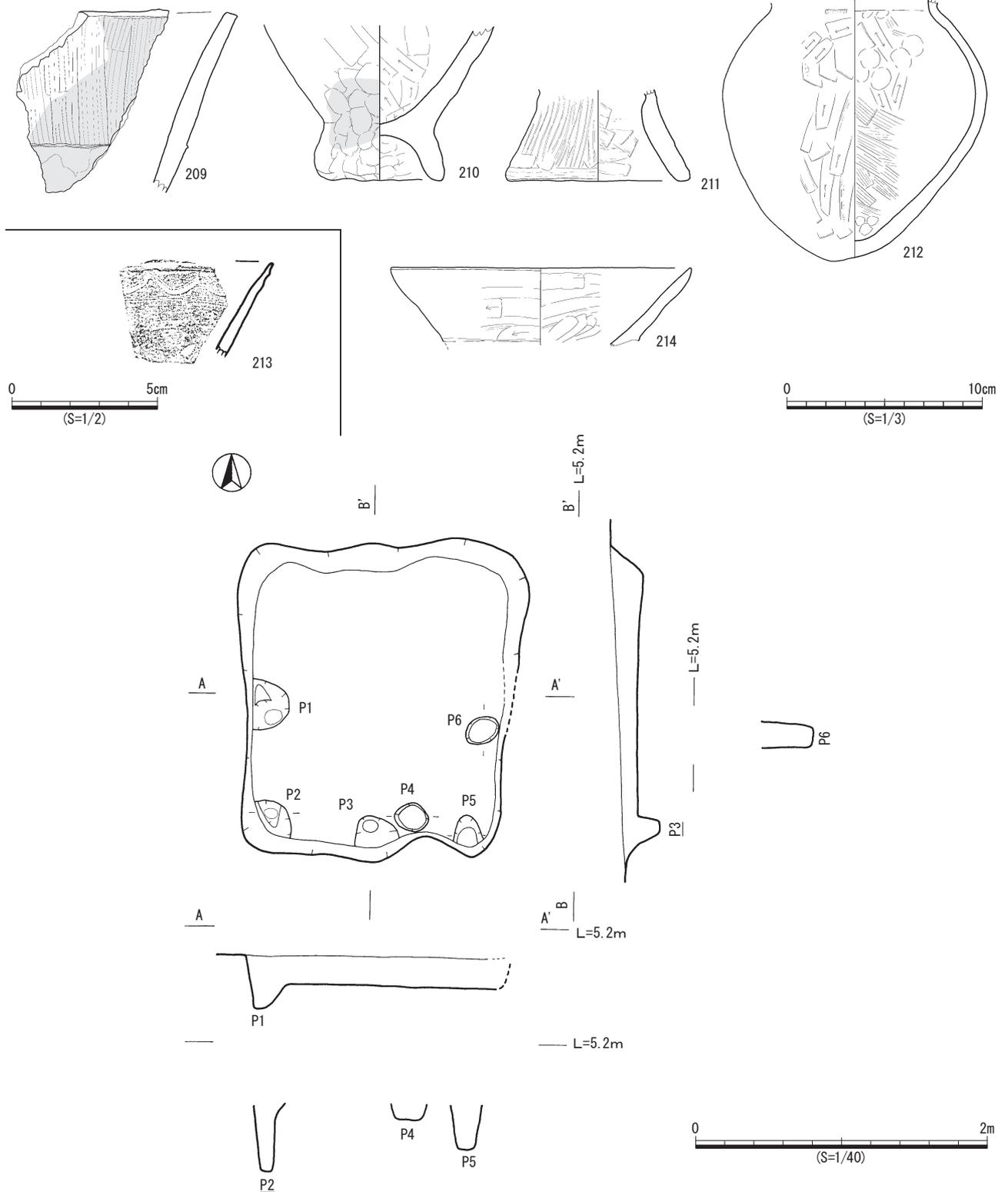
第54図 竖穴状遺構11号

は尖り気味の小型壺の底部で、器壁が厚く、重量がある。213は口縁部に櫛描波状文を有す埴で、口径、傾き等は不明である。器壁は淡橙5YRを呈する。214は口径15.4cmを測る。器種及び傾き等は不明である。

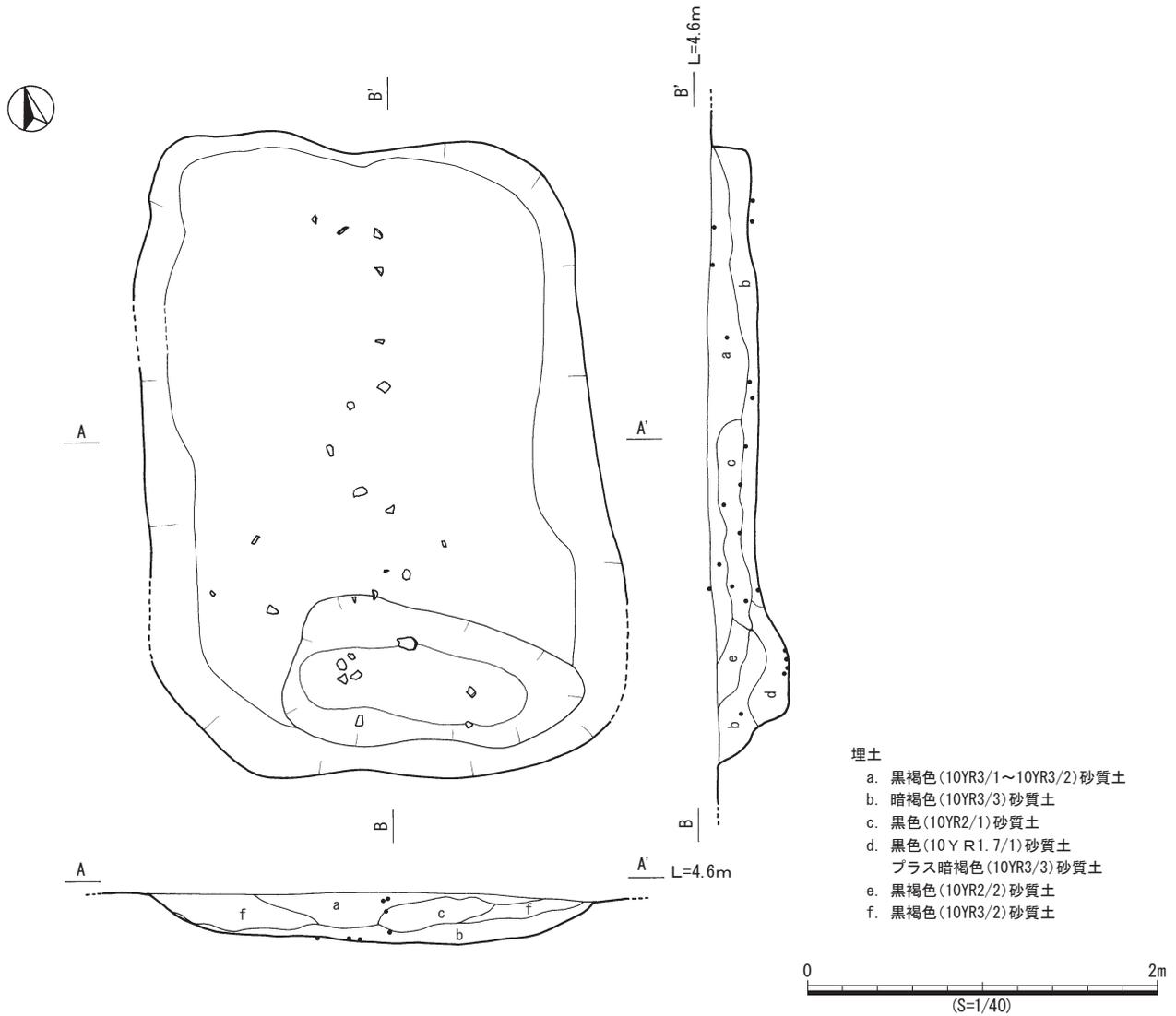
竪穴状遺構12号 (第55図)

D-23区, III b層上面で検出された。竪穴状遺構9～

11号, 13号とは近在する位置にある。プランは長軸2.2m×1.9mの隅丸方形を呈し、深さは約20cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは、6基検出された。竪穴状遺構としたが、竪穴住居跡の可能性も考えられる。遺物は土器の小片が1点出土しているが、図化はしなかった。



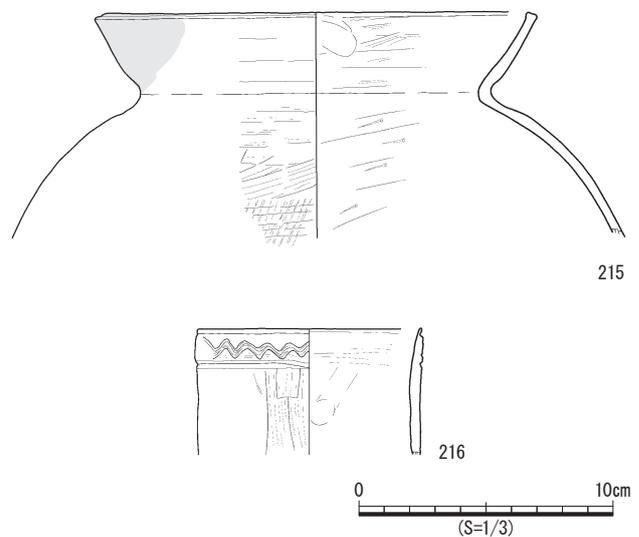
第55図 竪穴状遺構11号内出土遺物および12号



竪穴状遺構13号 (第56図)

E-23区, IV層上面で検出された。竪穴状遺構9~12号とは近在する位置にある。プランは長軸3.6m×短軸2.6mの隅丸長方形を呈し、深さは41cmを測る。南側の隅は後世の土坑により切られる。また、住居内の南側には、長軸1.8m×短軸0.8mの土坑状の落ち込みがみられ、その部分の埋土は、黒色砂質土と暗褐色砂質土であった。遺構に伴うピットは確認されなかったが、竪穴住居跡の可能性も考えられる遺構である。遺物は約375点出土したが小片が多い。そのうち2点を図化した。

215は丸底甕の口縁部で、復元口径は16.8cmとなる。器壁が薄く、最終的にはナデで仕上げるが、胴部の一部にはタタキ痕らしき痕跡も見られる。内面はヘラケズリで、1mmほどの金雲母を含む胎土で、にぶい黄橙10YRと特徴的な器肌を呈し、軽量な仕上がりをなす。216は復元口径8.8cmで、精選したきめの細かい胎土を使用し



第56図 竪穴状遺構13号および出土遺物

た器壁の薄い埴で、明るい橙5YRの器肌をなす。外面では縦方向の工具ナデ、内面では横方向にナデ、口縁部直下の浅い沈線で区画間に、櫛状工具で鋸歯文が施される。

竪穴状遺構14号 (第57図)

E-21区、Ⅲ層上面で検出された。竪穴状遺構15号とはほぼ接する位置関係にあり、竪穴状遺構16～19号とは近在する位置にある。プランは不定形で、長軸3.9m×短軸3.5m、深さ30cmを測る。遺構に伴うピットは検出されなかった。遺物は埋土中より小片が816点出土した。そのうち3点を図化した。

217は甕又は鉢の口縁部で、詳細な傾き等は不明である。口縁部と胴部の境界は刷毛目のカキアゲで区分される。両面ともに丁寧な仕上げで、外面は黒7.5YR、内面は褐灰7.5YRで光沢を保っている。また、火山灰性のガラス質粒子を大量に含む胎土で、特徴的なキラキラとした器面を呈している。218は甕の底部資料で、内底面の工具ナデが良く残される。脚は短く、裾が若干外に広がる。外はにぶい橙、内は褐灰で、胎土は砂粒を多く含み、キラキラとした器面である。219は高坏の脚部で、外は刷毛目、内は指ナデと工具ナデが整然と行われた痕跡が見られる。きめが細かく火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラとした器面を呈している。

竪穴状遺構15号 (第58図)

E-21区、Ⅳ層上面で検出された。竪穴状遺構14号とはほぼ接する位置関係にあり、竪穴状遺構16～19号とは近在する位置にある。プランは直径約2.56mの円形を呈し、深さは38cmを測る。遺構の中央部は一段落ち込む。ピットは検出されなかった。遺物は埋土中より小片が375点出土した。そのうち6点を図化した。

220は復元口径27.6cmの甕で、口唇部は平坦面を維持し、内外面とも、頸部の稜線は不明瞭となる。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで形成し、その後の斜め方向の刷毛目を重ねる。内面胴部は斜め方向、口縁部では横方向に変化する。赤色粒を特徴的に含む胎土で、破断面はサンドイッチ状をなし、内面は橙7.5YR、外面はにぶい橙7.5YRを呈す。部分的に煤状炭化物の付着が見られる。221は復元口径15.6cmの鉢ないしは丸底壺で、口縁部は小さな波状をなす。外面は粗い工具ナデと指ナデ、内面は刷毛目で口唇部を指ナデする。胎土は砂質が強く、ザラザラした器面を呈し、ひび割れも見られる。222は鉢の胴部資料。外はにぶい橙7.5YR、内は灰褐7.5YRで、5～10mmほどの岩粒と白色鉱物を特徴的に含む胎土で、内面の一部は剥落する。223は鉢の底部で、外面は小振りの刷毛目、内面は太めの刷毛目で、器壁は厚く、重量がある。なお、接地面は円盤状の平底で、ランダムなヘラによるナデ成形痕が残され、接地面には靱痕状の圧痕も残される。外はにぶい橙7.5YR、内は灰褐7.5YRで、胎土粒子は細かく、白色鉱物の混入が目立つ。224は器種不明の資料である。外は刷毛目、内は刷毛目に指ナデ

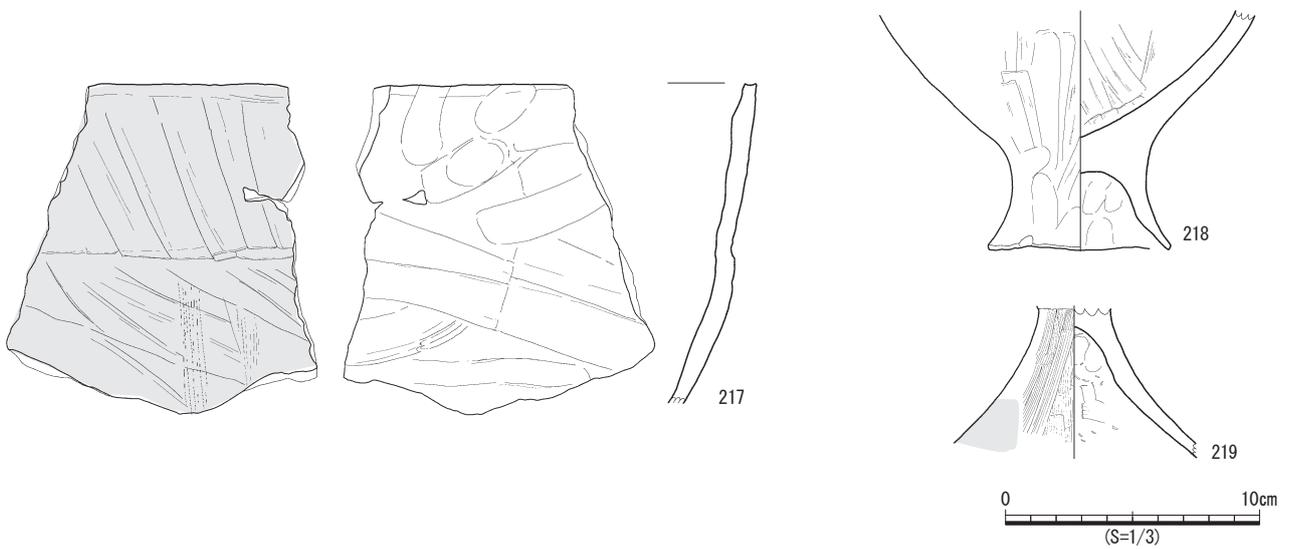
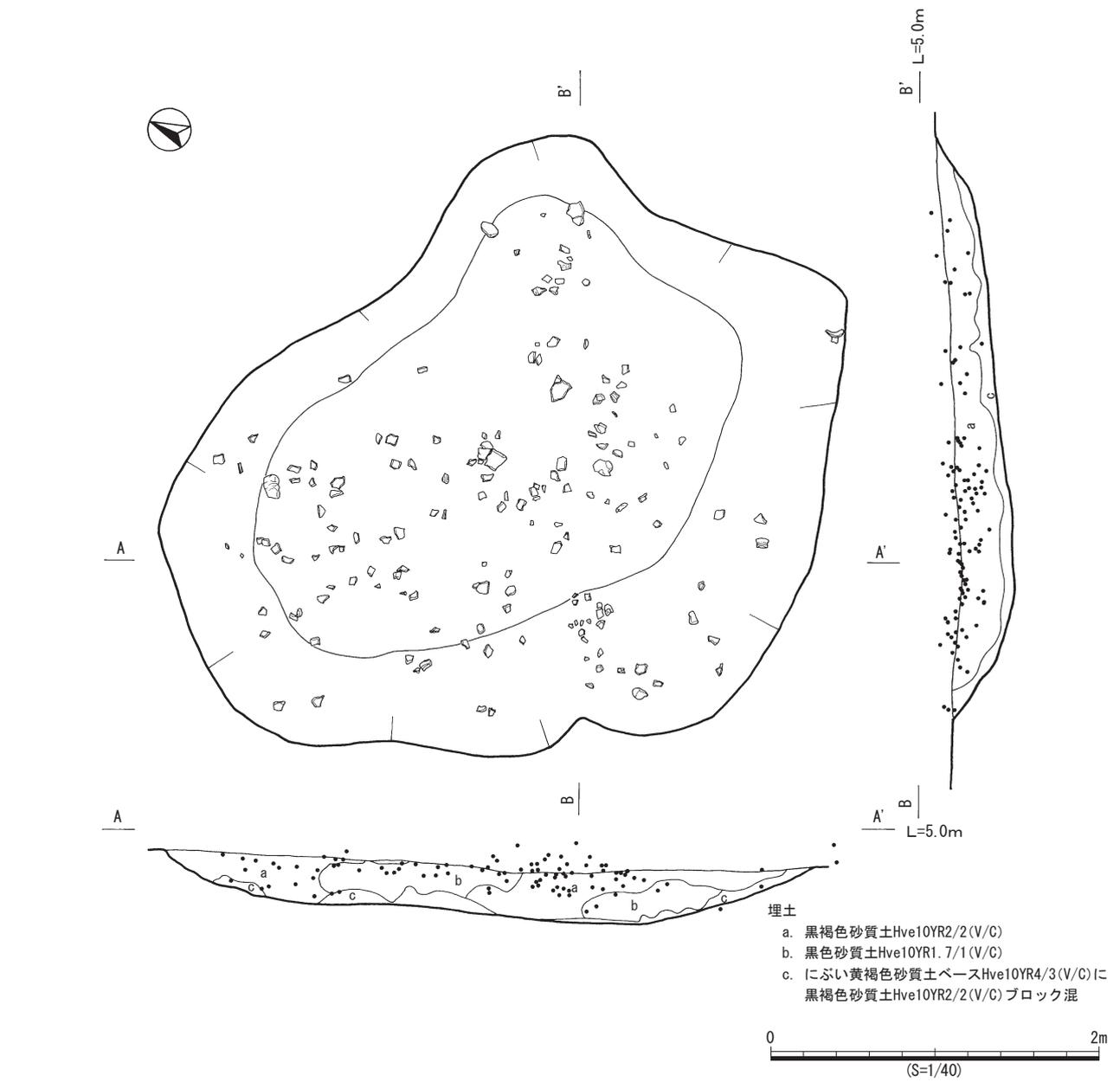
を重ね、硬質な仕上げを見せる。なお、内面2ヶ所に靱痕らしき圧痕が見られ、外面には煤状炭化物の付着も見られる。225は復元口径34cmほどの鉢と見られ、口縁部との境界は直行する刷毛目のカキアゲで段差を設ける。砂質の胎土で、赤色粒、白色の凝灰岩粒、石英、輝石を含み、内面上位は斜め方向の指頭痕が明瞭に残る。内面は橙7.5YR、外面はにぶい橙7.5YRで、器壁は薄く軽量の仕上げをなす。

竪穴状遺構16号 (第59～62図)

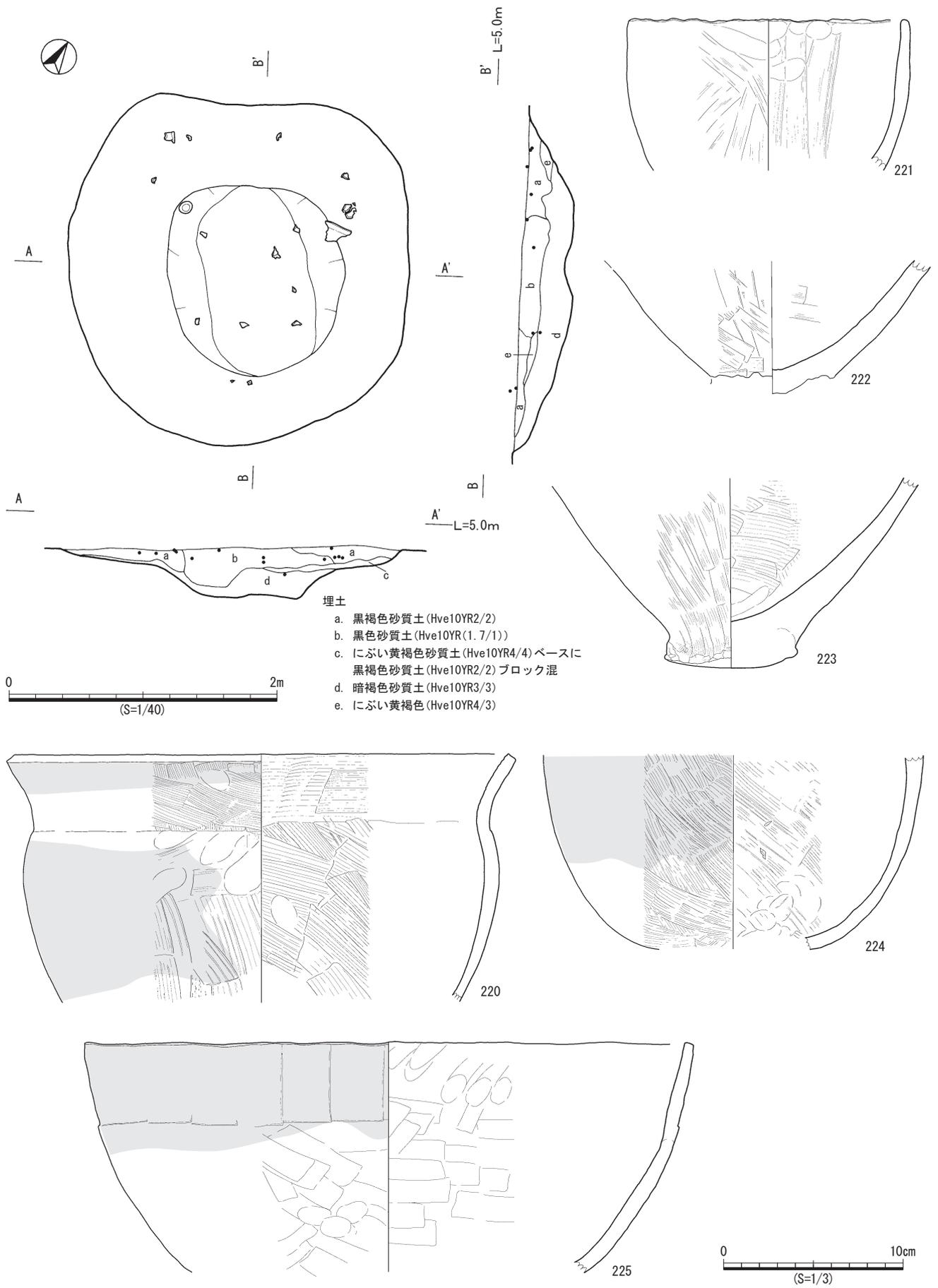
E-20・21区、Ⅳ層上面で検出された。竪穴状遺構14号、15号、17～19号とは近在する位置にある。プランは不定形で、長軸4.6m×短軸3.4m、深さ25cmを測る。遺構に伴うピットは2基検出された。竪穴住居などの遺構が切り合っている可能性も考えられる。遺物は埋土中より254点出土し、そのうち9点を図化した。

226～229は甕である。226は復元口径33.8cmで、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲが見られるが、口縁部は緩やかに外反し、胴部へはスムーズに移行する。227は復元口径28.7cmの甕で、口唇部は平坦面を維持する。内外ともに頸部の稜線は形成しないが、口縁部は横方向の刷毛目、頸部以下は縦方向の刷毛目と区分が図られている。多量の赤色粒と石英を含む胎土で、破断面はサンドイッチ状、内面は浅黄橙、外面はにぶい橙をなす。胴部張部にはベルト状に煤状炭化物の付着が見られ、その下位の器面は剥落が著しい。228は復元口径23.2cmの甕で、口唇部はヘラ状工具の押圧により鋸歯様の波状口縁をなす。口縁部との明瞭な境界は形成しないが、口縁部に直行する縦方向の刷毛目のカキアゲが先行して行われている。砂質の強い胎土で器面はザラザラし、器面にはひび割れと、煤状炭化物が付着するが、煮炊きの吹きこぼれに起因すると見られる付着煤状炭化物の縦方向の消失が見られる。229は甕の胴部と思われる。3mm程の白色の岩粒を含む胎土で、両面とも刷毛目に工具ナデが重ねられるが、暗褐色で光沢のある器面を保ち、サンドイッチ状の破断面をなす。

230～234は壺である。230はくノ字に外反する比較的大型の壺の口縁部で、口径は22cmほどとなる。頸部との切り離しは、粘土紐の接合位置で行っていることから、意図的な行為と解され、器台に転用したものと考えられる。きめの細かい精選胎土を使用し、赤色の化粧土が使用された可能性もあり、両面とも刷毛目主体で調整し、重量がある。231は口径10.3cmで、器壁は厚く、特に重量がある。口縁部は刷毛目後指ナデし、胴部は刷毛目が顕著である。内面の口縁部と頸部の接合部は厚く、粗い工具ナデの痕跡が見られる。232は肩部に台形状突帯をヘラで刻んだ、いわゆる見せかけの突帯文を持つ壺で、器壁は厚く、長石や石英に加え多量の黒色鉱物を含む胎土で、重量のある仕上げりである。肩部内面には接合痕がそのまま残され、外面の煤状炭化物状も明瞭である。



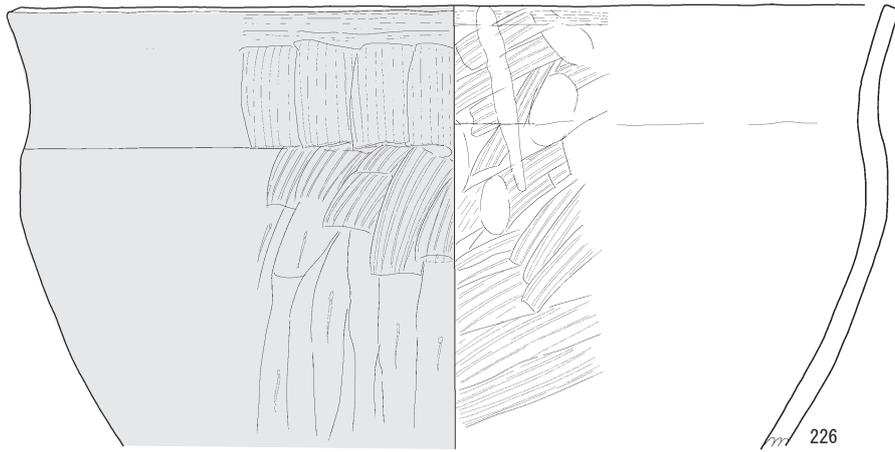
第57図 竪穴状遺構14号および出土遺物



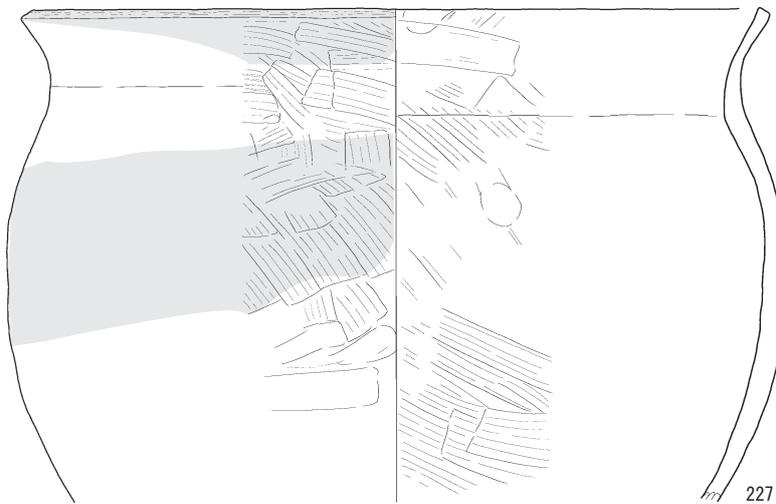
第58図 竪穴状遺構15号および出土遺物



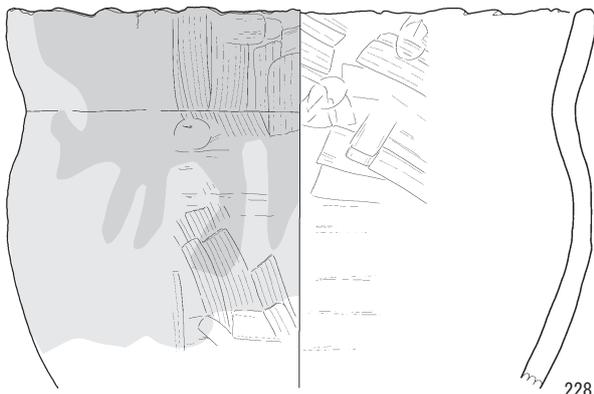
第59図 竖穴状遺構16号



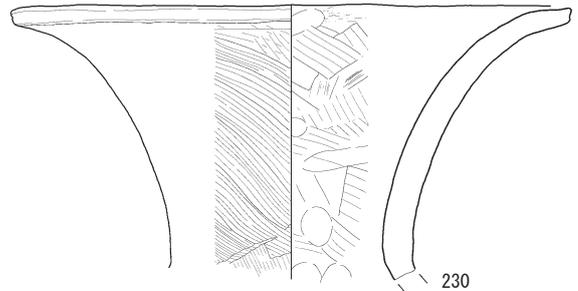
226



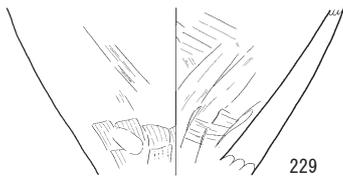
227



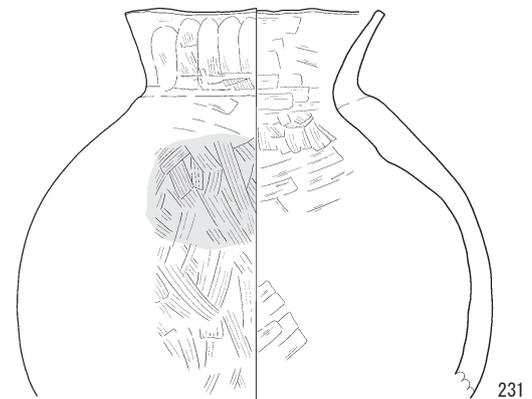
228



230



229



231



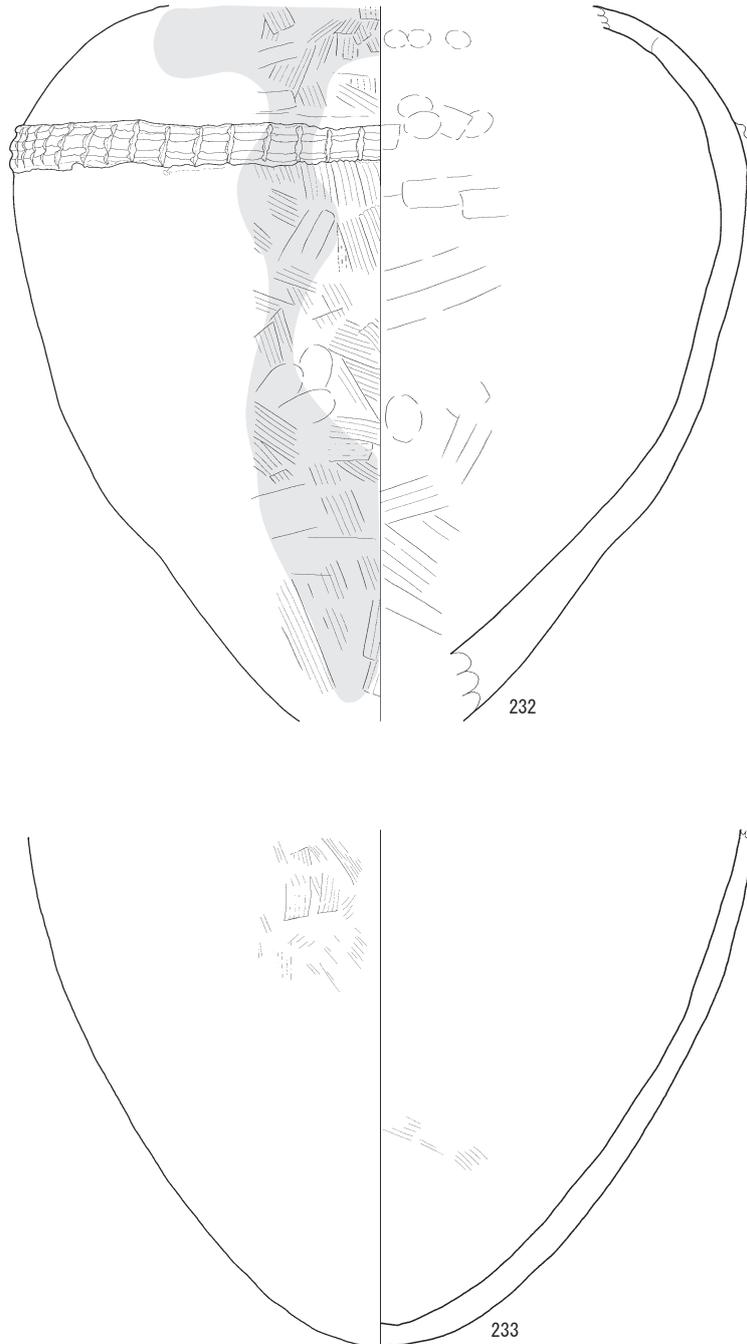
第60图 竖穴状遺構16号内出土遺物 1

233は壺の底部資料で、きめの細かい胎土を使用し、軟質で軽量の焼成である。また、内底面は大きく面的に剥落し、接地面はクレーター状に剥落している。234は壺の胴部で、三角形突帯文部では46.4cmほどの径が復元できる。きめの細かい胎土を使用し、外は刷毛目後、工具で丁寧にナデて仕上げている。橙7.5YRの器肌で、胴部には黒斑も残される。

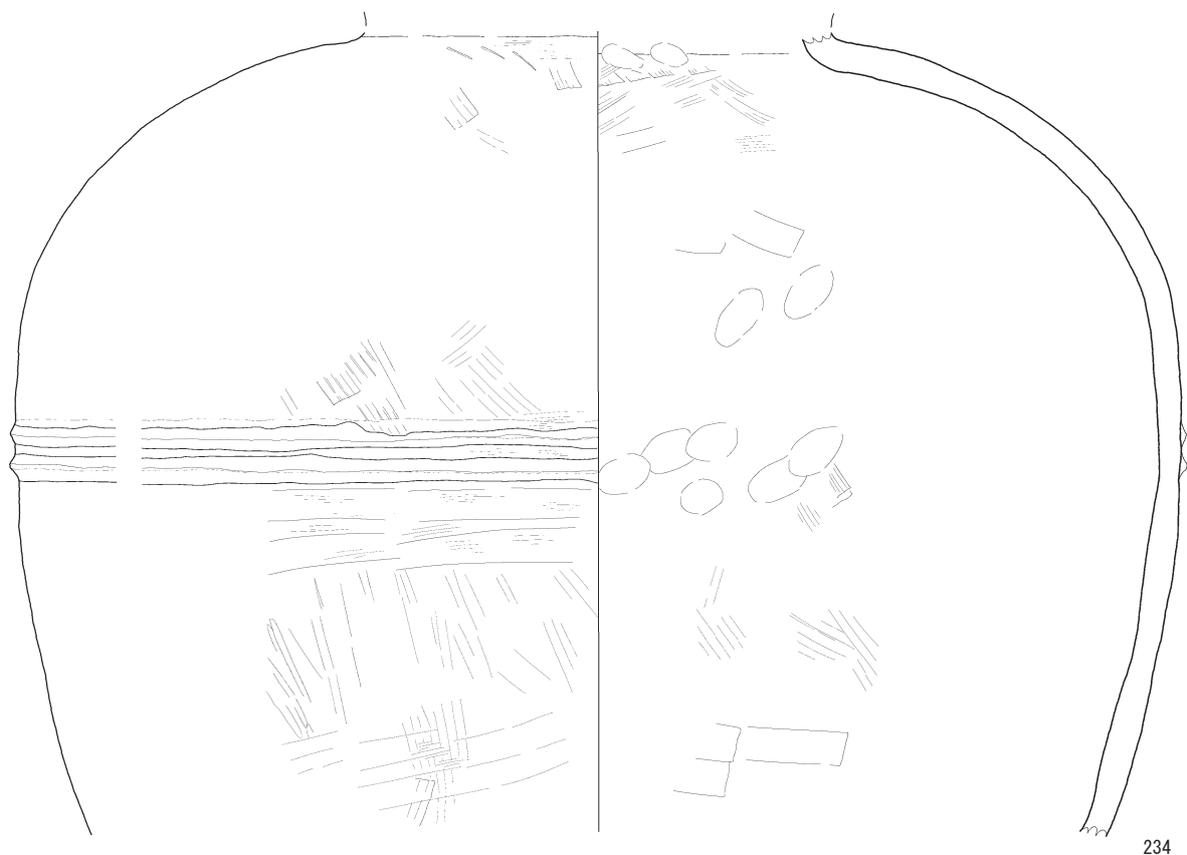
竪穴状遺構17号（第27, 63, 64図参照）

D・E-20・21区、Ⅲ層上面で検出された。竪穴状遺

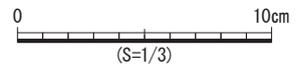
構14～16号、18号、19号とは近在する位置にある。埋土はⅡ層である。プランは南側隅を削平されているが、隅丸方形を呈すると思われる。遺構の深さや埋土の状況、遺構に伴うピット等の詳細な情報が記載された図がないため、これ以上のことは不明であるが、検出された層位や出土遺物より古墳時代の遺構と認定した。遺構の位置と形状は第27図（p47）に掲載した。遺物は818点出土しており、そのうち7点を図化した。



第61図 竪穴状遺構16号内出土遺物 2



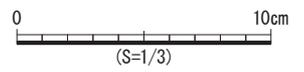
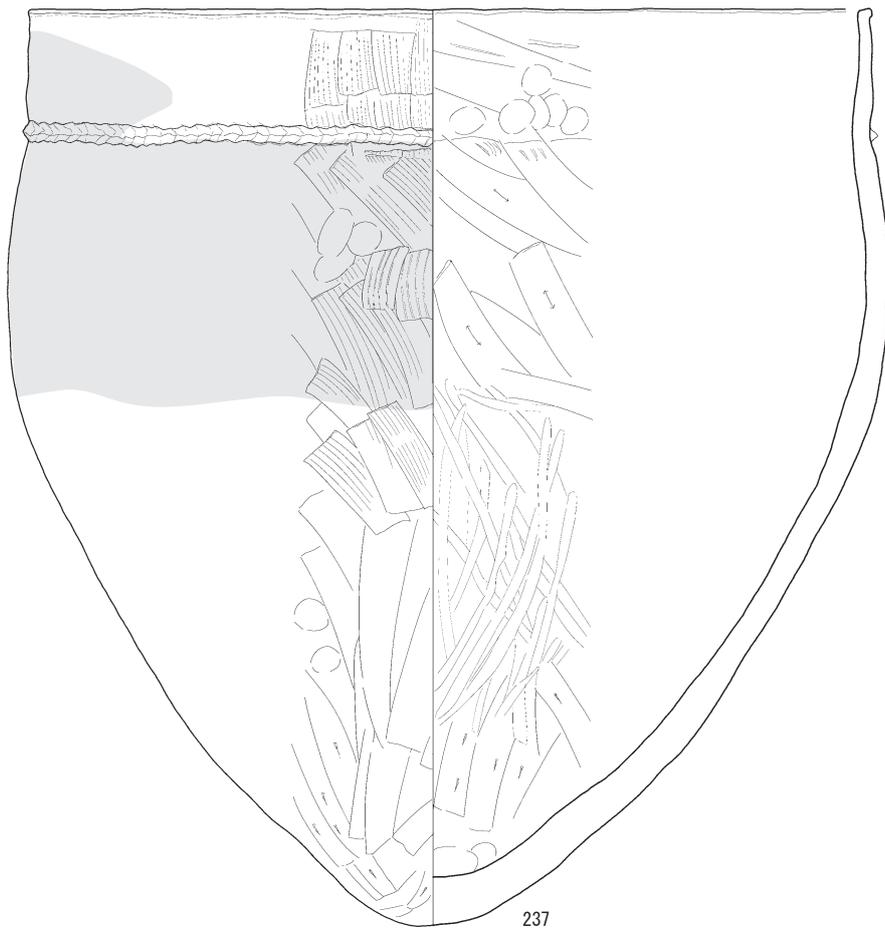
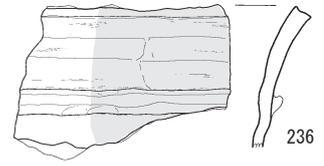
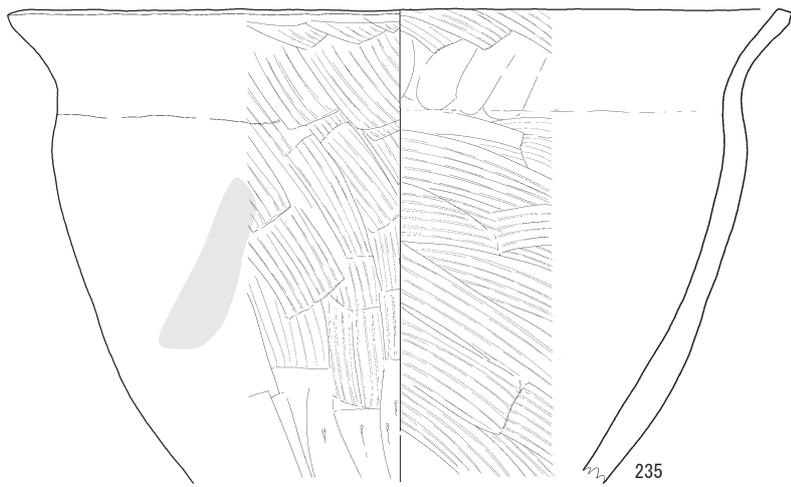
234



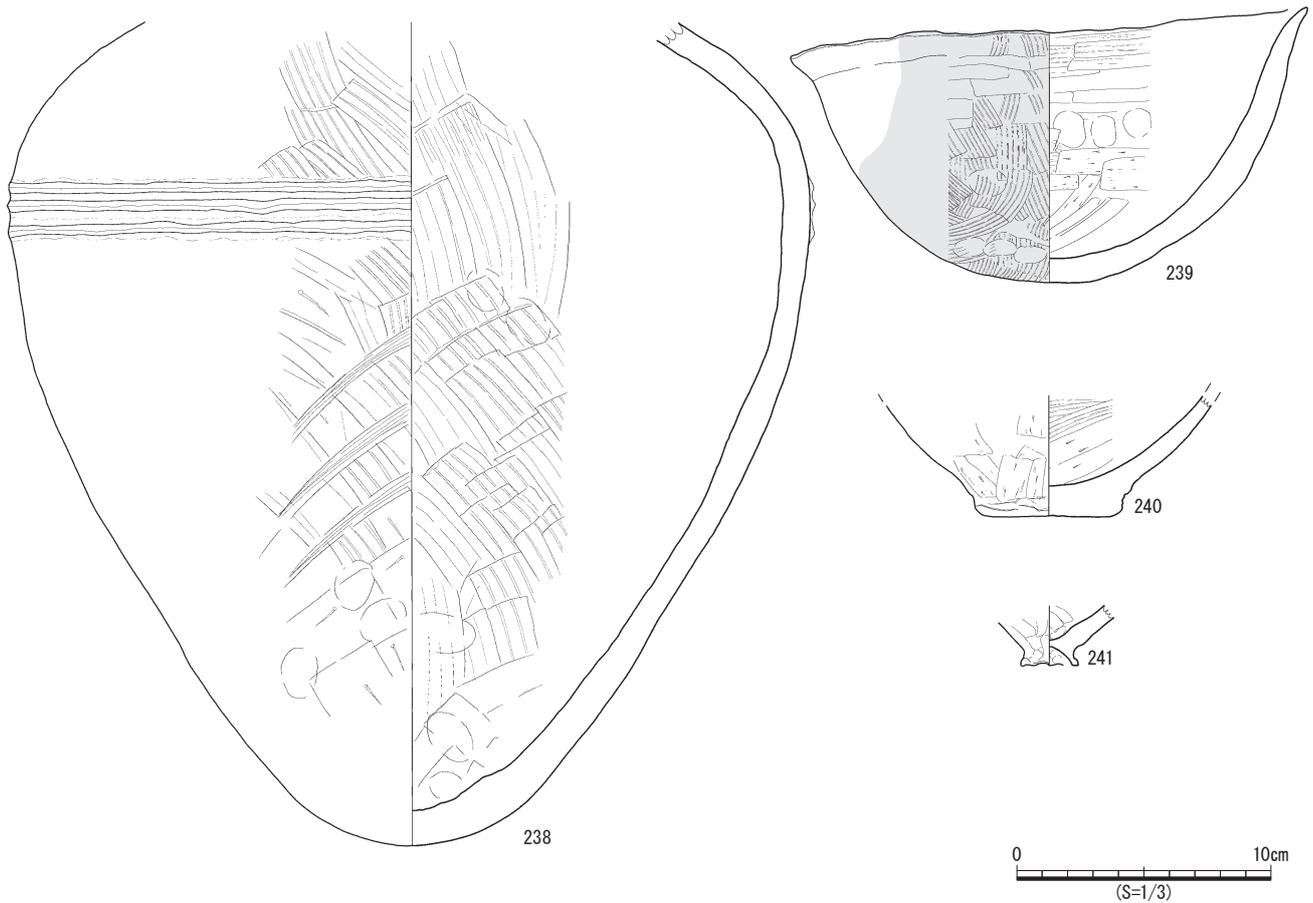
第62図 竪穴状遺構16号内出土遺物3

235は復元口径29.8cmで、外面全域を斜め方向の刷毛目で調整する。なお、口縁部との境界が刷毛目の転換点であるが、下胴部への移行はスムーズに行われる。内面は、屈曲部のみにナデ調整が見られる。胎土は砂質性の高いものに火山灰性のガラス質粒子を含み、両面とも橙2.5YRで、いわゆる指宿胎土に近い。236はわずかに外反する口縁部と胴部との境界に1条の無刻目突帯を持つ甕で、硬質な焼成である。237は復元口径33.2cm、高さ36.6cmの甕で、類例の少ない器形で、口縁部との境界に1条の三角突帯文を持つ。口縁部は直行し、口縁部では刷毛目を縦方向、胴部では斜め方向に使用し、胴部との区分は突帯文に依存する。1mm前後の石英や長石、カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で、特に内面下部ではヘラ状工具によりミガキ様の仕上げが見られる。238は胴部に3条の無刻目突帯文を持つ丸底壺で、突帯部では32cmの径が計れる。両面とも刷毛目主体の調整で、部分的に工具ナデや指ナデが見られる。少数であるがやや大粒の岩粒を含み、器壁は厚く、重量がある。239は口

径20.4cm、高さ10cmほどの鉢で、外面は丁寧に刷毛目を重ね、口縁部では横方向の工具ナデで仕上げ、内面はヘラケズリ、口縁部は横方向にナデられる。特徴的な器形で、頸部付近では光沢を残し、器壁は厚く、特に重量のある仕上がりで、火山灰性のガラス質粒子を大量に含み、キラキラとした器面をなす。240は鉢の底部で、5cmほどの底径が復元される。内外ともにケズリ、接地面は丁寧なナデが見られる。破断面はサンドイッチ状をなす。241は径2cmほどの高台を持つ手捏土器で、内底面は指押さえで凹む。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、浅黄橙7.5YRの器肌が見られ、黒をサンドイッチ状に挟む。



第63図 竖穴状遺構17号内出土遺物 1



第64図 竪穴状遺構17号内出土遺物2

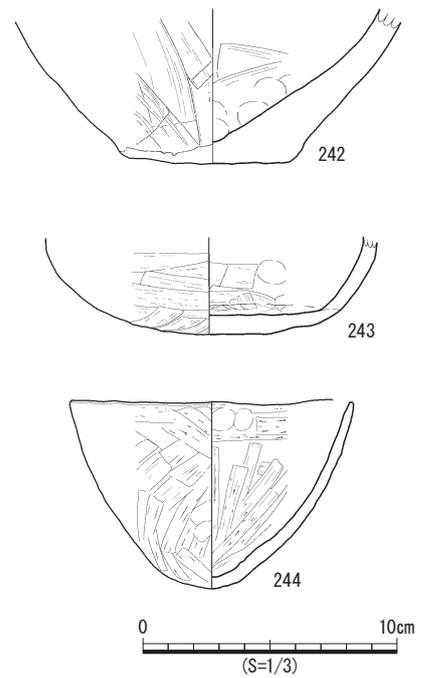
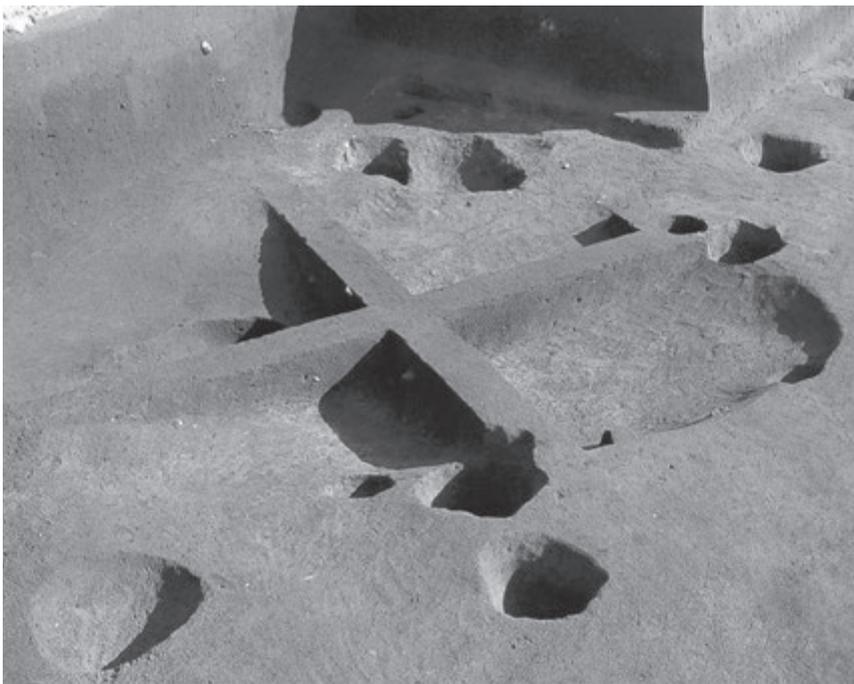
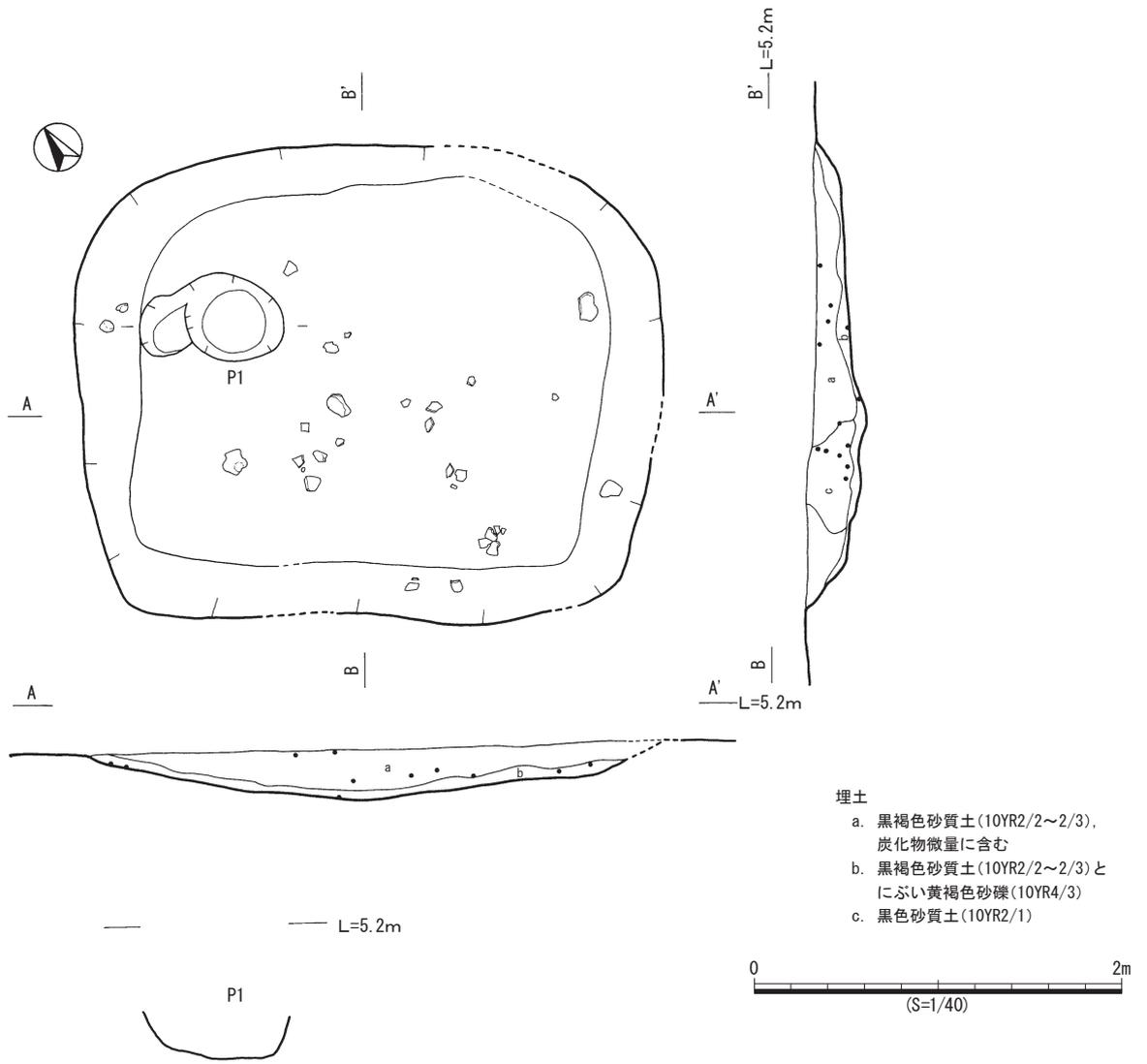
竪穴状遺構18号（第65図）

D-20区，IV層上面で検出された。竪穴状遺構14～17号，19号とは近在する位置にある。プランは長軸約3.1m×短軸約2.55mの隅丸長方形を呈し，深さは約30cmである。東西方向断面の底ラインは，中央にむかって浅く落ち込む。遺構に伴うピットは1基検出された。遺物は145点出土したが，そのほとんどが小片で埋土中からの出土であった。そのうち3点を図化した。

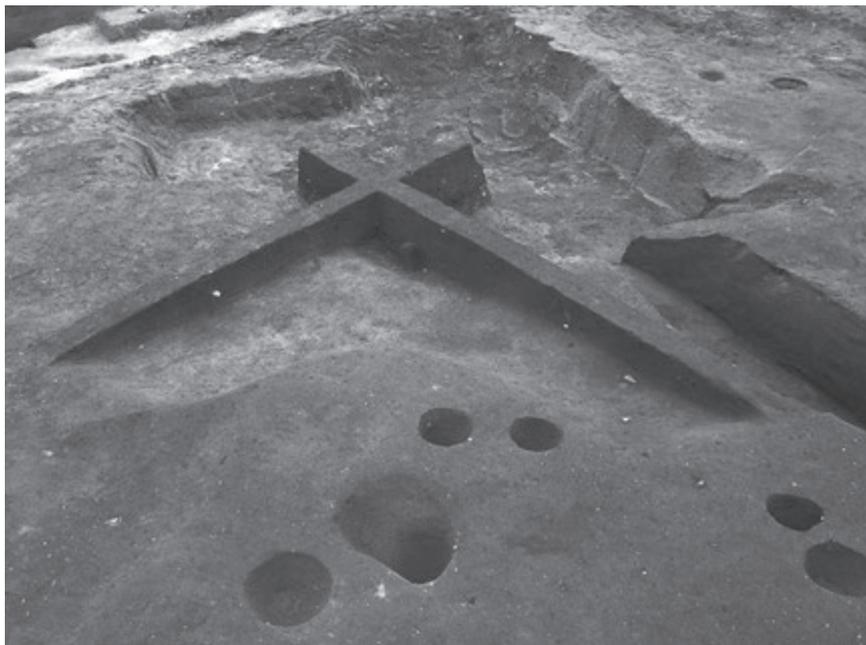
242は平底壺の底部で，接地面やその周辺は粗いヘラケズリで仕上げられる。内底面は指押さえで尖底状で，破断面はサンドイッチ状を呈す。243は丸底壺の9cm程の底部。薄手硬質の焼成で，1～2mmほどの長石が目立つ胎土で，内面は工具と指ナデ，外面は工具ナデ調整である。底部の円盤状の粘土板のつなぎ目と，内外面の黒斑エリアが明瞭に残される。244は口径11.2cm，高さ7.5cmほどの完形の鉢で，口縁部のみを横にナデて仕上げる。胎土に火山灰性のガラス質粒子を大量に含み，硬質に仕上げ，掌に収まりが良い。

竪穴状遺構19号（第66図）

E-20区，IV層正面で検出された。竪穴状遺構14～18号とは近在する位置にある。遺構の西側と南側はトレンチにより削平を受けている。中央部は一段落ち込む。遺構に伴うピットは検出されなかった。遺物は埋土中より438点出土したが，小片であったため図化できなかった。



第65図 竪穴状遺構18号および出土遺物



第66图 竖穴状遗構19号

土坑

土坑 1号 (第67図)

D-37区, IV層正面で検出された。平面プランは楕円形を呈し, 北側は調査年度が異なりすでに削平を受けていた。また, 土器集中遺構3号とは近接し5号とは切り合い関係にあり, 土坑の検出面上に土器集中遺構が存在した。Ⅲb層に相当する埋土内からは土器片が出土したが, その一部は3号, 5号土器集中遺構内出土の遺物と接合できたため, それらの遺物についてはそれぞれ土器集中遺構内出土遺物として捉えた。また, その他の遺物についても土器集中遺構3号もしくは5号の遺物と思われるが判断が難しいうえ, 小片のため図化できなかった。

土坑 2号 (第68図)

C・D-34区, Ⅲ層上面で検出された。平面プランはほぼ円形を呈し, Ⅲ層に相当する黒褐色の埋土中に, 大型の土器片と多数の炭化物が含まれていた。遺物は16点出土し, そのうち2点を図化した。

245は復元口径25cm程の甕で, 口縁部の外反は明瞭で, 長石等の白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し, 器壁は薄い。246は口径12.8cmの鉢で, 脚の一部が欠損する。胴中央部から口縁部が直行する形状で, 橙2.5YRを呈する胴部には, ひび割れが目立つ。

土坑 3号 (第69図)

C-20区, IV層上面で検出された。平面プランは不定形な形状で, 土坑が切り合っている可能性も考えられるが, 判別はできなかった。埋土はⅢ層で, 遺構の西側の

埋土中からは大型の土器片が集中して出土し, 接合により壺に復元できた。遺物は51点出土し, そのうち2点を図化した。

247は口径11.6cm, 高さ35cm程の丸底の壺で, 口縁部は直立気味に外反する。器壁が厚く, 重量のある仕上がりで, 内面肩口にはしほり痕が明瞭に残る。外面の刷毛目調整は緻密で, 口縁部と底部では縦方向, 胴部では横方向に施す。なお, 赤褐2.5YRと特徴的な器肌をなす。248は頁岩製の砥石である。上面と下面及び四側面すべて使用されている。

土坑 4号 (第70図)

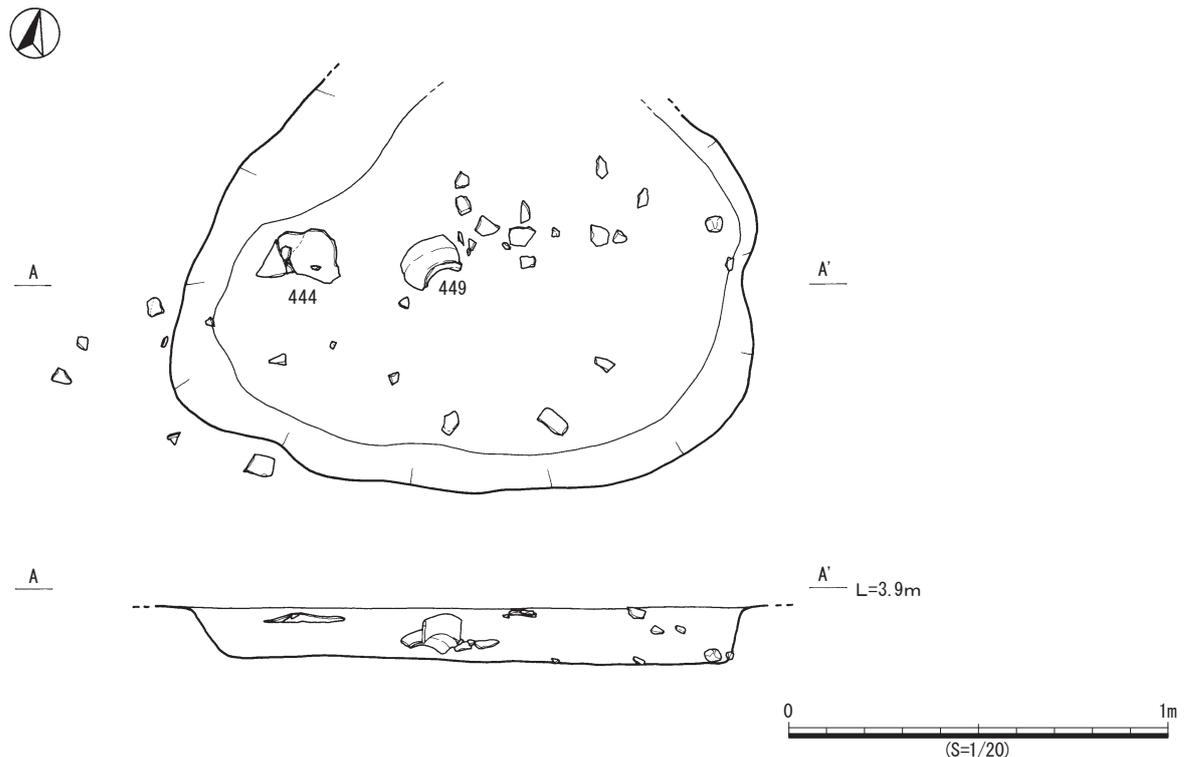
B-34区, IV層上面で検出された。平面プランはほぼ円形で, 遺物は出土しなかったが, 埋土がⅢb層であることから古墳時代の土坑と判断した。

土坑 5号 (第70図)

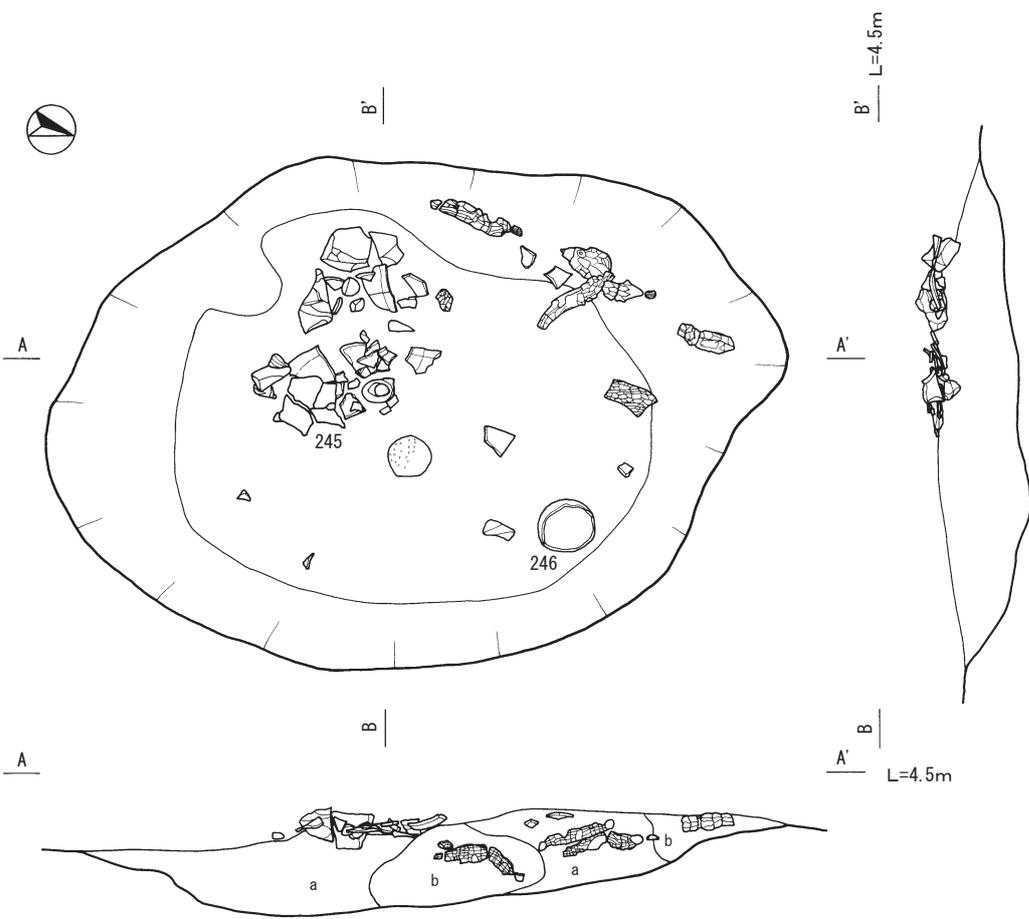
B-34区, Ⅲb層上面で検出された。北東側は竪穴状遺構1号に接するが, 関連については不明である。平面プランはほぼ円形で, 埋土はⅢ層であった。埋土中より土器片が1点出土したが, 小片のため図化できなかった。

土坑 6号 (第70図)

B-34区, Ⅲb層上面で検出された。竪穴住居跡2号の北東側を切って掘り込まれる。平面プランは3基のピットが連結した形状を呈し, 埋土はⅢ層である。土坑の南端からは完形の台付鉢が出土した。埋納されていたものと思われる。

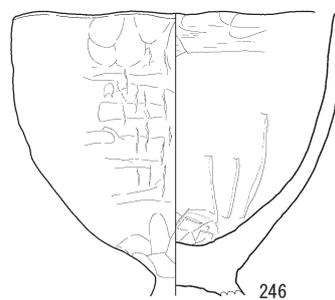
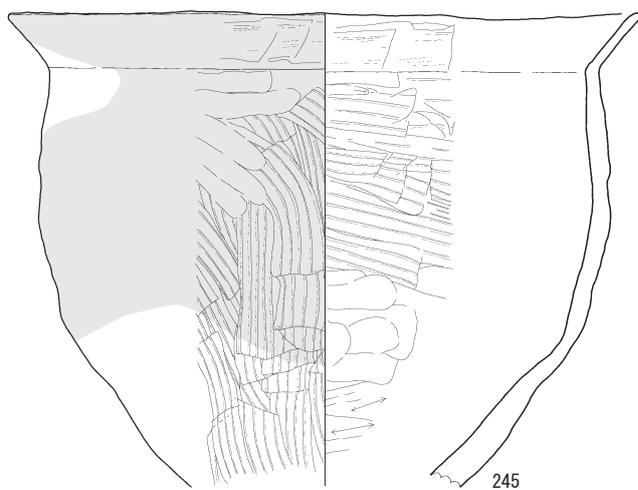
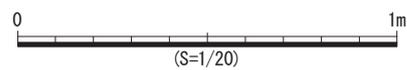


第67図 土坑 1号

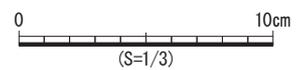
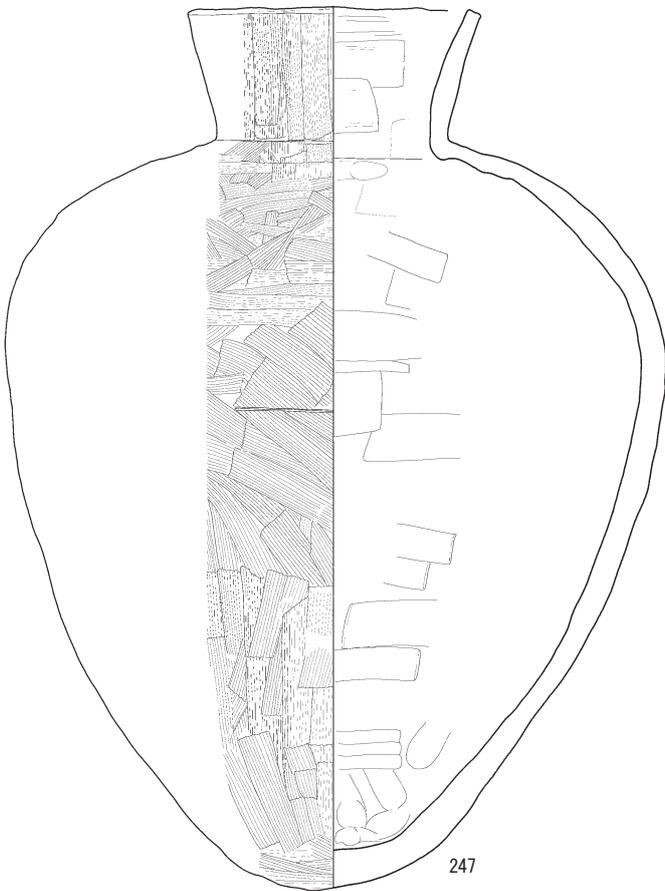
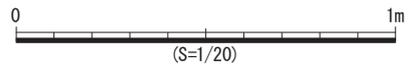
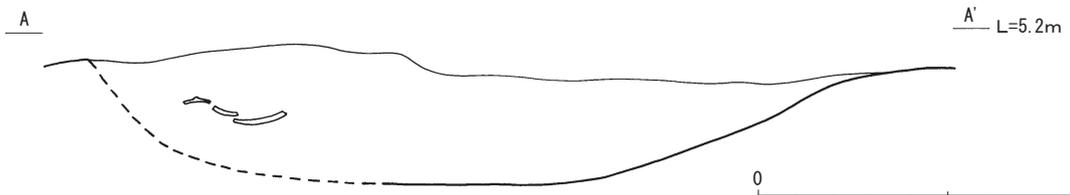
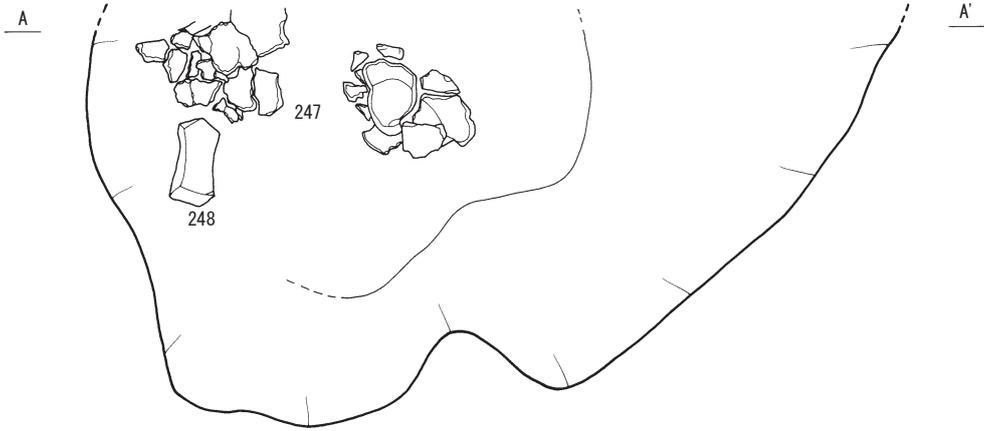


埋土

- a. 黒褐色砂質土Hve10YR2/3(V/C)
- b. 黒色砂質土Hve10YR2/1(V/C)



第68図 土坑2号および出土遺物

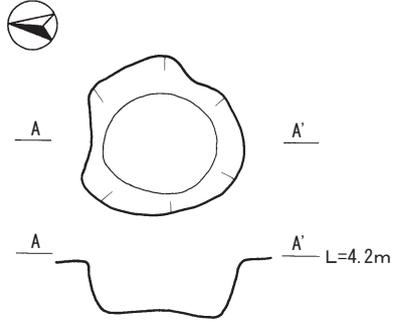


第69図 土坑3号および出土遺物

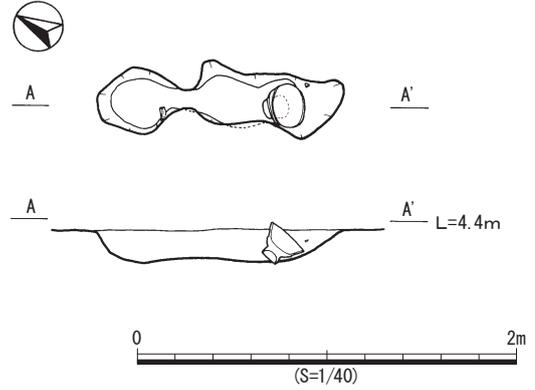
249は口径22cm、高さ15cm程の台付鉢で、底部径は10.5cmである。外面調整は口縁部、胴部、脚部のそれぞれで異なるが、最終は縦方向に工具でナデられている。内面の口縁部立ち上がりは指で斜めにナデ、最終は口唇部を横にナデて仕上げている。なお、口縁部は緩やかな波状を呈し、口唇部は狭い平坦面をなす。外面では、煤

状炭化物を縦方向に断ち切る筋状の消失(吹きこぼれ痕)が認められ、蓋に転用した可能性が想定される。また、連続して剥落する脚の端部は、意図的に打ち欠いた可能性が高い。器壁は厚いが、軽量である。

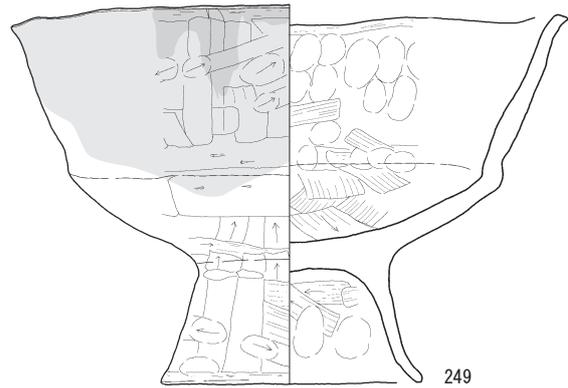
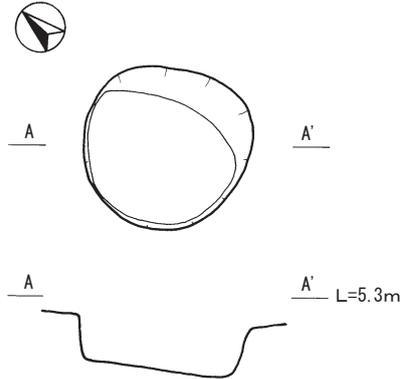
土坑4号



土坑6号



土坑5号

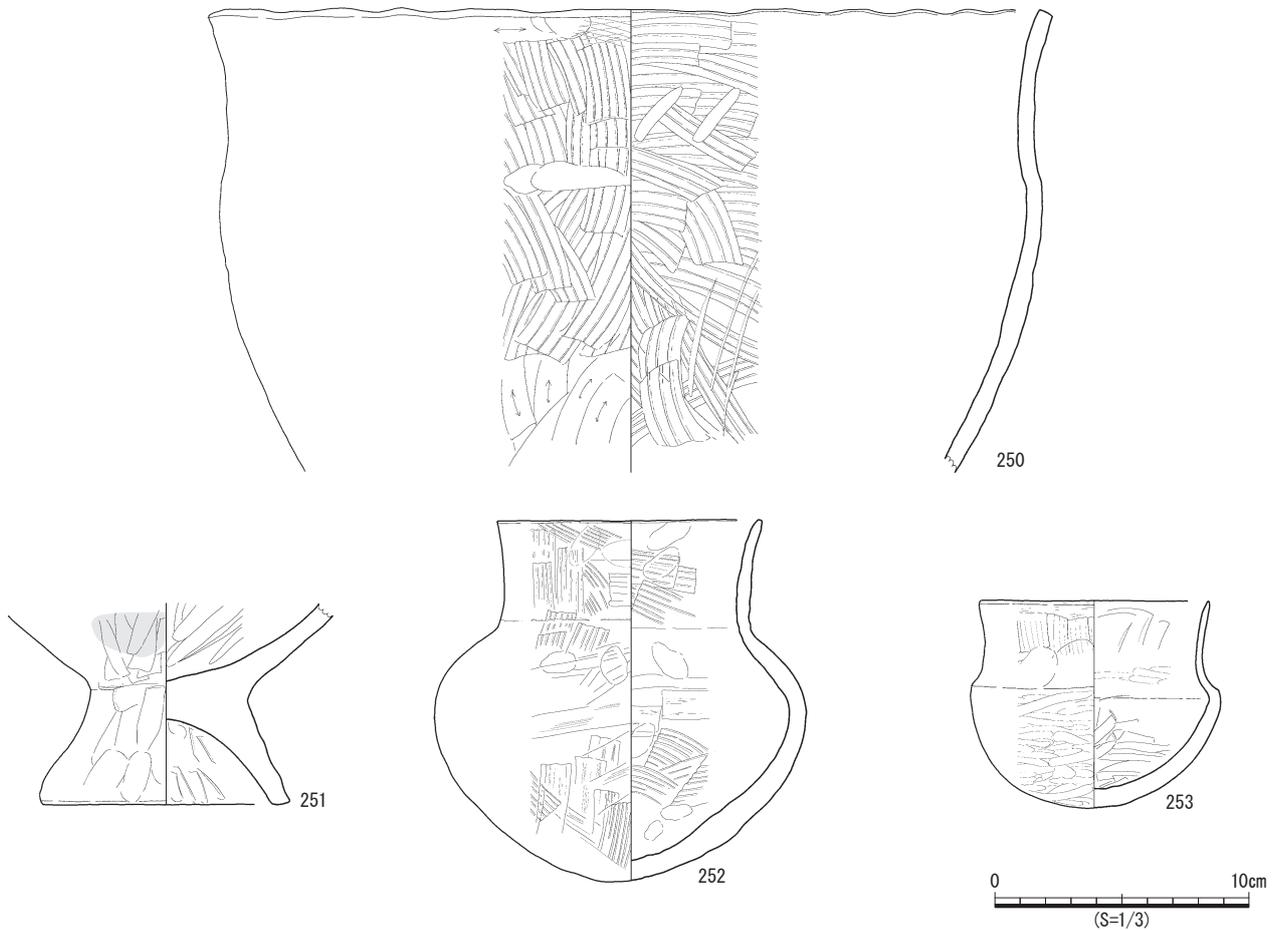
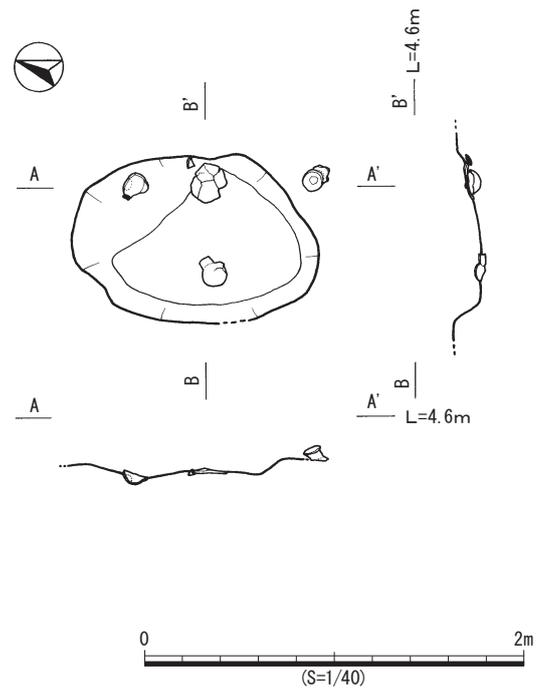


第70図 土坑4～6号および6号出土遺物

土坑7号 (第71図)

B-33区, IIIb層上面で検出された。土坑8~12号, 竪穴住居跡2, 3号, 竪穴状遺構1号とは近在する位置にある。埋土はIII層で, 平面プランは楕円形を呈する。西側がやや深くなっているものの, 全体的に深さの浅い土坑である。遺物はほぼ完形のものも含め9点出土し, そのうち4点を図化した。

250は傾きに疑問も残るが甕と思われる。復元口径は33cm程で, 口縁部と胴部の境界は不明瞭である。器壁は薄く, 内外とも黒10YRで, 内面では光沢を保つ部分も見られる。251は甕あるいは鉢の脚部で, 端部は平坦で, 天井部はドーム状をなす。器壁は厚く, 重量な仕上がりで, ヘラミガキの内底面は光沢を保つ。252は口径10.5cm, 高さ14.4cmの小型丸底壺で, 胴部以下の器壁は厚く重量がある。中でも, 底部周辺の器壁が厚く輪台充填工法と見られる。外面は刷毛目後指ナデし, 内面は刷毛目を主体に, 内底面は指押さえ, 屈曲部は指ナデ, 口唇部は横にナデて仕上げている。内外とも明黄褐10YRで, キラキラとした器面である。253は復元口径9cm, 高さ8.3cmの柑で, ヘラミガキの内外は光沢を保つ。外面の大半は黒斑に覆われ, 火山灰性のガラス質粒子を含む胎土はキラキラとした器面をなす。



第71図 土坑7号および出土遺物

土坑8号(第72図)

B-33区, IIIb層上面で検出された。土坑7, 9~12号, 竪穴住居跡2, 3号, 竪穴状遺構1号とは近在する位置にある。平面プランは不定形で, 埋土はIII層である。遺物は小片が118点出土し, そのうち2点を図化した。

254は口径9.3cm, 高さ7cmの罎で, 先行して胴部以下を作りだし最後に底面を円盤状の粘土で埋める輪台充填の成型方法がみられるとの指摘を受けた。(久住氏)。内面は刷毛目の後ナデ消して成形し, 外面は底部付近はヘラケズリ, 胴部から上位は刷毛目をうい, 屈曲部も刷毛目を強く押しつけて作りだしている。輝石等が含まれることからキラキラとした器面で, 破断面はサンドイッチ状を呈している。また, 底部外面には少量であるが, 煤状炭化物が残される。なお, 復元には赤変した2点の破片が含まれる。255は鋸歯文を有する罎の口縁部である。小片のため口径, 傾き等は不明である。精選胎土を使用し, 器肌はにぶい橙5YRをなす。

土坑9号(第72図)

B-33区, IV層正面で検出された。北東側は竪穴住居跡3号に接し, 南東側は土器集中遺構7号に接する。関連や時期差など詳細は不明である。平面プランは不定形で, 長軸2.0m×短軸1.9mを測り, 深さについては不明である。遺物は1点出土した。

256は丸底甕である。くノ字口縁で, 口唇部内側に段を持つ。復元口径14.8cmで, 胴部は丸く膨らむ。口縁部は丁寧横にナデ, 胴部は規格の異なる刷毛目で縦横に調整し, 内面のヘラケズリで薄く仕上げる。頸部屈折部を除き煤状炭化物が付着する。器肌は内外面ともにぶい橙2.5YRをなし, 胎土は1~2mm程の長石と石英, 1mm以下の金雲母を含む。肥後系の搬入品と思われる。

土坑10号(第72図)

B-32・33区, IIIb層上面で検出された。土坑7, 8, 10~12号, 竪穴住居跡2, 3号, 竪穴状遺構1号とは近在する位置にある。平面プランは楕円形で深さは浅く, 埋土はIIIa層である。遺物は1点を図化した。

257は復元口径15.5cm, 高さ13.8cm程の鉢で, 4cm程の高台を持つ。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で, 器壁は厚く, 特に, 底部付近ではヘラケズリが繰り返されるが, 重量のある仕上がりである。器面に意図的と思われる線刻が確認できるが, その一部しか残されず意匠は読み取れない。

土坑11号(第72図)

B・C-33区, IIIb層上面で検出された。土坑7~9, 11, 12号, 竪穴住居跡2, 3号, 竪穴状遺構1号とは近在する位置にある。平面プランは隅丸方形で, 埋土はIII層である。遺物は110点出土し, 2点を図化した。

258は復元口径18.6cmの甕で, 口縁部は緩やかにくノ字に外反し, 特に口縁部は, 指頭で丁寧にナデて仕上げ

る。器壁は薄く, 軽量な仕上がりであるが, 微細なひび割れと, 発泡痕のような小孔が残される。259は復元口径12.6cmの鉢で, 形状や傾き等不明である。口縁部は緩やかにくノ字に外反し, 特に内面は指頭で丁寧にナデる。外面には指頭痕とひび割れが明瞭に残り, 内面の屈曲部に沿って煤状炭化物が帯状に付着する。きめの細かい胎土を使用し, 器壁は薄く, 硬質な焼成で, 灰白10YRの器肌をなす。

土坑12号(第73図)

C-33区, IIIb層上面で検出された。土坑7~10, 12号, 竪穴住居跡2, 3号, 竪穴状遺構1号とは近在する位置にある。平面プランは楕円形で, 埋土は黒褐色を呈するIII層で, 炭化物も含まれていた。遺物は小片が多数出土したが, 図化できなかった。

土坑13号(第73図)

C-33区, IV層上面で検出された。土坑7~11号, 竪穴住居跡2, 3号, 竪穴状遺構1号とは近在する位置にある。平面プランは楕円形で, 埋土はIII層である。遺物は3点出土したが, 図化できなかった。

土坑14号(第73図)

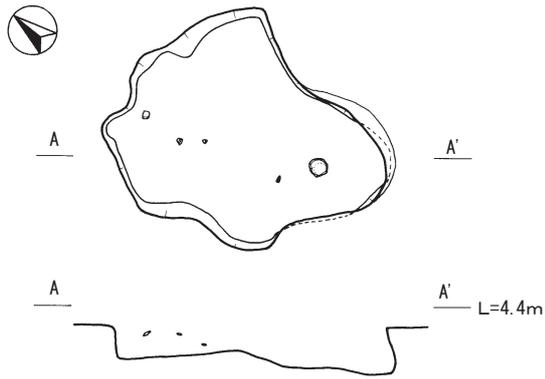
A'-30区, III層中で検出された。平面プランは不定形な形状で, 埋土も黒色砂質土のIII層である。遺物は215点出土したが, すべて小片で図化できなかった。

土坑15号(第74図)

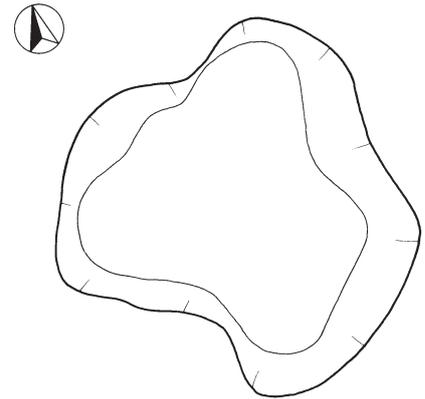
A-30・31区で検出された。検出層位は不明で, 埋土は黒褐色砂質土であるが, 出土した遺物より古墳時代の土坑と判断した。平面プランはほぼ楕円形を呈する。遺物は287点出土し, そのうち8点を図化した。

260は甕または鉢の口縁部と思われる。口径, 傾き等は不明である。砂粒の多い胎土で, 最終的にはナデて仕上げる。器面に粘状?圧痕が複数残る。261は短く直線的に伸びる脚で, 脚部内面天井は丸い。特に, 内面は明赤褐2.5YRと赤い。器壁は厚く, 長石等の白色鉱物入が目立つ。262は長く直線的に伸びる脚で, 胴部の横方向の工具ナデが特徴的である。脚の径は10.2cmで, 器壁は厚く, 若干軟質な焼成で, 石英やカクセン石等の混入が目立つ。263はくノ字に外反する比較的大型の壺の口縁部で, 口径は23cm程となる。火山灰性のガラス質粒子を多量に含み, きめの細かい精選胎土で, 赤色の化粧土が使用された可能性もあり, 両面とも刷毛目主体で調整する。264は坏の途中で屈折し, 大きく外反する大型高坏の坏部と見られる。きめの細かい胎土で, 器壁は薄く成形するが, 両面に刷毛目が多く残される。265は坏の途中で屈折し, 大きく外反する高坏の坏部と見られる。精選されたきめの細かい胎土で, 内面のヘラミガキは丁寧である。266は高坏の脚部で, 筒部との境に器面方向からの5ヶ所の穿孔が見られる。筒部の接合部で剥落しているが, 筒は中空の可能性が高い。17.8cm程の径が復元され, 器壁は厚く, 火山灰性のガラス質粒子を

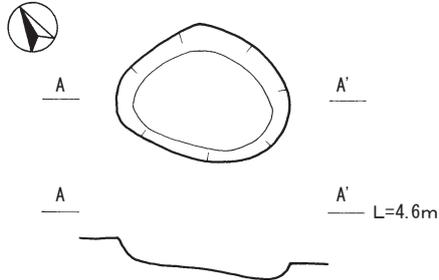
土坑8号



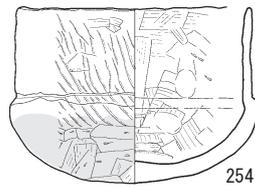
土坑9号



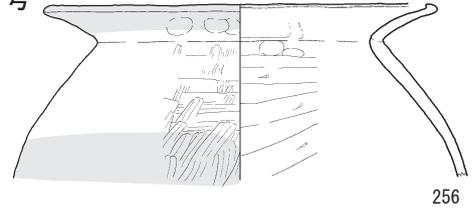
土坑10号



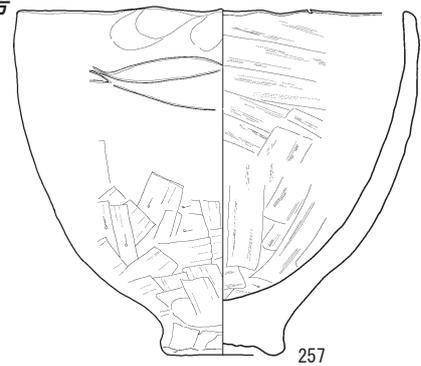
8号



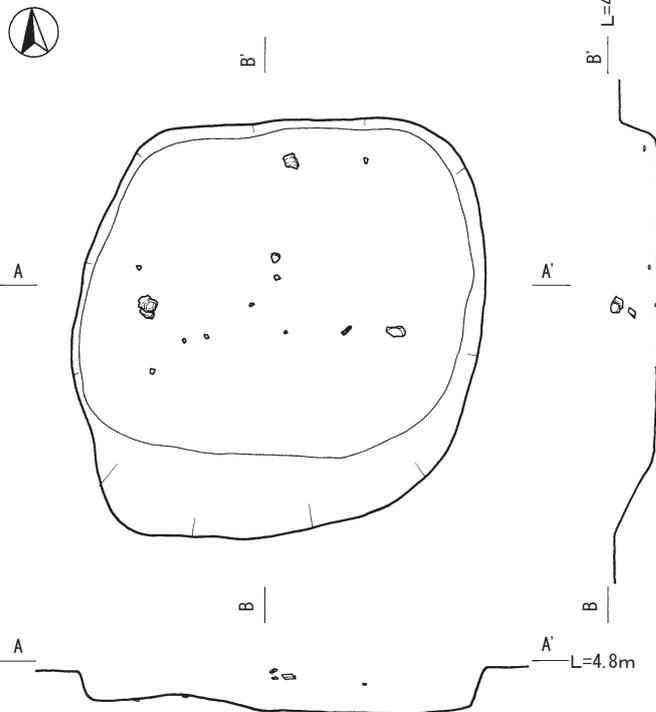
9号



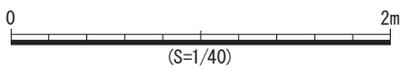
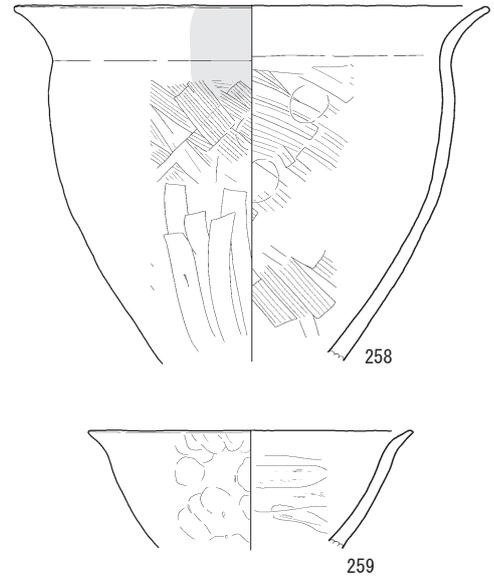
10号



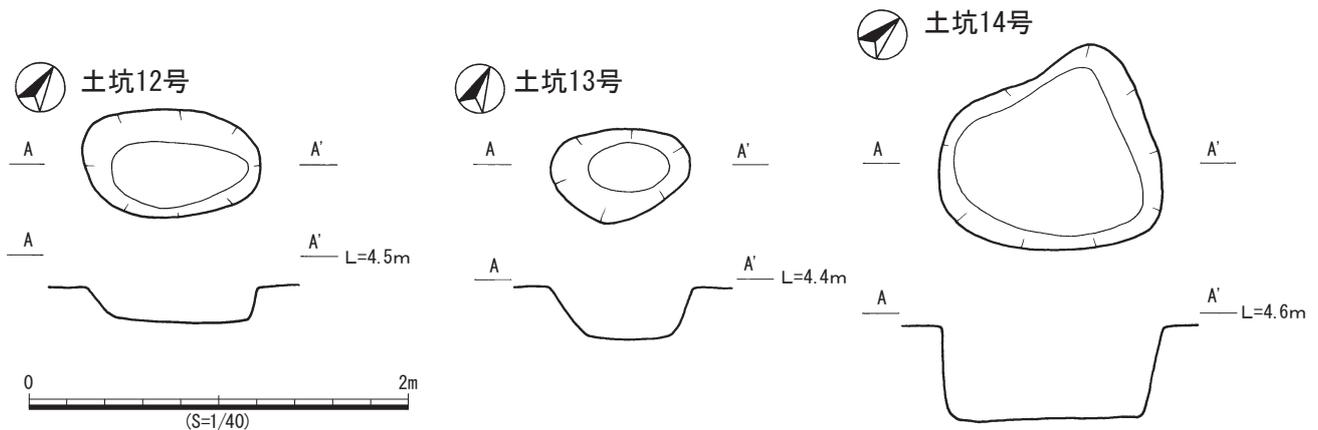
土坑11号



11号



第72図 土坑8~11号および出土遺物



第73図 土坑12～14号

多量に含む胎土を使用する。器面は浅黄橙7.5YRを呈する。267は復元口径13.6cm、高さ6.5cm程の埴で、両面とも工具ナデを繰り返した後、指ナデで器面調整を行った後、接地面のヘラケズリで仕上げている。この資料については、伝統的V様式を示すものとして、熊本県中北部との交流を示すとの久住氏の見解がある。器面はにぶい褐7.5YRを呈する。

土坑16号 (第75図)

B-31区、IV層上面で検出された。竪穴住居4号に近接する。平面プランは楕円形で、埋土はⅢ層である。遺物は55点出土し、そのうち1点を図化した。

268は口径8.4cm、高さ7.8cmの小型丸底壺で、口縁部はやや開きながら直行し、胴部は算盤玉状に明瞭に屈折する。精選されたきめの細かい胎土を用い、淡橙5YRの器肌を成す。

土坑17号 (第75図)

B-31区、IV層上面で検出された。平面プランは不定形な形状で、埋土は黒褐色のⅢa層である。遺物は161点出土し、そのうち1点を図化した。

269は口縁部との境界には、刷毛目のカキアゲを明瞭に残す。また、口縁部とも境界付近はナデ調整が見られるが、以下はヘラケズリで、内面口縁部はナデられ、胴部は粗い工具ナデが見られる。両面ともにぶい黄橙10YRで、硬質で、軽量な仕上がりとなる。

土坑18号 (第75図)

C-31区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、深さが深い。埋土はⅢ層である。遺物は16点出土したが、図化できなかった。

土坑19号 (第75図)

C-31区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、埋土は黒褐色のⅢa層である。遺物は6点出土したが、図化できなかった。

土坑20号 (第75図)

D-31区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、埋土はⅢ層であるが、深さの浅い土坑である。遺物は10点出土したが、図化できなかった。

土坑21号 (第76図)

C・D-30区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、埋土はⅢ層である。遺物は4点出土したが、図化できなかった。

土坑22号 (第76図)

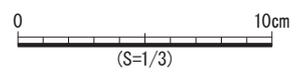
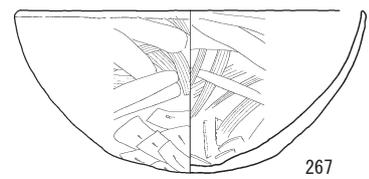
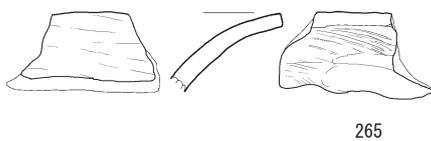
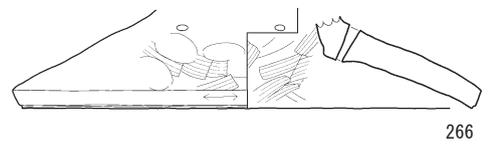
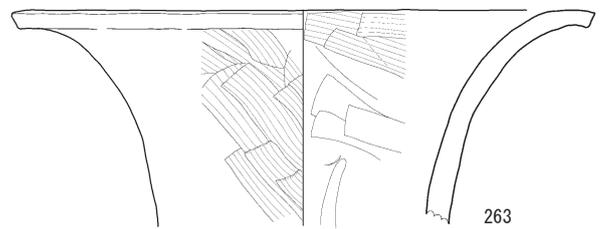
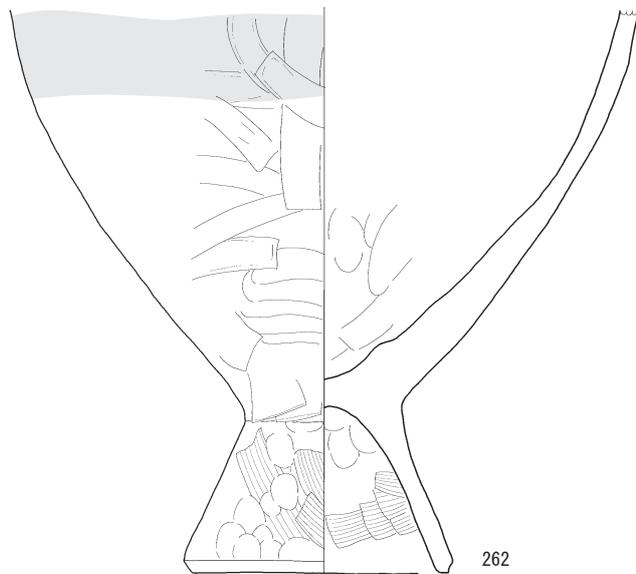
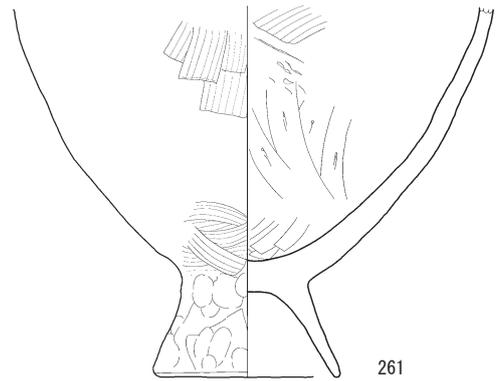
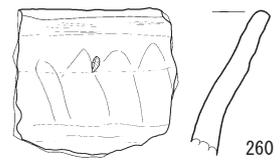
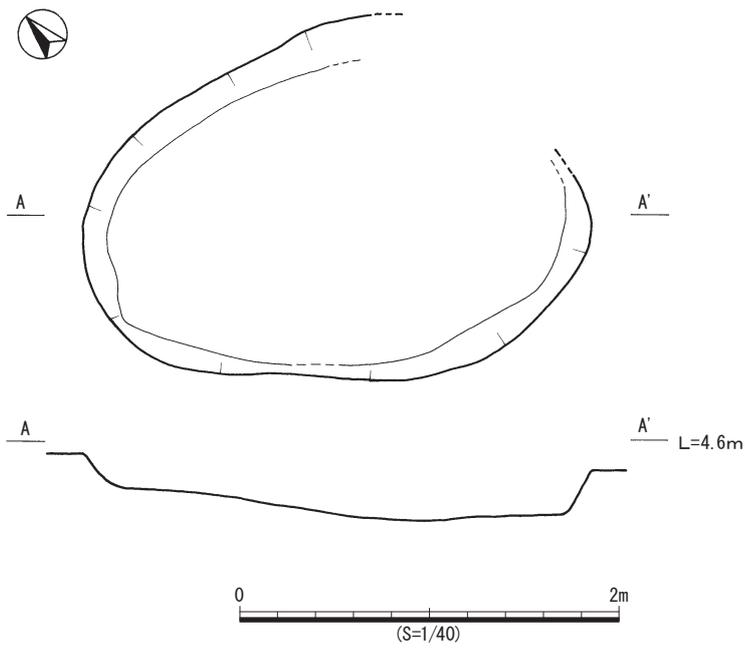
B-29区で検出された。検出層位は不明であるが、遺構内より古墳時代の大型の土器片が出土したことから、同時期の遺構と判断した。平面プランは不定形で、東側がやや深くなる。遺物は1点を図化した。

270は口径29cm、高さ30cmをわずかに超す脚付甕で、脚の一部は欠損する。口唇部は平坦面で、口縁部と胴部の区分は刷毛目のカキアゲで行い、口縁部は緩やかに外反する。器面の広範囲と、内面の口唇部沿い10mm程に煤状炭化物の付着が見られる。石英や長石、カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で、器壁は厚い。

土坑23号 (第76図)

D-29区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形を呈する。埋土はⅢ層で、焼土と炭化物を含む。遺構内より古墳時代の大型の土器片が出土したことから、同時期の遺構と判断した。遺物は55点出土し、そのうち2点を図化した。

271は復元口径23cm、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲ状に工具を繰り返し重ね、その後、丁寧にナデで

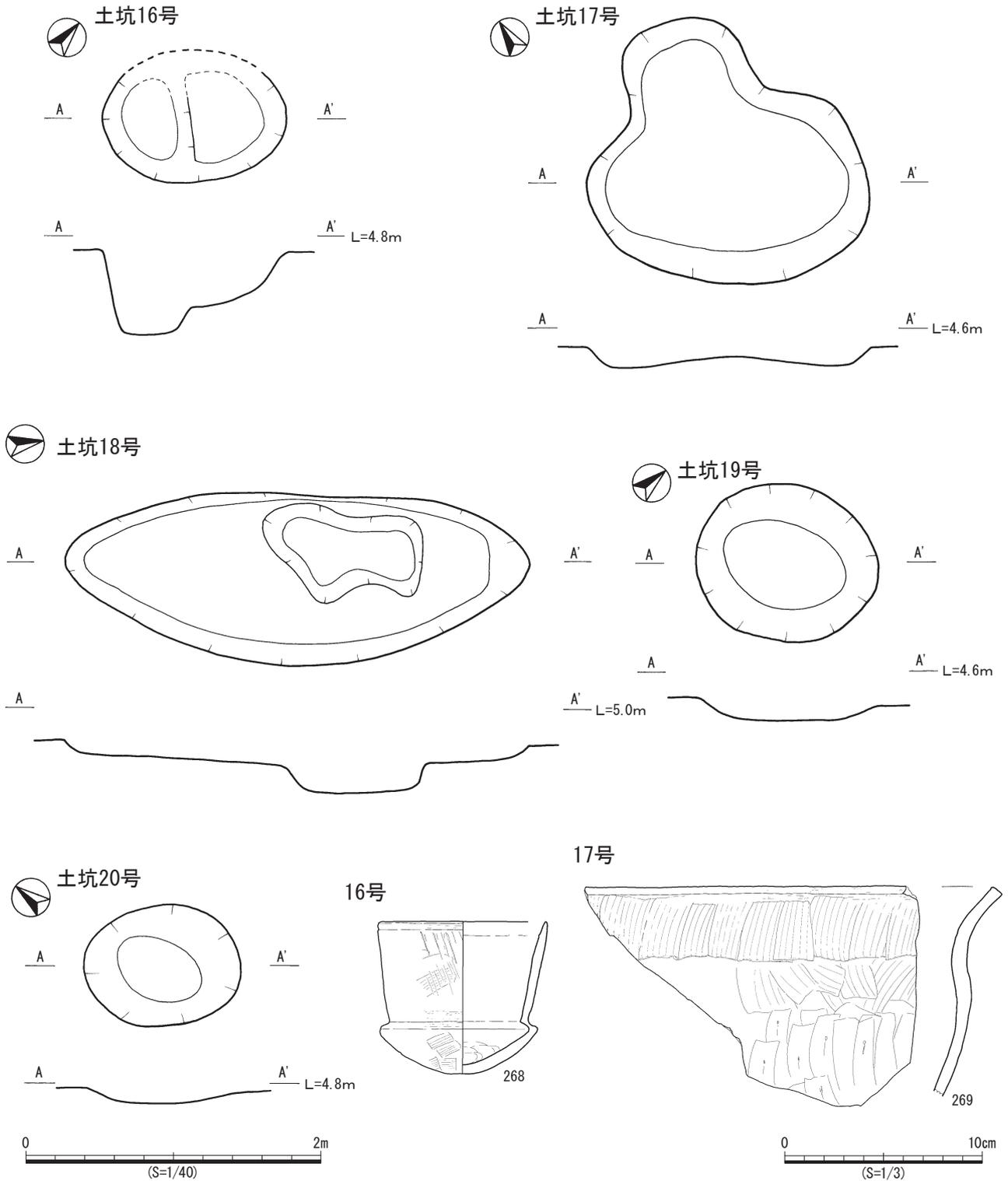


第74図 土坑15号および出土遺物

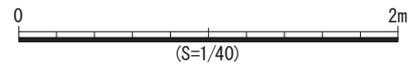
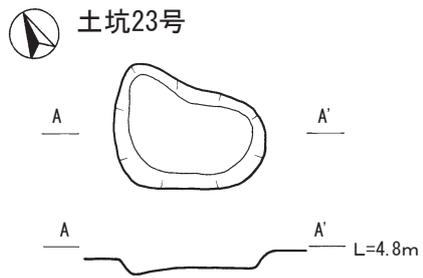
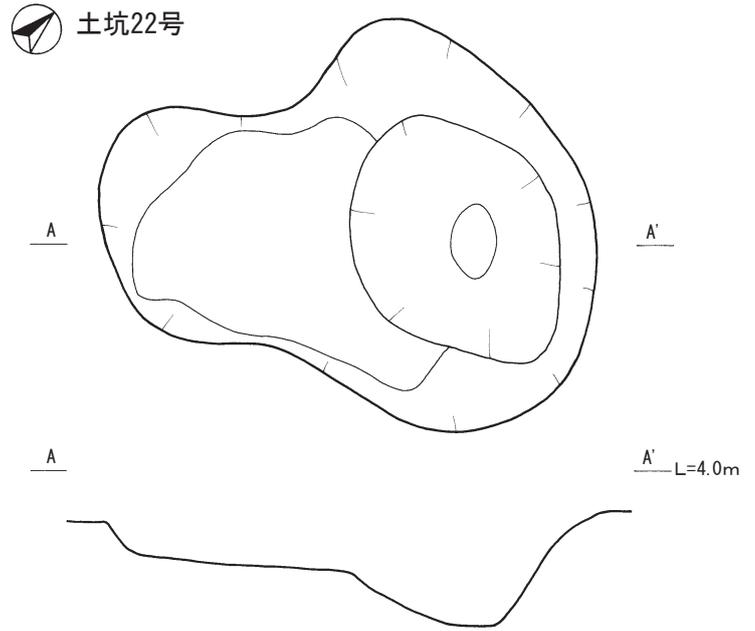
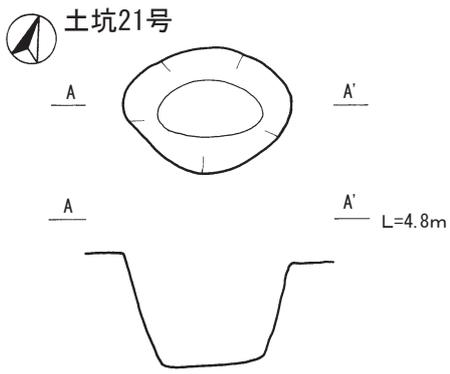
仕上げる。内面は刷毛目を横方向に深く施すことにより、稜線が形成されている。煤状炭化物は胴部を中心に帯状に付着し、口唇部から屈曲部間には氷柱状に付着する。また、胴下部では器壁の剥落も見られる。272は復元口径19.8cm、内外面とも工具ナデを重ね、特に内面には丁寧な仕上げが見られる。胴部には黒斑と、ひび割れを残す。

土坑24号 (第77図)

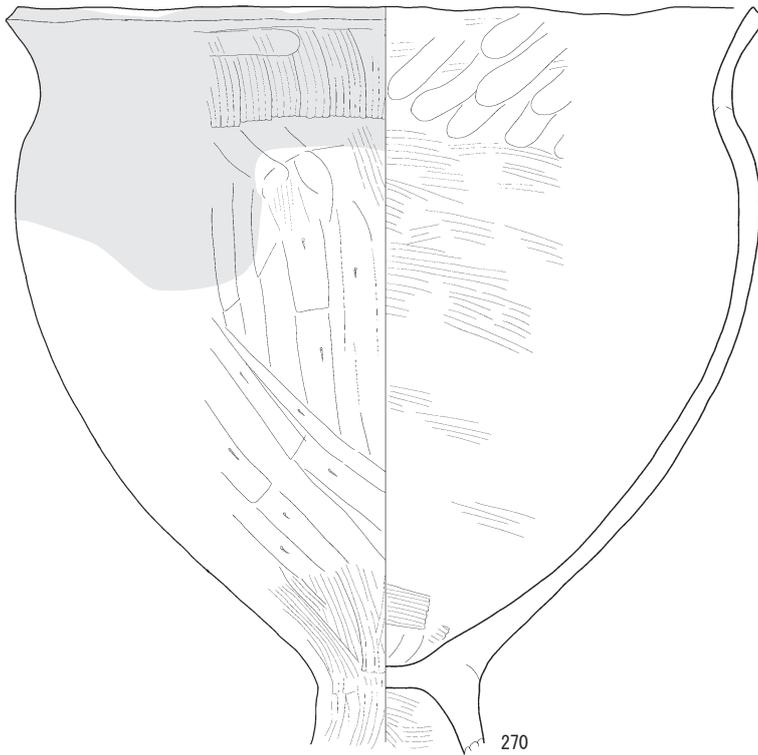
E-29区, IV層上面で検出された。平面プランは楕円形を呈し、埋土はⅢ層である。遺構内からは甕の大型土器片が出土した。遺物は651点出土し、そのうち5点を図化した。



第75図 土坑16~20号および16・17号内出土遺物



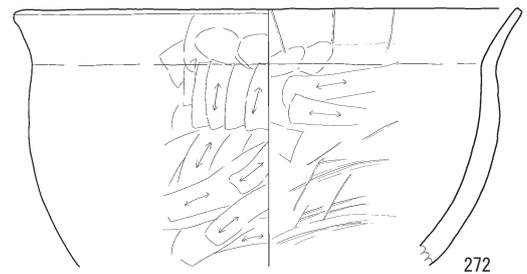
22号



23号



23号



第76図 土坑21~23号および22・23号内出土遺物

273は口縁部と脚部が欠損する甕で、口縁部の外反即ち口縁部と胴部の境界は明瞭である。胎土に大粒の金雲母を含み、器面調整の丁寧な器壁は薄く、硬質で端正な仕上がりが見られる。274は復元口径18.3cm程で、口縁部から胴上部にはぶい橙10YRで、中央部は煤状炭化物が付着し、下部から脚部は赤変しにぶい橙5YRを呈している。なお、口縁部と胴部の境界に残る痕跡から、刷毛目のカキアゲが先行したことが読み取れる。275は復元口径24cm程の、口縁部の短い甕で、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分するが、その後のナデで掻き消される。両面とも橙5YRで、外面に煤状炭化物の付着が見られる。276は復元口径28.2cm程の、口縁部の短い甕で、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分するが、その後のナデで掻き消され、刷毛目の起点のみが残る。外面には多数のひび割れや煤状炭化物の付着が見られ、石英の混入が目立つ。277は口唇部は丸く、緩やかに外反する口縁部で、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分し、明確な段を有する。内外ともきめの細かい刷毛目を使用する。硬質な焼成で、火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土を使用する。

土坑25号 (第78図)

E-27・28区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形である。遺構内にピットを4基有する。埋土はⅢ層である。遺物は60点出土したが、小片で図化できなかった。

土坑26号 (第78図)

D・E-27区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、埋土はⅢ層である。遺物は86点出土したが、小片で図化できなかった。

土坑27号 (第78図)

E-27区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、南側にはピットを有する。埋土はⅢ層で、焼土やブロック状の炭化物を多く含む。遺物は44点出土したが、小片で図化できなかった。

土坑28号 (第78図)

D-24区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、埋土はⅢ層である。遺物は9点出土したが、小片で図化できなかった。

土坑29号 (第78図)

E-23区、IV層上面で検出された。平面プランは隅丸方形で、埋土はⅢ層である。遺物は22点出土したが、小片で図化できなかった。

土坑30号 (第78図)

E-23区、IV層上面で検出された。平面プランはほぼ円形で、埋土はⅢ層である。西側は、13号堅穴住居跡を切る。遺物は1点を図化したが、13号堅穴住居跡の遺物の可能性も考えられる。

278は口径23cm、高さ13.2cmの丸底の鉢とした。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の工具ナデで、大粒の

岩粒を多く含むことから、その方向に沿った粒子の移動が顕著に観察できる。なお、最終段階で口縁部を横方向にナデることから、口縁部は尖り気味に仕上がる。石英の混入が目立ち、破断面はサンドイッチ状を呈している。また、接地面付近は指宿胎土で、口縁部から胴部上位は赤変し、下部では帯状に煤状炭化物が付着する。

土坑31号 (第79図)

D-22区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、埋土はⅢ層である。遺物は出土しなかった。

土坑32号 (第79図)

A'-21区で検出された。検出層位の詳細は不明で、埋土は黒褐色砂質土であるが、出土遺物より古墳時代の土坑と判断した。平面プランは楕円形である。遺物は23点出土し、1点を図化した。

279は復元口径16cm、高さ11.9cm、底部径5.2cm程で、口縁部が緩やかに内弯する鉢である。口唇部は工具でナデることから仕上がりは様ではない。器壁が厚く、重量があり、外面下部では刷毛目後、再度ヘラケズリを加えた痕跡が明瞭に残される。器面の一部であるが、クレータ状の破裂痕が見られる。1mm程の赤色粒や黒色鉱物を多量に含む胎土で、器面のザラザラ感が強く、破断面はサンドイッチ状を呈す。

土坑33号 (第79図)

A-21区で検出された。平面プランは楕円形を呈し、検出層位は不明であるが、埋土はⅢ層である。遺物は出土しなかった。

土坑34号 (第79図)

A・B-20区で検出された。平面プランはほぼ円形で、検出層位は不明であるが、埋土は茶褐色砂質土でⅢ層である。遺物は49点出土したが、小片で図化できなかった。

土坑35号 (第79図)

B-19区で検出された。平面プランはほぼ円形で、検出層位は不明であるが埋土は黒褐色砂質土のⅢ層である。遺物は13点出土したが、小片で図化できなかった。

土坑36号 (第79図)

E-15区、IV層上面で検出された。平面プランは楕円形で、埋土はⅢ層である。遺物は出土しなかった。

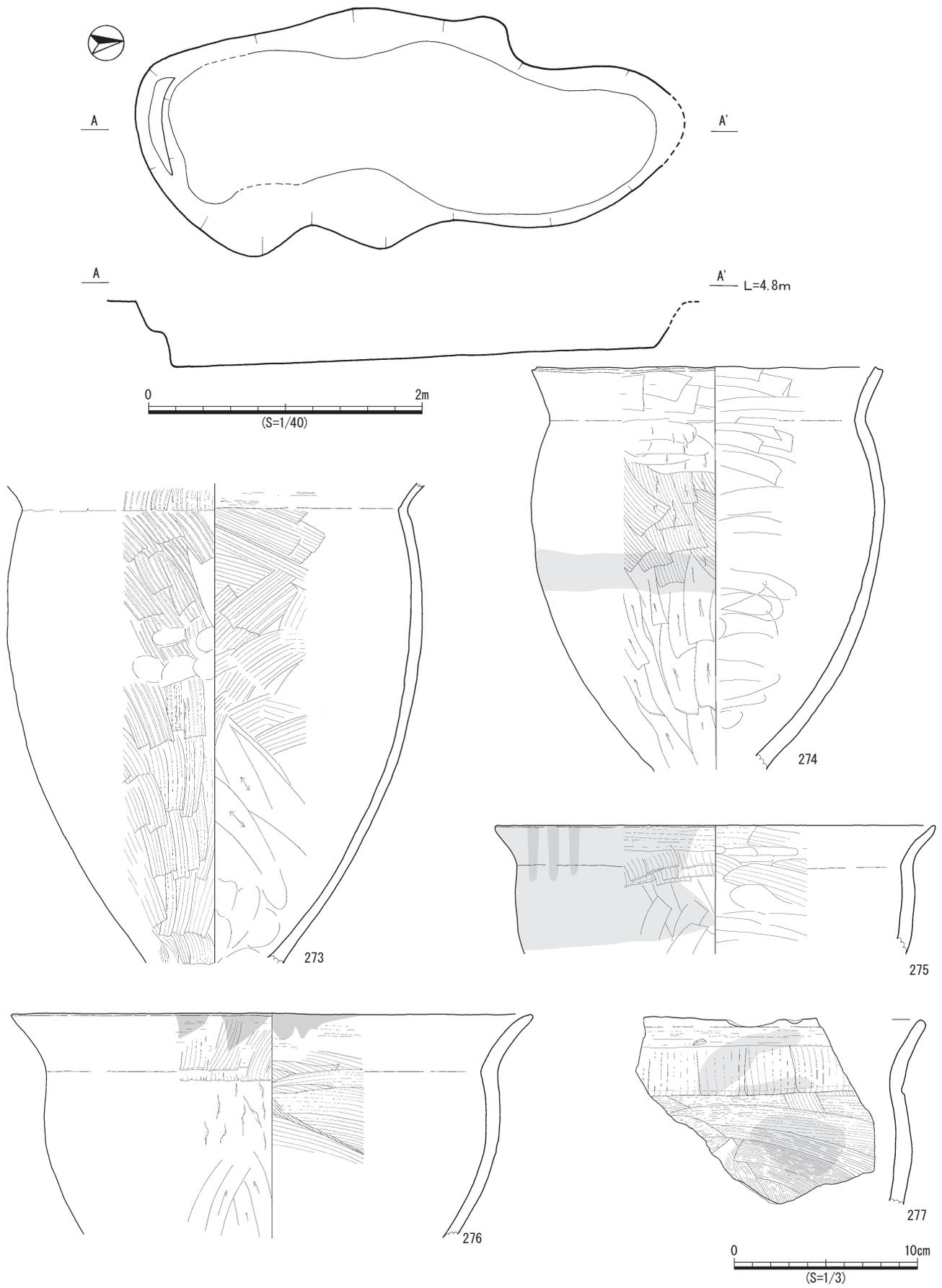
ピット

ピット1号 (第80図)

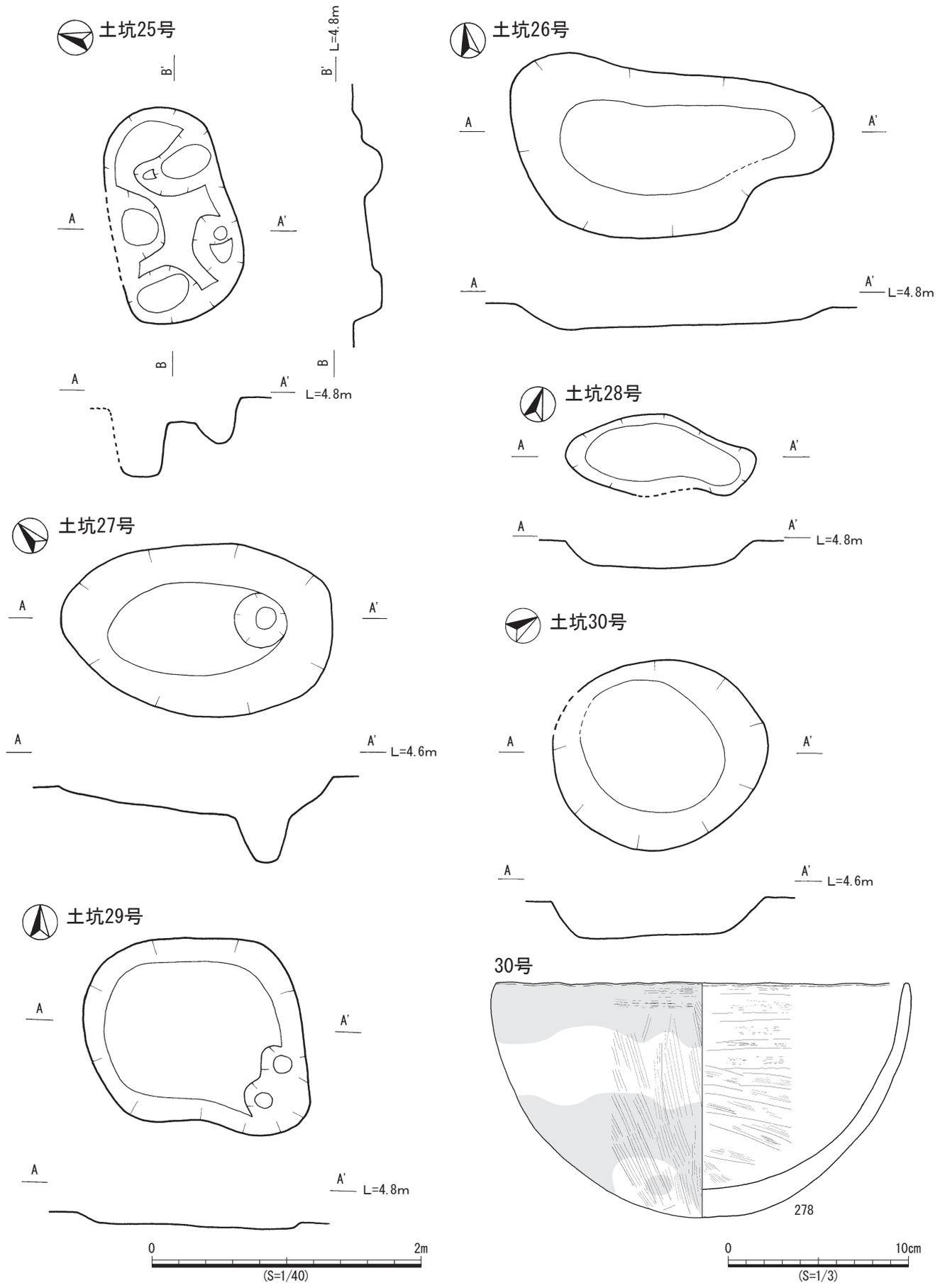
A・B-34区、Ⅲb層上面で検出された。埋土はⅢ層である。直径約50cmの円形を呈し、深さ17cmを測る。ピットの中からは、壺胴部の土器片が重なった状態で出土した。壺の頸部から口縁部と底部は検出されなかった。

280は胴部に2条の刻目突帯を持つ大型壺で、突帯部では40cmの径が計れる。

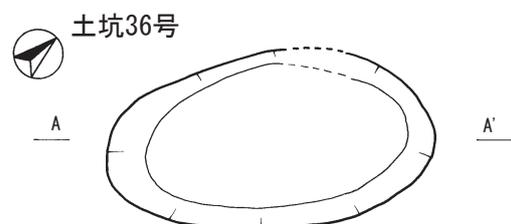
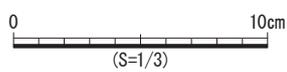
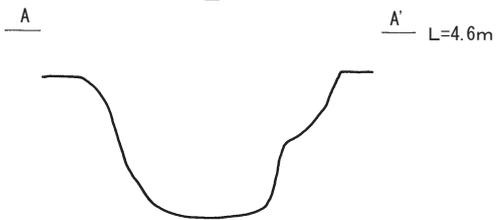
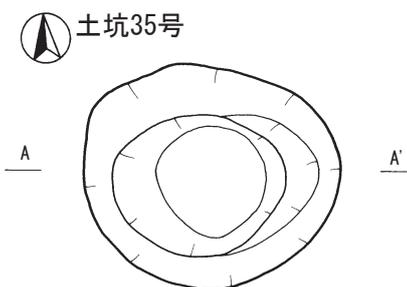
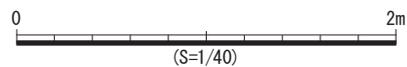
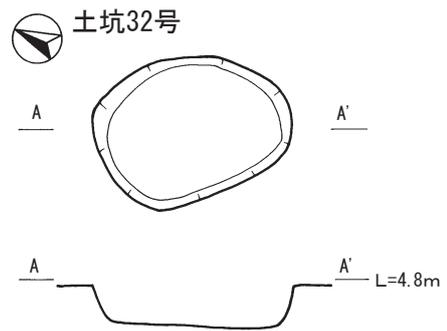
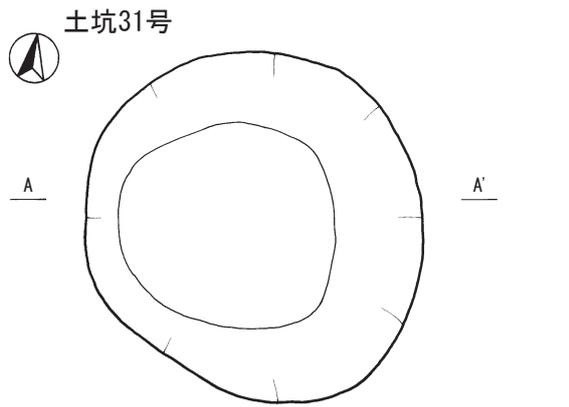
両面とも刷毛目主体の調整で、内面肩口などでナデ仕上げが見られる。2.5mmほどの赤色粒や白色の岩粒を含



第77図 土坑24号および出土遺物

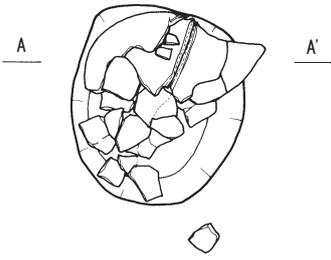


第78図 土坑25~30号および30号内出土遺物

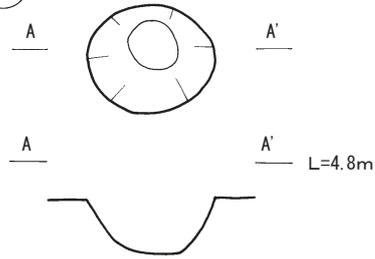


第79図 土坑31~36号および32号内出土遺物

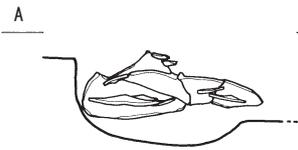
ピット1号



ピット2号



L=4.8m

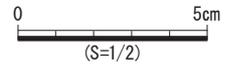
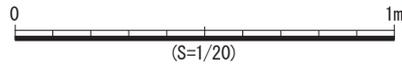


L=5.1m

2号



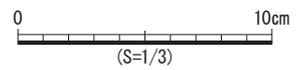
281



1号



280



第80図 ピット1・2号および出土遺物

み、器壁は厚く、重量がある。明褐色2.5YRと赤い器肌で、下部の一部には煤状炭化物の付着が認められる。

ピット2号 (第80図)

B-33区、Ⅲb層上面で検出された。埋土はⅢ層である。直径約33cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。ピット内からは鉄鍬が検出された。281は全長6cm、鍬身部1.5cmの短頸の鉄鍬で、この規格から4世紀後半から5世紀前半に限定できる可能性がある。

ピット3号 (第81図)

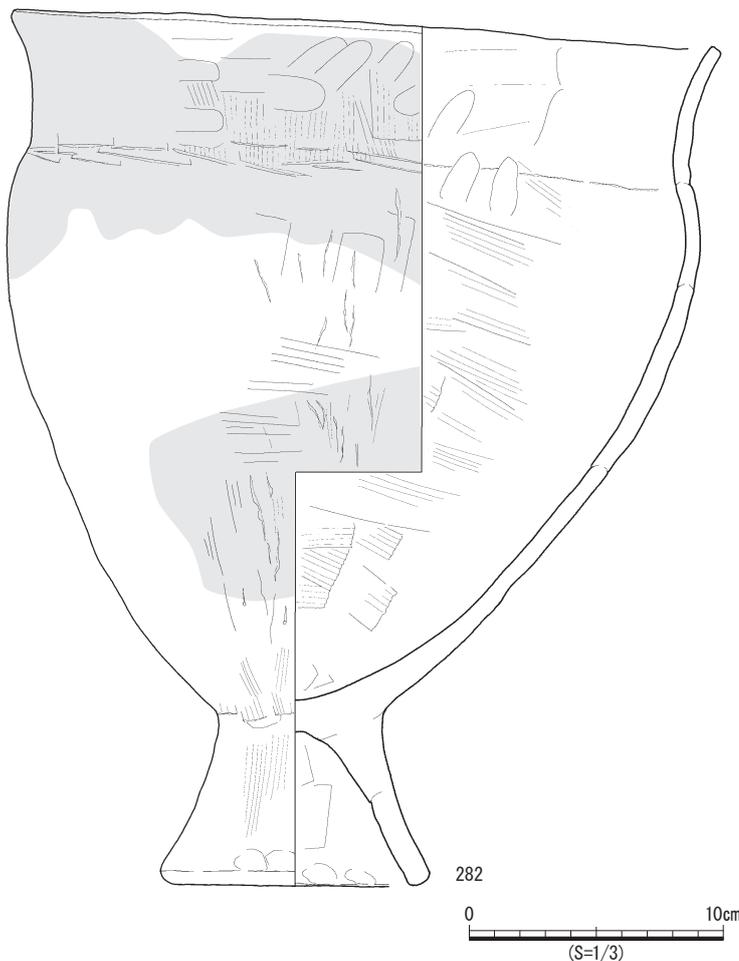
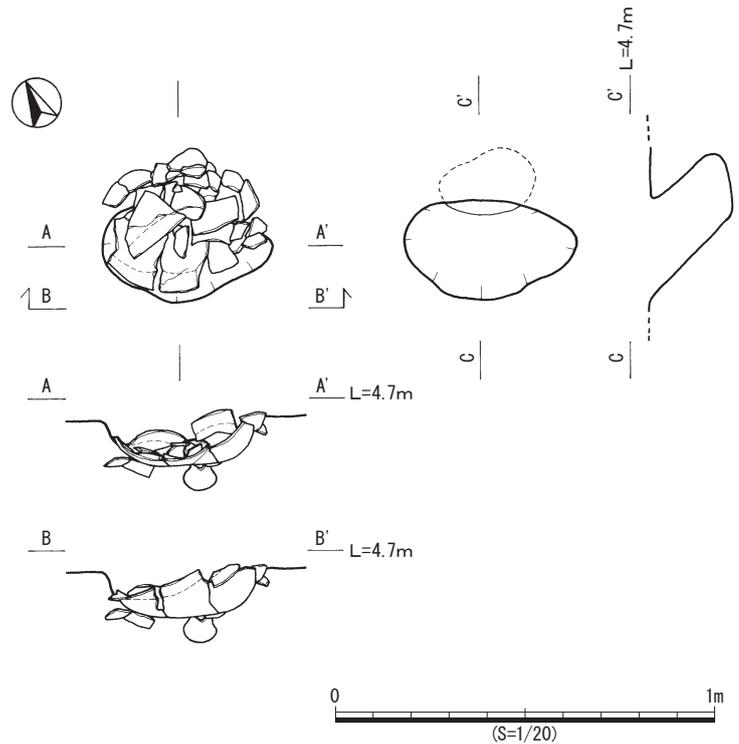
B-32区、Ⅲb層で検出された。埋土はⅢ層である。直径約45cmの円形を呈し、深さは21cmを測る。ピットからは、甕の大型土器片が出土し、接合によりほぼ完形に復元することができた。ピットの底部分に脚部があり、その上に口縁部が重なっていることから、ピット内に甕を立てた状態で埋納した可能性も考えられる。

282は口径28cm、高さ34cm底部径10.6cmで、径の最大は口縁部にある大型甕である。内面の稜線は消失し、外面では刷毛目を横方向に移動することで、稜線の存在を意識している。なお、狭い口唇部は平坦面を形成している。砂質の強い胎土で、石英や長石、カクセン石等の黑色鉱物を多く含み、キラキラとした器面はガラガラ感が強く、縦方向のひび割れや、同じく縦方向のケズリによる粒子の移動が顕著に見られる。また、煤状炭化物は、口唇部から胴部の一部で付着が見られる。硬質な焼成は橙2.5YRで、いわゆる指宿胎土に属する。

ピット4号 (第82図)

C-31区、Ⅲb層で検出された。埋土はⅡ層である。直径約27cmの円形を呈し、深さ70cmを測る。遺物は埴が1点出土した。

283は口径7.9cm、高さ6.6cmで、底部はわずかな接地面を持つ。器壁は厚く、特に内面はヘラケズリを重ねている。砂粒を多く含む胎土で、器面はガラガラ感が強く、重量があり、サンドイッチ状の破断面が見られる。口縁部外面は縦方向の刷毛目で、最終的に最上位を横に工具でナデ、鋭利な工具で鋸歯文が施される。



第81図 ピット3号および出土遺物

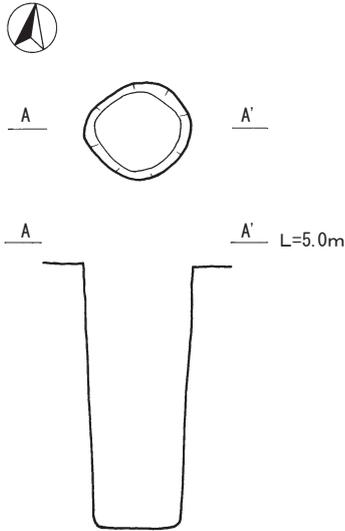
ピット5号 (第82図)

E-31区, IV層上面で検出された。プランは楕円形を呈し、長軸50cm×短軸35cm、深さ21cmを測る。断面がV字状に凹むピット内には、壺の肩部の大型土器片が内面を上にして入れられ、さらにその上には手捏土器やその他の土器片が入れられていた。

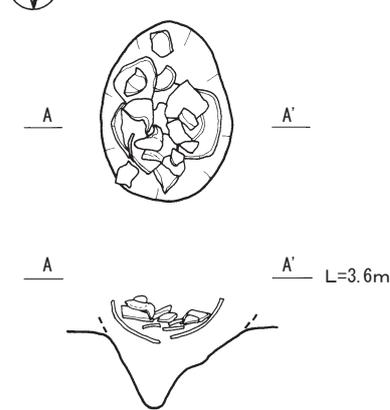
284は甕の脚部で、特に硬質な焼成が見られる。285はくノ字状に外反する壺の口縁部で、口径15cm程が復元される。286は口径7cm、高さ6.3cmの完形の内弯タ

イプの手捏土器で、器壁は厚く、重量がある。口唇部は丸く、底部は尖り気味で、火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土を使用する。器面は橙5YRと灰黄褐10YRで二分する。287は口径7.2cm、高さ6cmの完形の内弯タイプの手捏土器で、口唇部は丸く、接地面は凸レンズ状で、砂粒の多い胎土を使用する。器面は灰黄褐10YR。288は胴部に3条の無文の三角突帯文を持つもので、胴部は若干膨らみ、底部は狭い接地面を持つ。なお、外面はヘラケズリや工具ナデ調整が行われてい

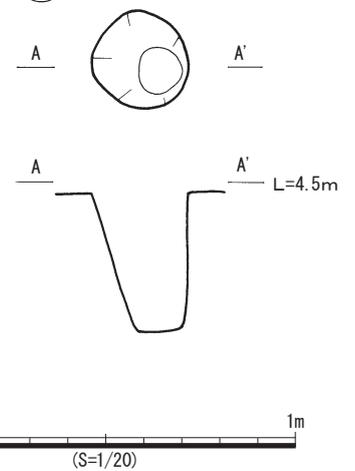
ピット4号



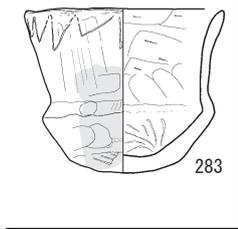
ピット5号



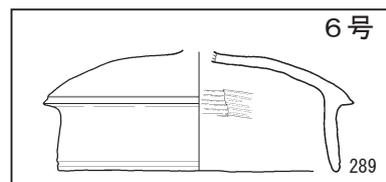
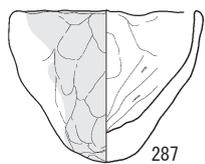
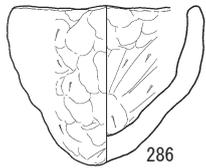
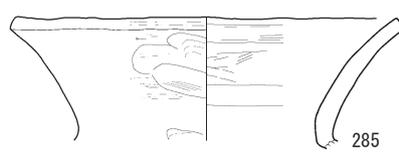
ピット6号



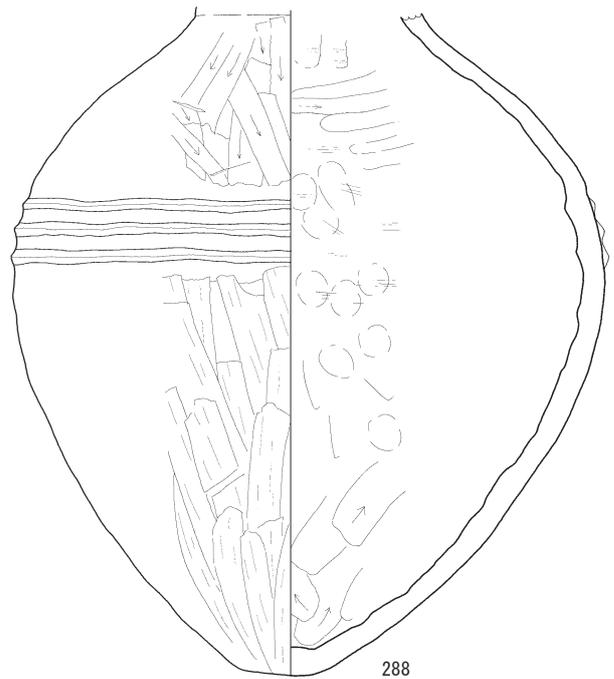
4号



5号



6号



第82図 ピット4～6号および出土遺物

るが、内面は粘土紐の接合痕の凹凸が残される。

口縁部は尖り気味で、やや外に開く。浅黄橙7.5YR。

ピット6号 (第82図)

A-30区で検出された。プランは直径約26cmの円形を呈し、深さは37cmを測る。層位は不明であるが、埋土は黒褐色砂質土で、ピット内からは坏蓋が出土した。

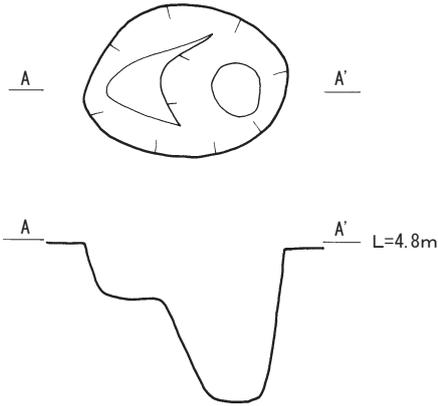
289は約1/3程が残存する坏蓋で、口径10.2cm、高さ4.6cm程が復元される。内面天井部に刷毛目が残される。

ピット7号 (第83図)

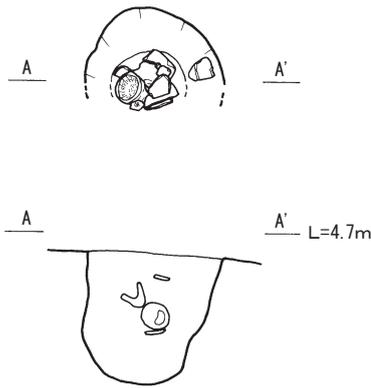
D-29区, IV層上面で検出された。プランは楕円形で、埋土はII層である。2基のピットが切り合っているものと思われるが、切り合い関係等詳細は不明であった。遺物は64点出土したがほとんど小片であった。そのうち手捏土器1点を図化した。



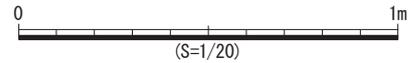
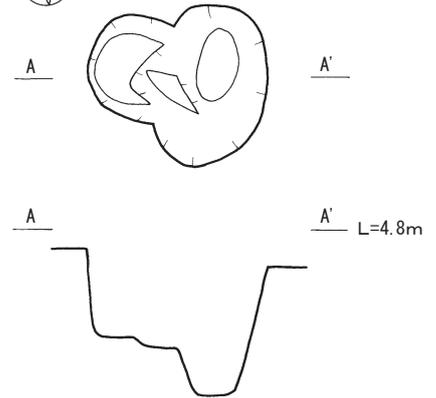
ピット7号



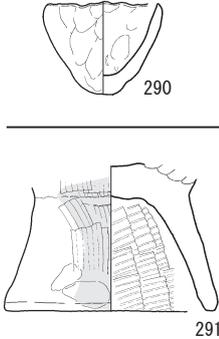
ピット8号



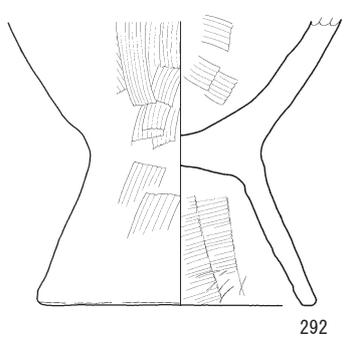
ピット9号



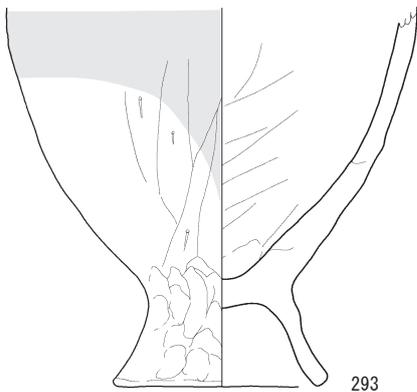
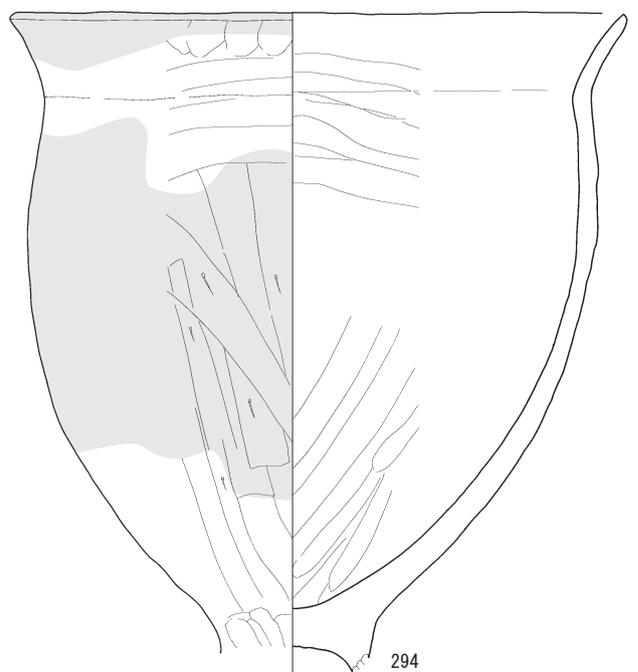
7号



8号



9号



第83図 ピット7～9号および出土遺物

290は口径4.5cm、高さ3.6cm程の手捏土器である。

ピット8号 (第83図)

E-29区 IV層中で検出された。北側は調査範囲外で検出していない。ピット内より38点の遺物が出土し、そのうち接合により復元できた2点を図化した。

291は底部径8.2cmの直線的に伸びる脚部で、内面天井部は平坦である。器壁は厚く安定感のあるつくりで、重量もある。内面は黒変する。292は直線的に伸びる脚部で、内面天井部は平坦である。器壁は厚く安定感のあるつくりで、重量もある。内面は黒変する。

ピット9号 (第83図)

E-29区、III層上面で検出された。埋土はII層で炭化物を含む。プランは楕円形で、2基のピットが切り合っているものと思われるが、切り合い関係等詳細は不明である。遺物は小片が45点出土し、そのうち接合により復元できた2点を図化した。

293は底部径7.8cmの甕である。口縁部は欠損している。脚部内面天井部は、下方に膨らむ。胎土には、長石等の白色鉱物の他、5mm程の岩粒が含まれる。294は口径24cmの脚付甕で、脚部は欠損する。口縁部はくノ字に外反し、口唇部先端部が若干薄くなり、長胴部の傾向が見られ、脚部内面天井は平らに仕上げる。器面はヘラケズリで薄く仕上げ、胴上部から口縁部周辺ではナデで仕上げる。

ピット10号 (第84図)

E-29区、IV層上面で検出された。埋土はII層である。プランは楕円形を呈し、長軸34cm×短軸22cm、高さ17cmを測る。ピット内からは壺形土器が完形の状態で出土した。

295は口径10cm、高さ18.3cmの小型丸底壺で、胴の最大は15.2cm程で球状に近い。刷毛目調整が中心で、口縁部は基本的に縦方向に施している。器壁は厚い。

ピット11号 (第84図)

A-28区で検出された。検出層位、埋土は不明であるが、ピット内より古墳時代の土器が出土し、接合により1個体に復元できたことからこの時期のピットと判断した。プランは円形を呈し、直径約40cm、高さ9cmを測る。

296は小型丸底壺と見られるが、口縁形状は不明。内面はヘラケズリを主に指ナデを加え、底部付近ではミガキ状のヘラナデも見られる。器壁は均一でなく、部位で異なる。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、黒斑の占める範囲が広い。

ピット12号 (第84図)

C-28区、IV層上面で検出された。埋土はIII層である。プランは瓢箪形を呈し、2基のピットが切り合っているものと思われるが、切り合い関係等詳細は不明である。遺物は37点出土し、接合により復元できた2点を図化した。

297は丸底壺で、口縁形状は不明。算盤玉状の胴部で、赤色粒を多く含むきめの細かい胎土を使用し、軽量な仕上げをなす。298は脚部の形状からは、屈曲部から斜め上方に直線的に伸びる坏部形状が想定される。筒部はミガキ状のナデで、脚部内面は刷毛目を残す。器肌は明るい5YRの橙で、精選された微細な胎土が使用される。

ピット13号 (第84図)

D-23区、IIIb層上面で検出された。埋土はIII層である。プランは楕円形を呈すると思われるが、中世以降の時期と考えられるピットにより切られている。遺物は7点出土し、接合により小型丸底壺が復元できた。埋納されていた可能性が考えられる。

299は口径10.3cm、中心部の高さ17cmの小型丸底壺で、口縁部は直行気味に立ち上がり、胴部は大きく球状に膨らみ、接地面はデフォルメされ瘤状に突出する。なお、接地面はケズリが重ねられ、胴部は丁寧なミガキで光沢を保っている。赤色粒と大粒の白色粒が目立つ胎土で、輝石やカクセン石等の黒色鉱物も見られる。重量はある。

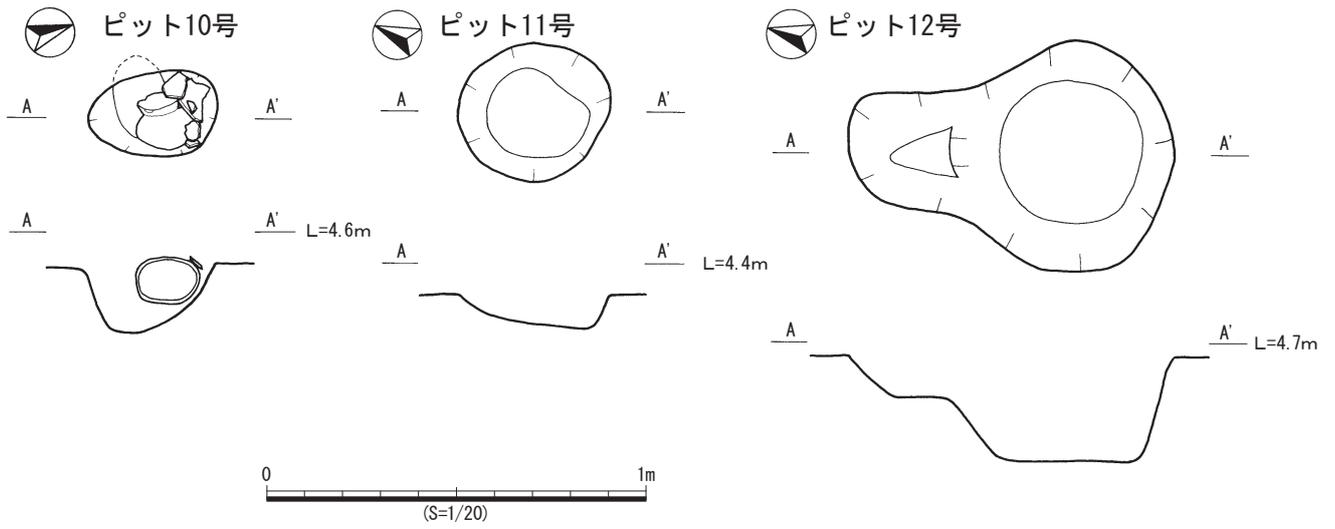
溝状遺構 (第85～92図)

A-17区からC-15区、IV層上面で検出された。A-A'間21m、B-B'間7.5mを測り、幅1.25m～3.05m、検出面からの深さは20～30cmである。C-16区で途切れ、そこから北西側と南東側に向かって緩やかに下るが、出土遺物の接合状況などから連続する遺構として捉えた。両端は調査区外にのびると思われるが、南東側の続きは検出できなかった。

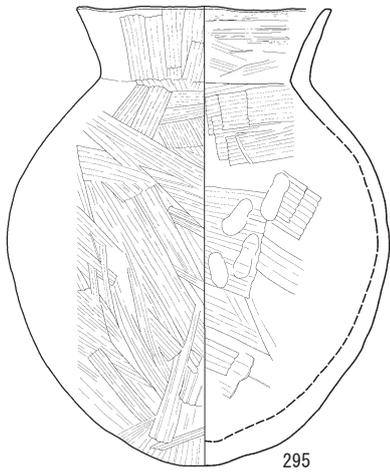
遺物は完形に近いものを含め241点出土し、そのうち38点を図化した。

300～325は甕である。300は口径24cm程で、口縁部はくノ字に外反し、口唇部は厚みを持ち丸くなる。器壁は薄く、胴部は丸い。301は復元口径26.5cm程で、口縁部はくノ字に外反し、口縁部と胴部の境界は指で押さえる。胎土は、長石等の白色鉱物が目立つ。302は復元口径24.2cm、高さ30cm、底部径10cm程の脚付甕で、口縁部と胴部の段を残し、口縁部は緩やかに外反し端部は先細りする。胴部は、繰り返しのヘラケズリで器壁を薄くする意図が見られる。脚部端部は直線的に伸び、内面天井部は平坦に仕上げる。胎土は、長石に加え大粒の赤色粒が目立つ。器壁は厚く、重量がある。303は口径26cm、高さ29.8cm、底部径8.4cmのほぼ完形の脚付甕で、脚部周辺を除く広域に煤状炭化物が付着している。白色鉱物とカクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土が使用し、にぶい橙5YRを基本色調とする。

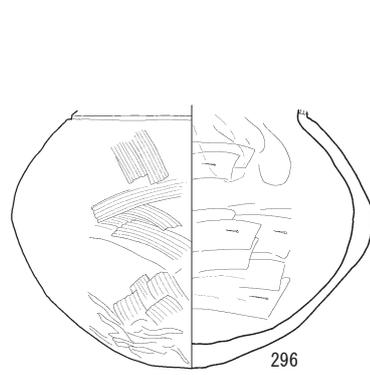
304は口縁部を欠く脚付甕で、内外とも丁寧な工具ナデ仕上げが見られる。胴上部にベルト状に煤状炭化物が付着し、白色鉱物とカクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土が使用される。305は復元口径20.7cmで、くノ字に外



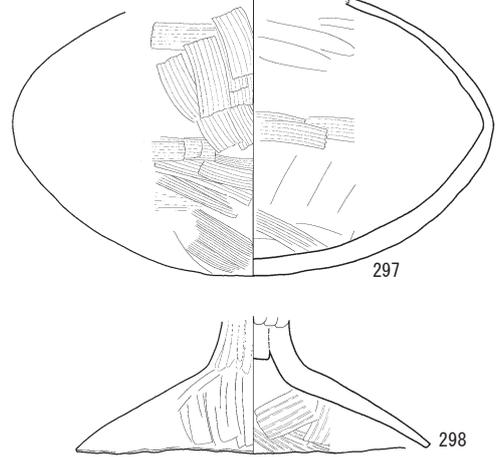
10号



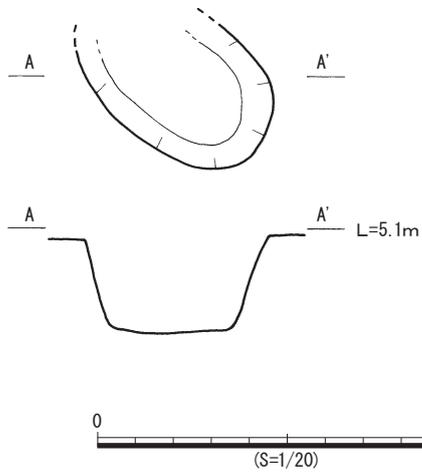
11号



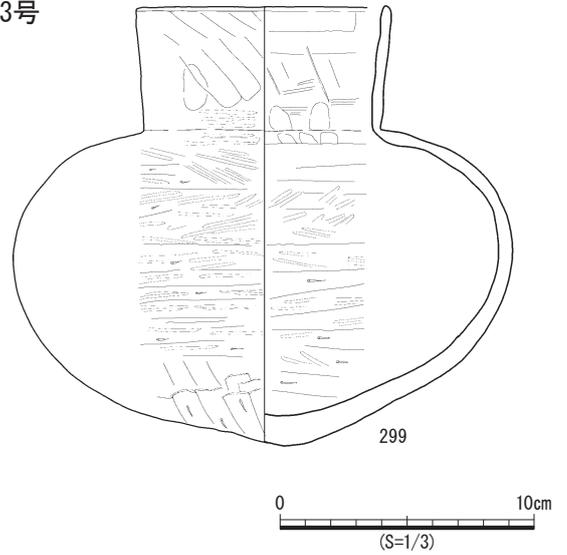
12号



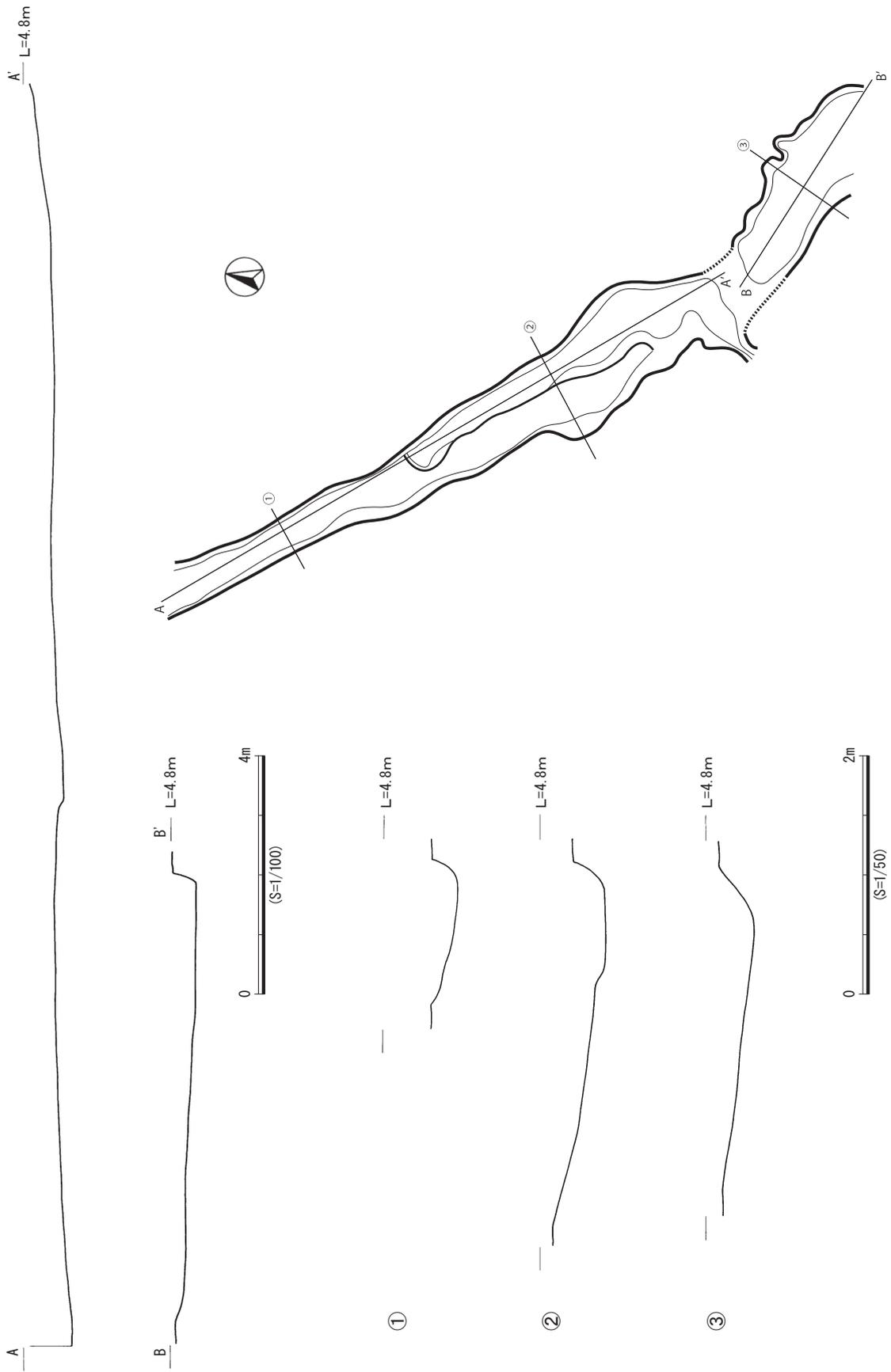
ピット13号



13号



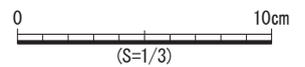
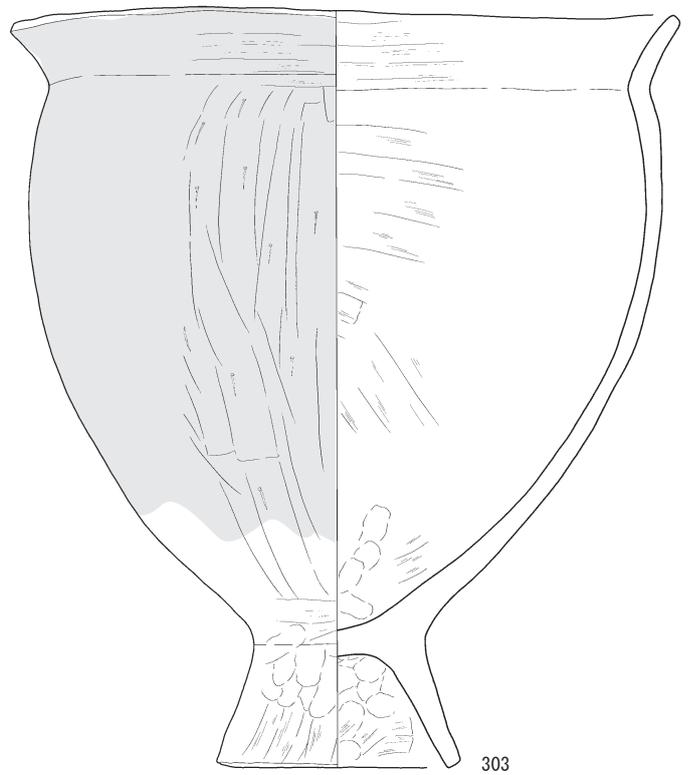
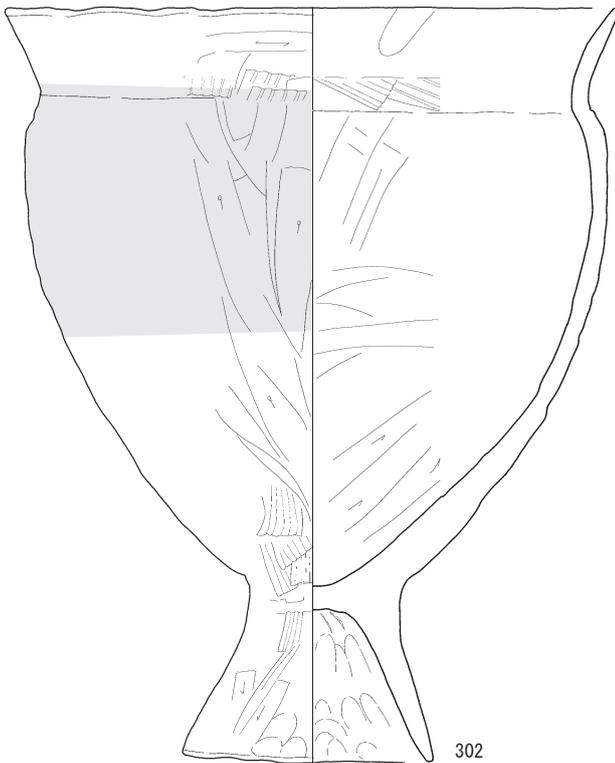
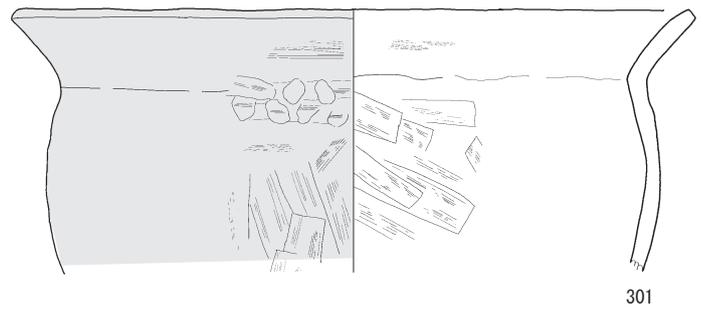
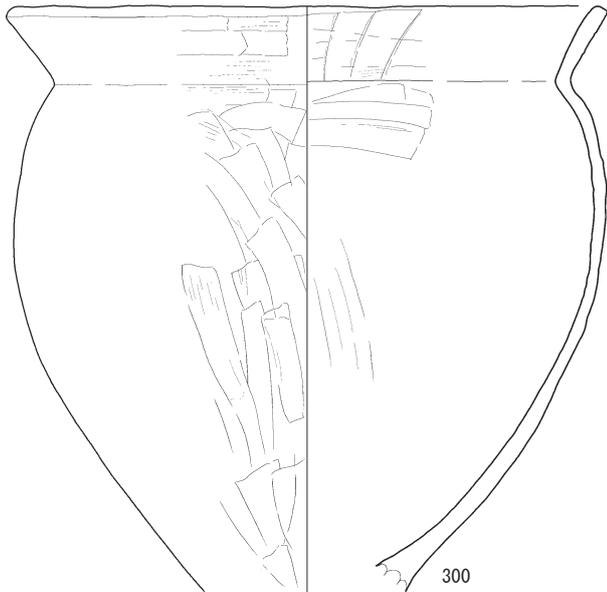
第84図 ピット10~13号および出土遺物



第85図 溝状遺構

反する口縁部は指頭で押さえ、緩やかに外反する。器壁は薄く、軽量かつ硬質な焼成である。胴部に煤状炭化物が付着し、胴下部にはひび割れが残る。また、胴下部は熱破碎によるとみられる剥落も見られる。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。306は復元口径28cm程の甕で、口縁部は緩やかに外反し、口唇部は平坦面をなし、屈曲部を除く口縁部と胴部に煤状炭化物が付着する。カクセン石等黑色鉱物の目立つ胎土で、

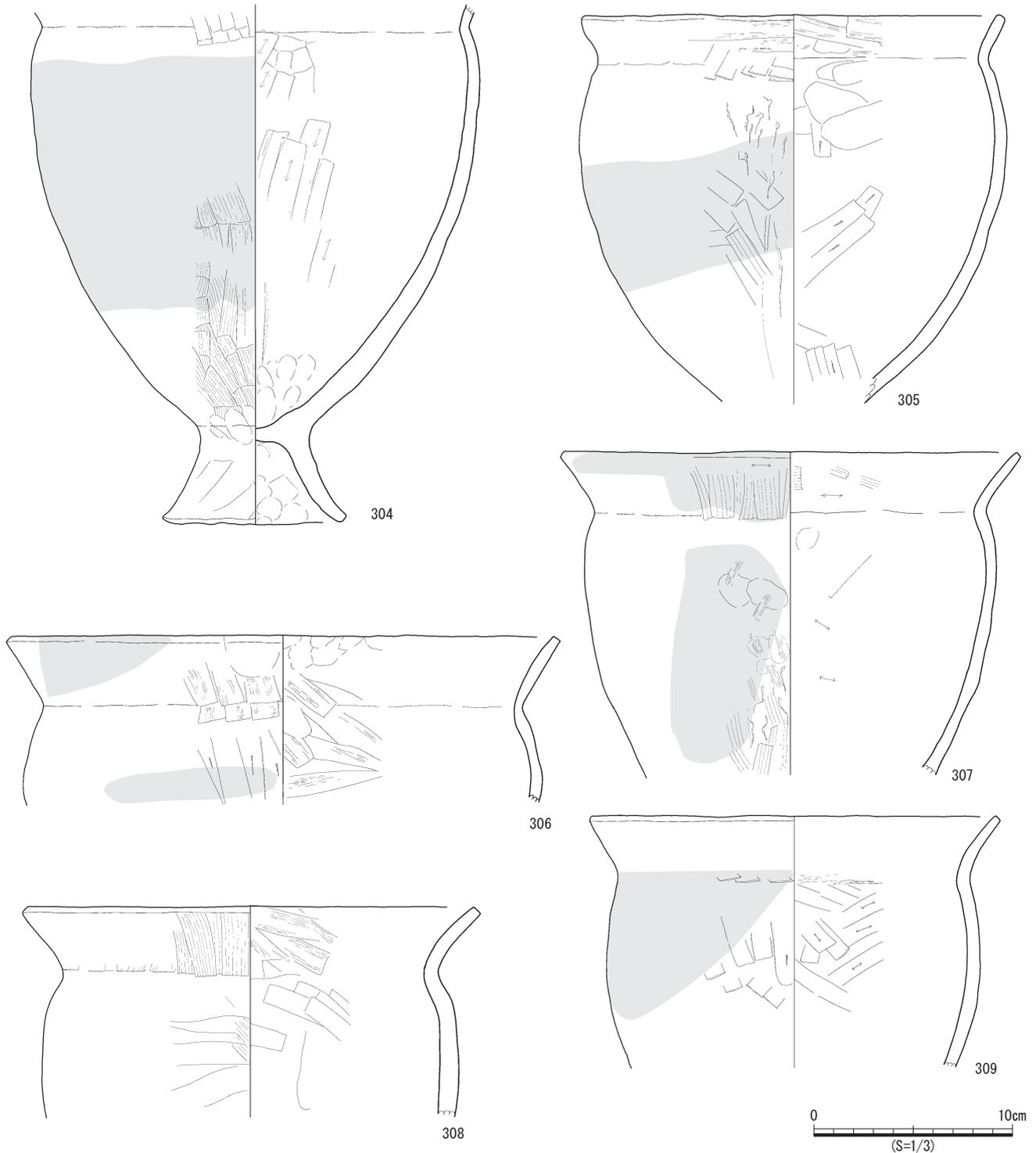
浅黄橙7.5YRの器肌を呈す。307は復元口径23cmの甕である。口縁部は絞りこんだ頸部からくノ字に外反し、指頭で屈曲させた後、刷毛目のカキアゲを施す。硬質な焼成で器壁は薄い。屈折部を除き、煤状炭化物が付着し、胴下部にはひび割れが残る。308は復元口径22.5cm程の甕で、口唇部は平坦面をなす。口縁部と胴部の境は指で押さえた後、口縁部を縦方向の刷毛目で仕上げる。309は復元口径20.5cm程の甕で、緩やかに外反する口縁端



第86図 溝状遺構内出土遺物 1

部は先細りの傾向が見られる。両面とも工具ナデで仕上げ、特に、内面は丁寧である。長石、石英に加え火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、キラキラとした器面を呈している。310は復元口径21cm、高さ28cm、底部径9cm程の脚付甕である。口縁部と胴部の境は段をなし、口縁部は緩やかに先細りで外反し、口唇部は丸い。また、口縁部は緩やかな波状で、胴部はヘラケズリを繰

り返している。器壁は厚く、重量がある。脚部端部は直線的に伸び、内面天井部は丸く仕上げる。長石に加え、やや大粒の長石粒や赤色粒が目立つ。311は復元口径21.8cm程の脚付甕で、内面稜線は明瞭で、緩やかに外反する口縁端部は先細りする。器壁が特別に厚く重量がある。胴部では粘土板の接合部が窪んで残される。長石、石英に加え、黑色鉍物を含む胎土で、胴上部から口縁部



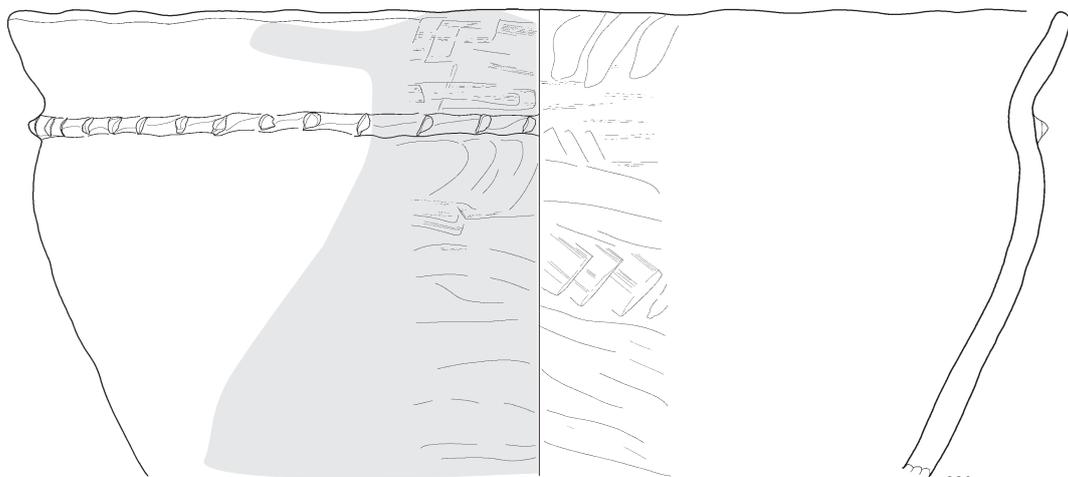
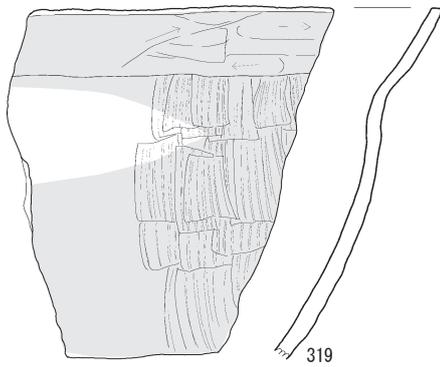
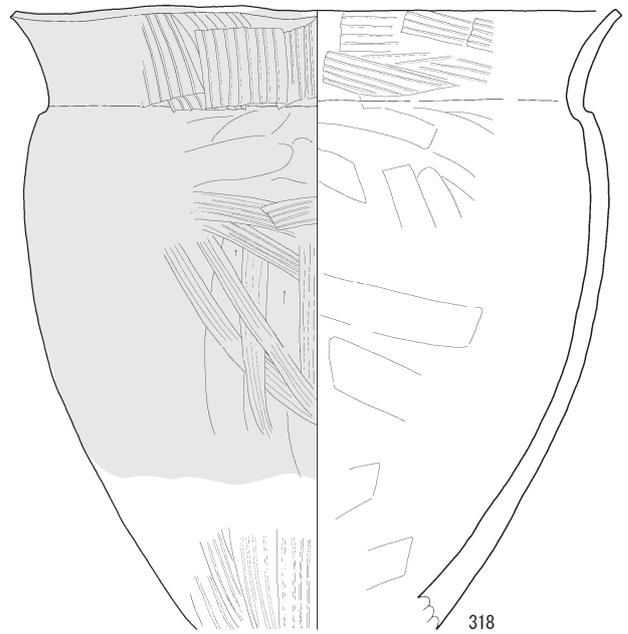
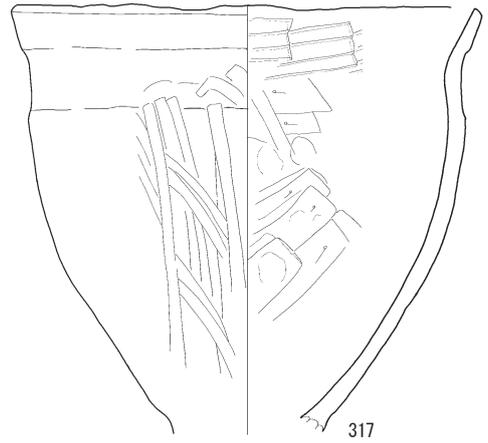
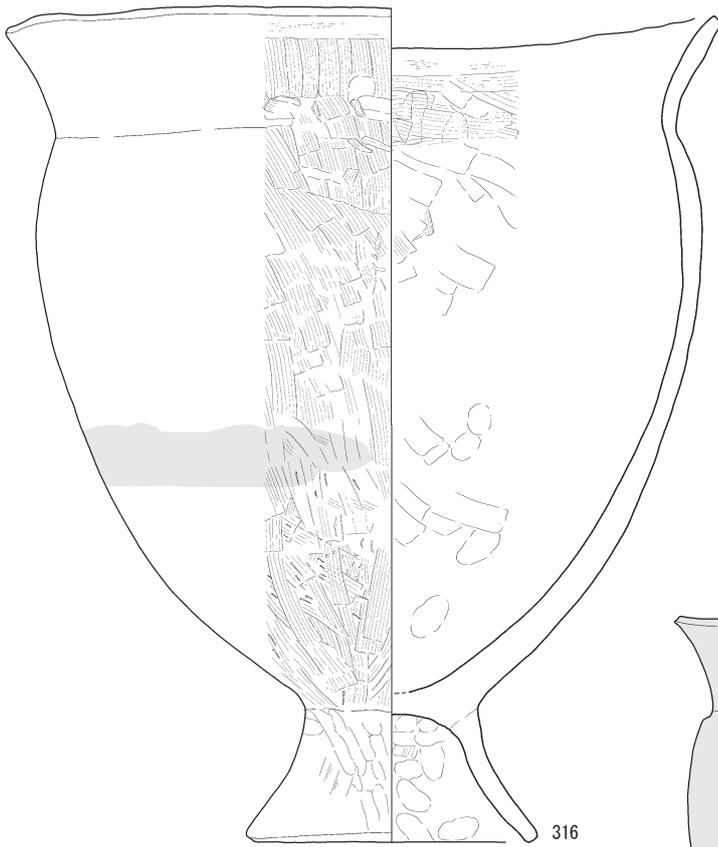
第87図 溝状遺構内出土遺物 2

に煤状炭化物が残される。312は復元口径20.5cmで、絞りこんだ頸部から緩やかに外反する口縁部で、口唇部は薄くなる。硬質な焼成で器壁は薄く、破断面は中央は褐灰5YR、にぶい橙5YRでサンドイッチ状となる。器面は光沢を保ち、煤状炭化物が付着する。313は復元口径27.8cmで、口縁部はくノ字に外反し、胴部との境は工具や指でナデて、区分を図っている。器壁は薄く、端正な

調整が見られ、焼成も硬質である。大粒の白色岩粒も散見されるが、1mm前後の石英や長石を含む胎土で、橙5YRの鮮やかな器肌をなす。314は復元口径20.5cmで、口縁部はくノ字に外反し、胴部との境は工具で縦方向にナデ、胴部に煤状炭化物の付着が認められる。橙5YRの器肌で、やや軟質な焼成をなす。315は復元口径23.5cmで、口唇部は平坦で、口縁部はくノ字に外反し、胴部と



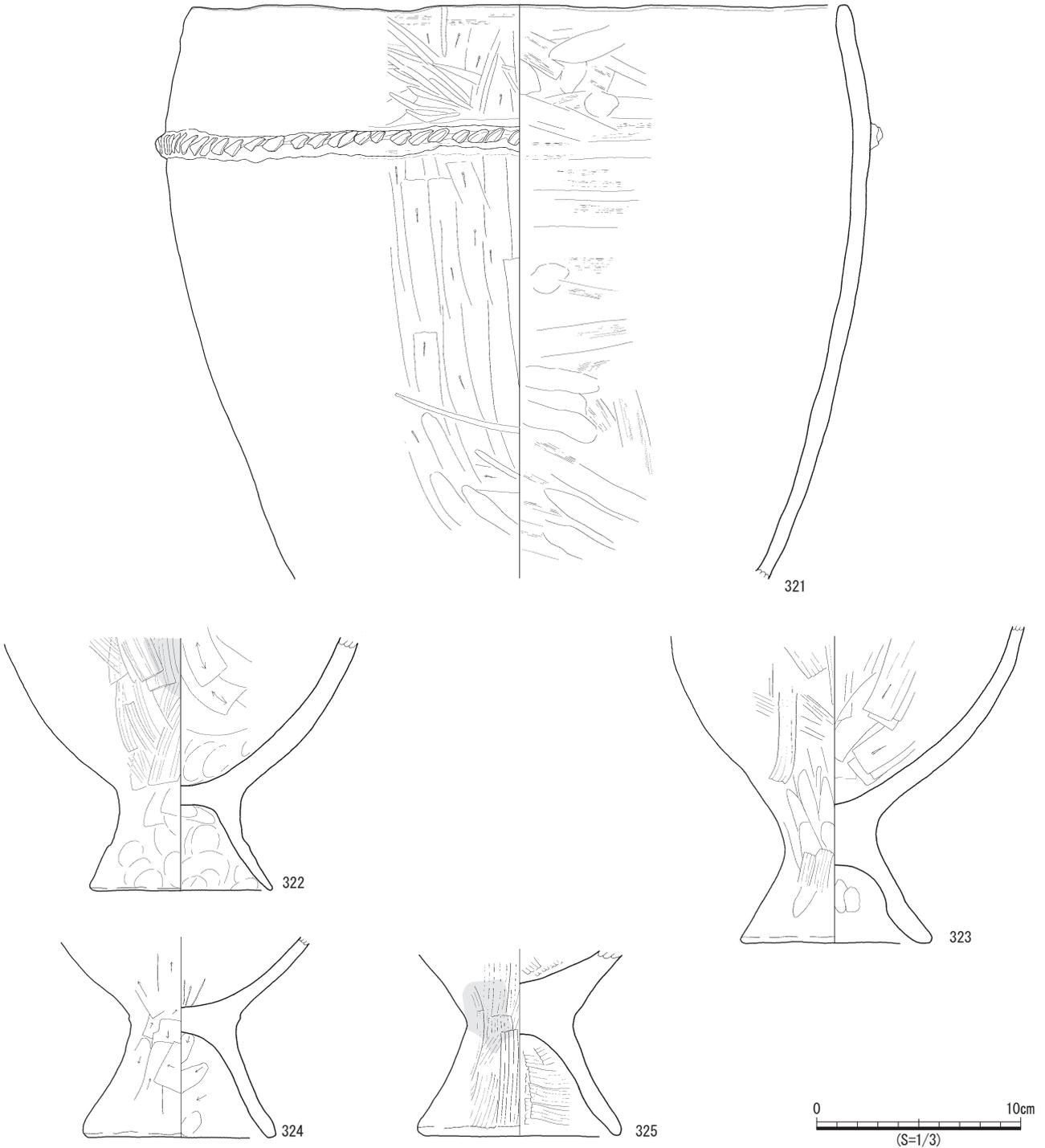
第88図 溝状遺構内出土遺物 3



第89図 溝状遺構内出土遺物 4

の境は指で押さえ、胴部へスムーズに移行する。煤状炭化物は胴部に付着し、炭化物の付着しない屈曲部では赤変が認められる。元来はにぶい橙5YRの器肌で、器壁は薄く軽量である。316は口径27.8cm、高さ33.2cm、底径10.8cmで、口径と胴部径がほぼ一致する。刷毛目のカキアゲで胴部との境をなし、内面に稜線を残す。1mm程の石英、長石、カクセン石等黒色鉱物を多量に含む胎土で、明赤褐2.5YRに仕上げ、外面は二次的な変容が見られる。317は復元口径18.5cm程の甕で、短い口縁部は緩

やかに外反し、緩やかに波打つ口唇部は狭い平坦面をなす。なお、口縁下部を工具でナデることから、部分的に段差が見られる。ナデで仕上げた後に、幅の狭い工具でナデを重ねる状況が見られる。内面のヘラケズリ痕からは、大きめの岩粒を含んでいることが確認され、総じて器壁は厚く、重量のある仕上がりである。318は復元口径23.6cmの甕で、口縁部はくノ字に外反し、口唇部は平坦で、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分し、明確な段を有する。胴部ではヘラケズリに工具ナデを重ね、

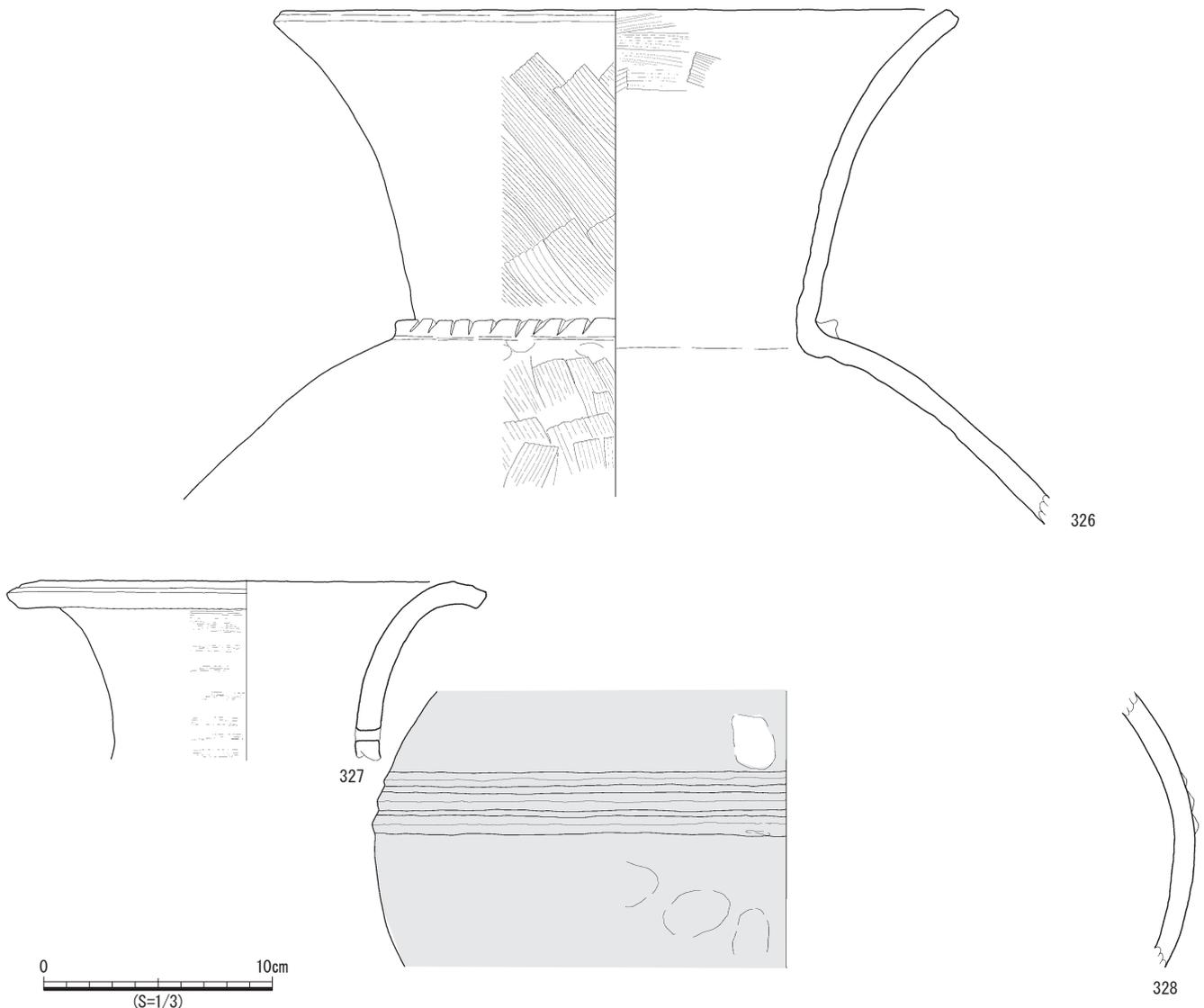


第90図 溝状遺構内出土遺物 5

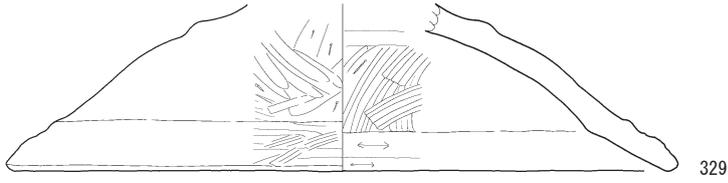
胴下部に器壁の剥落は熱破碎痕と見られる。白色鈹物や火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、キラキラとした器面をなす。なお、胴下部の剥落部分を除き、口縁部まで煤状炭化物が広範囲に付着する。319は甕または鉢の可能性が考えられる。口縁部は若干内弯気味に立ち上がる。器壁は薄く、硬質な焼成で、石英や長石、カクセン石等の黒色鈹物含む胎土で、橙5YRの鮮やかな器肌に煤状炭化物が付着する。320は緩やかに外反する口縁部の屈折部に刻目突帯文を貼り付けた甕で、41cm程の口径が復元される。外面が灰褐5YR、内面にがいにぶい赤褐5YRで、最大10mm程の岩粒を含む胎土が特徴的である。321は口径31.7cmで、底部は欠損する。口唇部は丸く、口縁部は内弯し、突帯文は棒状工具で斜めに刻む。ヘラケズリ痕からは、胎土に大粒の岩粒が含まれることが読み取れる。総じて器壁は厚く、重量のある仕上がりで、口縁部周辺ではヘラミガキも見られる。322～325は甕の底部である。322は内底面は丁寧にナデられ、脚

部内面天井は平坦に仕上げる。323は基本的には脚部が外反しながら開く小振りなタイプに属す。胴部との接合部には縦方向の粘土の絞り込み痕が残され、外面は明赤褐5YR、内面は褐灰5YRと明暗を分ける。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、重量のある仕上がりを見せる。324は背の高いタイプで、脚は直線的に伸びる。325は脚の弯曲が少なく背の高いタイプで、充実感がある。大量のカクセン石等の黒色鈹物と火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、ザラザラでキラキラとした器面の指宿胎土である。重量のある仕上がりを見せる。

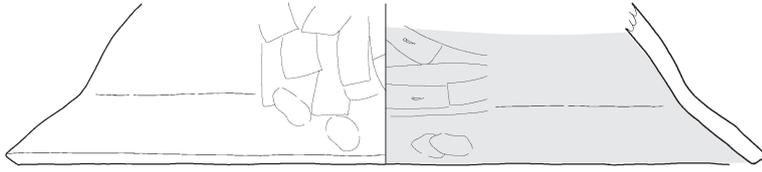
326～328は壺である。326は口径29cmと大型壺で、頸部に1条の断面三角刻目突帯文を持つ。口縁部の立ち上がりは直に近く、口縁部にかけてラッパ状に外反してのびるタイプで、内面屈折部に粘土紐の接合痕が残る。口縁部直下に刷毛目が整然と並ぶことから、ナデ後、刷毛目調整が行われたものと見られる。火山灰性のガラス質粒子を大量に含むきめの細かい精選胎土を使用する。



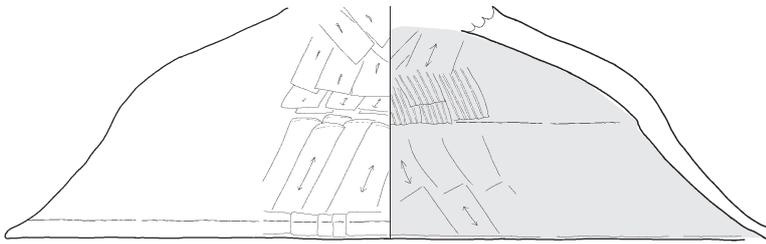
第91図 溝状遺構内出土遺物6



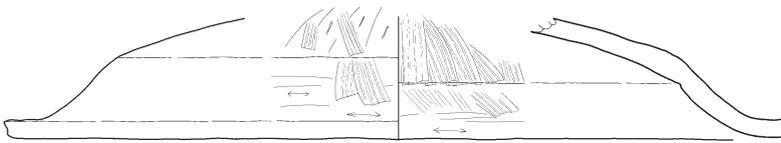
329



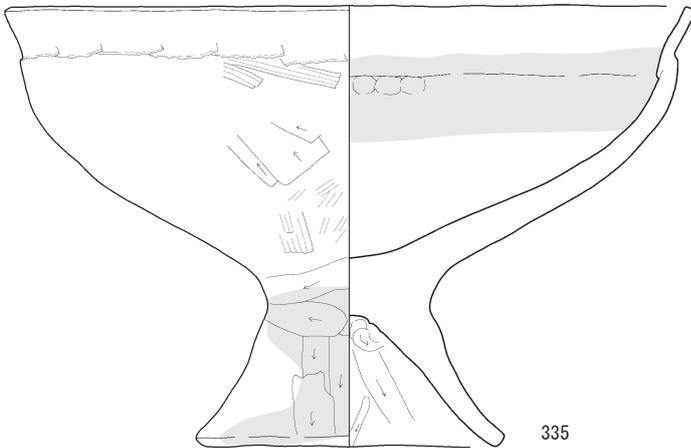
330



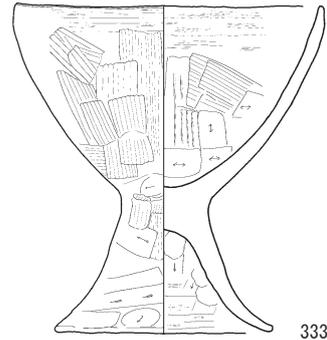
331



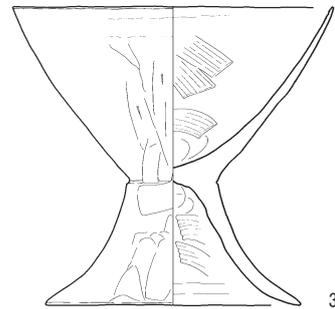
332



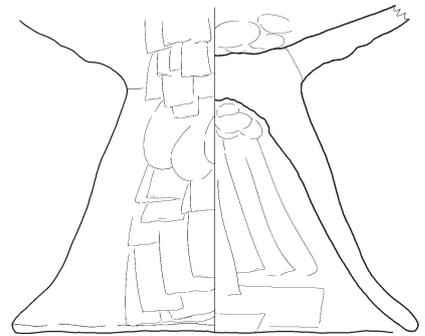
335



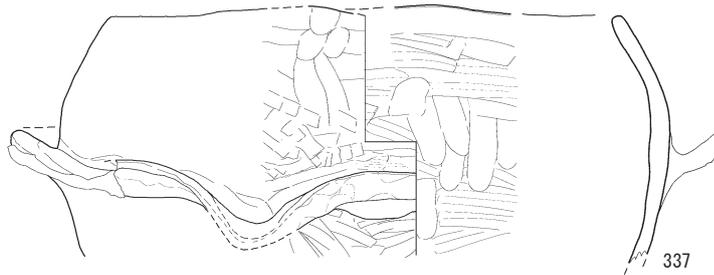
333



334



336

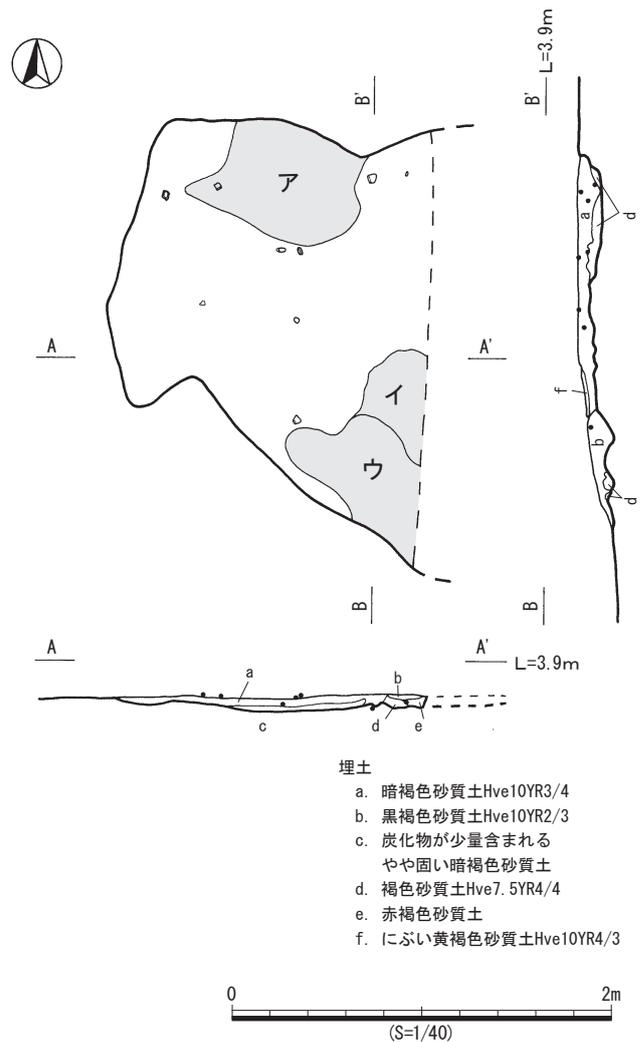


337



第92図 溝状遺構内出土遺物 7

器肌は橙7.5YRをなし、重量がある。327は復元口径18.2cmで、口縁部下位2ヶ所に焼成後でかつ外面からの穿孔がある。比較的大型の壺の口縁部である。破断が粘土紐の接合面で行われ明瞭な摩耗が見られることから、意図的な行為と解され、器台として転用されたものと思われる。きめの細かい精選胎土を使用し、器面は刷毛目、内面はナデで調整するが、内面の剥落が激しい。橙7.5YRの器肌で重量がある。328は3条の無刻目突帯文を持つ壺の胴部資料で、精選されたきめの細かい胎土を使用し、やや軟質な焼成で、両面とも風化が激しい。329～332は蓋である。329は口径26cm程が復元できる蓋で、胎土に4～5mm程の岩粒を含む。粗いヘラケズリの器面を部分的にヘラでみがいた痕跡が残される。330は口径30cm程で、器高が高い可能性がある。331は口径30cm程で、内面縁に煤状炭化物が付着することから蓋としていたが、高坏の転用の可能性が高い。332は口径30cm程が復元できる蓋で、赤色粒やカクセン石等の黒色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、外面では粗いヘラケズリ後、部分的にヘラでミガキ、内面は刷毛目を明瞭に残し、両面ともにぶい橙7.5YRを呈している。333～336は台付鉢である。333は口径12.2cm、高さ13.1cm、底部径8.6cmのほぼ完形の台付鉢で、脚部の器壁が厚く、重量のある仕上がりである。口唇部は横にナデ、他は両面共刷毛目で調整し、脚部はヘラケズリや指ナデで仕上げる。胎土は砂質で、火山灰性のガラス質粒子も含む。内外とも、橙5YRで赤い。334は口径12.5cm、高さ12cm、底部径10cm程の高坏で、口縁部は開きながら直線的に立ち上がり、脚端部は広がりながら外反する。精選されたきめの細かい胎土を使用し、やや軟質な焼成で、浅黄橙7.5YRの器肌を呈す。335は復元口径27.2cm、高さ17.5cm、底部径11.5cmで、明確な筒部は形成しないが高坏と見られる。坏部は緩やかに碗状に立ち上がり、屈折して口縁部を形成し、坏部内面は工具で丁寧にナデで仕上げられる。胎土は赤色粒と火山灰性のガラス質粒子を多く含み、器壁は厚く、重量がある。なお、内面屈曲部に沿って煤状炭化物が付着することから、蓋として再利用されたと見られる。336は高さ12.9cm、径15.5cmの大型の高坏の脚部で、内面天井には指ナデ痕が明瞭に残る。337は突帯文付鉢とした。内弯する口縁部で、復元口径は20cmを測る。突帯文は波状で、1ヶ所は垂れ口状（図の中央左部）を成す。



第93図 焼土遺構

焼土遺構（第93図）

E-35区、IV層上面で検出された。東側は調査区外となるため、全体の形状は不明である。焼土の堆積の幅は3～4cm程度で、図中のア～ウ部分からは、炭化物を特に多く含んだ焼土が集中して検出された。遺物はほとんどが小片で図化することはできなかったが、古墳時代に相当する土器であったことから、この時期の遺構と判断した。

土器集中遺構

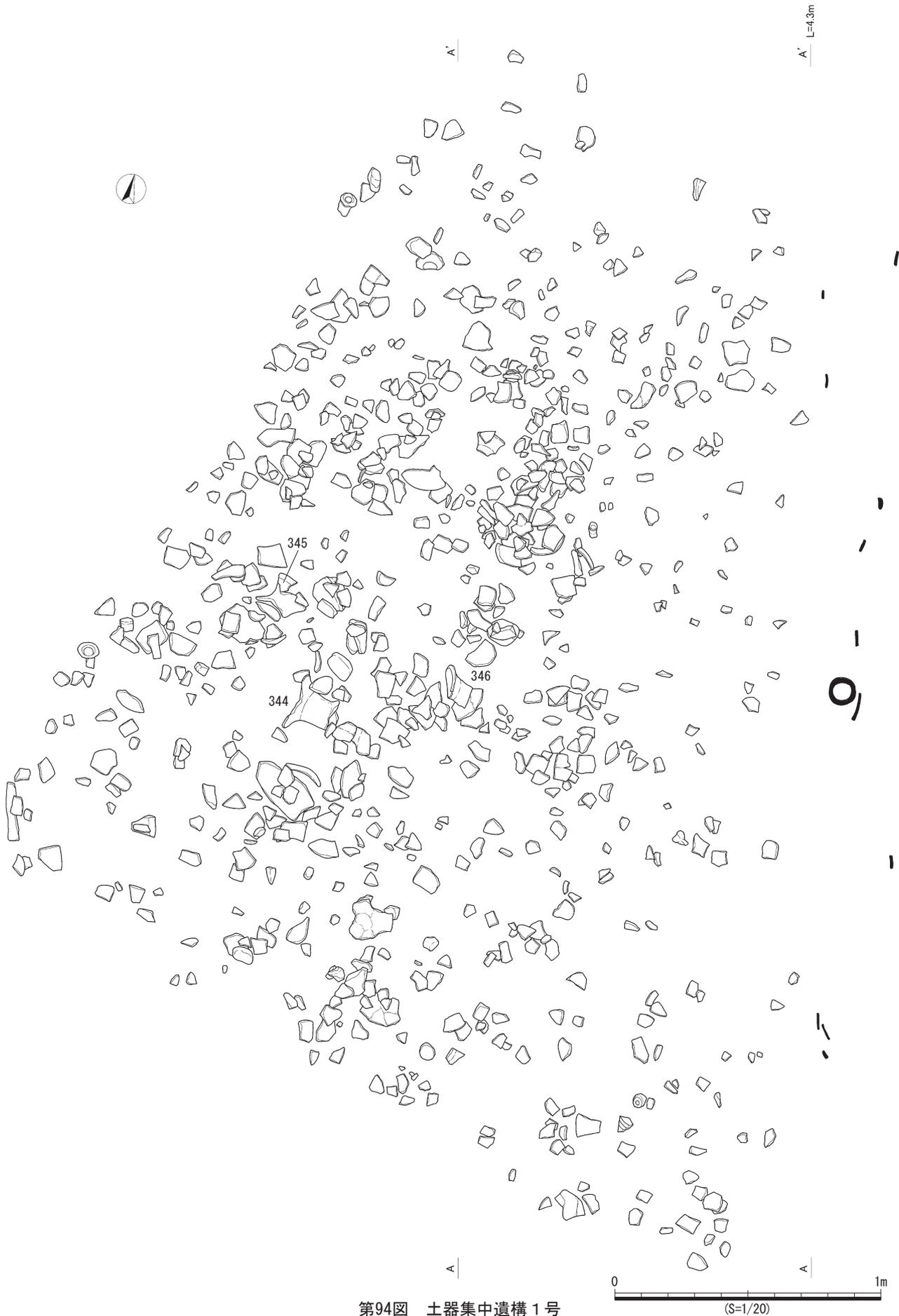
土器集中遺構 1号 (第94～98図)

B-37区、Ⅲb層上面で検出された。土器の集中部分は長軸約4.5m×短軸3mの範囲に広がる。遺物は4段に分けて取り上げた。1段目と4段目のレベル差は約30cmであった。遺物は甕や壺の破片が1183点出土し、ほぼ完形に復元できたものもあった。4段目からは銅鏃も出土した。そのうち接合により復元できた土器14点と銅鏃1点を図化した。

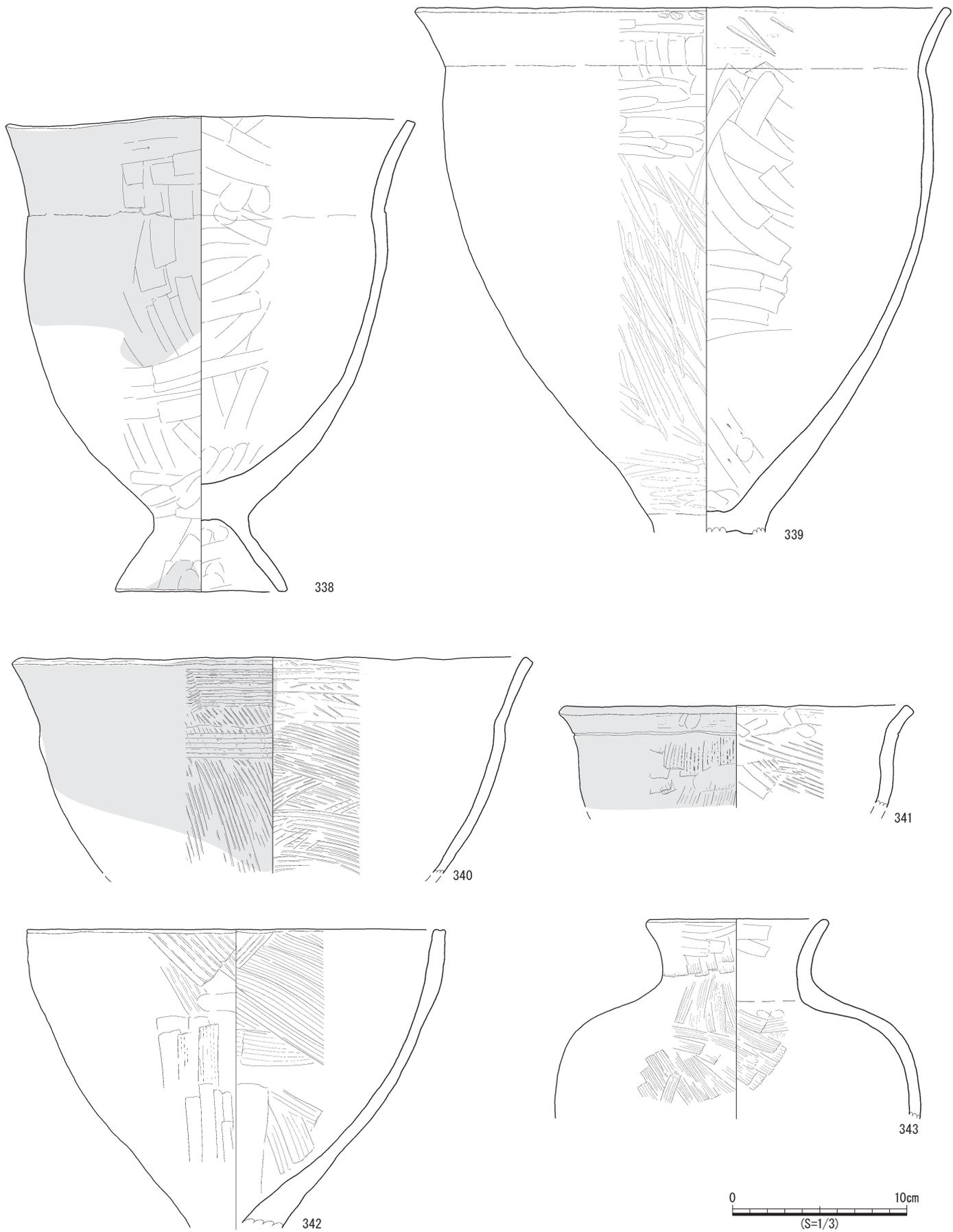
338は復元口径23.5cm、高さ27.5cm、底径9.8cmの甕である。口径が器の最大部となる。長く緩やかに外反する口縁部で、胴部への移行がスムーズに行われ、脚部内面天井部は平坦面をなしている。口縁部から胴中央部と脚端部には煤状炭化物が付着し、その間は煤の付着が見られず赤変している。339は復元口径30.6cmほどの脚付甕で、外面胴部にはヘラミガキ状の調整が見られる。器壁を薄くする意図は見られるが、製作時の粘土紐の接合

痕が認識できる。340は復元口径30cmほどで、傾き、器種ともに不明であり鉢の可能性も考えられる。縦方向の刷毛目で調整した後、口縁部と肩部に再度横走る刷毛目を施す。口唇部は外に傾くが平坦で、器壁は薄い。341は復元口径19.6cmの鉢としたが、甕の可能性も考えられる。口唇部は平坦面で、口縁部直下の周回する沈線で、頸部を意識したと見られる。器面部は部分的に煤状炭化物の付着が見られ、形状の明確な石英が目立つ。342は復元口径24cmほどの鉢で、脚付の可能性が高い。部位による器壁にばらつきがあり、上下が厚い。1～2mmの長石が目立つ胎土で、石英や黒色鉱物が追隨する。胴部下位のヘラケズリは顕著で、外面上部では短い刷毛目が、内面では右下がりの長い刷毛目で調整が見られる。343～347は壺である。343はくノ字状が上方に起き上がる口縁で、頸部は短い。復元口径10cmほどである。器壁は厚い。胎土は5～6mmほどの大粒の岩粒を含み、特に、内面では器面に露出が見られる。344は

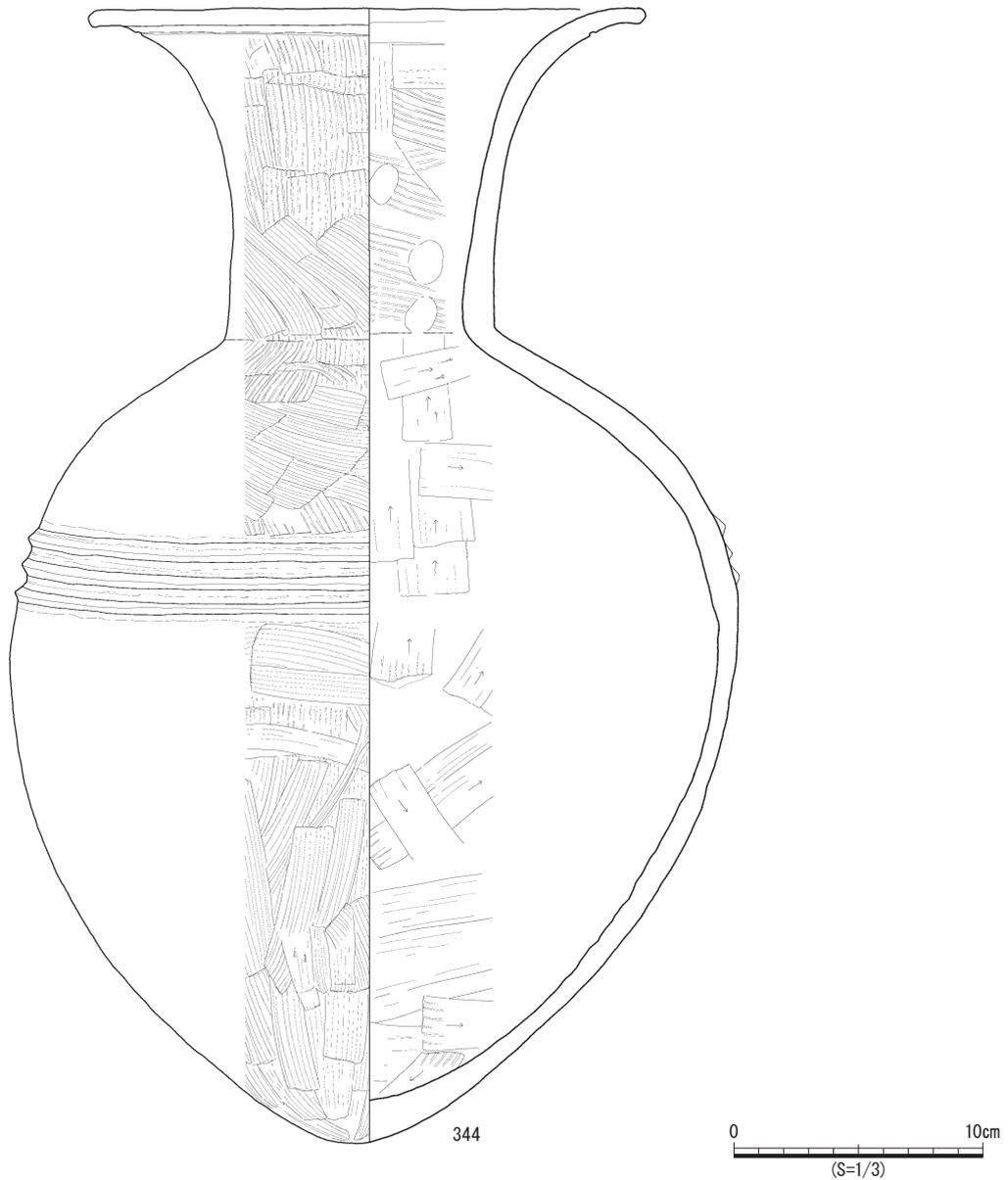




第94図 土器集中遺構 1号



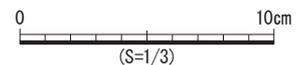
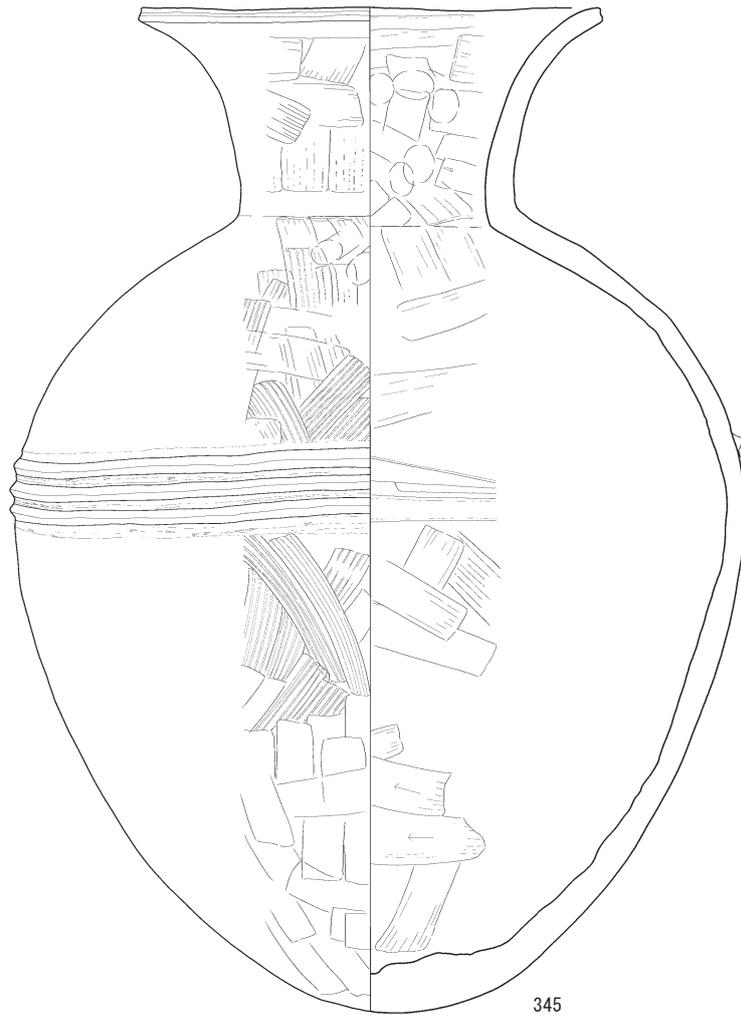
第95図 土器集中遺構 1号内出土遺物 1



第96図 土器集中遺構 1号内出土遺物 2

口径22.8cm、高さ46.2cmの均整のとれたほぼ完形の長頸壺で、沈線により段を有する。胴部は鶏卵状で、細めの突帯は精巧な断面三角形をなす。口縁部の立ち上がりは直線に近いが、上方はラッパ状に大きく開きながら長く外反し、底部はやや尖り気味の丸底をなす。口唇部及び口縁部を除き、入念な刷毛目調整で、器壁の均一化が図られたと見られる。内外とも浅黄橙10YRで、破断面はサンドイッチ状をなしている。長石や石英、カクセン石等の黒色鉱物を多量に含む胎土で、特に、口縁部の内面の剥落が顕著なことから、直立し正位の状況で設置されていた可能性が想定される。345は口径18.2cm、高さ40.0cmのほぼ完形の壺で、肩部から直立する口縁部の上方はラッパ状に外反し、胴部の細めの無刻目突帯は精

巧で、丸底をなす全体のプロポーションは鶏卵状に近い。外面の刷毛目を始め器面調整は丁寧で、端正に仕上げるが、底部を中心に器壁は厚く、重量がある。器肌はにぶい橙5YRをなす。346は比較的大型の壺の口縁部で、口径は17.2cmほどである。口縁部の取り外しを粘土紐の接合面で行ったことが確認でき、意図的な行為と解される。器台に転用したものと考えられる。火山灰性のガラス質粒子を大量に含むきめの細かい精選胎土で、外面は刷毛目、内面はナデで調整するが、重量がある。347は胴部三角突帯で、精選されたきめの細かい胎土で、赤色粒を多量に含んでいる。348は復元口径20.2cm、高さ20.2cm、底径10.2cmの脚付鉢で、器面調整はヘラケズリや工具ナデが先行し、最終的には指ナデや指押さえて



第97図 土器集中遺構 1号内出土遺物 3

仕上げられている。形状的には小型丸底壺に脚を付けたもので、脚は直線的に外に開き、天井部は平坦である。長石や石英を主体とする胎土で、器壁は厚く、重量のある仕上がりで、器面にはひび割れも確認できる。胴部から上位は煤状炭化物の付着や黒斑で黒変し、下位は付着物等が見られず赤変する。349は手捏土器で、高台部は指紋(圧)が見られる。福岡県那珂川町の松本遺跡に類似品があり、伝統的Ⅴ様式の製作技法が見られることから、搬入品との指摘を受けている(久住氏)。器肌は浅黄橙10YRを呈し、破断面はサンドイッチ状をなす。内に含まれる長石や石英は微細である。350は複数の穿孔を持つ、高坏の脚部資料とみられるが、小片のため詳細な傾き等は不明である。351は大型高坏の坏部を蓋に転用したもので、内外とも工具ナデ後、磨き上げている。

わずかに赤色粒を含むがきめの細かい精選胎土で、内外とも浅黄橙7.5YRの器肌を呈する。外面には赤色の化粧土を塗彩した痕跡が残る。内面の端部と破断面に煤状炭化物が付着することから、脚の裾部を取り外した後使用した可能性が高い。352は全長2.7cm、最大幅0.8cmの銅鏃で、須玖岡本遺跡や一宮遺跡出土品と同版とされ、近年では不動野遺跡にも類似品が知られている。

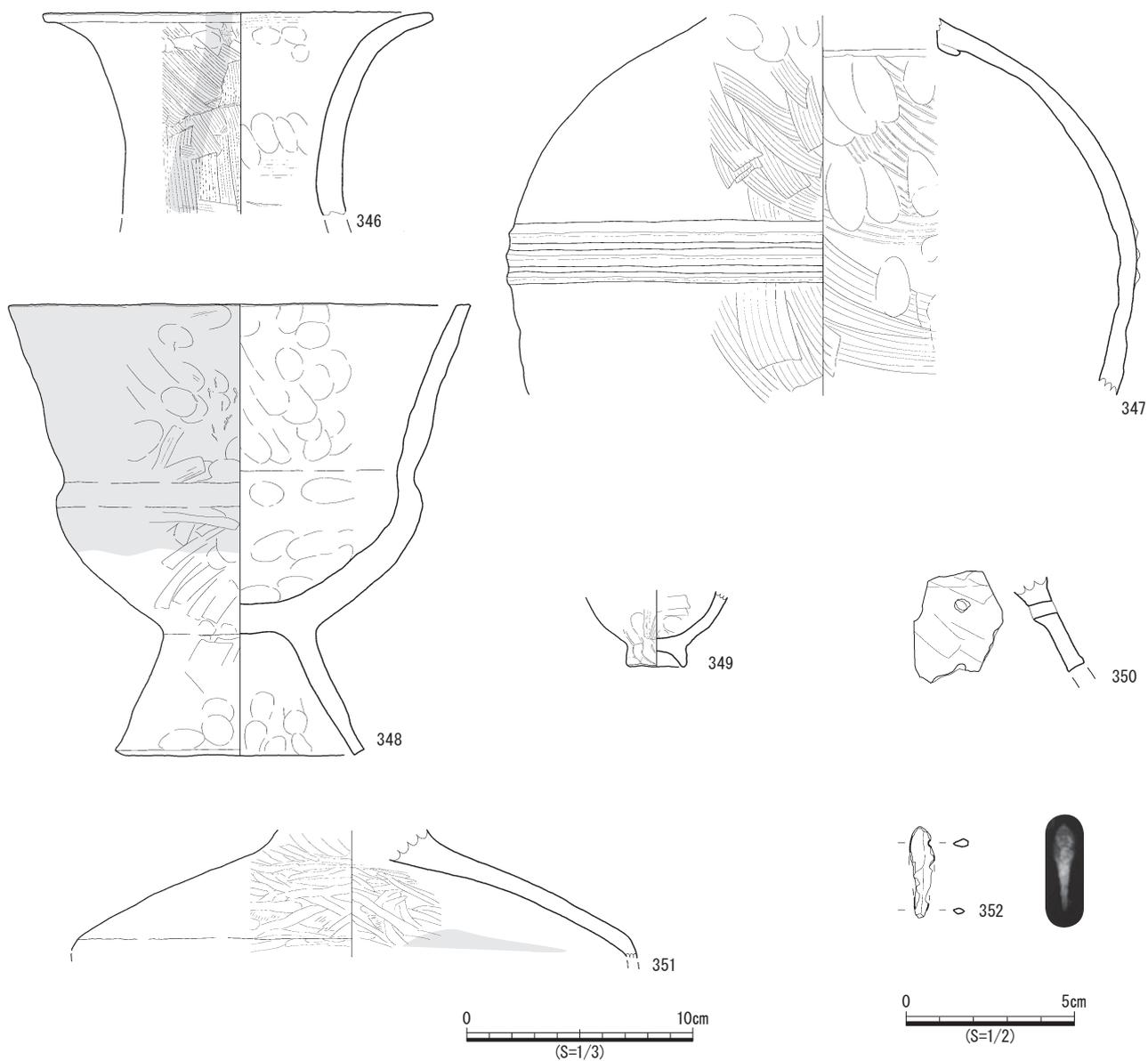
土器集中遺構 2号 (第99図)

C-37区、Ⅳ層上面で検出された。約1.2m四方の範囲に甕と壺の土器片が散在する状態で検出された。遺物は接合により復元できた5点を図化した。

353～355は甕である。353は口径22.1cmで、口唇部はなでられて丸味を持ち、緩やかな波状をなす。器壁は薄く、内面と外面の口縁部は丁寧になでて仕上げている。

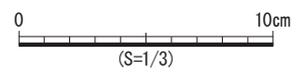
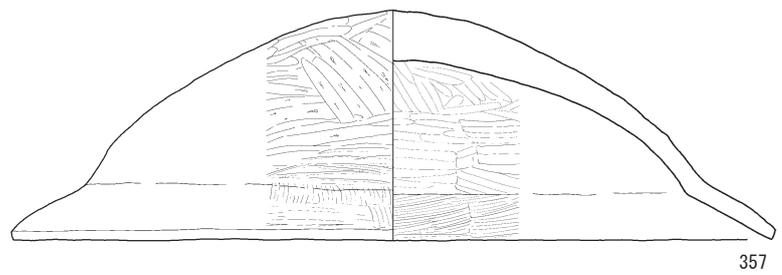
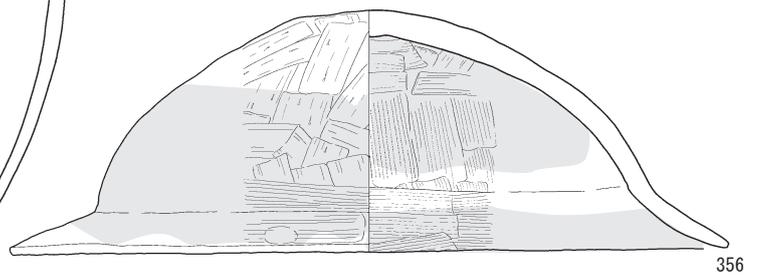
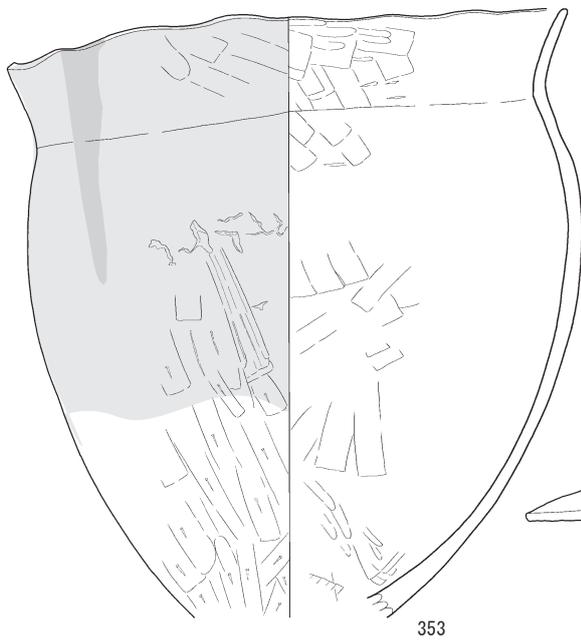
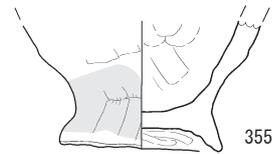
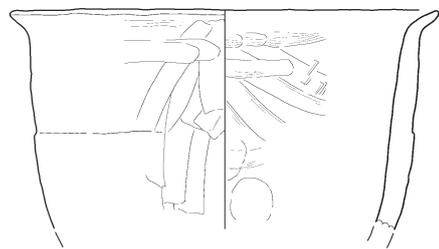
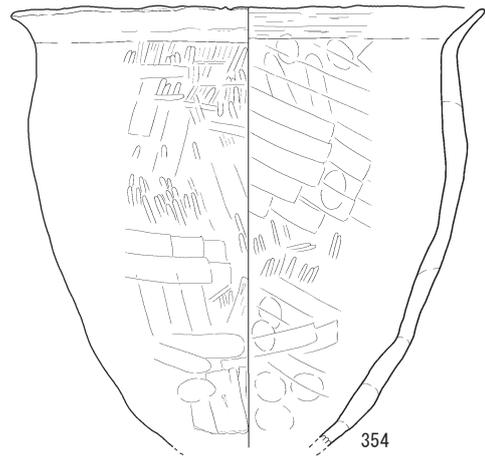
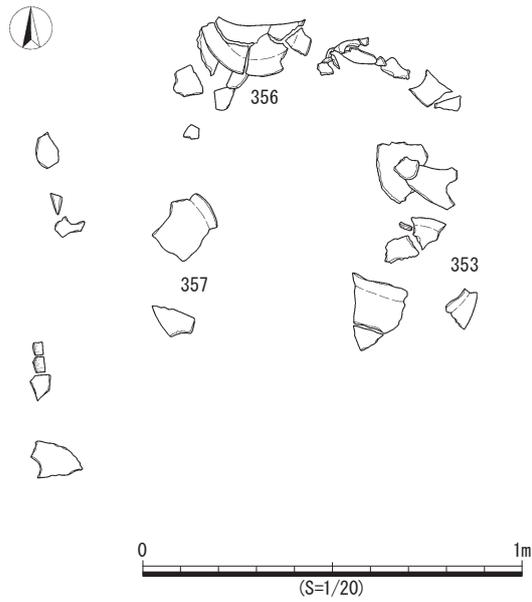
外面には縦方向のひび割れが多数見られ、口唇部から胴部にかけては、煤状炭化物を縦方向に断ち切る筋状の消失（吹きこぼれ痕）が認められる。また、煤状炭化物が付着する胴部の一部では、被熱と見られる器壁の剥落もある。内面は浅黄橙7.5YRの器肌で、外面は被熱によりパッチワーク状に変化する。器壁は薄く、軽量である。354は口径18.5cmで、口縁端部は大きく外反する。4～5mmほどの赤色粒を含む胎土で、それらの粒子が器面に現れ、粗雑な仕上がりとなる。明赤褐2.5YRとにぶい赤褐5YRの器肌は、ミガキ状のナデで光沢を保っている。355は同1個体と思われる口縁部と底部で図上復元をおこなった。復元による口径は16.6cm、高さは18.4cm、底径は6.2cmを測る。

356, 357は蓋である。356は口径28.4cm、高さ9.6cmの完形で、ドーム状の身部と、大きく下方に外反する口縁部で構成される。器高は低くつまみはない。外面ではヘラケズリと指ナデ、内面口縁部は横ナデ、胴部は刷毛目の器面調整が見られ、内面口縁部と外面のほぼ全域に煤状炭化物が付着する。器壁は厚く、重量がある。357は口径30cm、高さ9cmで、天井部は内外面ともに緩やかなドーム状をなし、口縁部は長く緩やかに外に開く。口縁部の外面が縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目で、その他は大小のヘラケズリで仕上げている。破断面はサンドイッチ状をなし、硬質で器壁は厚く、重量がある。内面は若干濃い肌色を呈しているが、色調の変化部や煤状炭化物の付着は見られない。



第98図 土器集中遺構1号内出土遺物4

土器集中遺構 2号



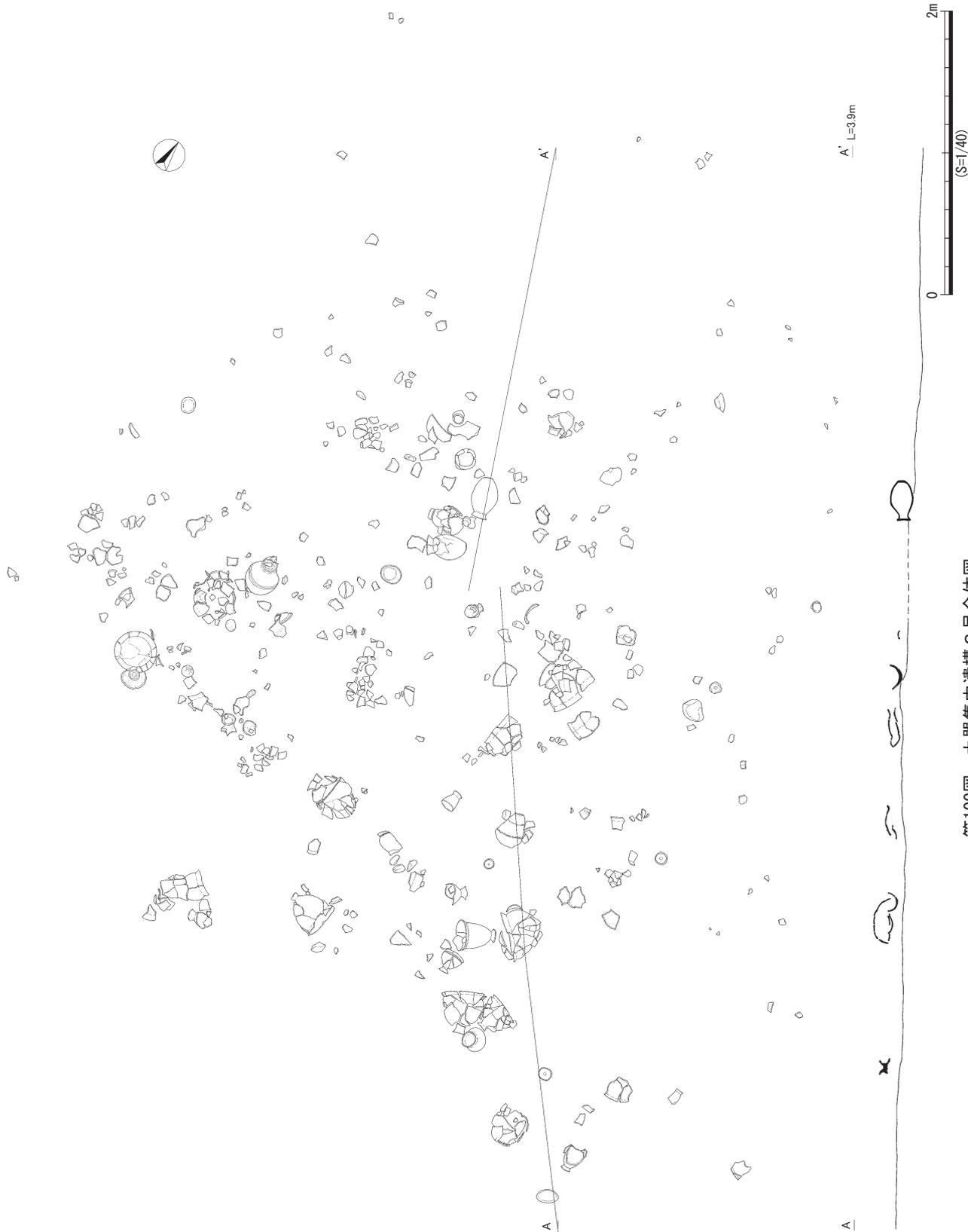
第99図 土器集中遺構 2号および出土遺物

土器集中遺構3号（第100～111図）

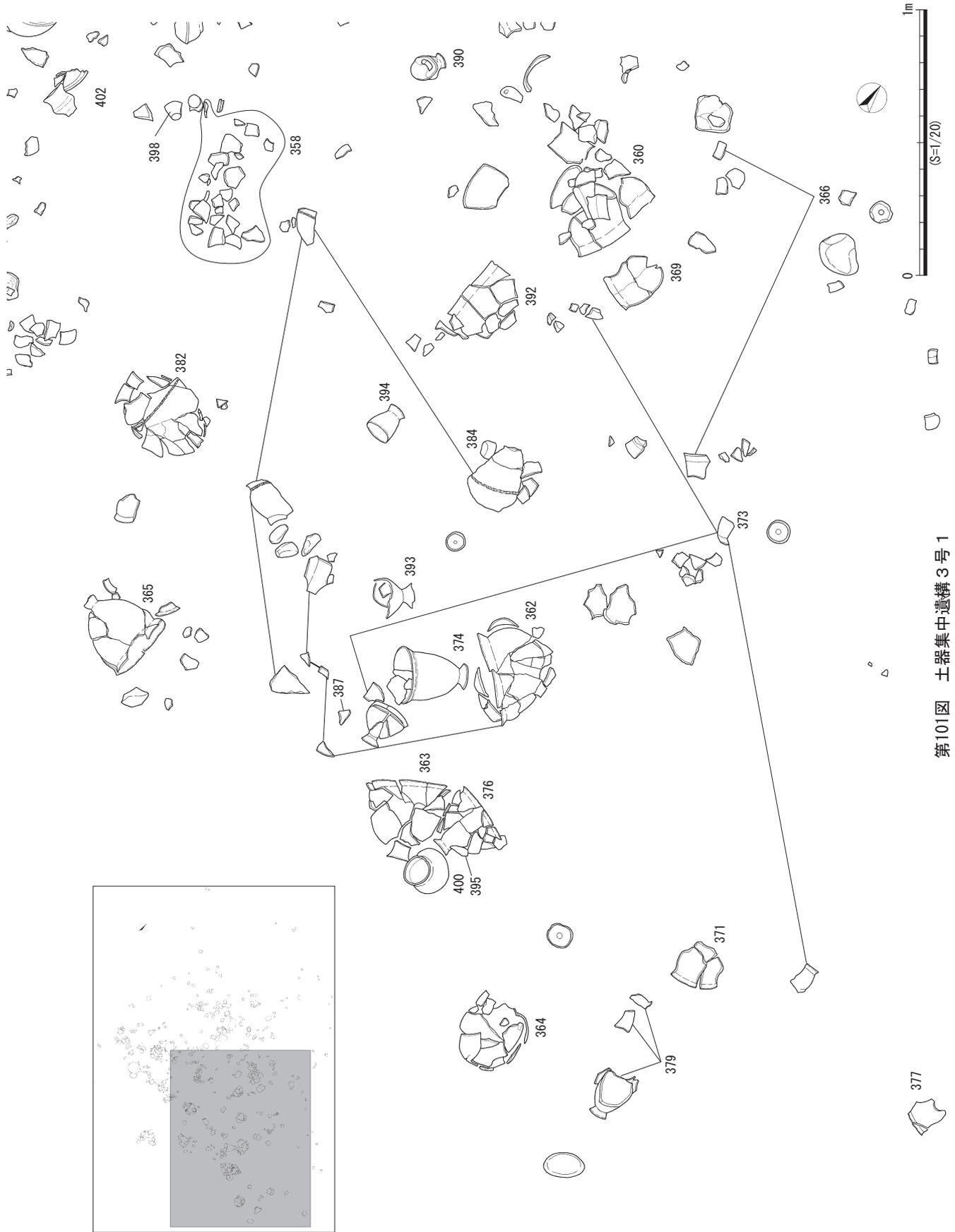
C・D-36・37区、IV層上面で検出された。広範囲にわたり、完形の甕や壺、大型土器片が集中して出土した。土器集中遺構5号とは近接する位置にあり、調査年度が異なるため3号と5号の遺構として取り上げられているが、同一の土器集中遺構である可能性も考えられる。また、C・D-36・37区付近は遺構としては取り上げなかったが土器が数多く集中して出土した区域でもあった。遺物は48点を図化した。

358～379は甕である。358は口径約27cm、高さ28.9cm、底径8.6cmの脚付甕で、口縁部は大きく波打つ。刷毛目主体の器面調整で、刷毛目のカキアゲで胴部との境とするが、口縁部の指ナデ仕上げで掻き消される。口径と器高が近似し、小さな脚は緩やかに外に開き、脚部内面天井は丸くなる。長石や石英を主体とする胎土で、赤色粒と多量の火山灰性のガラス質粒子を含み、キラキラとした器面を呈している。器壁は薄く、軽量の仕上がりが特徴的である。胴部が黒変（灰褐10YR）し、口縁部と脚部が赤変（橙5YR）する。359は口縁部が欠落するが、口縁部はくノ字に外反すると見られ、胴部との境も緩やかである。脚部は小さく、端部は外向きに丸くなる。胴部にはひび割れがみられ、器壁は薄く軽量の仕上がりにある。精選された胎土を用い、器肌は内外面とも、にぶい黄橙10YRである。360は口径23.0～26.9cm、高さ31.4cm、底径9.6cmで、口縁部のゆがみは焼き歪みと見られる。また、細長い口縁部はくノ字に外反し、胴部との境界は内外面とも指ナデで、特に内面は入念に仕上げている。内外とも浅黄橙7.5YRの器肌で、一部風化が進行している器壁は薄く、軽量の仕上がりをなす。361は口径25cmの外反しながら裾部が開くタイプの脚付甕で、口縁部は緩やかに外反し、脚部内面の天井は平坦となる。特に、器壁は薄く、軽量の仕上がりで、胴上部から口縁部にかけては刷毛目、下部ではヘラケズリで、口縁部との境界は斜め方向の刷毛目のカキアゲ痕が残る。長石やカクセン石、火山灰性のガラス質粒子を多量に含み、内面は赤褐2.5YRと赤い。362は口径28.8cm、高さ33.1cm、底径10.4cmで、脚の一部を欠くがほぼ完形の甕で、内面の稜線は残される。細長い口縁部はくノ字に外反し、平坦な口唇部は緩やかに波打ち、脚端部は緩く外に開き、内面天井部は平坦である。外面は刷毛目、内面は丁寧な工具ナデで、内底面と頸部と胴下部を除く広い部分に煤状炭化物が見られる。胎土は特に、火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含み、キラキラとした器面をなしている。363は口径21.4cm、高さ26.5cm、底径は9.0cmで、口唇部は直線的で尖り気味に工具でナデて仕上げる。内面の稜線は明瞭で、調整や胎土等は前記の360と酷似するが、重量のある焼き上がりをなす。両面とも浅黄橙10YRで胴部に煤状炭化物が付着し、内底面にも類似の付着物が見られる。364は口径23.1cm、高

さ25.8cm、底径10cmの脚付鉢で、脚の一部を欠くがほぼ完形である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は丸い。脚部は直線的で、内面天井は平坦である。器壁は厚く、重量があり、火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含む胎土で、口唇部から肩部で熱破碎と見られる剥落痕が見られる。365は胴部は丸く頸部で締め、くノ字に外反する口縁部を持つ器形で、胴部との境界は刷毛目状工具のカキアゲで形成し、内面の稜線はやや明瞭に残される。口径21.8cm、高さ26.5cm、底径7.2cmで、口縁部は緩やかな波状で外反する。口縁部と胴部最張部を中心に帯状に煤状炭化物が付着し、屈曲部と胴部下位から脚部は赤変が見られる。また、内面の胴部下位から底部にかけて、被熱に因ると見られる部分的な器壁の剥落が見られ、煤状炭化物の付着も見られる。器壁は厚く、重量がある。外面上部は刷毛目、下部は粒子の移動を伴う縦方向のヘラケズリが顕著で、内面も上部は刷毛目、中央部から下部は工具ナデや指頭痕が認められる。366は器壁の薄い軽量の甕で、22.7cmほどの口径が復元できる。長く緩やかに外反する口縁部で、胴部との境には刷毛目のカキアゲが集中するが、その移行はスムーズに行われる。煤状炭化物の付着は、屈曲部に集中する。367は復元口径18.4cmで、くノ字に外反する口縁部は、刷毛目後、ナデで仕上げる。器壁は薄く、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラとした器面をなす。368は口径14.8cmの小型甕で、口縁部はくノ字に外反し、口縁部の先端はわずかに薄くなる。外面は胴部で刷毛目、口縁部は横ナデで、下部は熱破碎により器面の剥落が激しい。369は復元口径18.8cm、高さ21.7cmで、底径7.5cmほどが復元できるが、焼き歪みがあるため、測点で形状が異なる。口縁部は短くくノ字に外反し、胴部との境も緩やかで、脚部は小さく外反しながら端部は外向きに丸くなる。ひび割れが激しく、2～3mmの長石を多量に含み、器壁は薄く、軽量の仕上がりにある。370は口径13.4cm、高さ14.3cm、底径6.6cmの小型甕で、緩やかに外反する口縁部で、胴部から口縁部への移行はスムーズに行われる。口縁部以外は丁寧な工具ナデで、脚部内面の天井部は丸く、胴部の一部には黒斑が見られる。371は胴部との境は指頭痕が連続して残され、内外とも稜線は不明瞭である。また、胴下部はヘラケズリで形成される。372は口径23.5cmで、口唇部はナデられて丸味を持ち、緩やかな波状をなす。胴部との境界は、刷毛目のカキアゲや工具ナデで形成し、内面の稜線も明瞭に残される。煤状炭化物の付着は、口縁部から胴部の広範囲におよぶ。胎土は、赤色粒やカクセン石等の黒色鉱物、特に火山灰性のガラス質粒子を多く含み、キラキラとした器面を呈している。373は口径22.4cmの甕で、口縁部はくノ字に短く外反する。刷毛目やヘラケズリ、指頭痕等の調整痕が明瞭に残る資料で、器壁は薄く、胎土には火山灰性ガラス質粒子を大量に含む。374は口径、高さともに22cm



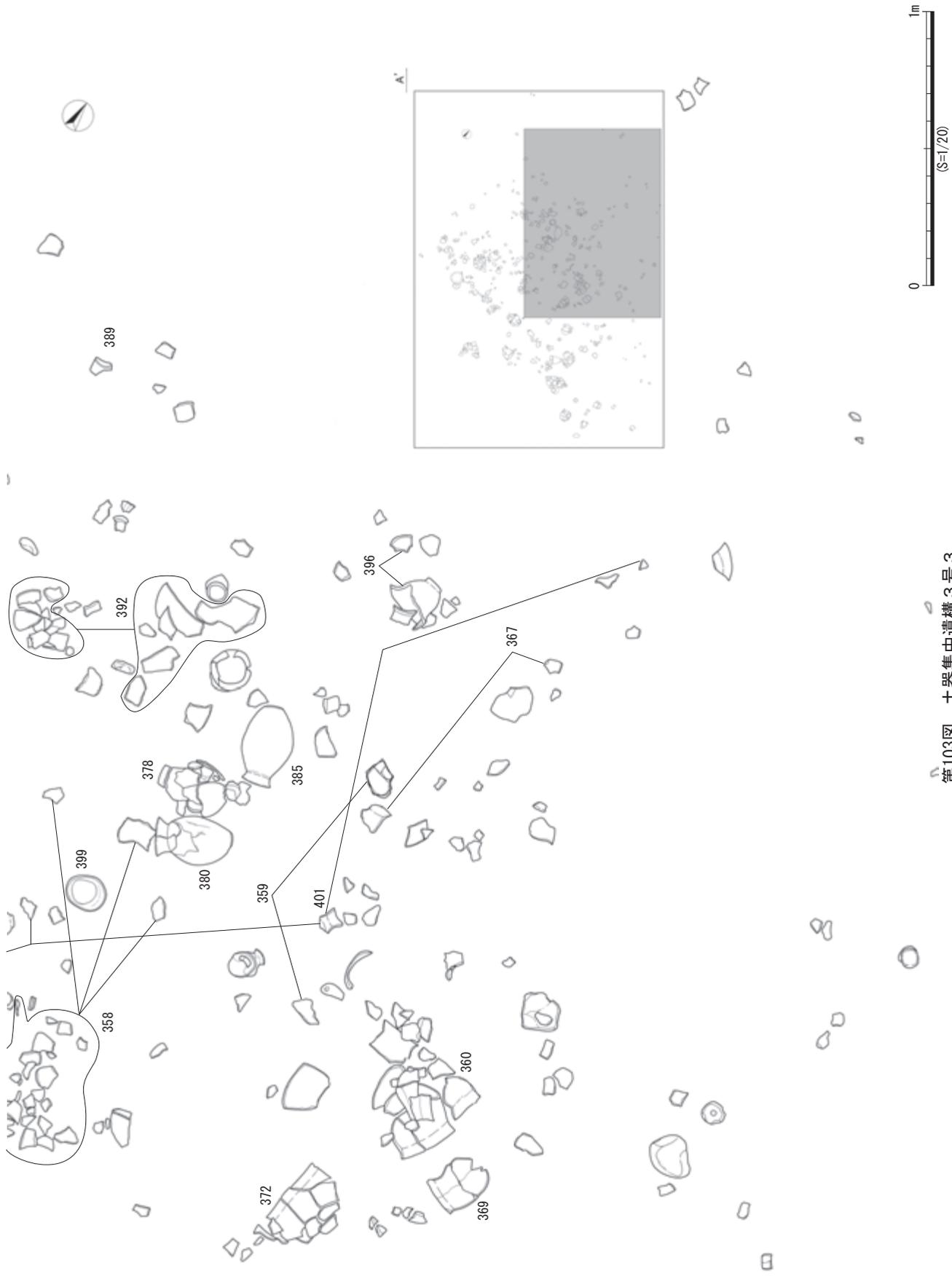
第100図 土器集中遺構3号全体図



第101図 土器集中遺構3号1



第102図 土器集中遺構3号2

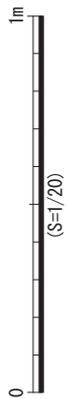


第103図 土器集中遺構3号3

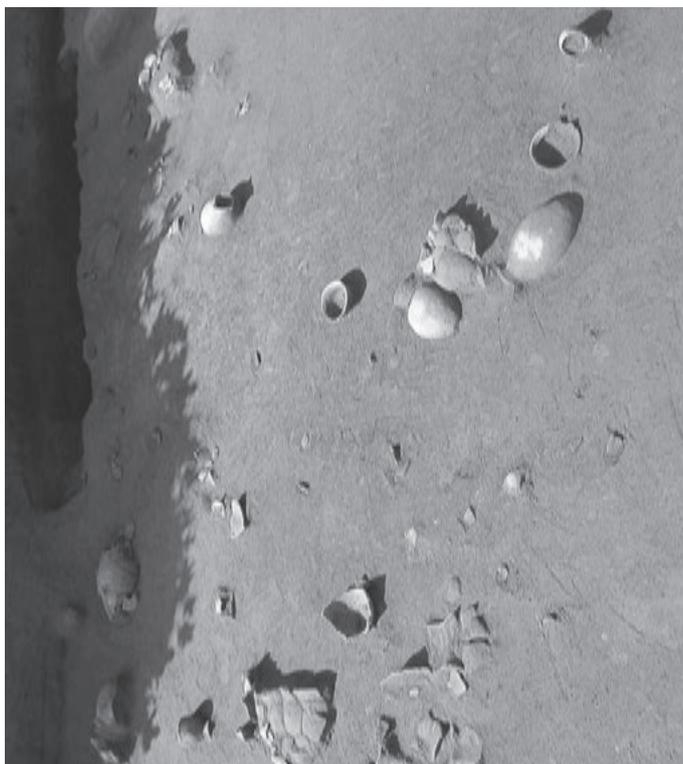
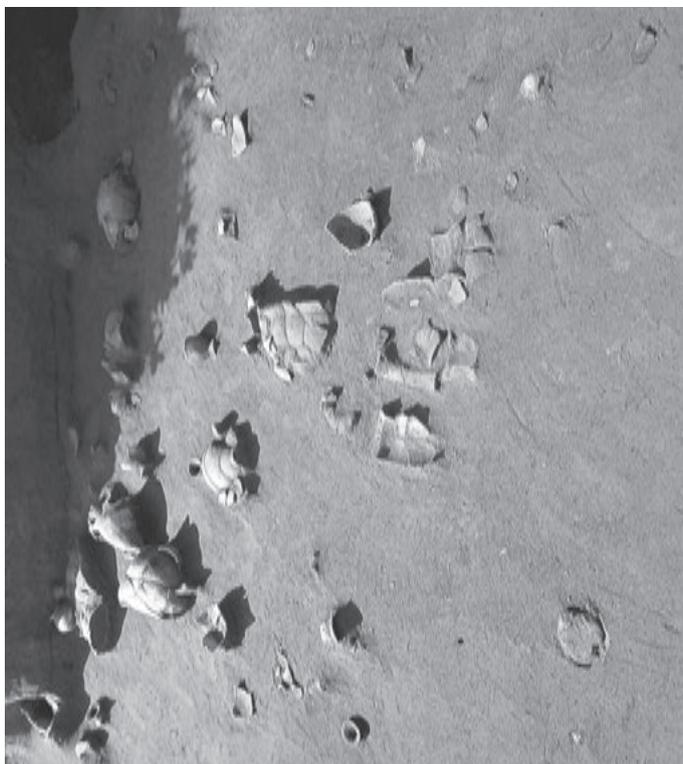
A L=3.9m

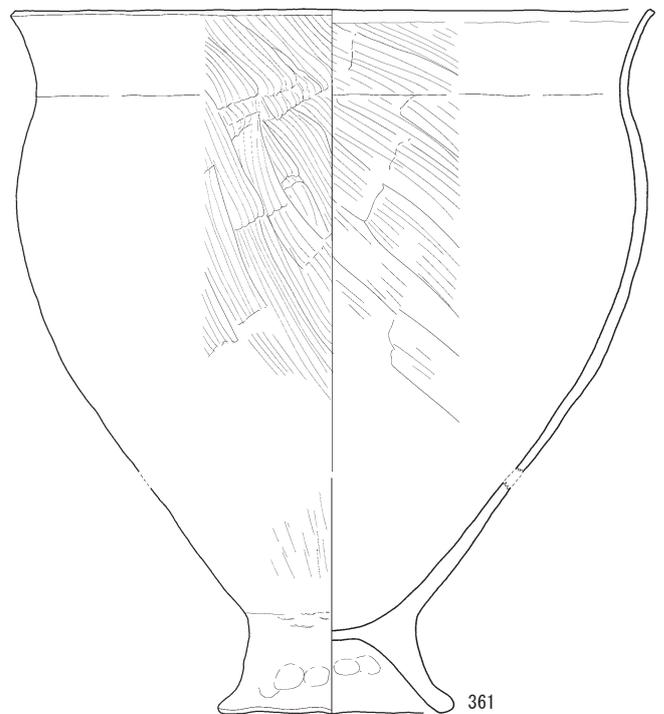
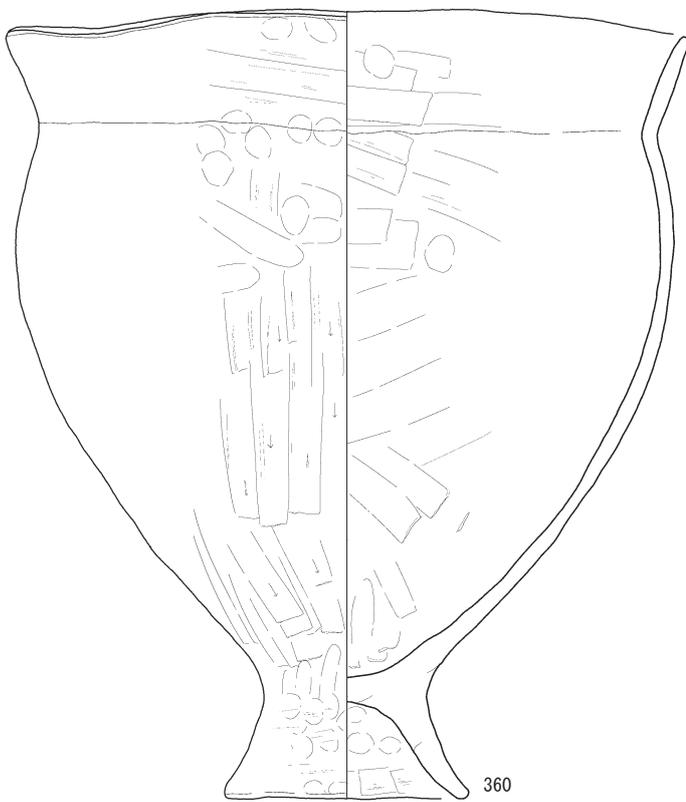
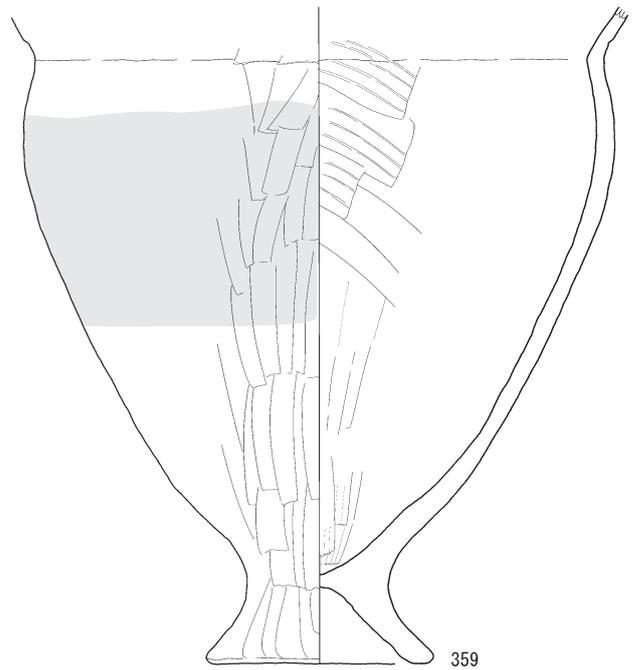
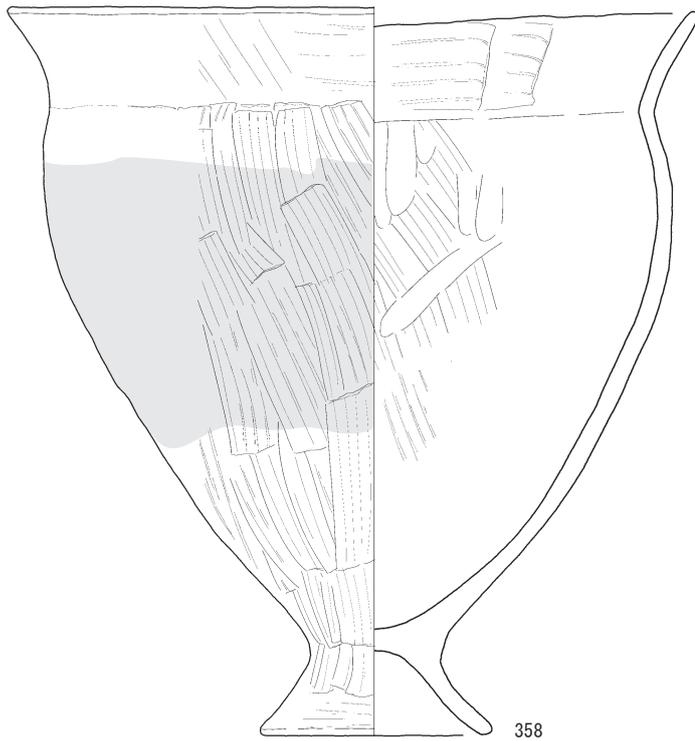


A' L=3.9m

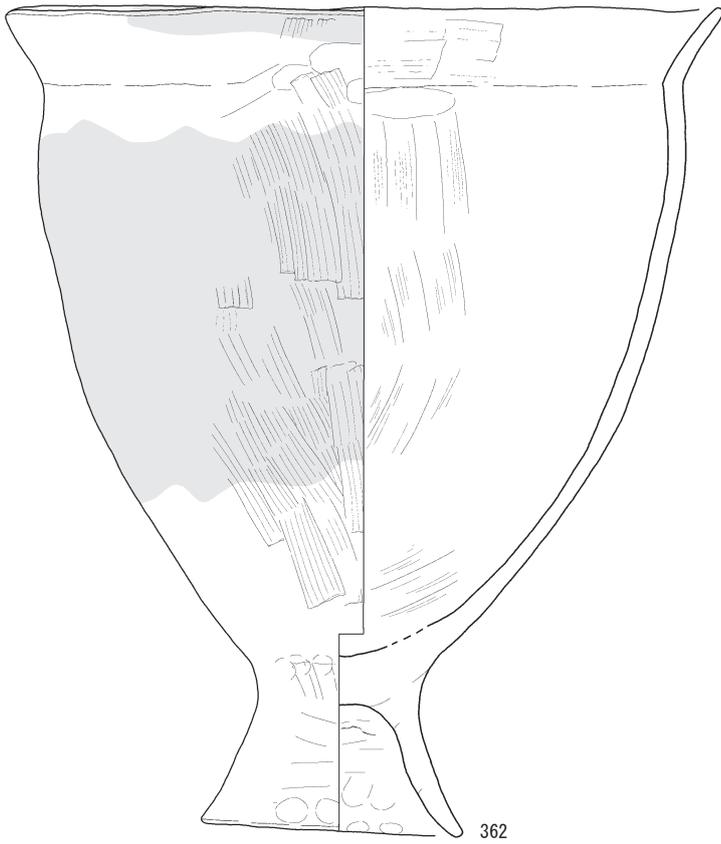


第104図 土器集中遺構3号断面図

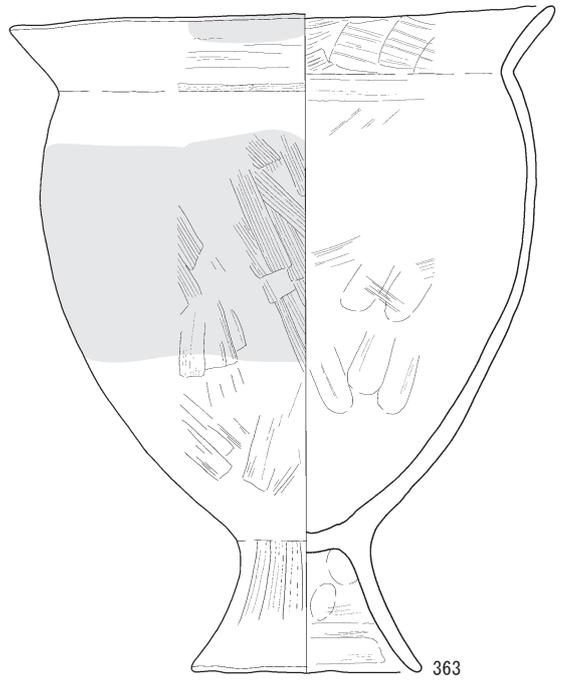




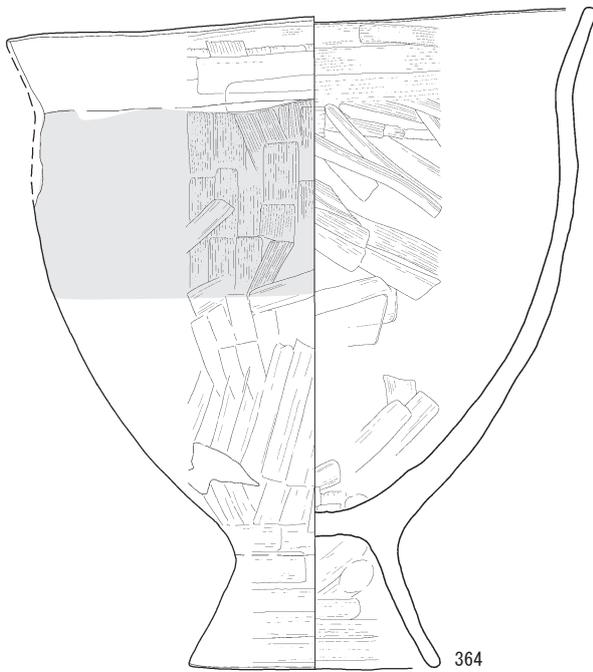
第105図 土器集中遺構3号内出土遺物1



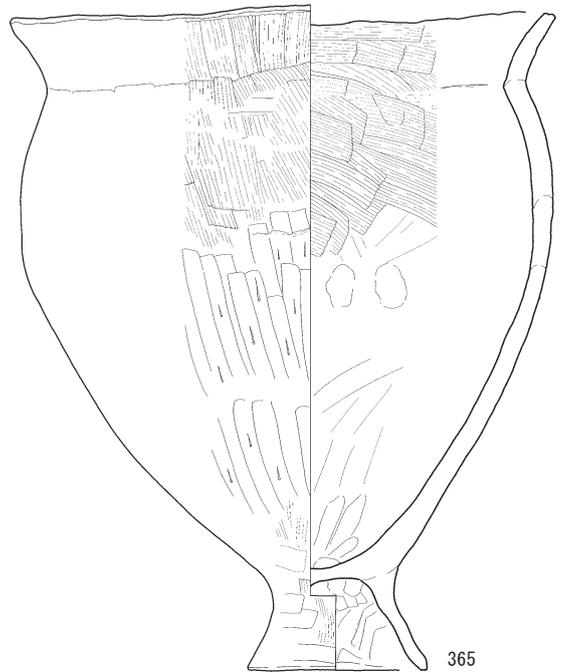
362



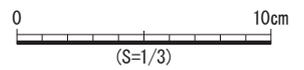
363



364



365



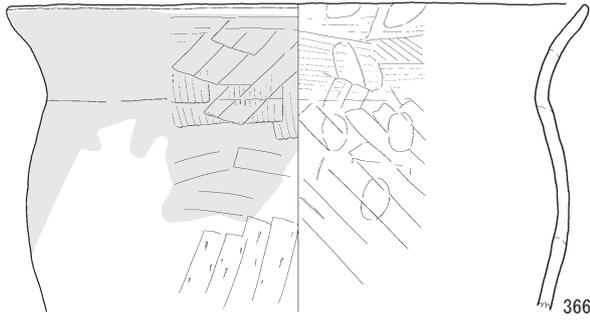
第106図 土器集中遺構3号内出土遺物2

ほどの甕で、径の最大は口縁部に設けられる。稜線は内面が明瞭で、煤状炭化物は胴部を中心に帯状に光沢を保って残される。赤色粒や微細な石英粒や輝石を主体とする胎土で、軽量の仕上がりが特徴的である。375は口径20cm、高さ23cm、底径9.2cmの完形の甕で、口縁部との境を形成した刷毛目のカキアゲは丁寧にナデ消される。口縁部は長く緩やかに外反し、外反する脚部の端部は丸く、脚部内面の天井部は平坦である。胎土は精選されたもので、軽量であり、器面は浅黄橙7.5YR、内面は橙5YRと赤い。376は口径20.4cm、中央の高さ21.2cm、裾の広がる脚台底部の径が7.7cmの甕で、口縁部は緩やかな波状をなす。内外ともナデ調整で仕上げるが、特に内面は丁寧である。器肌は両面とも橙5YRを発色し、化粧土が使用されている。赤色粒、カクセン石を含む砂粒の多い胎土でザラザラとした感のある器面である。器壁は薄く、軽量である。377は器壁の薄い軽量の甕で、口径18.7cm、高さ19cm、底径6.5cmが復元できる。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境の移行はスムーズに行われる。脚部は外反しながら端部が外向きに丸くなる小さなつくりで、脚部天井部は指でナデられる。長石、石英、黒色鉱物主体の胎土で、器壁は薄い。378は口径19cmで、口唇部は平坦面をなす。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで明瞭に形成される。口縁部はくノ字に折れて外反する。灰白7.5YRの器肌で、器壁は厚く、重量がある。379は口径13.8cm、高さ16.4cm、底部径6.4cmの小型の甕で、口縁がラップ状に開く形状をなす。器壁が厚く、重量があり、外面はヘラケズリ、内面は刷毛目が主体の調整となる。脚部は小さく、内面天井部は平坦で、脚部との接合点が明瞭に見られる。浅黄橙10YRの器肌をなす。1087は免田式土器の長頸壺である。外面に沈線による重弧文が施される。

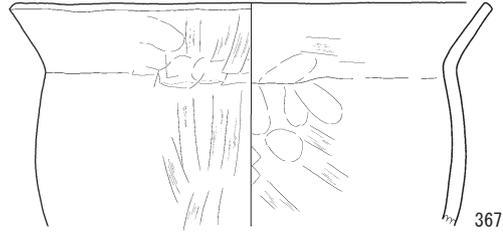
380～390は壺である。380は口径12.6cm、高さ25.8cmの壺で、内底部には刷毛目を残すが、上位は丁寧にナデられる。鶏卵状の胴部を呈し、貼付け突帯はヘラで斜めに刻む。黒色鉱物が目立つ胎土で、薄い肌色を発色する砂質胎土で、器面はザラザラ感が強く、軽量の仕上がりにある。口唇部は狭い平坦面をなし、底部は狭い平底をなす。381は口径15.2cm、高さ30.9cmの長胴壺で、2.5cmほどの丸平な接地面を持つ。風化が著しいが器壁は薄く、胴部の隆帯はヘラで浅く刻まれる。器肌は浅黄橙10YRを呈し、器面は砂粒の多い胎土のためザラザラとした感があり、黒斑も見られる。軽量な仕上がりをなす。382は口径15.1cm、高さ30.7cm、底径4.6cmのほぼ完形の壺である。鶏卵状の長胴で、器壁は薄い。口唇部は狭い平坦で、口縁部はくノ字に折れて外反し、胴部突帯文は細く刻みも浅い。突帯文以下は刷毛目、上位はヘラケズリを加え、口縁部では横にナデで仕上げている。長石やカクセン石等を多量に含み、外面は7.5YR、内面は10YRの灰白である。383は口径14.6cm、高さ29.2cm、底径3.8cm

のほぼ完形の壺で、鶏卵状の胴部で器壁が厚く重量がある。口唇部は平坦で、口縁部はくノ字に折れて外反し、3条の無刻目三角突帯文を持つ。長石やカクセン石等を多量に含み、ザラザラとした器肌で、部分的に黒斑がみられる。胎土の色調は外面は浅黄橙7.5YR、内面は7.5YRの褐灰である。なお、内底面に、煮焦げ等の付着物を掻き取ったと見られるヘラのケズリ痕が残る。384は胴部に1条の刻目突帯を持つ薄手の壺で、逆鶏卵状の胴部形状が復元されるが、詳細は不明である。器壁は薄い、重量はある。385は口径11.2cm、高さ28.2cm短頸長胴で、4cm程の丸平な接地面を持つ。口唇部は刷毛目後横にナデで狭く端正に仕上げる。胎土は2～3mmほどの白色岩粒や長石、カクセン石、火山灰性のガラス質粒子を含み、キラキラとした器面である。器壁は厚く重量のある仕上がりにある。黒斑の黒褐7.5YRから、浅黄橙7.5YR、橙5YRと器面の色調が激しく変化する。386は口唇部がM字状を呈し、口縁部はくノ字に外反する。器面の刷毛目は明瞭で、器壁は薄い。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラとした器面をなす。胴部は煤状炭化物等で黒変するが、口縁部は鮮やかな橙2.5YRである。387は11.8cmほどの口径が復元できる壺の口縁部で、コノ字状あるいは三角形に外方に貼り付けた口唇部が剥落したと見られる。精選された微細な胎土を使用し、灰褐10YRの器肌を呈している。388は口径9.8cm、高さ21.9cm、底径3.8cmのほぼ完形の壺で、胴部は球形で、器壁が厚く重量がある。口縁部はほぼ直立し、口唇部は丸く、胴部突帯は無い。平底の中央部は指押さえによりわずかに凹む。器面は入念なヘラケズリで仕上げられるが、一部にはタタキ痕らしき平坦面を伴う調整痕も見られる。なお、底部付近の器壁が厚く、上部との間に段差が認められることから、輪台充填技法との見方もある。器面は赤褐5YRである。389は平底を呈する壺の底部で、7.8cmほどの底径が復元できる。両面とも指頭痕が顕著に残り、精選された微細で火山灰性のガラス質粒子を含む胎土が使用される。390は直径3cm弱の平坦面を有する壺の底部である。391は口径28.2cm、高さ8.2cmの、ほぼ完形で器高の低い蓋で、天井部はドーム状をなし、口縁部は長く緩やかに外に開く。器面調整は外面でヘラケズリと指ナデ、内面口縁部と内面天井は横ナデ、胴部の屈折部は刷毛目で、内面の屈折部の風化が激しい。煤状炭化物は、内面口縁部にベルト状に付着し、外面での残存状況は悪い。岩粒や1mmほどの長石やカクセン石等の黒色鉱物を多く含み、天井部は狭い平坦面を形成する。器壁は厚く、重量がある。

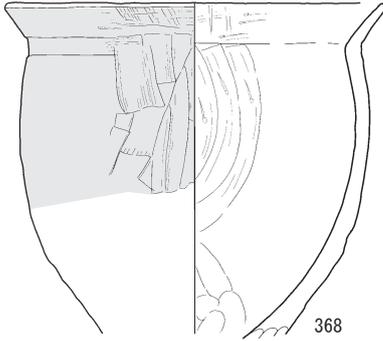
392～399は鉢である。392は口径30.6cmほどで、4か所の山形の頂部を持つ広口の鉢で、器面の風化が著しいが、口縁部との境界に刷毛目のカキアゲ痕が集中する傾向が見られる。精選胎土を用い、器壁は薄く、極めて軽量の仕上がりを見せる。器肌は橙5YRと明るい。393



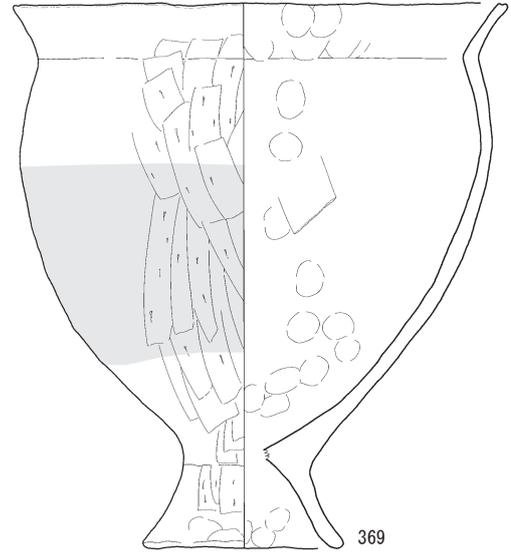
366



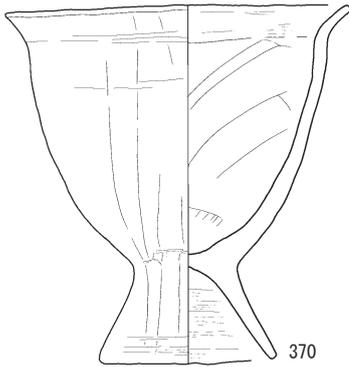
367



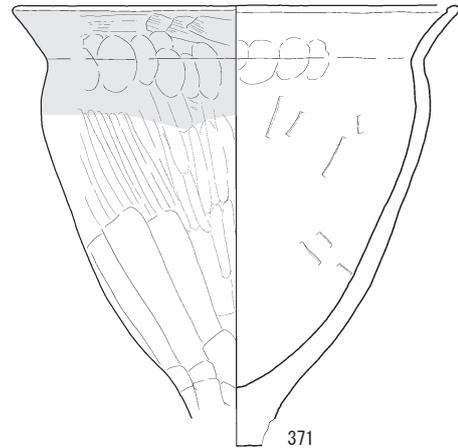
368



369



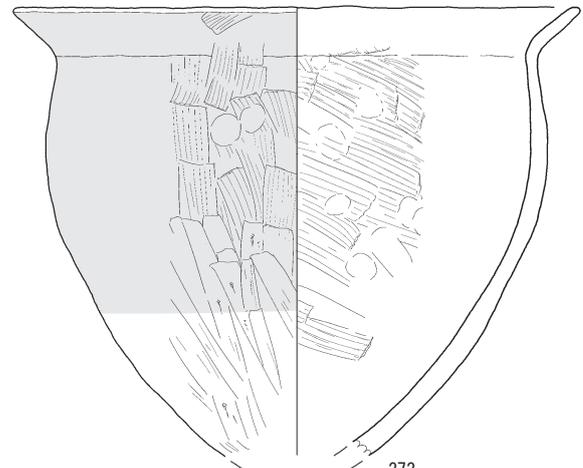
370



371



372

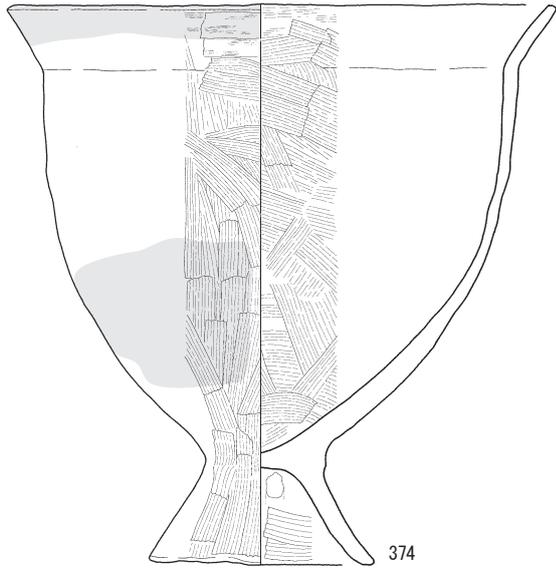


373

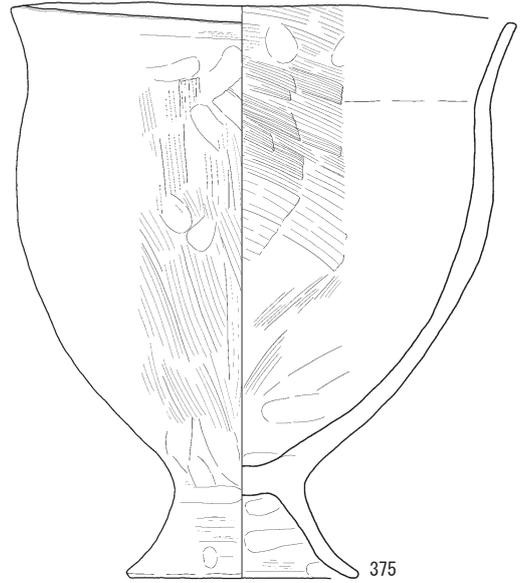


(S=1/3)

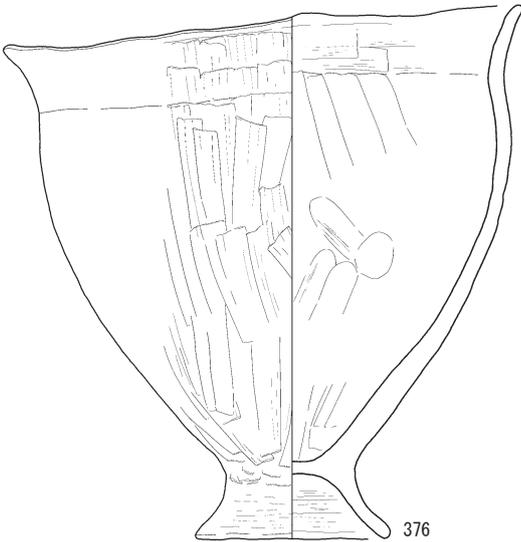
第107图 土器集中遺構3号内出土遺物3



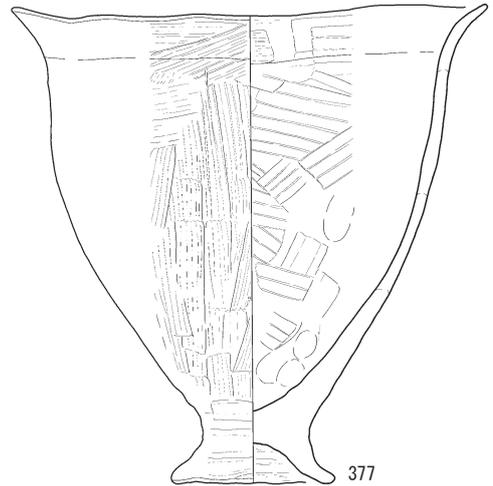
374



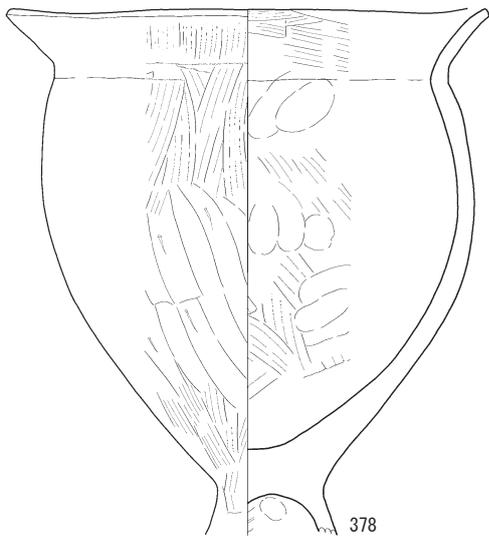
375



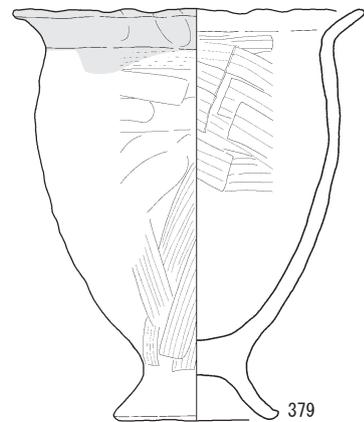
376



377



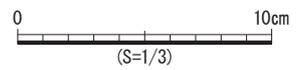
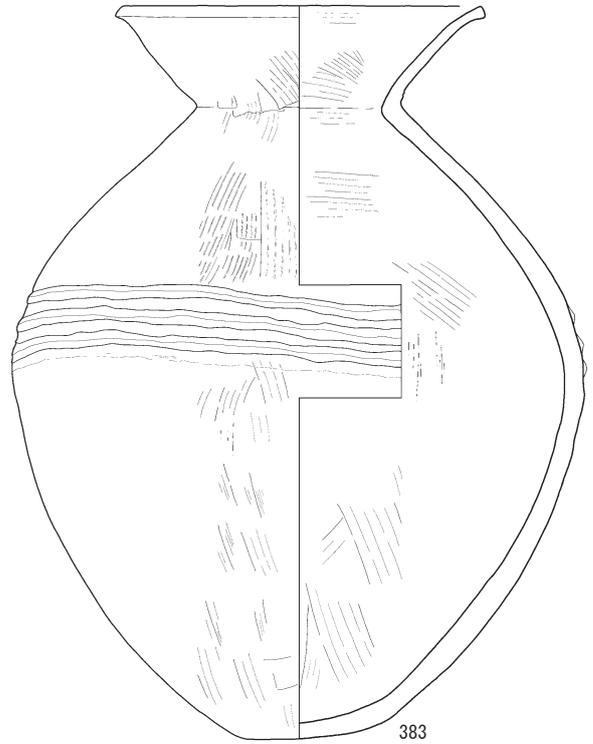
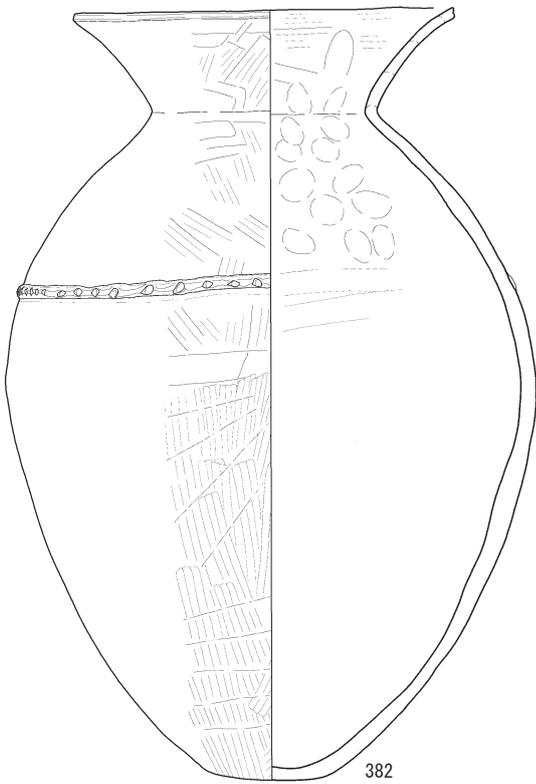
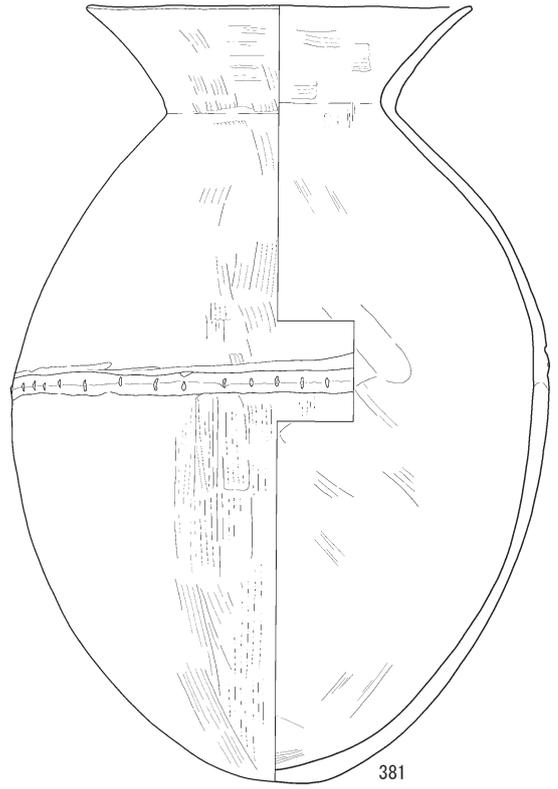
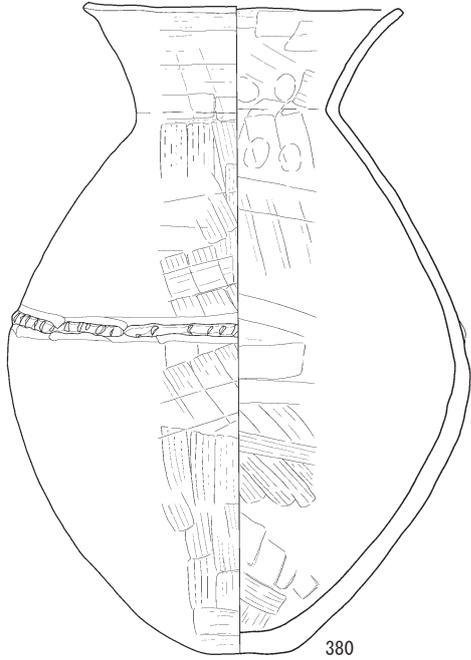
378



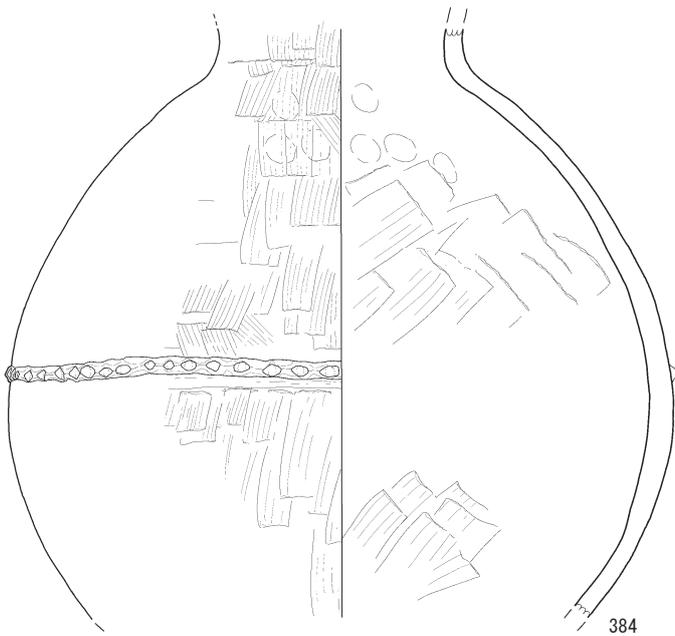
379



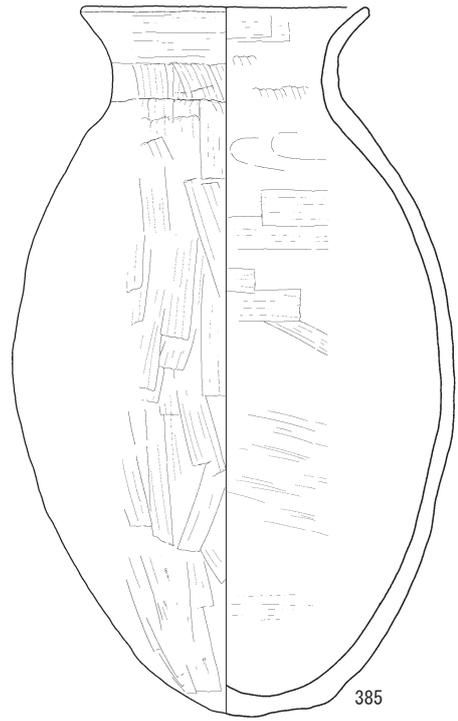
第108図 土器集中遺構3号内出土遺物4



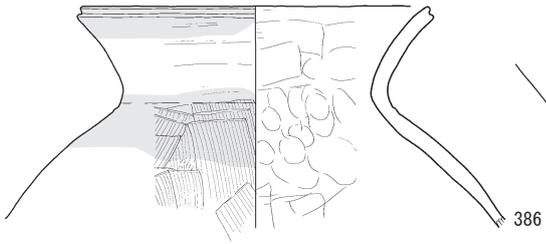
第109図 土器集中遺構3号内出土遺物5



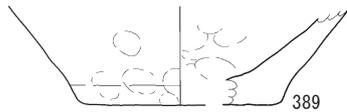
384



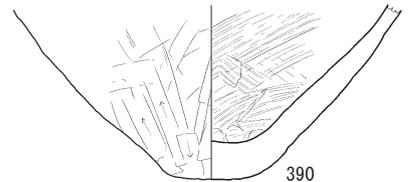
385



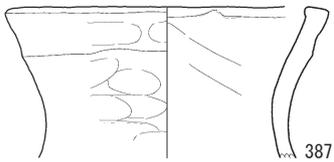
386



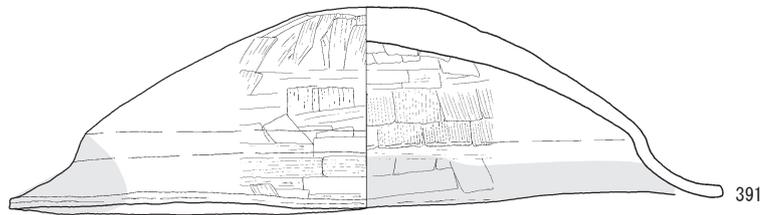
389



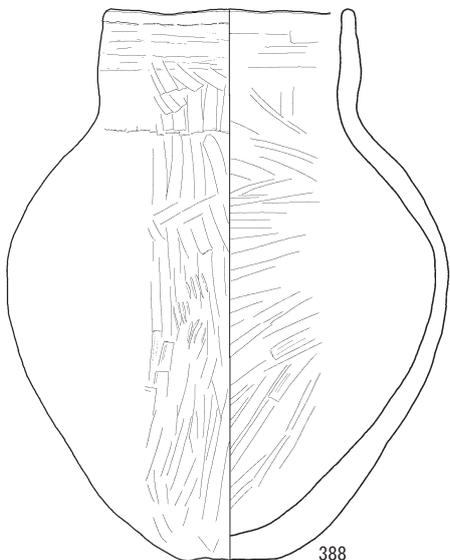
390



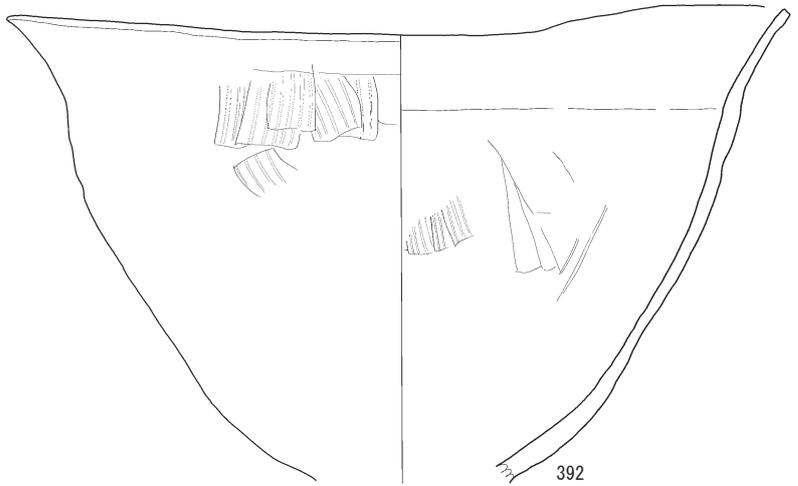
387



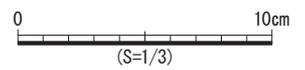
391



388



392



第110図 土器集中遺構3号内出土遺物6



第111図 土器集中遺構3号内出土遺物7

は復元口径15.2cm, 高さ15.2cm, 底径9.6cmの脚台付鉢で, 外面の刷毛目は良く残される。なお, 外面の浅黄橙7.5YRと内面の橙2.5YRのコントラストは大きい。394は口径11.1cm, 高さ11.9cm, 底径は6.8cmの完形の脚台付鉢で, 口唇部は工具によるナデで, 直線的で尖り気味に仕上げられる。器面の風化が激しく, 両面とも浅黄橙10YRで, ゴラザラ感が強い。395は口径13.4cmの鉢で, 底部は欠損する。器壁は薄く, 内外面の器面調整も丁寧である。浅黄橙7.5YRの器面は褐灰の中央部を挟んで, サンドイッチ状を呈す。なお, 内底面が溜まり状に赤く(橙2.5YR)変色している。砂質の強い胎土で, カクセン石が目立つ。396は口径17.6cm, 高さ13.3cm, 底径6.4cmの完形の鉢で, ラッパ状に開く形状をなす。器壁が厚く, 重量があり, 内外ともヘラケズリが繰り返される。3~4mmの赤色粒や岩粒, 長石等の白色鉱物を多く含み, ゴラザラな器面で, 黄橙7.5YRの器肌をなす。なお, 底部は若干の上げ底で, 工具でナデる。397は口径11cm, 高さ9.2cmの鉢で, 3cmほどの平底は縁を持つ。口縁端部が指押さえて外に開く形状で, 内面は刷毛目, 外面は指ナデで, ひび割れが目立つ。398は口径6.3cm, 高さ5.5cm, 底径3cmほどの平底のほぼ完形の小型鉢で, 両面とも丁寧にナデて仕上げる。黒色鉱物, 火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含み, キラキラとした器面をなす。399は口径が13.0~14.9cm, 高さ6.4~7.7cmと著しい焼け歪みがある完形の鉢で, 口縁部は指押さえて外反する類例の少ない形状である。底部は極端に厚く, 内底面は渦巻状の工具ナデで, その上部は刷毛目で調整し, 外面には焼成前のひび割れが多数残される。両面とも浅黄橙10YRで, 接地面に黒斑が残される。久住氏は, 伝統的第五様式の技術が見られるとし, その技術は人がこの地で作った可能性を指摘している。

400~403は小型丸底壺である。400は口径10.9cm, 高さ15.8cmで, 2cmほどの丸平な接地面を持つ。胴部形状は蕪形で, 口縁部は丁寧な横ナデにより短い口縁部をなす。内外面ともに刷毛目調整が目立ち, 重量がある。特に, カクセン石と石英粒, 火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で, キラキラとした器面である。両面ともぶい橙5YRで, 胴部から底部に黒斑を残す。久住氏によると, 胴部下半部の器壁の違いは, 逆円錐台形部に該当するとし, 北部九州で在地化した伝統的第五様式技法をまねてつくられた可能性を指摘する。401は直立気味に外反する口縁部で, 口径は8.4cm, 口唇部は丸く, 緩やかな波状口縁をなす。胎土は火山灰性のガラス質粒子を含み, 鮮やかな橙5YRの器肌を持つ。402は口径7.6cm, 高さ10.4cmの小型丸底壺で, 4.5cmほどの丸平な接地面を持つ。器壁は厚く, 特に底部は充実している。なお, 頸部には, 稚拙な意匠の線刻が見られる。器肌は浅黄橙10YRで, 黒斑が見られる。胎土は赤色粒, カクセン石を含む砂粒が多く, ゴラザラ感のある器面である。重量

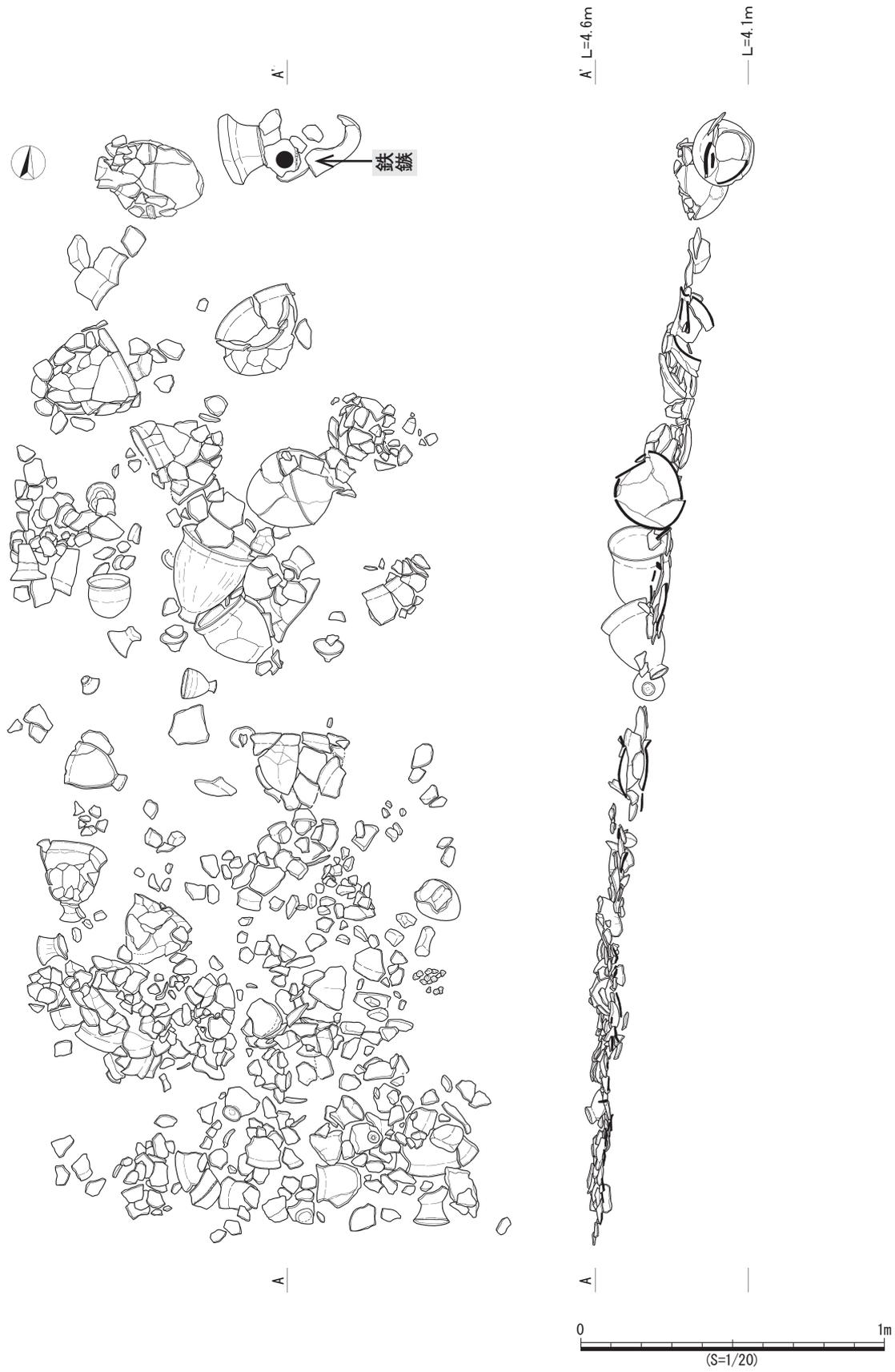
のある仕上がりをなす。403は胴部形状が蕪形で, 口縁部はつまみ上げたもので, 内外面ともに刷毛目調整が目立つ。特に, カクセン石と石英粒等の光沢を持つ鉱物を多く含む胎土で, 両面とも浅黄橙7YRである。404, 405は手捏土器である。404は口径7.2cm, 高さ6.8cmでわずかに凸レンズ状に膨らむ接地面を持つ。小型の鉢形を呈し, 口縁部は指仕上げでランダムな波状をなす。器壁は厚く, 重量があり, 外面のひび割れが目立つ。405はほぼ完形で, 軽量の仕上がりである。口径6.9cm, 高さ6cmで, 接地面は若干尖り気味で, 内底面は平坦に仕上げる。

土器集中遺構4号(第112~121図)

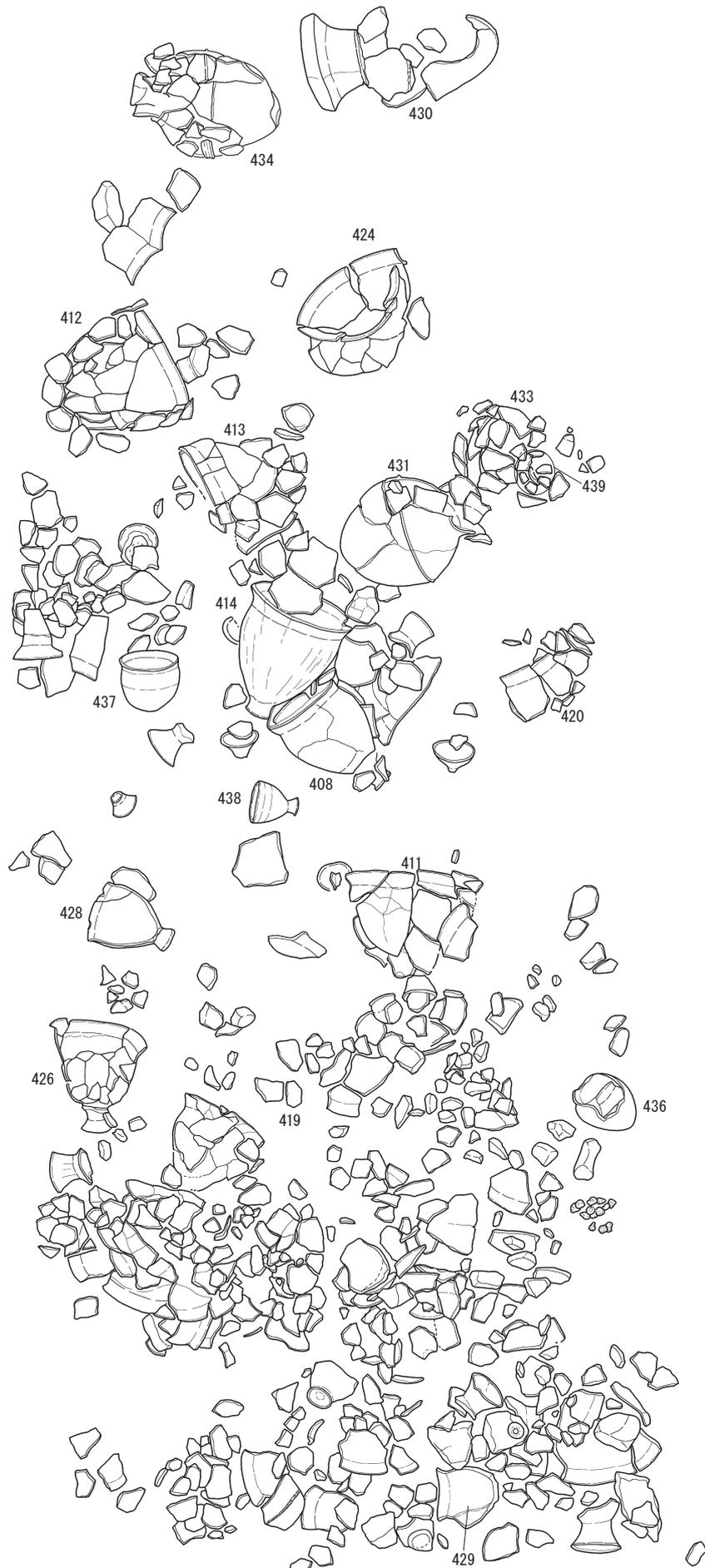
D-37区, IV層上面で検出された。4m×1.5m四方の範囲に, ほぼ完形もしくはその場で潰れた状態の甕や壺が集中して出土した。土器はそのほとんどが東側を向いて倒れており, 地表面に置かれていた土器が, 西側方向より何らかの力を受け倒れたものと思われる。

430については, 弥生時代後期の土器であり, 混入品である可能性も考えられるが, この遺構内の出土遺物として取り上げる。遺物は完形のものや接合により復元できた土器35点と鉄鏃1点を図化した。

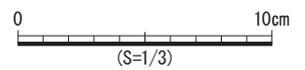
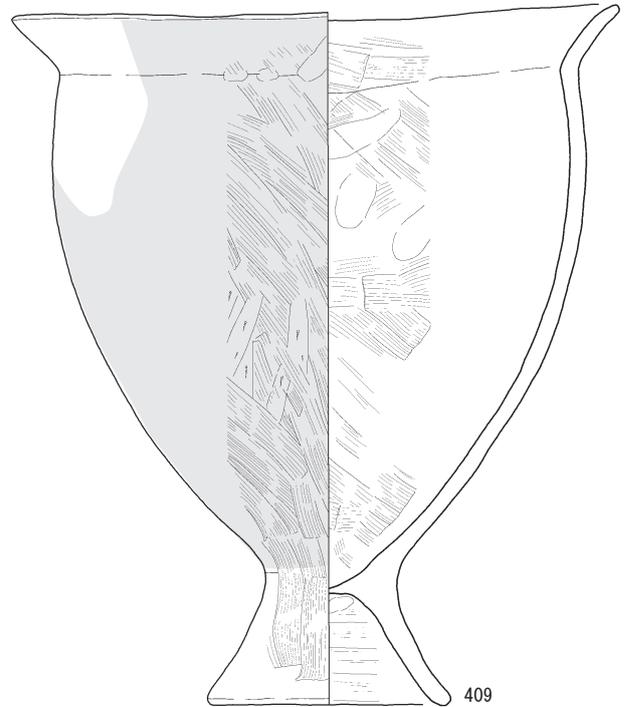
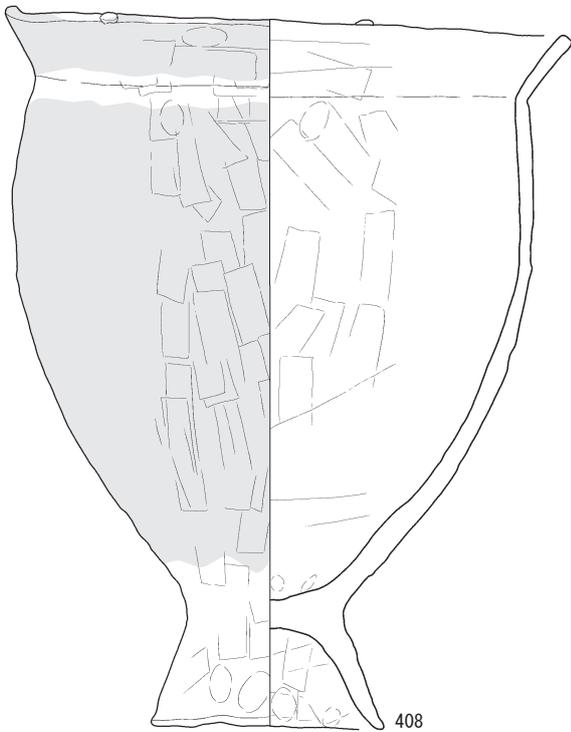
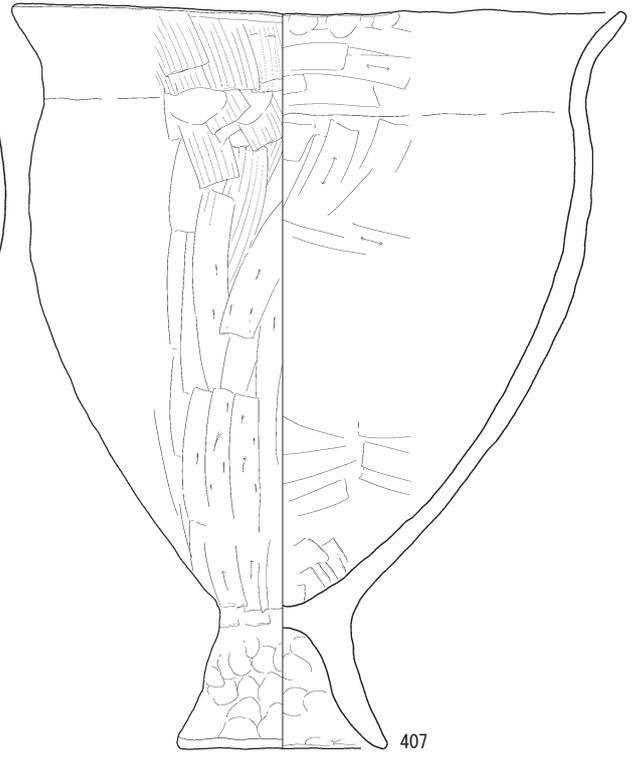
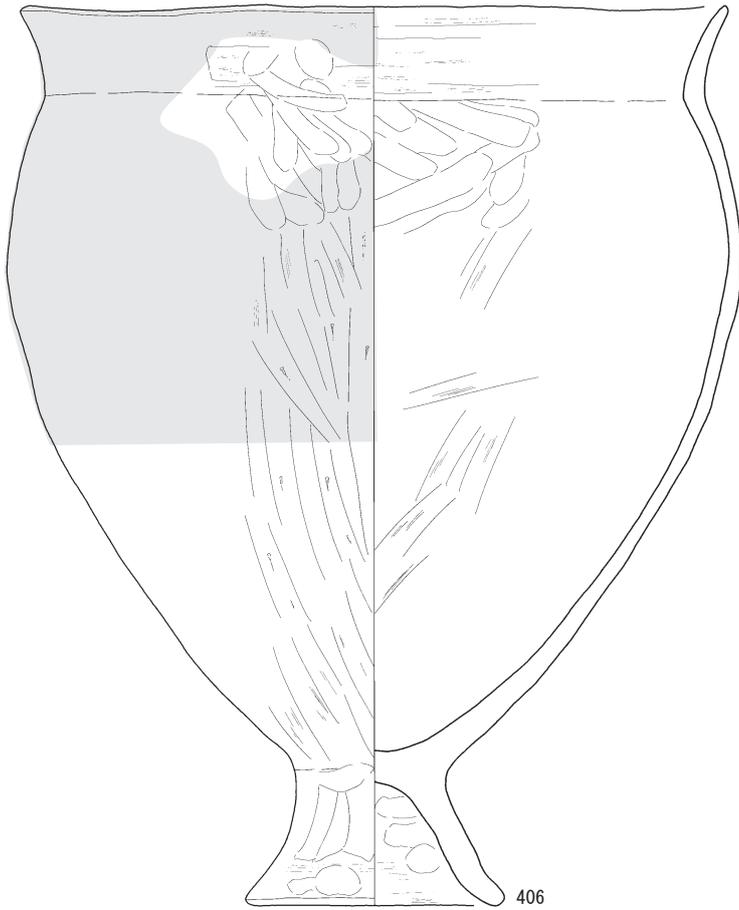
406~429は甕である。406は復元口径27.6cm, 高さ35.7cm, 底径9.8cmの脚付甕である。いわゆるくノ字に外反する口縁部で, 口縁部と胴部の境は明瞭で口唇部は若干薄い傾向が見られる。脚部の弯曲の度合いは緩く直線的で, 脚部内面の天井は丸い。煤状炭化物は口縁部から胴部に広範囲に付着するが, 胴下部と脚部間では付着が見られず赤変する。胎土は石英, 長石を中心に火山灰性のガラス質粒子を含むもので, 器壁は薄い。407は復元口径24cm, 高さ29.3cm, 底径8cmで, 口縁部は緩やかに外反する。脚部内面天井部は丸く, 脚の弯曲も少ない。胴上部には多数のひび割れが残され, 口縁部下位と胴下部, 脚部は赤変する。408は口径22.3cm, 高さ28.0cm, 底径は9.3cmの波状口縁の脚付甕で, 平坦な口唇部のそれぞれ対面する位置に粘土紐の貼付けと, 山形突起が見られる。口縁部は刷毛状工具によるカキアゲ痕が見られる。内面は丁寧なナデ仕上げで, 稜線は明瞭に残される。脚部は直線的で, 脚部内面の天井部はドーム状に丸い。外面の煤状炭化物の付着は広範囲で, 下位の一部は器壁が剥落し, その直下から脚台接合までの間の器壁が剥落している。また, 外面には粘土のひび割れも見られる。なお内底面にも煤状炭化物の付着物が見られる。長石, 石英を主体に, カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で, 外面では黒斑, 内面では赤斑が見られる。409は口径23.7cm, 高さ28.0cm, 底径9.2cmの完形の脚付甕で, 刷毛目調整は脚部まで至る。口縁部との境界は指押さえて強調し, 内面の稜線も明瞭に観察される。脚部は若干小振りで, 丁寧に仕上げ, 脚部内面の天井は平坦に近い。胎土は2~3mmの岩粒や火山灰性のガラス



第112図 土器集中遺構4号 1



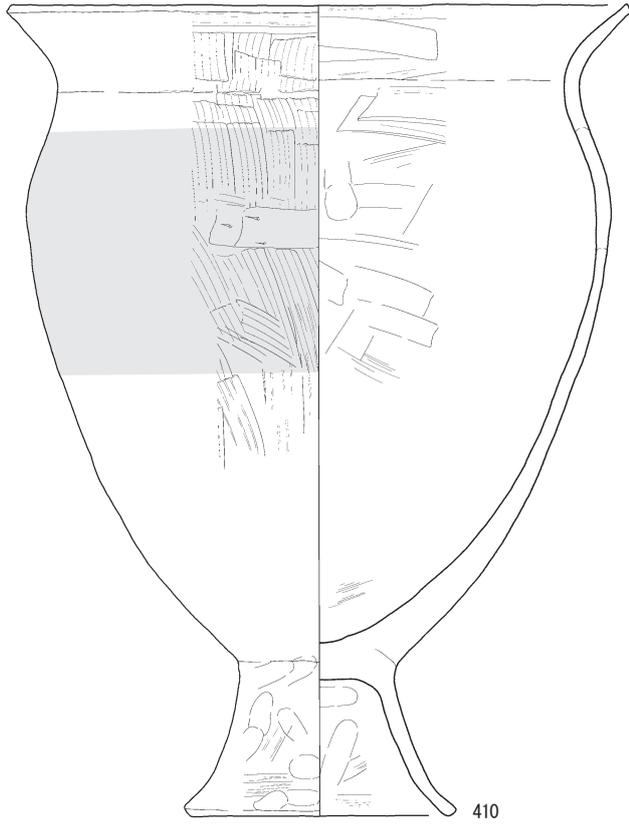
第113図 土器集中遺構4号2



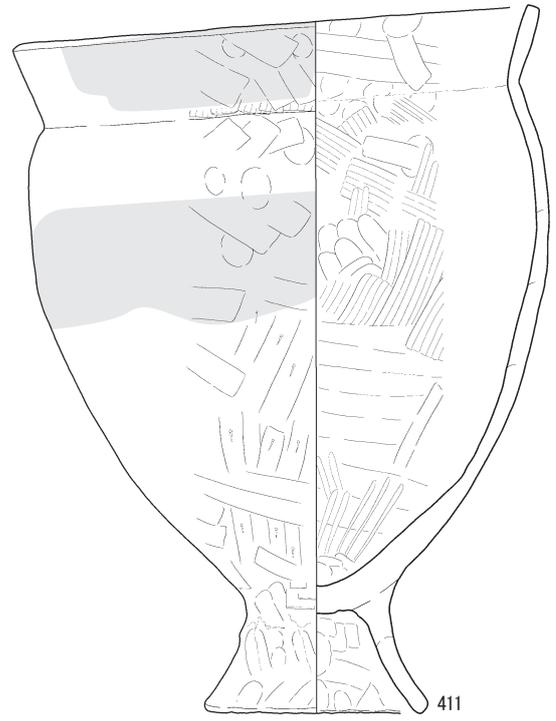
第114図 土器集中遺構4号内出土遺物1

質粒子を含み、器壁は薄く、軽量である。410は図上で復元した。復元口径24.4cmで、口縁部との境界は指で押さえた後、刷毛目のカキアゲを重ねる。総じて丁寧な仕上げで器壁は薄く軽量で、胎土は2～3mmの岩粒や火山灰性のガラス質粒子を含む。脚部内面天井は平坦で、直線的に伸びながら端部は外を向き丸く収まる。胴部の刷毛目部には煤状炭化物が付着するが、胴下部から脚部間には剥落する。411は口径20.8cm、高さ26.7～28.3cm、底径は8.8cmのほぼ完形の脚付甕で、平坦な口唇部は工具ナデ時の段差がそのまま対面する位置に残される。口縁部にはハケ状工具によるカキアゲ痕が残り、内面は丁寧なナデ仕上げで稜線は不明瞭。脚部は直線的で、脚部内面の天井部は平坦で、天井部から脚部への交換点是指頭痕が見られる。内底面には煤状炭化物が付着し、外面胴部にもベルト状に付着することから、煮炊き具として使用されたと見られる。一見粗雑感があるが、内面調整は丁寧に実施している。胎土は火山灰性ガラス質粒子を多量に含み、仕上がりは軽量である。412は口径26.4cm、高さ33.6cm、底径は10.2cmの脚付甕で、内底面には煤状炭化物が付着し、脚と胴部下位は浅黄橙7.5YR、その上位は煤状炭化物の付着及び付着痕が見られる。また、器面上位ではひび割れが目立つ。直線的に外反する口縁部で、外面の刷毛目のカキアゲはナデ消され、緩やかな段差として残される。脚部は緩やかに弯曲し、脚部内面の天井部は平坦となる。なお、赤変する胴部下部から脚部の破断面からは、外面部のみが赤変する状況が観察できる。413は口径22cm、高さ31.2cmの脚付甕で、底径は9.8cmほどとなる。いわゆる長く緩やかに外反する口縁部で、口縁部から胴部への移行がスムーズとなり、脚部内面の天井は平坦面をなしている。煤状炭化物の付着は胴部を中心に広範囲に見られ、口唇部と口唇部に沿ってその内側にも残され、内面の底面から10cmほどにも炭化物の付着が見られる。また、胴下部と脚部間で熱破砕に起因すると見られる器壁の剥落が見られ、ひび割れは全域に達し、黒斑の占める割合も高い。414は復元口径24.4cmで、口唇部は丸くナデで仕上げる。胴部との境界の刷毛目のカキアゲは工具でナデ消され、胴部にはひび割れも残される。なお、器壁は薄く、硬質の焼成である。415は復元口径23.8cmで、口唇部は丸く、口縁部はくノ字に外反し、若干口唇部方向が薄くなる。胴部では、工具ナデ後に部分的にヘラケズリが見られる。煤状炭化物は口縁部と胴部に付着し、炭化物の付着しない屈曲部では赤変が、胴部及び胴下部では器壁の剥落が認められる。元来はにぶい橙5YRの器肌で、器壁は薄く軽量に属す。416は復元口径25.4cmほどで、口縁部と胴部の境界は刷毛目のカキアゲで形成するが、丁寧なナデ仕上げにより、刷毛目はナデ消される。3～4mmの岩粒を含む器壁は薄く削られ、外面は煤状炭化物等の褐灰7.5YRで、内面は橙7.5YRである。なお、軽量な仕上がりであるが、外

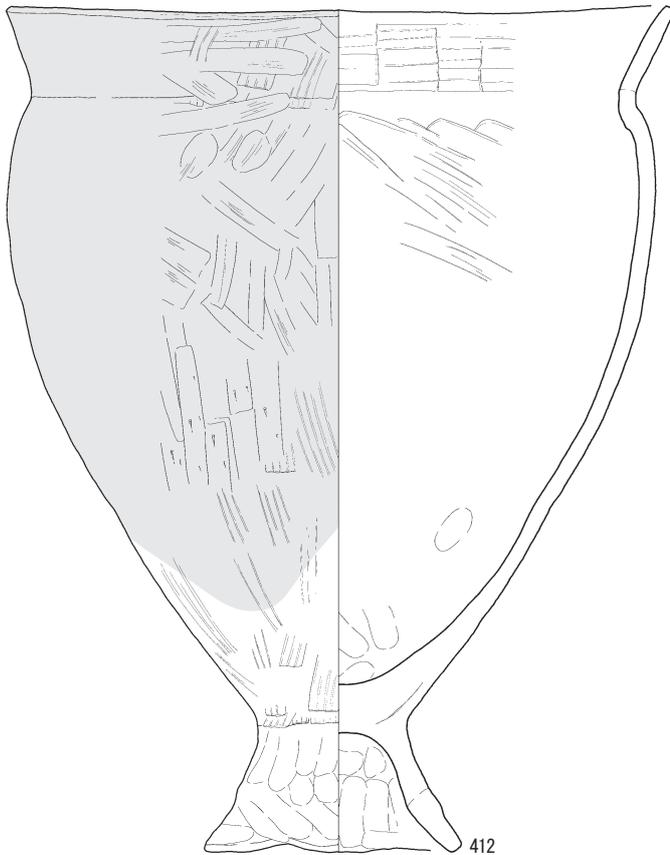
面にはひび割れが見られる。417は復元口径21.8cm、口唇部は狭い平坦面で、波状口縁をなし、ヘラケズリと工具ナデの接点が胴部との境界をなす。5mm程の大粒の岩粒を含む胎土であるが硬質な焼成で、にぶい橙7.5YRの器肌の両面に黒斑を持つ。418は復元口径20.4cm、口唇部は丸くナデで、緩やかな波状口縁をなし、口縁部との境界の刷毛目のカキアゲはナデで消される。器壁は特に薄く、きめの細かい胎土を使用し、軽量な仕上がりを見せる。器面には、ひび割れや熱破砕と見られる器壁の剥落も見られる。419は復元口径19.5cm。緩やかな波状口縁で、刷毛目のカキアゲで胴部と区分される。煤状炭化物の付着する胴部には多数のひび割れが残され、口縁部下位は赤変する。420は口径17.8cmの甕で、口唇部は狭い平坦面で緩やかな波状をなす。口縁部は刷毛目状工具のカキアゲが明瞭で、内面は丁寧に仕上げる。器壁を薄くするが、重量のある仕上がりで、胎土に含まれる5mmほどの岩粒が器面に露出する。また、胴部には煤状炭化物がベルト状に付着し、被熱による器壁の剥落も著しい。421は底部は消失するが口縁部は残存する資料である。口径22.8cmの甕で、口唇部は平坦面をなす。ヘラケズリや刷毛目の後に、入念なナデで器壁の軽薄を図ったと見られ、軽量な仕上がりで刷毛目のカキアゲは残されない。422は復元口径28.8cmの甕で、口縁部はくノ字に外反し、口唇部は平坦で、口縁部との境界は明確に造られる。ヘラケズリに工具ナデを重ね、器壁を薄くする意図が見られ、特に、軽量な仕上がりとなる。また、火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、キラキラとした器面をなす。423は復元口径24.4cmで、口唇部は丸くナデで仕上げ、胴部との境界の刷毛目のカキアゲは工具でナデ消され、また、胴部にはひび割れも残される。なお、器壁は薄く、硬質の焼成である。424は口径24.6cmで、偏球形の胴部で底部を欠損する。内面は横方向、外面は縦方向の密な刷毛目調整で、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲに加え、指押さえも重ね、ランダムな刺突点も残される。内面の稜線及び外面の屈曲も明瞭で、胴部に斜め方向に走るひび割れと、多彩な器肌は特徴的である。胎土は、赤色粒や3～4mmほどの岩粒、火山灰性のガラス質粒子を多く含む。なお、煤状炭化物は、口縁部と胴部上位を中心に付着し、頸部と胴下部は見られない。425は復元口径29.6cmの甕で、口縁部はくノ字に外反する。口縁部と胴部とは、工具を横方向に小さく繰り返すことで区分する。器壁は薄く、軽量な仕上がりで、多量の火山灰性のガラス質粒子を含み、キラキラとした器面を呈している。426は口径20.2～21.3cm、高さ21.3cm、底径は8.5cmの波状口縁のやや小振り脚付甕で、脚も小さく、口径の違いは焼け歪みと見られる。頸部はナデられ緩やかに外反する口縁部を形成し、刷毛目のカキアゲは認められない。内面は口縁部の刷毛目が先行し、下位からの工具ナデにより明瞭な稜線が形成さ



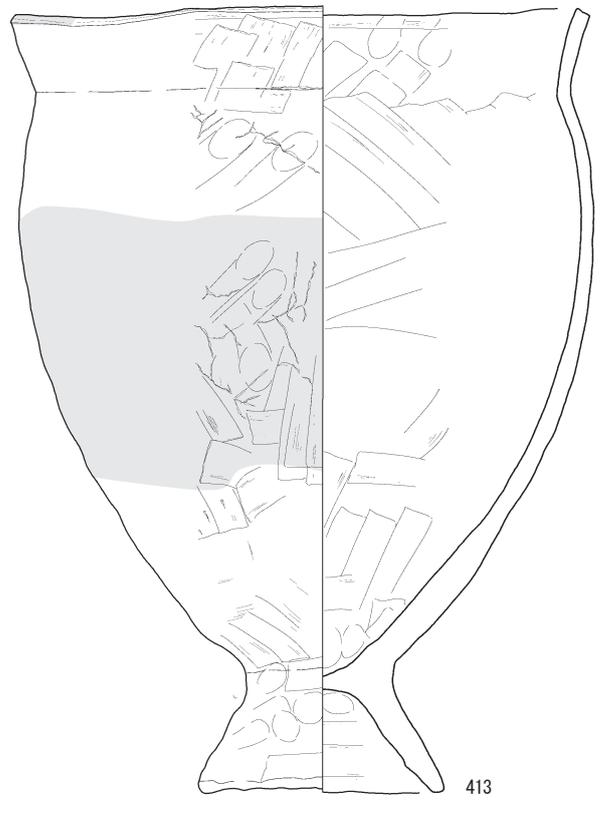
410



411



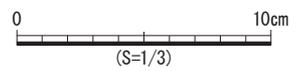
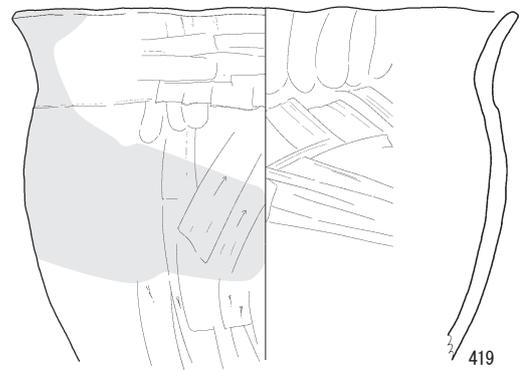
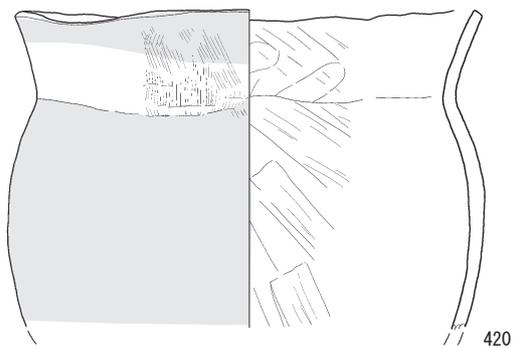
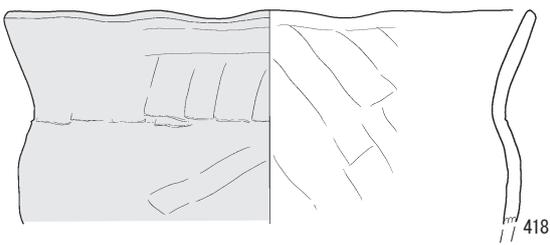
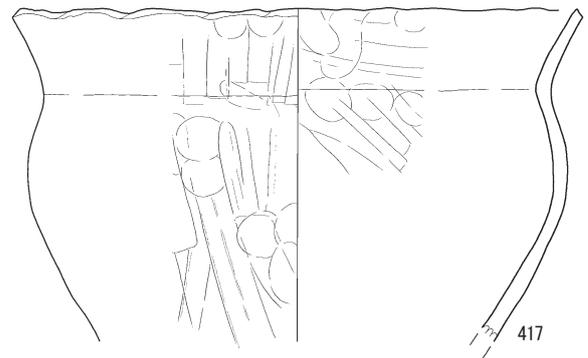
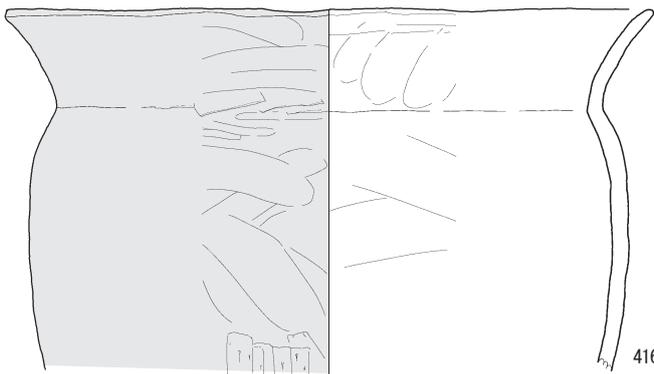
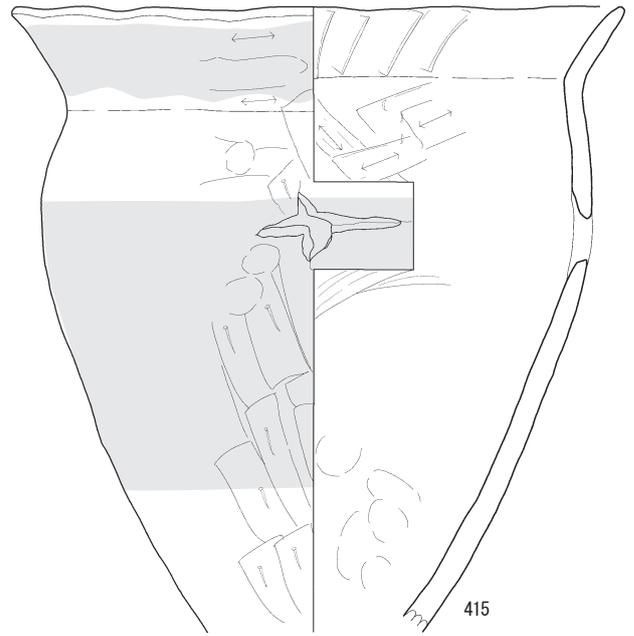
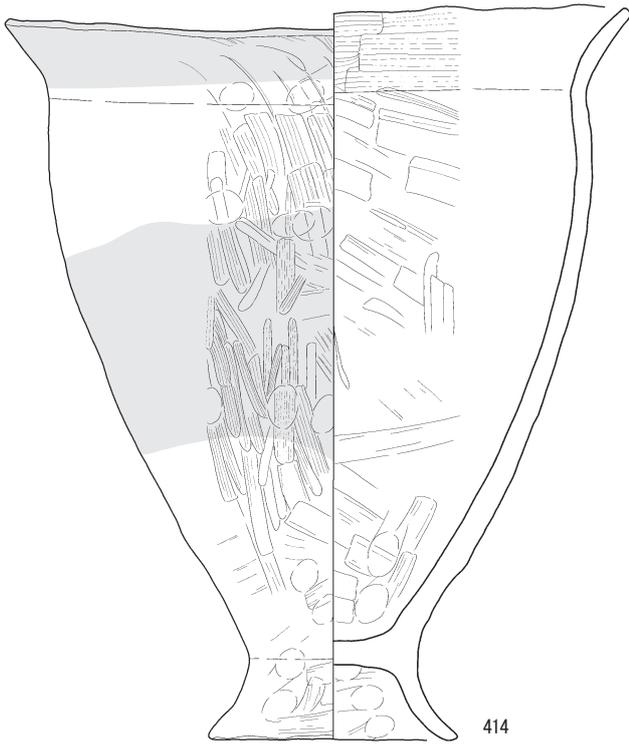
412



413



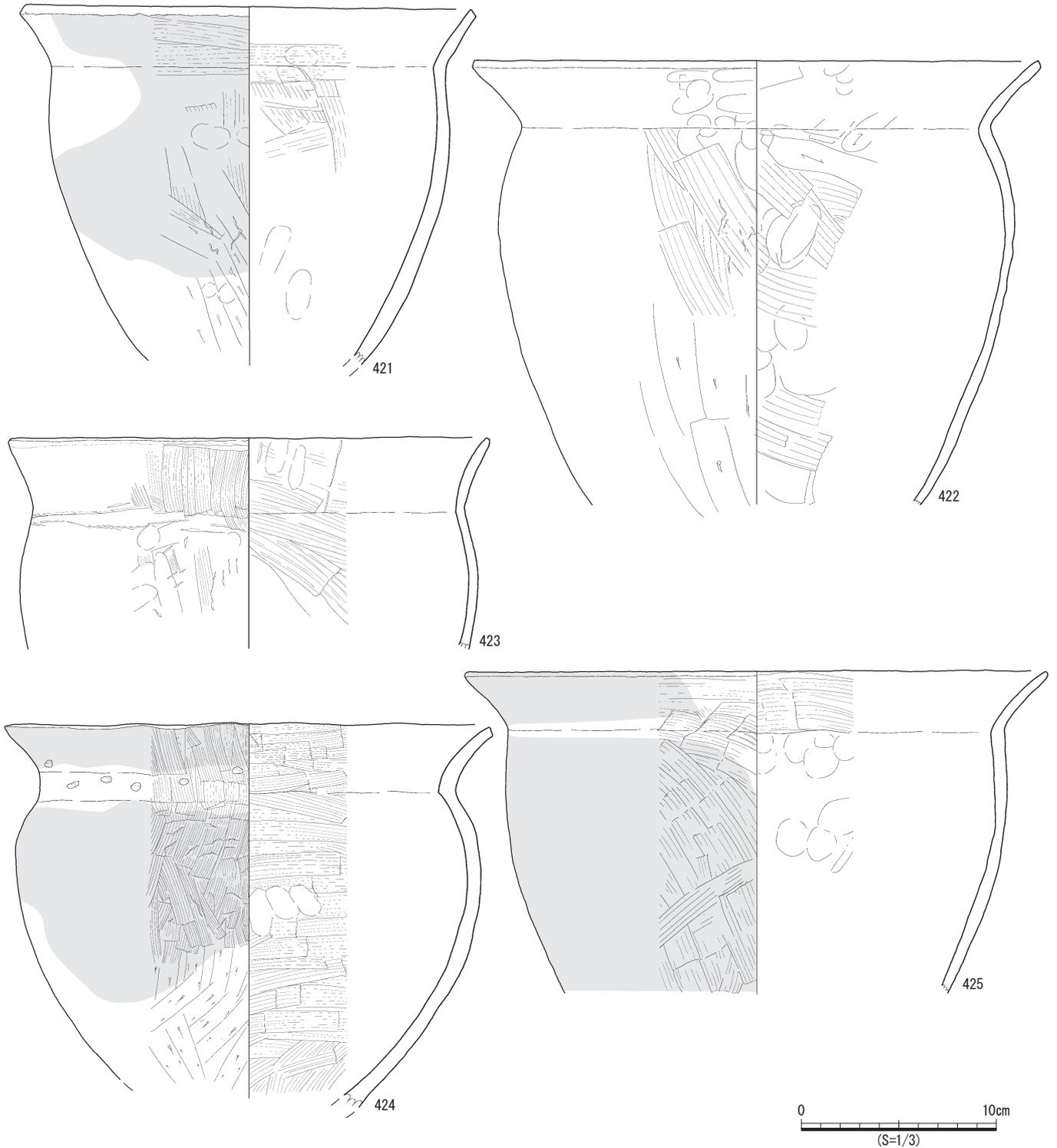
第115図 土器集中遺構4号内出土遺物2



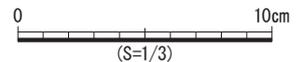
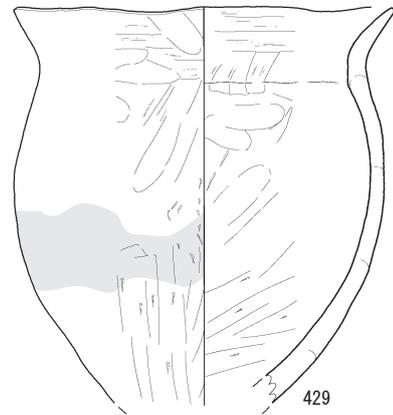
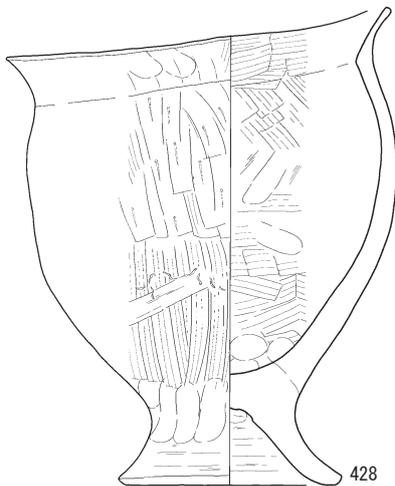
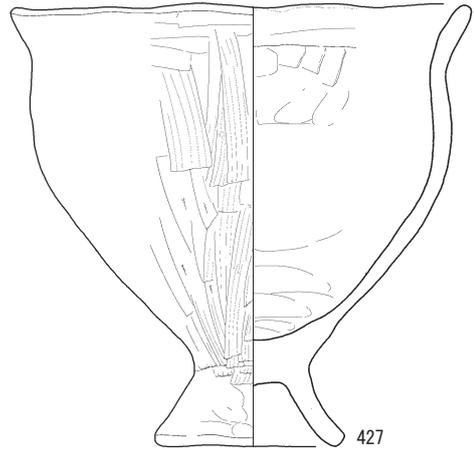
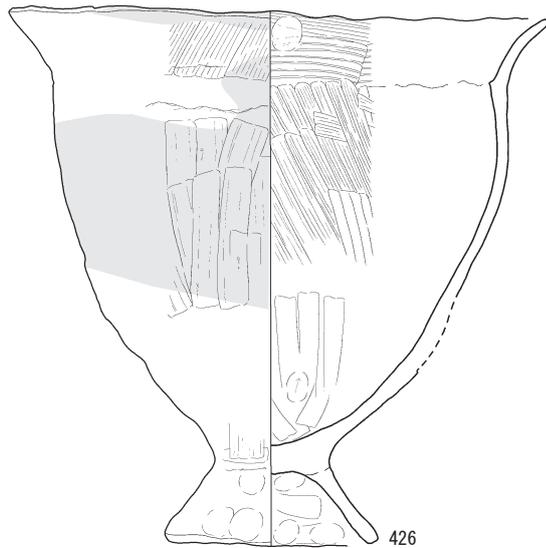
第116図 土器集中遺構4号内出土遺物3

れる。外面の頸部下位には粘土の接合線が残され、また、口唇部から胴部下位の間は、ベルト状の煤状炭化物の付着と、熱破碎に因る器壁の剥落が見られる。また、外面には粘土のひび割れも見られ、特に下半部が重量のある仕上がりとなる。なお、内底面にも煤状炭化物の付着物が見られる。427は口径17.5cm、高さ17.5cm、底径7cmほどの小型のほぼ完形の甕で、器壁は厚い。器面調

整はヘラケズリが先行して刷毛目が重ねられ、口縁部周辺ではナデで仕上げている。428は口径15.2cm、高さ17～19.1cmほどの鉢で、内面の稜線は残される。部分的に残る刷毛目のカキアゲは、口縁部との境界が意識される。底部は外反しながら開き、端部は丸いもので、脚部内面の天井部は丸くなる。器壁は口縁部では薄くなるが、頸部以下は厚く、重量のある仕上がりとなる。ヘラケズ



第117図 土器集中遺構4号内出土遺物4



第118図 土器集中遺構4号内出土遺物5

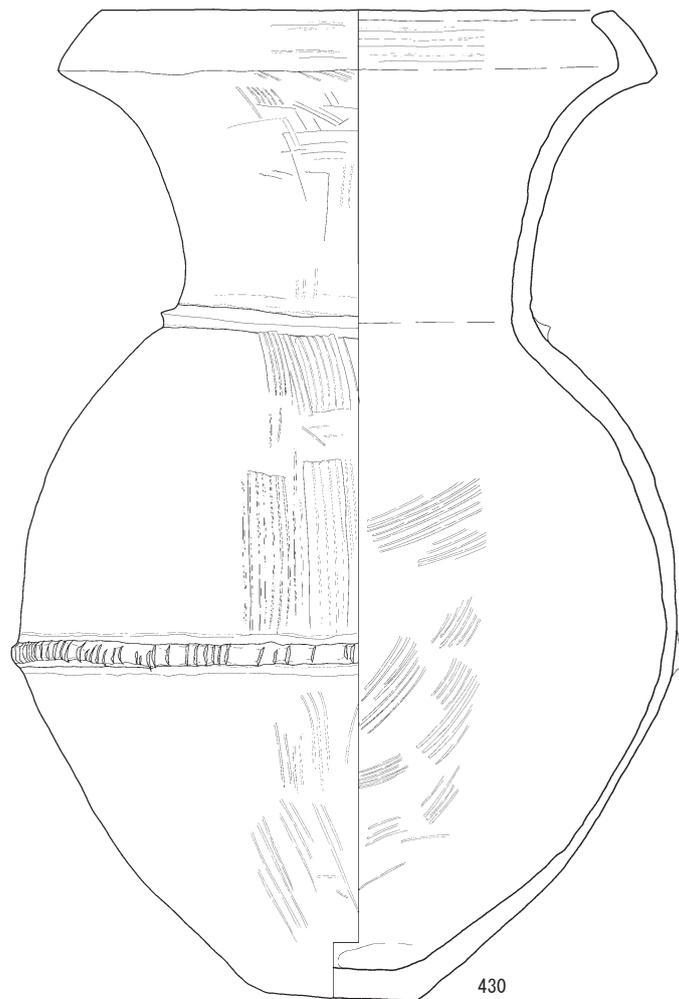
りによる粒子の移動が激しい。器肌は黄橙7.5YRを呈す。429は、復元口径15cm程で重量のある小型甕で、胴部に帯状に煤状炭化物の付着が見られる。なお、底部の破損状況から脚付と見られる。

430～434は壺である。430は口径20.2cm、高さ39.2cm、底径は6.7cmのほぼ完形壺で、口縁部は袋状に内弯し、首は太めで、肩部に三角形、胴部に台形の刻目突帯文を持つ。内外面ともに橙5YRで、長石や2～5mmほどの白色粒を中心に、微細な金雲母を特徴的に含む胎土である。なお、器面の剥落は欠損部周辺に限られ、その反対側は刷毛目等の調整痕を明瞭に残す。器形及び胎土の特徴から、移入土器と見られ、北部九州の下大隈式土器の可能性が高い。軽量なつくりである。431は口径16cm、高さ34.3cmの完形の壺で、口縁部の立ち上がりは直に近いが上方はラッパ状に弧を描きながら外反するもので、

外反部は長くなる。胴部の1条の刻目突帯文は細めで、丸底をなす全体のプロポーシヨンは鶏卵状に近い。外面の刷毛目を始め器面調整は丁寧で、端正に仕上げるが、底部を中心に器壁は厚く、重量がある。点状の黒斑を除く器面は、浅黄橙10YRを呈す。432は口径12.9cm、高さ27.8cmの鶏卵状の壺で、底部は小さな平底をなす。口唇部は若干凹みを持つ端正な仕上げで、くノ字に折れて外反する。内面は刷毛目と指ナデ、外面の刷毛目は端正で、頸部に刷毛目の起点が集中する。器壁は薄く、胴部に1条の刻目突帯を持ち、胎土は、長石と火山灰性のガラス質粒子を大量に含む。433は口径14cm、高さ35.8cmで、胴部に指摘みによる三角形突帯を貼付けた鶏卵状の長胴壺で、黒斑や赤変部をサンドイッチ状に挟みながら、浅黄橙7.5YRと灰褐7.5YRの二分する器面で、灰褐部は大きく焼き歪みが見られる。口縁部は直立気味に外

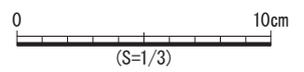
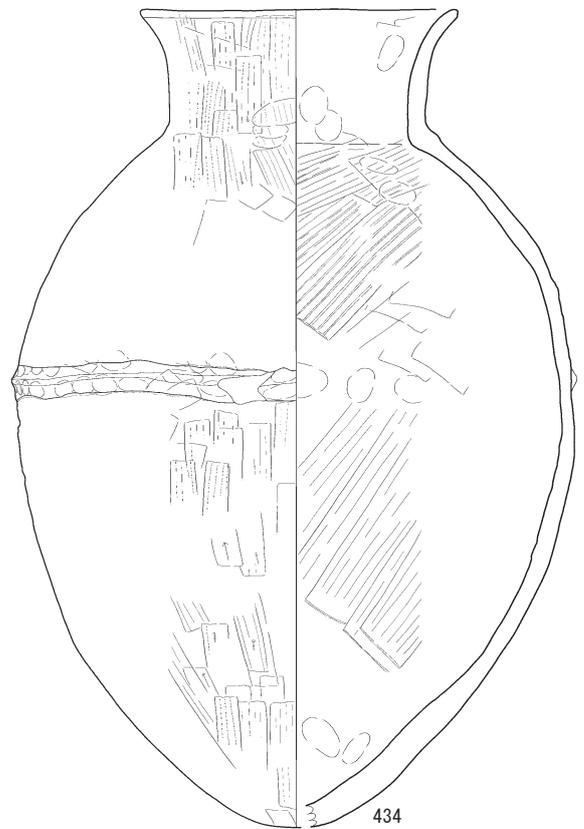
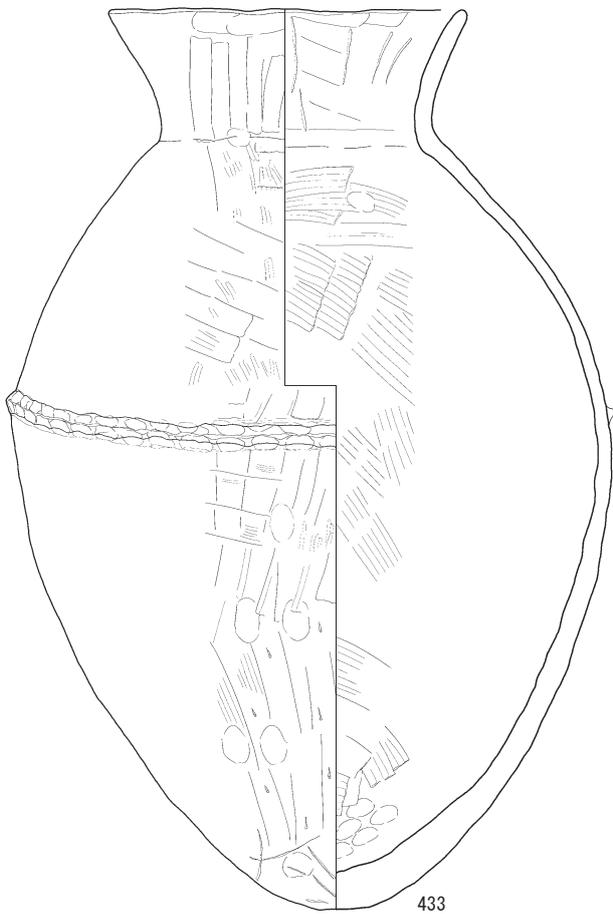
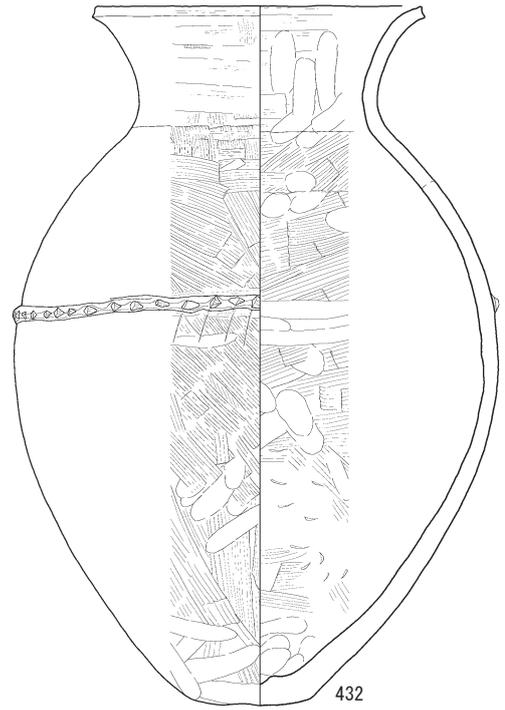
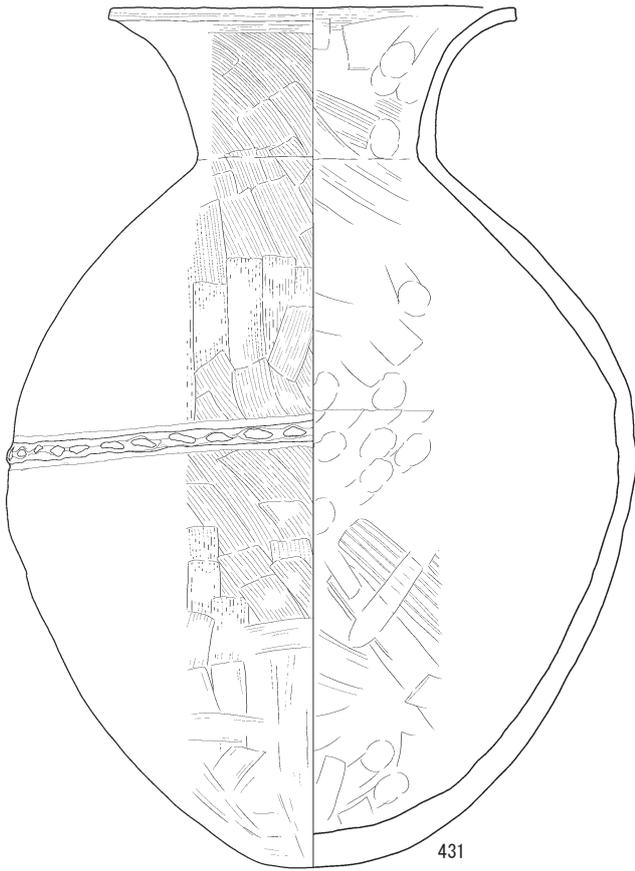
反し、底部は若干尖り気味の丸底で、内底面は尖底に仕上げる。器壁は薄く、外面は丁寧なミガキ状のナデ仕上げで、浅黄橙の器面は光沢を保っている。なお、内面の剥落が認められる。434は口径12.6cm、高さ32.6cmで、指摘みによる三角突帯を持つ鶏卵状の長胴壺で、突帯から口縁部の一部を欠落する。直立する口縁部は端部で外反し、底部は若干尖り気味の丸底で、内底面は尖底に仕上げる。外面のヘラケズリと内面の刷毛目は対照的で、明瞭にその痕跡を残す。器壁は薄く、石英粒の目立つ胎土で、胴部では焼き歪みも見られ、黒斑と赤変が同心円状に重なる。器壁は薄く、石英や長石、黒色鉱物が胎土の中心となる。435は口径30.0cm、高さ8.5cmの器高の低い蓋で、天井部はドーム状をなし、口縁部は長く緩やかに外に開く。器面調整は外面でヘラケズリと指ナデ、内面口縁部で指ナデ、胴部での刷毛目の対比が明瞭である。なお、器壁は薄く、軽量の仕上がりで、火山灰

性ガラス質粒子を多量に含む胎土により、キラキラとした器面で、外面裾部は熱破砕に因り器壁の剥落が見られる。436は口径11.7cm、高さ15.2cmのほぼ完形の小型丸底壺で、口唇部はやや内傾しながら平坦面をなす。口縁部はナデるが頸部以下の刷毛目は顕著で、頸部には指頭痕が規則的に残る。また、器壁の厚い内底面は指で押さえ、外面ではケズリ込んで成形を実施している。接地面周辺に黒斑が見られ、火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土によりキラキラとした器面で、にぶい橙5YRと橙5YRで器肌を構成する。437は口径13.3～14.2cm、高さ15.4cmの完形の小型丸底壺で、口唇部はつまみ上げ形成により波状をなす。なお、外面には指押さえがそのまま残されるが、内面は刷毛目を綾杉状に重ね、内底面の刷毛目も顕著である。肩部を中心に、同心円状を形成する浅いクレーター状の剥落痕が多数重なりベルト状に周回する。この同心円状の剥落痕は、焼成段階の破裂痕と見



0 10cm
(S=1/3)

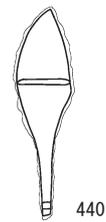
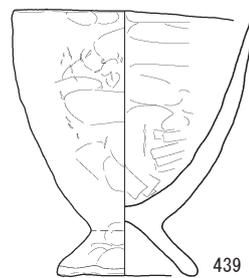
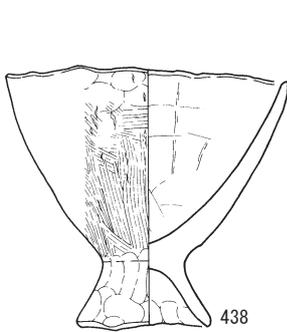
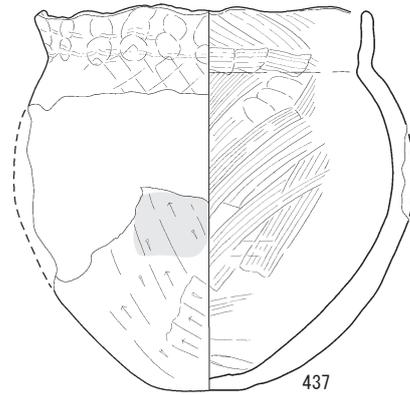
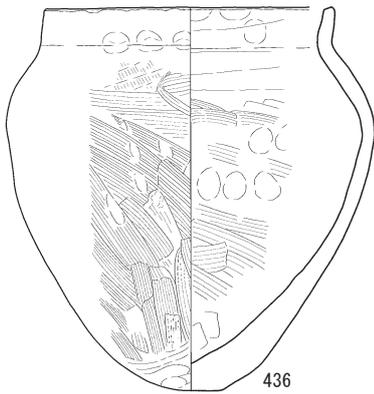
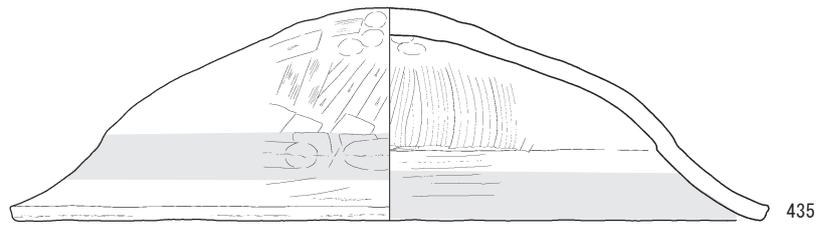
第119図 土器集中遺構4号内出土遺物6



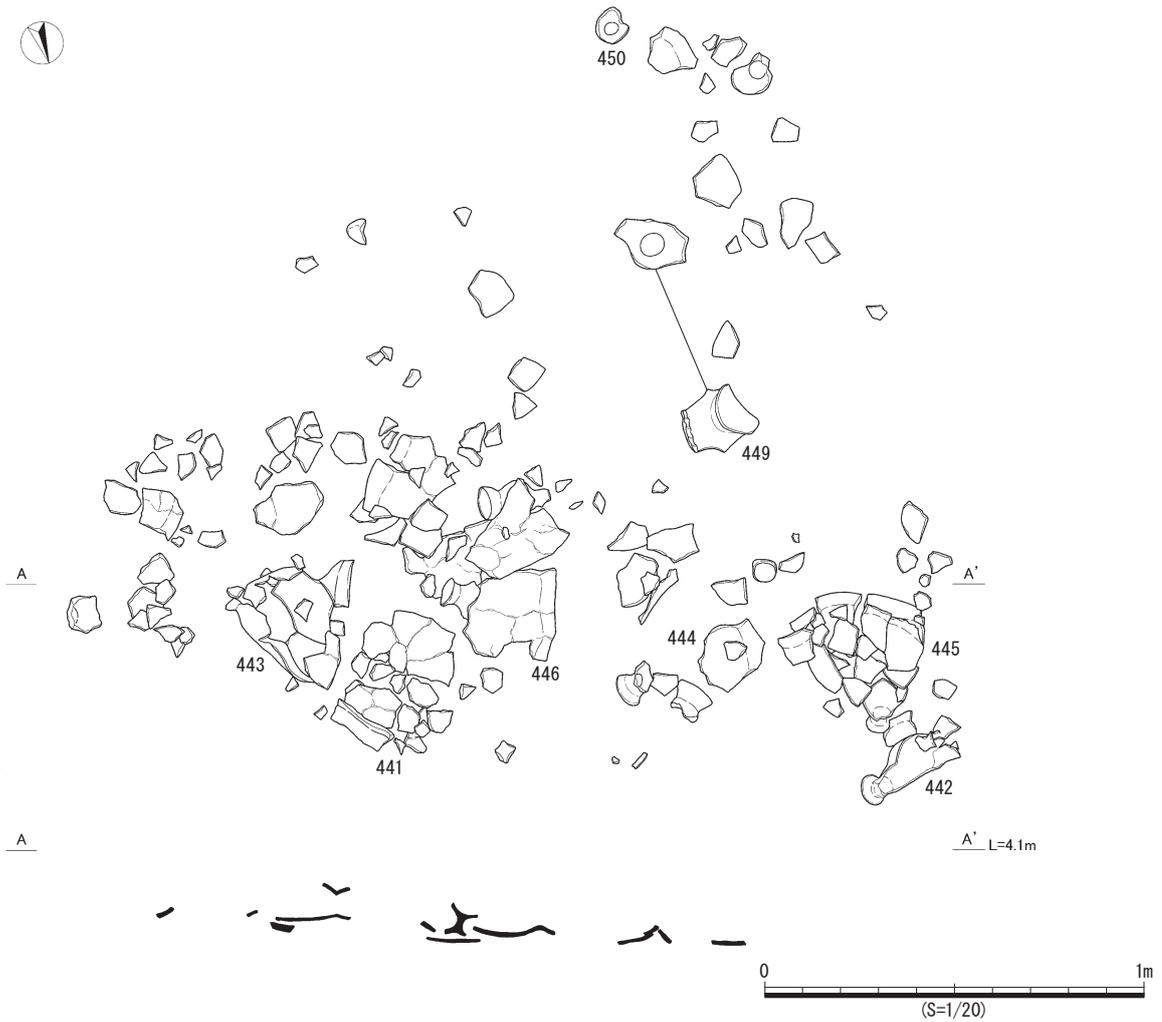
第120図 土器集中遺構4号内出土遺物7

られ、クレーターの中心から外面方向にはじけ飛んだと想定される。長石を中心に石英、カクセン石等の黒色鉱物及び火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土で、キラキラとした器面をなし、外面は淡橙5YR、中央部は褐灰10YR内面は浅黄橙10YRで、破断面はサンドイッチ状をなす。438は口径11cm、高さ10.4cmの完形の脚台付鉢で、口縁部と脚台は指頭痕及びナデ、外面は刷毛目、内面は上部が横位の工具ナデ、下部がランダムな指ナデが見ら

れる。口唇部は緩やかな波状で、外面には縦位の多数のひび割れが残される。器肌は両面とも浅黄橙7.5YRである。439は口径9.4cm、高さ10.6cm、底径5.4cmの小型脚付鉢で、内外ともナデで仕上げるが、器壁は厚い。器面にはひび割れを残し、一部の黒斑以外の器肌は橙7.5YRである。440は全長5.4cm、鎌身部1.5cmほどの柳葉形の鉄鎌である。



第121図 土器集中遺構4号内出土遺物8



第122図 土器集中遺構5号

土器集中遺構5号（第122～125図）

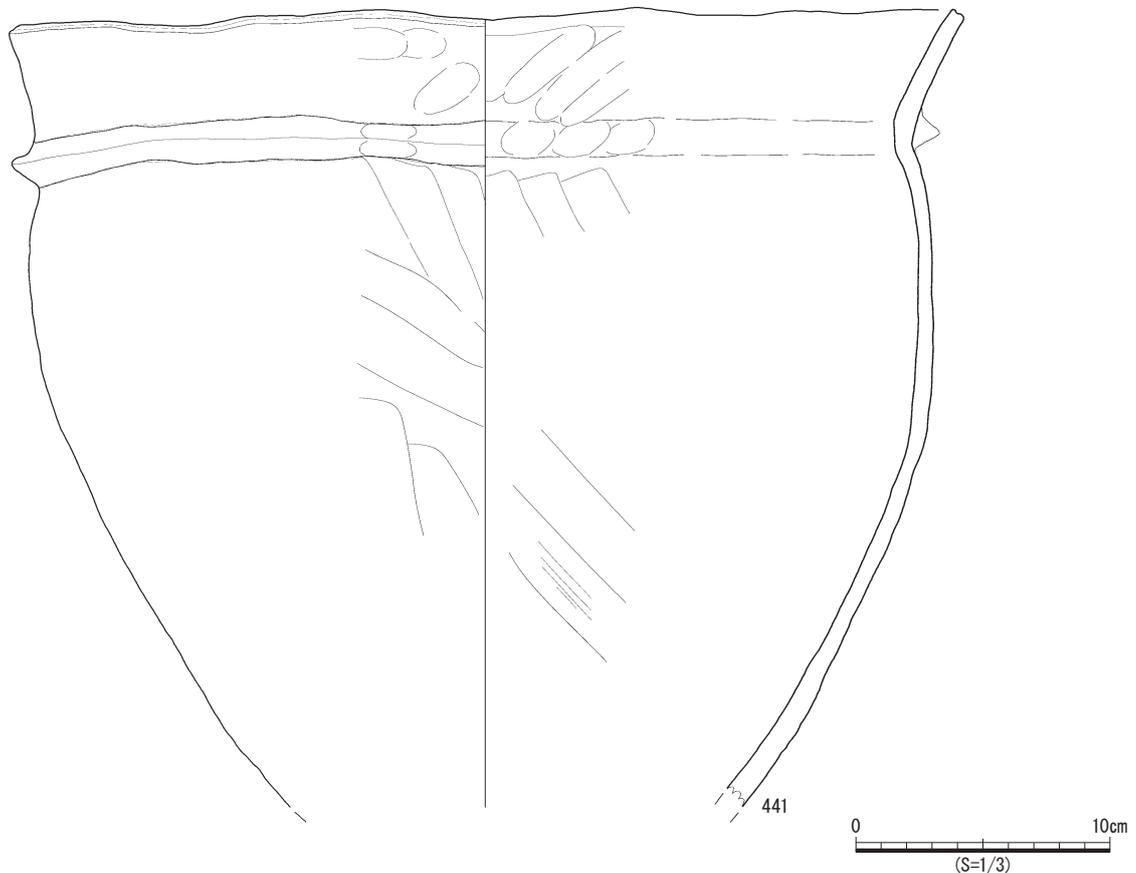
D-37区、IV層上面で検出された。大型の土器片が集中しており、その場で潰れたと思われる甕などが出土した。1段目の土器を取り上げ、精査すると、下から甕の大型土器片と完形の脚付罌が出土した。掘り込みは確認できなかった。遺物は11点を図化した。

441～448は甕である。441は口唇部は平坦面で、口縁部が緩やかに外に傾き、胴部との境界部に1条の無刻目突帯文を持つ甕で、口径36.8cmである。口縁部内外面は指ナデ、胴下部は粗い工具ナデでひび割れが目立つ。442は復元口径16.7cm、高さ23cm、底径7.7cmの脚付甕で、境界とした刷毛目のカキアゲはナデ消され、脚部の天井部は丸い。器壁は薄く軽量で、均整のとれた形状を呈している。長石粒、やや大粒の白色鈹物を多量に含み、白色粒子が器面に露出し、火山灰性のガラス質粒子も多量に含む。特に、胴部中央部に熱破碎と見られる剥落エリアが集中する。443は口径24.2cm、器高28.5cmの長胴タイプの脚付甕で、口縁部は短く、器壁は薄い重量があ

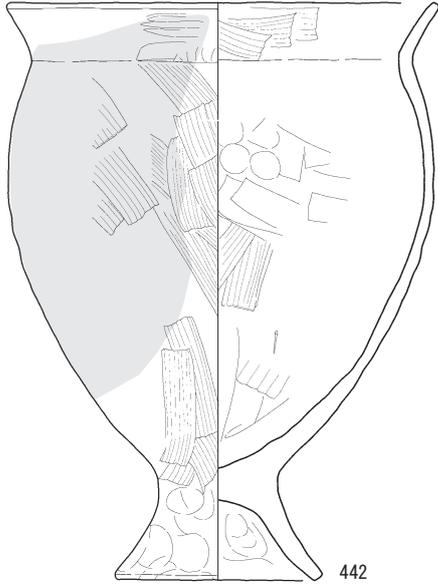
る。口唇部は狭く緩やかな波状をなし、最大幅は口縁部がわずかに上回る。胴部との境界は刷毛目のカキアゲで形成するが、刷毛目後の丁寧なヘラナデや指ナデで、その痕跡のみが残される。内面では工具ナデの調整痕として残され、脚天井部は平坦で、にぶい橙7.5YRの器肌を呈す。444は口径24.5～25.0cm、高さ29.7～33.4cm、底径は10.6cmのほぼ完形の脚付甕で、口径及び高さに歪みが見られる。口唇部は尖り気味に傾き、緩やかな波状をなし、脚部の接合部はヘラナデ、裾部は指ナデで、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分し、胴部のヘラケズリは明瞭で、内面は横方向の刷毛目が残る。外面のひび割れ、また、胴下部の熱破碎と見られる器面の剥落も激しく、サンドイッチ状の破断面を見せる。なお、器壁は薄く、軽量の仕上がりをなす。445は口径25.5cm、高さ29.1cm、底径10.7cmのほぼ完形の脚付甕で、口唇部は平坦で緩やかな波状をなし、頸部は内外とも明確な稜線が形成される。なお、色調が異なる破片の接合が特徴的で、煤状炭化物の付着しない浅黄橙7.5YRと煤状炭

化物の付着する灰褐7.5YRが直接接合している。火山灰性のガラス質粒子に加え、赤色粒やカクセン石を含む胎土で、軽量な仕上がりを見せる。446は口径23.1cm、高さ28.1cm、底径は8.6cmのほぼ完形の脚付甕で、カクセン石等の黒色鉱物を多く含む胎土を使用しているが、器壁は薄く軽量な仕上がりである。脚台は指ナデが施される。胴部下位から刷毛目、ヘラケズリ、また口縁部との境界にも連続して刷毛目が行われ、稜線は形成されない。煤状炭化物は胴部を中心に付着し、器面の剥落部にも残される。脚台と胴部下位は浅黄橙7.5YRの赤色変化が見られ、器面上位ではひび割れが目立つ。また、接合破片で、著しく色調の異なる例もある。447は口径21cmで、口唇部はナデられて丸味を持ち、波状をなす。胴部との境界を形成する刷毛目のカキアゲは明瞭で、口縁部まで整然と観察できる。煤状炭化物の付着も胴部の広範囲におよび被熱に起因すると見られる器壁の剥落もある。5mmを越す岩粒や赤色粒、石英等の白色鉱物が目立つ胎土であるが、器壁は薄く、軽量な仕上がりである。448は甕の胴部である。脚部内面天井が丸く、直線的に伸びる形状で、胴下部はヘラケズリ後刷毛目を加えている。なお、脚部は指押さえが見られる。449は口径16cm、高さ32.6cmの完形の壺で、口縁部の立ち上がりは直に近い

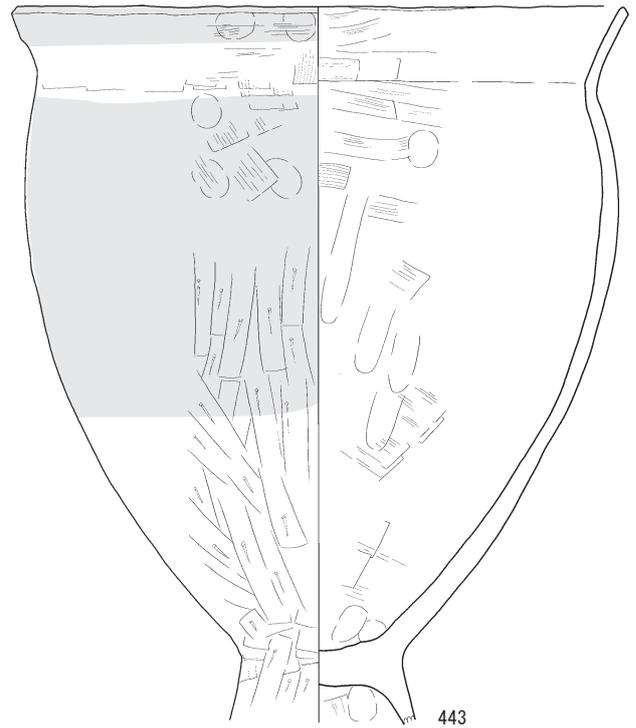
が上方はラッパ状に弧を描きながら外反するもので、外反部は長くなる。胴部の1条の刻目突帯文は太めで、平底をなす。外面の上部は刷毛目後丁寧になデ、中央部はヘラケズリ、下部ではナデで端正に仕上げる。特に底部付近の器壁が厚く、内面での重厚感が見られ、重量のある仕上がりを見せる。胎土には、白色鉱物に加え、多量の火山灰性のガラス質粒子を含むことから、特徴的にキラキラとした器面をなす。器肌にはぶい橙7.5YRを呈す。450は口径及び高さ約11cmで、4.5cmほどの平底をなす小型鉢で、内外とも最終的には指押さえ及びナデで仕上げる。器面には多数のひび割れが残る。451は口径8.4cm、高さ16cm、底径7.3cmで、類例の少ない脚付埴で、工具ナデに指ナデが重ねられる。内面は渦巻状に工具ナデの痕跡を残し、内底面は工具での押さえ込みが見られる。脚部は外反しながら開くタイプで、脚部内面の天井部は平坦面をなす。両面とも、浅黄橙7.5YRの器肌で、脚の内面は褐灰7.5YRと大きく異なる。胎土は、1mm以下の長石、石英を中心に火山灰性のガラス質粒子を多く含む。



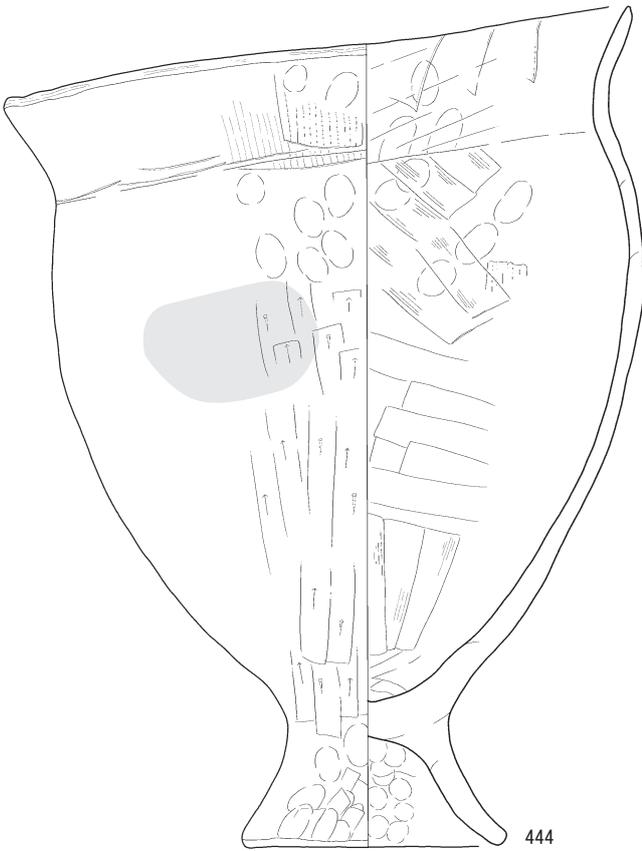
第123図 土器集中遺構5号内出土遺物1



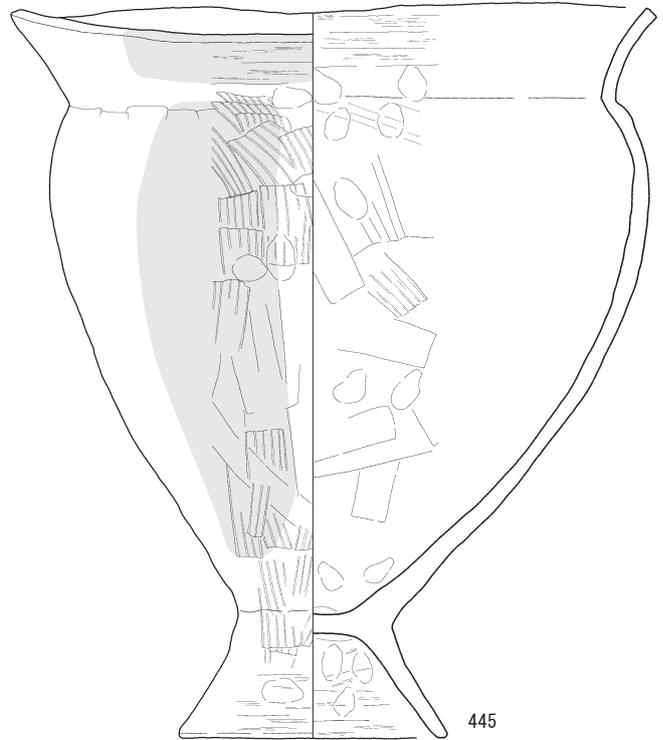
442



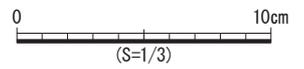
443



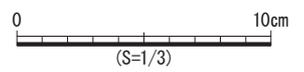
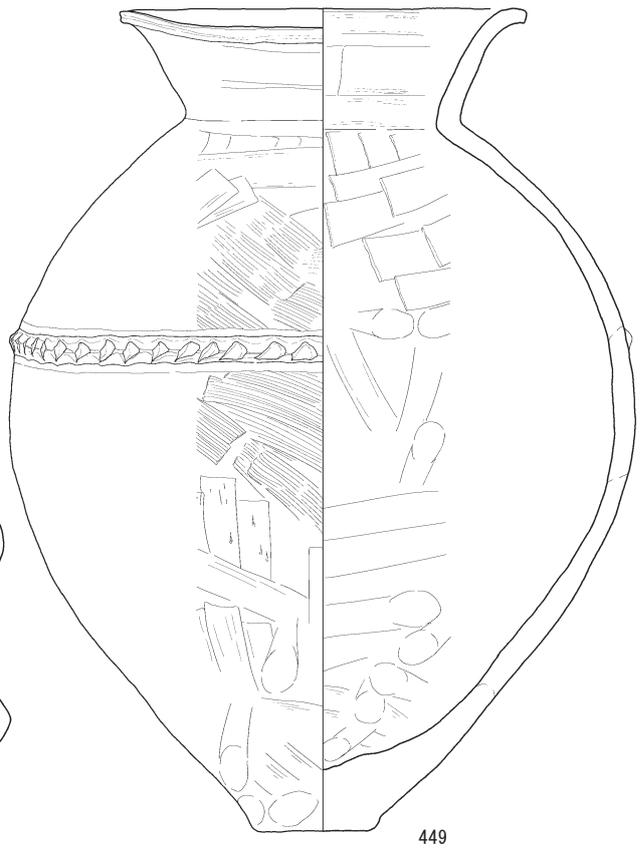
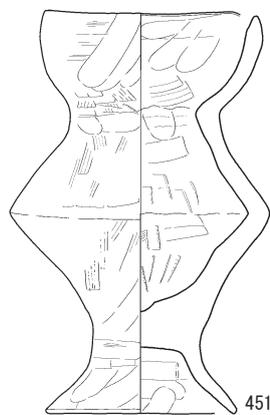
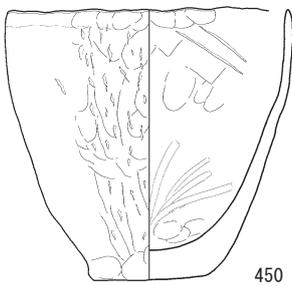
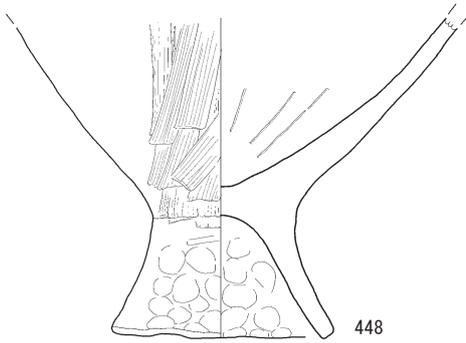
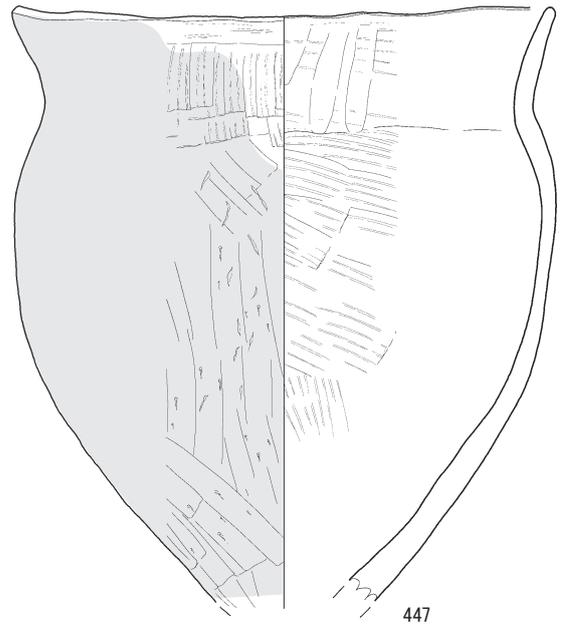
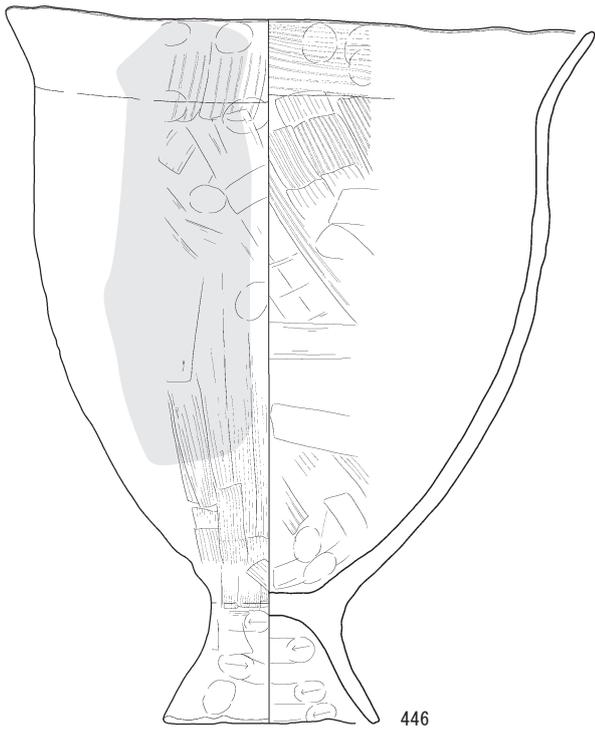
444



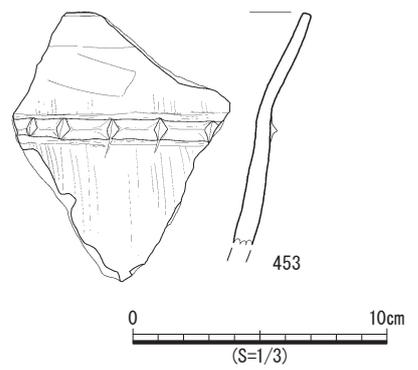
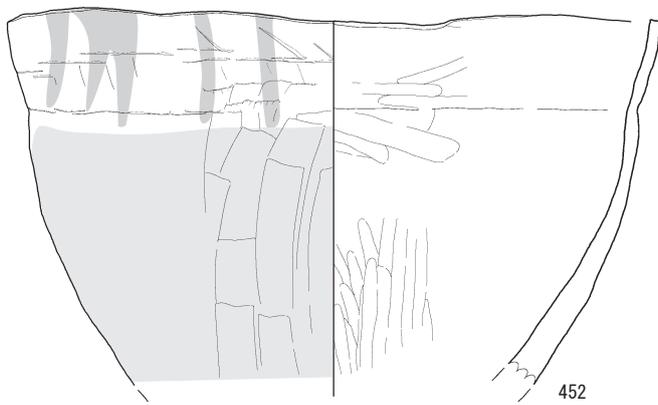
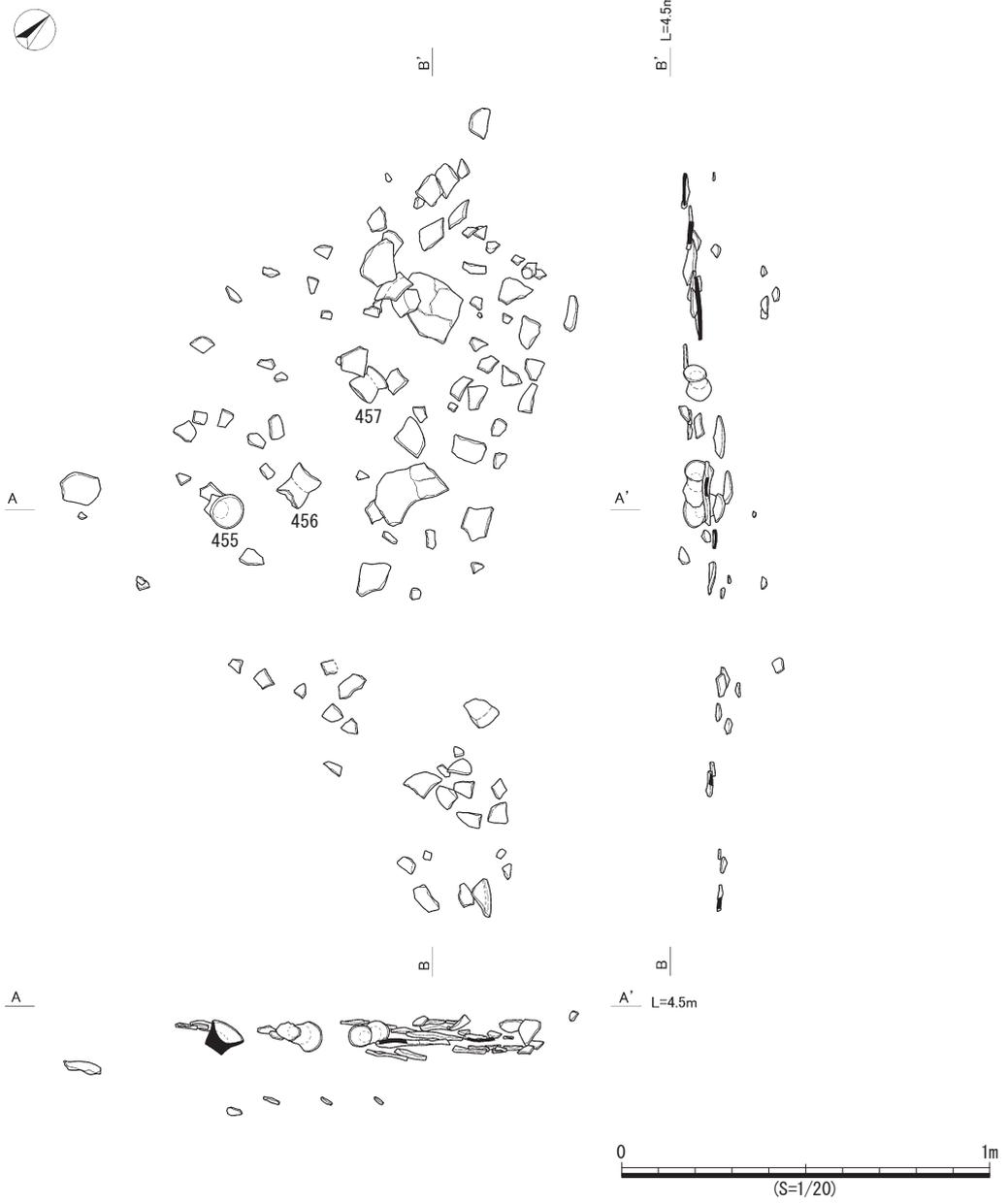
445



第124図 土器集中遺構5号内出土遺物2



第125図 土器集中遺構5号内出土遺物3



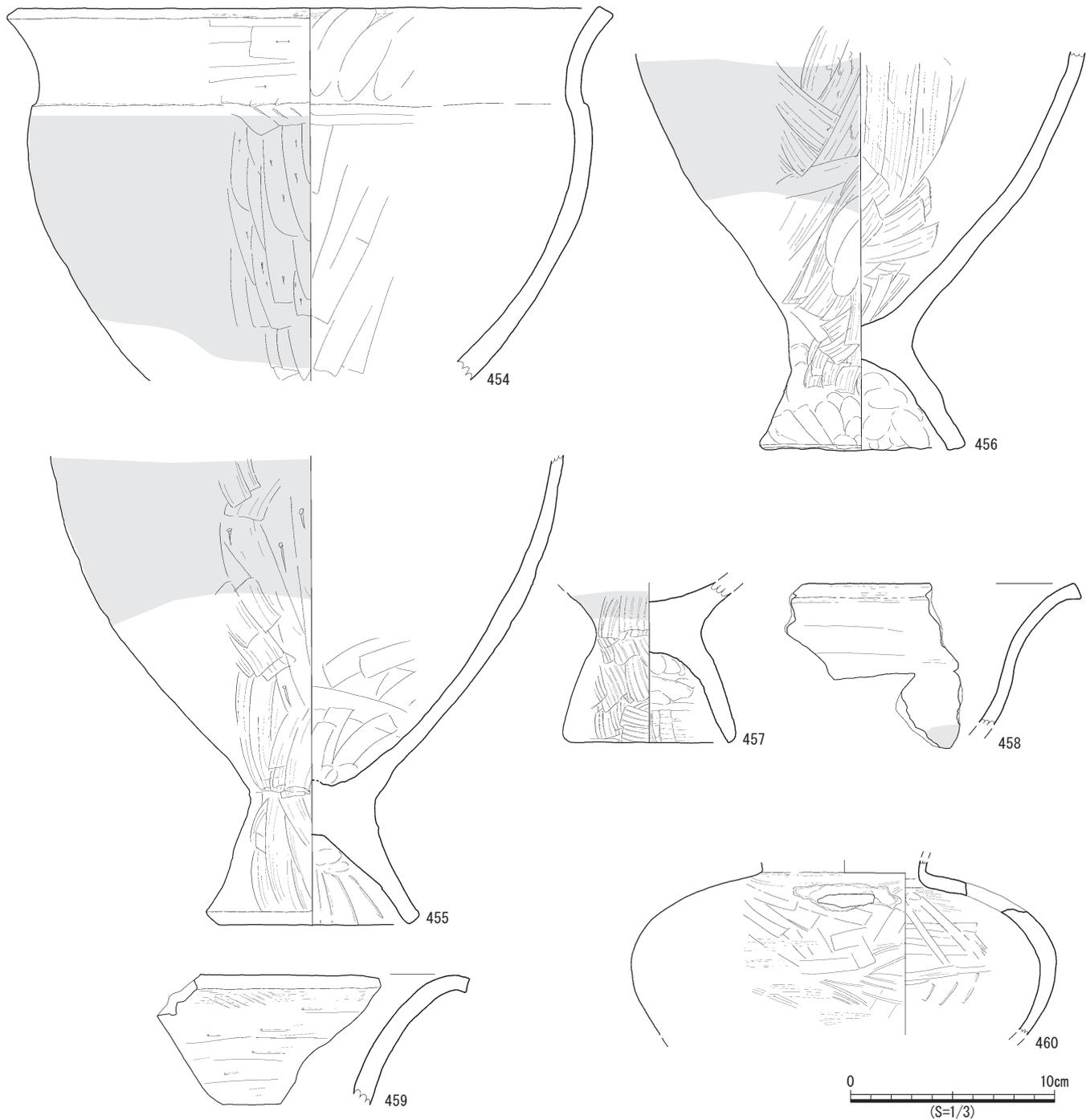
第126図 土器集中遺構6号および出土遺物1

土器集中遺構 6号 (第126・127図)

C-34区, IV層上面で検出された。2.4m×1.4m四方の範囲に、大型の土器片が重なった状態で集中して出土した。そのほとんどは甕であった。掘り込みはなかった。遺物は9点を図化した。

452～457は甕である。452は復元口径25.8cmほどで、傾きは不明である。口唇部は平坦で、口唇部から頸部にかけてはヘラナデが繰り返され、ミガキ状に器面は光沢を持つ。器壁は底部に近づくほど厚く、外面には多数のひび割れが見られる。453は頸部に1条の刻目突帯を巡

らす甕で、口縁部は直線的に開く。器壁は薄く、硬質な焼成で、突帯を境に下位は刷毛目、上位は刷毛目後横方向にナデて仕上げる。454は復元口径28.2cmで、口縁部との境界は、先行する刷毛目のカキアゲを丁寧にナデ消す。なお、煤状炭化物が付着する胴部は、ヘラケズリの一部が工具でナデられる。浅黄橙7.5YRの胎土は、火山灰性のガラス質粒子やカクセン石等の黒色鉱物を含み、硬質で丁寧な仕上がりが見られる。455は長く直線的に伸びる脚で、安定感があり、内面天井は狭く、カクセン石等の黒色鉱物と多量の火山灰性のガラス質粒子を含む



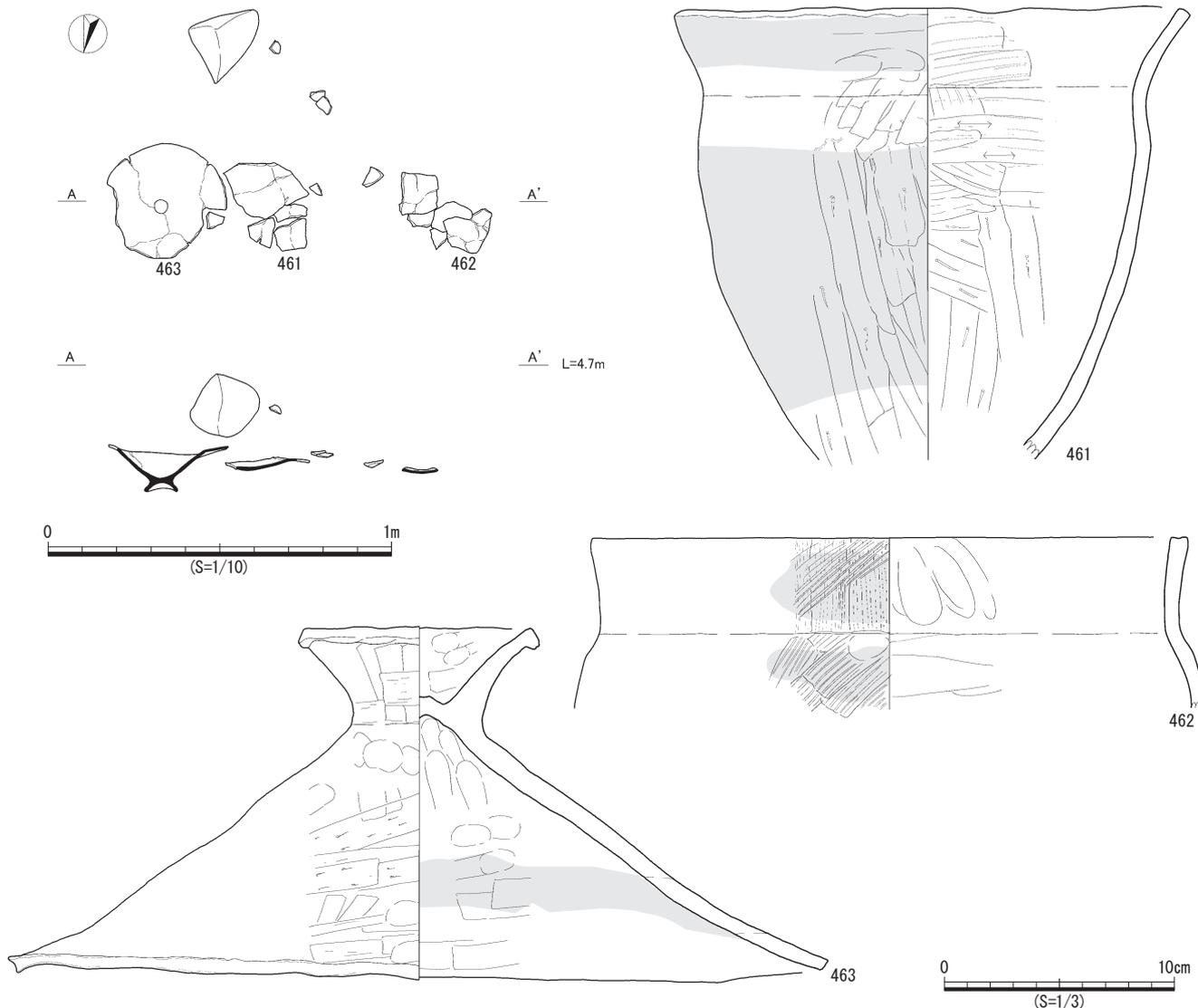
第127図 土器集中遺構 6号出土遺物 2

胎土を使用する。456は長く直線的に伸びる脚で、器壁は厚く安定感があり、内面天井はドーム状をなす。脚の径は8.8cmで、3mmほどの赤色粒や白色鉱物、多量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、金雲母も散見される。457は脚部内面天井が丸いもので、直線的に伸びる形状を示し、短い刷毛目が繰り返される。458は鉢の口縁部資料。内外面とも工具や指ナデで仕上げる。胎土に石英やカクセン石等の黒色鉱物を多く含み、硬質でザラザラな器面をなし、淡橙5YRの器肌をなす。459は壺の口縁部資料。外面には工具ナデ、内面にはミガキが残る。胎土粒子は細かく、赤色顔料が塗られていた可能性がある。460は詳細は不明であるが、小型丸底壺と見られる。胎土は精選されたきめの細かいもので、器面調整も丁寧な工具ナデや指ナデが認められる。胴部には大きな黒斑が見られ、肩部の穿孔は内側から行っている。そのため、頸部が破損した後の行為と見られる。黒斑以外の器肌は、橙7.5YRを呈す。

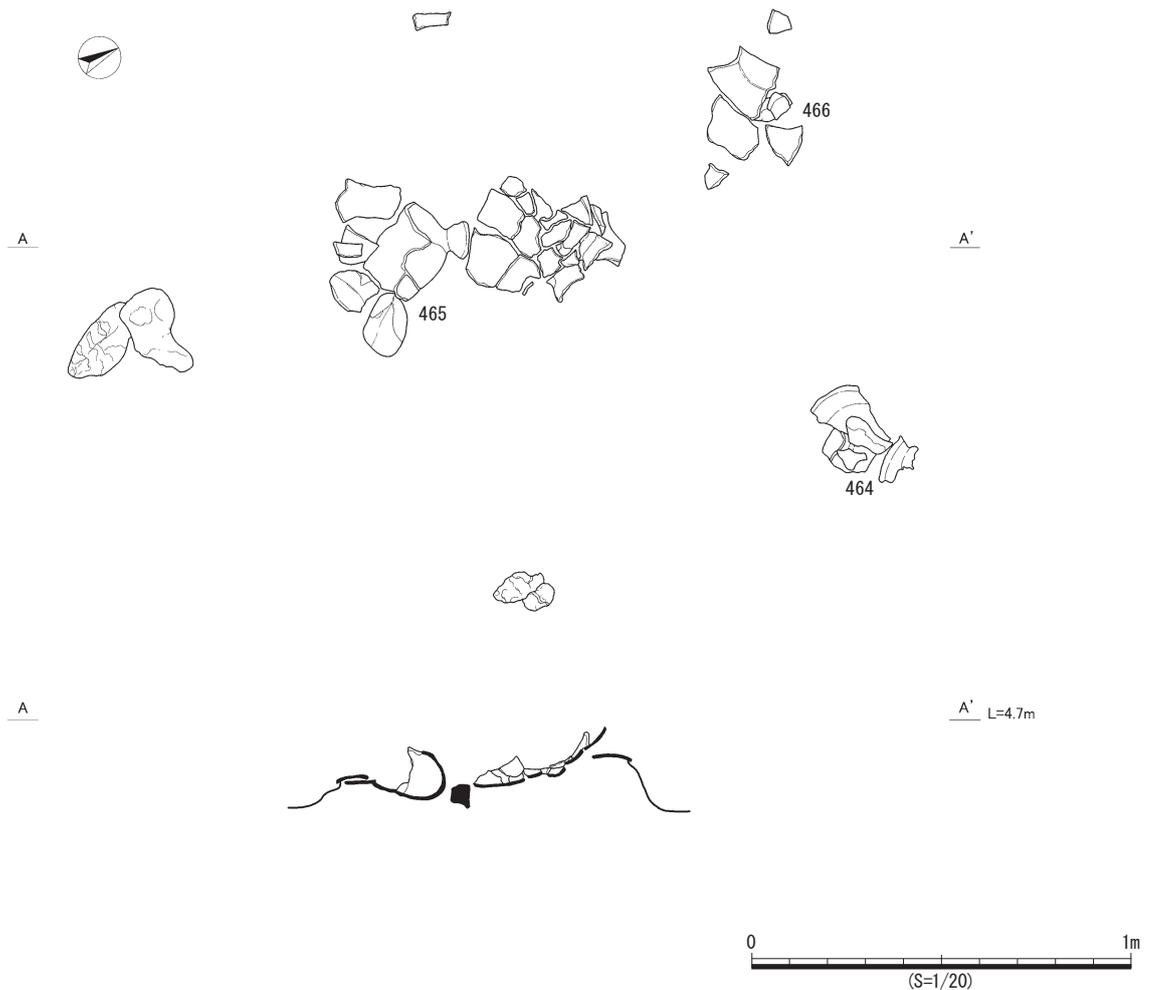
土器集中遺構7号（第128図）

B-33区、Ⅲb層上面で検出された。甕と蓋が出土し、甕は大型の土器片で、蓋はほぼ完形で検出された。掘り込みはなかった。遺物は接合により復元できた3点を図化した。

461は復元口径21.7cmで、口縁部は緩やかに外反し、胴部へはスムーズに移行する。3～4mmの岩粒や白色粒子等を多量に含む砂質胎土で、器形は薄く軽量に属し、にぶい赤褐2.5YRと特徴的な器肌をなす。462は復元口径26cmとしたが、口径及び傾き等は疑問である。直行する口縁部で、胴部とは、刷毛目の方向の差異で区分される。器壁は薄く軽量に属し、淡橙5YRの器肌で、煤状炭化物の付着が見られる。463は口径35cm、高さ15.4cm、摘部10cmの完形の蓋で、台付鉢の転用品の可能性もある。身部と口縁部の区分が無く、笠状に直線的に開く形状で、天井部に逆台形状のつまみを持つ。先行した指ナデ調整に、体部ではヘラケズリや工具ナデが行



第128図 土器集中遺構7号および出土遺物



第129図 土器集中遺構 8号

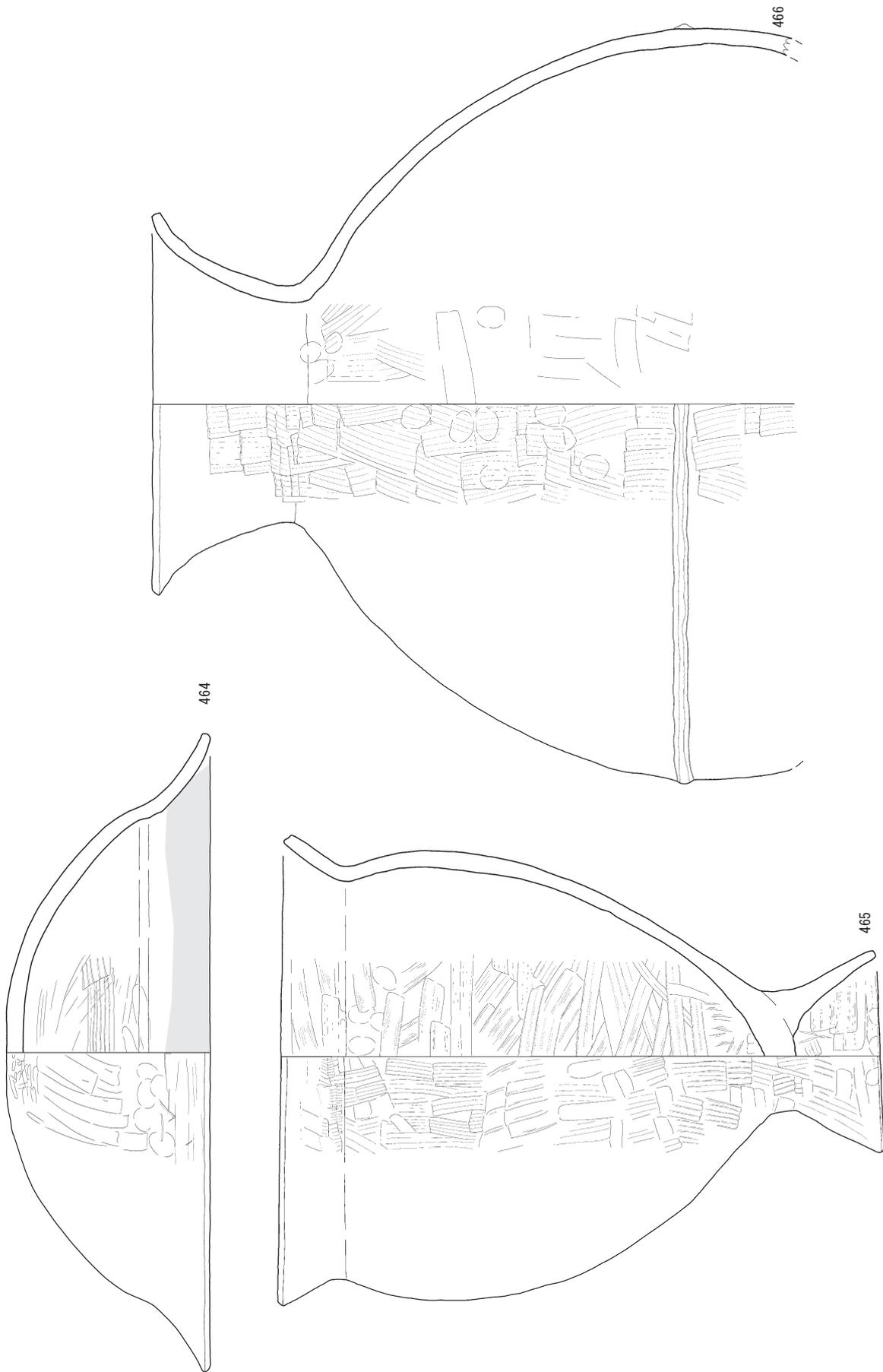
われ，摘部の指押さえが最後に行われている。一方，内面の天井部は深く指で押さえ，全体は工具ナデ後指ナデを重ねている。重量のある仕上がりで，口縁部内面に沿うように煤状炭化物の付着が見られる。ヘラケズリ部分では，3～4mmの白色鉍物が露出する。

土器集中遺構 8号（第129～130図）

D-32区，Ⅲb層上面で検出された。大型の土器片が6か所に集中して出土しており，甕や壺，蓋がその場であつた状況がみられた。掘り込みは確認されなかった。遺物は3点を図化した。

464は復元口径約33.5cm，高さ10.5cmの器高の低い蓋で，天井部はドーム状をなし，口縁部は長く緩やかに外に開く。天井部はミガキ状のナデ，中央部はヘラケズリ，口縁部周辺は指ナデ，内面中央は刷毛目，口縁部は入念な指ナデで仕上げる。器壁は薄く，硬質な仕上がりで，内面裾部には帯状に煤状炭化物が付着する。465は復元口径24.5cm，高さ31.5cm，底径10.5cmの脚付甕で，口唇部は平坦面をなし，端部はシャープに仕上げる。焼成

は堅牢で，内外面の刷毛目調整はスピード感があり，口縁部と胴部の境界は，刷毛目のカキアゲで強調する。脚部は短く直線的に開き，内面天井はドーム状をなす。また，器面の黒斑は，複雑に展開する。466は口径19.6cm，口縁部の上端が大きくラッパ状に開くタイプの壺で，胴部の無刻突帯部では径40cmほどが復元できる。3mmほどの岩粒や長石等の白色鉍物を多く含む胎土で，器壁は薄く，硬質且つ軽量である。また，縦方向に行っている工具ナデも丁寧で，洗練された感がある。



第130図 土器集中遺構8号内出土遺物

(4) 遺物

甕 (第131～145図467～528)

467は口径23.3cm、高さ32～34cmほどの甕で、胴部は焼け歪みが見られ、口縁部はそれにより大きく変形する。外面はヘラケズリと刷毛目で調整し、内面は刷毛目により器壁の軽量化が見られるが、器自体は重量のある仕上がりとなる。内面の稜線はやや不明瞭であるが、外面では縦方向の刷毛目調整が繰り返される。両面ともパッチワーク状に多彩な器肌を見せ、外面にはひび割れが目立つ。遺物が集中区域の最下流側に相当するD-37区のⅢb層で発見され、検出状況からは、完形土器が転倒して埋没した様相が見られる。(131図)

468は口径25.5cm、高さ28.5cm、底径9.2cmの脚付で、口縁部はくノ字に外反し、内面の稜線は明瞭に残される。口縁部に器の最大幅があり、長胴で、弯曲の度合いの緩い腰高な脚部を持ち、内面天井部は平坦に仕上げる。器面調整は目の細かい刷毛目で縦方向に重ね、胎土も精選されたもので、器壁は薄く、超軽量に仕上げる。なお、色調は橙2.5YRと赤い。469の口径は23.7cmで、器高は26.7cm、底径8.8cmで、口縁部に最大幅を設け、脚部は低く仕上げる。器面調整は、脚部を除き外面がヘラケズリ、内面は丁寧な工具ナデで、内面の稜線は明瞭に残される。2～4mmの岩粒や赤色粒、白色鉱物及びカクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土で、器壁は薄いが重量がある。なお、胴部は付着する煤状炭化物や黒斑、赤変等で多様な色調であるが、元来内外面とも橙7.5YRである。470は土器集中遺構内出土の226と酷似する器形で、くノ字に外反する口縁部を持つ。胴部との境界には工具の打ち込み痕が残され、内面の稜線も明瞭に残され、煤状炭化物の残存状況も高い。なお、口径24.1cm、高さ29.8cm、底径9.7cmで、器壁は厚く重量感があり、特に大粒の岩粒を含む胎土は特徴的で、成形段階での粒子移動が明瞭に観察できる。471は口径21.7cm、高さ25.3cmで、胴部が緩やかに膨らむ完形品で、内面の稜線は明瞭に観察できる。煤状炭化物は屈折部から胴部の一部に残り、部分的であるが黒斑が明瞭に残る。焼成は硬質で、器壁は厚く、重量のある仕上がり特徴的で、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラな器面を見せる。(132図)

472の口径は21.2cm、高さ25.8cm、底径8.0cmで、径の最大は口縁部にある。硬質な焼成で、器壁は厚め、3～5mmほどの白色粒子を含む胎土は重量のある仕上がりとなる。外面の縦方向のヘラケズリは胴部上部までおよび、口縁部周辺は横方向にナデ、内面も工具ナデを重ねて仕上げている。やや大粒の岩粒を含む胎土で、新鮮な破断面は濃い桃色で、特に白色粒子が目立つ。内外面ともに、光沢を保つ。473は口径25.2cmで、くノ字に外反する口縁で、口唇部はやや厚く丸味を持つもので、胴部との境は棒状工具で押さえ、明瞭な段を持つ。器壁は

薄く、軽量の仕上がりで、口径より胴部径が大きく、胴上部ではクレーター状の器面の剥離痕が見られる。胴部以下の調整はヘラケズリで、赤色粒を多く含む胎土を使用し、浅黄橙7.5YRの器肌に、部分的に橙2.5YRと赤く発色する。474の口径は17.1cm、高さ24.9cm、底径8.9cmで、口径と胴部に最大径がほぼ一致する。器面調整は、外面がヘラケズリ、内面が粗い刷毛目で、口縁部の一部と脚部の指頭痕が見られる。口唇部は明瞭な平坦面で、内面の稜線も明瞭である。器肌は外面7.5YR、内面5YRの橙で、軽量の焼成である。外面の黒斑部周辺はクレーター状に器壁が剥落する。475は口径26.4cm、高さ35.2cm、底径11cmの脚付で、総じて器壁は薄く、軽量である。口唇部は狭い平坦面で、内外面ともに稜線が残される。胴部は長胴で、頸部から口縁部にかけては入念に縦にナデ、胴下部はヘラによるケズリ調整が施される。また、脚部は端部が細く緩やかな弯曲ラインを残すが、背高で、総じてバランスの良い印象的な器形を構成している。5mmほどの岩粒や3mmほどの赤色粒、白色鉱物は1mmほどの長石や石英、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、特に内面の橙2.5YRは、化粧土を使用したと思われる。また、外面には黒斑も残される。(133図)

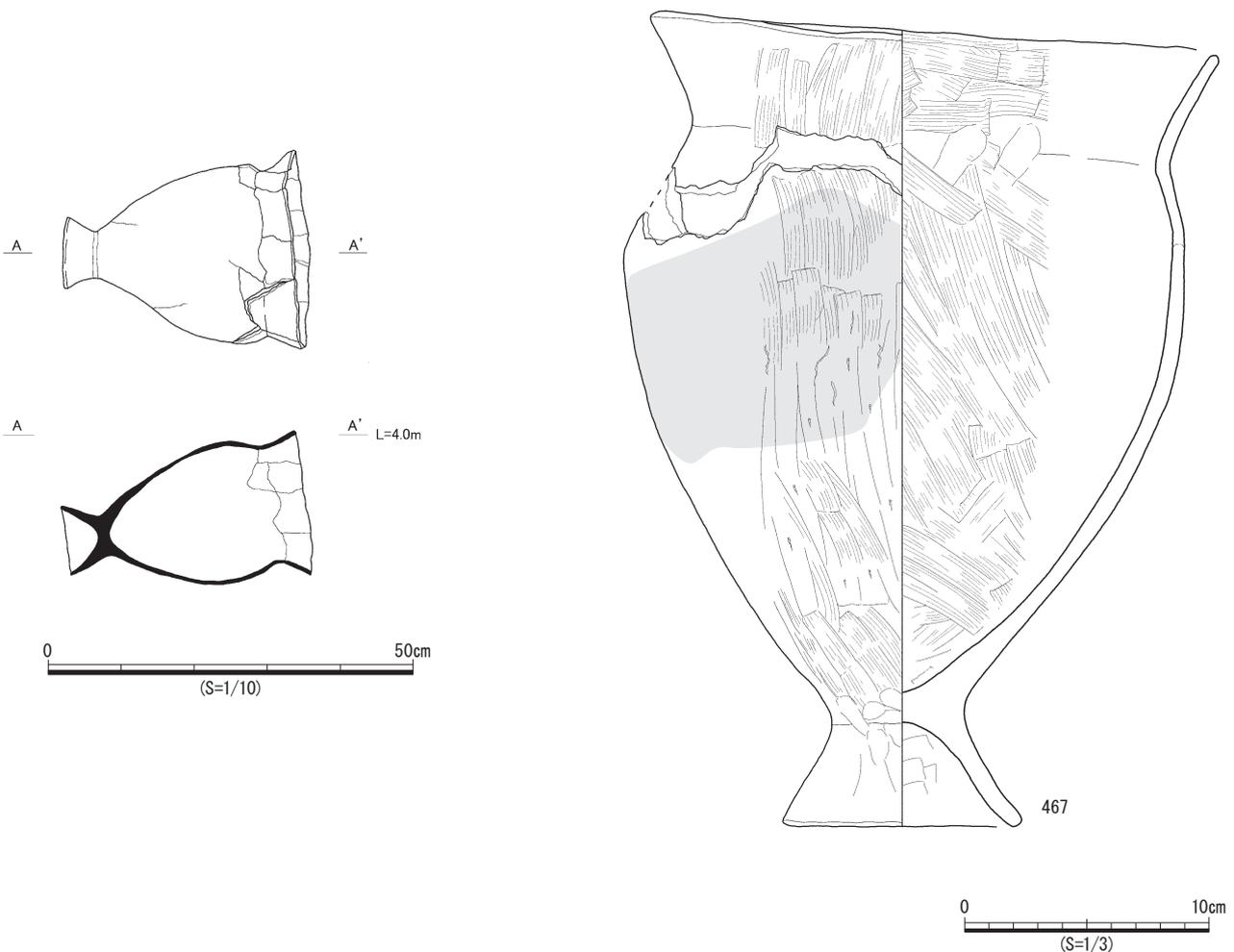
476～480の全てで煤状炭化物の付着が見られ、477～480は底部を欠損する。476は口径20.8cm、高さ24～27cm、底径8.5cmほどの脚付で、胴部との境には、工具痕を深く残す。器面の風化が激しく、胎土中の長石等の白色鉱物が露出する。桃色の淡黄5YRの器肌は、超軽量の仕上がりなす。477は口径27.4cmで、胴部全域に土器製作時の絞り締め痕と見られるひび割れが顕著に残される。また、口縁端部と胴部周辺が黒く、頸部と胴下部が赤く、前者が黒斑あるいは煤状炭化物が付着し、後者の胴下部以下は熱破砕による剥落も確認できる。胎土は、1mmほどの多量の白色鉱物を中心に、石英が目立ち、軽量の焼成が見られる。478の口径は24cmで、胴部との境界は指押さえで区分され、口唇部は丸い。胎土では赤色粒や白色岩粒が目立ち、火山灰性のガラス質粒子も多く含み、軽量の焼成に仕上げる。煤状炭化物は胴部を中心に、一部では縊れ部を除き口縁上部にも付着する。特に、内面はにぶい橙2.5YRと赤い。479は復元口径が24cmで、口唇部は平坦で、頸部は縦方向の刷毛目で調整し、胴部の縦方向のヘラケズリはスピード感がある。きめの細かい胎土を用い、橙7.5YRの器肌で、口縁部と胴上部に煤状炭化物の付着が見られ、重量がある。480は復元口径25.5cmで、底部は欠損し、口縁部はくノ字に外反する。器壁は特に薄く、軽量の仕上がりで、胴部は丸味を持つ。なお、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、キラキラな器面を呈している。(134図)

481は口径24cm、高さ26.5cm、底径10cmの脚付で、口縁部は緩やかに外反し、胴部は丸味を持つ。脚部の丈

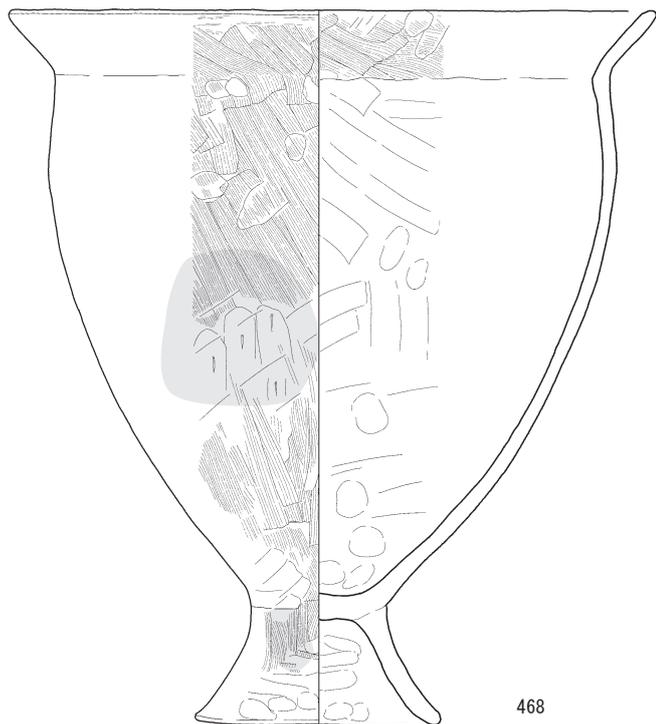
は高いが弯曲の度合いは緩く端部が外に開き、内面天井部は平坦に仕上げる。器面は刷毛目後、胴上部から口縁部周辺ではナデで仕上げる。重量のある焼成で、長石に加え、やや大粒の石英粒が目立つ。482の口径は22.7cm、高さ26cm、底径9.1cmで、最大幅が口縁部にあり、胴部が短く、脚部が長い。器面調整は脚部は工具ナデ、外面は口縁部が横ナデで胴部がヘラケズリ、内面は丁寧な工具ナデで、内面の稜線は明瞭に残される。2～4mmの岩粒や赤色粒、白色鉍物及びカクセン石等黒色鉍物を多く含む胎土で、胴部から脚部の広範囲に煤状炭化物や黒斑、赤変等が見られ、内外面とも橙7.5YRである。483は口径18.1cm、高さ22.2cm、底径8.2cmで、口縁部が最大となる。口縁部と胴部の境は縦方向の刷毛目調整痕が顕著に残され、胴中央部から上が刷毛目調整、下がヘラケズリ調整で、脚部は工具ナデ、外面は口縁部が横ナデで胴部がヘラケズリ、内面も刷毛目調整で、内面の稜線は明瞭に残される。2～4mmの岩粒や赤色粒、白色鉍物及びカクセン石等黒色鉍物に加え火山灰性のガラス質粒子を多く含み、軽量な仕上がりをなす。外面は橙7.5YR、内面はにぶい橙7.5YRである。484は口径22.8cm、

高さ24.6cm、底径7.6cmのほぼ完形品で、口縁部の外反はほとんど見られず、また胴部の膨らみも見られない。口縁部から胴下部に煤状炭化物が付着し、口縁部付近では、煮炊き時の吹きこぼれに起因すると思われる煤状炭化物の消失痕が確認できる。485は直線的に伸びて、腰高な脚部である。(135図)

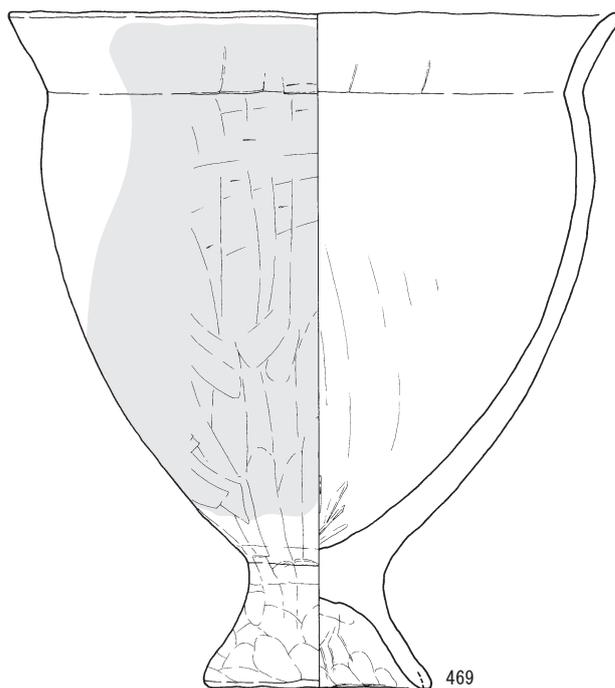
486は器壁が厚く重量のあるもので、基本的形状は487や489等と同じである。調整は胴下半部にヘラケズリが見られ、底部成形が指頭痕によりやや雑に行われ、胴部が張り、丈が短い。胴上部から口縁部にかけては刷毛目や工具ナデで、脚部は丈が短く小振りな造りをなす。口縁端部は、指頭でくノ字に外反して、内面は稜線の明瞭な甕に仕上げる。口径20.8cm、高さ22.9cm、底径7.5cmで、微細な長石や石英、カクセン石等黒色鉍物に加え、3mmほどの白色粒を含む胎土で、重量のある焼成で、明黄褐10YRを呈している。487も器壁が厚く重量のあるもので、胴部はヘラケズリ主体で、口縁部と胴部は工具ナデで区分する。微細な長石や石英、カクセン石等黒色鉍物に加え、5mmほどやや大粒の赤色粒を含む胎土で、にぶい黄橙10YRを呈している。488の口径は19cm、高



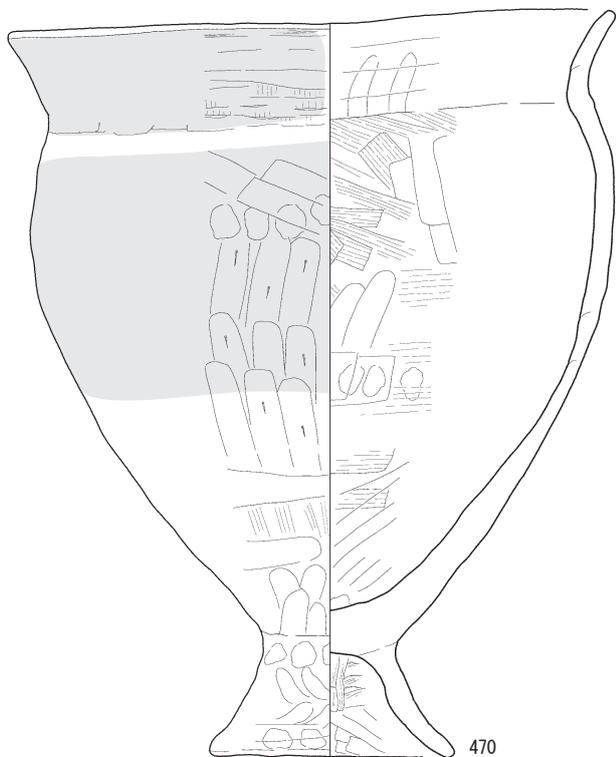
第131図 古墳時代 土器出土状況図・甕1



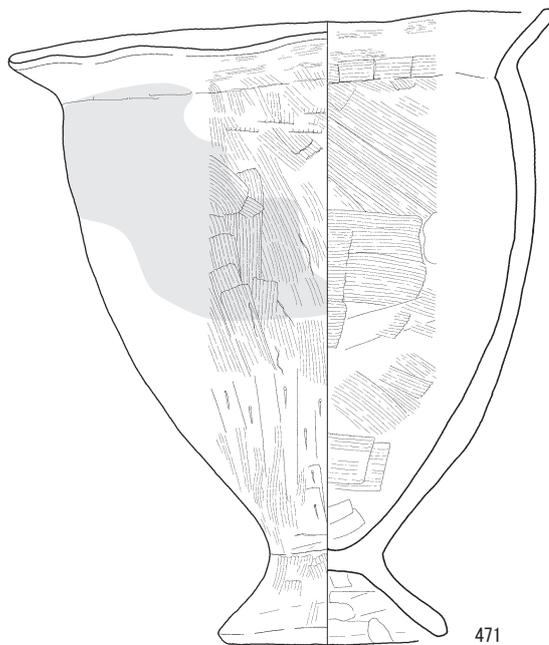
468



469



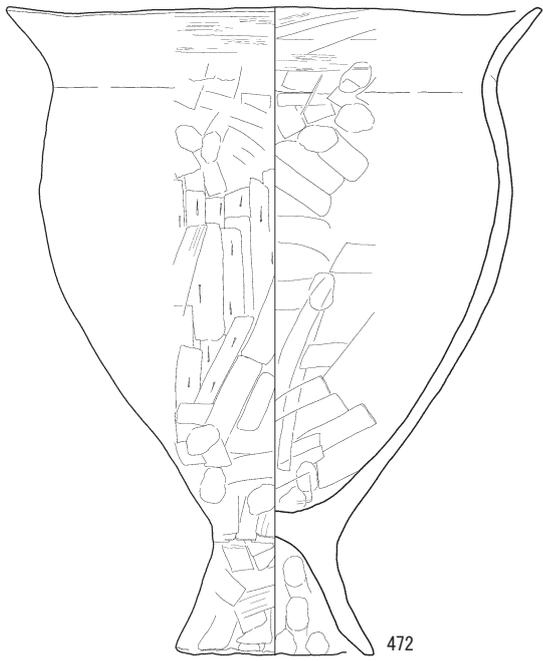
470



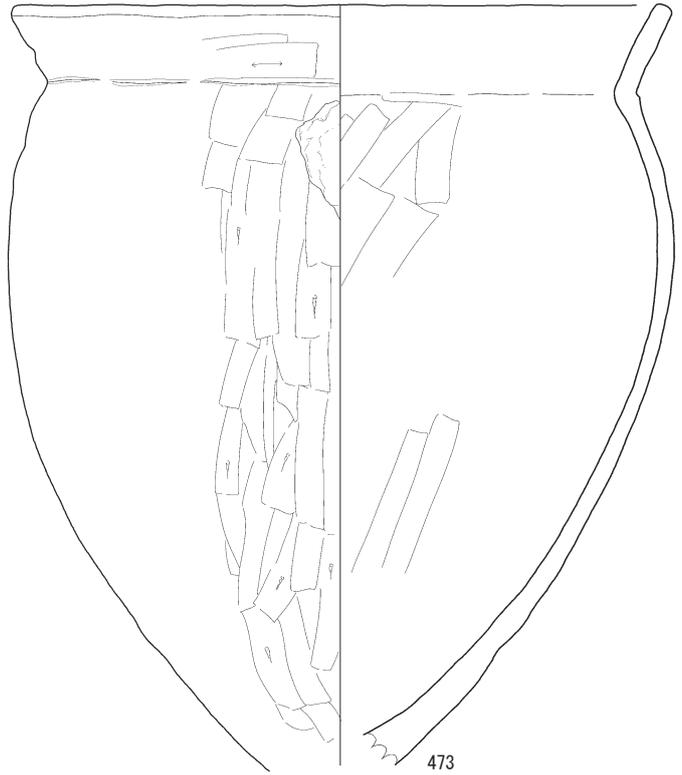
471



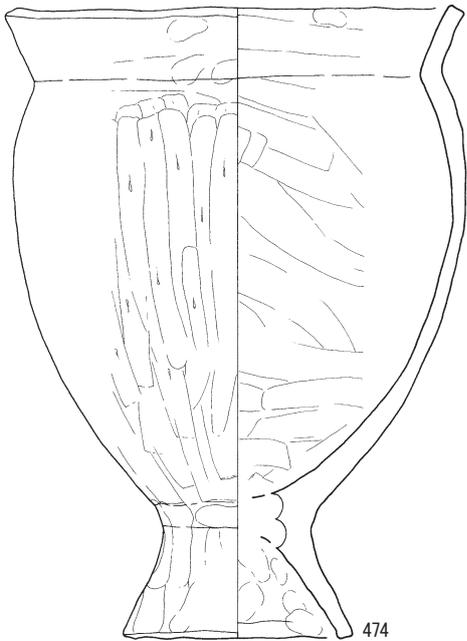
第132図 古墳時代 土器 甕 2



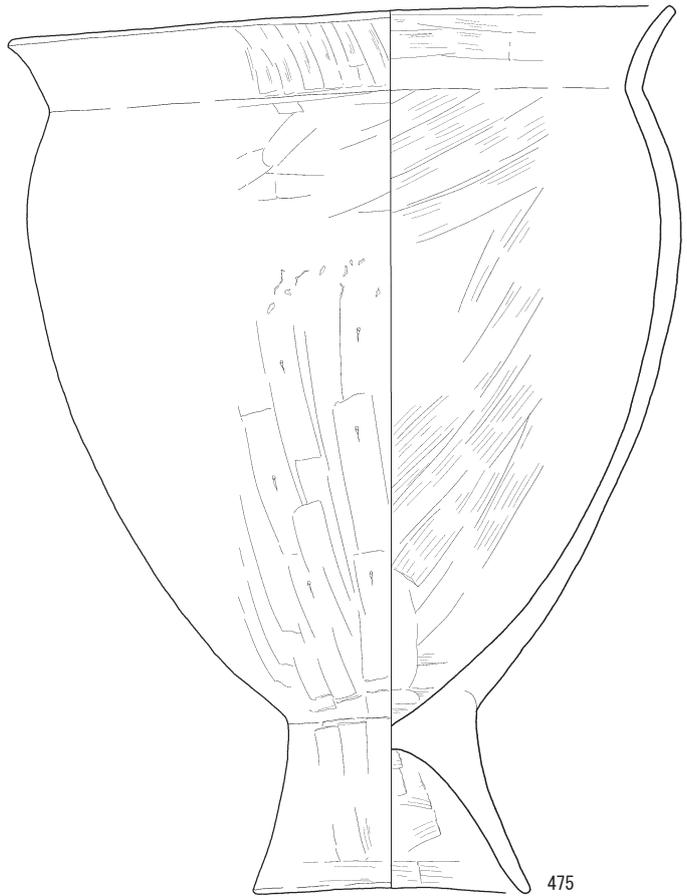
472



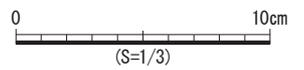
473



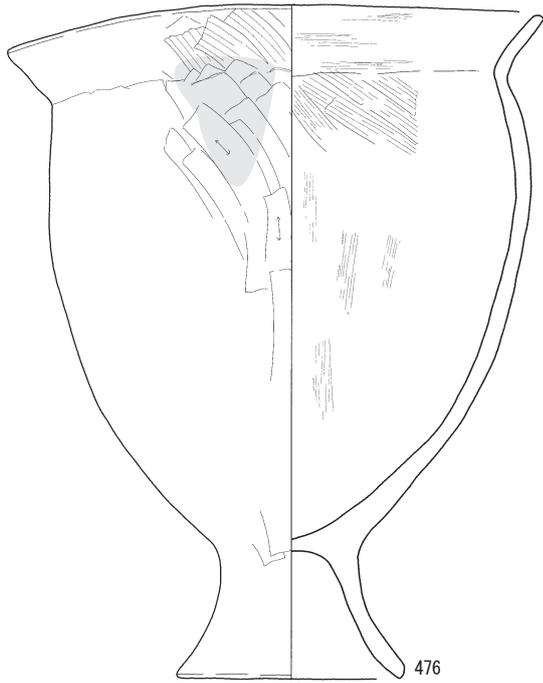
474



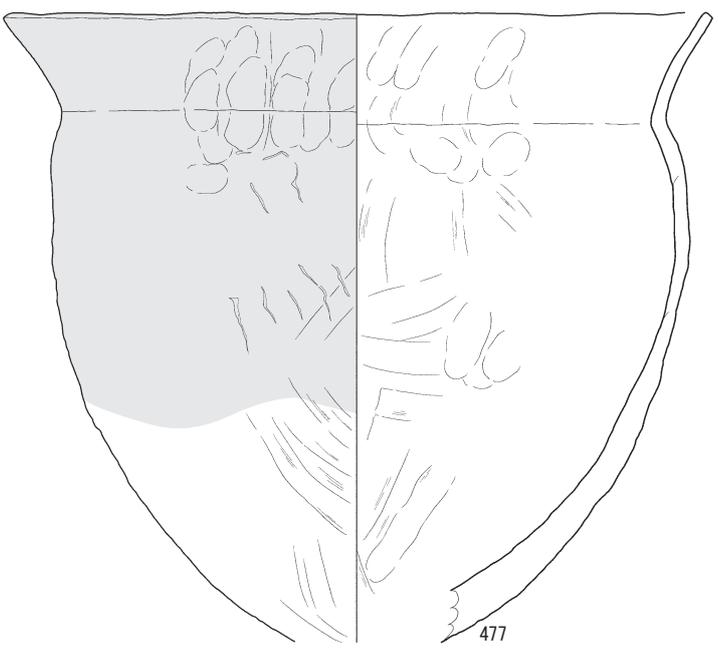
475



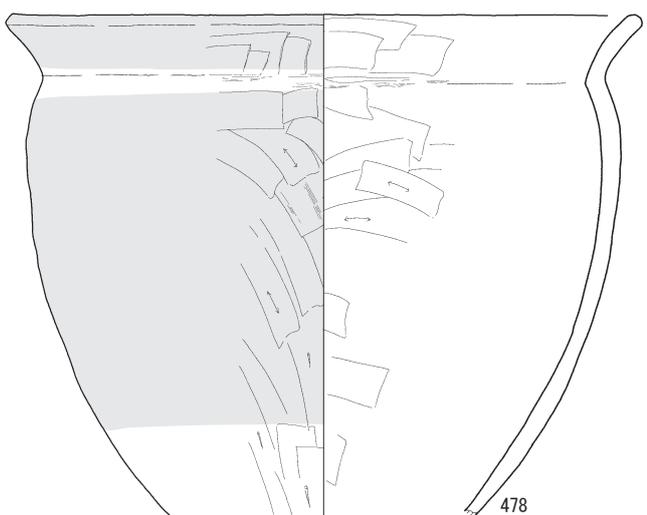
第133図 古墳時代 土器 甕 3



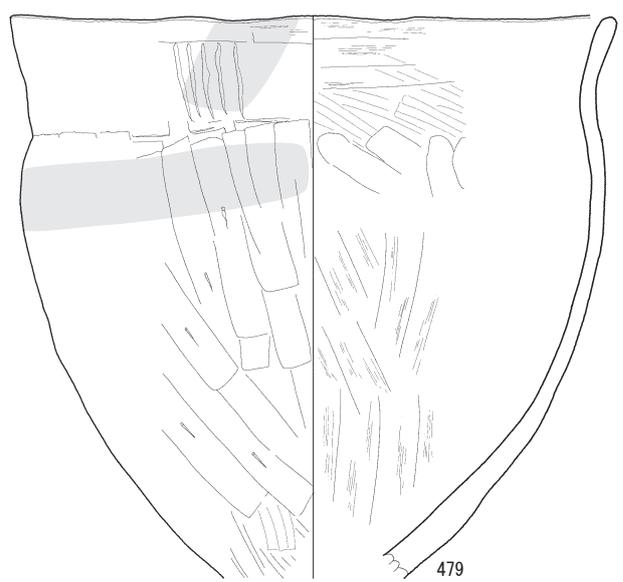
476



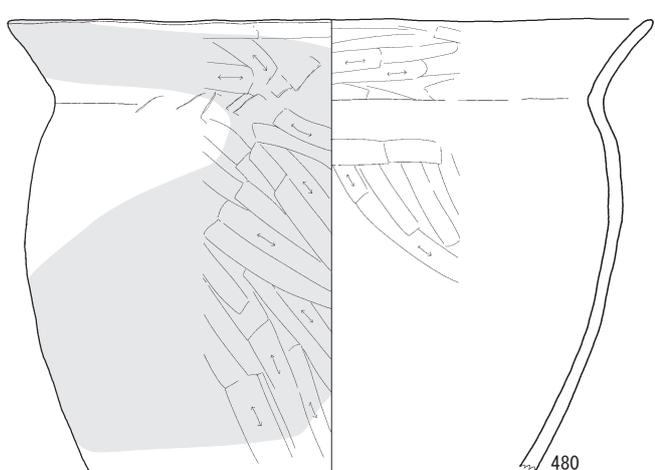
477



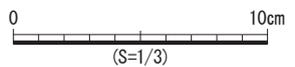
478



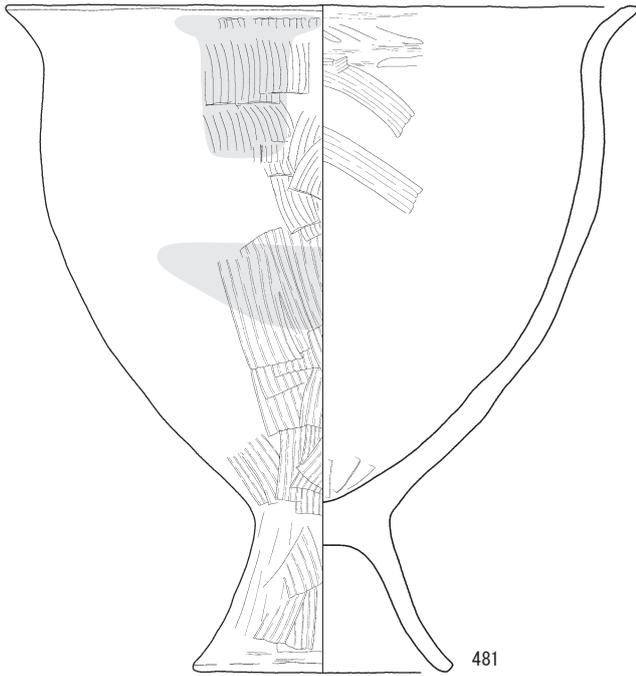
479



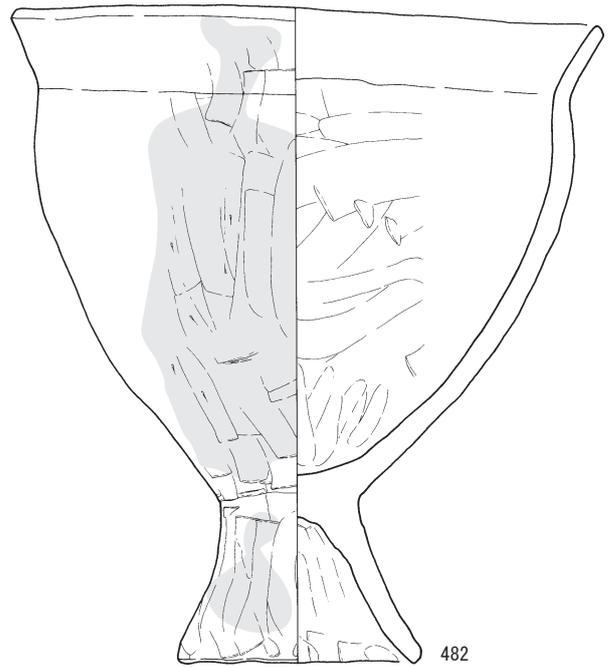
480



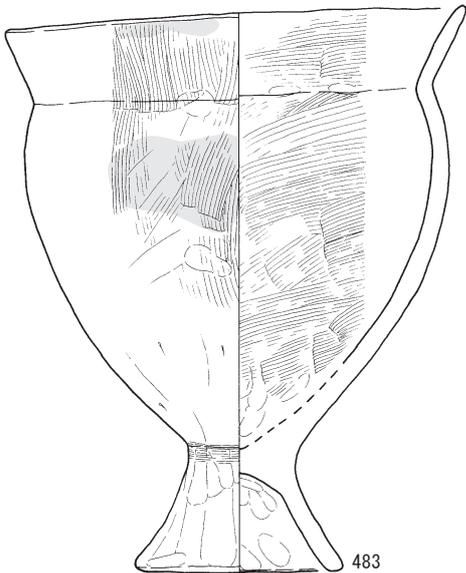
第134図 古墳時代 土器 甕 4



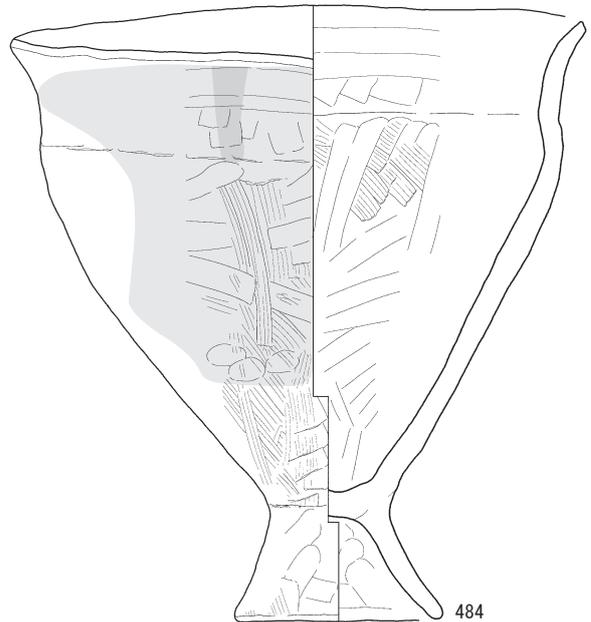
481



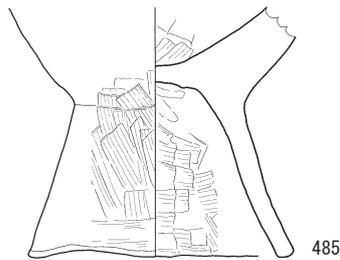
482



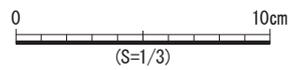
483



484



485



第135図 古墳時代 土器 甕 5

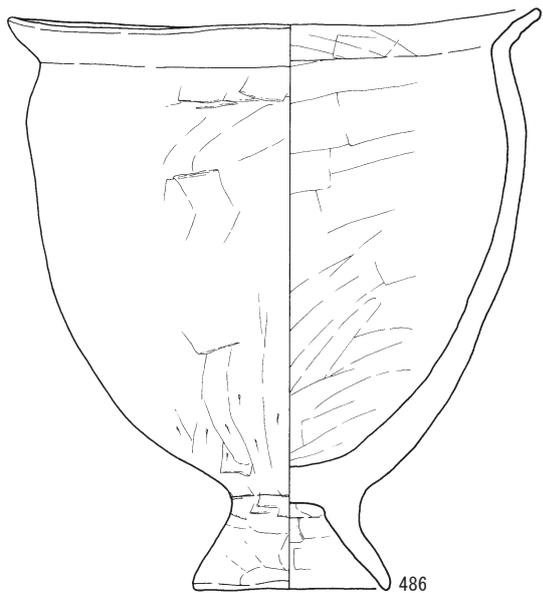
さ21.5cm, 底径7.2cmの完形品で, 口縁部はくノ字に外反し, 口唇部は平坦面を残す。外面胴部では, 粗くスピード感のあるヘラケズリがそのまま残され, 軽量に仕上げられる。489は口径17.3cm, 高さ20.3cm, 底径6.8cmで, 胴部は丸く, 内面は稜線が残る外反口縁で, 脚部は小さい。白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で, 内面の黒斑は大きい。490の口径は16.4cm, 高さ22.6cm, 底径8.5cmで, 胴部に最大径がくる。器面調整では, 規格の異なる刷毛目を用い, 部分的にはナデて仕上げている。口唇部は細くなるが, 内面稜線が観察できるくノ字口縁で, 脚部内面天井部は緩やかなドーム状をなす。白色鉱物や多量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で, 軽量の焼成で, 内底面や外面の広範囲に黒斑を残す。491は口径18.4cm, 高さ21.7cm, 底径6.6cmの脚付で, 口縁部はナデられ外反は緩やかで, 丸い胴部と小さめの脚部を持つ。胴部は縦方向のひび割れが著しく, 口縁部に煤状炭化物の付着や黒斑が見られ, 脚部のみ赤変する。なお, 軽量の仕上げりである。(136図)

492の口径は23 ~ 23.4cm, 高さ21.5cm, 底径8.6cmで, 口縁部は短く外に開き, 内面稜線はやや不明瞭となる。白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で, 橙5YRで脚部は貧弱である。493は口径20cm, 高さ20.4cm, 底径8.9cmで, 胴部最上位は刷毛目調整を縦方向に行い, 口縁端部を指頭痕で短く外に開いて仕上げるにより, 内面稜線は強調される。脚部は低く, 漏斗を伏せた形状で, 赤色粒や白色鉱物, 多量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で, 外面に黒斑が見られる。やや小型である。494の口径は17.3cm, 高さ18cm, 底径9.7cmの完形品で, 外面は縦方向の刷毛目調整が特徴的である。口縁部から順に刷毛目, ヘラケズリ, 工具ナデ, 指頭痕と部位により異なる調整を実施している。胴中央部から脚上部に煤状炭化物を残し, 微細な金雲母とカクセン石等の黒色鉱物を含む胎土を使用する。495は口縁部がわずかにくノ字に外反し, 胴部が膨らみ, 小振りな脚部を持つ小型で, 器壁は厚く重量がある。両面とも浅黄橙7.5YRで, サンドイッチ状の破断面で, 屈曲部を挟んで上下に煤状炭化物が付着する。496の口径は17cm, 高さ19.5cmで, 最大幅は胴部の17.5cmである。硬質な焼成で, 器壁は厚く, 3 ~ 5mmほどの白色粒子を含む胎土は重量のある仕上げりとなる。器面の剥落エリアは黒斑部と重なり, 胴部下位を中心に焼成前から存在したと見られる縦方向のひび割れも残る。497は復元口径20.3cm, 高さ17.5cmほどで, 口縁部は長く緩やかに外反し, 脚部は小振りで器壁は厚く, 特に重量な仕上げりを見せる。内面は刷毛目, 外面はヘラケズリ調整で, 5mmほどの岩粒が含まれる。(137図)

498は口径17.6cm, 高さ21cm, 底径7.2cmで, 口縁部が最大となる。口縁部は横にナデ, 以下はヘラケズリに工具ナデを重ね, 内面は丁寧にナデて仕上げ, 内面の稜

線はやや不明瞭となる。赤色粒や白色鉱物及びカクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で, 軽量な仕上げりをなす。なお, 胴下部と脚部を除き, 煤状炭化物が付着している。外面は黄褐2.5YR, 内面はにぶい黄褐10YRである。499の口縁部は縦方向の刷毛目調整で, 端部周辺ではナデを重ねる。復元口径は15.5cm, 高さ17.4cm, 底径5.5cmを測る。500の口縁部と胴部の段差は, ヘラ状工具を連続して刻んで設ける。復元口径12.6cm, 高さ17.3cm, 底径6.2cmの小型甕で, 最大部は胴部にあり, 口縁部は直線的に立ち上がり, 口縁部の屈折が小さくなる。また, 胴部の一部には煤状炭化物が付着し, 胴下部には絞り成形の痕跡も残される。501の復元口径は28.8cm, 高さ30.2cm, 底径8cmの脚付で, 器面全域を刷毛目で調整し, 胴部では部分的にヘラケズリが加えられる。口縁部周辺ではカキアゲ状の縦方向の刷毛目で調整し胴部との境界を形成し, 内外面ともに稜線は形成しない。脚部内面天井部は平坦で, 器壁は薄く, 硬質な仕上げりを見せる。煤状炭化物の付着する器面の一部は, 光沢を保つ。502の口径は26cm, 高さ31.1cm, 底径10.8cmで, 口径と胴部に最大径がほぼ一致する。口唇部は平坦で, 脚部は高く, 天井部は緩やかにドーム状をなす。外面では部分的にタタキ痕が残され, その上位に刷毛目調整が加えられる。なお, 内外とも基本的には刷毛目調整で, 胴下部から脚部以外には煤状炭化物が明瞭に残されている。胎土は1mm以下の微細な長石や石英, カクセン石, 火山灰性のガラス質粒子を含むもので, 外面がにぶい黄褐10YR, 内面がにぶい黄橙7.5YRとなる。搬入品か? (138図)

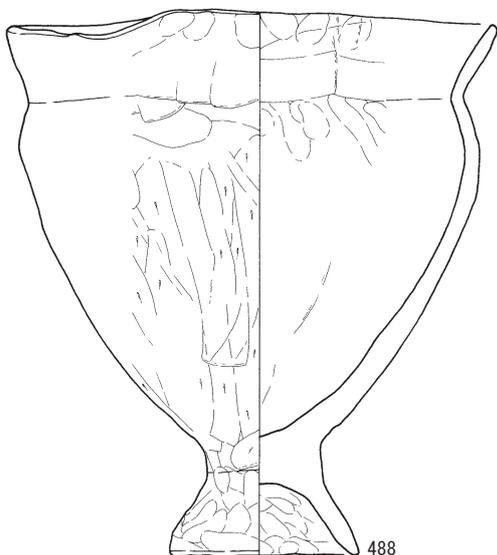
503の口縁部と胴部の境は, 刷毛目のカキアゲで明瞭な段が形成される, いわゆる“カキアゲ口縁”で, 口縁部が外側に開く形状のため, 胴部への移行がスムーズに行われている。両面とも密な刷毛目調整で, 器壁は厚く重量のある仕上げりで, 口縁部から胴上部にかけ煤状炭化物が帯状に付着する。504は復元口径31cmの脚付で, 脚端部は欠損する。器面全体を刷毛目で調整し, 特に, 胴部との境界を形成するカキアゲは端正である。器壁は薄く, 軽量で硬質な仕上げりで, 煤状炭化物は胴上部から口縁部に付着する。砂粒の多い胎土で, 器面はザラザラ感が強い。505は復元口径24.2cmの脚付で, 脚端部は欠損する。胴部との境界は刷毛目のカキアゲで形成し, その後, 横方向にナデて仕上げている。器壁は薄く, 硬質な仕上げりで, 胴部には縦方向の多数のひび割れを残す。なお, 胴下部に帯状に付着する煤状炭化物が特徴的である。506は口径16cmの小型で脚部は欠損し, 口縁部は緩やかにくノ字に外反する。軽量の仕上げりである。507は脚部の小型甕で, 脚の一部を欠く。(139図)



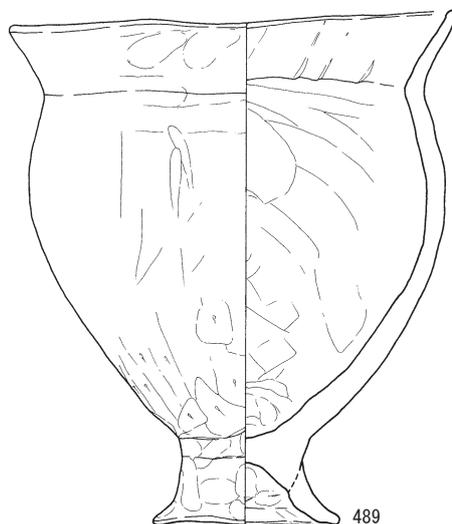
486



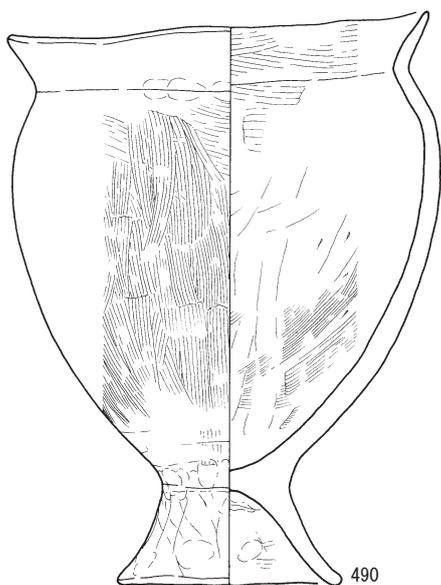
487



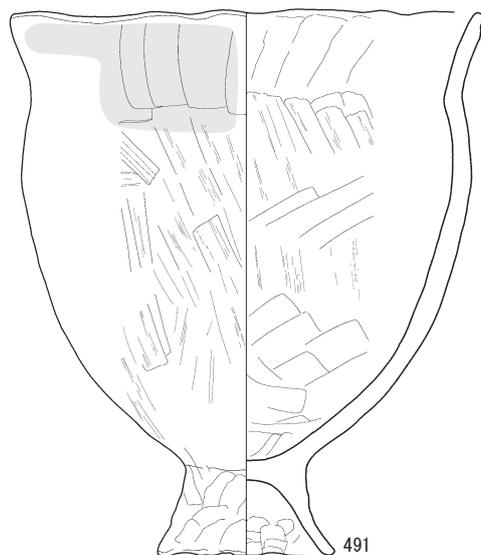
488



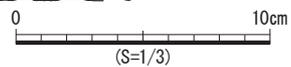
489



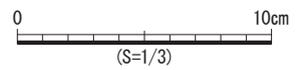
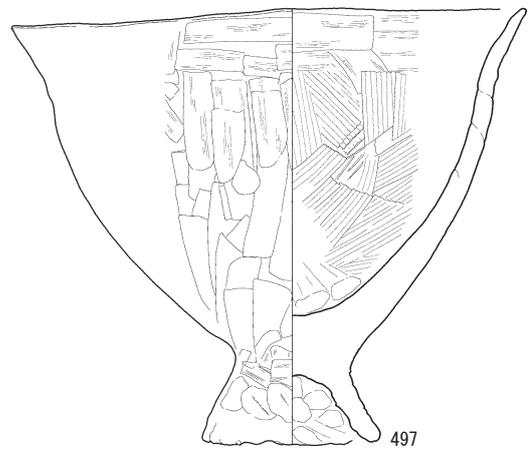
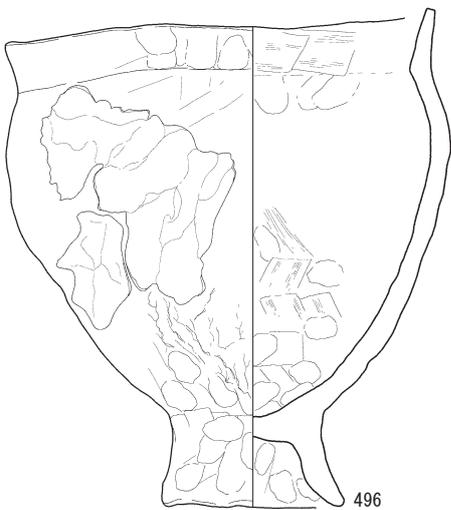
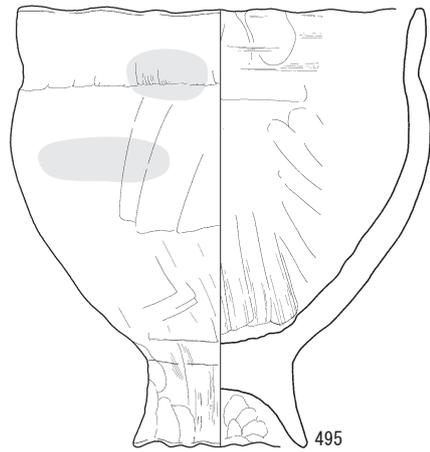
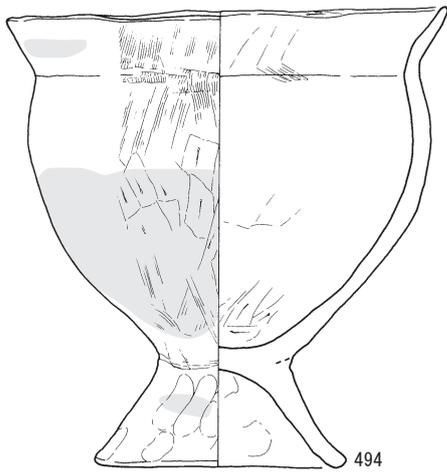
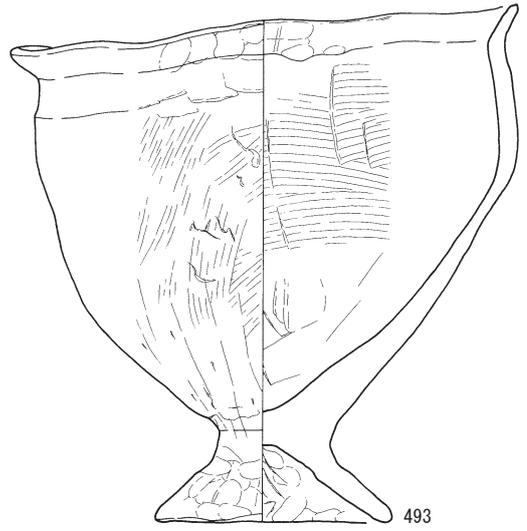
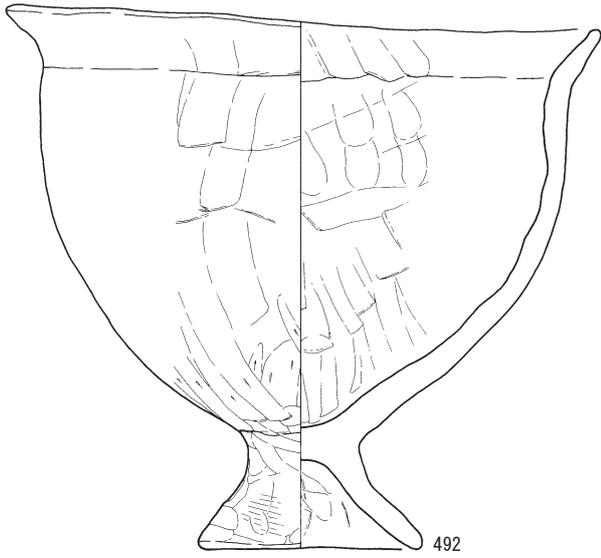
490



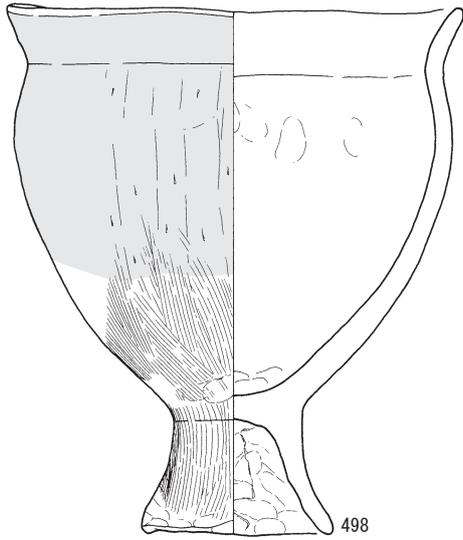
491



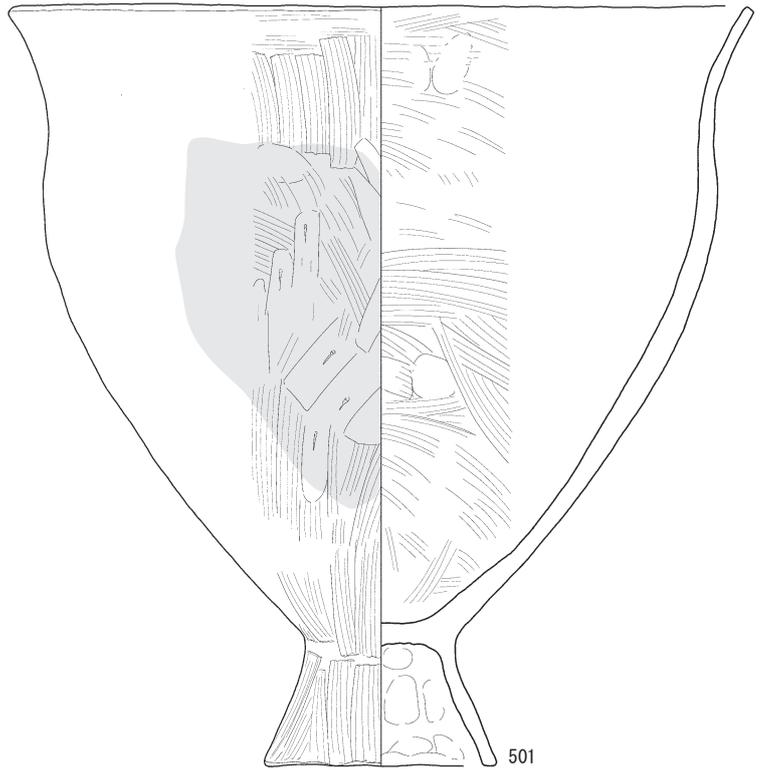
第136図 古墳時代 土器 甕6



第137図 古墳時代 土器 甕 7



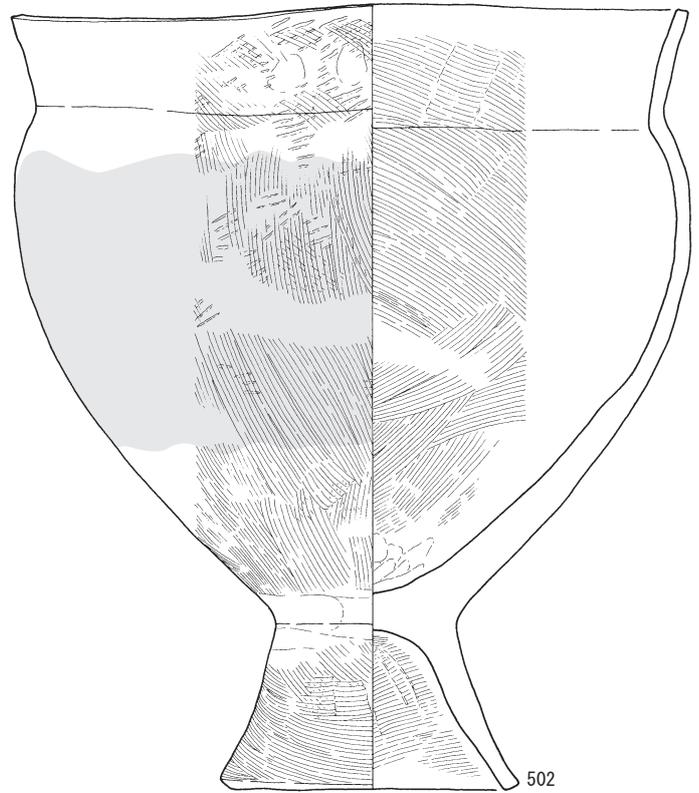
498



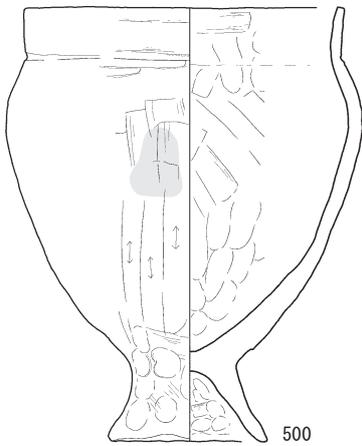
501



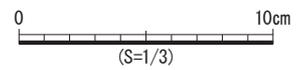
499



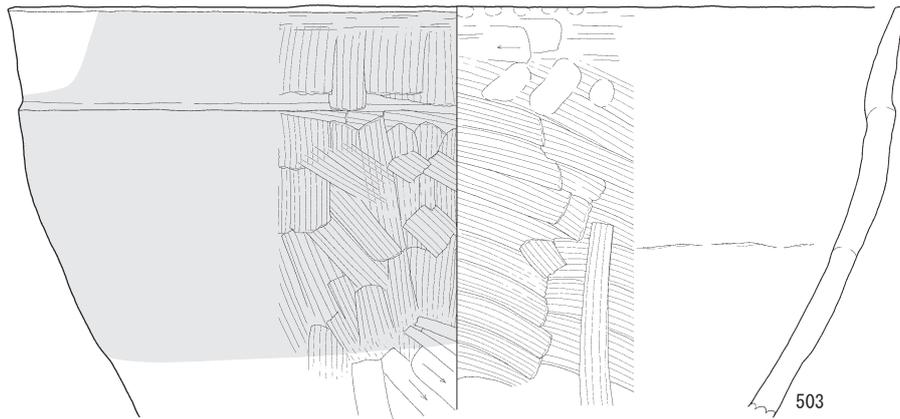
502



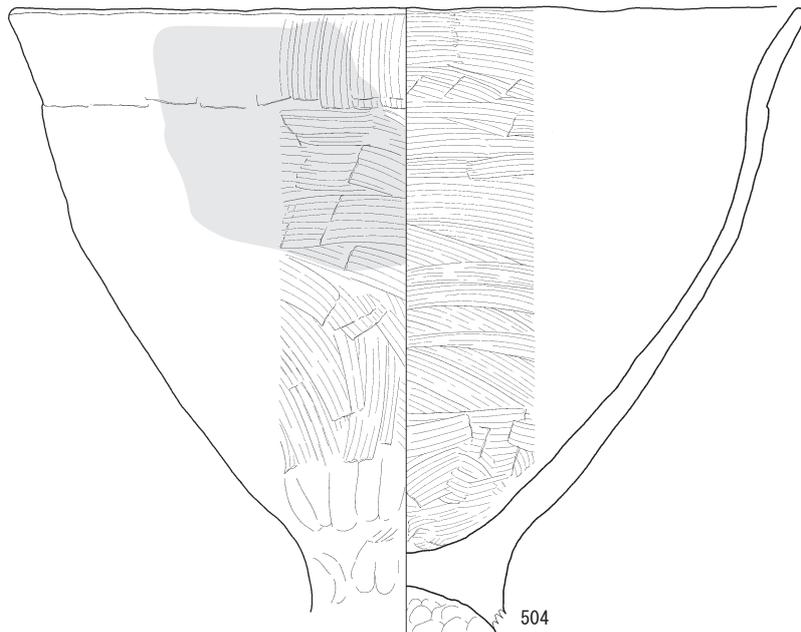
500



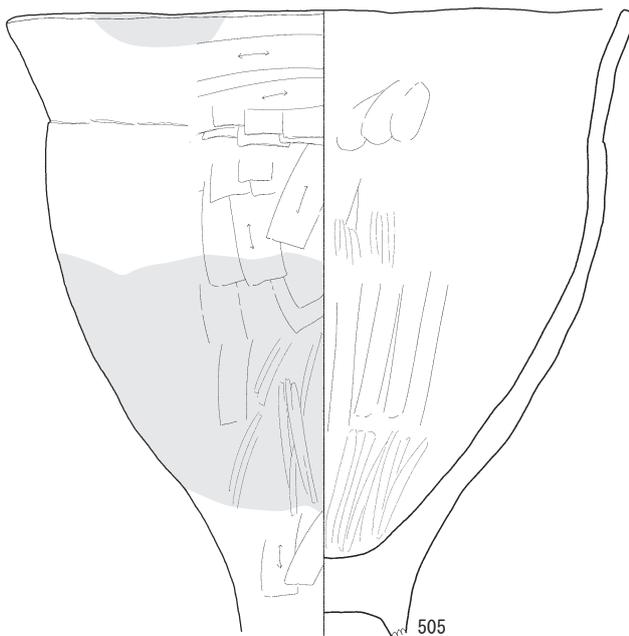
第138図 古墳時代 土器 甕 8



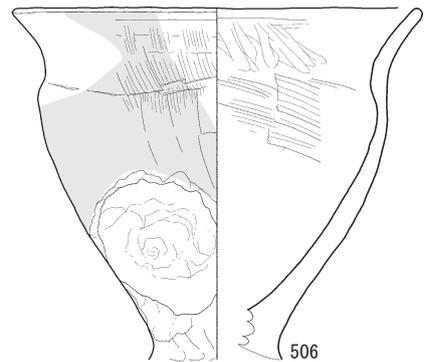
503



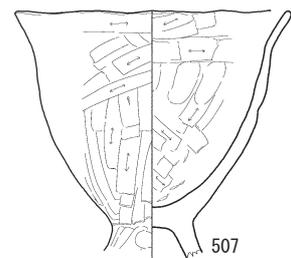
504



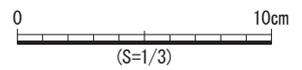
505



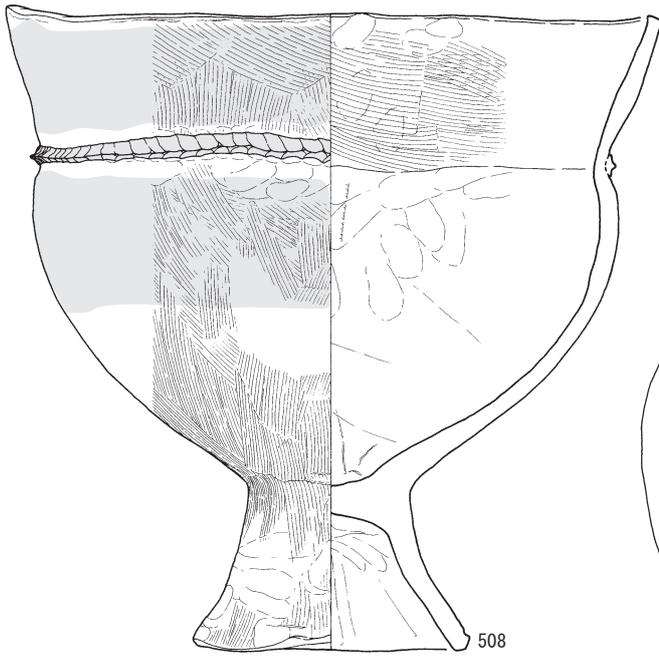
506



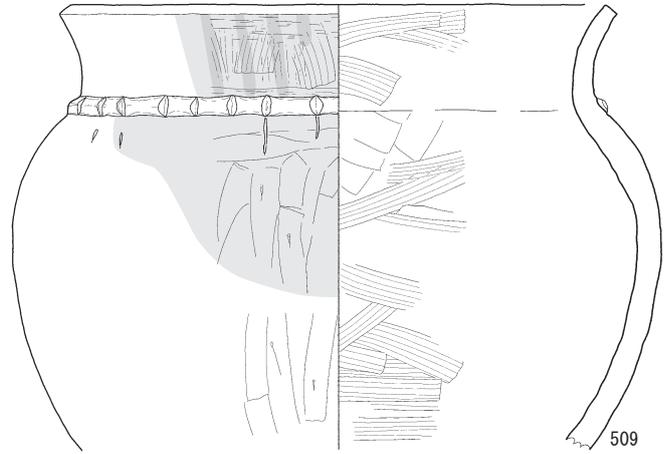
507



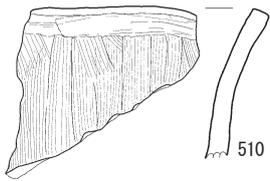
第139図 古墳時代 土器 甕9



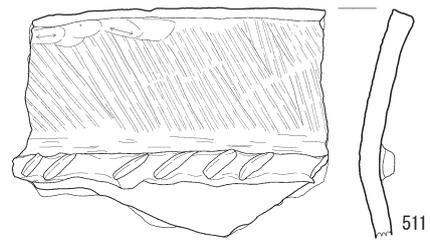
508



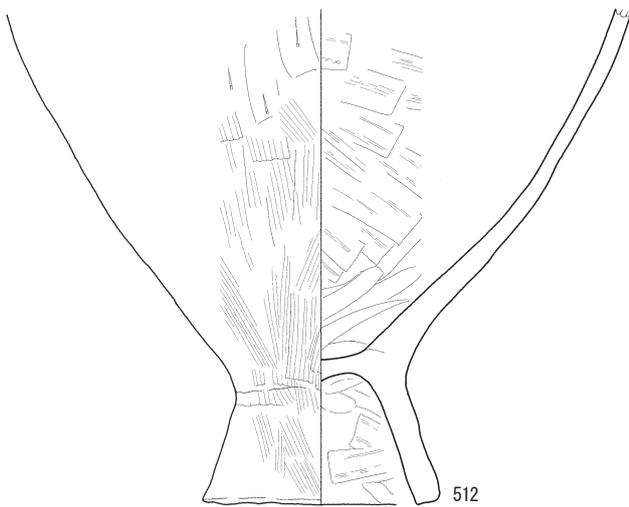
509



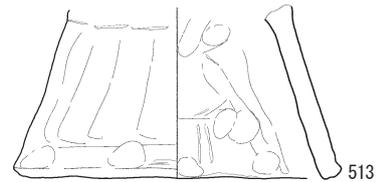
510



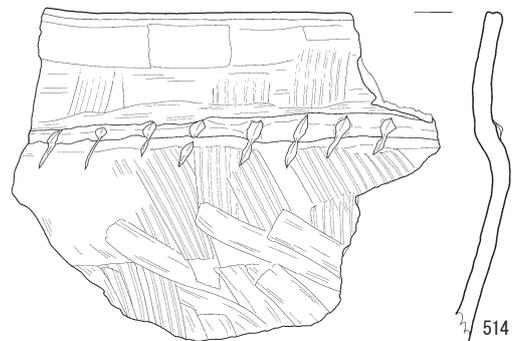
511



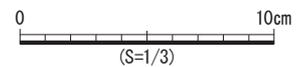
512



513



514



第140図 古墳時代 土器 甕10

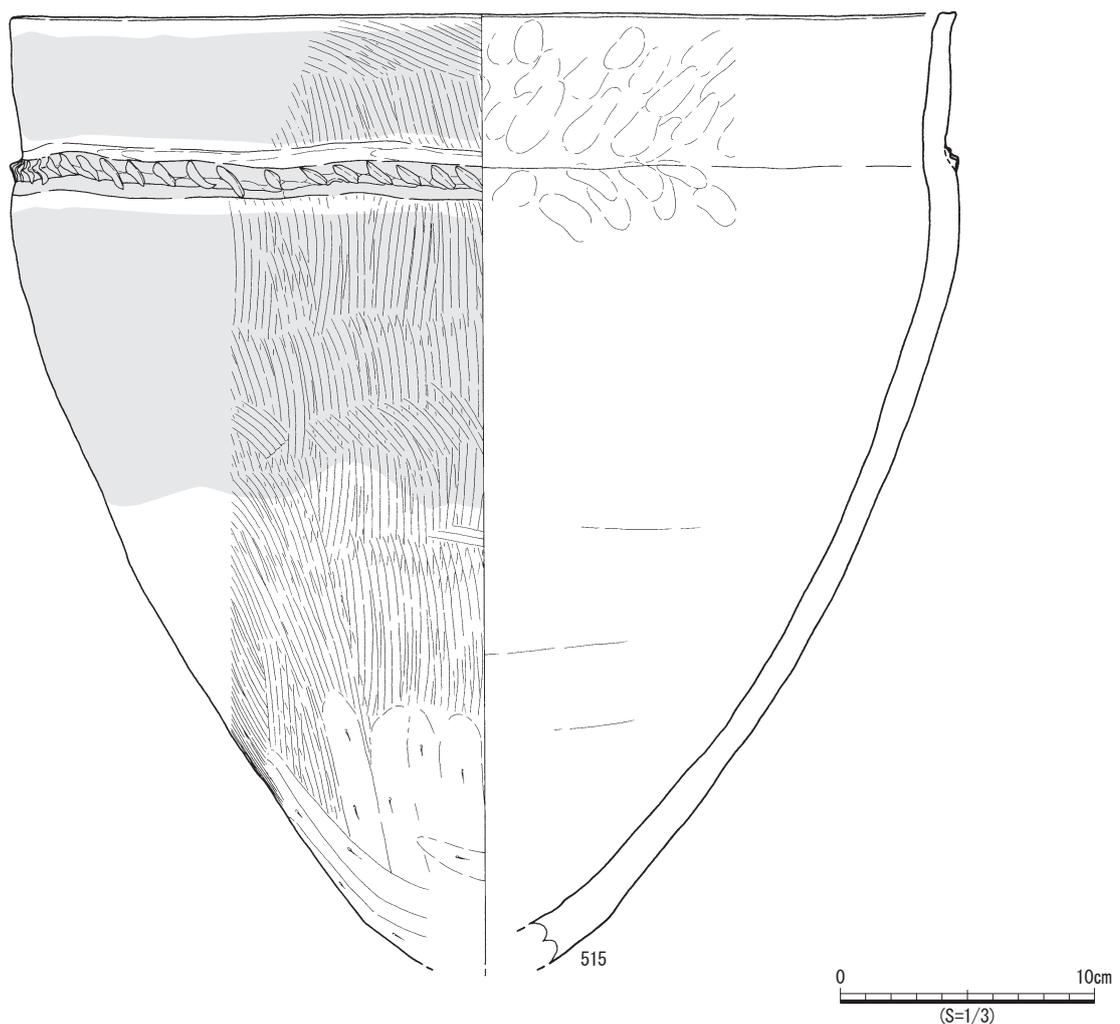
508は口径25.1～25.8cm、高さ25.5cm、底径10.2cmの完形品で、指頭痕仕上げの貼付け突帯文が口縁部と胴部の境界を形成する。外面は刷毛目調整に部分的に指頭痕を加え、内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、それ以下は工具ナデや指頭痕で仕上げている。脚部を除く上部に煤状炭化物が残り、1mm以下の長石や石英主体の胎土で、軽量に仕上げられる。にぶい黄橙10YR。509の復元口径は21cmで、胴部が大きく膨らみ、絞りこんだ頸部から緩やかに外反する口縁部で、口唇部は明確な平坦面をなす。器壁は厚く、重量のある仕上がりで、破断面は中央の褐灰10YRを、にぶい橙7.5YRでサンドイッチ状に挟む。器面には煤状炭化物が付着し、一部では熱破碎による剥落も残される。510は甕の口縁部で、多量の金雲母を含む。511は緩やかに外反する口縁部で、胴部への移行がスムーズに行われているが、詳細な傾きは確定できない。両面とも刷毛目調整で、突帯文は斜めに刻まれる。512は甕の底部と思われる。上部は刷毛目、中央部はヘラケズリ、下部は刷毛目が認められる。また、上部の刷毛目と重なる部分が、帯状に剥落している。内面

は刷毛目が主で、底面から上部にかけて扇状に工具痕が残され、内底面は指で押さえてU字状に深くなる。焼成は硬質で、器壁は厚く、胎土は長石主体の白色粒子を多く含み、やや大粒の黑色鉱物、金雲母も確認できる。破断面は中央部の灰黒色を挟んで、サンドイッチ状をなし、重量がある。513は直線的に伸びる、腰高な脚部で、11.5cmほどの底径である。514は頸部より内側から直線的に立ち上がる口縁部で、1条の刻目突帯文を持つ。内面屈折部は指押さえで成形し刷毛目で仕上げている。傾きは確定できない。(140図)

515は口径37.1cm、高さ37cmの尖り気味の丸底甕である。頸部に1条の刻目突帯文を持ち、砲弾状を呈している。外面上部は刷毛目、下部ではヘラケズリを重ね、内面は工具ナデや指頭痕で丁寧に仕上げる。(141図)

516は底部を欠損する口径34.2cmの甕である。(142図)

517は口径15.7cm、高さ16.5cmの尖底甕で、内面は刷毛目後工具でナデて成形しているが、外面のヘラケズリや頸部の工具痕はやや粗雑な仕上がりが見られる。また、内底面に黒斑、一方外面下半部は熱破碎と見られる剥落



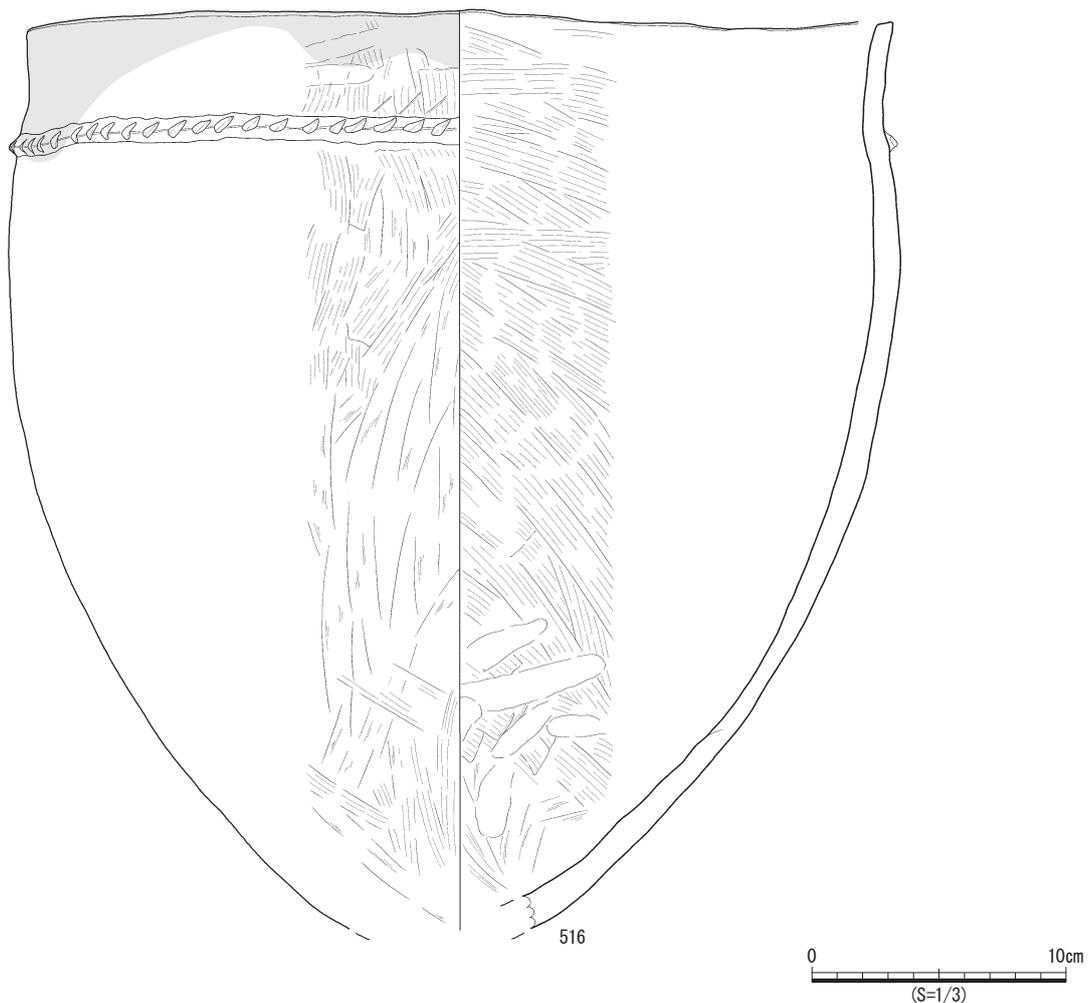
第141図 古墳時代 土器 甕11

が激しく、大粒の岩粒や赤色粒、石英及び白色鉱物は、カクセン石等黒色鉱物の混入が観察可能である。外面はにぶい黄橙10YR、内面はにぶい橙7.5YR。中津野式新段階。518は口縁部の屈折はほとんど見られず、刷毛目のカキアゲで胴部との境に段を設けている。器壁が厚く重量がある。519は口径32.4cm、高さ38.6cm、底径は7.7cmの狭い平底で、口唇部は丸く、口縁部は若干外反する傾向が見られ、大甕と中甕の中間の規格である。屈曲部の1条の突帯文はシャープな断面三角形で、縦方向に深くヘラで刻む。内外面ともに丁寧な工具ナデで、口唇部を最後に横方向にナデで仕上げている。突帯文以下はひび割れや貫入が目立ち、赤変した左右の胴部張り出し部を挟むように、口唇部から胴下部に煤状炭化物が付着している。底部に近づくにつれ器壁は厚く、重量がある。1～2mmほどの白色鉱物の混入が目立つ。520は口径24mmほど、高さ28.8cmの甕で、頸部に刻目突帯文を貼付け、ヘラケズリで底部を作り出す。器壁は厚く、堅牢な焼成で、重量がある。内面は刷毛目、外面は上部が刷毛目、胴部以下はヘラケズリと、一部特殊な工具で沈

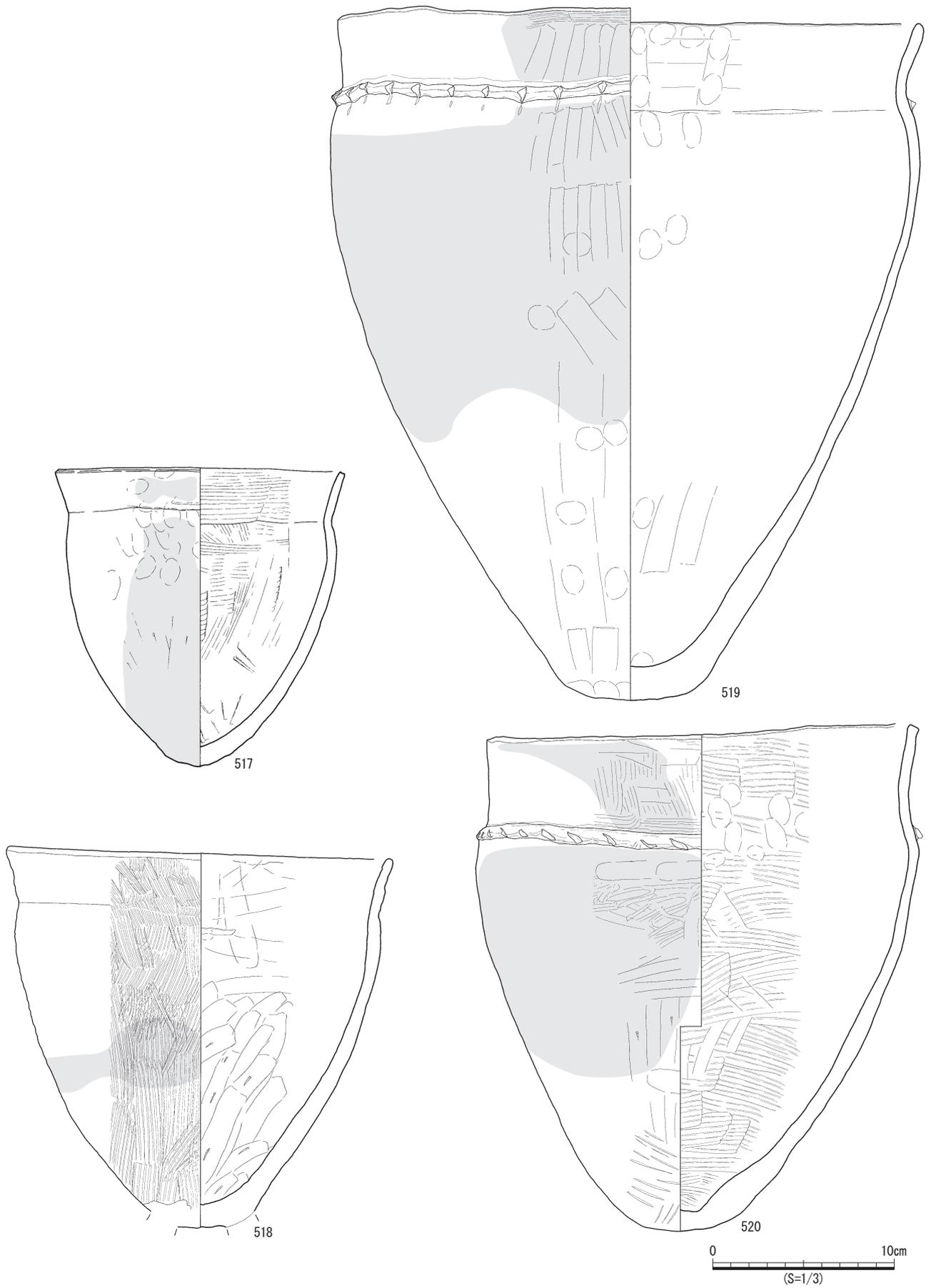
線状にナデられ、胴部を中心にベルト状に煤状炭化物の付着が見られる。(143図)

521は復元口径37cmの大型甕で、口縁部は内弯気味に直行する。口唇部は明瞭な平坦面をなし、器壁は厚く硬質な焼成をなす。外面下部はヘラケズリで、内面は幅広の刷毛目を基調とする。522は復元口径25.5cmで、口縁部が緩やかに外反するもので、内面に稜線を意識させる。超硬質な焼成で、特徴的なにぶい橙2.5YRの色調を呈している。523は胴部からスムーズに口縁部に移行するもので、外面に直接刻まれる。いわゆる指宿胎土の特有の色調を呈している。524は復元口径28cmで、口縁部は内弯気味に直行する。口唇部は明瞭な平坦面をなし、硬質な焼成をなす。両面とも工具で丁寧にナデ、内面は幅広の工具を使用している。砂粒の多い胎土で、火山灰性のガラス質粒子も多く含み、いわゆる指宿胎土に近い。(144図)

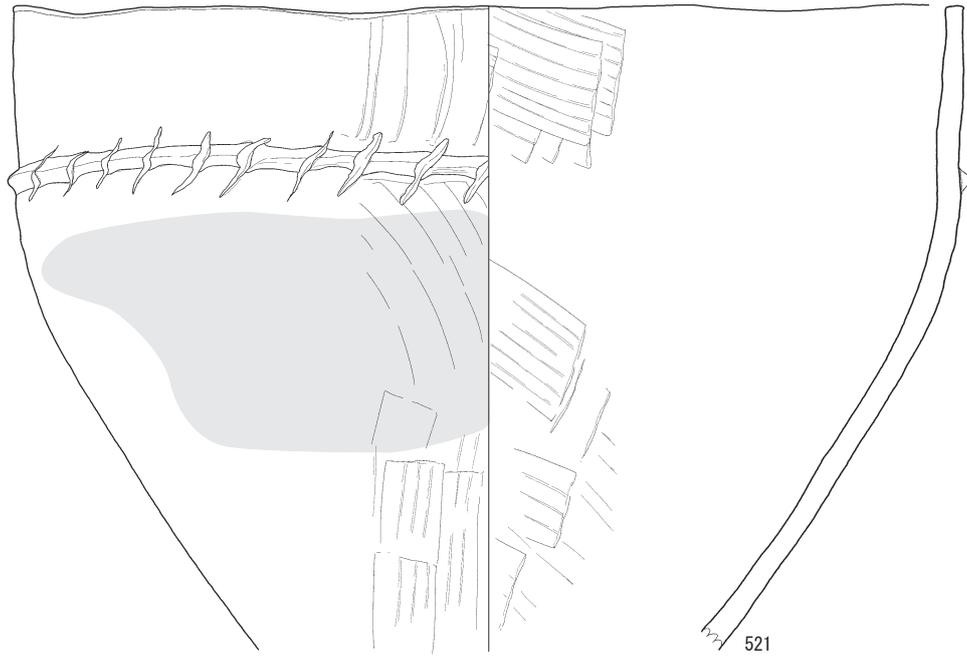
525は復元口径29.3cmの甕で、底部は欠損する。口唇部は丸く、口縁部は直行する。両面とも工具で丁寧にナデ、一部では刷毛目状のナデも見られる。火山灰性のガ



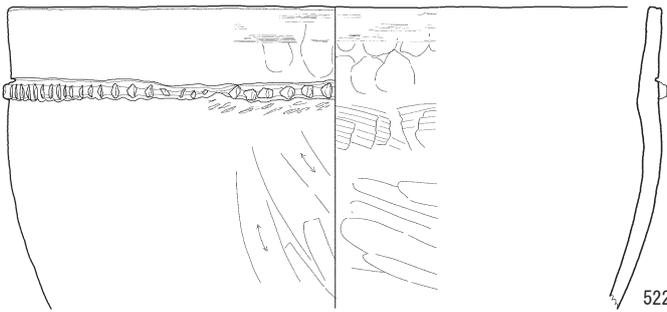
第142図 古墳時代 土器 甕12



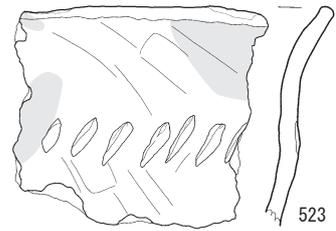
第143図 古墳時代 土器 甕13



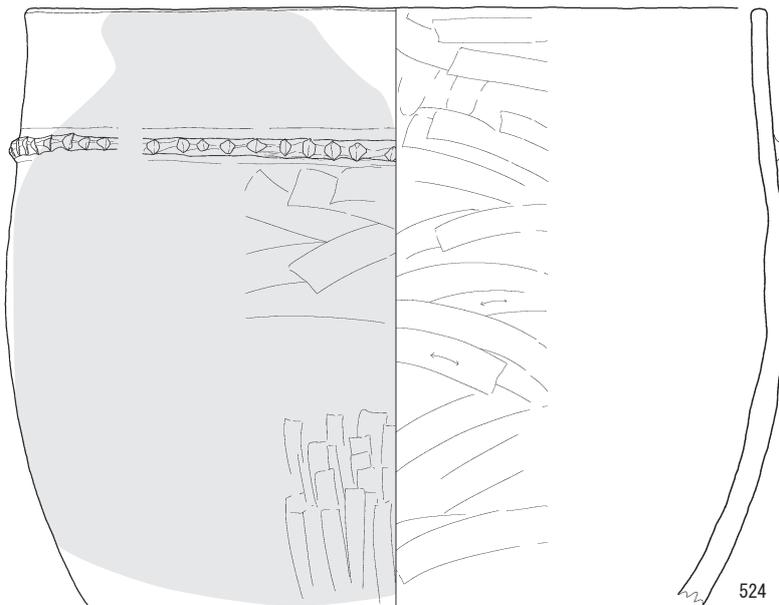
521



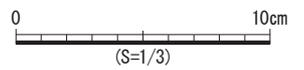
522



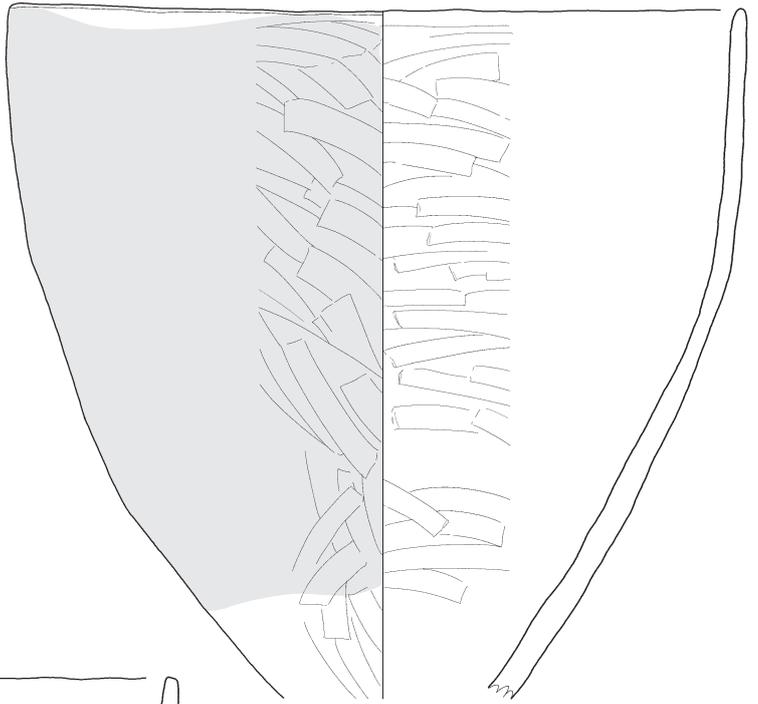
523



524



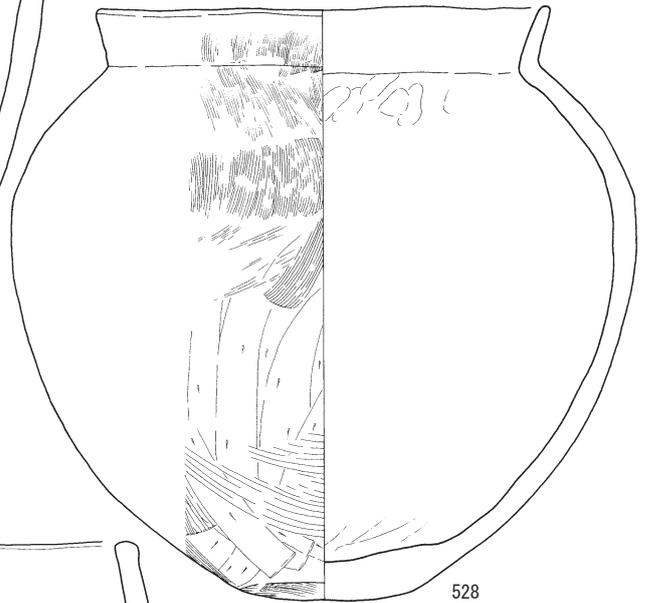
第144図 古墳時代 土器 甕14



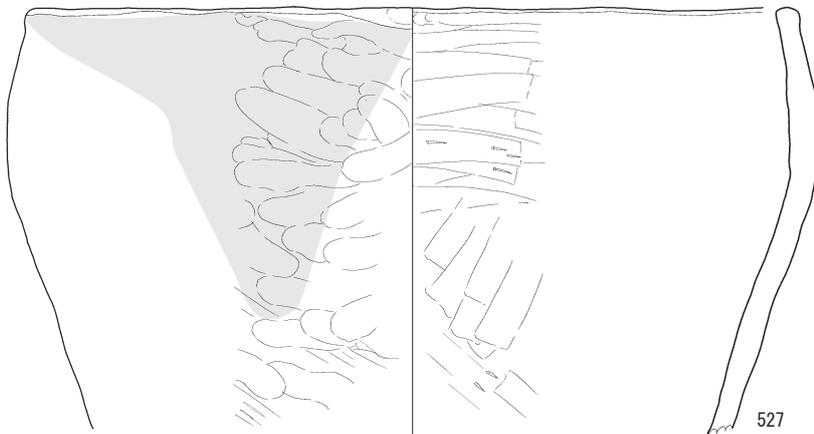
525



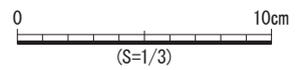
526



528



527



第145図 古墳時代 土器 甕15

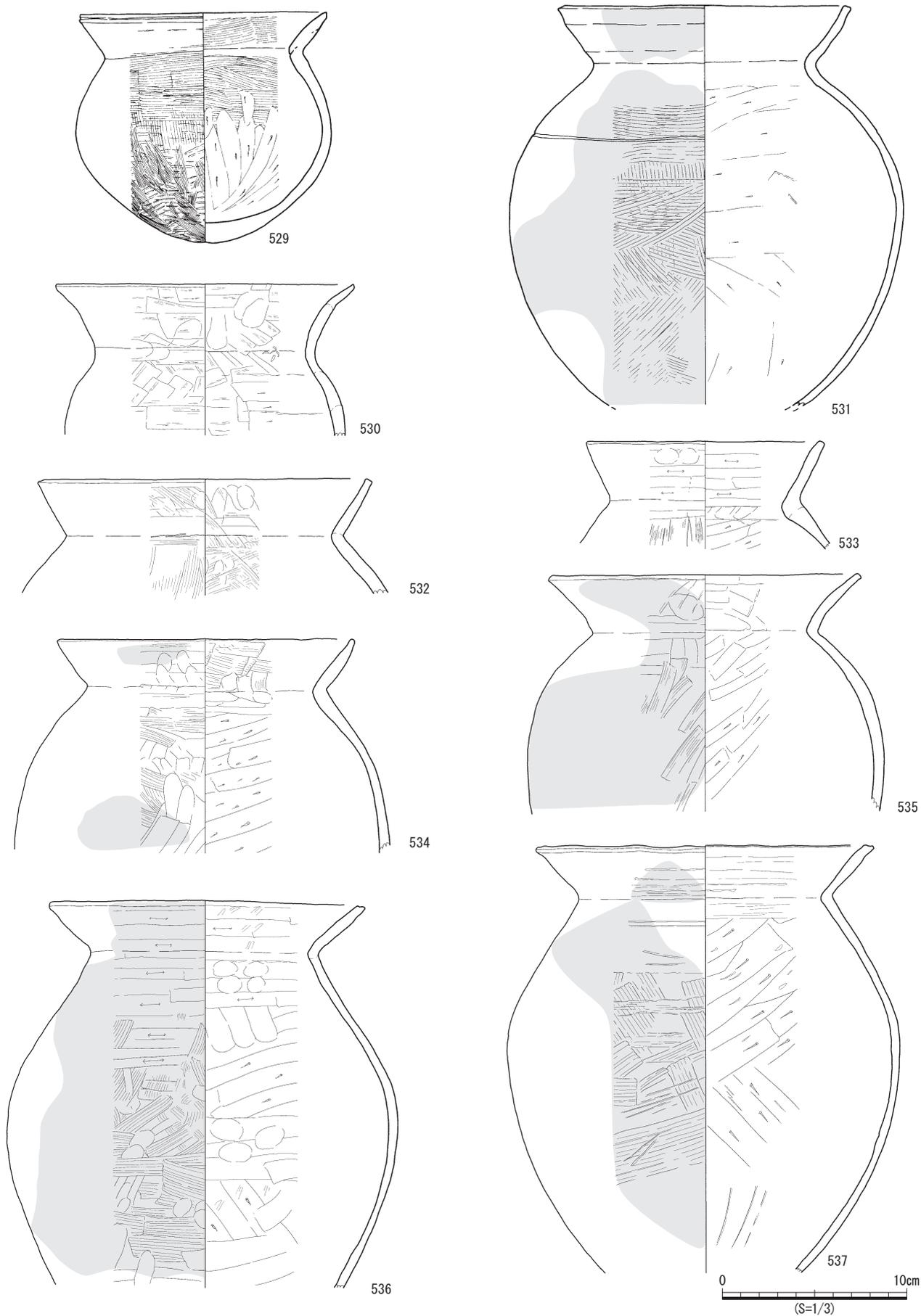
ラス質粒子や長石等の白色鉱物を多く含む胎土で、硬質な仕上がりをなす。526は口径27.8cmで、刷毛目調整を基本とする脚付と見られる。外面に多量の煤状炭化物が付着する。527は口縁部が内弯する甕で、類例が無い。復元口径は30.5cmで、外面口縁部周辺は丁寧にナデ、器壁は厚く、重量のある仕上がりをなす。528はくノ字に外反する短い口縁部の平底の甕で、胴部は丸く膨らむ。外面はヘラケズリの後、胴上部では細い刷毛目、胴下部では粗い刷毛目で調整し、内面はナデや指頭による調整が見られる。特に、底面は、丁寧な指頭痕で厚く被膜される。1mmほどの長石や石英、カクセン石及び火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、器肌は外面がにぶい黄橙10YR、内面が灰黄褐10YRをなす。内面は激しく剥落する。(145図)

丸底甕 (第146・147図529～544)

529は口径13.3cm、高さ12.5cmで、口縁部の一部を欠くがほぼ完形の小型甕で、器壁は厚く、内外とも浅黄7.5Yの器面をなす。内面は刷毛目の後ヘラケズリ、外面はタタキ成形した後、胴部から下位は縦位の刷毛目、胴部から頸部は横位の刷毛目、口縁部は横にナデで仕上げている。長石や石英、カクセン石等に加え2～4mmほどの黒色や赤色の岩粒を含む胎土で、胴部の亀裂穿孔は焼成以前と見られる。530は復元口径16.2cmで、口縁上部が大きく開く傾向を見せ、器壁は薄く、砂粒の多い胎土で、ザラザラな器面を呈している。531はくノ字屈折の口縁で、口縁上部で再度内側に弱く屈折し、口唇部は狭い平坦面をなす。丸底で口径は15.4cm、胴部は上部で丸く膨らむ。口縁部は丁寧に横にナデ、胴部は刷毛目後縦横に工具でナデ、内面はヘラケズリが観察される。器壁の薄さが目立ち、軽量な焼成仕上げを見せる。煤状炭化物が付着する。胎土は、1mmほどの金雲母を含む特徴的なもので、搬入品と判断される。532の口唇部は平坦面で、復元口径17.4cm、内外面とも目の細かい刷毛目調整を実施し、軽量な焼成をなす。にぶい黄橙10YRの白っぽい色調で、破断面はサンドイッチ状である。533は復元口径12.4cmで、外面は刷毛目後ナデ、内面はヘラケズリ主体の調整で器壁は若干厚め。534の口唇部は丸く、わずかに内弯する傾向が見られる。口径15.8cmで、胴部は丸く膨らむ。口縁部は丁寧に横にナデ、胴部は刷毛目後縦横に工具でナデ、内面はヘラケズリで器壁を薄くし、軽量に仕上げる。口縁部や頸部に粘土紐を残す範囲に煤状炭化物が付着する。535は復元口径16.4cmで、口唇部は丸い。外面は刷毛目後ナデ、内面はヘラケズリ調。煤状炭化物が付着する。内外ともにぶい赤褐5YRで、胎土は1～3mmの大粒の長石、カクセン石等の黒色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む。536もくノ字の屈曲口縁で、わずかであるが口縁部が内側に傾く傾向の長胴甕で、胴部内面の繰り返されるヘラケズリからは、器壁の

薄化意識が伺われる。外面は丁寧に刷毛目調整にナデが重ねられ、口縁部周辺では特に丁寧にナデ、口径16.6cmの鶏卵状の長胴に仕上げている。胴上部を中心にほぼ全体に煤状炭化物が付着し、3～4mmの赤色粒や石英を多く含む胎土は、にぶい黄橙10YRの色調を呈している。537は口径18.4cm、高さ23.5cmで、いわゆるくノ字屈曲口縁で器面の一部にタタキ痕を残す。胴部内面はヘラケズリ、外面は刷毛目調整を基本に、頸部から上部は横にナデで仕上げる。肩部から頸部に大部分に煤状炭化物の付着が見られ、カクセン石等及び火山灰性のガラス質粒子によりキラキラな器面を呈し、軽量である。(146図)

538は口縁端部が外反する口縁部11.6cmの甕で、ヘラケズリ等の内面の調整は認められないが長胴の傾向を残し、口縁部には縦方向に刷毛目を残している。539はタタキ痕を持つ甕の頸部資料。煤状炭化物の付着あり。器肌はにぶい褐7.5YR。胎土は1mmほどの赤色粒や火山灰性のガラス質粒子を含む微細なものを使用する。540はくノ字口縁で、口唇部内側に段を持つ。復元口径16.2cmで、内外面とも刷毛目調整である。ほぼ全域に煤状炭化物が付着する。内外ともにぶい黄橙10YRで、破断面はサンドイッチ状を呈す。541は櫛目文を持つ長胴丸底甕で、外面は刷毛目、内面はヘラケズリで、1mm以下の金雲母を胎土に含む。542はタタキ痕を持つ甕の胴部資料である。543はくノ字屈折の口縁で、口唇部は平坦面をなす。丸底と見られる甕は、口径17.2cm、高さ31.2cmの長胴を呈している。外面胴部にはタタキ痕が残され、タタキ後刷毛目後工具ナデが、内面上部で刷毛目、下部で工具ナデが観察される。特に、器壁は薄く、超軽量な仕上げを見せる。胎土に1mm以下の金雲母や赤色粒を含む。544は丸底の資料で、底部を中心に縦方向に工具でナデで仕上げる。カクセン石等黒色鉱物や1mm未満の石英を含む胎土で、器壁は薄い。(147図)



第146図 古墳時代 土器 丸底甕 1

壺 (第148～155図545～572)

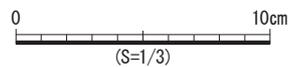
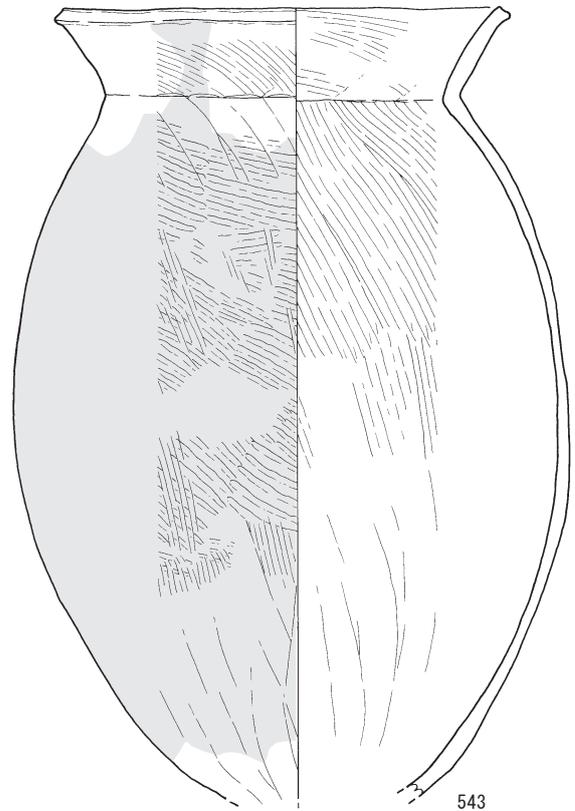
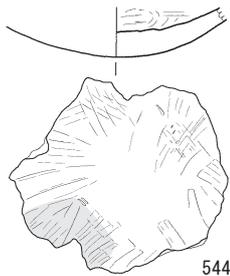
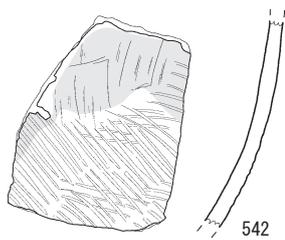
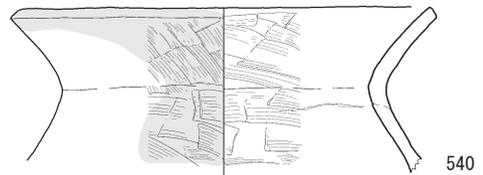
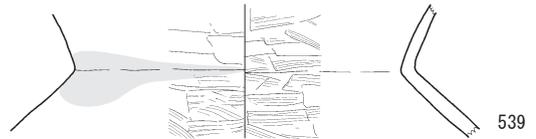
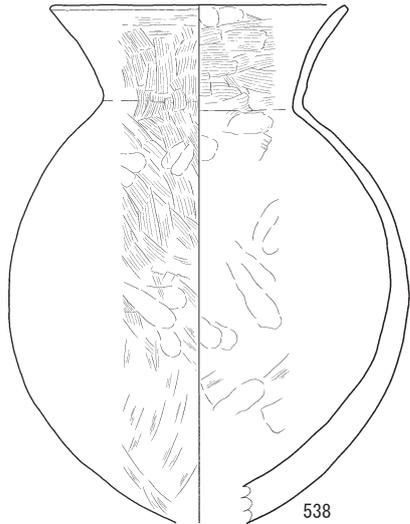
1088・1089は、免田式の長頸壺である。外面には、横位の沈線や重弧文が施されている。

545は胴部が大きく張り出す形状で、胴部に4条の刻目突帯文を持ち、頸部と突帯文間に櫛状工具による波状文を施し、底部はわずかに突出して小さな平底をなす。口径18cm、底径1.8cmで、52.3cmほどの器高が復元される。器面調整は、外面が刷毛目後工具でナデ、内面ではナデや指頭痕が確認できる。胎土は大粒の赤色粒を含む花崗岩質で、淡赤橙2.5YRの特徴的色調である。壺B 2

型式。(148図)

546は口縁部がくノ字に折れて外反するもので、胴上部は丸く膨らむと見られる。壺A 1型式。547の口径は19.2cmで、口縁部上方がラッパ状に弧を描き外反する形状で、胴部3条の無文の三角突帯文は壺B 3型式を踏襲する。一方、胴部は鶏卵状で膨らみは少ない。きめの細かい精選胎土を使用し、刷毛目後、部分的にナデで仕上げる。浅黄橙7.5YRの器肌で器壁は薄い。(149図)

548は口径14.8cm、高さ28cmの完形の壺で、口縁部の立ち上がりは直に近いが上方はラッパ状に弧を描きなが

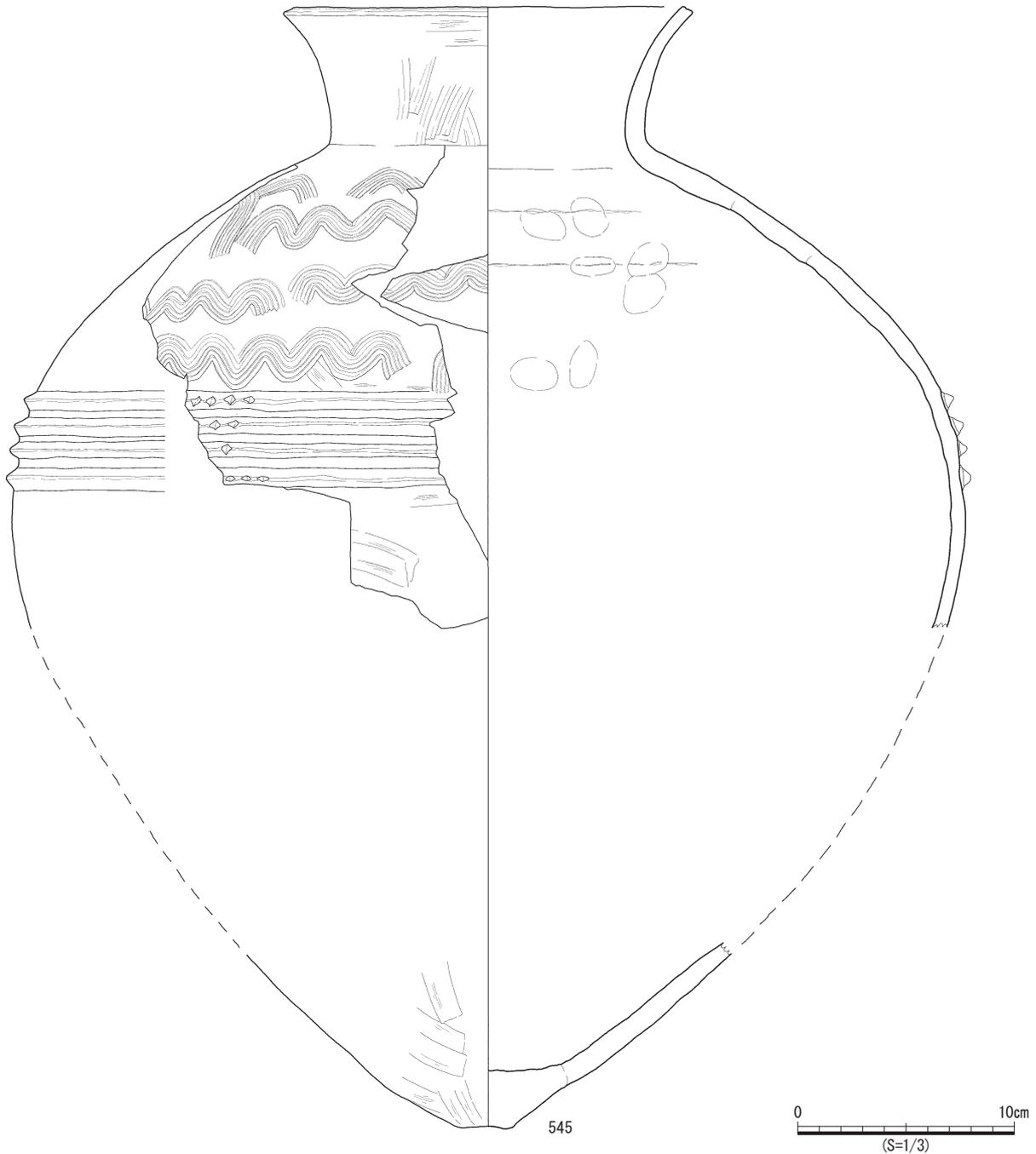


第147図 古墳時代 土器 丸底甕 2

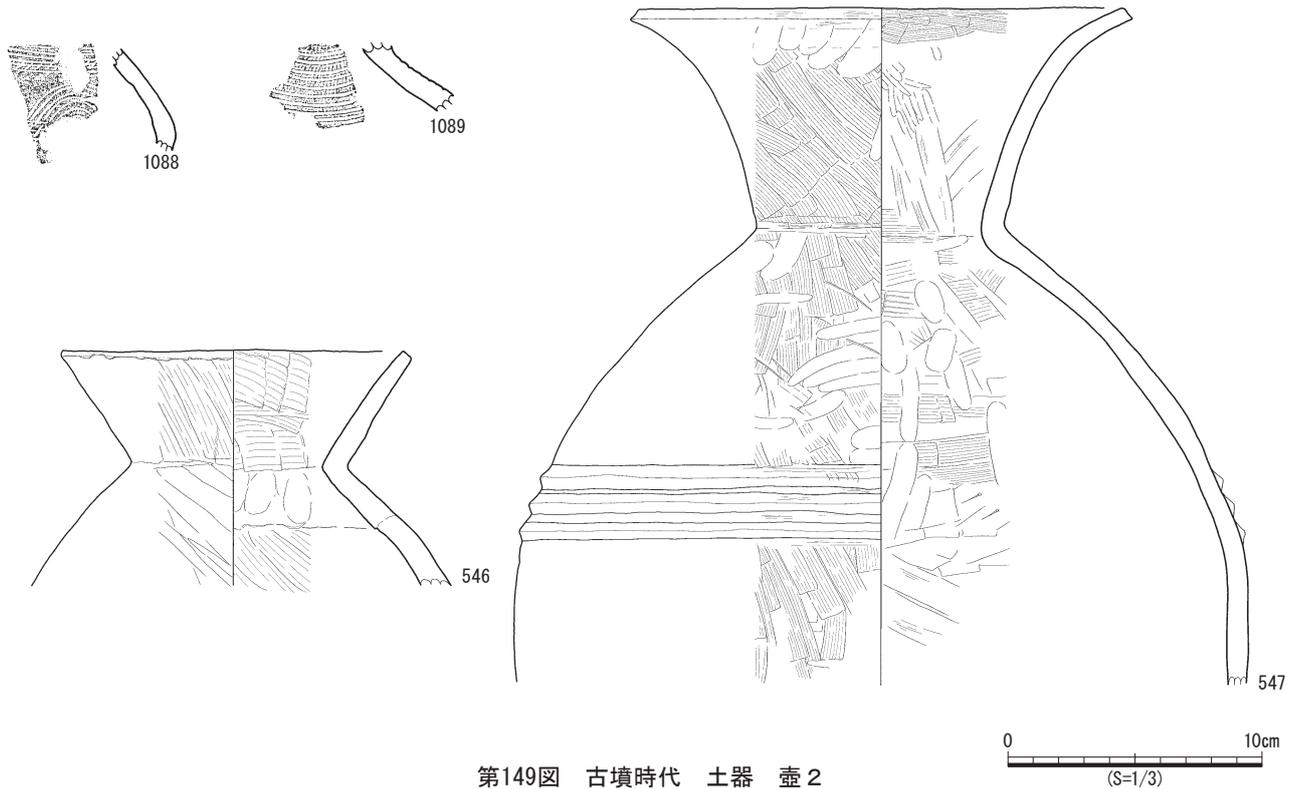
ら外反するもので、外反部は長くなる。胴部の1条の刻目突帯文は細めで、わずかに丸味を帯びた平底で、全体のプロポーションはラグビーボールに近い。外面の刷毛目を始め器面調整は丁寧で、器壁は薄く、超軽量の仕上がりにある。なお、胴上部に窯印様の「↓」を線刻し、「↓」の上位の対峙する位置に並行して向かい合う短沈線が線刻される。点在する黒斑を除く器面は浅黄橙10YRで、内面は灰褐10YRと大きく異なる。胎土は、長石等の白色鉱物やカクセン石等の黒色鉱物に加え、火山灰性のガラス質粒子多く含む。壺B 3型式。549は口径14.4cm、高さ31.4cmの鶏卵状で、器壁の厚さはランダムで、重量

がある。口縁部は指押さえにより緩やかに外反する。肩部下位に粉状圧痕が認められる。(150図)

550は口縁部を欠損する壺で、内底部には刷毛目を残すが、上位は丁寧にナデられる。球形に近い胴部を呈し、突帯文はヘラで刻む。浅黄橙7.5YRの薄い器肌を発色する砂質胎土で、器面はザラザラ感が強い。551は丸く膨らむ壺の胴部で、狭い平底をなす。胎土に1mmほどの石英、長石、カクセン石等黒色鉱物を多量に含み、明赤褐2.5YRを呈している。552は口径14.5cm、高さ30.4cm、底径4.2cmの狭い平底をなす。口唇部は狭い平坦面をなし、鶏卵状に入念に縦方向にケズリ込まれた器壁は薄く、



第148図 古墳時代 土器 壺 1



第149図 古墳時代 土器 壺 2

軽量な仕上がりをなす。なお、内面の屈曲は明瞭な稜線を形成する。また、胎土にカクセン石等や火山灰性のガラス質粒子を多量に含むことから、キラキラな器面を見せる。553は口径13cm、高さ36.5cmで、胴部に1条の無文の三角突帯文を持ち、口縁部は直立気味に外反する長胴壺で、底部は若干尖り気味の丸底をなす。外面はヘラケズリ、内面は丁寧なナデで仕上げている。器壁は薄い重量はあり、浅黄橙7.5YRの器面は胴中央部から底部に大きな黒斑を残す。壺A 3型式。(151図)

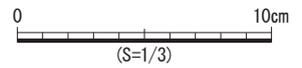
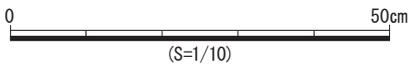
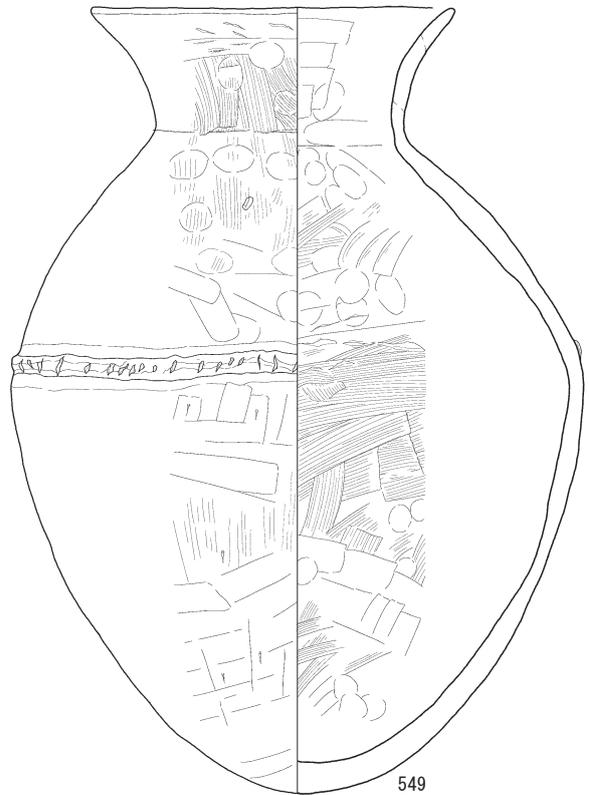
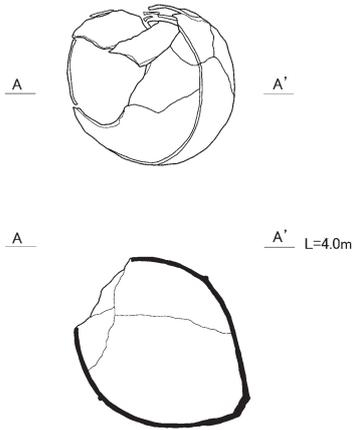
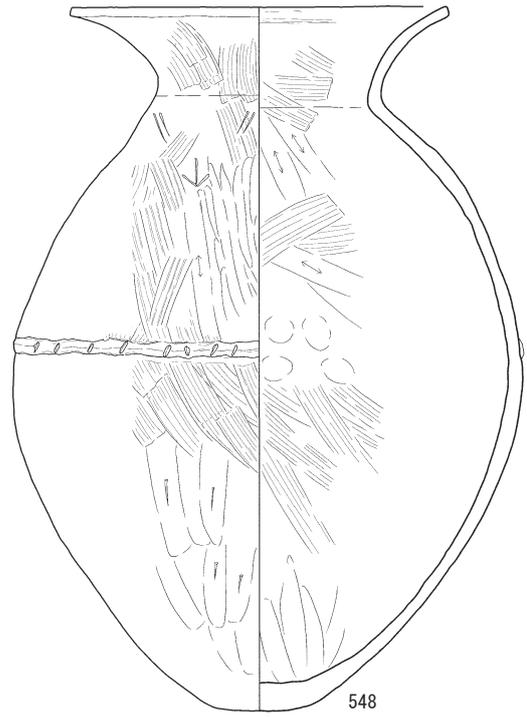
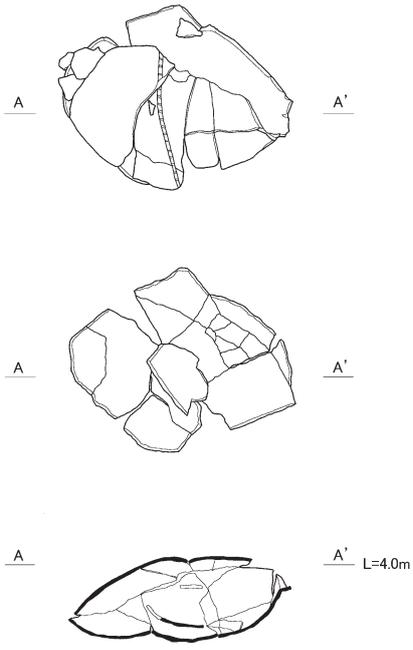
554は頸部に1条、胴部に3条の刻目突帯を持つ大型壺で、径の最大部が35cmほどで、胴部は大きく膨らむ。器壁は厚く重量のある造りで、砂粒が多く含まれることからザラザラな器面である。壺B 3型式。555は口唇部の一部を欠くが、復元口径約18cm、高さ46cm、胴部の最大径35cmで、大きく張る肩部に蒲鋒状の4条の突帯文を貼付け、ヘラ状工具で斜めに一括して刻む。なお、口唇部の欠損状況からは、人為的に打ち欠いだ可能性がある。胎土は微細で、軟質な焼成となり、肩口から底部までの広い範囲で熱破碎による剥落が見られる。壺B 4型式。(152図)

556は胴部の最大径21.8cm、現高27.5cmの鶏卵状で、刻目突帯を胴部の最大部に貼り付ける。基本的に縦方向の刷毛目で、丸底付近が一部工具でナデられる。カクセン石等の黒色鉱物が目立つ胎土で、器壁は厚く重量がある。なお、器壁の半分ほど度が剥落することから、相当期間露出していた可能性がある。557は口径14.5cmで、上部では刷毛目、下部ではヘラケズリ後工具ナデが見ら

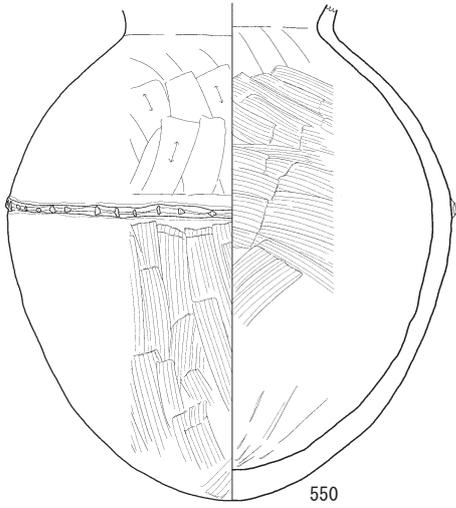
れ、軽量な仕上がりをなす。2mmほどのカクセン石と1mmほどの長石、石英が主体の胎土で、外は橙7.5YR、内はぶい黄橙10YRを呈す。壺B 3型式。558の復元口径は12cm、高さ29.5cmで、口縁部はほぼ直線的にくノ字に外反し、胴部最大径は24.5cmと大きく膨らむ。両面とも密な刷毛目調整で、浅黄橙7.5YRの器肌をなし、胎土には石英等のガラス質粒子を殆ど含んでいない。壺A 1型式。559の口径は11.6cm、高さ34.5cmのほぼ完形で、器壁は厚く、重量のある仕上がりをなす。口縁部の縦方向の刷毛目や胴部から底部のヘラケズリ、内面の刷毛目や内底面の指押さえも明瞭に残される。外面がにぶい橙7.5YR、内面が褐灰7.5YRの器肌で、石英や輝石を多く含む胎土であり、キラキラな器面を呈す。ザラザラ感は強い。中津野式新段階。(153図)

560は最大径33.2cmの鶏卵状の胴部で、肩部に1条の刻目突帯文を持つ。1mm以下の長石、石英、カクセン石を主体とした胎土で、外面は粗い刷毛目後工具でナデ、煤状炭化物が付着し、下半部では熱破碎と見られる剥離痕が見られる。壺A 3型式または壺B 4型式。(154図)

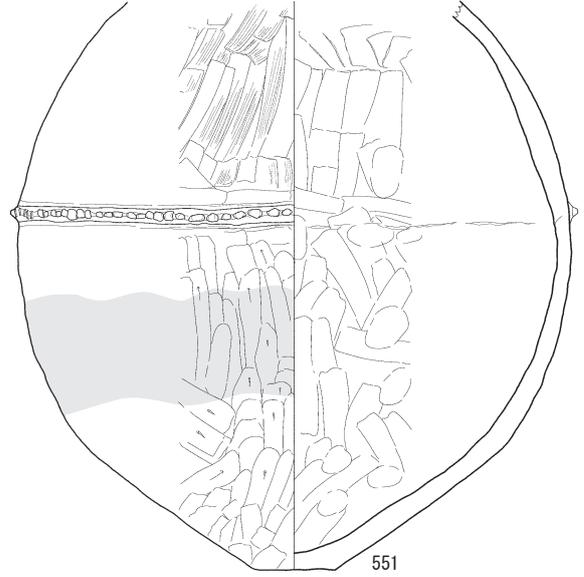
561～572は、いずれも壺の肩部の粘土の継ぎ目で取り外されていることから、これら口縁部は器台に転用したと判断した。561はくノ字に外反する大型の壺の口縁部で口唇部は凹む。口径は16.7cmである。壺A 2型式または壺B 3型式。562の外面は刷毛目調整を顕著に残すもので、肩部は粘土の継ぎ目で取り外される。口径は18cmで、きめの細かい精選胎土を使用する。壺B 3型式。563、564、565も器台転用品で、肩部との取り外し



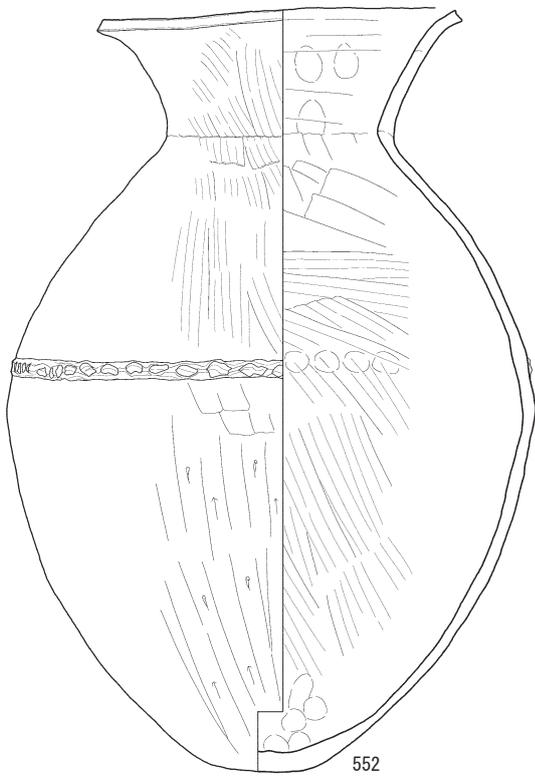
第150図 古墳時代 土器出土状況図 壺3



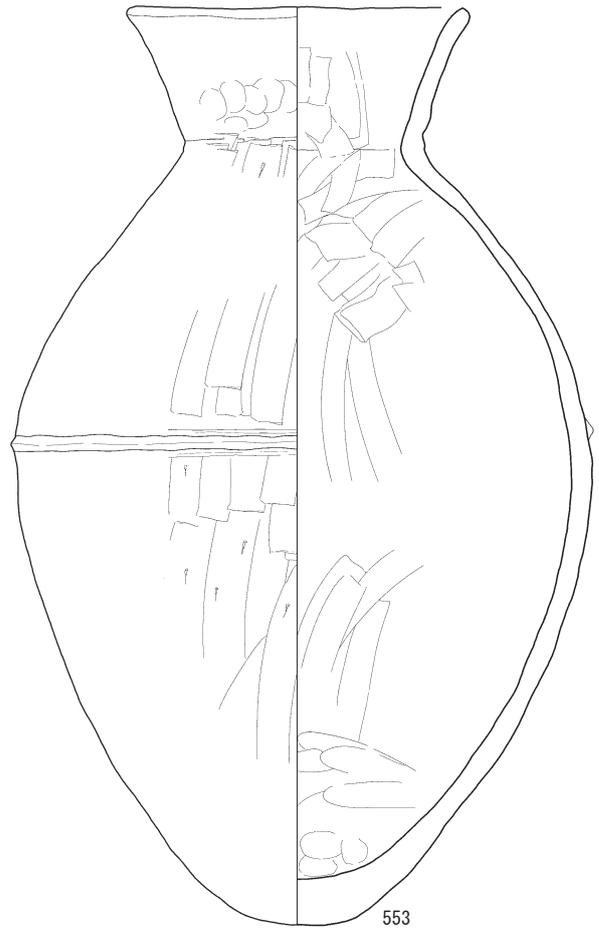
550



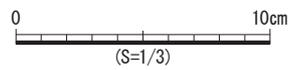
551



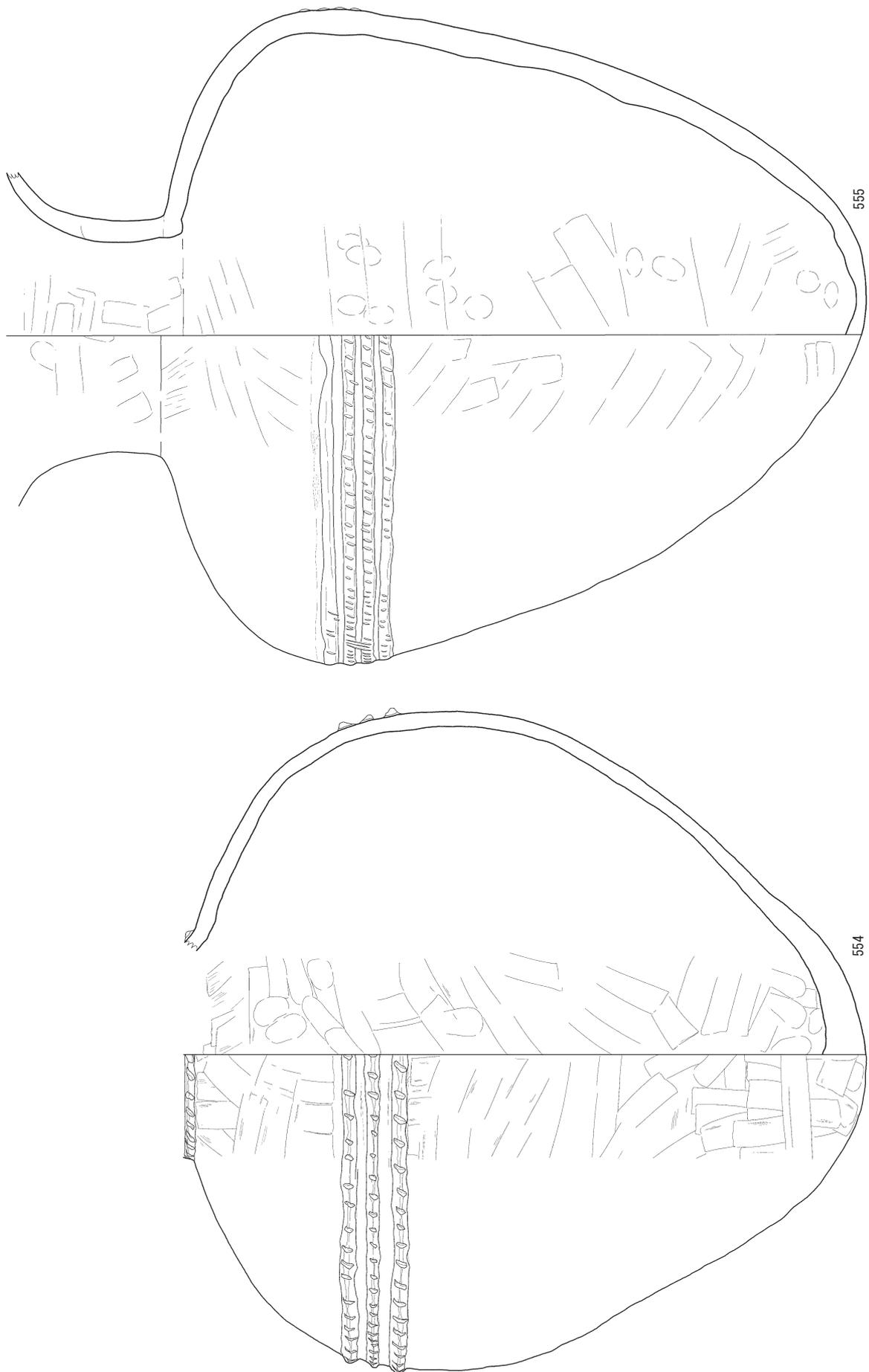
552



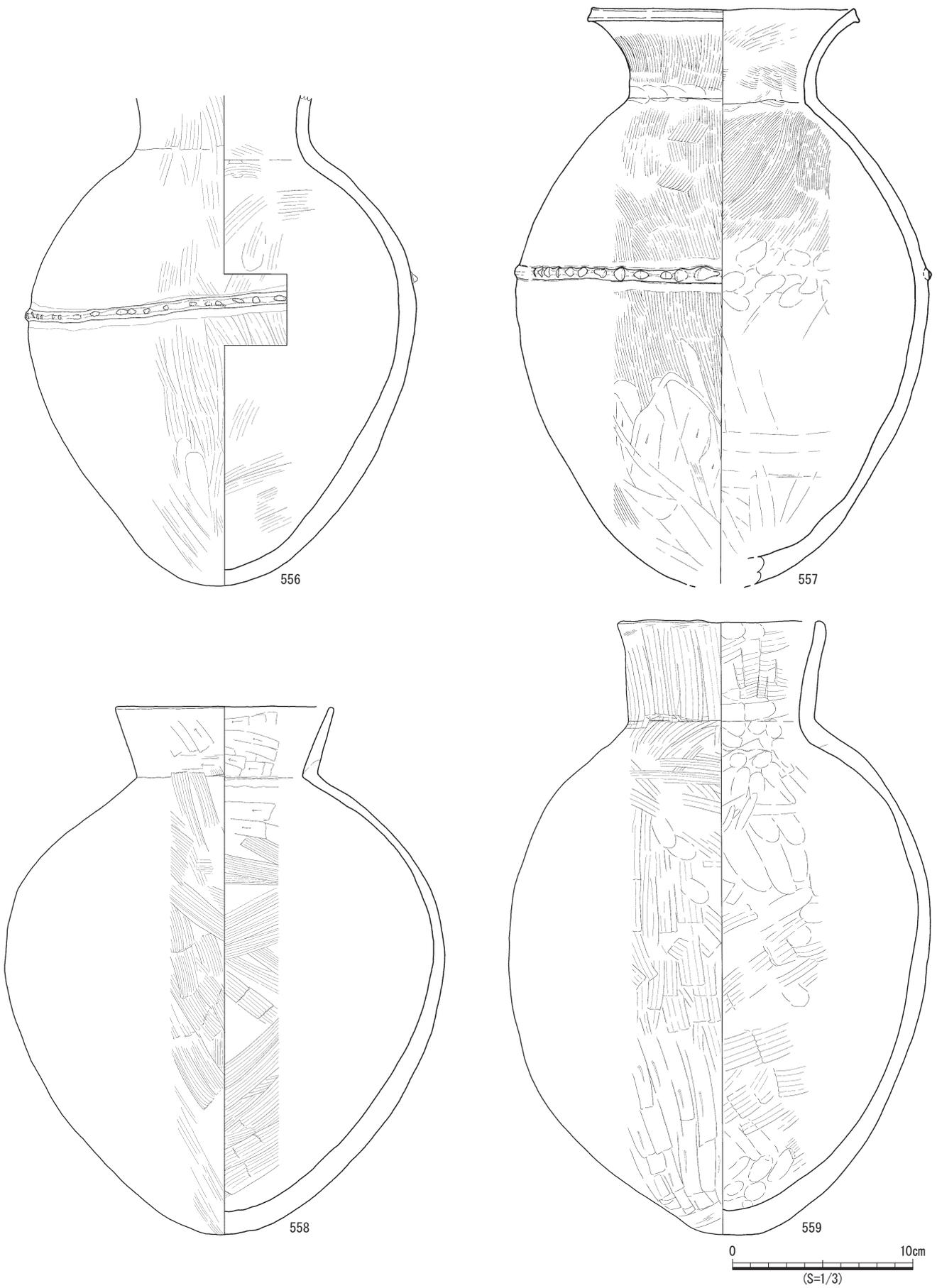
553



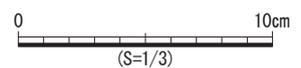
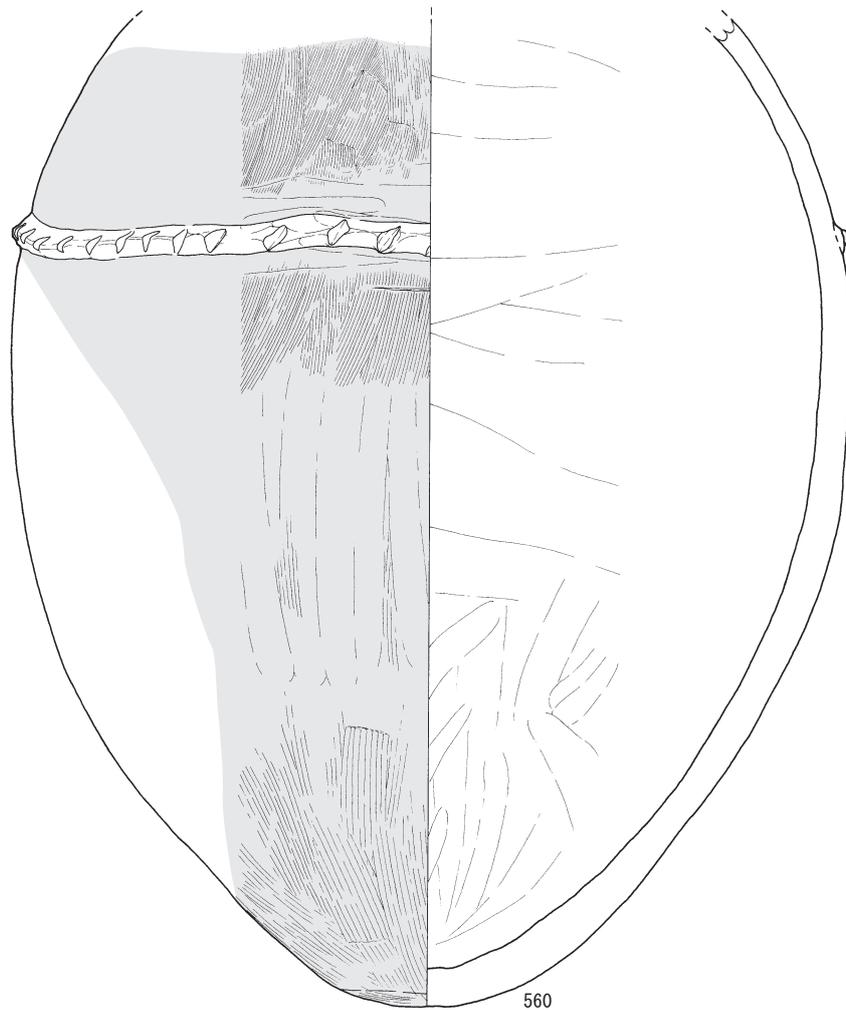
第151図 古墳時代 土器 壺 4



第152図 古墳時代 土器 壺 5

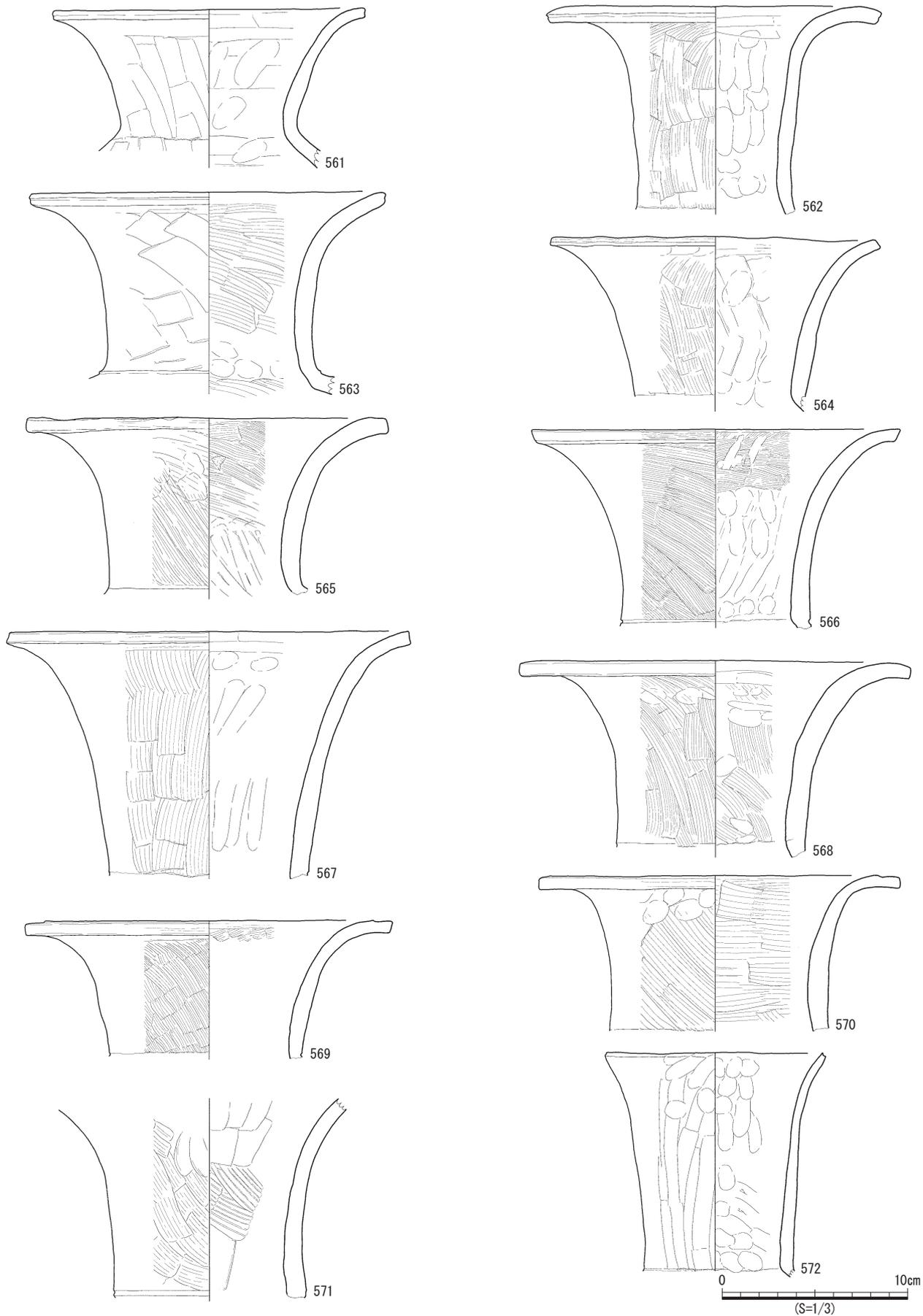


第153図 古墳時代 土器 壺6



第154図 古墳時代 土器 壺 7

は粘土の継ぎ目で行い、二次調整を加えて接地面の作出を行っている。565の口径は19.1cm、きめの細かい精選胎土を使用し、にぶい橙5YRを呈す。壺B 3型式。566の口径は19.9cm、きめの細かい精選胎土を使用し、浅黄橙7.5YRを呈す。567の口径は21.5cm、火山灰性のガラス質粒子を含む精選胎土を使用する。橙5YRを呈す。568の口径は21cm、きめの細かい精選胎土を使用し、橙2.5YRを呈す。壺B 3型式。569は口径19.8cm、砂質性の強い胎土を使用、橙5YR。570は器台転用品。口径19cm、きめの細かい精選胎土を使用し、浅黄橙7.5YRを呈す。571の口縁端部は欠損する。肩部との取り外しは粘土の継ぎ目で行っている。きめの細かい精選胎土を使用し、にぶい橙5YRを呈す。壺B 3型式。572は直行する形状から、長頸壺が想定される。口径は11.5cmで、きめの細かい精選胎土を使用する。浅黄橙7.5YRを呈す。(155図)



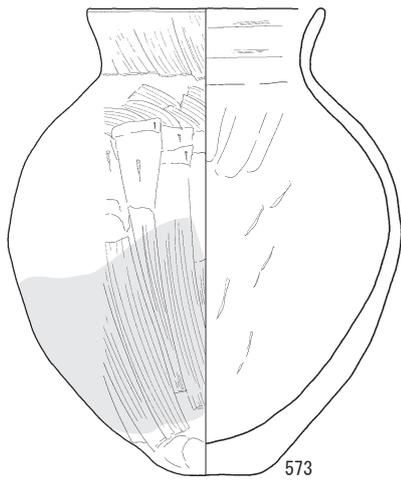
第155図 古墳時代 土器 壺 8

小型壺（丸底壺）（第156・157図573～600）

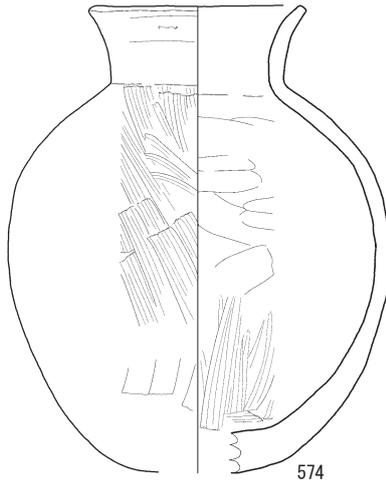
573の口径は9.2cm、高さ18.6cmで、狭い平坦な接地面を持つが、基本的には鶏卵状の胴部を持つ丸底壺と見られる。刷毛目後に縦方向のヘラケズリ調整を重ねたものである。やや大粒の赤色粒を含む胎土で、重量があり、橙5YRの器肌を呈している。574は復元口径8.2cm、高さ18.5cmで、底部が欠損するが平底の可能性が高い。総じて器壁は厚く、中でも底部が厚い。口縁部形状から壺A 2型式または壺C 4型式と分類した。2～5mmの岩粒を含む胎土を使用している。575は口径12.4cm、高さ22cmほどで、総じて器壁は厚く、重量のある仕上がりをなす。器面調整の刷毛目やヘラケズリ、口縁部の工具ナデの押さえも明瞭に残される。にぶい橙7.5YRの器肌であるが、底部破片が褐灰7.5YRに変色する。内底面の指ナデは丁寧で、外面との落差は大きい。長石等の白色鉱物の多い胎土で、底部付近のザラザラ感強い。576は器壁が厚く、重量のある短頸の平底壺で、碎片化は口縁部から底部方向への分割で進行し、その分割ラインを挟み、鑿状の切り込み痕が残される。切り込み痕の切刃幅は16mmほどで、右に2か所、左に8か所、さらにその奥にも2か所が確認され、碎片が意図的に行われた可能性を示している。577は復元口径9cm、高さ14cmで、火山灰性ガラス質粒子を多量に含む細かい胎土を使用し、器壁は薄く、内面を横方向、外面を縦方向に仕上げている。578の口径は4.8cm、高さ13.6cmと口径は小さくなるが、579と同種の丸底壺と見られる。赤色粒を含む胎土で、浅黄橙10YRの器肌を呈している。579は口径8cm、高さ11.7cmほどの丸底壺と見られるが、接地面は平坦面を形成する。580は長胴で、器壁は厚く、硬質で重量のある仕上がりをなす。胴部は幅の狭い工具で縦方向のヘラケズリを重ね、頸部付近では横方向、底部では斜めに工具でナデて仕上げている。特に、接地面付近の器壁は厚く、器面調整に手こずった痕跡が残される。長石主体の白色粒子を多く含み、やや大粒の赤色粒も確認でき、破断面は中央部の灰黒色を挟んで、サンドイッチ状をなす。581は直行する口縁部と胴部に刻目突帯文を持つもので、口径7.8cm、高さ11cmが復元される。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土で、赤褐2.5YRと赤い。582は復元口径9.6cmで、短い口縁部は直行する。白色岩粒やカクセン石等の黒色鉱物を多量に含む細かい胎土で、器壁は厚く、外面は工具ナデで丁寧に仕上げている。583の口径は10.7cm、高さ15.4cmほどで、接地面は不安定な平坦面を形成する。1～2mmほどの白色鉱物を含む胎土で、明赤褐2.5YRと赤く発色し、特に、底部の器壁は厚い。（156図）

584～588、590～593はその特徴から逆円錐台形と称される。584は刷毛目後、ヘラケズリやヘラミガキされた丸底壺で、胴部の膨らみは偏球状に近い。硬質な仕上がりをなすもので、火山灰性ガラス質粒子を多量に

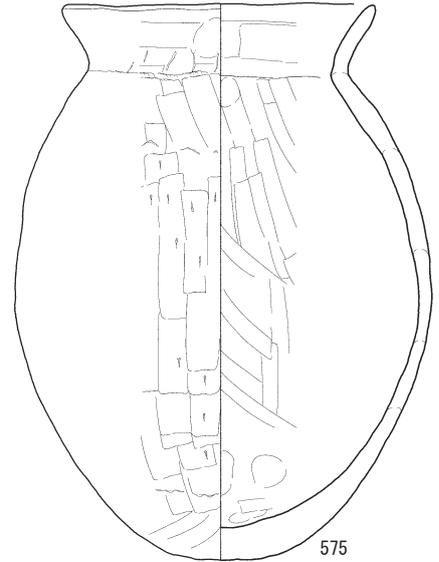
含む胎土は、キラキラな器面とにぶい黄橙10YRを呈している。また、黒斑の範囲が大きい。585の外面は刷毛目後、ヘラケズリやヘラミガキされた丸底壺で、胴部の膨らみはより偏球状を呈している。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土は584と酷似するが、にぶい橙5YRと色調で異なる。586は口径8cm、高さ13cmで、刷毛目後、ヘラケズリやヘラミガキされ、胴部は球状を呈している。石英や火山灰性ガラス質粒子、カクセン石等黒色鉱物を多量に含む胎土で、器壁は厚く重量があり、にぶい橙5YRの色調である。587は口径10.1cm、高さ12.8cmの完形の小型鉢で、頸部は短く丸底で、器壁は厚く重量がある。外面はヘラケズリに横方向の工具ナデや指頭痕が、内面は刷毛目の後に工具ナデや指頭痕が加えられる。1mm以下の長石、石英を主とする胎土で、橙2.5YRと赤い器肌である。588は胴部が大きく膨らむもので、大粒の赤色粒や多量の白色鉱物、カクセン石等黒色鉱物を含む胎土を使用している。淡橙5YRの色調で、器壁は厚く、重量がある。589の復元口径は11cm、高さ9.8cmで、外面及び内面口縁部は丁寧にナデられ光沢を残している。中でも、内面口縁部には赤い部分が確認され、赤色顔料を塗布した可能性もある。器壁が厚く、口縁部は短く、蕪形の胴部で底部は丸く、白色鉱物を中心とした胎土を使用し、重量のある仕上がりをなす。590は蕪状に胴部が膨らむもので、底部は若干尖り気味の仕上げとなる。3mmほどの赤色粒や白色鉱物、火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土で、器面はザラザラ感が強く、外面は赤褐2.5YRと赤い。591は20.4cmほどの最大径をなす。592復元口径7.4cm、高さ10.6cm、胴部の最大径が12.2cmほどで、口縁部は直行し、胴部は偏球形状に膨らむ。外面は粗い刷毛目をそのまま残し、厚い破断面は灰白5YRを橙5YRでサンドイッチする。593はわずかに口縁部を欠損し、器壁が厚く手捏感の強い小型丸底で、口縁部は短く外反し、胴部形状は蕪形の胴部に尖り気味の底部を持つ。破断面はサンドイッチ状で、白色鉱物を中心に砂質性の高い胎土を使用している。594は規格の大きな刷毛目を用いたもので、底部は貼り付けた円盤状の粘土板をヘラでケズリ、器壁は厚く、重量のある仕上げである。595は火山灰性ガラス質粒子を多量に含むきめの細かい精選された胎土を使用し、橙5YRの色調をなす。596は丁寧にナデ仕上げた胴部の並行する沈線文間に、上位から斜線、波状、斜格子の各文様を充填する。597は器壁の厚い手捏感の強い小型丸底で、口縁部は袋状で、全体はキャリパー状の形状をなす。復元口径は7.8cm、高さ8cmほどで平底と見られ、両面にタール状の付着物が点在する。破断面は、にぶい橙7.5YRでサンドイッチされる。598は丹塗りされた可能性のある小型壺で、丁寧にミガキ調整で器面は光沢を保ち、薄い器壁の破断面はサンドイッチ状を呈している。600は口径8.5cm、高さ10.8cm、底径2.9cmで、調整は刷毛目上



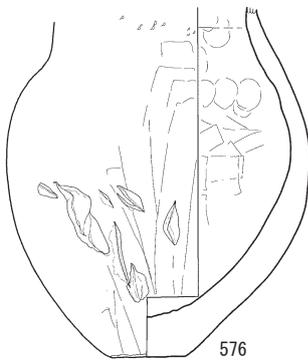
573



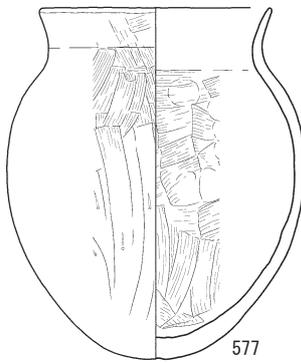
574



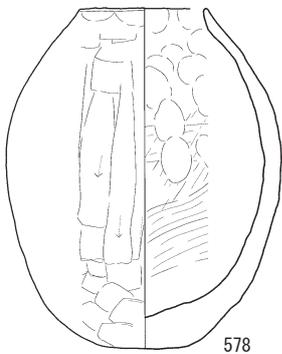
575



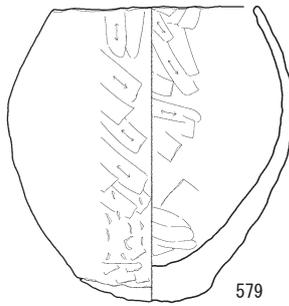
576



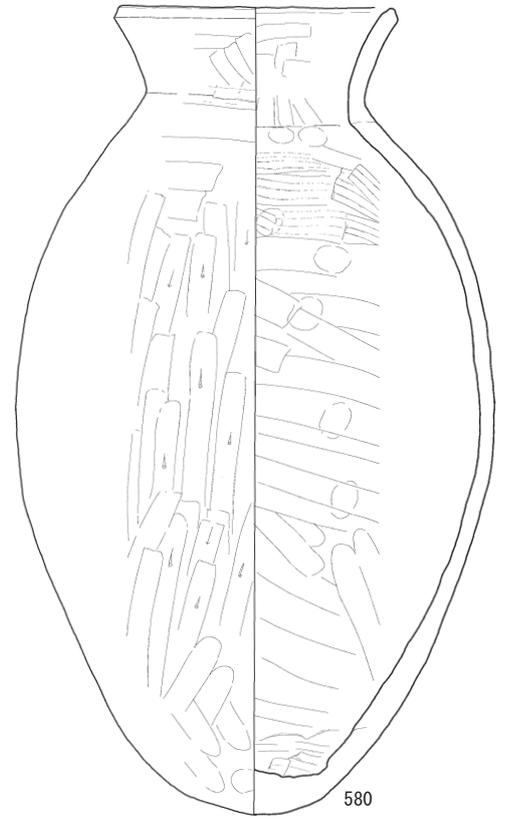
577



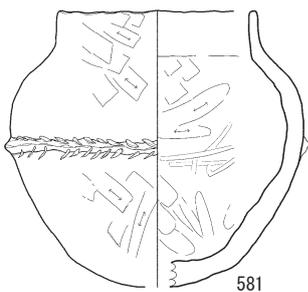
578



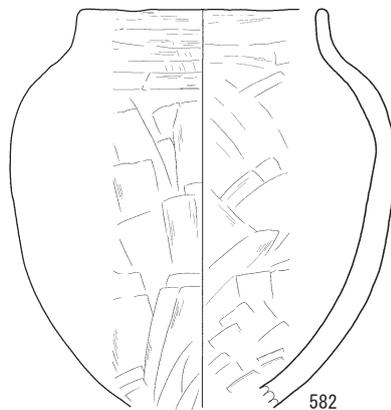
579



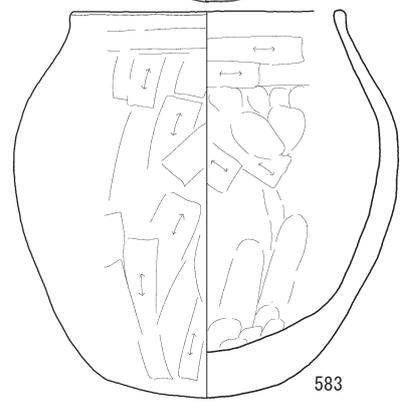
580



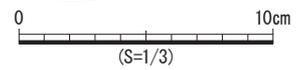
581



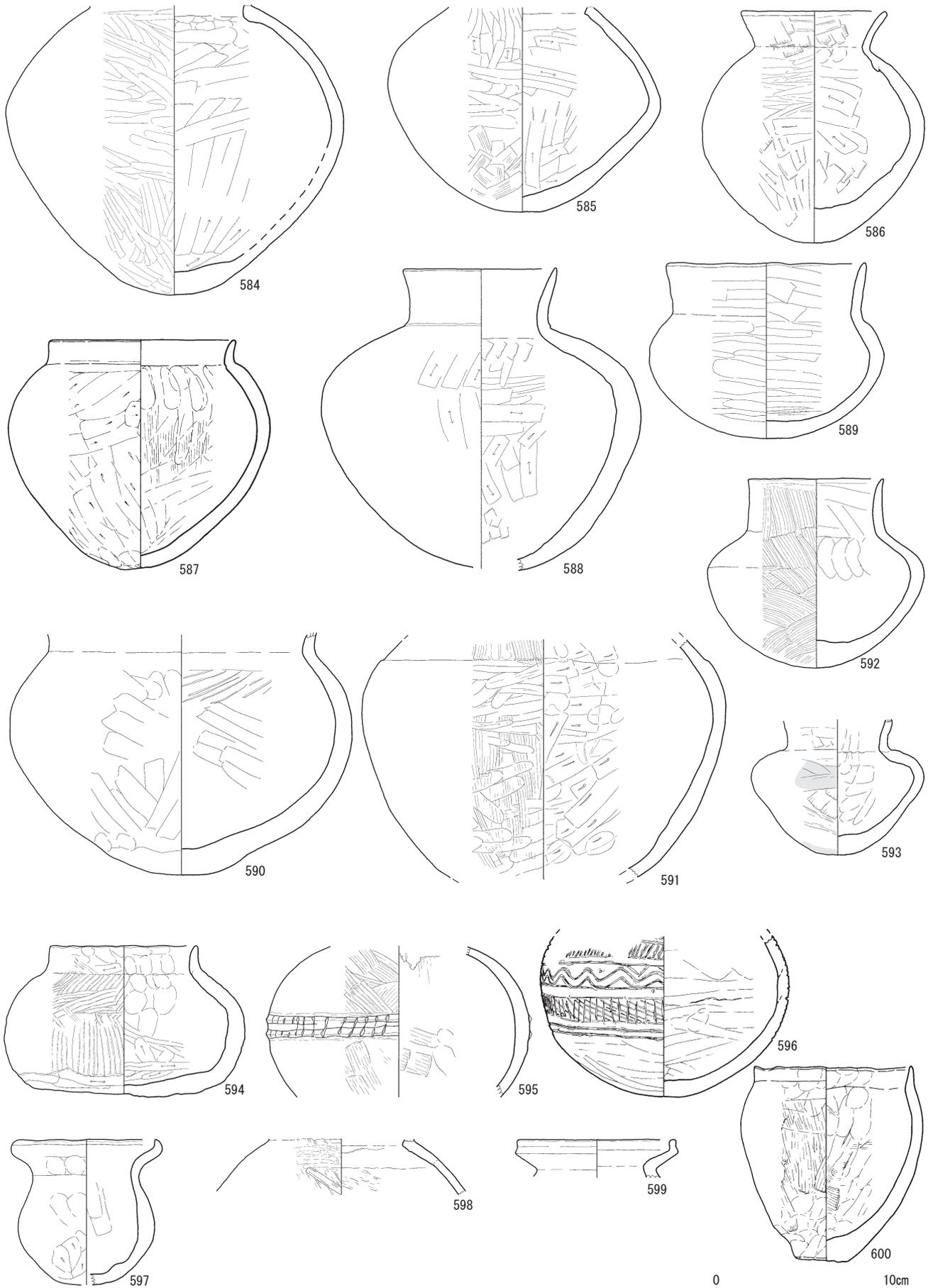
582



583



第156図 古墳時代 土器 丸底壺・小型丸底壺 1



第157図 古墳時代 土器 丸底壺・小型丸底壺 2

にナデや指頭痕が加えられ、口唇部は波状で尖り気味に仕上げている。内外とも黄褐色を呈し、3～5mmほどの岩粒を含んでいるが、長石や石英の火山灰性のガラス質粒子により、微細でキラキラな器面を見せる。総じて器壁は厚く、特に底部は厚く重量のある仕上がりである。(157図)

蓋 (第158図601～610)

蓋は、ドーム状の身部と大きく外側に外反する口縁部からなるもので、器高は低く把手を設けないものをA類とし、身部と口縁部の区分が無く、笠状に直線的に開く形状で、天井部に逆台形状の把手を持つものをB類として二分した。

601はドーム状の身部と、下方に緩やかに外反する口縁部で構成するもので、煤状炭化物の付着は認められないが蓋に区分している。無文の突帯文を1条施し、火山灰性のガラス質粒子多く含む胎土を使用している。602は口径28.2cm、高さ10.5cmの蓋で、ドーム状の身部と、外反する口縁部で構成する。外面はヘラケズリに工具ナデ、内面は刷毛目にナデを重ねて調整し、胴部との境は刷毛目のカキアゲが残される。煤状炭化物の付着は認められず、口縁部の器壁は薄い、天井部では厚くなる。胎土は火山灰性ガラス質粒子を多量に含み、淡黄橙7.5YRの色調をなす。603は器高の高い蓋で、天井部はドーム状をなし、口縁部は緩やかに外に開くと見られ、把手を備える。外面と内面口縁部は、粗い刷毛目調整である。内面天井部は丁寧にナデで仕上げ、その対比が明瞭である。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土は、器壁が厚く、重量のある仕上がりを見せる。脚付鉢の転用品と見られる。604は台付鉢をひっくり返した形状の蓋で、口径22.6cm、高さ13.4cmで、高台6.6cmの把手を持つ。身部は天井の高いドーム状で、口縁部へは外反しながらスムーズに移行する。両面とも粗い刷毛目調整で、内面口縁部には煤状炭化物の付着が見られる。器壁は厚く、重量のある仕上がりである。605は台形状の把手を持つ器高の高い蓋で、天井部はドーム状で、口縁部は緩やかに外に開くと見られる。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで形成した後、ミガキ調整を重ねている。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土は、やや大粒の岩粒も含み、内面口縁部と外面に煤状炭化物が付着している。なお、外面には、煮炊き時の吹きこぼれに起因すると見られる煤状炭化物の消失が確認できる。器壁が厚く、重量のある仕上がりを見せる。脚付鉢の転用品。606は器高の高い蓋で、口縁部は緩やかに長く外に開く。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで形成した後、工具ナデ調整を重ねている。胎土は火山灰性ガラス質粒子を多量に含み、外面が橙5YR、内面が黒褐5YRで、内面口縁部に煤状炭化物が残される。脚付鉢の転用品。607は口径28cm、高さ12.5cm、把手部径8.5cmの完形品で、外面は

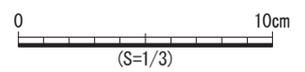
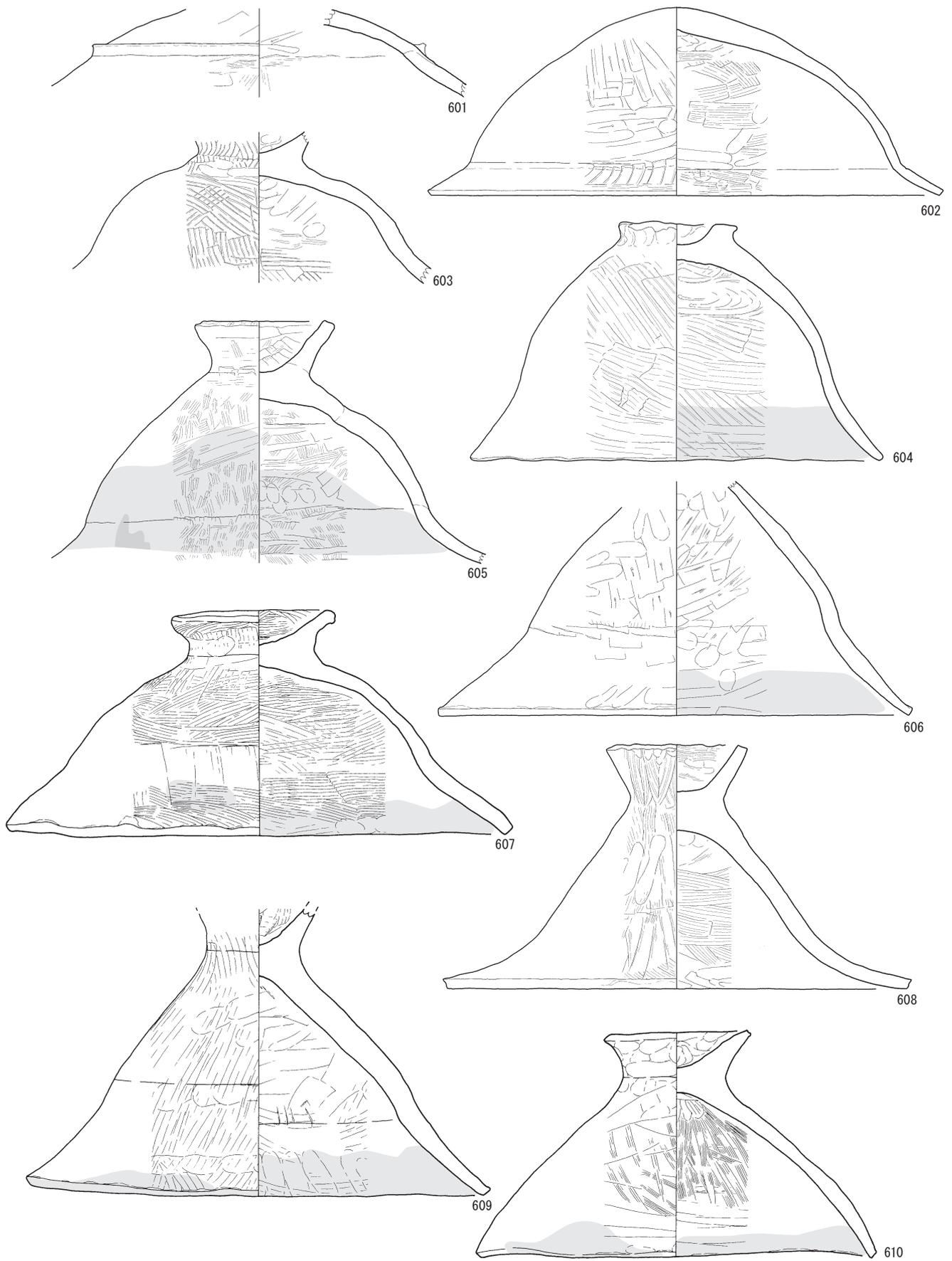
縦横の刷毛目、内面は横位の刷毛目調整を基本とし、両面裾部は煤状炭化物の付着が顕著に見られる。608は蓋B類とした。内外とも刷毛目主体の調整で、外面は工具ナデを重ね、内面は裾部周辺をナデで仕上げている。白色鉱物の目立つ胎土で、多量の火山灰性のガラス質粒子が含まれる。609はつまみ端部をわずかに欠損する蓋で、口径25cm、高さ16cmほどである。内面裾部に煤状炭化物が帯状に付着する。610は口径21.5cm、高さ12.8cm、把手部径7.5cmの完形品で、内外面とも裾部が黒斑し、煤状炭化物の付着も認められる。なお、内面が工具ナデ後丁寧にナデで調整することから、台付鉢の転用も想定される。胎土は、火山灰性のガラス質粒子を含む。(158図)

鉢 (第159～163図611～692)

口径が器高を越すものを取り扱い、広口で大型の鉢Aと小型の鉢Bに大別できる。鉢Bについては、底部が丸底や平底の鉢B1と、脚部を構成する鉢B2に細分している。なお、鉢B2では、脚の短い一群630・637と脚の長い一群623・624が存在している。

611は口径15cm、高さ9.7cm、底径7cmの完形の脚付で、口縁端部はくノ字に外反する。脚部から胴部の大部分は刷毛目で、底端部と口縁部は横にナデで仕上げている。長石や石英、赤色粒、カクセン石、火山灰性のガラス質粒子等の白色鉱物を多量に含むキラキラな器面は、ザラザラ感が強い砂質胎土である。612は脚の長いタイプで、脚端部を欠損する。613の器壁は薄く、端正な仕上がりなすもので、赤色塗彩された可能性がある。外面のヘラケズリでは、3mmほどの岩粒をはじめ、長石や石英、カクセン石等黒色鉱物を含むことが観察される。615の口径は25.4cm、高さ18.1cm、底径10.4cmのほぼ完形で、外面は縦方向の刷毛目調整が特徴的である。胎土は赤色粒や粗い砂粒を含み、橙7.5YRで、内面口縁端部に煤状炭化物が付着し、内面には黒斑も残る。616は復元口径20.8cm、高さ9cmの鉢で、石英、赤色粒や白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、にぶい橙7.5YRをなす。617は口縁部が短く外に開くもので、底部等については不明である。618は脚端部が欠損するもので、口縁部は刷毛目のカキアゲで形成し、胴下部と脚部にも刷毛目が残される。鉢底面には、補強粘土痕が認められる。復元口径は26.3cm。(159図)

619の口唇部は狭い平坦面で、外面は丁寧にナデで仕上げる。口径17.1cm、高さ16.8cm、底径8.6cm。内外面の同一箇所に黒斑も確認できる。胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。620は平坦な口唇部で、外面の刷毛目はそのまま残される。口径21.2cm、高さ18.7cm、底径8.9cm。煤状炭化物が付着し、小さな黒斑も確認できる。621は口径24.5cmで、碗状の台付鉢で、両面とも粗い刷毛目調整で、口唇部下に7cmの帯状に煤状炭化物が付着している。器壁は厚く、重量のある仕上がりで

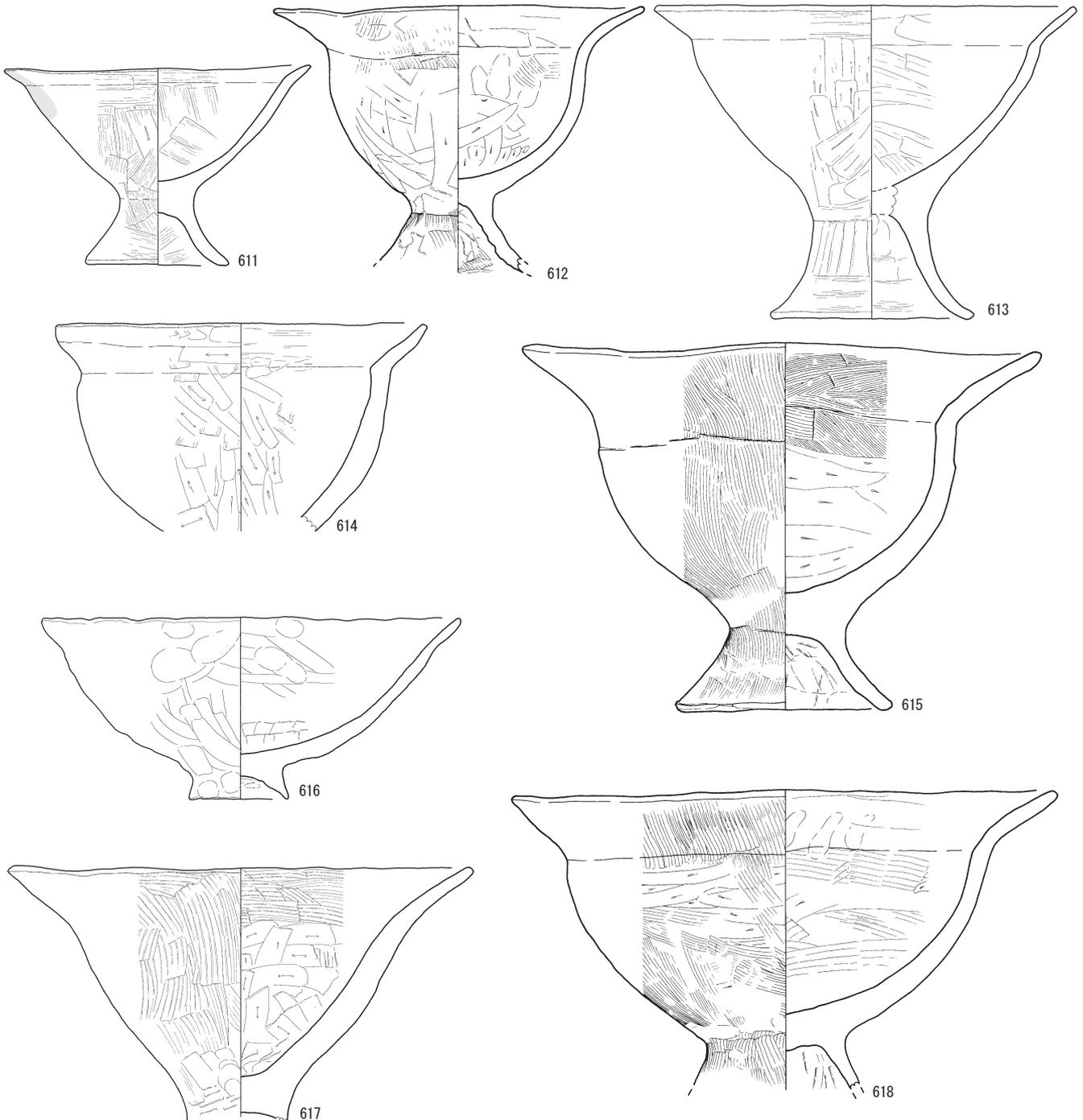


第158図 古墳時代 土器 蓋

ある。622は平坦な口唇部で、外面上部は横方向、下部は縦方向のヘラケズリがそのまま残される。復元口径21.7cm高さ20.5cm、底径11.7cmで鉢底面は平坦面をなす。外面に黒斑が点在する。胎土の火山灰性のガラス質粒子が目立つ。(160図)

623は碗形の鉢で、脚部は長く、脚端部が外反する。口径12.9cm、高さ14.5cmで、口径が底部径を勝る。赤色粒と白色鉱物が目立つ胎土で、外面は明赤褐2.5YRで内面は黒く仕上げている。624は口径と底径が一致する形状で、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使

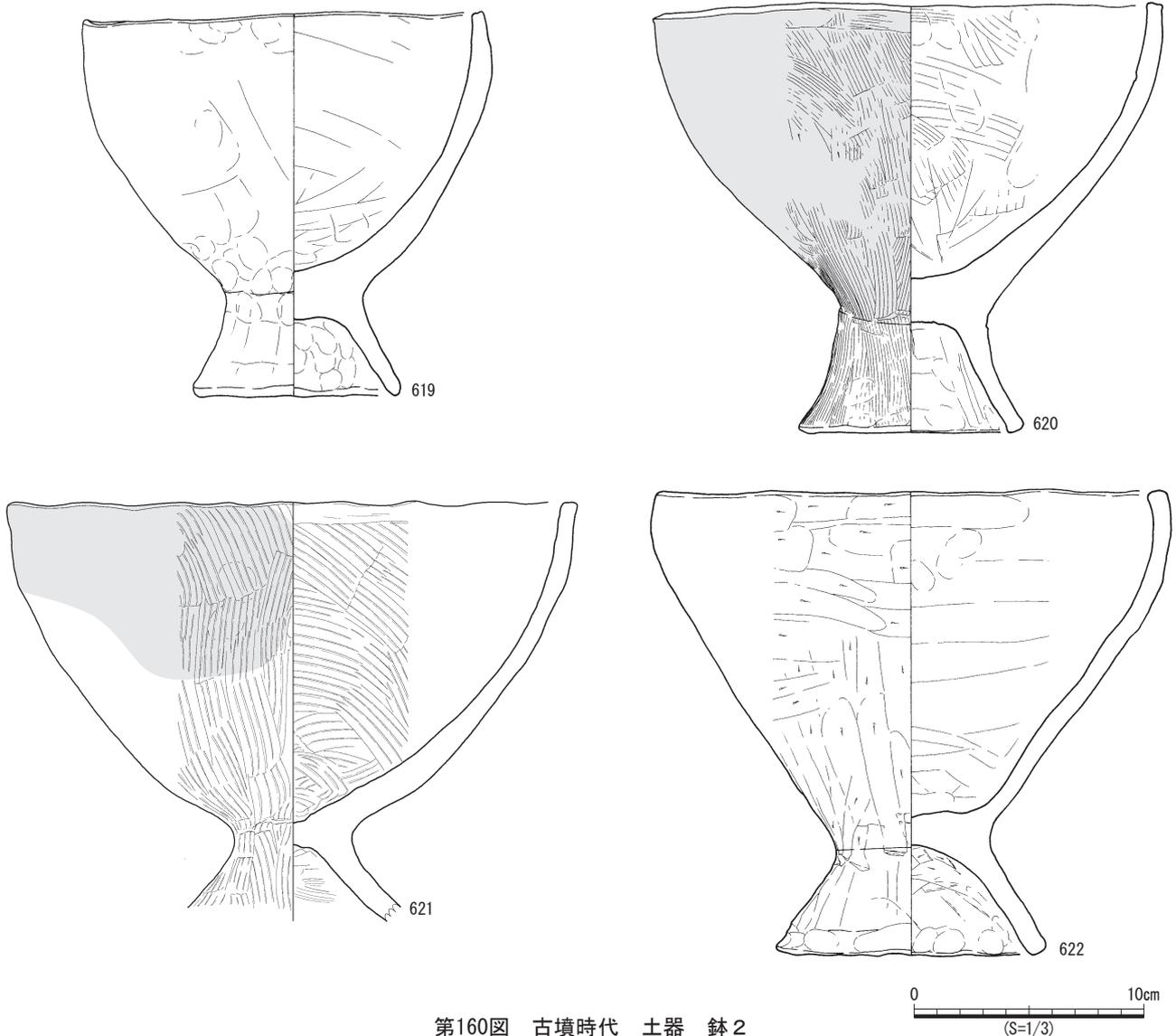
用し、にぶい黄橙10YRに仕上げる。口径11.9cm、高さ11.7cm。625の基本的形状は624と同一であり、口径と底径が一致する。にぶい黄橙10YRの器肌で重量のある仕上がりをなす。口径11cm、高さ11.1cm。626は口径11.4cm、中央部の高さ10.1cm、底径は7.9cmの小型台付鉢で、口唇部は尖り気味に立ち上がり、脚端部は外に開き、内面天井部は丸くなる。外面は丁寧な刷毛目で調整されるが、縦方向の小さなひび割れが残される。総じて器壁は薄く、丁寧な仕上がりを見せ、軽量である。627は内外面ともに丁寧な工具ナデ調整を行い、器壁を薄く



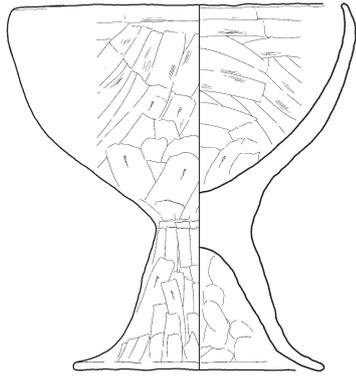
第159図 古墳時代 土器 鉢 1

する意図が見られる。大粒の石英や長石を含む胎土と端正な仕上げは、搬入品と想定できる。にぶい橙7.5YRを呈す。口径11.2cm、高さ9.6cm、底径7.2cm。628は内面に刷毛目調整を残す器壁の薄いもので、精選胎土を使用している。ひび割れは口縁部付近に集中し、特徴的なにぶい黄橙10YRの色調から、搬入品の可能性がある。口径11.1cm、高さ9cm、底径7.1cm。629の口径は10.2cm、高さ10cm、底径7.5cmで、粗い工具ナデ調整が観察される。白色鉍物の目立つ胎土で、ひび割れが全域に残される。630の口径は12cm、高さ10cm、底径5.6cmで粗い工具ナデ調整が観察される。白色鉍物の目立つ胎土で、ひび割れが全域に残される。631は脚部がやや高くなるもので、口径11.9cm、高さ10.9cm、底径6.2cmの完形品である。胎土は白色鉍物やカクセン石等黒色鉍物が目立ち、にぶい橙7.5YRで、硬質な焼成をなす。632の脚部内面天井は丸く、口径11.4cm、高さ10.5cm、底径は5.4cmの脚付鉢で、口唇部は尖り気味に立ち上がる。器面調整

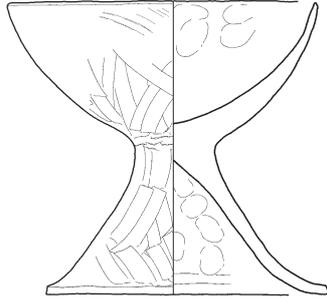
は粗く、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。633の内面は顕著な刷毛目調整で、小振りの脚を持つ。口径12.3cm、高さ9.5cm、底径5cmで、赤色粒を含む。634は口径5.8cm、高さ5.9cm、底径5.6cmの器台様の脚付の鉢で、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土が使用される。にぶい橙5YRを呈す。635は内面に刷毛目調整を残す器壁の薄いもので、特に口縁部周辺が薄い。砂質の強い胎土で、ザラザラな器面をなす。にぶい黄橙10YRを呈し、口径10.9cm、高さ9.3cm、底径5cm。636は口径10.6cm、高さ9.5cm、底径5.6cmの脚付の小型鉢で、多数のひび割れが残る。にぶい橙5YRを呈す。637は脚部の内面天井は丸く、口径10cm、高さ7.8cm、底径は4.5cmで、口唇部は尖り気味に立ち上がり、精選されたきめの細かい胎土を使用し、黄橙10YRの器面は丁寧な工具ナデで調整される。搬入品。638は口径7cm、高さ6cm、底径4.1cmの脚付の鉢で、外面には粘土紐が残され、内外とも工具ナデで仕上げる。にぶい橙5YR。



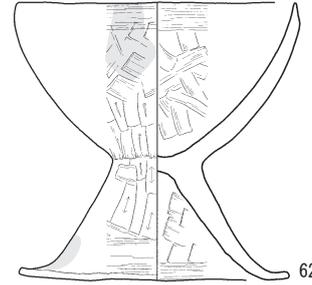
第160図 古墳時代 土器 鉢2



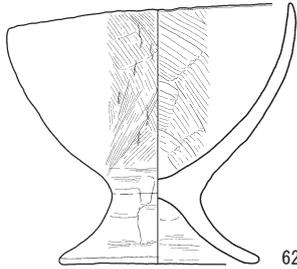
623



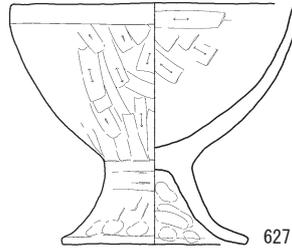
624



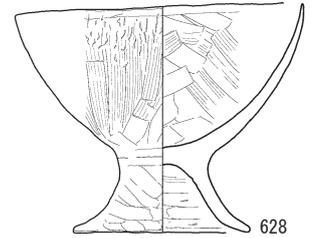
625



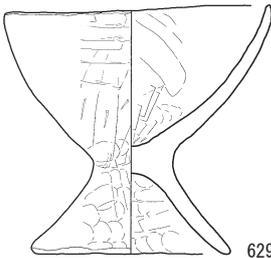
626



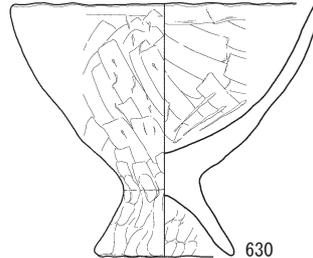
627



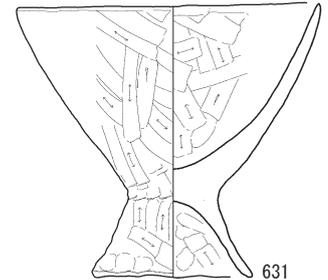
628



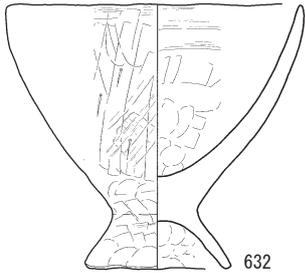
629



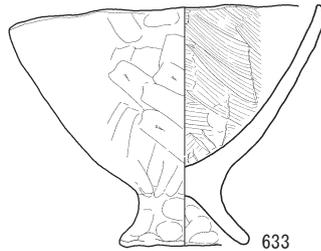
630



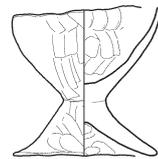
631



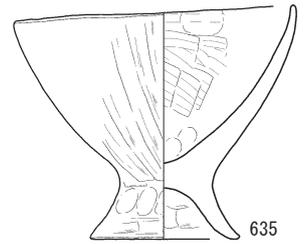
632



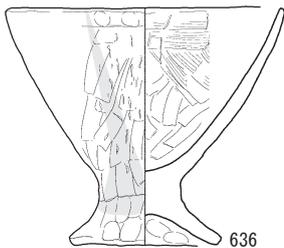
633



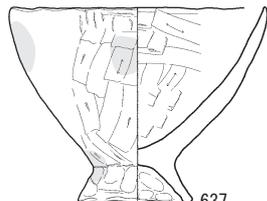
634



635



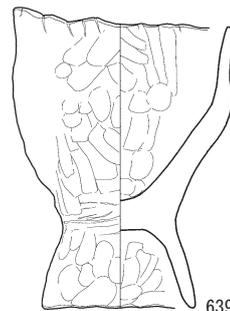
636



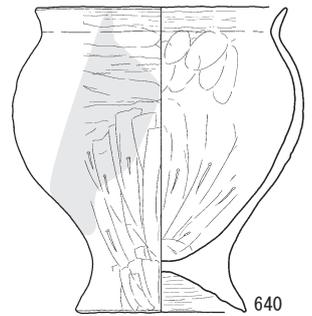
637



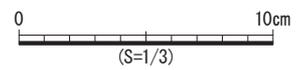
638



639



640



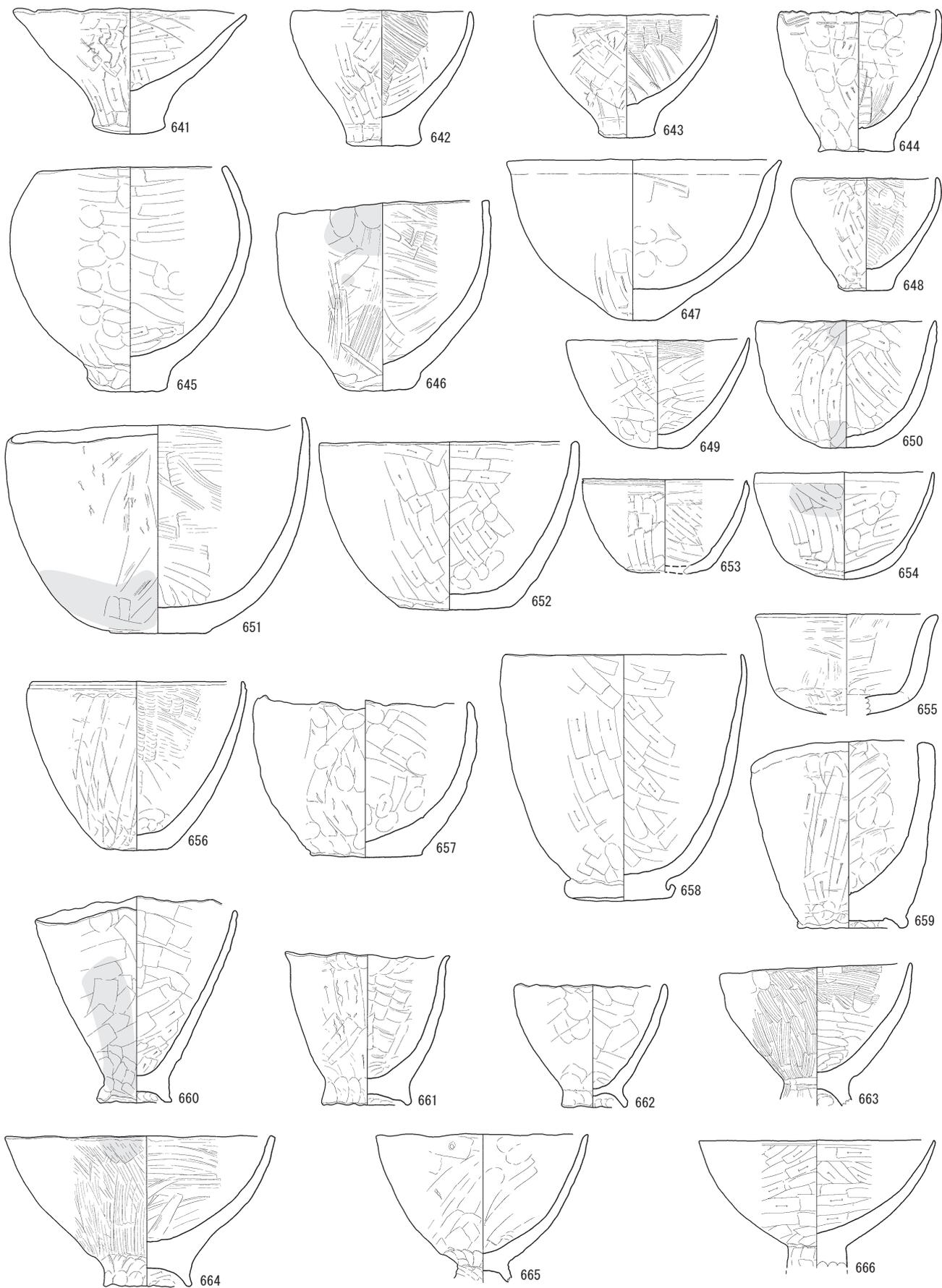
第161図 古墳時代 土器 鉢3

639は火山灰性のガラス質粒子を多く含む脚付の鉢で、内面上部は工具で横にナデて仕上げる。640の口縁部はくノ字に外反し、胴部が膨らみ、比較的短い脚台を持つ小型鉢で、浅黄橙7.5YRの器肌で、器壁は薄く、軽量な仕上がりを見せる。復元口径は9.8cm、高さ12.3cmで底径6.6cm。黒色鉱物と長石主体の胎土で、石英は殆ど含まれない。(161図)

641は底部が突出する広口鉢で、口径12.7cm、高さ6.9cm。ナデで仕上げた外面は摩滅が著しい。ひび割れや黒斑が見られ、赤色粒、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土は、にぶい橙5YRをなす。内底面は若干赤が強い。642は突出底部の碗形で、口径10cm、高さ7.4cm、黒斑あり。胎土は白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む。器肌はにぶい橙5YRで、内面に刷毛目調整を残す。643も突出底部の碗形で、口径10cm、高さ6.6cm。ひび割れと黒斑が見られ、白色鉱物、黒色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む。仕上がりはにぶい黄橙10YRをなし、内面に刷毛目調整を残す。644の口径は9cm、高さ7.5cmほどで、平坦な接地面の中心部は指頭で僅かに押し上げられる。白色鉱物や火山灰性ガラス質粒子を含み、黒斑を持つ。646は口径11cm、高さ10.5cmの深い碗形で、口唇部は狭い平坦面をなし、底部は若干突出し平底をなす。外面は工具ナデ後、口縁部付近を指ナデで仕上げ、口縁部から胴上部の淡赤橙2.5YRの器面一部には、煤状炭化物が付着している。647は口径14.8cm、高さ8.8cmの碗形の小型鉢で、口縁端部が外に反り、尖り気味の底部は狭い平底をなす。火山灰性のガラス質粒子や岩粒を含む胎土を使用し、黒斑のある底部以外は、橙2.5YRの赤い器面を呈している。648の底部は突出が希薄となる。649の外面にはタタキ痕が残され、その後、工具ナデやミガキ調整を重ねたもので、口径9cm、高さ6cm、底径2.2cmの小型鉢である。にぶい黄橙10YRを呈す。650の復元口径は9.7cmで、内外面とも幅の狭いヘラケズリを重ねて仕上げている。縦方向に碎片化が進んでおり、1/4ほどの破片資料である。651は口径16.3cm、高さ11.3cmの平底で、底径4.7cmほどの接地面を持つ。口縁部は緩やかな波状を呈し、外面には縦方向のひび割れも見られ、接地面から底下部には煤状炭化物も付着する。内面は刷毛目に工具ナデを重ね、外面は工具ナデが繰り返されるが、器壁は厚く、重量がある。なお、外面には粉痕と見られる圧痕が数カ所確認される。652は口径14.1cm、高さ9.3cmの完形品で、丁寧な工具ナデ調整により器壁等が均一で、重厚な仕上がりを見せる。653も丁寧な工具ナデが見られる。655の器壁は厚いが軽量な仕上がりで、赤色粒や白色鉱物、カクセン石等黒色鉱物主体の胎土を使用したもので、内外面とも丁寧にナデて仕上げるが、発泡性が高い。656も平底で、口径11.6cm、高さ9.3cm、火山灰性のガラス質粒子を含み、外面は縦方向の工具ナデ、内面は刷毛目調整で、に

ぶい橙2.5YRを呈す。657は口径11.2cm、高さ8.8cm、底部6.2cmほどのほぼ完形で、尖り気味の口唇部は波状をなす。器面はヘラナデと指ナデの粗い調整で、ひび割れも見られ、また、器壁は厚く、底部周辺でさらに厚くなる。658は口径13cm、高さ13.6cm。底部は円盤状の粘土板を張り付けた後、端部を指頭で上方向に折り曲げて仕上げている。両面とも縦方向の工具ナデ調整で、ひび割れも多く残る。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用し、黒斑の占める部分大きい。659は口径10cm、高さ10.3cm、底径6cmほどの筒状で、器壁は厚く、口唇部は丸く、底部は高台状にわずかに張り出す。外面は縦方向のヘラケズリ調整で粗く、重量のある仕上がりをなす。砂質の強い胎土で、中でも石英が目立ち、やや軟質な焼成で、両面とも橙5YRで、下部の一部に黒斑が見られる。660は小型鉢で、口径11cm、高さ11.4cm、底径4.1cmで、底部はわずかに張り出す。外面は縦横の粗い工具ナデ調整で、ひび割れも多く残る。両面ともににぶい橙5YRで、口縁部から底部まで続く黒斑が見られる。661は小型で、口径8.8cm、高さ8.3cm、底径4.9cmで、口縁端部は指押さえで外に反り、底部はわずかに張り出す。外面は主に縦方向の工具ナデ調整で、ひび割れも多く残る。両面とも橙7.5YRで、一部に口縁部から底部まで続く黒斑が見られる。662は口径7.9cm、高さ6.8cm、底径3.2cmで、口唇部は丸く、底部はわずかに張り出す。白色鉱物の多い胎土で、半分ほどを黒斑で占める。664は口径14.3cm、高さ8.3cm、底径4.5cmの浅い碗形の小型鉢で、口唇部は平坦面をなし、底部は指頭で締めてわずかに端部が張り出す。外面は縦方向の粗い刷毛目調整で、3～4mmの岩粒を多く含む胎土を使用している。663・665は深い碗形を呈し、663の口径は10.3cmで、内外とも刷毛目調整仕上げ、665の口径は11.3cmで、良質な仕上がりをなす。666は良質な仕上がりで、口径は12.8cm、底部は筒形で高坏の可能性もある。(162図)

667は平底で、口径9.5cm、高さ5.6cm、白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含み、器面にひび割れを多数残す。器面は、にぶい橙5YR。668も平底で、口径9.8cm、高さ7.2cm。精選胎土を使用し、にぶい橙7.5YRを呈す。669・671も平底で、669の鉢部は深く、671の口径は10.1cm、高さ7.3cmで、口縁部は若干内弯する。白色鉱物や岩粒を多く含む胎土で、部分的にヘラミガキが見られ、外面はにぶい橙7.5YRで、内面は黒色に仕上がる。672は小さな平底で、内面には刷毛目調整痕が残る。673も同様で、内面刷毛目は横方向に行う。外面は縦方向の工具ナデで仕上げる。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。674の復元口径は9.7cm、器高は7.5cmほどで、工具ナデで仕上げる。676は口径8.4cm、高さ6.6cmで精選胎土を使用し、浅黄橙7.5YRの器面をなす。677は口径10.5cm、高さ9.0cmの完形の丸底で、底部はデフォルメされ乳頭状に突出する。



第162図 古墳時代 土器 鉢4

0 10cm
(S=1/3)

口唇部は、指頭痕で横方向に周回して波状で尖り気味に仕上げる。内面は順次上位へ移動する調整が見られ、刷毛目に縦方向のナデを重ね、外面ではヘラケズリや工具ナデが認められる。内外面ともに明黄褐7.5YRで、ザラザラ感のある器肌には、内面まで達する黒斑が見られる。678は口径8.4cm、高さ7.2cmの完形の丸底で、底部は絞り締めにより丸く仕上げる。底部から鉢状に開きながら肩部から内弯する形状で、口唇部は、指頭痕により波状で尖り気味に仕上がる。内底面には、凹んだ指頭痕がそのまま残され、外面にはひび割れも残される。胎土には5mmほどの岩粒の他、赤色粒が含まれ、微細な長石や石英、カクセン石等の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラな器面を見せる。器壁は厚く、重量がある。679の口径は9.6cm、高さ9.2cmの完形で、尖底をなす。最終調整は、口縁部を横方向にナデで周回するが、内面では横方向の刷毛目を順次上位へ重ねている。外面は、刷毛目で成形し、その後丁寧にナデや指頭痕が加えられ、尖り気味の口唇部に仕上げている。長石や石英は微細で、カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土は、キラキラな器面を見せる。外面の一部に、底部方向に至る三角形の黒斑が見られる。総じて、丁寧な作りが感じられる。680は復元口径11.2cmで、底部を欠く。軽量なつくりである。681は口径7.3cm、高さ7.8cmで、1～2mmの白色粒や火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土である。底部周辺の器壁が厚く、重量のある仕上がりで、狭い接地面を持つ。黒斑を持ち、橙2.5YRを呈す。682は復元口径10cm、器高8.2cmで、縦方向の刷毛目で調整し、口縁部周辺のみ横にナデで仕上げる。均整のとれた尖底で、火山灰性のガラス質粒子を含むきめの細かい精選胎土を使用する。683は口径12cm、高さ9.3cmで胎土に白色鉱物、岩粒を含み、にぶい橙5YRを呈す。V様式の変容と見られる。684は口径11cm、高さ9.4cm、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子。外面ヘラケズリ、横ナデ。淡橙5YR、内面黒斑。クレーター状の破裂痕。685は復元口径15.7cm、高さ7.3cmで、特に底部の器壁は厚く、重量がある。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。686は重量のある碗形鉢で、特に底部の器壁は厚く、白色鉱物を多量に含み、ザラザラな器面を呈している。687は内面のナデ調整は丁寧に、繰り返された工具ナデ調整も含め、器壁を薄くする意図が読み取られるもので、口縁端部は緩やかに内弯する。復元は口径18.4cmで、にぶい橙7.5YRの器肌で、黒斑の占める範囲も大きい。688はボール状の器形で、ヘラケズリから刷毛目後工具ナデの調整が確認できる。なお、口縁部から胴中央部の煤状炭化物が付着し、胴下部には穿孔を試みた痕跡も見られる。白色鉱物やカクセン石等黒色鉱物を含み、特に内面は器面調整も入念で、にぶい橙7.5YRである。689は精選したきめの細かい胎土を使用した、復元口径13cmの精選鉢として示したが、詳細は不明であ

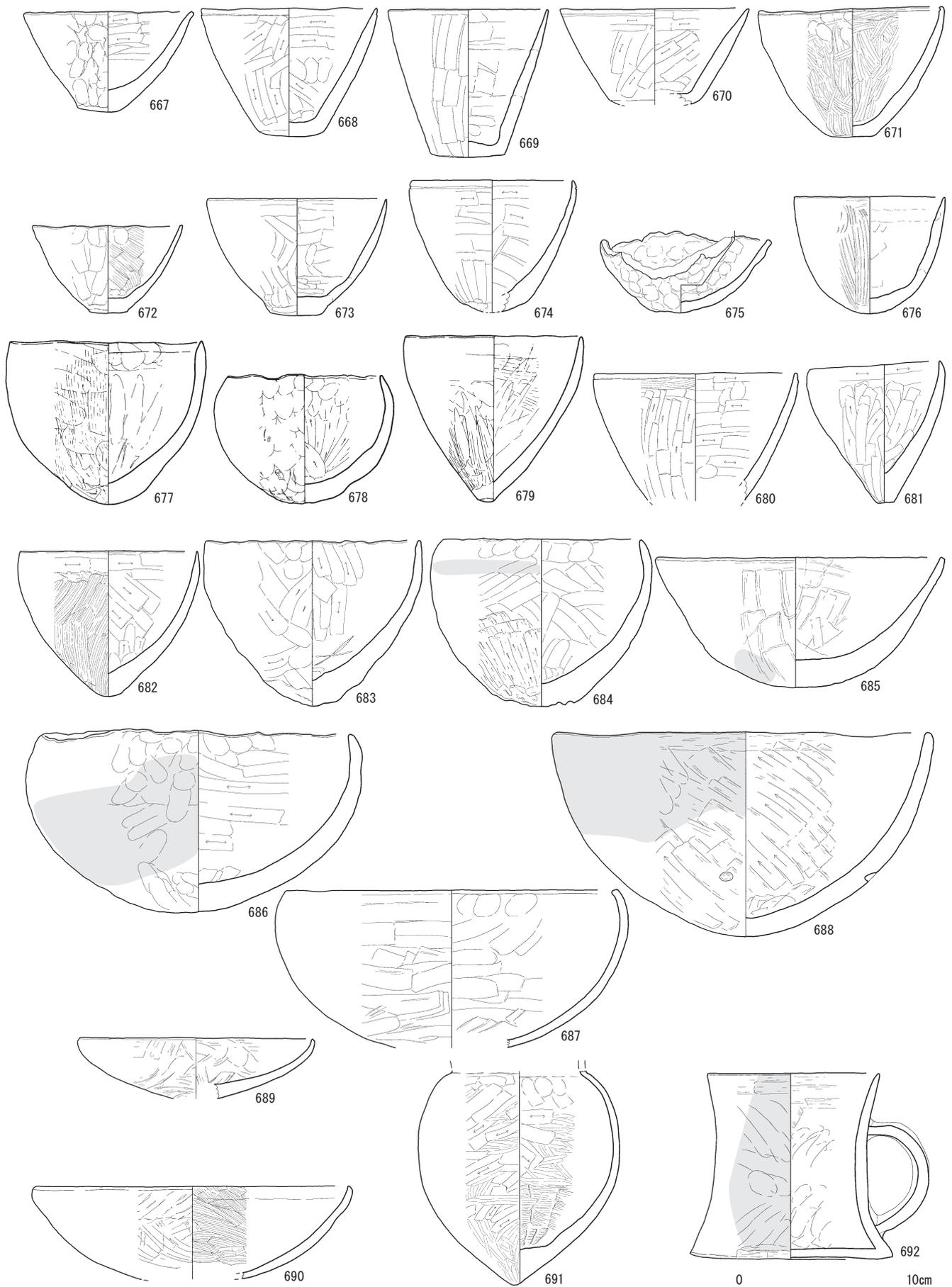
る。690は復元口径17.4cmの皿状の鉢で、外面に深いヘラ状の調整痕を残す。最大10mmをはじめ5mmほどの白色鉱物を含む胎土で、器壁は薄い。691は尖底で胴部は丸く膨らみ、頸部で締まり口縁部が直行する特徴的な形状をなす。外面はナデとミガキ仕上げで、内面は横方向の工具ナデを繰り返す、両面とも光沢のある器面に仕上げている。また、黒斑の占める範囲も広く、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し、特徴的な暗赤褐5YRをなす。692は口径9.5cm、高さ10.5cm、底径11.3cmの把手付のジョッキ形土器で、胎土に含まれる微細な金雲母は特徴的である。また、器面も入念にナデで仕上げ、器壁は薄く、軽量の焼成で、特徴的灰白10YR色調等から、搬入品と見られる。なお、把手は幅4cm、厚さ6mmである。(163図)

高坏 (第164～166図693～721)

高坏2型式 (693～705)

693は脚裾部に4個の透かしを持つ大型の高坏で、口径は35.2cm、底径20.5cmで、口縁部が大きくうねることから高さは25～27.5cmと均一でない。きめの細かい精選胎土を使用し、内外面ともににぶい橙7.5YRの肌色に発色している。坏部は皿状に緩やかに立ち上がり、屈曲部で大きくくノ字に外反して口縁部に達し、また、坏部の中央部の風化が激しい。刷毛目、ヘラケズリの幅が小さい。694の坏部は上部が途中で屈折し大きく外反し、円柱状の筒部に漏斗を伏せた形状の脚部を持つ。なお、脚部の頂部4か所に、不定位置に透かしを持つ。坏部内面は最終的にミガキ仕上げ、外面では図示したように部位により異なっている。1mm以下の長石、石英、カクセン石を主体に火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、外面がにぶい橙10YRと若干白く、内面は明黄褐10YRで、重量がある。口径30.4cm、高さ22cm、底径17.9cmの完形品。(164図)

695は復元口径29.5cmの口縁部で、口唇部は平坦である。内外面とも丁寧にみがかれる。696は口径26.4cmで、口縁部の外反は強く、きめの細かい精選された胎土を使用し、特に、内面は入念にみがかれ、器肌は橙5YRで部分的には光沢を保っている。697は復元口径30.6cmの坏の屈曲部で、平坦な口唇部を持ち、内外面とも丁寧にみがかれる。口縁部内面には、煤状炭化物が付着する。698の復元口径は26.2cmで、器壁は薄く、明瞭な屈折をなす。699は復元口径30cmの坏の屈曲部で、平坦な口唇部を持ち、内外面ともナデで仕上げる。2～3mmの白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、にぶい赤褐2.5YRに発色する。700の復元口径は35.4cmで、両面とも丁寧にミガキで調整している。胎土に火山灰性のガラス質粒子を多く含み、口縁内面には多量の煤状炭化物が残される。701はにぶい橙5YRを呈する、復元口径40cmほどの大型で、外面は工具ナデ後ヘラミガキ、

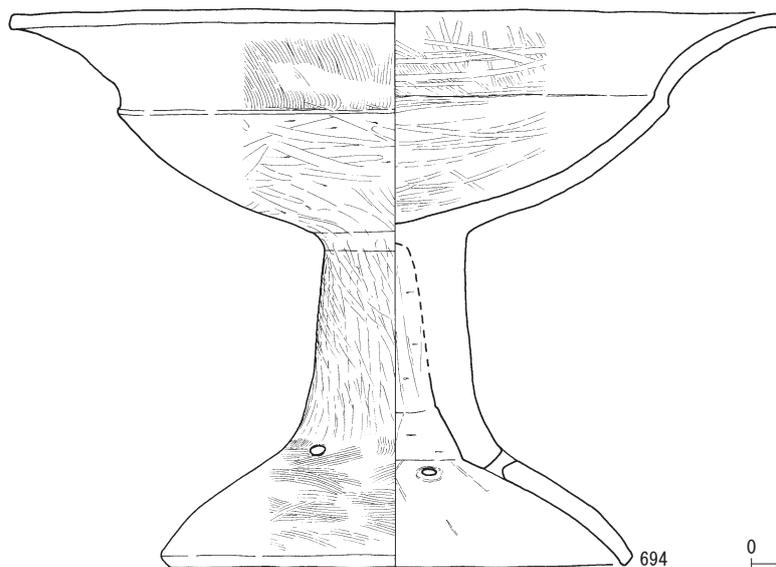
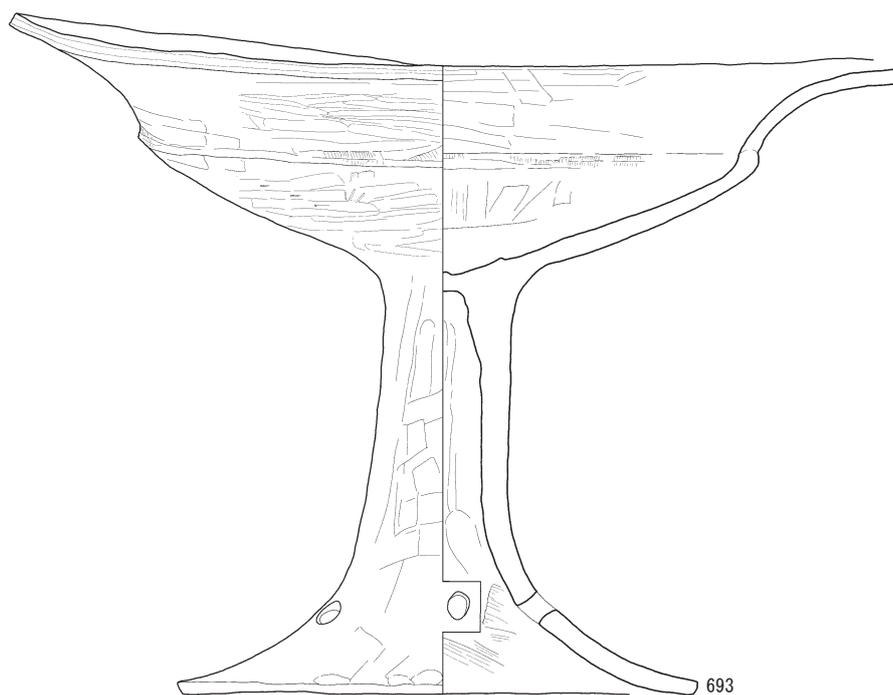


第163図 古墳時代 土器 鉢5

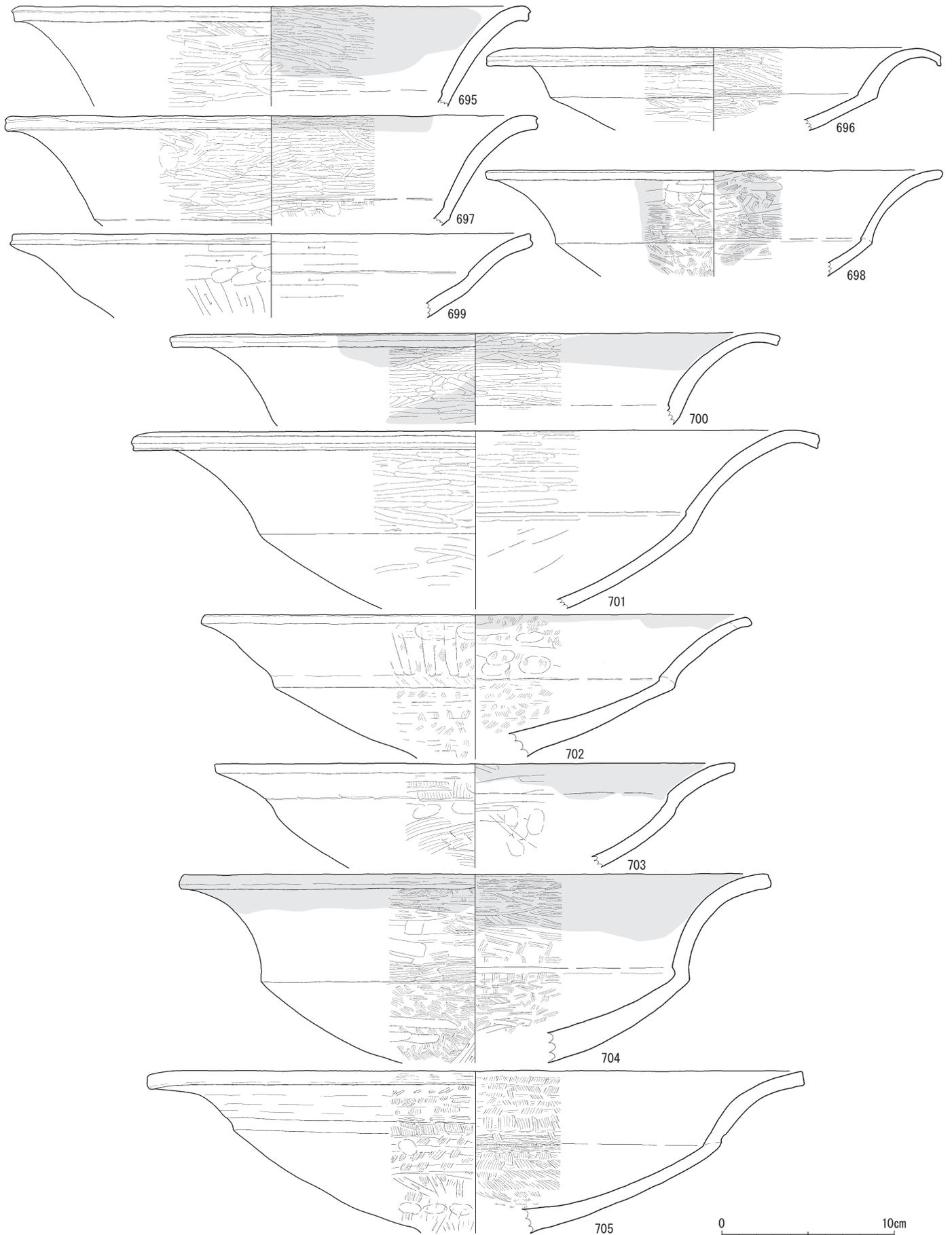
内面は部分的にヘラミガキ仕上げが見られる。702は口径31.4cmで、火山灰性のガラス質粒子を含む精選された胎土を使用し、器面は橙2.5YRで、風化が進行している。703は途中で屈折して外反する坏部で、器壁は厚い。口縁部内面に煤状炭化物が付着することから、蓋に転用したと見られる。復元口径は30cm。704の胎土や付着している煤状炭化物は700と類似点も多いが、復元口径は34cmと若干小さくなる。705の坏部は、途中で屈折して大きく外反する。内面は入念にミガキで調整し、外面は部位によりヘラケズリにナデやミガキを加える。白色鈹

物を多く含む精選された胎土で、黒斑もある。(165図)
高坏3型式 (706～708)

706は屈折部から斜め方向に直線的に伸びる坏部で、精選胎土を使用し、丹塗りされる。707は坏部で、屈折部から口縁部形状は不明。両面とも入念なミガキ調整で、光沢を持つにぶい橙7.5YRに仕上げる。708の口縁端部はやや内弯するが、屈折部から斜め上方に直線的に伸びる坏部で、器壁は薄く、超軽量な仕上がりをなす。なお、胎土はきめが細かく、且つ、火山灰性のガラス質粒子を多量に含んでいる。搬入品の可能性が高い。



第164図 古墳時代 土器 高坏 1



第165图 古墳時代 土器 高坏 2

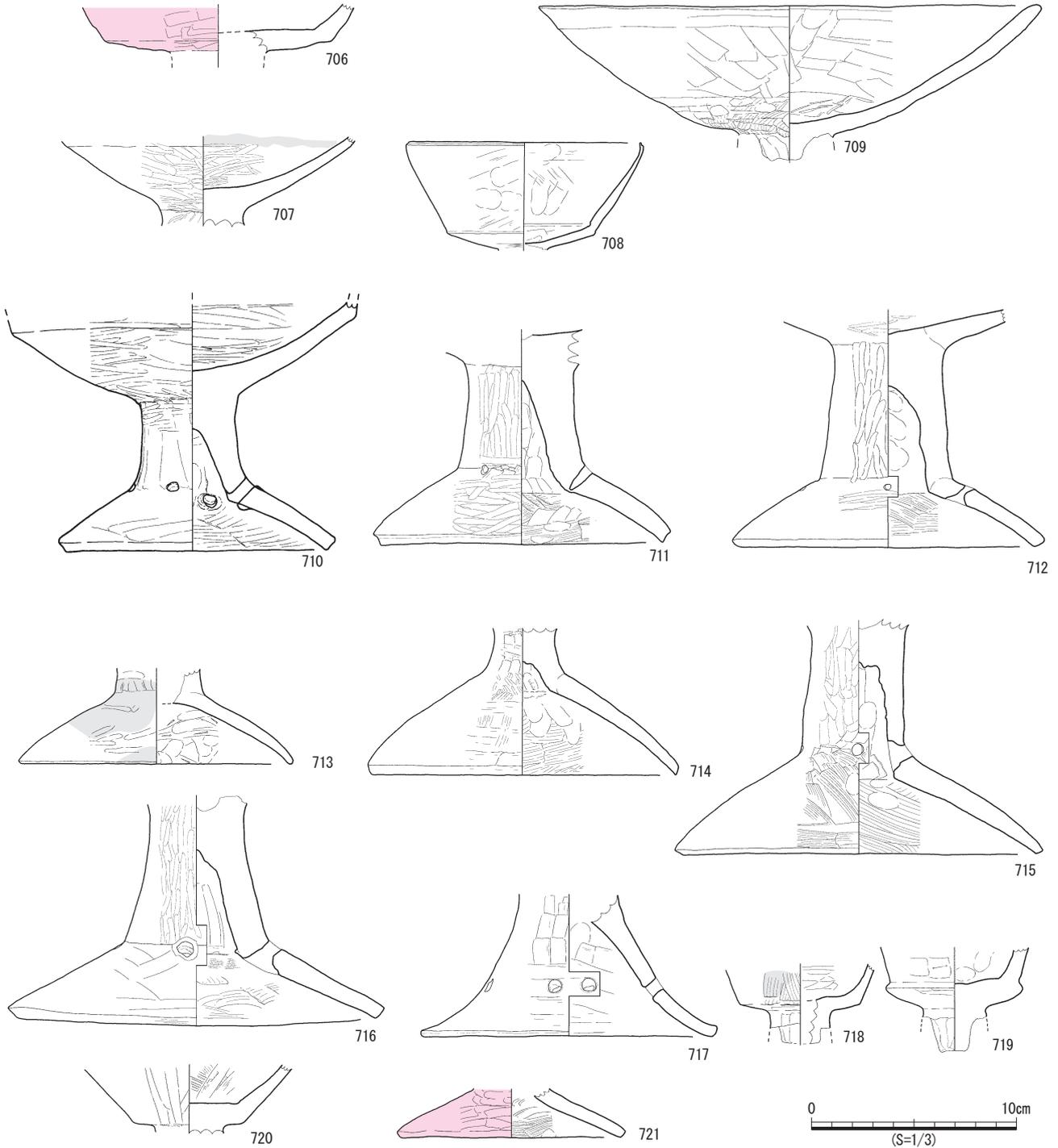
高坏4型式 (709)

709はわずかに屈折部から内弯する形状を残す坏部で、火山灰性のガラス質粒子を含む砂質胎土を使用し、明赤褐2.5YRと赤い器肌である。

脚部 (710～721)

710は坏底部から脚部が残る資料で、坏屈折部から上位が欠損する。円柱状の筒部と漏斗を伏せた脚部形状で、透かしの1つは貫通していないが、4分割の割り付け痕跡が確認できる。711も漏斗を伏せた形状で、筒部は太

く、3か所に透かしを持つ。器壁が厚く、重量のある仕上がりで、にぶい橙7.5YRに色調をなす。712は円柱状の筒部に、漏斗を伏せた形状の裾部を持ち、裾頂部4か所に透かしを持ち694に酷似する。胎土は、きめの細かい精選されたもので、にぶい橙7.5YRをなす。713は脚部である。漏斗を伏せた形状で、円柱状の筒部を持つ。714は漏斗を伏せた形状の脚部で、細い円柱状の筒部を持つ。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用する。715の透かしは4か所あり、不定位置である。脚部



第166図 古墳時代 土器 高坏3

内底は粗い刷毛目、外面は細かい刷毛目で密な調整が見られる。きめの細かい精選胎土で、橙10YRに仕上がる。716は筒部との接合する脚部内面に布目圧痕が残される。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用し、きめの細かい精選胎土で、橙5YRに仕上げる。717は対の透かしを4か所に持つ高坏の脚部。718は坏部と判断した。火山灰性のガラス質粒子を多く含む精選胎土を使用する。719も坏部と判断した。きめの細かい精選胎土で火山灰性のガラス質粒子を多く含む。720の外面はにぶい5YR、内面は灰褐5YRをなす。721は外面がナデ、内面が刷毛目仕上げの丹塗り高坏の底部である。(166図)

埴 (第167～174図722～900)

埴0型式1 (722～825)

埴0型式は口縁部が長く、胴部上位即ち口縁部直下で偏球状に明瞭に屈折する一群で、722や723のように口縁部に櫛描波状文、鋸歯文を施すものが多数を占めている。また、器の大部分を口縁部で構成し、中でも723・724・814では、器高の8割以上を口縁部で占める。また、赤色(赤褐2.5YR)に発色する事例が多いことから、精選胎土とともに赤色の化粧土を使用した可能性が高く、器面調整も丁寧で、器壁を薄く仕上げている。中津野式土器に該当する。

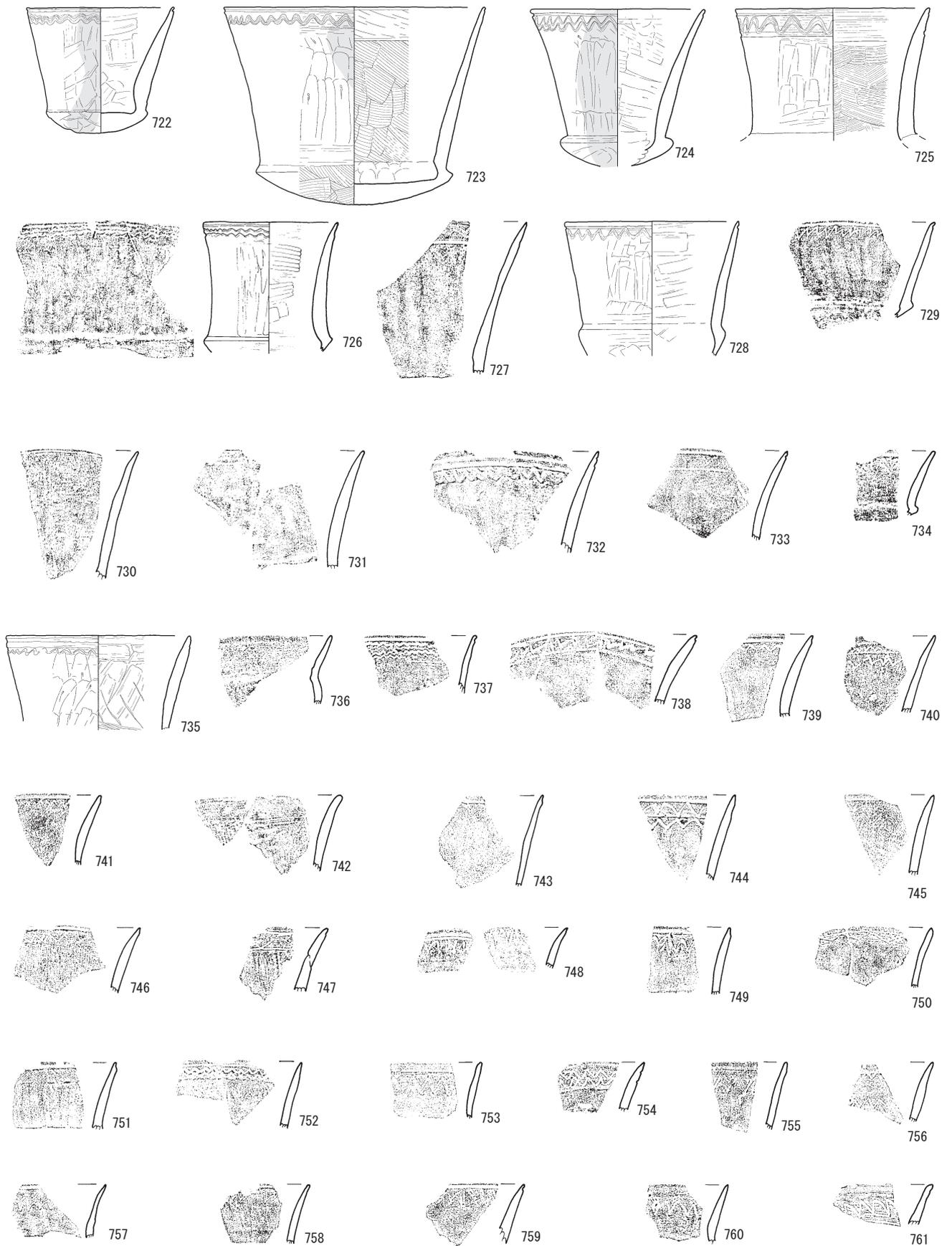
722は外に大きく開く口縁部で、算盤玉状に鋭く屈折する胴部は平坦で浅く、その大部分を口縁部が占める。なお、口径は8cmほどで、口唇部外面を薄く削り段を造り出し、櫛描波状文を描く。外面は縦方向の丁寧なヘラミガキを行い、口縁部は横ナデを重ね、胴部及び内面は横方向の工具ナデが見られる。にぶい橙7.5YRの色調で、器壁は厚く、硬質な仕上がりを見せる。723も長い口縁が外に直線的に開くもので、胴部は上位で鋭角に屈折して、算盤玉状の浅い胴部を構成する。口径は14.4cm、高さ11cmで、器高の8割を口縁部で占める。また、口縁直下に、半裁竹管状工具を周回し、その間に櫛描波状文を描く。口縁部はヘラミガキ、胴部及び口縁部内面は刷毛目、内底面は指ナデと部位により異なる調整が見られる。粒子の細かい精選された胎土で、橙5YRと明るい仕上がりをなす。724は口径9.6cmで、口縁部はヘラミガキ、内面の刷毛目調整は723と共通する。なお、725以下の大部分でも、口縁部はヘラミガキ、内面は刷毛目調整が基盤となっている。725は口径10.6cmで、器壁がやや厚く、内面の刷毛目が良く残る。また、胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含んでいる。726は口径8.2cm、728は9.4cmで、にぶい黄橙10YRの器面に黒斑が広範囲に広がる。730は、特に大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。731・732はきめの細かい精選胎土を使用し、内面は横方向のナデ仕上げで、器肌はにぶい橙7.5YRを呈す。733は内面を刷毛目で調整後、上位は横方向にナデで仕上げる。735は口径10cm、赤色粒や黒色鉱物、火山灰性

のガラス質粒子を含む。737の櫛描波状文は2列である。738・739・740・741・742の内面は横方向の刷毛目調整である。743の器壁は薄く、内面の刷毛目も明瞭に残る。744は沈線文による組み合わせ文で、内面の刷毛目は明瞭である。745～752の櫛描波状文は深く明瞭である。大量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土である。753・754の櫛描波状文も深く明瞭である。755・756も沈線文で構成し大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。757はきめの細かい精選胎土で火山灰性のガラス質粒子を含み、にぶい橙7.5YRで器壁は薄い。(167図)

762・763は精選胎土を使用。764の内面は粗い刷毛目調整、外面は密な刷毛目で仕上げる。765は赤色塗彩の可能性がある。766の内面も特徴的な橙2.5YRをなす。767～778は大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。779・780の内面の刷毛目は細かい調整である。781～785の沈線は明瞭である。786～789の櫛描波状文は2列である。790・791の外面の赤は特徴的で、大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。792～799の施文帯は広い。800の内面は全域、刷毛目調整である。801の内面の刷毛目は明瞭で、大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。やや内傾する形状で傾きは不明である。802・803も内傾の傾向がある。804～807は内面の刷毛目が明瞭である。808～811は沈線文で、811の口縁部は大きく開く。(168図)

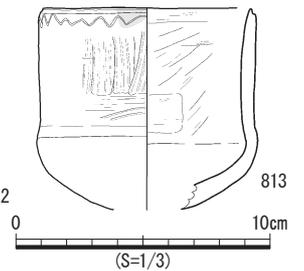
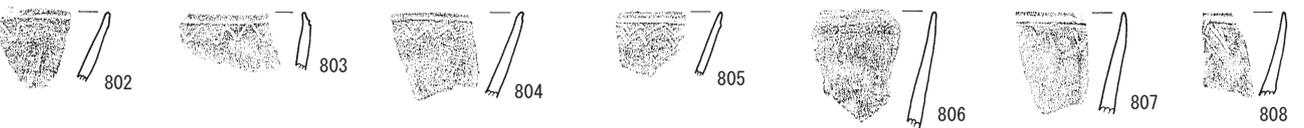
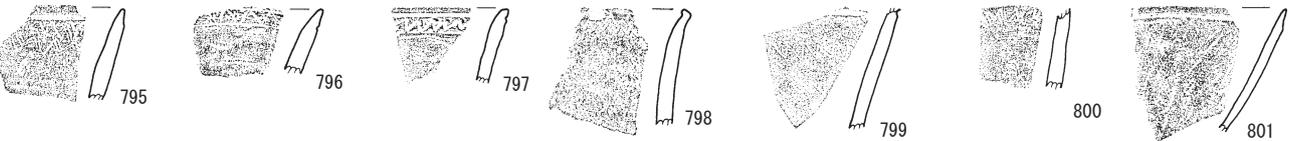
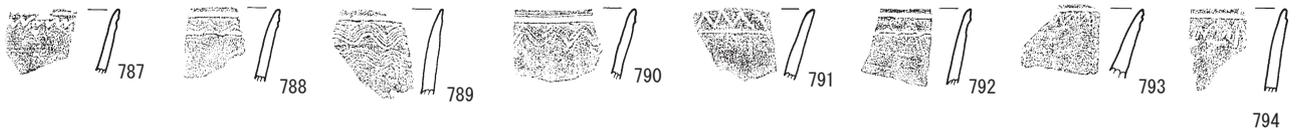
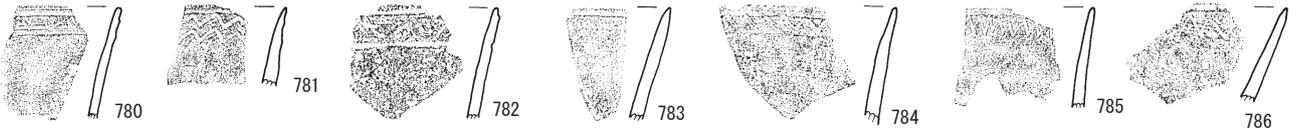
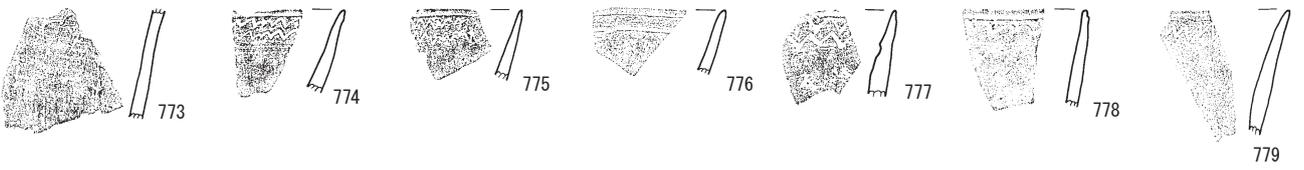
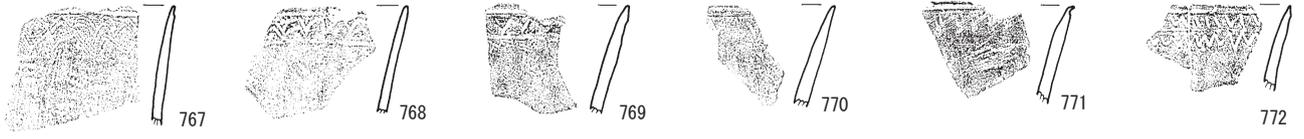
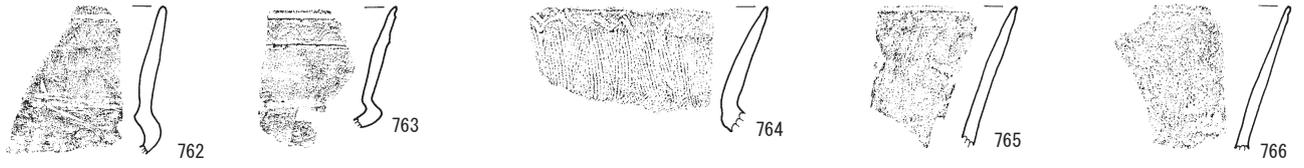
814の直行する口縁部は途中から外に開き、算盤玉状に鋭く屈折する胴部は浅く、大部分を口縁部が占める。なお、口径は9cmほどで、浅黄橙7.5YRの色調をなす。胎土は火山灰性のガラス質粒子を含む、粒子の細かい精選されたものが使用される。815は粒子の細かい精選胎土を使用し、内面には刷毛目調整を残す。816の口縁部は長く直行し、口唇部外面を薄く削り段を造り出している。胴部は上位で鋭く算盤玉状に屈折する。口径は9.5cm、高さ11cmで、その6割以上を口縁部で占める。器壁は薄く、粒子の細かい精選された胎土で、部分的に黒斑が占めるが浅黄橙10YRで軽量の仕上がりをなす。なお、精選胎土を使用していることや器壁の薄い成形手法等から搬入品の可能性が高い。817の口径は11.6cm、818で12.4cm、819で12.8cm、820で14.8cmあり、それぞれの口縁部の長さは8cm、9.4cm、8.6cm、8.6cmとなり、規格の大きいものである。器面調整は、817の外面が横ナデ、内面が縦方向の工具ナデ、818の外面が縦方向の工具ナデ、内面が刷毛目、819の外面が縦方向のヘラミガキ、内面が工具ナデ後指ナデ、820の外面がヘラミガキ、内面が指頭痕による。また、817は大量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、818の内面の下部は3cm幅の帯状に器壁が剥落し、820の外面には煤状炭化物の付着が認められる。821の口縁部は外に大きく開き、胴部は上位で算盤玉状に屈折し、大部分を口縁部で占める。口径11cmほどで、口縁部は縦方向、胴部及び内面は横

埴



第167図 古墳時代 土器 埴 1

0 10cm
(S=1/3)



第168図 古墳時代 土器 埴2

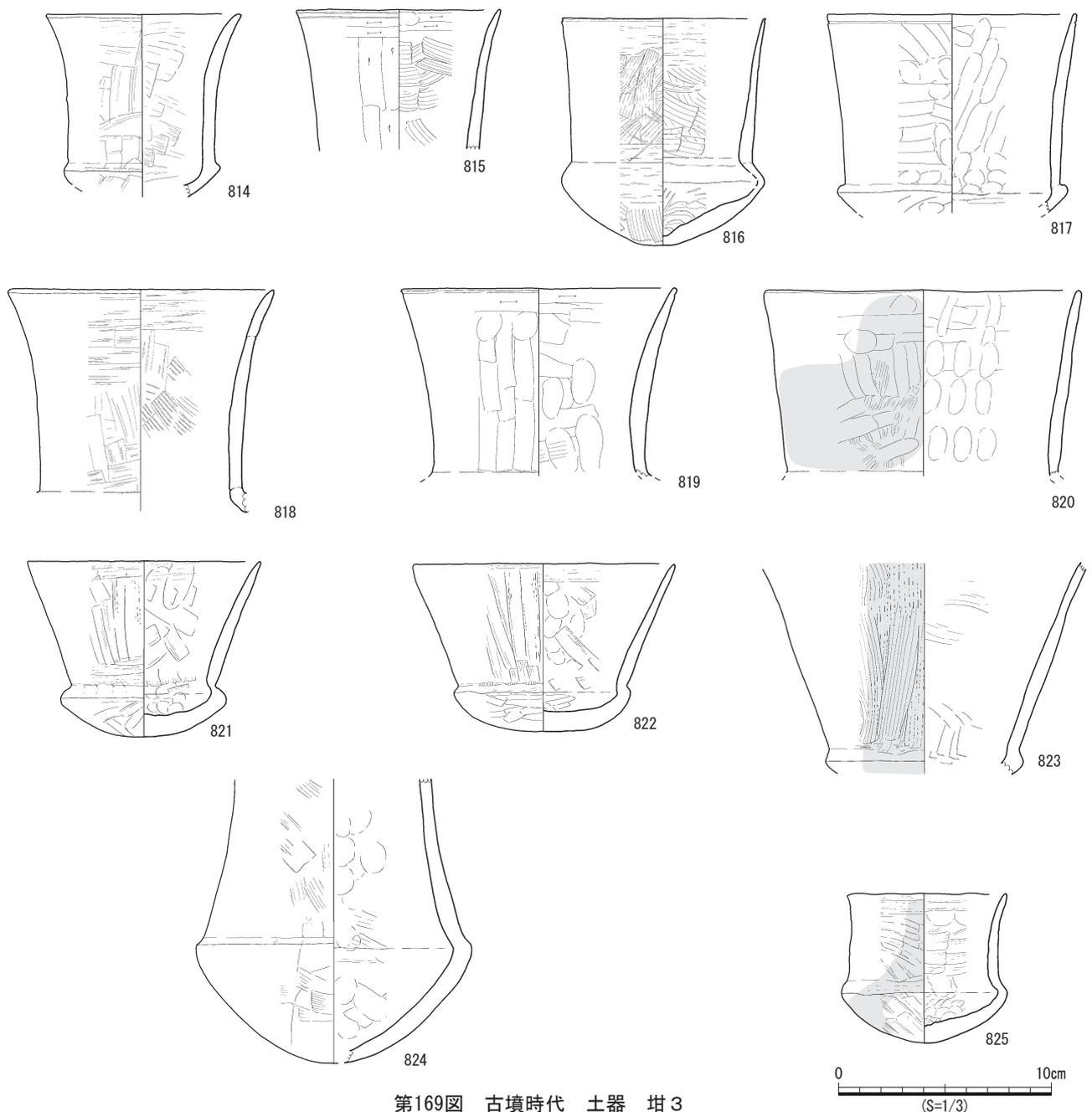
方向の工具ナデが見られる。822は直線的に外に開く口縁部で、胴部は上位で明瞭に屈折し、浅い偏球状の胴部を構成し、その大部分を口縁部で占める。きめの細かい精選胎土を使用し、器壁は薄く、口縁部では縦方向のナデ調整、胴部では横方向のミガキ調整で、硬質で、にぶい橙7.5YRの色調を呈している。823は開きながら長く直行する口縁で、胴部は上位で明瞭に屈折し、算盤玉状の浅い胴部を構成し、その大部分を口縁部で占める。粒子が細かく、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。824の器壁は厚く、口縁部は胴部から反るように立ち上がるもので、胴部との境界は、ヘラで削り出す。825の口縁部は長く外反気味に立ち上がり、胴部は上位で算盤玉状に屈折する。口径は7.2cm、高さ7.1cm

で、その大部分を口縁部で占める。器壁は薄く、白色鈹物を多く含む砂質性の胎土は、器面はざらつき感が強い。(169図)

埴0型式2 (826 ~ 853)

埴0型式2は、器高の大部分は口縁部で占め、胴部が明瞭に屈折することから、埴0型式1から派生したと見られる。

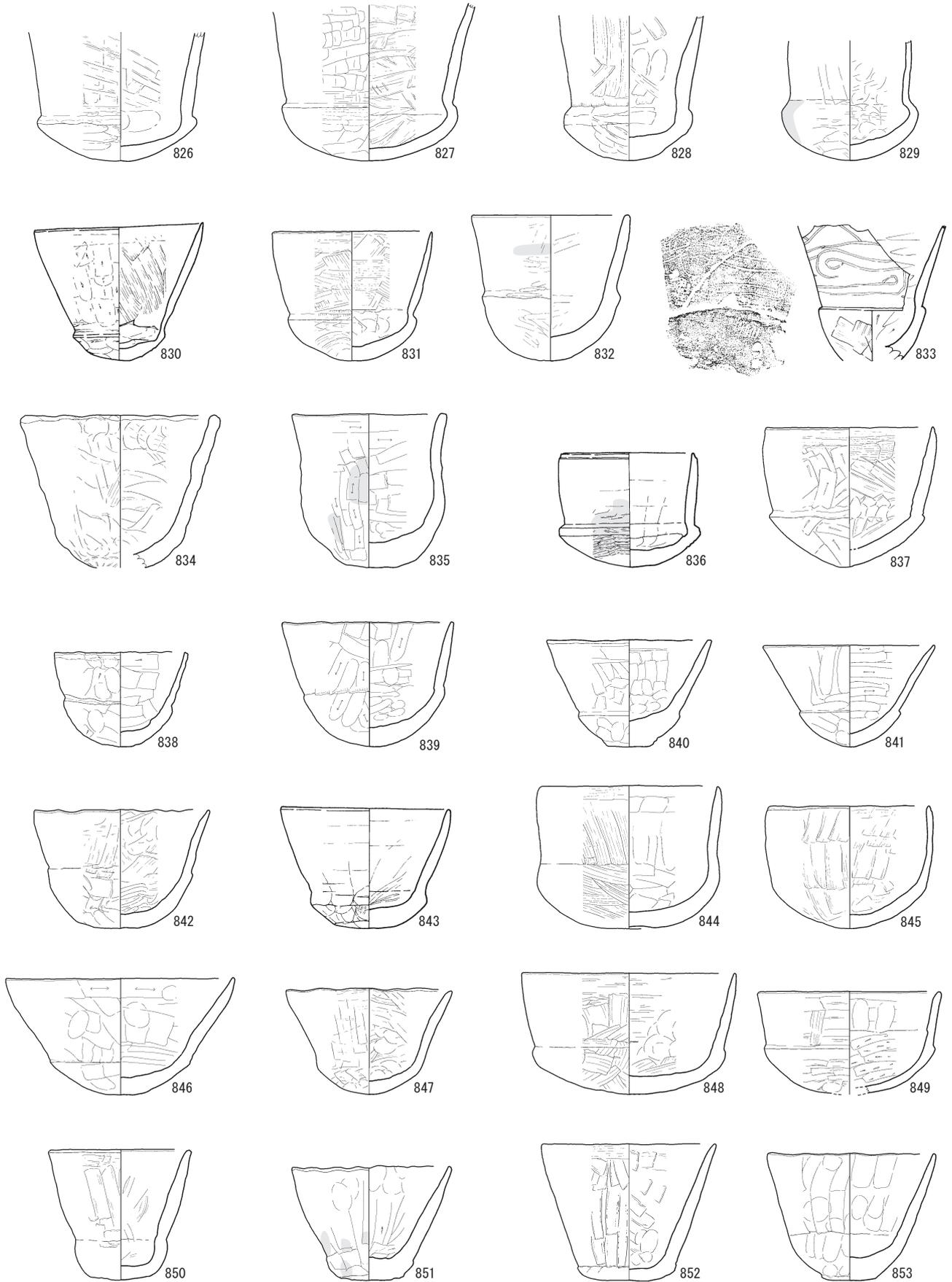
826はその大部分を口縁部で占めるもので、算盤玉状に鋭く屈折する胴部は浅い。なお、精選胎土を使用し、赤褐2.5YRの外表面は、赤色顔料の塗布あるいは化粧土の可能性はある。827の口縁部は長く直行し、胴部は上位で屈折して偏球状をなし、その大部分を口縁部で占める。



第169図 古墳時代 土器 埴3

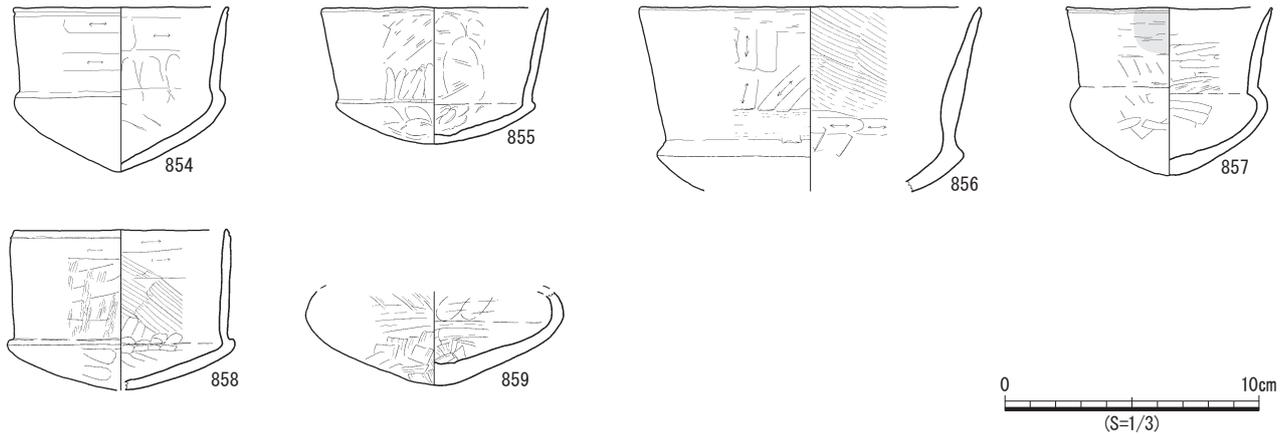
器壁は薄く、横方向のナデ調整を繰り返し、硬質で、にぶい橙7.5YRの色調を呈している。828は器壁が厚く重量のあるもので、直行する口縁部は途中から外に開き、屈折する胴部は浅い。破断面は中央の褐灰5YRを、橙5YRでサンドイッチ状に挟む。829は口縁部が長く直行し、偏球状の胴部で構成するもので、口縁部の器壁は薄いですが胴部から底部の器壁が厚く、外面は工具ナデで丁寧なナデで仕上げる。洗練された胎土で、搬入品の可能性が高い。830は口径9.0cm、高さ7.3cmのほぼ完形の小型丸底壺で、1mm以下の長石や石英、カクセン石を主とする胎土で、外面は黄褐10YR、内面は褐灰10YRを呈す。器壁は厚く硬質な仕上がりをなす。内底面は指頭痕で、内面は縦位の刷毛目にナデを重ね、外面口縁部はランダムなヘラケズリ後工具ナデ、胴部から底部ではタタキ後指頭でナデている。胎土は所々に2mmほどの白色岩粒が見られるが、1mm以下の長石や石英、カクセン石で構成される。831は偏球状の胴部に、外に直線的に開く口縁部を持つもので、器壁は薄く、硬質な焼成が見られる。832は外に直線的に開く口縁で、碗状の胴部を持つ。口径は8.8cm、高さ8cmほどで、口縁部と胴部比はほぼ1:1である。なお、口縁部と胴部の境界は、成形時のヘラ押さえで形成される。両面とも浅黄橙7.5YRで、外面は丁寧なヘラミガキで光沢を保つ。833は口縁部が長く、外に直線的に開くもので、やや深めの碗状の胴部を持ち、口径は、7.8cmほどである。両面ともにぶい黄橙10YRで、きめの細かい精選胎土を使用し、特に外面は丁寧なミガキ調整で光沢を保ち、口縁部にはヘラ描きの線刻(龍)が描かれる。834の口唇部は丸く、器壁が厚いもので、口縁部と胴部の境界が判然としない。5mmほどの岩粒を含む胎土で、器面調整も粗い。835は、口縁端部がわずかに外に開くもので、口縁部と胴部の境界が判然としない。836は口径7.0cm、高さ7.1cmのほぼ完形の小型丸底壺で、1mm以下の長石や石英、カクセン石を主とする胎土で、外面はにぶい黄2.5Y、内面はにぶい黄橙10YRであり、器壁は厚い。外面の屈曲部から口縁部にかけては縦方向にヘラでランダムにケズリ、胴部から底部ではタタキ後指頭と工具で横にナデている。内底面は指頭痕が残り、口縁部は横の工具ナデで、最終的には口唇部を横にナデで仕上げている。肩部の光沢が特徴的である。837は口径9cm、高さ7.6cm。838は外に直線的に開く口縁で、碗状の胴部である。口径は7cm、高さ5.2cmで、839より小さくなるが酷似する。なお、口縁部と胴部の境界は、ヘラ状工具で沈線状に周回する。839は外に直線的に開く口縁で、碗状の胴部を持つ。口径は9.1cm、高さ6.8cmで、口縁部と胴部比は口縁部がわずかに上回る。なお、口縁部と胴部の境界は、成形時のヘラナデで形成され、5mmほどの岩粒を含む胎土が使用される。840も外に直線的に開く口縁で、口径9cm、高さ6.2cmが復元され、口縁部下位で垂直に屈折し、平

底の胴部を形成する。なお、刷毛目のカキアゲで胴部との境界が形成される。火山灰性のガラス質粒子と白色鉱物を多く含む砂質の強い胎土で、ザラザラな器面をなしている。841は火山灰性のガラス質粒子を大量に含む。丁寧なナデ仕上げ。842はやや外反気味に開く口縁と、碗状の胴部を持つもので、口径は9.3cmで、高さ6.5cmの間の口縁部と胴部比はほぼ1:1である。なお、口縁部と胴部の境界は、ヘラケズリ等で形成され、底部は狭い接地面を持つ。両面とも明赤褐2.5YRで、火山灰性のガラス質粒子多く含む胎土を使用している。843は口径9.0cm、高さ6.5cmのほぼ完形の小型丸底壺で、若干平坦な接地面も存在する。器面調整は、工具ナデ後、口縁部は横に工具ナデで丁寧に仕上げている。器肌は鈍い黄橙色をなし、微細な長石や石英、カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で、キラキラな器面を見せる。黒斑も見られる。844はほぼ直行する口縁で、胴部及び底部の膨らみが小さい。火山灰性のガラス質粒子と白色鉱物を多く含む砂質の強い胎土で、浅黄橙7.5YRをなし、硬質な仕上がりを見せる。845は口縁端部に浅い段を持ち、直行する口縁で、刷毛目のカキアゲで口縁部と胴部の境が認識できる。口径8.6cmで、高さ6.7cmの間の4.5cmは口縁部で占める。846は外に大きく開く口縁で、胴部は浅い皿状をなす。口径12.2cm、高さ6.2cmで、口縁部と胴部の境界は、ヘラによるケズリ等で形成される。両面とも明赤褐2.5YRで、白色鉱物を多く含む。847は外に大きく開く口縁で、胴部は浅い皿状をなす。口径9cm、高さ5.7cmで、口縁部と胴部の境界は、ヘラによるケズリ等で形成される。両面とも明赤褐2.5YRで、白色鉱物を多く含む胎土を使用している。848はやや開きながら直行する口縁で、胴部は上位で屈折し浅い碗状の胴部を構成する。口径は11.4cm、高さ6.6cmで、口縁部が6割を占める。849の復元口径は9.8cmで、外面は横方向の工具ナデ、内面の下部はヘラケズリ、上部はナデで仕上げる。850は外に直線的に開く口縁で、口径7.4cm、高さ7.2cmが復元され、その間の5cmは口縁部で占め、胴部はほぼ垂直に折れて平底を形成する。器壁は厚く、火山灰性のガラス質粒子や3~5mmほどの岩粒を含む胎土を使用している。851も外に直線的に開く口縁で、口径9cm、高さ6.2cmが復元され、口縁部下位で垂直に屈折し、平底の胴部を形成する。なお、刷毛目のカキアゲで胴部との境界が形成される。火山灰性のガラス質粒子と白色鉱物を多く含む砂質の強い胎土で、ザラザラな器面をなしている。852も外に直線的に開く口縁である。口径9.4cm、高さ7.5cmが復元され、口縁部下位で垂直に屈折し、平底の胴部をなす。なお、胴部との境界は、成形時の刷毛目カキアゲやナデ等で形成される。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、にぶい橙2.5YRの桃色に近い器面をなしている。853は碗状の胴部を持つもので、口径は9cm、高さ6.9cmで、口縁部と胴部の境界はヘラケズ



第170図 古墳時代 土器 埴 4

0 10cm
(S=1/3)



第171図 古墳時代 土器 埴5

り等で形成され、底部は狭い平坦な接地面を持つ。火山灰性のガラス質粒子や岩粒を含む胎土を使用している。(170図)

埴1型式 (854～875)

埴1型式は、埴0型式2を継承するもので、外に開く口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群と、短く直線的に立ち上がる口縁部と丸底で蕪状の胴部で構成する一群がある。中でも、後述の一群は中村編年の埴1型式に該当する。

854はほぼ直行する口縁である。そのままやや尖り気味の底部に移行するもので、口唇部外面を薄く削り段を造り出している。器壁は薄く、精選されたきめの細かい胎土を使用し、橙2.5YRの特徴的器肌をなす。なお、胎土は火山灰性のガラス質粒子を多量に含むもので、精選胎土の使用や器壁の薄い成形手法等から搬入品の可能性が高い。855はやや開きながら直行する口縁で、胴部は上位で明瞭に屈折し、そのまま浅い算盤玉状の胴部を構成する。口径は8.8cm、高さ5.4cmである。そのうち口縁部の長さは3.8cmで器高の7割を占める。屈曲部から下位が、そのまま胴部となる。器壁は薄く、粒子の細かい精選された胎土で、丁寧なナデで調整する。浅黄橙10YRの器肌で軽量の仕上がりをなす。856はやや開きながら直行する口縁で、胴部は上位で鋭く屈折し、浅い算盤玉状の胴部を構成するもので、13.5cmの口径が復元できる。857は外に直線的に開く口縁で、偏球状の胴部からそのまま若干尖り気味の丸底に移行するもので、口縁直下に1条の細い沈線文を持つ。器壁が薄く、精選された胎土を使用し、灰白10YRの特徴的器肌をなす。なお、胎土及び成形の手法等から搬入品の可能性が高い。858の口径は8.4cmで、器高は6.3cmが復元されるもので、器壁は薄く、外面はヘラで縦にミガキ、内面には刷毛目の調整が残される。859は先の857を連想させる形状で、ヘラによる丁寧な仕上げが見られる。(171図)

860は直行する口縁で、口縁部を薄く削り段をつけて

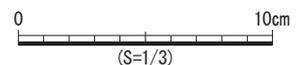
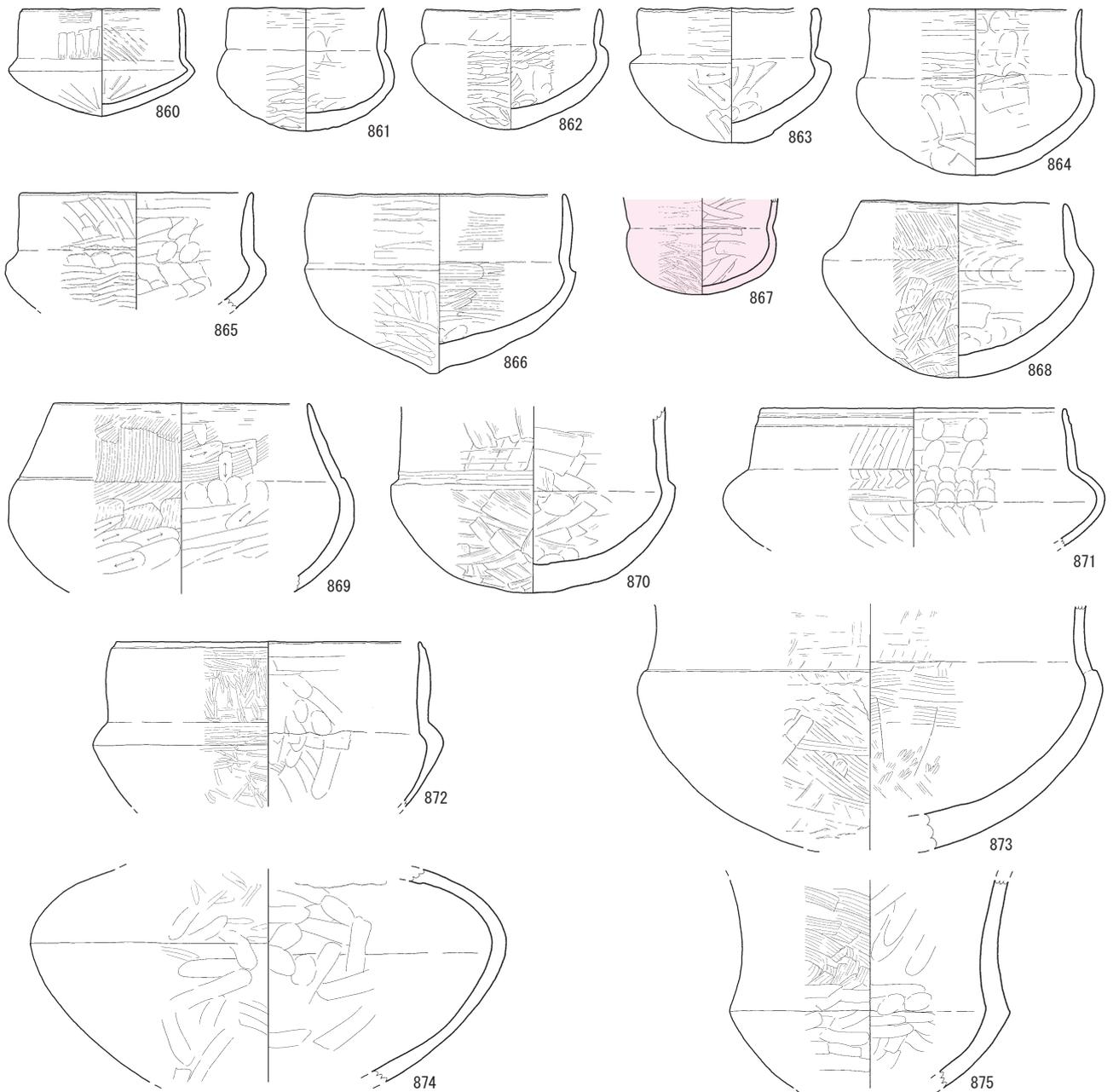
いる。胴部は上位で鋭く屈折して、算盤玉状の浅い胴部をなす。口径は7.2cm、高さ5cmで、口縁部と胴部比はほぼ1:1を示している。器壁は薄く、粒子の細かい精選された胎土に赤色粒を含む。器肌は淡橙5YRと明るく、軽量の仕上がりをなす。なお、胎土及び成形の手法等から搬入品の可能性が高い。861は口縁部が直行し、丸い碗状の胴部を持ち、口径7cm、高さ5.7cmが復元される。胴部から底部の器壁が厚いが、仕上がりは軽量である。外面の下半部から底部では工具ナデ痕が顕著に残され、内面は平坦に仕上げている。862は口縁部が直行し、碗状の胴部を持つ小型丸底壺で、861に類似する。口径8cm、高さ5.6cmが復元される。胴部から底部の器壁が厚く、外面は工具ナデで丁寧に仕上げられる。胎土は白色鈹物を多く含む。863は器壁は厚いが、短く直行する口縁部で、偏球形の胴部を持ち、口径8cm、高さ6.3cmが復元される。胴部から底部の器壁が厚く、底部付近では工具ナデの粘土溜まりが残される。やや大粒の白色鈹物を含む胎土で、重量のある仕上がりをなす。864は口縁部が直行し、偏球状の胴部を持つもので、口径9.8cm、高さ7.8cmが復元される。外面は丁寧なナデで、暗赤褐2.5YRを呈し、光沢を残している。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用し、キラキラな器面をなす。865の形状は864を踏襲する。866は外側がやや内傾する口縁で、胴部は上位で鋭く算盤玉状に屈折し、尖り気味の底部をなす。口径は11.7cm、高さ8.4cmで、外面は工具で丁寧にみがかれ、底部の中心に小突起を持つ。器面は明るい橙2.5YRで、破断面はサンドイッチ状をなす。口縁部及び偏球状の形状は1型式で、丸底の中心の小突起は2型式の特徴とされる。867は口縁部が直行し、丸い胴部を持つものであり、口縁部は欠損する。やや器壁は厚いが、丁寧な仕上げである。両面とも色調は、橙2.5YRと赤い。868は内傾する口縁で、胴部は上位で屈折して偏球状をなす。口径は9.4cm、高さ8.2cmで、外面の口縁部に刷毛目のカキアゲがそのまま残される。器壁は厚く、重量のある仕上がりで、白色鈹物を中心にカ

クセン石、石英等を多量に含む胎土で、ザラザラな器面を呈している。869は内傾する口縁で、胴部は丸く膨らむ。口径は11.6cmで、外面には刷毛目がそのまま残される。特に、口縁部のカキアゲは、胴部との境界を形成している。器壁は薄く、胴上部は刷毛目、下部から底部はヘラケズリの仕上げである。きめの細かい胎土を使用し、にぶい橙7.5YRを呈している。870は最大径13.2cmの大型で、底部にかけて器壁が厚くなる。871も復元口径14cm、最大径17.8cmの大型で、精選胎土を使用し器壁は薄く、軽量の仕上がりとなる。口縁端部にはヘラ削り痕を二重に、内面には指頭痕を残し、浅黄橙10YRの特徴的器面を呈している。872は復元口径14.2cm、最

大径16.4cmで、口縁部のヘラミガキが際立つ。873は最大径21.6cmが復元される大型で、底部付近での器壁は1.5cmを越える。外面はナデと刷毛目、内面は刷毛目を主に、部分的にミガキやナデで調整し、接地面が平坦面を持つ可能性も見られる。874の最大径は22cmで、精選胎土を使用し軽量に仕上げている。875は器壁の厚いもので、最大径は13cmあり、口縁下部には櫛描波状文の刷毛目調整が残される。(172図)

埴2型式 (876 ~ 896)

埴2型式典型は、口縁部が外開きの傾向を示し、胴部が蕪状に膨らんで丸底を中心に構成し、中にはその中心に乳頭状の突起を持つもので、東原式に該当する。なお、

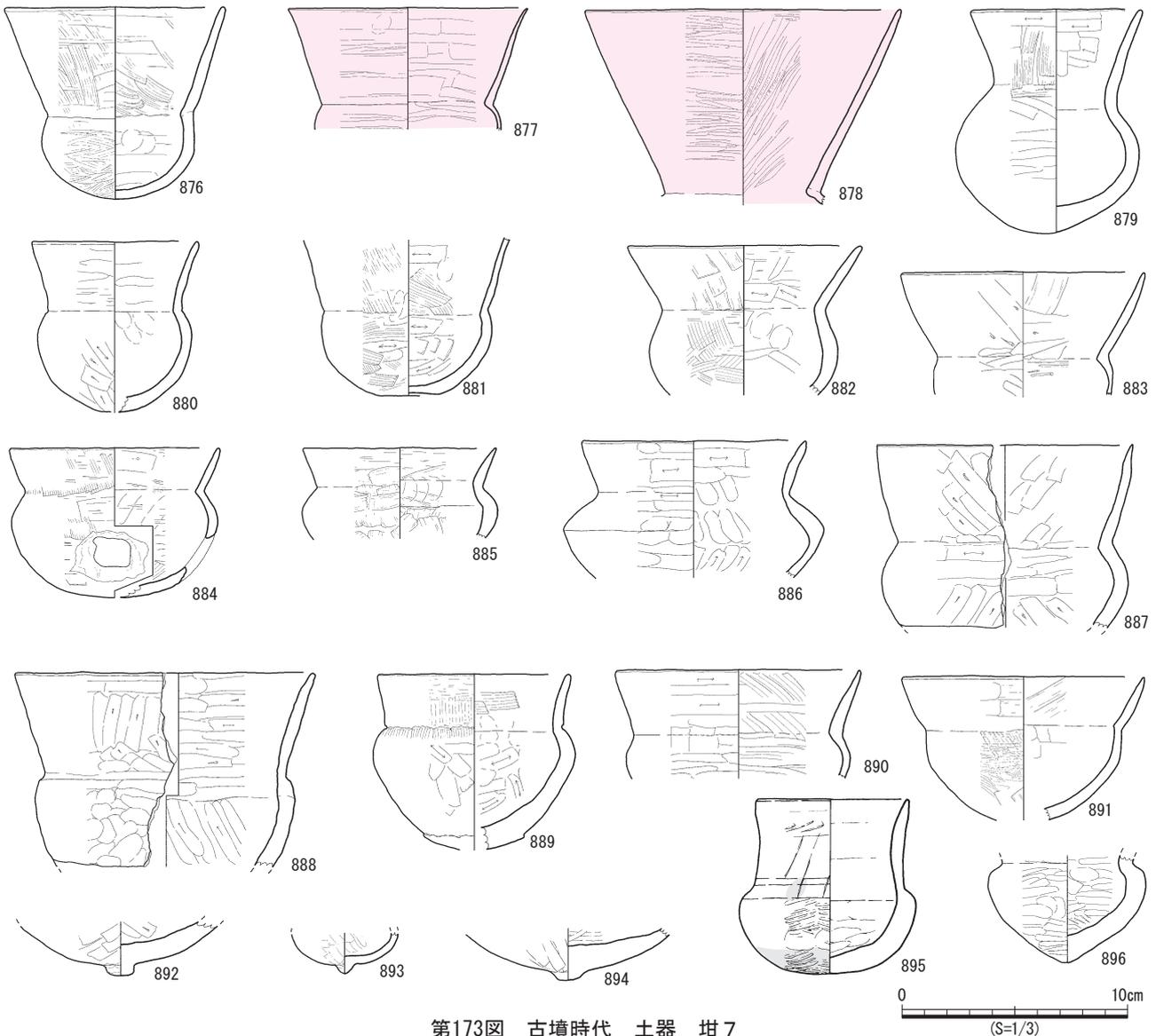


第172図 古墳時代 土器 埴6

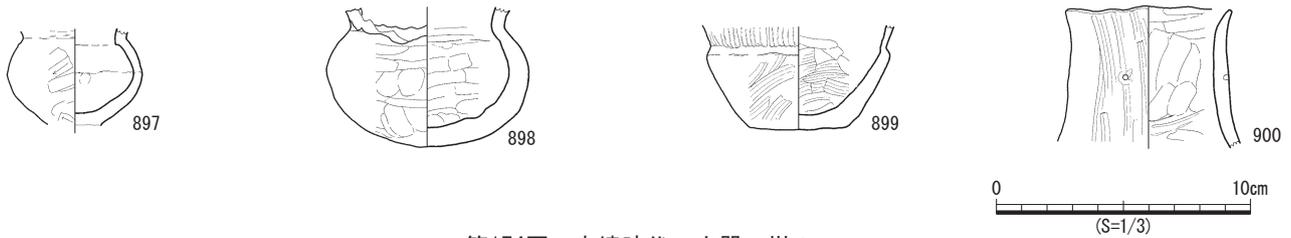
器面調整は横方向のナデが中心で、口縁部での縦方向のヘラミガキ等は見られない。

876の口縁部は直線的に大きく開くもので、胴部が丸く、口径9.6cm、高さ8.6cmの完形品である。赤色粒を含むが精選されたきめの細かい胎土で、器壁は薄く、丁寧な仕上がりを見せる。877は火山灰性のガラス質粒子を多く含むきめの細かい精選胎土を使用し、器壁も超薄型で、超軽量の仕上がりである。復元口径10.4cmで、橙2.5YRの器肌は、化粧土を用いたと思われる。878は復元口径14cmの口縁部である。きめの細かい精選胎土を使用し、丹塗りの可能性がある。879は復元口径7.4cm、高さ10cm、の完形品である。口縁部は外開きに直し、胴部は丸く球形に膨らみ、底部は若干突出する。器壁は厚く、丹塗りの痕跡は認められない。880は外に直線的に開く口縁と、丸い胴部を持つもので、口径は7.4cm、高さ7.5cmが復元される。881の口縁部は外に直線的に開き、胴部は丸く、底部は平底をなす。器壁は薄く、赤色

粒が目立つ胎土である。882は外に直線的に開く口縁と、丸い胴部で、口径は10.4cmほどが復元される。白色鉍物を含む胎土で、両面とも色調は橙2.5YRと赤い。883は口縁部が外に大きく開くもので、口径11cmほどを復元している。丸い胴部が想定されるが、底部形状は不明である。大量の白色鉍物や岩粒を含む胎土で、両面とも色調は橙2.5YRと赤い。884は短く直線的に開く口縁で、胴部は丸く、胴部穿孔の起点は内側にある。なお、接地面には、外側に起点のあるクレーター状の剥離痕も残される。3mmほどの岩粒や2mmほどの白色鉍物を含むが、精選された胎土で、器壁は薄く軽量で、刷毛目後、丁寧にナデで仕上げている。胎土及び成形の手法等から、肥後からの搬入品の可能性も検討される。885は外に直線的に開き端部が細くなる口縁で、口径は8.5cmほどが復元され、胴部は丸い。赤色粒を含む胎土で、両面とも色調は橙2.5YRと赤い。886は胴部でくノ字に屈折する。887は復元口径11.4cm、器肌は浅黄橙10YRを呈す。888



第173図 古墳時代 土器 埴 7



第174図 古墳時代 土器 埴8

は復元口径13cmで、1mmほどの白色鉱物を多く含む胎土である。内面の口縁部には粗いヘラミガキが見られる。889は口径8.4cm、高さ8cmほどが復元される。器壁の厚い小型丸底壺で、胴上部から口縁部の境界には刷毛目が顕著に残される。890は口径10.8cmで、口縁部と胴部を刷毛目のカキアゲで区分する。891は接地面を欠損するが、外に大きく開く口縁と碗状の胴部で構成するもので、器壁は特に薄い。搬入品か？。892～894は底部突起が見られる。892は赤色粒、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を多く含む。893は白色鉱物を含む胎土を使用する。894は精選胎土を使用し、両面に黒斑が残る。895は口径6.6cm、高さ7.7cmの完形の小型丸底壺で、特に底部の器壁は厚く、安定した座りをなすが重量がある。底部外面では刷毛目を短く繰り返し、口縁部では縦方向に、左から右へ移動している。内底面から屈曲部まではナデ、口縁部は横に丁寧な工具ナデで仕上げる。器面は鈍い黄色で、砂質の強い胎土でザラザラな器面をなす。896の器壁は厚く、底部は尖る。(173図)

埴3型式 (897～900)

埴3型式は、口縁部は坏形を呈し、屈折する胴部の重心は低く、基本的に平底をなすもので辻堂原式～笹貫式に該当するとされる。

897は胴部最大径が5.4cmほどで、平底の可能性が高いものである。赤色粒を含む胎土を使用している。898は重量のある仕上がりで、口縁部の加撃点は内側である。899の口縁部は刷毛目のカキアゲで調整し、平底をなす。900は口縁部に沿って粗い工具痕を残し、未完通の穿孔痕がある。(174図)

手捏土器 (第175～177図901～993)

手捏土器の認定は、指頭による押圧調整を基本であるが、一部では工具ナデや丁寧なナデ仕上げも見られる。また、ほとんどの胎土に火山灰性のガラス質粒子が含まれている。なお、破損品が多数を占めていることであり、したがって、その破損状況に注目した。その具体的破損状況には、口縁部の一部を欠損するものから底部を欠損するもの(917)、概ね2分割するもの、4分割するものが存在している。

底部丸形の甕型 (901～935)

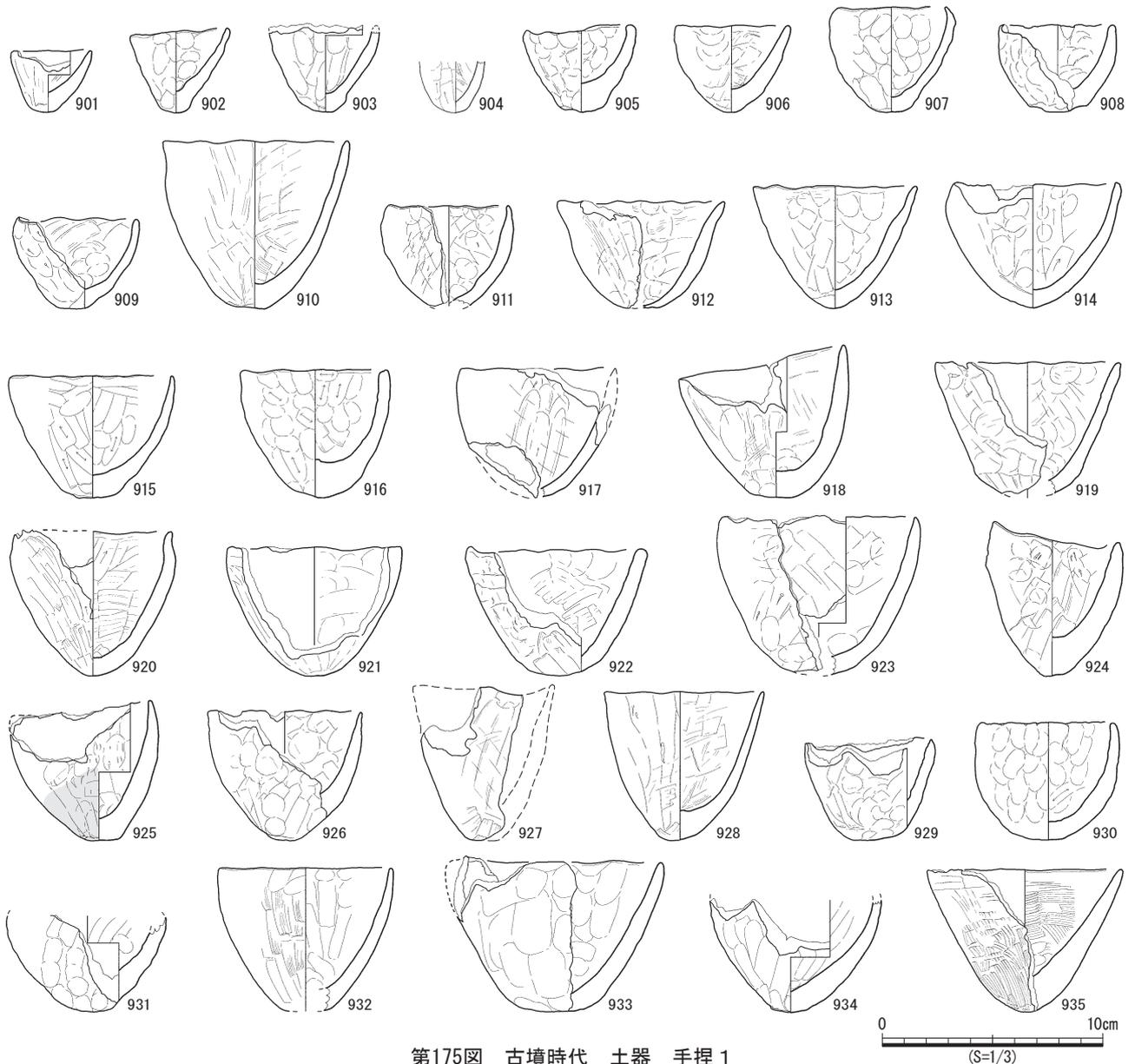
丸底で、器高が口径を上回る甕型の一群である。いわ

ゆる「ぐい呑み」状の901や913から、「碗」状の908や914が見られる。口径では901の最小3.6cmから、922の口径7.7cmまで存在する。なお、意図的に欠損したと判断されるものが存在することから、欠損状況等については記載することとする。

901の器高は3cmほどで、口縁部の2/3ほどを欠損する。なお、欠損の起因と見られる加撃点が内外にあることから、意図的な破損と判断している。902・903の底部は、突出気味に張り出し、小型で且つ、厚く頑丈に作り出されている。902の口縁部は、外側から欠損する。903は口縁部の全てを、内外から細かい加撃を繰り返して欠損する。904は黒斑が半分ほどを占め、口縁部の全てを欠く。905の口径は4.8cm、高さ4cmで、白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し、にぶい橙5YRの色調で、口縁部の2か所を外側から欠く。906は口径5.1cm、高さ4cmで、1/4ほどを黒斑で占める。907の口径は4.9cm、高さ4.8cmで、器壁の薄い軽量な仕上がりで、指頭痕が明瞭に残るものである。加撃点は外側からの1点であるが、人的か否かの判断は困難である。908は厚みのある器壁で、およそ3分割されると見られる。909の口径は5.3cm、高さ4.2cmで、器壁は薄い。内面は丁寧にナデられ、4分割の可能性がある。910は口径8.2cm、高さ7.7cmで、赤色粒や1mmほどの石英が目立つ胎土である。黒斑も鮮やかに残る。指頭圧を加えた後、工具ナデを重ね、口縁部の3か所を欠く。911は内底部の加撃により3分割され、2つの破片が復元される。912の胎土は火山灰性のガラス質粒子を含み、破片2点の接合により、1/2ほどが復元される。913も1/2ほどの残存で、口径7.4cm、高さ5.6cmが復元される。胎土に白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含み、指頭痕が明瞭に残る。914・915の口縁部は、外側から加撃され欠損する。914の胎土は石英などの白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子、赤色粒が目立つ。916・924・928・930は完形品。917は口縁部の3か所と底部を内側からの加撃により欠損する。中でも底部は一撃により貫通している。918は2分して採取され、対峙する口縁部2か所を欠く以外はほぼ完形に復元されている。欠損する口縁部はそれぞれの加撃点があり、両方とも外側から加撃される。919は胴部下位で破片化した1/3ほどの破片で、底部を中心に黒斑が広がり、胎土には2～3mmほどの岩粒を含む。920の口縁部は内

側から加撃され、3分割する破損面は外側から加撃している。最終的には、工具ナデで仕上げている。921の口径は7.6cm、器高5.9cmで、口縁部の対峙する内外に黒斑が残り、にぶい橙7.5YRの胎土には白色鉱物と大量の火山灰性のガラス質粒子が含まれる。胴下部で2つの破片に碎片化する。922の外面にはひび割れと横方向に打ち込んだヘラ痕が残る。923は口径8.8cmで、胎土には2mmほどの白色鉱物と石英が含まれる。4つの破片に碎片化したと見られ、未回収の底部を除き3破片は同一区で採取されている。924の口径は5.8cm、高さ6~7cmほどで、口縁部の一部をわずかに欠損するもので、黒斑が1/2ほどを占め、重量のある仕上がりをなす。925は口径6.4cm、器高6.4cmで、指頭調整時の爪痕が外面の全域に多数残される。口縁部1cmほどを残し、全て打ち欠き、胴上部には外側からの加撃点が認められる。胎土は赤色粒や白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含み、器

面は丁寧にナデで調整し、にぶい橙7.5YRをなす。926は口径7cm、器高6cmで、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土である。内外とも指頭痕が良く残される。残る破断面からは、人的と判断される5回の碎片化が見られる。927は2~3碎片化したと見られ、特に、口縁部は内側に加撃点がある。928の口径は7cm、器高6.8cmの完形品で、1~2mmほどの白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子を多く含み、縦方向の工具ナデで仕上げる。929の口縁部の加撃点は内側で、931は2分割で口縁部を欠く。933・934の加撃点は両側にある。929は口径5.7cm、器高4.7cmで、口縁部を1cmほどを残し打ち欠き、内側を起点とする加撃点が2か所は確認できる。930は口径6.1cm、器高5.4cmの完形品。浅黄橙7.5YRの器面の1/5ほどに黒斑が残る。内外面の指頭痕と、口唇部及びその内面のひび割れが特徴的である。931は口縁部全てを欠損するもので、胎土の赤色粒が特に目立つ。932は



第175図 古墳時代 土器 手捏 1

内外とも工具ナデで仕上げたもので、胴部の半分ほどの2破片が復元される。933も胴部の半分ほどに当たる2破片が復元されるもので、口縁部への加撃点は内側にある。なお、復元口径は9.6cm、器高5cmで、丁寧なナデで仕上げている。934は白色鈹物が目立つ胎土で、両面とも丁寧なナデ仕上げを行い、口縁部は全て除去し、内外に加撃点がある。935は両面とも刷毛目調整痕を残し、碎片化の1/5ほどの資料で、器壁等は厚い。復元口径は8.8cm、器高は6.5cmである。(175図)

底部平底の甕型 (936 ~ 942)

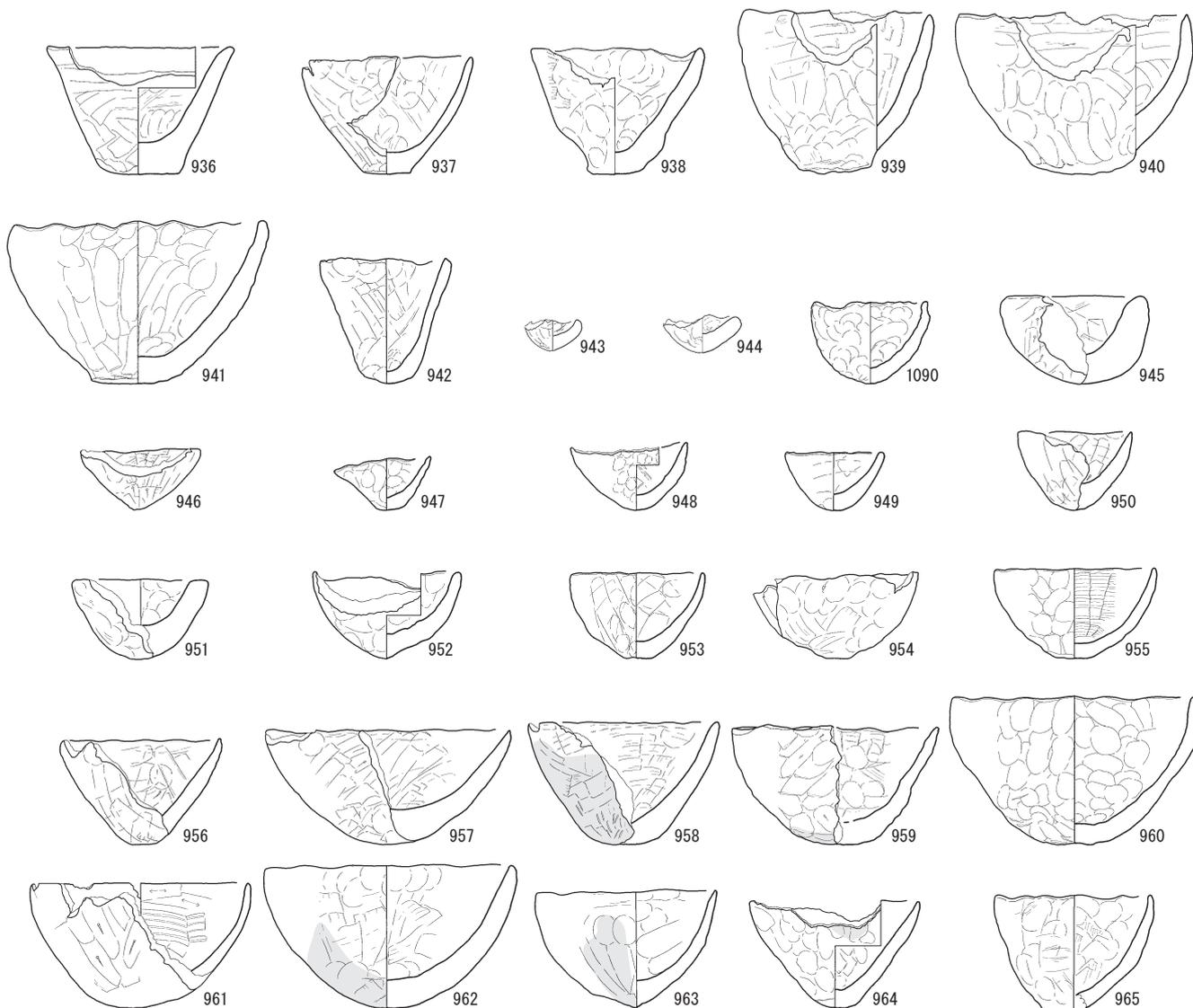
平底で、器高が口径を上回る甕型の一群である。

936・937は口縁部下位に黒斑を持つ破損品で、内面は丁寧にナデられる。936の口径は8cm、器高5.6cmで、3cmほどの平底を持つ。器壁が厚く、堅牢な焼成を成すもので、口縁部へは3回の加撃が見られる。937は口径7.5cm、高さ5.2cmで、2cmほどの平底を持つ。内面は丁

寧にナデ、底部は工具で仕上げる。938は器壁の厚い堅牢な焼成を成すもので、口縁部の2cmほどを残し、他は全て打ち欠き、その加撃点は両面にある。939の内面は工具ナデで、口径8.1cm、器高7.2cm、3cmほどの平底を持つ。口縁部の一角を内側から加撃し、破損する。940の口径は10cm、器高7.1cmで、4cmほどの接地面を持ち、重量のある仕上がりをなす。胎土は赤色粒や白色鈹物、火山灰性のガラス質粒子を含み、色調は明赤褐2.5YRである。口縁部の一角を内側から加撃して欠く。941は口径11.2cm、器高7.2cmで、重量がある。黒斑あり。赤色粒、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、色調はにぶい橙5YR。942の口径は5.5cm、高さ5.5cm。黒斑あり。白色鈹物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、色調はにぶい橙5YR。(177図)

底部丸底の鉢型 (943 ~ 965)

丸底で、口径が器高を上回る鉢型の一群である。



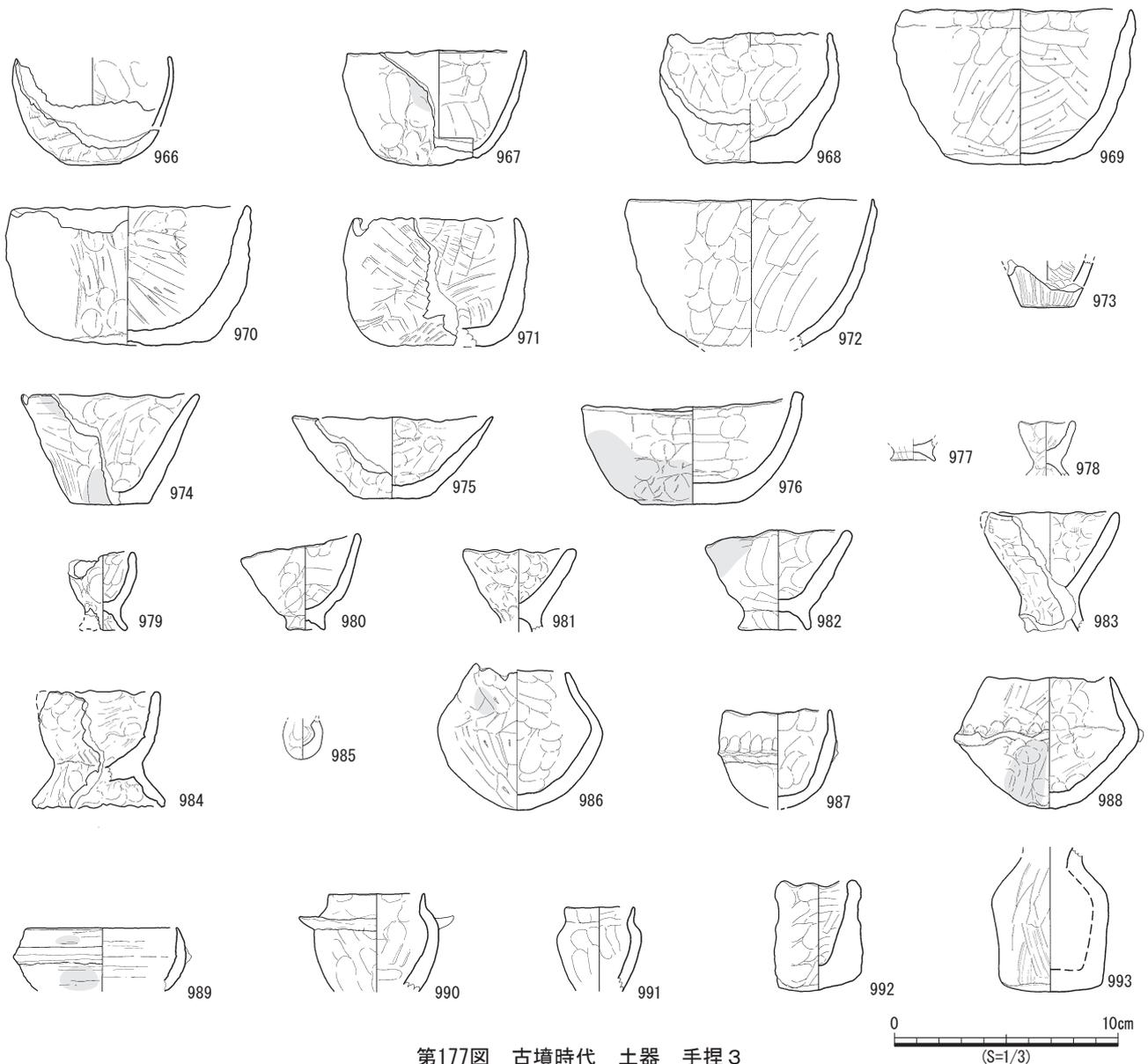
第176図 古墳時代 土器 手捏2

943の口径は2.2cm, 器高1.3cm, 944は口径2.7cm, 器高1.7cmの超小型で, 2点とも口縁の一部を欠損する。945は器壁が厚く重量があり, 内面は光沢を保つ。口縁部はミガかれた可能性が高い。946は工具ナデで仕上げ, 口縁部の一部を欠く。948も器壁が薄いもので, 外側からの加撃で口縁部の一部を欠く。949は口径4.3cm, 器高2.6cmの均整のとれた完形品である。950は2つに碎片化した可能性が高い。951は1/4ほどに碎片化したもので, 軽量である。加撃点は内側と見られる。952は精選胎土を用い, 碎片化の2点は内側から, 1点は外側から加撃している。953も口縁部の一部を欠く。白色鉍物の混入が特徴的である。954の碎片化は918と酷似し, 対峙する口縁部2か所が欠損する。欠損する口縁部はそれぞれの加撃点があり, 両方とも外側から加撃されたと見られる。955は口径6.9cm, 器高4cmで, 956も碎片化した底部を一部含む資料で, 渦巻状の巻き上げ手法が観察で

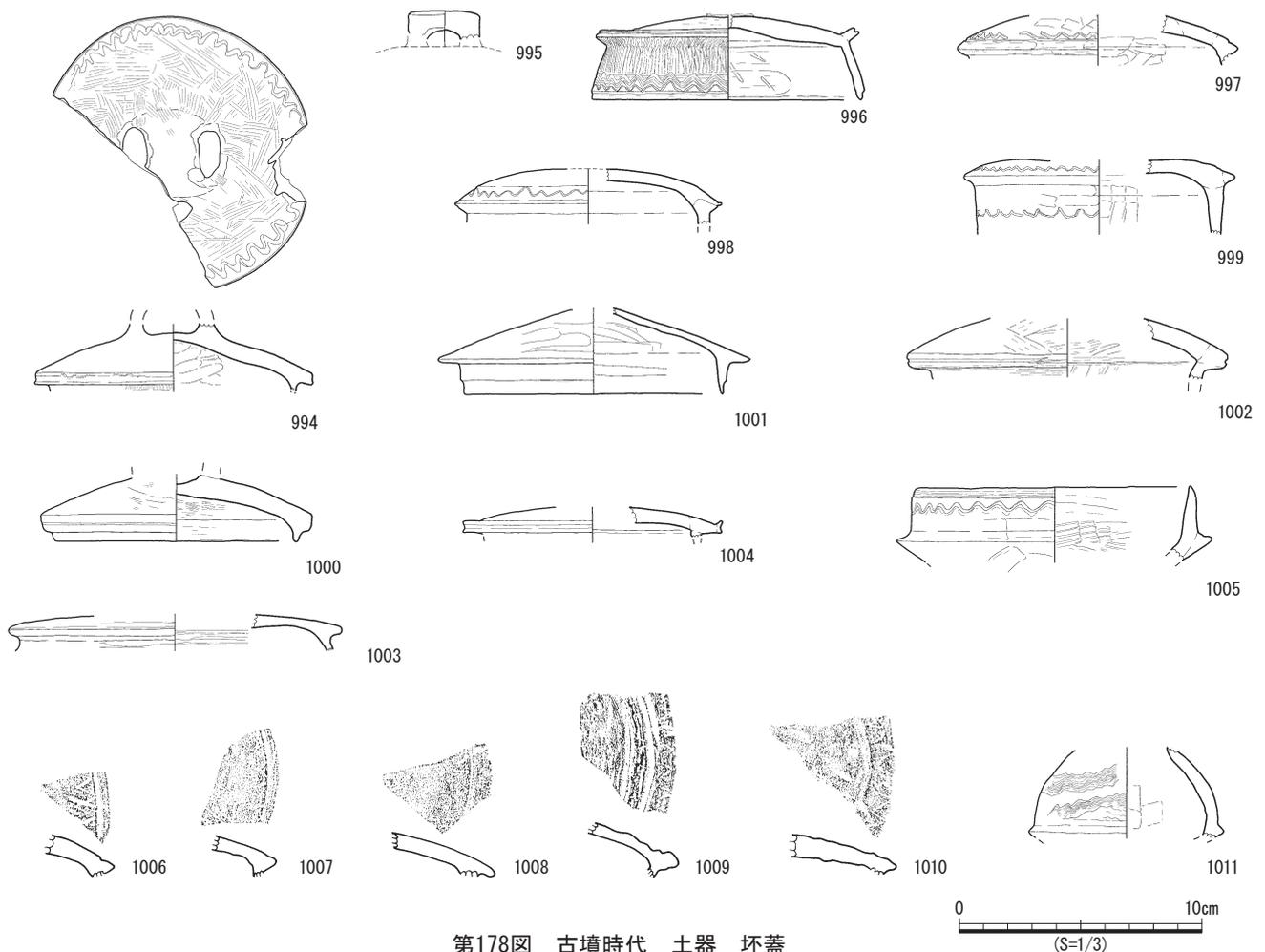
きる。957は口径10.6cm, 器高5.1cmである。958は碎片化した資料で, 1mmほどの石英, 2mmほどの赤色粒や火山灰性のガラス質粒子を多量に含む。内外面に煤状炭化物が付着する。にぶい橙5YRを呈す。復元口径8.2cm, 器高5.4cmである。959の外表面は指頭痕で, 内表面は工具ナデで仕上げる。胴部の1/3ほどと口縁部の一角を欠くが, 口縁部は外側から複数加撃し, 内底面と底面にダメージ痕が残る。白色鉍物が目立つ胎土である。960は口径10.6cm, 器高6.5cmで, 内外面の指頭痕が顕著である。961の内面は刷毛目調整で, 碎片化は959に酷似する。962の口径は10.7cmと大きい。指頭痕が残される。963・964の口縁部への加撃は対峙し, 両面胴部の一部を内側から欠く。965は口径6.8cmで, 内底部を加撃点にはほぼ4つに碎片化される。(176図)

底部平底の鉢型 (966 ~ 976)

平底で, 口径が器高を上回る鉢型の一群である。



第177図 古墳時代 土器 手捏 3



第178図 古墳時代 土器 坏蓋

966は内底面に黒斑を持つもので、5mmほどの口縁部を残し、他は底部上部まで繰り返し加撃して破損する。967は器壁が薄く、胴下部から底部にひび割れを持つもので、口縁部の対峙する位置に加撃を加えたと見られる。968は底部を主に器壁は厚く堅牢な焼成で、重量があり、口縁部の約1/2が欠損する。なお、破損の加撃点は内側にある。969は口径10.2cm、高さ7cmである。970の口径は10.5cm、器高6.3cmと大きく、外面には指頭痕と縦方向のひび割れが顕著に残され、内面は粗い工具ナデで仕上げる。赤色粒や白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、口縁部の大部分が欠損する。971の内面は工具ナデで仕上げる。口径7.2cm、高さ5.7cmの臼状で、口径と底径に近い。972の復元口径は11cm。973の底径は2.4cmの平底で、上部は全て欠損する。外面では刷毛目調整が見られる。974は口径7.8cm、高さ5cm、底径3.6cmで、丁寧なナデで調整する。均整のとれた形状をなす。胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。975は口径8.9cm、高さ3.7cmで、正面の破損の加撃点は内側にある。971・974・975はいずれも1/3ほどの破片資料で、975・976の口径は大きい。(177図)

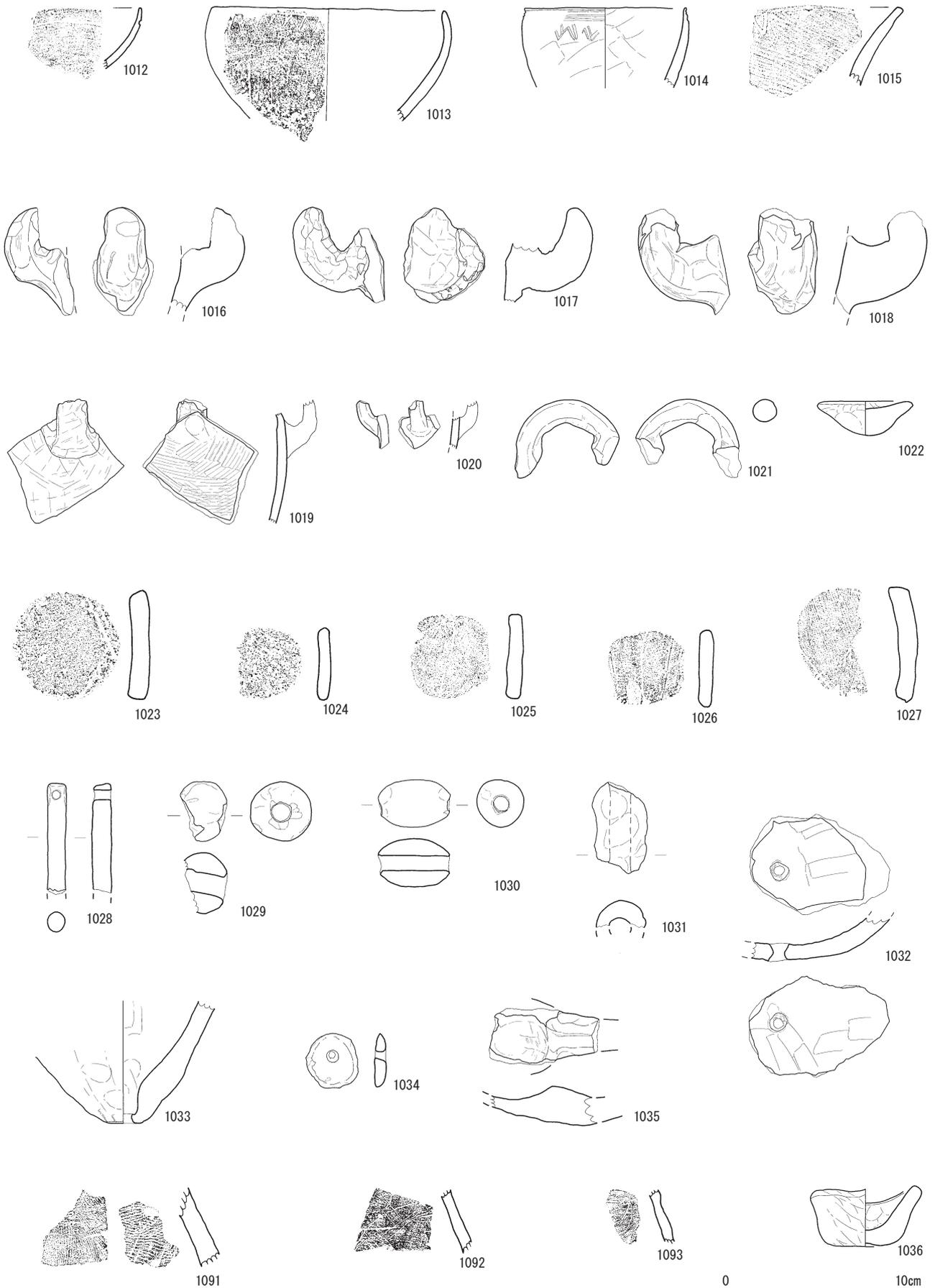
変容（高台付）（977～983）

大小の高台を持つ一群で、977～979・984の4点は臼状をなす。

977の底径は2cm、978の口径は2.2cmで、2点とも超小型で、977の上部は欠損する。979の口径は2.8cm、高さ3.5cm、底径2.2cmで、口縁部と脚部の一部が欠損する。980は内底面に右上がりの指押さえ痕が残され、口唇部は尖り気味に仕上げる。口縁部の2/3ほどが欠損する。981の脚部は数回の加撃で除去される。982は厚い器壁で、口唇部は丸く、底部はわずかに張り出す。983・984はおおよそ2分割され、983の加撃点は外側にある。(177図)

その他（985～993）

985はきめの細かい精選胎土を使用し、口縁部を欠く1/2ほどの資料で、超小型壺と見られる。986は蕪形の胴部で、口縁部の一部を残し破損する。987は1/5ほどの残存資料で、三角突帯を持つ。988は口径5.6cm、器高6cmで、三角突帯文を指頭で貼付けている。黒斑を持ち、白色鉱物の目立つ胎土で、にぶい黄橙10YRを呈す。989の口径は6.8cmで、色調は浅黄橙10YRをなす。突帯を貼りつける。990の復元口径は4.3cmで、三角突帯は上を向く。



第179図 古墳時代 その他

0 10cm
(S=1/3)

991は破損品で、口径は3cmである。きめの細かい胎土を使用する。992は口径3.5cm、高さ5cmである。993は小瓶形の手捏土器で、器壁は厚く、重量がある。(177図)

坏蓋 (第178図994～1011)

その形状から坏蓋と判断したもので、その大部分で蓋の外縁部に櫛描波状文(鋸歯文)を施し、頂部に橋状の把手を備えている。

994は外縁部に櫛描波状文を施し、橋状の把手を持つ坏蓋で、外面は細かい刷毛目調整で仕上げ、胎土に火山灰性のガラス質粒子を多量に含む。最大径11.5cmで、にぶい橙7.5YRを呈す。995は蓋の把手で、996等に対応すると見られる996は口径10.1cmで、つまみ部が欠損する。997の口径は11.5cmで、胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。998は底径11cmで、外縁部に櫛描鋸歯文を施し、内面は光沢を保つ。999は口径11.2cmで、外縁部と口縁部に櫛描波状文を持ち、口縁部が高く作られる。きめの細かい精選胎土を使用する。1000は橋状の把手を持つもので、精選胎土を使用する。内面は刷毛目調整仕上げで施文は見られない。底径は10cmを測る。1001は底径12.8cmで、無文。1002は口径13.2cm。1003は底径13.8cm。1004は底径10.6cmで、端部が張り出し、内面は球心状の工具ナデである。1005は口径11.2cmの坏身と判断したが、天地は不明である。1006～1010は、口径の復元には至っていない。1011の最大径は8cmが復元されるが、器種・傾き不明で、並走する櫛描波状文が施される。

器種不明 (第179図1012～1015)

1012～1015は器種不明である。1013は鋸歯文、1014は櫛描波状文を持つ。1015の口唇部は直線的に開く。

甌把手 (第179図1016～1021)

1016～1018の3点とも器本体は特定できないが、甌の把手で、傾き等詳細は不明である。1019もその可能性が高く、内面にはタタキ痕が残る。1020は小型で、把手と判断しているが詳細は不明である。1021の裏面の剥落状況からみて、口唇部の上位に付けた把手の可能性が高いと思われる。

器種不明土製品 (第179図1022)

1022は底部を再利用しているが、用途等は不明である。

メンコ (第179図1023～1027)

1023は表面に並行沈線文が残されるもので、カクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土が使用される。5.9cm×5.3cm。1024は赤色粒や白色鉱物を多く含む胎土を使用する。4cm×3.5cm。1025は火山灰性のガラス質粒子を多く含む。4.9cm×4.8cm。1026は火山灰性のガラス質粒子を多く含む。4.2cm×4.5cm。1027は格子状沈線文

を持ち、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を多く含む。6.2cm×4.5cm。

有孔土製品 (第179図)

土錘 (1028～1031)

1028は、精選胎土を使用した双孔土錘で、長さ6cm、径1cmである。時期等詳細は不明である。1030は長さ4cm、厚さ2.6cmの完形の管状の有孔土錘で、1cmほどの孔が確認できる。1029は幅3.4cmほどであるが、大半は欠損する。なお、1030がⅡ層で出土する記録が残るのみで、詳細は不明である。1031も管状有孔土錘で、黒斑を持ち半裁する。おそらく、粘土塊を手中に握り締めて製作したと見られる。

有孔製品 (1032～1034)

1032は鉢あるいは甕と見られる。底部に設けた孔は、焼成前に設置している。内外とも丁寧な工具ナデである。1033は尖底中央部に焼成前に穿孔する。詳細は不明である。1034も有孔土製品であるが詳細は不明である。

匙形土製品 (第179図1035)

1035は把手部を含め大部分を欠損する。背面に黒斑を残し、にぶい橙7.5YRを呈す。

石製品 (第179図1036)

1036の石材は安山岩で、上面観は5.4cm×6cmの楕円形、高さは2.5cm～3.4cmである。4cmほどの接地面中央部が若干凹む鉢状の石製品である。いわゆる口縁部は丸く、内面は密な摩耗面を保ち、外面は敲打で形成した可能性が高い。

線刻画土器 (第179図1091～1093)

1091～1093は、外面に線刻画と想われる文様が描かれる。器種、部位等は不明である。

弥生時代 土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記番号	器 種・分 類		部位	胎土					調整		備考		
			型式名	中町馬場遺跡		石英	長石	カセ石	ガラス 粒子	その他	外面	内面			
5	1	C-36 IV 71862・ 71864・71867・ C-36 IV a71860・ 71863・71866・ 71869・71871・ C-36 IV a71860・ 71863・71866・ 71869・71871	井出下式	甕 I a 類	口縁部～ 胴部	○	○				赤色粒	工具ナデ	指頭圧痕	刻目突帯	
	2	D-37 IV 一括	高橋 I・II 式	甕 I c 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ	工具ナデ	刻目突帯	
	3	C-8 III	入来 I 式	甕 I d 類	口縁部			○				ハケ目	工具ナデ	刻目突帯	
	4	B-37 トンテ	入来 I 式	甕 I d 類	口縁部～ 胴部							ハケ目	工具ナデ	沈線文・ 刻目突帯	
	5	D-18 ミヅ 4699	入来 I 式	甕 I d 類	口縁部～ 胴部			○			赤色粒	工具ナデ	指ナデ	刻目突帯	
	6	C-23 III 一括	入来 II 式	甕 III a 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ	工具ナデ		
	7	C-36 III 一括	入来 II 式	甕 III a 類	口縁部							工具ナデ・指頭痕			
	8	D-37 IV 107705	黒髪 I 式	甕 IV a 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
	9	D-29 II 一括・ B-30 III 一括	黒髪 I 式	甕 IV a 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ	工具ナデ		
	10	A-25 III 一括・SHB00	黒髪 I 式	甕 IV a 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
	6	11	D-29 イワ 7240	黒髪 I 式	甕 IV a 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ・ミガキ	指頭痕・ケズリ・ 工具ナデ	
12		C-33 III b	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ・指ナデ		
13		A-22 III 上	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
14		A-27 III A-27・28 イワ 2464・ 未注記	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ	工具ナデ		
15		E-30 III b 一括	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部							ミガキ	工具ナデ・指ナデ		
16		A-25 III 一括	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部～ 胴部							ミガキ	工具ナデ・指ナデ		
17		D-5 イワ 61	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部～ 胴部						雲母	工具ナデ	ミガキ		
18		SHB99	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部							工具ナデ・ ハケ目後工具ナデ	工具ナデ・ ハケ目後工具ナデ		
19		C-19 III 一括	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部				○			工具ナデ	工具ナデ		
20		F-7 ミヅ 3232	黒髪 II 式	甕 IV b 類	口縁部～ 胴部	○	○	○	○			工具ナデ	工具ナデ		
21		SHB02	黒髪 III 式	甕 IV c 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
22		E-30 II・埋土一括	黒髪 III 式	甕 IV c 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
23		D-37 IV 108446	須玖 I 式 中段階	甕 V a 類	口縁部							○	工具ナデ	工具ナデ・ハケ目	
24		C-33 III b 一括	須玖 I 式 中段階	甕 V a 類	口縁部								工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	丹塗
25		D-29 IV 一括	須玖 I 式 中段階	甕 V a 類	口縁部								工具ナデ	工具ナデ	
26		C-37 III b	須玖 I 式 新段階	甕 V b 類	口縁部								工具ナデ	工具ナデ・ハケ目	
27		SHB01	須玖 I 式 新段階	甕 V b 類	口縁部								ハケ目後工具ナデ	工具ナデ	
7	28	D-36 III 一括・ E-30 II 一括	須玖 I 式 新段階	甕 V b 類	口縁部～胴部						○	ハケ目	工具ナデ・指頭痕		
	29	B-30 IV 一括	須玖 I 式 新段階	甕 V b 類	口縁部							ミガキ	ミガキ	丹塗	
	30	C-33 III b・III b 一括	須玖 I 式 新段階	甕 V b 類	口縁部						精製胎土・ 雲母		工具ナデ	丹塗	
	31	D-37 II 一括	須玖 I 式 新段階	甕 V b 類	口縁部								工具ナデ	工具ナデ	
	32	注記なし	須玖 II 式 古段階	甕 V c 類	口縁部							○	工具ナデ	工具ナデ	
8	33	D-37 III b 一括	山之口 I 式	甕 III b 類	口縁部							ハケ目・工具ナデ	工具ナデ		
	34	F-30 I b 一括	山之口 I 式	甕 III b 類	口縁部							工具ナデ・ミガキ	工具ナデ	丹塗	
	35	C-36 VI b 一括・ B-36 VI b 一括	山之口 I 式	甕 III b 類	口縁部							工具ナデ・ ハケ目後工具ナデ	工具ナデ		
	36	B-36	山之口 I 式	甕 III b 類	口縁部～ 胴部						○	工具ナデ	工具ナデ		
	37	C-33 VIII 71966	山之口 I 式	甕 III b 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ	工具ナデ	2条突帯	
	38	SHB02	山之口 I 式	甕 III b 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ	工具ナデ	2条突帯	
	39	C-36 IV・D-36 IV・ D-36・37 トンテ 9609	山之口 I 式	甕 III b 類	口縁部～ 胴部							雲母	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
9	40	C-23 III 一括	山之口 II 式	甕 III c 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
	41	A-24 III	山之口 II 式	甕 III c 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ・ミガキ	工具ナデ		
	42	C-37 IV トンテ・ D-36 表 一括	山之口 II 式	甕 III c 類	口縁部							雲母	工具ナデ	指ナデ・工具ナデ・ 指頭痕	2条突帯
	43	D-24 III b 一括	山之口 II 式	甕 III c 類	口縁部							工具ナデ	工具ナデ	2条突帯	
	44	注記なし	松木蘭式古相	甕 X	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
	45	C-37 III 上 一括・ C-37 IV 一括	松木蘭式古相	甕 X	口縁部								ハケ目後工具ナデ	工具ナデ	
	46	D-36 III b	松木蘭式	甕 XII 類	口縁部～ 胴部		○		○		赤色粒	工具ナデ	工具ナデ	突帯	
	47	注記なし	松木蘭式	甕 XII 類	口縁部～ 胴部							ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	突帯	
	48	F・G-26 表カクソ土坑	松木蘭式	甕 XII 類	口縁部							ハケ目	工具ナデ	突帯	
49	D-36 表	松木蘭式	甕 XII 類	口縁部～ 胴部							工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	突帯		

弥生時代 土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考
			型式名	中町馬場遺跡		石英	長石	カクシ 石	がら 粒子	その他	外面	内面	
10	50	E-28 イウ10206 北西上	前期 壺		胴部							工具痕	ヘラ描き 沈線文
	51	B-36 Ⅲ一括	前期 壺		肩部						ミガキ	ミガキ	ヘラ描き 沈線文
	52	D-38 IVイ107712・ 107704・107714・ 107794・107795・ 107810	前期 壺		頸部～ 肩部					雲母	ミガキ	指ナデ・工具ナデ	ヘラ描き 沈線文
	53	E-35 ミア一括	前期 壺		口縁部						ミガキ	ミガキ	
	54	B-36 VI b 一括	前期 壺		口縁部					雲母	ミガキ・工具ナデ	工具ナデ・ 摩滅のため不明	
	55	B-36 IV	前期 壺		肩部						ミガキ	ミガキ	ヘラ描き 沈線文
	56	C-36	前期 壺		完形	○	○				ヘラケズリ・ミガキ	ミガキ・指ナデ	鋳歯文・ 沈線文
12	57	D-36 IV a110500・ D-36 IVイ110267・ 110268～110270・ 110272～110276・ 110279～110283・ 110285～110293・ 110298～110300・ 110296・110399・表・ 110400・D-36 IVイ一括	前期 壺		口縁部～ 胴部		○	○	○	赤色粒	ミガキ	工具ナデ・指ナデ・ 指頭痕	
	58	D-27 Ⅲ一括	入来式Ⅱ式	甕Ⅲ a類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	
	59	B-12	入来式Ⅱ式	甕Ⅲ a類	口縁部						ミガキ・工具ナデ	工具ナデ	
	60	SHB00	入来式Ⅱ式	甕Ⅲ a類	口縁部						ミガキ・工具ナデ	指頭痕	櫛描文
	61	D-31 Ⅱ	入来式Ⅱ式	甕Ⅲ a類	口縁部						指頭痕・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	櫛描文
13	62	E-29 イウ10037・ E-29 IV一括・ E-29・30 IV	入来式Ⅱ式	甕Ⅲ a類	完形						工具ナデ・ミガキ・ 指頭痕	工具ナデ・ミガキ・ 指頭痕	沈線文
	63	注記なし	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	64	注記なし・Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	65	C-27・Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	66	B-27 Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	67	C-27 Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	68	E-20 Ⅱ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	69	F-28 Ⅱ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	70	C-31 IV	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部					雲母	ナデ	ナデ	櫛描波状文
	71	E-31 Ⅲ b	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	72	C-28 IV	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	73	C-27 Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	鋳歯文
	74	C-24 Ⅱ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	75	C-24 Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	76	B-33 Ⅲ b	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	77	E-24	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	78	B-33 Ⅲ b	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	79	C-34 Ⅱ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						ナデ	ナデ	櫛描波状文
	80	C-31 Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目	櫛描波状文
	81	C-24 Ⅲ一括	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部				○		工具ナデ・ハケ目	工具ナデ	櫛描波状文
	82	B-34 Ⅲ a	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	83	B-34 Ⅲ b 一括	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	84	C-24 Ⅲ	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	85	A-27 イウ1385	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目	櫛描波状文
	86	注記なし	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						工具ナデ・鋳歯	ケズリ・工具ナデ	器台転用 櫛描波状文
	87	AA'17・18 ミヅ' 2553	須玖Ⅰ式 新段階	甕Ⅴ a類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	88	C-31 Ⅲ b	須玖Ⅱ式 古段階 壺	甕Ⅴ c類	口縁部						ハケ目	ミガキ	暗文
	89	E-23 Ⅲ一括	須玖Ⅱ式 古段階 壺	甕Ⅴ c類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	暗文
	90	E-35 IV一括・ D-35 IV一括	前期 壺		底部						ミガキ	工具ナデ	
	91	注記なし	前期 壺		底部		○		○	赤色粒	ミガキ	工具ナデ	
	92	SHB00	時期不明 壺		底部		○				ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	
	93	SHB02	時期不明 壺		底部		○				ハケ目	工具ナデ	
	94	F-30 Ⅱ	中期 甕		底部					雲母	工具ナデ		
	95	注記なし	入来Ⅱ式及び 山之口式 甕		底部						ハケ目	工具ナデ・指頭痕	
96	D-37 IVイ107818	中期 甕		底部						ハケ目	工具ナデ		
97	B-35 Ⅲ b	中期 甕		底部						ハケ目	工具痕		
98	A-16 Ⅲ黒色砂・ B-16 イウ521 溝状	中期 甕		底部						工具ナデ・ミガキ	ナデ		

古墳時代遺構内出土遺物観察表

竪穴住居

挿入番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考
				芝原分類	中村型式		石英	長石	かた石	ガラス粒子	その他	外面	内面	
29	122	1号	B-36 ｲﾝ 11729	壺		口縁部						ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	器台転用
	123	1号	B-36 IV ｲﾝ 11729-D	埴 0-2		完形					赤色粒	工具ナデ	工具ナデ	鋸歯文
30	124	2号	B-34 ｲﾝ 11536-A・注記なし	丸底壺		口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	125	2号	ｲﾝ 11536	小型仿製鏡 小型仿製鏡			直径 3.5cm					最大厚 0.15cm		
	126	2号	C-31 ｲﾝ 11536	鉄鏃			最大長 3.7cm					最大幅 2.1cm	最大厚 0.15cm	
31	127	3号	B-33 ｲﾝ 11684・A～D・7		高坏 2 型式	坏部		○				ケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
35	128	6号	C-30 ｲﾝ 7389-ウ・E・D-30 ｲﾝ 7389・注記なし	甕 2 類	甕 5 型式?							刷毛目・工具ナデ	刷毛目・工具ナデ・指頭痕	
	129	6号	C-30 ｲﾝ 7389・C-30 ｲﾝ 7389-ウ	壺		胴部						工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	130	6号	C-30 ｲﾝ 7389・C-30 ｲﾝ 7389-ウ V	鉢		口縁部～胴部						工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・指頭痕	
	131	6号	C-30 ｲﾝ 7389		埴 2 型式	完形						ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ	
37	132	7号	C-26 ｲﾝ 7453・C-26 III 一括	甕 3 類	甕 6 型式	ほぼ完形						指ナデ・工具ナデ・ハケ目	ハケ目・工具ナデ・ケズリ	突帯
	133	7号	C-26 ｲﾝ 7453	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～底部						刷毛目・工具ナデ・指頭痕	刷毛目・工具ナデ・指頭痕	突帯
38	134	7号	C-26 ｲﾝ 7453	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～底部下位					赤色粒	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・指ナデ・指頭痕	
	135	7号	C-26 ｲﾝ 7453	甕 3 類	甕 6 型式	脚部						工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	
	136	7号	C-26 ｲﾝ 7453	壺		口縁部						工具ナデ	工具ナデ	
	137	7号	C-26 ｲﾝ 7453	壺		頸部						ハケ目後工具ナデ	指頭痕・ハケ目・工具ナデ	器台転用
	138	7号	C-26 ｲﾝ 7453	壺		胴部						ハケ目	工具ナデ	
	139	7号	C-26 ｲﾝ 7453	壺		口縁部～底部						ケズリ・工具ナデ	指ナデ・ケズリ	
39	140	7号	C-26 ｲﾝ 7453		蓋 B	口縁部				○		指ナデ・指頭痕	工具ナデ	
	141	7号	C-26 ｲﾝ 7453	埴 0-2		胴部～底部						ミガキ・ケズリ	指頭痕・工具ナデ	
	142	7号	C-26 ｲﾝ 7453	埴 0-1		口縁部～胴部						ハケ目・工具ナデ	指ナデ・工具ナデ・ハケ目	
	143	7号	C-26 ｲﾝ 7453		埴 2 型式	口縁部～底部					赤色粒	横ナデ・指ナデ・工具ナデ・ミガキ	指頭痕・工具ナデ	
	144	7号	C-26 ｲﾝ 7453	埴 0-2		完形		○				ハケ目・ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・ケズリ	
	145	7号	C-26 ｲﾝ 7453	埴 0-2		完形						工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・指ナデ	
	146	7号	C-26 ｲﾝ 7453		埴 2 型式	口縁部						工具ナデ・ミガキ	工具ナデ	
41	147	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452・C-26 III 一括	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～胴部下位	○			○		工具ナデ・ケズリ・ハケ目	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	
	148	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452・C-25 ｲﾝ 7452	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～胴部					赤色粒・砂粒	ハケ目後工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	149	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452・C-25 ｲﾝ 7452・C-26 III 一括	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～胴部						工具ナデ・ハケ目	工具ナデ	
	150	8号	C-25 ｲﾝ 7452	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部						ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	刻目突帯
	151	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452	壺		胴部						ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	3 条突帯
	152	8号	C-25 ｲﾝ 7452		鉢 B1	完形						工具ナデ	工具ナデ・指頭痕・ケズリ	
	153	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452・C-25 ｲﾝ 7452		鉢 B1	胴部～底部						工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	154	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452		高坏	脚部				○		ミガキ	ミガキ	
	155	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452		小型器台 A	胴部～脚部						ハケ目・ミガキ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・ハケ目	搬入?
42	156	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452		埴 1 型式	頸部～底部						工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・ミガキ	搬入?
	157	8号	C-25 ｲﾝ 7452		埴 1 型式	口縁部～胴部						工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	158	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452		埴 2 型式	口縁部～胴部						ハケ目・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ	
	159	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452		埴 2 型式	口縁部～胴部						工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	160	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452		埴 2 型式	口縁部～胴部						工具ナデ・指ナデ	ハケ目・指頭痕	鋸歯文
161	8号	C-25・26 ｲﾝ 7452		埴 2 型式?	頸部～胴部						指ナデ	指頭痕		

竪穴状遺構

挿入番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考
				芝原分類	中村型式		石英	長石	かた石	ガラス粒子	その他	外面	内面	
44	162	2号	C-32 ｲﾝ 9610・C-32 III b		埴 1 型式	頸部～底部					○	工具ナデ・ミガキ状のナデ	工具ナデ・指ナデ・指頭痕	
	163	2号	C-32 ｲﾝ 9610	甕		脚部						ハケ目・工具ナデ・指ナデ	指ナデ・工具ナデ	
46	164	5号	B-27 ｲﾝ 2490・B-27 III	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部						ハケ目	ハケ目・工具ナデ	
	165	5号	B-27 ｲﾝ 2490	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部						工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・指頭痕	
	166	5号	B-27 ｲﾝ 2490・注記なし	甕		脚部		○		○		工具ナデ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ	
	167	5号	B-27 ｲﾝ 2490	壺		底部		○		○		工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	168	5号	B-27 ｲﾝ 2490・B-28 ｲﾝ 2483・注記なし・B-2 8 III	丸底壺		頸部～底部						ハケ目・工具ナデ	指ナデ	
	169	5号	B-27 ｲﾝ 2490・注記なし		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ	
170	5号	B-27 ｲﾝ 2490		鉢 B1	完形						赤色粒	工具ナデ	ケズリ・工具ナデ	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
				芝原分類	中村型式		石英	長石	カキ石	かひり	その他	外面	内面		
48	171	7号	B-24イウ1530	甕3類	甕6~7型式	口縁部~胴部		○					ハケ目後工具ナデ	工具ナデ後 丁寧なナデ・ 指頭痕・指ナデ	
	172	7号	B-24イウ1530・ A~B-24イウ1530	甕3類	甕6~7型式	口縁部~胴部		○					ハケ目	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	
	173	7号	B-24イウ1530	甕3類	甕6~7型式	口縁部~胴部	○	○		○			ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	174	7号	A・B-24イウ1530	甕3類	甕6~7型式	口縁部~胴部							ハケ目	ハケ目	
	175	7号	B-24イウ1530	甕3類	甕6~7型式	口縁部~胴部							ハケ目	ハケ目	
49	176	7号	A~B-24イウ1530	甕3類	甕6~7型式	口縁部~胴部						赤色粒	工具ナデ・ハケ目・ 指ナデ	ハケ目・指ナデ	
	177	7号	A・B-24イウ1530	甕3類	甕6~7型式	口縁部~胴部	○			○			工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・指頭痕	
	178	7号	A・B-24イウ1530		壺	口縁部~ 底部	○	○		○			ハケ目後工具ナデ・ ケズリ状の工具ナデ・ 工具ナデ	ハケ目状の工具ナデ・ 指頭痕	
	179	7号	A・B-24イウ1530		壺	口縁部							ハケ目・ハケ目後指ナ デ	ハケ目後指ナデ	
	180	7号	A・B-24イウ1530・ 注記なし		鉢A	口縁部~ 脚部	○			○			ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	工具ナデ・指頭痕・ (底部内面)ケズリ	
	181	7号	B-24イウ1530		鉢A	口縁部							激しいハケ目	激しいハケ目	
	182	7号	B-24イウ1530・B-24Ⅲ		鉢A	脚部				○			指頭痕・ケズリ・ 工具ナデ	指頭痕・ケズリ	
	183	7号	A・B-24イウ1530		甕か鉢	脚部	○	○					ハケ目・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
50	184	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	頸部~ 底部				○			ハケ目・ミガキ	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	
	185	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	胴部				○			ハケ目・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
	186	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	頸部~ 底部		○					工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
	187	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	頸部~ 胴部							ミガキ上の工具ナデ・ ハケ目	ミガキ上の工具ナデ	
	188	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	胴部~底部			○	○			工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
	189	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	口縁部~ 胴部下位							ミガキ後工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	190	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	胴部							工具ナデ・指ナデ	指ナデ・工具ナデ	
	191	7号	A・B-24イウ1530		埴2型式	口縁部~ 胴部下位		○		○		岩粒	工具ナデ後指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	192	7号	A・B-24イウ1530		鉢B1	口縁部~ 底部				○			工具ナデ・指ナデ	指ナデ・指頭痕	
	193	7号	A・B-24イウ1530		鉢B1	底部				○			工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	194	7号	A・B-24イウ1530		鉢B1	完形				○		赤色粒	指頭痕・ハケ目・ 工具ナデ	ハケ目	
	195	7号	A・B-24イウ1530		鉢B1	口縁部~ 底部							ハケ目・指頭痕	ケズリ・指頭痕	
	196	7号	A・B-24イウ1530		埴0-1	口縁部									鋸歯文
	197	7号	A・B-24イウ1530		埴0-1	口縁部									鋸歯文
	198	7号	A・B-24イウ1530		鉄鏝								直径3.5cm	最大厚0.15cm	
199	7号	A・B-241530		鉄鏝							最大長3.7cm	最大幅2.1cm	最大厚0.15cm		
51	200	8号	A'22イウ872・ A'22Ⅲ・注記なし		鉢A	口縁部~ 底部			○		赤色粒	ハケ目・工具ナデ	ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ・指頭痕		
53	201	10号	D-24イウ6818・ D-24Ⅲ一括	甕3類	甕6型式	口縁部~ 胴部							ハケ目・工具ナデ・ ケズリ	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	吹きこぼれ痕
	202	10号	E-24イウ6818-イ	甕		脚部							ハケ目・指ナデ	ハケ目	
	203	10号	D-24イウ6818	壺		口縁部							ハケ目後横ナデ	ハケ目後横ナデ・ 指ナデ	
	204	10号	D-24イウ6818・ D-24Ⅲ一括	壺		口縁部~ 胴部							ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	口縁部に ヘラ描き鋸歯文
	205	10号	D-24イウ6818		鉢B2	口縁部~ 底部					岩粒		工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	206	10号	D-24イウ6818		鉢B2	完形		○	○				工具ナデ・ハケ目	指頭痕・工具ナデ	
	207	10号	D-24イウ6818		埴2型式	口縁部~ 胴部			○	○			工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	
	208	10号	D-24イウ6818		埴2型式	口縁部~ 胴部			○				ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	
55	209	11号	D-24イウ6821-イ		器種不明	口縁部							ハケ目	ハケ目	
	210	11号	注記なし		器種不明	脚部							指頭痕・指ナデ・ ハケ目	工具ナデ・指頭痕	
	211	11号	D-24イウ6821-イ・ D-23.24イウ6821-ウ		甕	脚部							ハケ目・ケズリ	工具ナデ	
	212	11号	D-24イウ6821-トロン		丸底壺	頸部~ 底部							工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ハケ目・ 指ナデ	
	213	11号	D-246821		埴0-1	口縁部							工具ナデ	工具ナデ	櫛波状文
	214	11号	D-24イウ6821-1		器種不明	口縁部							工具ナデ	工具ナデ	
56	215	13号	D-23イウ5627 好穴・ E-23Ⅲ・Ⅲ一括・ 注記なし		甕	口縁部~ 胴部					雲母		工具ナデ・タタキ	工具ナデ	
	216	13号	D-23イウ5627 好穴		埴0-1	口縁部							工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	鋸歯文
	217	14号	D・E-21イウ5356-イ・エ	甕3類	甕6型式	口縁部	○			○			ハケ目	ハケ目・指頭痕	
57	218	14号	D・E-21イウ5356-エ		甕	脚部	○	○					工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	219	14号	D・E-21イウ5356-イ		高坏	脚部	○			○			ハケ目	指ナデ・工具ナデ	
58	220	15号	E-21イウ5465-1			口縁部~ 胴部						赤色粒	ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	221	15号	E-21イウ5465		鉢	口縁部							粗い工具ナデ・ 指ナデ	ハケ目・指ナデ	
	222	15号	E-21イウ5465		鉢	胴部		○			岩粒		ケズリ後工具ナデ	工具ナデ	
	223	15号	E-21イウ5465・ E-21イウ5465上		鉢	底部		○					ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指ナデ	
	224	15号	E-21イウ5465		器種不明	胴部							ハケ目	指ナデ・ハケ目・ 工具ナデ	初痕?
	225	15号	E-21イウ5465		鉢	口縁部	○	○				赤色粒・ 輝石	指ナデ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ・ 指ナデ	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
				芝原分類	中村型式		石英	長石	かげ石	ガラス粒子	その他	外面	内面		
60	226	16号	E-20・21イワ5326-7・E-20・21イワ5326・注記なし・E-21Ⅲ一括	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指頭痕	
	227	16号	E-20・21イワ5326-7	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部	○					赤色粒	ハケ目・工具ナデ・指ナデ	ハケ目・工具ナデ・指ナデ	
	228	16号	E-20・21イワ5326-7	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部							ハケ目・工具ナデ・指ナデ	ハケ目・指頭痕・指ナデ・工具ナデ	鋸歯様の波状口縁
	229	16号	E-20・21イワ5326-オ・カ	甕		胴部下位						岩粒	ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	230	16号	E-20・21イワ5326-カ・E-20Ⅲ一括	壺		口縁部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	231	16号	E-20・21イワ5326-ウ・E-21Ⅲ一括	壺		口縁部～胴部							ハケ目後指ナデ	工具ナデ	
61	232	16号	E-20・21イワ5326-ウ・E-20・21イワ5326-Ⅱ	壺B4型式		肩部～胴部下位	○	○	○				ハケ目・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	見せかけ突帯
	233	16号	E-20・21イワ5326-ウ・エ・オ	壺		胴部～底部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目	
62	234	16号	E-20・21イワ5326-ウ・エ・オ・カ・E-20・21イワ5326-Ⅱ	壺B4型式		胴部							ハケ目後工具ナデ	ハケ目後工具ナデ・指頭痕	2条貼付突帯
63	235	17号	E-20イワ6822-ウ	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部				○			ハケ目・工具ナデ	ハケ目	
	236	17号	D・E-20・21イワ6822-材ナシ	甕3類	甕6型式	口縁部							横ナデ	横ナデ・指頭痕	無刻目突帯
	237	17号	E-20イワ6822・E-20イワ6822-7・ウ・D・E-20・21イワ6822・D・E-20・21Ⅲ材ナシ・E-20Ⅲ一括・注記なし	甕3類	甕6型式	口縁部～底部	○	○	○				ケズリ・工具ナデ・ミガキ・指頭痕	工具ナデ・ミガキ・ケズリ	三角突帯
64	238	17号	E-20イワ6822・E-20イワ6822-7・ウ・E-20イワ6822Ⅲ材ナシ	壺B4型式		胴部～底部					岩粒	指頭痕・ハケ目・ケズリ・工具ナデ・指ナデ	指頭痕・ハケ目・指ナデ・工具ナデ	無刻目突帯	
	239	17号	E-20・21イワ6822	鉢B2		口縁部～底部	○			○			工具ナデ後ハケ目	指頭痕・工具ナデ・ヘラケズリ	
	240	17号	E-20・21イワ6822	鉢		底部							工具ナデ・ケズリ	ハケ目・ケズリ	
	241	17号	E-20イワ6822	手捏		底部				○			指頭痕・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
65	242	18号	D-20イワ5695-ウ	壺		底部							工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	243	18号	D-20イワ5695-エ・D-20イワ5695-エ	丸底壺		底部		○					ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	244	18号	D-20イワ5695-1	鉢B2		完形				○			工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	

土坑

挿図番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
				芝原分類	中村型式		石英	長石	かげ石	ガラス粒子	その他	外面	内面		
68	245	2号	C・D-34イワ9536・C・D-34イワ9536-17・21	甕2類		口縁部～胴部		○		○			ハケ目・ケズリ	工具ナデ・指ナデ・ハケ目	
	246	2号	C・D-34イワ9536	鉢B1		口縁部～底部							指頭痕・横ナデ・絞り痕	工具ナデ・横ナデ・指頭痕	
69	247	3号	C-20イワ8666・C-20イワ2224・C-21Ⅲ一括	壺B4型式		完形							ハケ目	工具ナデ・指ナデ	
	248	3号		砥石											
70	249	6号	B-34イワ11448-1	鉢A		完形							工具ナデ・指頭痕・指ナデ	指頭痕・指ナデ・工具ナデ	蓋転用?
71	250	7号	D-33イワ11417-2	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部							工具ナデ・指ナデ・ハケ目	ハケ目・指ナデ	
	251	7号	B-33イワ11417-1	甕か鉢		脚部							工具ナデ・指頭痕	ミガキ	
	252	7号	B-33イワ11417-4	丸底壺		口縁部～底部							ハケ目後指ナデ	ハケ目・指頭痕・指ナデ	
	253	7号	B-33イワ11417-5	丸底壺		口縁部～底部	○			○			工具ナデ・ミガキ	ミガキ・指頭痕・ハケ目	
72	254	8号	B-33イワ11610-10・11・18		埴1型式	完形	○				輝石		ケズリ・ハケ目	ハケ目後指ナデ・指ナデ	
	255	8号	B-33イワ11610	埴0-1		口縁部									鋸歯文
	256	9号	B-33イワ11450	丸底甕		口縁部		○	○		金雲母		横ナデ	ヘラケズリ	布留式土器(肥後)
	257	10号	B-33イワ11555	鉢B2		口縁部～底部				○			指ナデ・ケズリ	工具ナデ	
	258	11号	B-33イワ11562	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部							指ナデ・ケズリ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目・指頭痕	
	259	11号	B-33イワ11562	鉢		口縁部～胴部							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ	
74	260	15号	A-31イワ2936	甕か鉢		口縁部	○	○					工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	初状圧痕
	261	15号	A-31イワ2936・A-31Ⅲ一括	甕		胴部～脚部		○					ハケ目・工具ナデ・指頭痕・指ナデ	ケズリ・工具ナデ	
	262	15号	A-31イワ2936	甕1類	甕5型式	胴部～脚部	○		○				ハケ目・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・ハケ目・指頭痕	
	263	15号	A-31イワ2936	壺		口縁部				○			ハケ目	ハケ目・工具ナデ	
	264	15号	A-31イワ2936	高坏		坏部							ハケ目・指頭痕	ハケ目	
	265	15号	A-31イワ2936	高坏		坏部							ハケ目後工具ナデ	ミガキ	
	266	15号	A-31イワ2936	高坏		脚部				○			ケズリ後ハケ目・指頭痕	工具ナデ	
75	267	15号	A-31イワ2936・A-31Ⅲ一括	鉢B1		口縁部～底部							工具ナデ後指ナデ・ケズリ	工具ナデ後指ナデ	
	268	16号	B-31イワ7390・B-31Ⅲ一括	埴0-2		口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ・ハケ目	指頭痕	
	269	17号	B-31イワ7420	甕3類	甕6型式	口縁部							ハケ目・工具ナデ・ケズリ	工具ナデ	
76	270	22号	B-29イワ1943・芝原00	甕3類	甕6型式	ほぼ完形	○	○	○				ハケ目・ケズリ・指ナデ・工具ナデ	ハケ目・指ナデ	
	271	23号	D-29イワ6503・D-29Ⅱ・Ⅱ一括	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部下位							工具ナデ・ケズリ・ハケ目	ハケ目・指ナデ	
	272	23号	D-29イワ6503	甕?		口縁部～胴部							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
				芝原分類	中村型式		石英	長石	カセ石	ガラス粒子	その他	外面	内面		
77	273	24号	E-29イウ10372・E-29イウ10372一括・E-28溝・E-28	甕1類	甕5型式	頸部～胴部下位						金雲母	ハケ目・指ナデ・ハケ目	ハケ目・工具ナデ・指ナデ	
	274	24号	E-28溝イウ10372・E-29イウ10372	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位							工具ナデ・ハケ目・ケズリ	工具ナデ・指ナデ	
	275	24号	E-29イウ10372・E-28溝イウ10372	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部							ハケ目・ケズリ・横ナデ	ハケ目・横ナデ	
	276	24号	E-29イウ10372・E-29イウ10372一括	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部	○						ハケ目・工具ナデ・ケズリ	工具ナデ	
	277	24号	E-29イウ10372一括	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部				○			ハケ目・横ナデ	ハケ目	
78	278	30号	E-23イウ5626		鉢B2	口縁部～底部	○				岩粒	ハケ目・工具ナデ	工具ナデ		
79	279	32号	A'21イウ409		鉢B2	口縁部～底部			○		赤色粒	ハケ目・ケズリ・指ナデ	ケズリ・指ナデ		

ピット

挿図番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
				芝原分類	中村型式		石英	長石	カセ石	ガラス粒子	その他	外面	内面		
80	280	1号	B-34イウ11518		壺B3型式	胴部					赤色粒・岩粒	ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指頭痕・指ナデ	刻目突帯(2条)	
	281	2号	B-32Ⅲイウ11341		鉄鏝		最大長 6.0cm					最大幅 1.2cm	最大厚 刃 0.2cm 枝 0.25cm		
81	282	3号	B-32イウ11405	甕1類	甕5型式	ほぼ完形	○	○	○			工具ナデ・指頭痕・ハケ目後工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
82	283	4号	C-31イウ7278	埴0-2		ほぼ完形	○	○			砂粒	ハケ目後工具ナデ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	鋸歯文	
	284	5号	E-31イウ9777-3	甕		脚部						指ナデ	ミガキ		
	285	5号	E-31イウ9777	壺		口縁部						工具ナデ	工具ナデ		
	286	5号	E-31イウ9777-2	手捏		ほぼ完形				○		指頭痕	ケズリ・指頭痕		
	287	5号	E-31イウ9777-1	手捏		ほぼ完形	○	○				指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	288	5号	E-31イウ9777・E-31イウ9777-4・6・8・18・20・E-31イウ71895・E-31イウ129511		壺B2型式	頸部～底部							工具ナデ・ケズリ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	3条三角突帯
	289	6号	A-30イウ2974・注記なし	坏蓋		天井部～口縁部							工具ナデ	工具ナデ・ハケ目	
83	290	7号	D-29イウ6476	手捏		ほぼ完形						指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	291	8号	E-29イウ10906-1	甕		脚部						工具ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	292	8号	E-29イウ10906-2	甕		脚部						工具ナデ	工具ナデ		
	293	9号	E-29イウ10430	甕1類	甕5型式	胴部～脚部		○			岩粒	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	294	9号	E-29イウ10430・E-29Ⅲ一括	甕1類	甕5型式	口縁部～底部						ケズリ・工具ナデ・指頭痕	横ナデ・指ナデ		
84	295	10号	E-29イウ10062		丸底壺	完形						ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	296	11号	A-28イウ1865		丸底壺	頸部～底部				○		工具ナデ・ミガキ状の工具ナデ	ケズリ・指ナデ		
	297	12号	C-28イウ7218		丸底壺	胴部～底部					赤色粒	工具ナデ	指ナデ・工具ナデ		
	298	12号	C-28イウ7218		高坏	脚部						工具ナデ・ミガキ状の工具ナデ	ハケ目		
	299	13号	D-23イウ8013・D-23イウ8014		丸底壺	完形		○	○		赤色粒	ケズリ・ミガキ・工具ナデ	ケズリ・ミガキ・工具ナデ・指頭痕		

古墳時代遺構内出土遺物観察表

溝

挿図 番号	掲載 番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カセ石	ガラス 粒子	その他	外面	内面		
86	300	B-16 イワ 521・ B・C-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ 黒色砂・ B-16 Ⅳ	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～ 胴部下位							工具ナデ	工具ナデ	
	301	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部		○					工具ナデ・指ナデ	工具ナデ	
	302	B-16 イワ 521・ SHB00	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～脚部		○			赤色粒		ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・ 指頭痕	
	303	B-16 Ⅲ イワ 521・ C-16 Ⅲ イワ 521・ B・C-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ 一括	甕 1 類	甕 5 型式	完形		○	○				ケズリ・工具ナデ・ 指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
87	304	B-16 イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	頸部～脚部		○	○				ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	
	305	B-16 イワ 521・ C-16 イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～ 胴部下位				○			工具ナデ	ケズリ・工具ナデ・ 指ナデ	
	306	B-16 イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部			○				ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	307	B-16 Ⅲ イワ 521・ B・C-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ・黒色砂	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部							ハケ目・指頭痕	ハケ目・指頭痕・ 工具ナデ	
	308	B-16 Ⅲ イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部							ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	
	309	B-16 イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部	○	○		○			工具ナデ・ケズリ	工具ナデ	
88	310	B-16 イワ 521・ D-16 ミノ 521・ B-16 Ⅲ イワ・ B-16 Ⅲ・ Ⅲ一括・B-16	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～脚部		○				赤色粒	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	311	B-16 イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～底部	○	○	○				ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ・ 指頭痕	
	312	B-16 イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部							工具ナデ	指ナデ・指頭痕・ 工具ナデ	
	313	B-16 Ⅲ イワ 521・ B-16 イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部	○	○			岩粒		ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ	
	314	B-16 イワ 521・ B・C-16 イワ 521・ C-16 Ⅲ イワ 521	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部							ケズリ・工具ナデ	ハケ目・指ナデ・ 工具ナデ	
	315	B-16 イワ 521・ C-16 イワ 501・ B・C-16 イワ 1105・ B-16 Ⅲ・Ⅲ一括・ B-16 Ⅲ 黒色砂・ C-16 Ⅲ 黒色砂	甕 1 類	甕 5 型式	口縁部～胴部							工具ナデ・指頭痕	指頭痕・工具ナデ	
89	316	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ・Ⅲ一括・ B-16 Ⅲ 黒色砂・ B-16 一括	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～脚部	○	○	○				ケズリ後ハケ目・ 工具痕・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目・ 工具痕・指ナデ	
	317	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅳ イワ・ B-16 Ⅲ 黒色砂・ 注記なし	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～ 胴部下位						岩粒	工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	318	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ 一括・ Ⅳ・B-16 Ⅲ 黒色砂	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～ 胴部下位	○	○		○			ケズリ・工具ナデ・ ハケ目	ハケ目・工具ナデ	
	319	B-16 イワ 521	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部	○	○	○				工具ナデ・ハケ目	工具ナデ	
	320	B-16 イワ 521	甕 3 類	甕 6 型式	口縁部～胴部						岩粒	工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	刻目突帯
90	321	C-16・C-15・ 16 イワ 501・ C-15 イワ 501・ C-16 イワ 521・ C-15 Ⅲ 黒色砂・ C-16 Ⅲ 黒色砂	甕 3 類	甕 8 型式	口縁部～胴部						岩粒	ケズリ・工具ナデ・ 指ナデ	指ナデ・工具ナデ	刻目突帯
	322	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ	甕		胴部～脚部							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	
	323	C-15 イワ 501	甕		胴部～脚部				○			工具ナデ	ケズリ・工具ナデ・ 指頭痕	
	324	C-15 イワ 501	甕		胴部～脚部							工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・ 指頭痕	
	325	C-15 イワ 501・ C-15・16 イワ 501	甕		脚部	○		○	○			工具ナデ・指ナデ・ 指頭痕	工具ナデ・指ナデ・ 指頭痕	
91	326	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ 一括・ 注記なし		壺 B3 型 式?	口縁部～胴部				○			工具ナデ後ハケ目	工具ナデ	断面三角 刻目突帯
	327	A-16・17 イワ 521・ A-16 Ⅲ 黒色砂	壺		口縁部							工具ナデ		穿孔・器台転用
	328	B-16 イワ 521・ C-16 Ⅲ イワ 521	壺		胴部							指頭痕		無刻目突帯
92	329	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ 一括・ B-16 Ⅲ 黒色砂		蓋 B?	口縁部～胴部					岩粒		ケズリ後ミガキ	ケズリ・工具ナデ・ ハケ目	
	330	B-16 イワ 521		蓋	口縁部～胴部							工具ナデ・指頭痕	ケズリ・指頭痕	
	331	B・C-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ イワ 521・ B-16 Ⅲ 黒色砂		蓋	口縁部～胴部							ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目	高坏の転用?
	332	B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ イワ 521		高坏 2 型式	口縁部～胴部			○	○	赤色粒		ケズリ・工具ナデ・ ハケ目・ミガキ	ハケ目・工具ナデ	
	333	B-16 イワ 521		鉢 B2	ほぼ完形	○	○		○			ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	
	334	B-16 イワ 521		鉢 B2	口縁部～脚部							ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	335	C-15 イワ 501・ C-15・16 イワ 501・ C-16 イワ 521		高坏	口縁部～脚部				○	赤色粒		工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	336	B-16 イワ 521・ A-16 Ⅲ 黒色砂		高坏	脚部							工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
337	B-16 Ⅲ イワ 521・ B-16 Ⅲ イワ・ B-16 イワ 521・ B-16 Ⅲ 黒色砂・ B-16 Ⅲ 一括・ B-16 Ⅲ 黒色砂・ B-16 Ⅳ 一括		鉢	口縁部～胴部							ケズリ・工具ナデ・ 指ナデ	ハケ目・指ナデ	波状突帯 1カ所垂れ口	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

土器集中遺構

挿入番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考		
				芝原分類	中村型式		石英	長石	カセシ石	がら粒子	その他	外面	内面			
95	338	1号	B-37イワ11446A-1・B-1	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	339	1号	B-37イワ11446B-2・3・8・B-37イワ11446C-3	甕1類	甕5型式	口縁部～底部							ハケ目・工具ナデ・指頭痕・ヘラミガキ	工具ナデ・ケズリ・指頭痕		
	340	1号	B-37イワ11446A-3・A-37トナア・C-38Ⅳ一括	甕か鉢		口縁部							ハケ目	ハケ目		
	341	1号	B-37イワ11446B-3	甕		口縁部		○					ハケ目・工具ナデ	横工具ナデ・ハケ目・工具ナデ	沈線文	
	342	1号	B-37イワ11446C-3・D-37イワ11446B-1・3・B-37Ⅲ一括		鉢A	口縁部～胴部下位		○	○	○			ハケ目・ケズリ	ハケ目		
	343	1号	B-37イワ11446B-2・3・B-37イワ11446C-3	壺		口縁部～胴部							岩粒	工具ナデ・ハケ目	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
96	344	1号	B-37イワ11446A-3・B-2		壺B3型式	完形		○	○	○			ハケ目・工具ナデ・指頭痕	一部条痕有り・ケズリの後工具ナデ	沈線文・3条突帯	
97	345	1号	B-37イワ11446A-2		壺B3型式	完形							ハケ目・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	3条突帯	
98	346	1号	B-37イワ11446B-2		壺	口縁部				○			ハケ目・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	器台転用	
	347	1号	B-37イワ11446A-2・3・B-37イワ11446B-1・3・B-37トナア・C-37Ⅲb		壺B3型式	頸部～胴部						赤色粒	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	3条突帯	
	348	1号	B-37イワ11446B-1・2・C-37一括Ⅲb・E-37一括Ⅲb		鉢A	口縁部～胴部		○	○				ケズリ・工具ナデ・指ナデ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	349	1号	B-37イワ11446B-3	手捏		胴部～底部		○	○					指紋		
	350	1号	B-37イワ11446B-2	高坏		脚部								工具ナデ	工具ナデ	穿孔
	351	1号	B-37イワ11446B-2・3・4・B-37イワ11446C-3・C-37一括Ⅲb	高坏									赤色粒	工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・ミガキ	蓋に転用
	352	1号	D-28	銅鐵									最大長 2.7cm	最大幅 0.8cm	最大厚 刃0.2cm 枝0.2cm	
99	353	2号	D-37イワ9609-253-253・259・261・263・264・D-37Ⅳウ107601～3・B-36Ⅳ一括	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位							ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・丁寧な工具ナデ		
	354	2号	D-37イワ9609-261・264	甕2類	甕5型式	口縁部～胴部下位							赤色粒	工具ナデ・指頭痕・ミガキ状の工具ナデ	工具ナデ・指頭痕・ミガキ状の工具ナデ	
	355	2号	D-36・37イワ9609-264・D-37Ⅳ上	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部				○			工具ナデ・指頭痕・指ナデ	工具ナデ・指頭痕・指ナデ		
	356	2号	D-37イワ9609-262	蓋A		ほぼ完形							ケズリ・工具ナデ・指頭痕・指ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	357	2号	D-37イワ9609-259・D-37Ⅳ上	蓋A		ほぼ完形							ハケ目後工具ナデ・ケズリ	ハケ目・ヘラによるケズリ状のナデ		
105	358	3号	D-36・37イワ9609-74～76・78・79・82～85-90～93・100～102・187-251・C-37イワ9609-79・D-36イワ9609・イワ9609-81・イワ9609トナア	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○	○	○			赤色粒	ハケ目・工具ナデ・指ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
	359	3号	D-36・37イワ9609-67・104・C-37Ⅳエ9609-106・C-36Ⅳエ一括・37Ⅳエ一括・37Ⅳウ一括・D-36Ⅳウ一括	甕1類	甕5型式	底部～脚部							工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目		
	360	3号	D-36・37イワ9609-59	甕1類	甕5型式	ほぼ完形							工具ナデ・ケズリ・指頭痕	ナデ・指頭痕		
	361	3号	D-36・37イワ9609・205・207・209・211・212・215・217・218・220・248・D-36・37イワ9609トナア・D-37Ⅳ一括	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○	○	○			ケズリ・ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ		
106	362	3号	D-36・37イワ9609-12・18-21・22・113・D-36b一括	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○		○			ハケ目・指ナデ	工具ナデ後指ナデ		
	363	3号	D-36・37イワ9609-11	甕1類	甕5型式	完形							工具ナデ・指ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ		
	364	3号	D-36・37イワ9609-3・39・D-36・37イワ9609トナア・D-36Ⅳウ一括・注記なし	甕1類	甕5型式	完形				○			ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	365	3号	D-37Ⅳウ108447	甕1類	甕5型式	ほぼ完形							ハケ目後工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕		
	366	3号	D-36・37イワ9609-53・182	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部							ハケ目・工具ナデ・ケズリ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕		
107	367	3号	D-36・37イワ9609-154・162	甕1類	甕5型式	口縁部		○		○			ケズリ後工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	368	3号	D-36・37イワ9609	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	369	3号	D-36・37イワ9609-57・156・181・193・D-36・37イワ9609トナア	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○					ケズリ・工具ナデ	指頭痕・ハケ目		
	370	3号	D-36・37イワ9609-6・60・SHB-02	甕1類	甕5型式	完形							工具ナデ	工具ナデ		
	371	3号	D-36・37イワ9606-6・C-37Ⅲb一括・注記なし	甕1類	甕5型式	口縁部～底部							指頭痕・工具ナデ(ミガキ風)ケズリ			
	372	3号	D-36・37イワ9609-60・D-36・37イワ9609トナア	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位		○	○	○			赤色粒	ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	373	3号	D-36・37イワ9609-16・41・D-36Ⅳa一括	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位				○			ケズリ・ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ケズリ・ハケ目・指頭痕・工具ナデ		
108	374	3号	D-36・37イワ9609-17	甕2類	甕5型式	完形		○					輝石・赤色粒	ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
	375	3号	D-37Ⅳウ108450・108451・108453・108454・108457・注記なし	甕2類	甕5型式	完形							ハケ目・指ナデ・工具ナデ	ハケ目・指ナデ・工具ナデ		
	376	3号	D-36・37イワ9609-10・19・D-36・37イワ9609トナア	甕2類	甕5型式	完形			○				赤色粒	ハケ目後工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	377	3号	D-36表一括・D-36・37イワ9609-1・D-37Ⅳエ一括・Ⅲ一括	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部		○	○	○				ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指ナデ・工具ナデ	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

土器集中遺構

挿入 番号	掲載 番号	遺構 番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
				芝原分類	中村型式		石英	長石	カセ石	がら 粒子	その他	外面	内面		
108	378	3号	D-36・37イウ9609-98・ D-36・37イウ9609トキマ	甕2類	甕5型式	ほぼ完形							ハケ目・ケズリ	ハケ目・指ナデ	
	379	3号	D-36・37イウ9609-2・4・5・ D-36IV一括	甕2類	甕5型式	ほぼ完形							ケズリ・ハケ目・ 指ナデ・指頭痕	ハケ目	
109	380	3号	D-36・37イウ9609-99		壺A2型式	完形			○				ケズリ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	刻目突帯
	381	3号	D-36・37イウ9609-232		壺A2型式	完形							ハケ目後工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	刻目突帯
	382	3号	D-36・37イウ9609-27・ D-37IV一括		壺A2型式	ほぼ完形		○	○				ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	刻目突帯
	383	3号	D-36・37イウ9609-17・ 227～229		壺A2型式	ほぼ完形		○	○				ハケ目後工具ナデ	ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ	3条突帯
110	384	3号	D-36・37イウ9609-20・ 25・30・70		壺A2型式	頸部～ 胴部							指頭痕・ハケ目	指頭痕・ハケ目	刻目突帯
	385	3号	D-36・37イウ9609-94		壺	完形	○	○	○	○			工具ナデ・ハケ目・ ケズリ	工具ナデ・指ナデ・ ハケ目	
	386	3号	D-36・37イウ9609-2		壺	口縁部～ 胴部	○			○			ハケ目・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
	387	3号	D-36・37イウ9609-15		壺	口縁部							タタキ・指ナデ・工具ナ デ	工具ナデ	
	388	3号	D-36・37イウ9609-29		壺	ほぼ完形							ケズリ後工具ナデ	工具ナデ	
	389	3号	D-36・37イウ9609-130		平底壺	底部				○			指頭痕	指頭痕	
	390	3号	D-36・37イウ9609-172・ D-37IVウ108449		平底壺	胴部～底部							ケズリ	ハケ目・指頭痕	
	391	3号	D-36・37イウ9609-203		蓋A	完形		○	○		岩粒		ケズリ・工具ナデ・ ハケ目・指ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	392	3号	D-36・37イウ9609-114・ 115・120		鉢A	口縁部～ 胴部下位							工具ナデ・ケズリ・ ハケ目	工具ナデ	
	111	393	3号	D-36・37イウ9609-232		鉢B2	完形							ハケ目・指ナデ・ 工具ナデ	ハケ目・指ナデ・ 指頭痕・ 工具ナデ(外)
394		3号	D-36・37イウ9609-258		鉢B2	完形							工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
395		3号	D-36・37イウ9609-10・19		鉢B1	口縁部～ 胴部下位			○				ハケ目後工具ナデ	指ナデ・工具ナデ	
396		3号	D-36・37イウ9609-107・ 109・D-36・ 37イウ9609トキマ		鉢B1	完形		○			岩粒・ 赤色粒		ケズリ・指頭痕	工具ナデ・ケズリ・ ハケ目	
397		3号	D-36・37イウ9609-212		鉢B1	口縁部～ 底部							指頭痕・指ナデ	指頭痕・ハケ目・ 工具ナデ	
398		3号	D-36・37イウ9609-250		鉢B1	完形	○		○	○			工具ナデ・ケズリ	指ナデ・ハケ目・ 工具ナデ	
399		3号	D-36・37イウ9609-113		鉢B1	完形							指頭痕・指ナデ・ ハケ目後工具ナデ	ハケ目・指頭痕・ 工具ナデ	
400		3号	D-36・37イウ9609-9		小型丸底壺	完形	○		○	○			ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指頭痕・ 指ナデ	
401		3号	D-36・37イウ9609-170・ -151・170・254・256・ D-36IVウ一括・ IVエ一括		小型丸底壺	口縁部～ 底部							ハケ目・指頭痕・ ケズリ・工具ナデ	ハケ目・指頭痕・ ケズリ・工具ナデ	
402		3号	D-36・37イウ9609-221		小型丸底壺	完形			○		赤色粒		指頭痕・指ナデ・ 工具ナデ	指頭痕・指ナデ・ 工具ナデ	線刻
403	3号	D-36・37イウ9609-255・ D-37IIIb		小型丸底壺	頸部～底部	○		○				ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	指頭痕・ハケ目・ 指ナデ		
404	3号	D-36・37イウ9609-204		手捏	完形							指圧痕・指ナデ	指圧痕・指ナデ		
405	3号	D-36・37イウ9609-206		手捏	口縁部～ 底部							指頭痕・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ		
114	406	4号	D-3711184トキB-IV・ D-IV・C-37IIIb・ D-37IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 脚部	○	○		○			工具ナデ・ケズリ・ 指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	407	4号	D-3711184トキM-IV・ C-IV・ D-37IVウ107610	甕1類	甕5型式	口縁部～ 脚部							工具ナデ・ケズリ・ 指頭痕・ハケ目	工具ナデ・指頭痕	
	408	4号	D-3711184トキI-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 脚部	○	○	○				工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	
	409	4号	D-3711184トキB-IV・ D-37IVウ107479・ D-37IV・F-IV・ IV一括	甕1類	甕5型式	完形				○	岩粒		ハケ目・ケズリ・ 指頭痕・指ナデ	ハケ目・指ナデ・ 工具ナデ	
115	410	4号	D-3711184トキVI・ D-37IV一括	甕1類	甕5型式	口縁部～ 脚部				○	岩粒		ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	411	4号	D-3711184トキE-IV	甕1類	甕5型式	完形				○			ケズリ・工具ナデ・ 指頭痕	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	
	412	4号	D-3711184トキM-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 脚部							ハケ目後工具ナデ・ ケズリ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	413	4号	D-3711184トキM-IV・ N-IV	甕1類	甕5型式	完形							指ナデ・ケズリ・ 工具ナデ	指ナデ・工具ナデ	
116	414	4号	D-3711184トキJ-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 脚部				○	赤色粒		指ナデ・指頭痕・ 工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・ 指頭痕	
	415	4号	D-3711184トキB-IV・ D-37III・37IV・ 注記なし	甕1類	甕5型式	口縁部～ 胴部下位							指頭痕・ケズリ・ 工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
	416	4号	D-3711184トキL-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 胴部					岩粒		工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	417	4号	D-3711184トキE-IV・ D-3711184VI・D-37III一括	甕1類	甕5型式	口縁部～ 胴部					岩粒		ケズリ・指ナデ・ 工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・ 指頭痕	
	418	4号	D-3711184VI・ D-37III・VI・IV一括	甕1類	甕5型式	口縁部							工具ナデ	工具ナデ	
	419	4号	D-3711184トキC-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 胴部							ケズリ・工具ナデ・ ハケ目・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
117	420	4号	D-3711184トキB-IV・ G-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 胴部					岩粒		ハケ目	工具ナデ・指ナデ	
	421	4号	D-3711184トキB-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～ 胴部							ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	
	422	4号	D-3711184トキC-IV・ O-IV・107539・ D-37IVウ107460・ 107542・107694	甕1類	甕5型式	口縁部～ 胴部	○			○			ケズリ・工具ナデ・ 指ナデ・指頭痕	ケズリ・指ナデ・ 指頭痕	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

土器集中遺構

挿図番号	掲載番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考
				芝原分類	中村型式		石英	長石	カクシ石	ガラス粒子	その他	外面	内面	
117	423	4号	D-37 11184 VI・D-37 IVウ 107451・107535・D-37 IV一括	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部						工具ナデ・ケズリ・指頭痕・ハケ目	工具ナデ・ケズリ・指頭痕・ハケ目	
	424	4号	D-37 11184 ドキR-IV	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部				○	岩粒・赤色粒	ハケ目・ケズリ	ハケ目・指ナデ	刺突文
	425	4号	D-37 11184 ドキE-IV・D-37 IVウ 107442・107522・107552・107557・107582	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部	○			○		工具ナデ・指頭痕・ハケ目	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
118	426	4号	D-37 11184 ドキD-IV	甕2類	甕5型式	完形						ケズリ	工具ナデ・指頭痕・指ナデ	
	427	4号	D-37 11184 ドキB-IV・D-37 IV・37 V	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部						ハケ目・指ナデ	指ナデ	
	428	4号	D-37 11184 ドキE-IV	甕2類	甕5型式	ほぼ完形						指ナデ・ハケ目・ケズリ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
	429	4号	D-37 11184 ドキU-IV・D-37 11184 VI	甕2類	甕5型式	口縁部～胴部下位						ケズリ・工具ナデ・指ナデ	ケズリ・工具ナデ・指ナデ	
119	430	4号	D-37 11184 ドキT-IV		壺	口縁部～底部		○			雲母	ケズリ・ハケ目・工具ナデ		弥生・下隈式・刻目突帯文
120	431	4号	D-37 11184 ドキP-IV		壺B2型式	完形						ハケ目後工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・指頭痕	1条突帯文
	432	4号	D-37 11184 ドキE-IV・N-IV・O-IV・D-37 IVウ 107560・107585・107588・D-37 11184 VI・D-37 IV一括		壺B2型式	ほぼ完形		○		○		工具ナデ・ハケ目・指ナデ	ハケ目・指ナデ	刻目突帯文
	433	4号	D-37 11184 ドキQ-IV		壺B2型式	ほぼ完形						ケズリ・工具ナデ・指頭痕・ミガキ状のナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	三角突帯文
	434	4号	D-37 11184 ドキS-IV		壺B2型式	口縁部～底部	○	○	○			ケズリ・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	三角突帯文
121	435	4号	D-37 11184 ドキB-IV		蓋A	口縁部～天井部	○			○		ケズリ後工具ナデ・指頭痕・指ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕・指ナデ	
	436	4号	D-37 11184 ドキA-IV		丸底壺	ほぼ完形	○			○		ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
	437	4号	D-37 11184 IV		丸底壺	完形	○	○	○	○		ケズリ・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ	
	438	4号	D-37 11184 ドキK-IV		鉢B2	ほぼ完形						絞り痕・ハケ目・指頭痕・工具ナデ	工具ナデ・横位のナデ・ランダムな指ナデ	
	439	4号	D-37 11184 ドキQ-IV		鉢B2	口縁部～脚部						工具ナデ・指ナデ	工具ナデ	
	440	4号	D-37		鉄鏝						最大長 6cm	最大幅 1.4cm	最大厚 刃 0.15cm 枝 0.2cm	
123	441	5号	D-37 イウ 11412C・F・D-37 IV h イウ 11412・注記なし		甕4型式	口縁部～胴部下位						工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	
124	442	5号	D-37 IVウ 108472・注記なし	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○		○		ハケ目・指頭痕・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	443	5号	D-37 イウ 11412B	甕1類	甕5型式	口縁部～底部						ケズリ・ハケ目後工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	444	5号	D-37 IV イウ 11412-1・D-37 IV イウ 11412・D-37 IV イウ 11741	甕1類	甕5型式	ほぼ完形						ハケ目後工具ナデ・ケズリ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕・ハケ目後工具ナデ	
	445	5号	D-37 IVウ 118471	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部			○	○	赤色粒	ハケ目後工具ナデ・指頭痕	ハケ目後工具ナデ・指頭痕	
125	446	5号	D-37 IV イウ 11412-b・d・D-37 IV b イウ 11412	甕1類	甕5型式	完形			○			指頭痕・指ナデ・ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕・条痕・指ナデ	
	447	5号	D-37 IV イウ 11412-1・d	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位	○	○			岩粒・赤色粒	ハケ目・工具ナデ・ケズリ	ハケ目・指ナデ	
	448	5号	D-37 IV イウ 11412-a・注記なし	甕1類	甕5型式	胴部～脚部						ハケ目・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	
	449	5号	D-37 IV イウ 11412-a・g・D-37 IV イウ 11741・D-36・37 イウ 9609-135・D-36・37 イウ 9609 ドキア・D-37 IVウ 107518・107519・107533・107577・107595・D-37 IV		壺A2型式	口縁部～底部	○	○		○		ハケ目・ケズリ・指ナデ・工具ナデ	指ナデ・工具ナデ	刻目突帯文
	450	5号	D-37 IV イウ 11412-g・D-37 IVウ 107516・107517		手捏	口縁部～底部						指頭痕・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
	451	5号	D-37 IV イウ 11412		脚付埴	完形	○	○		○		ハケ目・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
126	452	6号	C-34 イウ 11591-A	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部						工具ナデ	ミガキ・工具ナデ	
	453	6号	C-34 イウ 11591-A	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部						工具ナデ	掻き目・指ナデ	刻目突帯文
127	454	6号	C-34 イウ 11591-A・C-34 III b	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部			○	○		ケズリ・工具ナデ	ナデ・指頭痕	
	455	6号	C-34 イウ 11591-A・C-34 III b・注記なし	甕3類	甕6型式	胴部～脚部			○	○		ケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	456	6号	C-34 イウ 11591-A・B-34 イウ 11591-A・C-34 III b・D-34 III c	甕3類	甕6型式	胴部～脚部		○		○	雲母・赤色粒	ハケ目・指頭痕・工具ナデ	ハケ目・指頭痕	
	457	6号	C-34 イウ 11591-A	甕3類	甕6型式	脚部						ハケ目	ハケ目・指頭痕	
	458	6号	C-34 イウ 11591-A		甕	口縁部	○		○			横ナデ	指頭痕後横ナデ	
	459	6号	C-34 イウ 11591-A・C・D-34 イウ 9429		壺	口縁部						ハケ目・ケズリ・工具ナデ	ミガキ	
	460	6号	C-34 イウ 11591-A・C-34 III 11326・C-34 III b・34 IV b一括		丸底壺	胴部						工具ナデ・ハケ後工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
128	461	7号	B-33 イウ 11434-2・B-33 III b一括	甕2類?	甕5型式?	口縁部～胴部下位	○	○			岩粒	工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ハケ目・ケズリ	
	462	7号	B-33 イウ 11434-2・B-33 イウ 11450	甕3類	甕6型式	口縁部						ハケ目	工具ナデ・指ナデ	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

土器集中遺構

挿図 番号	掲載 番号	遺構 番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
				芝原分類	中村型式		石英	長石	カセ石	ガラス 粒子	その他	外面	内面		
128	463	7号	B-33 イウ 11434-1・ B-33 イウ 11434・ B-33 イウ 11450・ B-33 Ⅲ一括		蓋 B	完形		○					ケズリ後工具ナデ・ 指頭痕	指ナデ・工具ナデ	
130	464	8号	D-32 イウ 9759-4		蓋 A	口縁部～ 天井部							指頭痕・ケズリ・ ミガキ	ハケ目・工具ナデ	
	465	8号	D-32 イウ 9759-1・ D-32 イウ 9759	堯1類	堯5型式	口縁部～ 脚部							ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	
	466	8号	D-32 イウ 9759・ D-32 Ⅲ b イウ 9759-3・ D-32 Ⅲ一括・ 注記なし		壺 B2	口縁～ 胴部		○			岩粒	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	ハケ目・工具ナデ・ 指頭痕	無刻目突帯	

古墳時代遺物観察表

挿入番号	掲載番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カクシ石	ガラス粒子	その他	外面	内面		
131	467	D-37 III b・III b	甕1類	甕5型式	完形							ハケ目・ケズリ・指ナデ	ハケ目・指ナデ	
132	468	D-38 III b・III b一括・D-38	甕1類	甕5型式	完形							ハケ目・工具ナデ・ケズリ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
	469	D-22 I b	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○	○			岩粒・赤色粒	ヘラケズリ・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ	
	470	C-37 III b	甕1類	甕5型式	ほぼ完形						岩粒	指頭痕・指ナデ・ケズリ・ハケ目	指頭痕・指ナデ・ハケ目・工具ナデ	
	471	注記なし	甕1類	甕5型式	完形	○				○		ケズリ・ハケ目・工具ナデ	ハケ目後工具ナデ	
133	472	注記なし	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○				岩粒	ケズリ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	473	C-37 III b	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位						赤色粒	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	474	C-37 IV上・37 III b	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部	○	○	○			軽石	ヘラケズリ・工具ナデ・指ナデ	ハケ目・指頭痕	
	475	C-37 III b	甕1類	甕5型式	完形	○	○		○		岩粒・赤色粒	工具ナデ・指ナデ・ケズリ	工具ナデ・ハケ目・指ナデ	
134	476	D-36 IV 107810・107817・107821・107823～107829・107838・107839・107841・107842・107844・107848・D-37 IV 107717・107819・107822・107850・D-37 IV 107478	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○					ヘラケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	477	C-37 II b一括・C-37 III b一括・D-37 IV	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部下位	○	○					工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	478	C-37 III b・IV上	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部					○	赤色粒・岩粒	工具ナデ・ケズリ	工具ナデ	
	479	B-16 III一括・B-16 III黒色砂	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部							ハケ目・ケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
135	480	D-37 III b1・III b一括・D-37 IV b1・IV上・D-37 IV 一括・D-37 IV 107481	甕1類	甕5型式	口縁部～胴部	○				○		工具ナデ・ハケ目	工具ナデ	
	481	A-17 III	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部	○	○					ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	482	SHB00	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部	○	○	○			岩粒・赤色粒	ヘラケズリ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	483	C-37 III b	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部	○	○	○			岩粒・赤色粒・黒曜石	ハケ目・ヘラケズリ・工具ナデ	ハケ目	
136	484	C-34 III b一括・C・D-34 III一括・III b一括	甕2類	甕5型式	ほぼ完形							ハケ目・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・ハケ目	
	485	D-31 III ｷﾞﾗﾞ	甕2類	甕5型式	脚部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	486	C-37 III b	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部	○	○	○			軽石	ヘラケズリ・ハケ目・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ	
	487	C-37 III b	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部	○	○	○			赤色粒	ヘラケズリ・工具ナデ	ヘラケズリ・工具ナデ	
137	488	C-37 III b一括	甕2類	甕5型式	完形							ヘラケズリ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ	
	489	D-37 IV 107452	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部		○		○		軽石	ヘラケズリ・工具ナデ・指ナデ・指頭痕	ヘラケズリ・工具ナデ・指ナデ	
	490	C-37 IV	甕1類	甕5型式	口縁部～脚部		○		○		軽石	ヘラケズリ・ハケ目・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・ハケ目	
	491	D-37 IV 107457・D-37 IV 107454～107456・107462	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部							工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指頭痕	
138	492	C-37 III b	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部		○		○			ヘラケズリ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ	
	493	C-37 III b	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部		○		○		赤色粒	ハケ目・ヘラケズリ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・ハケ目	
	494	D-23 III一括	甕2類	甕5型式	完形			○			雲母	ヘラケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	495	D-36 III一括・注記なし	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部							工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	496	C-37 III b	甕2類	甕5型式	完形		○					ヘラケズリ・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	497	D-37 III b	甕2類	甕5型式	完形						岩粒	ケズリ・工具ナデ・指頭痕・指ナデ	指ナデ・ハケ目・工具ナデ	
139	498	C-37 III b・C-37 IV上一括	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部		○	○			赤色粒	ヘラケズリ・ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目・指ナデ	
	499	C-37 III・III b	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部							ヘラケズリ・ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	500	D-31 III	甕2類	甕5型式	口縁部～脚部	○	○					ヘラケズリ・工具ナデ	ヘラケズリ・工具ナデ	
	501	D-29 III一括	甕3類	甕6型式	口縁部～脚部							工具ナデ・指頭痕	指ナデ・工具痕	
140	502	C-37 III b	甕3類	甕6型式	口縁部～脚部	○	○	○				タタキ・ハケ目	ハケ目	
	503	注記なし	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
	504	D-31 III一括・III ｷﾞﾗﾞ	甕3類	甕6型式	口縁部～脚部	○	○					ハケ目	ハケ目	
	505	B-20 III一括・D-20 II一括	甕3類	甕6型式	口縁部～脚部							ヘラケズリ・ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・ミガキ	
	506	D-23 III一括	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部下位		○		○			ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	507	11559-28 ミヅ	甕3類	甕6型式	口縁部～脚部							ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
141	508	B-23	甕3類	甕6型式	完形	○	○					ハケ目	ハケ目・工具ナデ	
	509	A-17 III	甕3類	甕6型式	口縁部～胴部							ハケ目・ケズリ	ハケ目・工具ナデ	
	510	C-23 III	甕3類	甕6型式	口縁部						雲母	ハケ目・工具ナデ	ハケ目	
	511	SHB00	甕3型式	甕6型式	口縁部							工具ナデ・ハケ目	ハケ目・工具ナデ	刻目突帯
	512	B-33 III b	甕3類	甕6型式	胴部～脚部		○	○			雲母	ハケ目・ケズリ	ハケ目・工具跡・指頭痕	
	513	C-28 III一括	甕3類	甕6型式	脚部							工具ナデ	工具ナデ	器台転用
	514	SHB00	甕3類	甕6型式	口縁部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	刻目突帯
142	515	B-22 III	甕3類	甕7型式	口縁部～胴部下位	○	○					ハケ目後ケズリ・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	刻目突帯
143	516	C-37 III b・C-37 III b一括・D-37 III b	甕3類	甕7型式	口縁部～胴部下位							工具ナデ・ハケ目・指ナデ	ハケ目・工具ナデ	刻目突帯
	517	D-37 南ﾄﾝﾌ	甕3類	甕7型式	口縁部～底部	○	○	○			岩粒・赤色粒	ヘラケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	518	B-23 III	甕3類	甕7型式	口縁部～胴部下位							ハケ目・ケズリ	工具ナデ・ケズリ	
	519	B-30 ｲﾝ 7407	甕3類	甕7型式	ほぼ完形		○					丁寧な工具ナデ・指頭痕	丁寧な工具ナデ・指頭痕	刻目突帯
144	520	C-34 III b一括・C-34 ｲﾝ 11358	甕3類	甕7型式	ほぼ完形							ハケ目後工具ナデ・ケズリ後工具ナデ・沈線状のナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	刻目突帯

古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カク石	ガウ粒子	その他	外面	内面		
144	521	C-24 III一括	甕3類	甕7型式	口縁部~胴部							工具ナデ・ケズリ	工具ナデ	刻目突帯
	522	A-28 III一括・A-29 III・III一括	甕3類	甕7型式	口縁部~胴部							工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	刻目突帯
	523	注記なし	甕3類	甕7型式	口縁部							工具ナデ	指ナデ	刻目
	524	B-35 Ⅲ' 11559・11・12・14・24・25	甕3類	甕7型式	口縁部~胴部	○	○		○			工具ナデ	工具ナデ	刻目突帯
145	525	A-24 III' Ⅲ' Ⅲ' Ⅲ' Ⅲ'・A'・28 III・A・B-24 Ⅲ' 1530・表採	甕3類	甕7型式	口縁部~胴部下位		○		○			工具ナデ	工具ナデ	
	526	A・B-24 Ⅲ' 1530・B-24 Ⅲ' 1530・A-28 III・注記なし	甕3類	甕7型式	口縁部~胴部下位							指頭痕・ミガキ・ハケ目・工具ナデ	指頭痕・ハケ目・工具ナデ	
	527	D-20 VI 63110	甕3類	甕8型式	口縁部~胴部							工具ナデ後指頭痕	工具ナデ	
	528	D-37 横一括	甕	完形		○	○	○	○			ケズリ後ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	529	C-34 III b 一括	丸底甕	完形		○	○	○		岩粒		タタキ後ハケ目・工具ナデ	ハケ目後ケズリ・工具ナデ	
146	530	注記なし	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部	○	○					工具ナデ・指頭痕・指ナデ	ケズリ・工具ナデ・指ナデ	
	531	D-45 VII	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部下位	○	○	○		雲母・赤色粒		ハケ目後工具ナデ	ケズリ・工具ナデ	沈線文
	532	C-33 III b 一括	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部							ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	
	533	A'・30 III 一括	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部							ミガキ・ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ケズリ・ミガキ・工具ナデ	
	534	C-33 III b・C-33 III b 一括	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部							ハケ目・工具ナデ・ミガキ	ハケ目・工具ナデ・ケズリ	
	535	A-28 III・D-28 III・B-24 III・A'・28 III	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部		○	○	○			ハケ目・工具ナデ後指ナデ	工具ナデ・ケズリ後工具ナデ	
	536	C-32 III・C-33 III b 一括・C-37 III b・注記なし	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部下位	○				赤色粒		工具ナデ・ハケ目	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	
	537	注記なし	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部下位	○		○	○			ハケ目後工具ナデ	ケズリ	
	538	B-30 III 一括	丸底甕	ほぼ完形								ハケ目・指ナデ・工具ナデ	ハケ目・指ナデ・工具ナデ	
	539	C-18 III	丸底甕	頸部					○	赤色粒		タタキ・工具ナデ	タタキ・工具ナデ	
147	540	SHB00-Ⅰ表採	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	541	A-28K IV	丸底甕	胴部						雲母		ハケ目	ケズリ	
	542	B-28 III	丸底甕	肩部								タタキ・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目・指ナデ	
	543	B-21 III 一括	丸底甕	丸底甕	口縁部~胴部下位	○	○			雲母・赤色粒		タタキ後工具ナデ	ハケ目後工具ナデ・工具ナデ	
	544	A-28 III・A-28 IV	丸底甕	底部		○		○				タタキ後工具ナデ	工具ナデ	
	545	D-37 III b 一括・D-37 III b・D-37 III b 一括・D-37 III b 一括・D-37 Ⅲ' 9163・D-37 表一括・D-37 I b 一括・C-37 III b・B-37 III b・C-37 II 一括・D-37 IV・判別不能	壺 B2 型式	壺 B2 型式	口縁部~底部	○	○			赤色粒		ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	刻目突帯4条・波状文4段
149	546	C-29 III 一括	壺 A1 型式	壺 A1 型式	口縁部~胴部							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	器台転用
	547	A-16 III 黒色砂・B-15 III 黒色砂・C-15 III・Ⅲ一括・Ⅲ 黒色砂・C-16 Ⅲ' 521 溝・注記なし	壺 B3 型式	壺 B3 型式	口縁部~胴部							ハケ目後工具ナデ	ハケ目後工具ナデ・指頭痕・丁寧なナデ(ミガキ状)	3条突帯
150	548	D-37 IV 一括・D-37 III b 一括	壺 B3 型式	ほぼ完形		○	○	○				ハケ目・ケズリ・工具ナデ	ハケ目・指頭痕・工具ナデ	刻目突帯
	549	C-37 III b 一括・D-37 III b 一括・D-37 III b	壺 A3 型式	ほぼ完形								ハケ目・工具ナデ・ケズリ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	刻目突帯1条・粉状圧痕
151	550	A-17 III・Ⅲ一括・Ⅳ	壺 A3 型式	頸部~底部		○	○					ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	刻目突帯
	551	D-37 III b	壺 A3 型式	肩部~底部		○	○	○				ケズリ・ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	刻目突帯
	552	D-37 IV Ⅲ 107715	壺 A3 型式	完形		○	○	○				ケズリ・ハケ目後工具ナデ	ハケ目後工具ナデ・指頭痕	刻目突帯
	553	C-37 III b・Ⅳ・Ⅳ一括	壺 A3 型式	完形								ケズリ・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕	突帯
152	554	C-37 III a 一括・C-37 III b・Ⅲ b 一括・C-38 Ⅲ' 3904	壺 B3 型式	頸部~底部		○	○					指ナデ・工具ナデ	指ナデ・工具ナデ	刻目突帯(頸部に1条・胴部に3条)
	555	表	壺 B4 型式	ほぼ完形								工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	刻目突帯4条
153	556	D-37 IV Ⅲ 107837	壺 A4 型式	口縁部~底部				○				ハケ目・指ナデ・工具ナデ	ハケ目後工具ナデ	貼り付け突帯
	557	C-26	壺 B3 型式	口縁部~底部		○	○	○				ハケ目・ケズリ後工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	刻目突帯
	558	C-37 III b・C・D-37 Ⅲ' 9163	壺 A1 型式	口縁部~底部		○			○			ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	559	C-37 III b 一括	壺	ほぼ完形		○				輝石		ケズリ・ハケ目・指ナデ	ハケ目・指ナデ・指頭痕	
154	560	C-23 III 一括	壺 B4 型式	肩部~底部		○	○	○				ハケ目後工具ナデ・ハケ目	工具ナデ	刻目突帯
	561	B-16 IV 一括	壺 A2 型式	口縁部								工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	器台転用
	562	A-20 III・注記なし	壺 B3 型式	口縁部									工具ナデ	器台転用
	563	C-34 III b	壺	口縁部								工具ナデ	ハケ目・指頭痕・工具ナデ	器台転用
	564	D-37 III・Ⅳ一括	壺	口縁部								工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	器台転用
	565	D-21 IV 一括	壺 B3 型式	口縁部								工具ナデ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ	器台転用
	566	C-37 III b・Ⅲ b 一括	壺 B3 型式	口縁部								ハケ目	指頭痕・ハケ目・工具ナデ	器台転用
	567	C-23 III・注記なし	壺	口縁部					○			ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	器台転用
	568	D-27 III 一括	壺 B3 型式	口縁部								ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指頭痕・工具ナデ	器台転用
	569	E-24 III b 一括	壺	口縁部		○	○					ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	器台転用
	570	C-37 III b	壺	口縁部								ハケ目・指ナデ	ハケ目	器台転用
	571	D-37 III b 一括	壺 B3 型式	口縁部								ハケ目・指頭痕・工具ナデ	指頭痕・ケズリ・工具ナデ	器台転用
	572	A-29 VI 28450	壺	口縁部								ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	器台転用
156	573	D-37 III b	丸底壺	丸底壺	口縁部~底部					赤色粒		ケズリ・指頭痕・ハケ目	工具ナデ・指頭痕	
	574	C-36 III 一括・D-36 III 一括・C・D-36 Ⅲ' 8907	丸底壺	丸底壺	口縁部~胴部下位					岩粒		工具ナデ・ハケ目	工具ナデ	
	575	D-37 III b・C-37 III b・Ⅲ上一括・C-37 IV 一括	丸底壺	丸底壺	完形		○					ハケ目・ケズリ・工具ナデ・指ナデ	ハケ目・指ナデ・工具ナデ	
	576	D-38 III b 一括	丸底壺	丸底壺	頸部~底部				○			指頭痕・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
	577	C-36 IV 一括・C-37 IV 上層・C-37 III b 一括・C-37 III b・C-37 IV	丸底壺	丸底壺	口縁部~底部				○			工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	
	578	C-3? III b	丸底壺	丸底壺	口縁部~底部					赤色粒		ケズリ	工具ナデ・指頭痕	
	579	C-37 III b 一括	丸底壺	丸底壺	完形							工具ナデ	指ナデ・工具ナデ	
	580	D-13 IV	丸底壺	丸底壺	頸部~底部		○			赤色粒		ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ・指頭痕・ハケ目	
	581	E-21 III 一括	丸底壺	丸底壺	口縁部~底部				○			工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・ミガキ	刻目突帯

古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カセ石	カウ石	その他	外面	内面	
156	582	C-37 III b・IV一括	丸底壺	口縁部～胸部下位			○			岩粒	工具ナデ	工具ナデ	
	583	C-31 III b一括	丸底壺	口縁部～底部			○				工具ナデ	工具ナデ後指ナデ・指頭痕	
157	584	注記なし	丸底壺	頸部～底部	○			○			ハケ目後ケズリやミガキ	指ナデ・工具ナデ	
	585	注記なし	丸底壺	頸部～底部				○			ハケ目後ケズリやミガキ	ハケ目	
	586	B-23 III	丸底壺	完形	○		○	○			ハケ目後工具ナデ・ケズリ・ミガキ	工具痕・工具ナデ・指頭痕	
	587	A・B-16 IV一括	丸底壺	ほぼ完形	○	○					ケズリ・指頭痕・工具ナデ	ハケ目後工具ナデ・指頭痕	
	588	B-16 III一括	丸底壺	口縁部～胸部下位			○	○		赤色粒	工具ナデ・表面磨滅	工具ナデ・工具痕・ケズリ	
	589	C-34	丸底壺	完形			○				ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ	
	590	D-37 III b	丸底壺	頸部～底部			○		○	赤色粒	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	ケズリ	
	591	B-22 IV一括	丸底壺	肩部～胸部下位							ハケ目後指ナデ	ケズリ・指頭痕・指ナデ	
	592	A-22 III・23 III	丸底壺	口縁部～底部							ハケ目	指頭痕	
	593	C-30 III一括	丸底壺	頸部～底部	○	○					工具ナデ・ケズリ	工具ナデ	
	594	C-31 III b一括	丸底壺	口縁部～底部							ハケ目・工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・指頭痕	
	595	C-37 III b・III b一括	丸底壺	胸部					○		ハケ目	ハケ目・指頭痕	貼り付け突帯
	596	D-31 III	丸底壺	胸部～底部	○	○	○			軽石	工具ナデ	工具ナデ・指頭痕	沈線文(斜線・波状・斜格子)
	597	C-24・24 III一括	丸底壺	口縁部～底部							ケズリ・指ナデ	工具ナデ	
	598	D-20 III一括・E-23 III一括・E-24 II一括	丸底壺	肩部～胸部							工具ナデ後ミガキ	工具ナデ	
	599	C-31 イワ 6075	丸底壺	口縁部							工具ナデ	工具ナデ	
600	C-37 IV a一括	丸底壺	口縁部～底部	○	○		○		岩粒	ハケ目後指頭痕	ハケ目後工具ナデ・指頭痕		
158	601	D-37 III b	蓋 A ?	胸部				○		工具ナデ	工具ナデ・ケズリ	無文突帯1条	
	602	注記なし	蓋 A	天井部～口縁部				○		ハケ目・工具ナデ・ケズリ後工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指ナデ	蓋転用	
	603	B-25 III	蓋 B	つまみ部～口縁部				○		ハケ目	ハケ目・指ナデ・工具ナデ	蓋転用	
	604	A-29 III一括・A-29 イワ 2485	蓋 B	つまみ部～口縁部						ハケ目	ハケ目		
	605	B-30 イワ 7407・注記なし	蓋 B	つまみ部～口縁部				○	岩粒	ハケ目・ミガキ・工具ナデ	工具ナデ・ミガキ・指頭痕	蓋転用	
	606	D-31 III b一括	蓋 B	肩部～口縁部				○		ケズリ後工具ナデ・指ナデ	工具ナデ後丁寧ナデ・指ナデ・指頭痕	蓋転用	
	607	B-28 III	蓋 B	ほぼ完形	○	○	○	○		ハケ目	ハケ目後工具ナデ・指頭痕		
	608	C-37 III a一括・III b一括・C-38 イワ 8093・注記なし	蓋 B	つまみ部～口縁部			○	○		ハケ目・指ナデ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	609	A・B-20 イワ 1374	蓋 B	ほぼ完形	○	○	○		赤色粒	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ		
	610	B-21 IV	蓋 B	ほぼ完形	○	○	○	○	雲母	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ		
159	611	注記なし	鉢 A	口縁部～脚部	○	○	○	○	赤色粒	ハケ目・工具ナデ	工具ナデ		
	612	A'・29 III	鉢 A	口縁部～脚部	○	○	○	○	軽石	工具ナデ・ハケ目・ケズリ・指頭痕	工具ナデ・ハケ目・指頭痕		
	613	B-16 IV・SHB00・注記なし	鉢 A	口縁部～脚部	○	○	○	○	岩粒	ケズリ・工具ナデ・指ナデ	ハケ目後工具ナデ・指ナデ		
	614	D-37 III b・III b一括	鉢 A	口縁部～胸部					岩粒	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・ケズリ		
	615	注記なし	鉢 A	ほぼ完形	○	○	○	○	赤色粒	ハケ目・工具ナデ	ハケ目・ケズリ・工具ナデ		
	616	B-34 イワ 11363・B-34 イワ 11326・B-34 III b	鉢 A	口縁部～底部	○	○		○	赤色粒	工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	617	D-31 III イワ マ	鉢 A	口縁部～底部						ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ケズリ・ハケ目・指頭痕		
	618	C-37 III b	鉢 A	口縁部～脚部	○	○	○		赤色粒・軽石	ケズリ・ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ケズリ・ハケ目・工具ナデ・指頭痕		
	619	C-37 III b	鉢 A	口縁部～脚部	○	○	○	○	軽石	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	620	C-37 III b	鉢 A	口縁部～脚部	○	○	○	○	黒曜石	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ・指頭痕		
160	621	A'・28 イワ 2441	鉢 A	口縁部～脚部						ハケ目	ハケ目		
	622	B-22.23 III	鉢 A	口縁部～脚部	○	○	○	○	軽石	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕・ケズリ		
	623	C-37 III b一括	鉢 B2	口縁部～脚部			○		赤色粒	工具ナデ・ヘラケズリ	工具ナデ		
	624	A-17 IV	鉢 B2	口縁部～脚部				○		ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	625	C-13 IV	鉢 B2	完形						ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目		
	626	注記なし	鉢 B2	口縁部～脚部						ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目		
	627	D-37 III一括	鉢 B2	口縁部～脚部	○	○				ケズリ・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	628	C-37 IV・IV上一括	鉢 B2	口縁部～脚部						ケズリ・工具ナデ	ハケ目・ケズリ		
	629	注記なし・SHB00	鉢 B2	口縁部～脚部			○			ケズリ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	630	D-34 III b	鉢 B2	口縁部～脚部			○			工具ナデ・指頭痕	工具ナデ		
161	631	C-37 III b・C-37 判別不可	鉢 B2	完形			○	○		工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ケズリ・指ナデ		
	632	C-37 III b・III b一括	鉢 B2	口縁部～脚部				○		工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	633	B-31 III一括	鉢 B2	口縁部～脚部					赤色粒	工具ナデ・ケズリ	ハケ目・指頭痕		
	634	D-26 III一括	鉢 B2	口縁部～脚部	○	○		○		指頭痕・工具ナデ・指ナデ	指頭痕・工具ナデ・指ナデ		
	635	C-37 III b・IV一括	鉢 B2	完形	○	○				ハケ目・指頭痕・工具ナデ	ハケ目・指頭痕・工具ナデ		
	636	C-37 III b	鉢 B2	口縁部～脚部					精製胎土	工具ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ		
	637	C-37 IV上面	鉢 B2	完形						ケズリ・工具ナデ・指頭痕・指ナデ	工具ナデ・指頭痕・指ナデ		
	638	C-24 III一括	鉢 B2	ほぼ完形						工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	639	B-23 III	鉢 B2	口縁部～脚部				○		工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ		
	640	D-38 III上・D-38 III b	鉢 B2	完形			○	○		工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ケズリ		
162	641	注記なし	鉢 B1	完形			○	○	赤色粒	工具ナデ・黒斑有り	工具ナデ・指頭痕		
	642	A-27 III上	鉢 B1	口縁部～底部			○	○		工具ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	643	C-37 III b	鉢 B1	口縁部～底部			○	○		ケズリ後ハケ目	ハケ目・工具ナデ		
	644	A-30 イワ 3038	鉢 B1	完形			○	○		指頭痕・指ナデ	指ナデ・工具ナデ		
	645	SHB00・注記なし	鉢 B1	口縁部～底部				○	赤色粒	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	646	B-22 III・注記なし	鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ後指ナデ・ケズリ	工具ナデ		
	647	E-37 表一括	鉢 B1	口縁部～底部				○	岩粒	指頭痕・工具ナデ・ケズリ	指頭痕・ケズリ・工具ナデ		

古墳時代遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カクシ 石	カクシ 粒子	その他	外面			内面
162	648	C-37 Ⅲ b		鉢 B1	口縁部～底部				○		ケズリ・工具ナデ・指頭痕	指頭痕・ハケ目		
	649	C-25 Ⅲ		鉢 B1	ほぼ完形				○		タタキ後工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・ハケ目		
	650	E-26 Ⅱ		鉢 B1	口縁部～底部						ケズリ	ケズリ		
	651	注記なし		鉢 B1	完形						工具ナデ・指ナデ	ハケ目・指ナデ		
	652	E-24 Ⅲ一括・注記なし		鉢 B1	完形						工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	653	1 T 黒褐色		鉢 B1	口縁部～底部		○			赤色粒	ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ	焼成後穿孔	
163	654	A-24 Ⅲ		鉢 B1	完形		○		○		ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ・指頭痕		
	655	C-32 Ⅲ一括		鉢 B1	口縁部～胴部下位			○		赤色粒	工具ナデ	工具ナデ		
	656	F-23 Ⅲ一括		鉢 B1	ほぼ完形				○		工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	657	C-37 Ⅲ b		鉢 B1	完形						工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指頭痕・指ナデ		
	658	A-17 Ⅲ・注記なし		鉢 B1	口縁部～底部				○		工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ		
	659	C-37 Ⅲ b		鉢 B1	口縁部～底部	○	○				工具ナデ・指頭痕・ケズリ	工具ナデ・指頭痕・ケズリ		
	660	B-16 Ⅳ・注記なし		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ		
	661	D-37 Ⅳ一括		鉢 B1	口縁部～底部						ケズリ後工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ		
	662	C-37 Ⅳ一括・Ⅳ		鉢 B1	口縁部～底部		○				工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	663	C-37 Ⅲ b		鉢 B1	ほぼ完形						工具ナデ・ハケ目・指頭痕	工具ナデ・ハケ目・指頭痕		
	664	C-27 Ⅲ一括		鉢 B1	口縁部～底部					岩粒	ハケ目・工具ナデ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ		
	665	D-31 Ⅲ		鉢 B1	ほぼ完形						工具ナデ・指ナデ	ケズリ・工具ナデ		
	666	A' -28 Ⅲ		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ・ケズリ		
	667	D-25 Ⅲ一括		鉢 B1	完形		○		○		ハケ目・指ナデ・指頭痕	ハケ目・工具ナデ		
	668	A' -29 Ⅲ一括		鉢 B1	ほぼ完形				○	精製胎土	ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	669	B-33 Ⅲ b 一括		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ・ハケ目		
	670	注記なし		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ		
	671	D-27 Ⅲ一括		鉢 B1	ほぼ完形		○			岩粒	ミガキ・指頭痕	ミガキ		
	672	C-26 Ⅲ一括		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	673	B-24 Ⅲ		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ・指ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	674	D-21 Ⅲ一括		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ		
	675	C-37 Ⅳ一括		鉢 B1	完形						工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	676	F-18 ミヅ 5081		鉢 B1	口縁部～底部					精製胎土	工具ナデ	工具ナデ		
	677	C-37 Ⅲ b 一括		鉢 B1	完形						ケズリ後ハケ目後工具ナデ	ハケ目に縦方向のナデ・指頭痕		
	678	E-28 Ⅳ一括		鉢 B1	完形	○	○	○	○	岩粒・赤色粒・雲母	しほり痕・指頭痕	ケズリ後指頭痕		
	679	D-23 Ⅲ b 一括		鉢 B1	完形	○	○	○			ハケ目後工具ナデ・指頭痕	横方向のハケ目・工具ナデ後工具ナデ・指頭痕		
	680	D-20 Ⅲ一括		鉢 B1	口縁部～胴部						工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・指ナデ		
	681	D-37 Ⅲ一括		鉢 B1	口縁部～底部		○		○		ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ		
	682	A' -22 Ⅲ		鉢 B1	口縁部～底部				○		ハケ目・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ		
	683	D-37 Ⅲ b 一括		鉢 B1	口縁部～底部		○			岩粒	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・工具痕		
	684	C-31 Ⅲ b 一括		鉢 B1	口縁部～底部		○		○		ハラケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	685	C-37 Ⅲ b		鉢 B1	口縁部～底部				○		工具ナデ・ケズリ	工具ナデ		
	686	C-19 イワ 8686		鉢 B1	完形		○				指頭痕・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	687	A-30 Ⅲ一括		鉢 B1	口縁部～底部						工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	688	B-34 Ⅲ b 下・B-34 イワ 11249・注記なし		鉢 B1	口縁部～底部		○	○			ケズリ・ハケ目・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	689	A' -30 Ⅲ		鉢 B1	口縁部～胴部下位						工具ナデ	指ナデ・工具ナデ		
	690	D-25 Ⅳ		鉢 B1	口縁部～胴部		○				工具ナデ	ハケ目		
	691	C-28 Ⅲ一括		鉢 B1	胴部～底部		○		○		工具ナデ・ミガキ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕・ミガキ		
	692	C-37 Ⅲ上・C-37 Ⅲ b・C-37 Ⅳ		鉢 B1	完形					雲母	工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
164	693	C-37 Ⅲ b 一括		高坏 2 型式	口縁部～脚部						ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	脚部に穿孔	
	694	F-14 Ⅲ		高坏 2 型式	口縁部～脚部	○	○	○	○		ハケ目後工具ナデ・ケズリ・ミガキ後工具ナデ	ハケ目後工具ナデ後ミガキ		
165	695	C-27 Ⅲ・Ⅲ一括・D-27 イワ 5865		高坏 2 型式	坏部						ハケ目・工具ナデ・ミガキ	ハケ目・ミガキ		
	696	C-27 Ⅲ一括・D-7 Ⅲ一括・D-27 Ⅲ・Ⅲ一括・Ⅳ一括・D-27 イワ 7444		高坏 2 型式	坏部						ミガキ後工具ナデ	ミガキ後工具ナデ		
	697	C-28 Ⅲ一括		高坏 2 型式	坏部						工具ナデ後ミガキ	ミガキ		
	698	C-34 Ⅲ b 一括		高坏 2 型式	坏部						ケズリ・ミガキ・工具ナデ	ケズリ・ミガキ・工具ナデ		
	699	C-37 Ⅲ b・Ⅲ b 一括		高坏 2 型式	坏部		○		○		工具ナデ・指ナデ	工具ナデ		
	700	E-21 Ⅲ一括・E-23 Ⅲ一括		高坏 2 型式	坏部		○		○		ミガキ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ後ミガキ		
	701	D-31 Ⅲ一括		高坏 2 型式	坏部						工具ナデ後ミガキ	ミガキ・工具ナデ		
	702	C-37 Ⅲ b・Ⅲ b 一括		高坏 2 型式	杯部				○		工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・ミガキ・指頭痕	蓋転用	
	703	C-34 Ⅲ b		高坏 2 型式	坏部						ハケ目後工具ナデ・指頭痕	ハケ目後工具ナデ・指ナデ		
	704	E-21 Ⅲ一括・E-24 Ⅲ一括		高坏 2 型式	坏部				○		ケズリ・工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・ハケ目・ミガキ		
	705	C-36 Ⅳ一括・C-37 Ⅲ b・Ⅲ b 一括・C-37 Ⅳ・Ⅳ一括・D-37 Ⅲ・Ⅲ b・Ⅲ b 一括・注記なし		高坏 2 型式	坏部		○				ケズリ・ハケ目・工具ナデ・ミガキ	ミガキ・工具ナデ・ハケ目・ハケ目状の工具ナデ		
166	706	D-35 Ⅲ一括		高坏 3 型式	坏部						工具ナデ	工具ナデ		
	707	D-23 Ⅲ b 一括		高坏 3 型式	坏部						ミガキ	ミガキ		
	708	D-23 Ⅲ一括		高坏 3 型式	坏部						工具ナデ・指ナデ・丁摩ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	709	A' 22 Ⅲ		高坏 4 型式	坏部	○	○		○		ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	710	A' -22 Ⅲ		高坏	坏底部～脚部	○	○	○		赤色粒	工具ナデ・ミガキ	ケズリ・工具ナデ・ハケ目後工具ナデ		

古墳時代遺物観察表

挿入 番号	掲載 番号	注記番号	器 種・分 類		部 位	胎 土					調 整		備 考			
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カケ石	ガク 粒子	その他	外面	内面				
166	711	D-24 Ⅲ一括		高坏 3 型式	坏部~脚部							ミガキ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ			
	712	C-37 Ⅲ b		高坏	脚部							ミガキ	ミガキ・指ナデ・ハケ目			
	713	F-26 Ⅲ		高坏	脚部							ミガキ状の工具ナデ・ 工具ナデ	ケズリ・指ナデ			
	714	B-27 Ⅲ		高坏	脚部				○			ミガキ・工具ナデ・ハケ目	ハケ目・工具ナデ			
	715	B-33 Ⅲ b 一括		高坏	脚部							ミガキ・ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指ナデ			
	716	C-28 Ⅲ一括		高坏	脚部				○			工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・布目痕・指ナデ			
	717	D-37 Ⅲ一括・Ⅲ b 一括		高坏	脚部							工具ナデ	工具ナデ			
	718	C-27 Ⅲ		高坏 3 型式	坏部				○	精製胎土	ハケ目	工具ナデ	ハケ目・工具ナデ			
	719	D-25 Ⅲ		高坏 3 型式	坏部				○		工具ナデ	工具ナデ	ハケ目・工具ナデ			
	720	B-21 Ⅲ一括		高坏 3 型式	坏部						工具ナデ	ハケ目・工具ナデ				
	721	E-24 Ⅲ一括		高坏	脚部						工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指頭痕				
167	722	SHB00	増 0-1		口縁部~底部							工具ナデ・ハケ目・ミガキ	工具ナデ	櫛描波状文		
	723	F-22 Ⅲ 欅間	増 0-1		口縁部~底部					精製胎土	ケズリ・工具ナデ・ ハケ目・ミガキ	工具ナデ・ハケ目・指頭痕	櫛描波状文			
	724	B-22 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部~底部						ハケ目・ミガキ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	櫛描波状文			
	725	C-31 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部				○		ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目	櫛描波状文			
	726	B-20 Ⅲ一括・B・Ⅲ	増 0-1		口縁部~胴部						工具ナデ後ミガキ	工具ナデ	櫛描波状文			
	727	F-23 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部				○					波状鋸歯文		
	728	C-24 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部~胴部						工具ナデ	工具ナデ		波状鋸歯文		
	729	E・F21 大シ 5117	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
	730	SHB00	増 0-1		口縁部				○			ハケ目・工具ナデ		波状鋸歯文		
	731	A-26・28 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部					精製胎土		工具ナデ		波状鋸歯文		
	732	D-25 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部					精製胎土		工具ナデ		櫛描波状文		
	733	A-21 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○				ハケ目・ナデ	波状鋸歯文		
	734	B-33 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
	735	シ 11559-21	増 0-1		口縁部~				○	○	赤色粒	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		器台転用・ 波状鋸歯文	
	736	C-25 Ⅲ	増 0-1		口縁部~胴部										波状鋸歯文・ 先刻	
	737	D-24	増 0-1		口縁部								工具ナデ・ハケ目		櫛描波状文	
	738	C-30 Ⅲ一括・C-31 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部								ハケ目		波状鋸歯文	
	739	E-33 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部								ハケ目・工具ナデ		波状鋸歯文	
	740	B-31 Ⅲ	増 0-1		口縁部								ハケ目		波状鋸歯文	
	741	A-31 Ⅲ	増 0-1		口縁部								ハケ目		波状鋸歯文	
	742	B-27 ㊦ 5862	増 0-1		口縁部								ハケ目		波状鋸歯文	
	743	A-22 Ⅲ b 一括	増 0-1		口縁部										櫛描波状文	
	744	D-23 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部								ハケ目・工具ナデ		波状鋸歯文・ 沈線文による 組み合わせ文	
	745	A-23 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						櫛描波状文	
	746	D-27 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部				○						櫛描波状文	
	747	B-25 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
	748	B-21 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
	749	A-27 ㊦ 1391	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
	750	A'・21・A-21 ㊦ 294	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文・ 波状鋸歯文	
	751	C-19 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
	752	D・E-23 Ⅳ一括	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
	753	B-33 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部						工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
	754	E-21 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
	755	B-20 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
	756	D-27 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
	757	B-28 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			櫛描波状文	
	758	B-33 Ⅲ b 一括	増 0-1		口縁部										櫛描波状文	
	759	B-28 Ⅲ	増 0-1		口縁部										櫛描波状文	
	760	C-34 Ⅲ b	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
	761	D-32 Ⅲ b	増 0-1		口縁部						工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
	168	762	注記なし	増 0-1		口縁部~胴部									櫛描波状文	
		763	A-31 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部~胴部									櫛描波状文	
		764	A-31 Ⅲ	増 0-1		口縁部						ハケ目	ハケ目・工具ナデ			櫛描波状文
765		注記なし	増 0-1		口縁部							ハケ目・工具ナデ			櫛描波状文	
766		注記なし	増 0-1		口縁部~頸部						摩耗	摩耗			波状鋸歯文	
767		C-25 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
768		A-28 Ⅳ	増 0-1		口縁部				○						櫛描波状文	
769		D-27 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
770		D-28 Ⅱ	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
771		F-24 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						櫛描波状文	
772		F-27 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
773		B-22 Ⅲ	増 0-1		胴部				○						波状鋸歯文	
774		B-33 Ⅲ b 一括	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
775		C-31 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
776		C-21 Ⅲ	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
777		C-27 Ⅳ一括	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
778		D-22 I b	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
779		B-28 Ⅲ	増 0-1		口縁部								ハケ目		波状鋸歯文	
780		表探	増 0-1		口縁部								ハケ目		波状鋸歯文	
781		注記なし	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
782		B-25 ㊦ 1735	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
783		B-31 Ⅲ	増 0-1		口縁部						工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
784		C-22 VI 一括	増 0-1		口縁部						工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
785		D-27 Ⅳ一括	増 0-1		口縁部						工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
786		B-27 Ⅲ	増 0-1		口縁部						工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	
787		C-34 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
788		A'・28 Ⅲ	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
789		B-33 Ⅲ	増 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
790		D-24 Ⅲ一括	増 0-1		口縁部				○						波状鋸歯文	
791		D-22 I b 一括	増 0-1		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ			波状鋸歯文	

古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考		
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カクシ石	カクシ粒子	その他	外面	内面			
168	792	D-27 Ⅲ下	埴 0-1		口縁部							工具ナデ	工具ナデ	波状鋸歯文	
	793	B-23 Ⅲ	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
	794	注記なし	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
	795	注記なし	埴 0-1		口縁部								工具ナデ		波状鋸歯文
	796	B-23 Ⅲ	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
	797	C-30 Ⅲ b 一括	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
	798	D-24 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部								工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	799	C-24・25 Ⅲ	埴 0-1		口縁部										櫛描波状文
	800	D-25 Ⅲ	埴 0-1		胴部									ハケ目	櫛描波状文
	801	E-23 IV一括	埴 0-1		口縁部					○				ハケ目・工具ナデ	波状鋸歯文
	802	D-20 II一括	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
	803	C-33 Ⅲ b	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
	804	E-27 IV上一括	埴 0-1		口縁部								工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	波状鋸歯文
	805	D-25 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部									ハケ目	櫛描波状文
	806	C-24 II	埴 0-1		口縁部									ハケ目	櫛描波状文
	807	C-25 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部								工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	波状鋸歯文
	808	C-29 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
	809	表探	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文
810	A-23 Ⅲ	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
811	D-24 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部										波状鋸歯文	
812	B-25 Ⅲ・D-25 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部								工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文	
813	A-30 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部～胴部										波状鋸歯文	
169	814	B-30 Ⅲ b・Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部～胴部					○		工具ナデ・ケズリ	工具ナデ		
	815	D-23 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部	○	○					工具ナデ	ハケ目		
	816	B-34 イウ 11436	埴 0-1		口縁部～底部							工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目		
	817	D-20 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部～胴部					○		ミガキ後工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	818	B-34 Ⅲ b 一括	埴 0-1		口縁部							工具ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	819	E-24 イウ 5228	埴 0-1		口縁部							ハケ目(?)・ 工具ナデ後ミガキ	指頭痕・工具ナデ後指ナデ		
	820	C-24 II一括・ C-24 Ⅲ一括・C-25 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部							ミガキ・工具ナデ	指頭痕		
	821	B-23 Ⅲ・Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部～底部							工具痕・工具ナデ	工具痕・工具ナデ・指ナデ		
	822	F-26 イウ 6046	埴 0-1		口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ・工具痕・指頭痕		
	823	C-22 Ⅲ	埴 0-1		口縁部～胴部					○		ハケ目	工具ナデ		
	824	A-29 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部～底部							工具ナデ	指頭痕・工具ナデ		
	825	A-23 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部～底部	○	○					工具ナデ	指頭痕・工具ナデ		
	826	C-22 Ⅲ	埴 0-2		口縁部～底部							ケズリ後工具ナデ	工具ナデ		
	827	C-20 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ		
	828	A-30 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部							ハケ目後工具ナデ・ 工具痕・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・工具痕		
	829	SHB	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ	指頭痕・工具ナデ		
	830	B-34 一括	埴 0-2		ほぼ完形	○	○	○				ケズリ・工具ナデ・ タタキ後指頭痕	ハケ目後工具ナデ・指頭痕		
	831	D-28 IV一括	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ		
832	A'・22 Ⅲ	埴 0-2		口縁部～底部							ミガキ	工具押さえ			
833	B-33 Ⅲ b・Ⅲ b 一括	埴 0-2		口縁部～ 胴部下位				○			ケズリ・タタキ後指頭痕・ ミガキ	ケズリ・工具ナデ	線刻文		
834	D-23 II一括・Ⅲ・ IV一括	埴 0-2		口縁部～底部						岩粒	指頭痕・工具ナデ	工具ナデ・指頭痕			
835	B-22 Ⅲ	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ			
836	D-27 Ⅲ b 一括	埴 0-2		ほぼ完形	○	○	○				タタキ後工具ナデ・工具痕	工具ナデ・指頭痕			
837	SHB00	埴 0-2		完形							ケズリ	工具ナデ・ハケ目・指頭痕			
838	B-28 Ⅲ	埴 0-2		口縁部～底部							ケズリ・指頭痕	工具ナデ	沈線文		
839	A-23 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部						岩粒	工具痕・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ			
840	C-28 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部				○	○		ハケ目・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕			
841	注記なし	埴 0-2		口縁部～底部					○		工具ナデ	工具ナデ			
842	C-29 Ⅲ	埴 0-2		口縁部～底部					○		ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ			
843	B-35 Ⅲ b 一括	埴 0-2		ほぼ完形	○	○	○				工具ナデ	タタキ後丁寧な工具ナデ			
844	B-32 Ⅲ b	埴 0-2		口縁部～底部				○	○		工具ナデ	指ナデ・工具ナデ			
845	C-28 Ⅲ	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ			
846	C-25 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部				○			ケズリ	工具ナデ			
847	C-25 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部				○			ケズリ・工具ナデ	指ナデ・工具ナデ			
848	B-21 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ・指頭痕			
849	D-27 IV上一括	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ・ケズリ			
850	注記なし	埴 0-1		口縁部～底部					○	岩粒	ケズリ・工具ナデ	工具痕・工具ナデ			
851	SHB00	埴 0-2		口縁部～底部	○	○					ハケ目・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕			
852	D-23～25 Ⅲ一括	埴 0-1		口縁部～底部					○		ハケ目・工具痕・工具ナデ	工具痕・工具ナデ・指頭痕			
853	C-25 Ⅲ一括	埴 0-2		口縁部～底部					○	岩粒	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	指ナデ・横ナデ			
171	854	B-33 Ⅲ		埴 1 型式	口縁部～底部				○		工具ナデ	工具ナデ・指頭痕			
	855	D-31 Ⅲト'キ'マ'	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	856	C-32 Ⅲ b 一括	埴 0-2		口縁部～胴部							工具ナデ	ハケ目・工具痕・工具ナデ		
	857	C-34 Ⅲ b・Ⅲ b 一括・ B-34 Ⅲ b 一括		埴 1 型式	口縁部～底部							ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ	細沈線文	
	858	A-29 Ⅲ・B-22	埴 0-2		口縁部～底部							工具ナデ・ミガキ	ハケ目・工具ナデ		
859	芝原 00・A-30 Ⅲ		埴 1 型式	底部							工具ナデ	工具ナデ・指ナデ			

古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カク石	カク石	その他	外面	内面		
172	860	表採		埴1型式	口縁部～底部					赤色粒	工具ナデ	工具ナデ・工具痕		
	861	C-31 Ⅲ b 一括		埴1型式	口縁部～底部						工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・指頭痕		
	862	C-34・C-37 Ⅲ a 一括		埴1型式	口縁部～底部						工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ケズリ・指頭痕		
	863	A-22 イウ 871		埴1型式	口縁部～底部						ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ・指頭痕		
	864	D-21 大シ' 5134		埴1型式	口縁部～底部	○					工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指頭痕		
172	865	C-34 Ⅲ b		埴1型式	口縁部～胴部	○					工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ケズリ		
	866	SHB00		埴1型式	口縁部～底部						ケズリ・ミガキ	ケズリ・工具ナデ		
	867	A-28 イウ 1349		埴1型式	胴部～底部						ミガキ	工具ナデ		
	868	B-21 Ⅲ 一括		埴1型式	口縁部～底部	○	○	○			工具ナデ・ハケ目	指頭痕・指ナデ・工具ナデ		
	869	A' -28 Ⅲ・A-28 イウ 1865・A-28・注記なし		埴1型式	口縁部～胴部						ハケ目・ケズリ・工具ナデ	ハケ目後工具ナデ・指ナデ		
	870	B-27 Ⅲ・B-28 Ⅲ		埴1型式	胴部～底部						ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	871	A-28 Ⅲ 一括		埴1型式	口縁部～胴部						工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	872	A-29 Ⅲ		埴1型式	口縁部～胴部						工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	873	E-24 Ⅲ 一括		埴1型式	胴部						工具ナデ・ハケ目	ハケ目・ミガキ・工具ナデ		
	874	A-24 Ⅲ		埴1型式	胴部						ミガキ・工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
173	875	B-16 イウ 8775		埴1型式	胴部						ハケ目・工具ナデ後指ナデ	工具ナデ後指ナデ		
	876	B-30 Ⅲ		埴2型式	完形					赤色粒	ハケ目	指頭痕・ハケ目・工具ナデ		
	877	D・? II c		埴2型式	口縁部～胴部					○	精製胎土	工具ナデ・ミガキ	工具ナデ・ミガキ	
	878	B-31 Ⅲ b 一括・C-30 Ⅲ b 一括		埴2型式	口縁部						精製胎土	ミガキ	朱塗り	
	879	C-23 Ⅲ・注記なし		埴2型式	完形						ハケ目・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	880	F-19 II 一括		埴2型式	口縁部～底部						ケズリ・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ		
	881	B-30 Ⅲ・Ⅲ 一括		埴2型式	口縁部～底部					赤色粒	ハケ目・工具ナデ・横ナデ	工具ナデ・工具痕		
	882	A' -22 Ⅲ		埴2型式	口縁部～胴部				○		工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・横ナデ・指頭痕		
	883	A-28 Ⅲ 一括・A-28 IV		埴2型式	口縁部～胴部				○	岩粒	摩耗	摩耗		
	884	A-22 Ⅲ		埴2型式	口縁部～底部				○	岩粒	工具ナデ	工具ナデ	胴部に穿孔	
	885	B-31 Ⅲ		埴2型式	口縁部～胴部					赤色粒	工具ナデ	工具ナデ		
	886	D-32 Ⅲ 一括		埴2型式	口縁部～胴部						工具ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	887	D-24 Ⅲ 一括		埴2型式	口縁部～胴部						ケズリ	ケズリ		
	888	D-35 イウ 11559		埴2型式	口縁部～胴部				○		工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ケズリ		
	889	D-24 Ⅲ 一括		埴2型式	口縁部～底部						ハケ目後工具ナデ・横ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	890	A-28 Ⅲ		埴2型式	口縁部～胴部						工具ナデ・ハケ目・ミガキ	工具ナデ・ハケ目		
	891	D-28 Ⅲ 一括		埴2型式	口縁部～胴部						工具ナデ後ミガキ	工具ナデ		
	892	D-29 一括		埴2型式	底部				○	○	赤色粒	工具ナデ・ミガキ	工具ナデ	
	893	C-23 Ⅲ 一括		埴2型式	底部				○		ハケ目後工具ナデ	工具ナデ・ケズリ		
	894	C-31 Ⅲ 一括		埴2型式	底部					○	精製胎土	工具ナデ	工具ナデ	
895	C-31 Ⅲ b 一括		埴2型式	ほぼ完形	○	○	○			工具ナデ	工具ナデ・指頭痕			
896	A-30 Ⅲ 一括		埴2型式	胴部～底部						工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ			
174	897	A-28 イウ 1349		埴3型式	胴部～底部					赤色粒	丁寧な工具ナデ	丁寧な工具ナデ		
	898	C-36 Ⅲ		埴3型式	胴部～底部						工具ナデ後指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	899	D-20 Ⅲ 一括		埴3型式	胴部～底部						ハケ目	ハケ目・ケズリ・工具ナデ		
	900	SHB00		埴3型式	口縁部						工具ナデ後ハケ目	工具ナデ・指ナデ		
	901	D-25 Ⅲ	手捏	完形					○		工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
175	902	C-32 Ⅲ b 一括	手捏	ほぼ完形					○		指ナデ	指ナデ		
	903	C-22 Ⅲ	手捏	ほぼ完形							指頭痕	指頭痕		
	904	B-30 Ⅲ	手捏	底部							工具ナデ	工具ナデ		
	905	C-32 VII b 9818	手捏	完形					○	○	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	906	C-31 Ⅲ b	手捏	ほぼ完形					○		工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ		
	907	注記なし	手捏	口縁部～底部					○	○	赤色粒	指頭痕・指ナデ	指頭痕・指ナデ	
	908	B-34 Ⅲ 一括	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	909	C-26 イウ 2431	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	910	C-37 Ⅲ b	手捏	ほぼ完形							赤色粒	工具ナデ	工具ナデ	
	911	C-23 Ⅲ b 一括	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	912	C-29 大シ' 6100	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	913	1T 野穴 1	手捏	口縁部～底部					○	○	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	914	C-37 Ⅲ b	手捏	ほぼ完形					○	○	工具ナデ後指ナデ	工具ナデ後指ナデ		
	915	B-31 Ⅲ 一括	手捏	完形						○	工具ナデ・指頭痕・黒斑有り	工具ナデ指頭痕		
	916	D-35 シ' 11559	手捏	ほぼ完形							指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ		
917	A-26 溝	手捏	口縁部～胴部下位							ケズリ	ケズリ・工具ナデ・指ナデ			
918	C-23 I b 一括	手捏	完形					○	○	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ			
919	A-20 Ⅲ	手捏	口縁部～底部							岩粒	指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
920	SHB99	手捏	口縁部～底部					○	○	赤色粒	工具ナデ	ケズリ・工具ナデ		
921	B-25 Ⅲ上	手捏	口縁部～底部					○	○	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕			
922	D-36 シ' 11559・B-37 Ⅲ	手捏	口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ・指ナデ			
923	C-23 イウ 1742	手捏	口縁部～底部					○	○	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ・指頭痕			
924	D-24 イウ 4933	手捏	完形					○		赤色粒	工具ナデ後指ナデ	工具ナデ後指ナデ		
925	A-23 Ⅲ	手捏	口縁部～底部					○	○	赤色粒	指ナデ	指ナデ		
926	A-23 Ⅲ 一括	手捏	口縁部～底部					○	○	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕			
927	B-32 Ⅲ b 一括	手捏	口縁部～底部							ケズリ・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ			

古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考	
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カクシ石	カクシ粒子	その他	外面	内面		
175	928	C-37 Ⅲ b	手捏	ほぼ完形			○		○		ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	929	注記なし	手捏	ほぼ完形					○		工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	930	C-37 Ⅲ b	手捏	完形							工具ナデ・指頭痕	指ナデ		
	931	D-36 Ⅳ一括	手捏	胴部～底部							ケズリ・指頭痕	ケズリ		
	932	C-23 Ⅰ b一括	手捏	口縁部～底部							工具ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	933	D-20 Ⅲ一括・D-21 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部							工具ナデ後指ナデ	工具ナデ後指ナデ		
	934	E-26 Ⅱ一括	手捏	胴部～底部							ケズリ	工具ナデ		
935	C-28 Ⅲ b一括	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目			
176	936	B-31 Ⅲ	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	937	D-37 Ⅲ b一括	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	938	A-16 Ⅲ黒色砂	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	939	D-31 Ⅲ一括	手捏	ほぼ完形							指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	940	C-37 Ⅲ b	手捏	ほぼ完形			○		○	赤色粒	工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ		
	941	B-34 Ⅲ b一括	手捏	ほぼ完形					○	赤色粒	工具ナデ・指ナデ	指ナデ・指頭痕		
	942	D-25 Ⅲ	手捏	ほぼ完形			○		○		ケズリ・指頭痕	ケズリ・指頭痕		
	943	C-31 Ⅲ	手捏	口縁部～底部			○		○		工具ナデ	ナデ		
	944	E-24 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部			○		○		工具ナデ	指頭痕		
	945	D-20 Ⅱ	手捏	口縁部～底部							ケズリ	工具ナデ		
	946	C-30 Ⅲ	手捏	ほぼ完形			○	○			ケズリ・指頭痕	ケズリ		
	947	A-24 Ⅲ	手捏	ほぼ完形			○		○		指ナデ	指ナデ		
	948	A-28 Ⅲ一括	手捏	ほぼ完形			○				指ナデ	工具ナデ後指ナデ		
	949	B-33	手捏	完形							工具ナデ	工具ナデ		
	950	E-27 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ		
	951	F-18 Ⅲ畝間	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	952	A-26 ミヅ 15	手捏	口縁部～底部						精製胎土	指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	953	D-15	手捏	口縁部～底部			○				工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	954	注記なし	手捏	ほぼ完形			○		○		指ナデ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ		
	955	B-32 Ⅲ	手捏	口縁部～底部			○		○		指ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	956	E-31 一括	手捏	口縁部～底部							ケズリ・工具ナデ	ケズリ・工具ナデ		
	957	D-29 Ⅱ一括	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	958	D-28 Ⅲ	手捏	口縁部～底部			○		○	赤色粒	工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	959	D-23 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部			○		○	赤色粒・岩粒	ケズリ・指頭痕	ハケ目・ケズリ・指頭痕		
	960	D-35 ミヅ 11559・D-35 Ⅰ	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	961	D-30 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部			○			赤色粒	工具ナデ・ケズリ	ハケ目・工具ナデ		
	962	D-20 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部			○				工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	963	B-34 Ⅲ b	手捏	完形			○		○		工具ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
	964	A-29 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部			○				指ナデ・指頭痕	工具ナデ		
	965	SHB00 地表上一括	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ・指頭痕	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
177	966	C-24 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部			○	○		工具ナデ	ハケ目・指頭痕・ミガキ			
	967	D-25 Ⅲ一括	手捏	完形			○			ケズリ・指頭痕	ケズリ・工具ナデ			
	968	C-37 Ⅲ b	手捏	口縁部～底部			○	○		赤色粒	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	969	C-27 Ⅲ一括	手捏	完形			○		○	赤色粒	ケズリ・工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
	970	B-20 Ⅲ一括	手捏	完形			○		○	赤色粒・岩粒	ケズリ・指頭痕	ケズリ・指頭痕		
	971	B-20 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部							タタキ後工具ナデ	工具ナデ・指頭痕		
	972	A-31 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部							ケズリ	工具ナデ		
	973	B-31 Ⅲ一括	手捏	底部							ハケ目	工具ナデ・指ナデ		
	974	A-27 Ⅲ一括	手捏	口縁部～底部					○		工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ・指頭痕		
	975	B-21 Ⅲ	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	976	A-22 Ⅲ	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	977	C-37 Ⅲ b 一括	手捏	脚部										
	178	978	E-31 Ⅲ b	手捏	口縁部～脚部			○	○			指頭痕	指頭痕	
979		E-24 Ⅲ b	手捏	口縁部～底部			○				工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
980		B-35 Ⅲ b	手捏	完形							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
981		SHB00	手捏	口縁部～底部							工具ナデ・指ナデ	指ナデ		
982		D-37 Ⅲ上一括	手捏	口縁部～底部			○	○	○	赤色粒	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
983		B-23 Ⅲ	手捏	口縁部～底部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
984		D-30 Ⅲ	手捏	口縁部～脚部							指ナデ・指頭痕	指ナデ・指頭痕		
985		C-37 Ⅲ b	手捏	胴部～底部						精製胎土	工具ナデ	工具ナデ		
986		C-32 Ⅲ	手捏	口縁部～底部			○	○			ケズリ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		
987		E-23 Ⅱ一括	手捏	口縁部～底部			○		○		工具ナデ	工具ナデ		三角突帯
988		D-25 Ⅲ・D-25 Ⅳ上一括	手捏	口縁部～底部			○				ケズリ・工具ナデ・指頭痕	指頭痕・工具ナデ		三角突帯
989		注記なし	手捏	口縁部～脚部							工具ナデ	工具ナデ		三角突帯
990		B-25 Ⅲ	手捏	口縁部～脚部							工具ナデ・指頭痕	工具ナデ・指頭痕		三角突帯
991		B-37 Ⅲ b 一括	手捏	口縁部～胴部					○	赤色粒	工具ナデ・指頭痕	指頭痕		

古墳時代遺物観察表

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土					調整		備考
			芝原分類	中村型式		石英	長石	カセ石	ガラス粒子	その他	外面	内面	
177	992	B-25 初マ	手捏		口縁部～底部		○		○		指ナデ・指頭痕	工具ナデ	ほぼ完形
	993	D-28 Ⅲ	手捏		頸部～底部						工具ナデ		
178	994	D-35 ミ' 11559	坏蓋		つまみ部～口縁部				○		ハケ目	工具ナデ・指ナデ	櫛描波状文
	995	D-25 Ⅲ	坏蓋		つまみ部						工具ナデ	工具ナデ	
	996	A-28 Ⅲ一括・イウ2448	坏蓋		頂部～口縁部						工具ナデ	工具ナデ・ミガキ	櫛描波状文
	997	B-32 Ⅱ	坏蓋		口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	998	D-25 Ⅲ一括	坏蓋		頂部～口縁部						工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	999	D-29 イウ6479	坏蓋		頂部～口縁部					精製胎土	工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	1000	E-27 Ⅲ一括・C-23 Ⅲ b 一括	坏蓋		頂部～口縁部					精製胎土	工具ナデ	ハケ目後工具ナデ	
	1001	D-23 Ⅲ一括	坏蓋		頂部～口縁部						工具ナデ	工具ナデ	
	1002	D-25 Ⅲ一括	坏蓋		頂部～口縁部						工具ナデ	工具ナデ	
	1003	C-29 Ⅳ上一括	坏蓋		頂部～口縁部						工具ナデ	工具ナデ	
	1004	E-21 Ⅲ一括	坏蓋		頂部～口縁部						工具ナデ	工具ナデ	
	1005	表探	坏蓋		頂部～口縁部						工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目	天地不明
	1006	C-34 Ⅲ b	坏蓋		口縁部								
	1007	D-32 Ⅲ	坏蓋		口縁部								
	1008	E-31 Ⅲ	坏蓋		口縁部								
	1009	E-21 Ⅲ一括	坏蓋		口縁部								
	1010	注記なし	坏蓋		口縁部								
	1011	A' -21 Ⅲ	坏蓋		口縁部								櫛描波状文
179	1012	C-26 Ⅱ一括	器種不明		口縁部						工具ナデ	工具ナデ	鋸歯文
	1013	D-24 Ⅲ一括	器種不明		口縁部～胴部								鋸歯文
	1014	D-23 Ⅲ	器種不明		口縁部～胴部						工具ナデ	工具ナデ	櫛描波状文
	1015	SHB00	器種不明		口縁部								鋸歯文
	1016	表探	甌		把手部						工具ナデ	工具ナデ	
	1017	D-22 Ⅲ一括	甌		把手部						工具ナデ	工具ナデ	
	1018	D-22 イウ5134	甌		把手部						工具ナデ	工具ナデ	
	1019	C-25 Ⅲ一括	甌		把手部						工具ナデ	タタキ・指ナデ	
	1020	C-22 Ⅲ一括	甌		把手部						工具ナデ	工具ナデ	
	1021	A' 23	甌		把手部								
	1022	B-35・36 溝内カラシ	器種不明		完形								
	1023	B-34 Ⅲ一括	メンコ		3分の2			○					並行沈線文
	1024	C-26 Ⅲ	メンコ		完形		○			赤色粒			
	1025	B-34	メンコ		完形				○				
	1026	C-17 Ⅳ 44851	メンコ		完形				○				
	1027	A' -30 イウ2885	メンコ		2分の1		○		○				格子状沈線文
	1028	B-33 Ⅲ 106102	土錘		不明								
	1029	注記なし	土錘		2分の1								
1030	F-20 Ⅱ一括	土錘		完形									
1031	E-24 Ⅱ	土錘		3分の1							指痕		
1032	B-24 Ⅲ一括	有孔製品		底部						工具ナデ	工具ナデ	焼成前に穿孔	
1033	E-31 イウ9152-1	有孔製品		底部						摩耗	工具ナデ・指頭痕		
1034	E-28 Ⅱ一括	有孔製品		完形						工具ナデ	工具ナデ		
1035	A' -30 Ⅱ	匙形土製品		匙部						工具ナデ	工具ナデ		
1036	Z-21	石製品		完形								安山岩	

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種分類	部位	胎土					調整		備考
					石英	長石	カセ石	ガラス粒子	その他	外面	内面	
109	1087	D-36・37 イウ9609-188	長頸壺 (免田式土器)	肩部						工具ナデ	工具ナデ	重弧文
149	1088	E-31	長頸壺 (免田式土器)	肩部						工具ナデ	工具ナデ	沈線文・重弧文
	1089	B・C イウ6075	長頸壺 (免田式土器)	肩部						工具ナデ	工具ナデ	沈線文
176	1090	C-23 Ⅲ b 一括	手捏土器	完形						指頭痕・工具ナデ	指頭痕・工具ナデ	
179	1091	D-27 一括	不明	胴部						工具ナデ	工具ナデ	線刻画?
	1092	注記なし	不明	胴部						工具ナデ	工具ナデ	線刻画?
	1093	B-22 Ⅲ	不明	胴部						工具ナデ	工具ナデ	線刻画?

第4章 総括

第1節 芝原遺跡の古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、A'～E-15～37区に集中し、竪穴住居跡8基、竪穴状遺構19基、土坑36基、ピット13基、溝状遺構1条、焼土遺構1基、土器集中遺構8基が検出された。これらの中には、弥生時代終末期から古墳時代前期頃にかけて形成されたと思われる遺構も含まれるが、本遺跡では古墳時代のなかで取り上げ報告した。

竪穴住居跡はA～C-25～36区で検出された。1号住居からは意図的に頸部から外したと考えられる壺形土器の口縁部が出土しているが、これは器台として転用されたものと思われる。本遺跡からは同様の壺型土器の口縁部が数多く出土しており（第155図参照）、器台そのものは出土していない。2号住居からは、弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定される小型仿製鏡と最小タイプの圭頭鎌である鉄鎌とともに埴0型式-1に分類される埴が出土しているが、いずれも不安定な出土状況であり、遺構との関連性を明言することは難しい。

竪穴状遺構はA'～E-20～34区で検出された。1号は竪穴住居2号に切られており、不定形であることから竪穴状遺構としたが住居跡の可能性も考えられる。また、

1号の周辺には竪穴住居2・3号や土器集中遺構7号、その他ピットや土坑も集中している。2号～12号、14号～17号からは、流れ込みと思われる遺物も多いが、中村直子氏編年の甕4型式に代表される東原式土器が出土している。特に、D・E-20～24区には11基が近在する状況が見られる。また、13号からは搬入品と思われる肥後系の丸底甕と外面口縁先端に櫛描波状文が施された埴が出土している。セット関係を考える上で重要な資料である。

土坑およびピットはA'～E-19～37区に集中して検出され、特に竪穴住居跡や竪穴状遺構が検出された付近で多数検出されたが、その関連性については不明である。

土坑について特記すべきものは、6号から出土した完形の台付鉢、30号・31号から出土した鉢形土器が挙げられる。いずれも東原式土器に相当するもので、埋納されたものと思われるが、土坑の詳細な性格は不明である。また、9号からは肥後系の搬入品と思われる丸底甕も出土している。

ピットについては遺構配置図（第18～28図グレー部分）からも読み取れるように古墳時代に想定されるものは数多く検出されている。そのため本報告ではピット内から古墳時代と判断できる明確な遺物が出土しているものを掲載した。その中でも、1号・3号・5号・10～13号から出土した遺物は完形に近い形状に復元できたことから埋納されたものと思われる。

土器集中遺構は、B～D-32～37区で検出された。そのなかでもC・D-36・37区は集中が密であり、完形

に近い土器が数多く出土した。

特記すべきものとしては、まず、3号と5号が挙げられる。調査年度が異なるためそれぞれ遺構番号をつけたが、同じ土器集中遺構と考えられる。この遺構は広範囲に広がり、集中度も密で完形品も多く出土した。甕は中津野式土器に相当する甕1類と、堂園タイプに相当する甕2類、口縁部下位に断面三角形の突帯を有する大甕が出土しており壺は底部が明瞭な平底をなすものと丸底に近いがわずかに平坦面を残すものが見られる。また肥後系（有明海沿岸か?）と思われる搬入土器（第110図385）も出土している。

次に4号が挙げられる。4号も前述の3号・5号と同様の中津野式土器段階を中心とするが、その中から北部九州系の複合口縁壺が出土している。弥生時代後期後半（下大隈式：佐賀平野では千住式）の範疇で、器形や胎土などから、背振山系の南北の糸島地域か佐賀平野で製作され搬入された可能性が高い。またこの土器の上からは柳葉形の鉄鎌（第121図440）も出土している。

土器集中遺構の性格については、河川近くに、ほぼ完形の甕や壺などが倒れた状態、または、その場で潰れた状態で検出されていることから、「水辺の祭祀」をおこなった場所と考えられる。また、出土遺物の様相としては、甕が多く壺が少ない傾向がみられ、甕は胴部に煤が残っており、日常で使用していたものを供献している。

その他、丸底壺や埴、口縁部や底部を意図的に打ち掻いた手捏土器、器台に転用した壺の口縁部なども一定量見られることも特徴の一つである。

同時期で同様な性格の遺跡としては、川内川流域の外川江遺跡で川骨遺跡がある。

土器集中遺構は出土遺物に一括性がみられ、古墳時代の土器構成を考える上で良好な資料である。

本遺跡に隣接する渡畑遺跡からは、中津野式土器に相当する時期の遺構が多く検出されているが、本遺跡でも渡畑遺跡と接する地域（33区～37区）からは、中津野式土器を中心とする遺構・遺物が出土している。上流側にあたる15区～34区では主に東原式土器に相当する遺構・遺物が多く出土している。さらに上流側に位置する上水流遺跡からは、東原式土器に相当する時期の遺構も存在するものの、その中心は辻堂原式土器や笹貫式土器段階の遺構・遺物である状況が見られる。このように万之瀬川下流域における古墳時代の集落の形成は、徐々に上流側へと移行していくことが窺える。

また、本遺跡の古墳時代の遺構内出土遺物や包含層内出土遺物からは、須恵器は出土していない。本遺跡の古墳時代の土器は浅型パンケース約3,000箱とその出土量は膨大であるにもかかわらず、須恵器は見られず、また、辻堂原式、笹貫式土器は非常に少ない。上水流遺跡からは、辻堂原式、笹貫式土器段階と考えられる5世紀中頃

の初期須恵器が出土している。このことから本遺跡の古墳時代は、須恵器が伝播してくる以前の時期、つまりおおよそ5世紀中頃までを中心とする遺跡と考えられる。

【註】

註1 本文中____は久住猛雄氏の指導・助言による。

【参考文献】

『上水流遺跡2』2008鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(121)

『渡畑遺跡2』2010鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(151)

『外川江遺跡・横岡古墳』1984鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(30)

『川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡』2011鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(165)

第2節 出土の古墳時代遺物

古墳時代の土器群は、中津野式土器を中心に東原式土器で構成されることから、それらの帰属については中村直子氏(註1)成川式編年を判断基準とした。

3類に区分した甕の、甕1類は中村編年甕5型式に、甕3類は甕6型式に該当するが、甕5型式及び甕6型式への一括編入が困難な土器群即ち、中津野式新相ないしは東原式古相と呼ぶべき土器群については、甕2類とした。なお、総括(P244 図1)は、包含層出土の甕を示したもので、上から甕1類、甕2類、甕3類としている。

甕1類の口縁部が、くノ字に外反しながら内外ともに明瞭な稜線を形成するのに対し、甕2類では外反は緩やかとなりながら内側の稜線は残されている。胴部形状は、長胴から短胴となり、脚部は総じて小振りの傾向が認められる。中でも、中央部に配置した496・486等の11点が典型的甕2類で、丈は短くなると同時に丸くなり、脚部も丈が短くなり小振りとなる傾向が見て取れる。また、器面調整では、胴下部でのヘラナデや工具ナデ等の調整手法からヘラケズリ等の調整手法への変更が見られる。このような甕2類の特徴は、「口縁部内面と胴部境界に明瞭な稜線を形成し、口縁部の外反度合いが弱い」や「胴部下半ではヘラナデ調整が雑になり、ケズリ痕が残る」とする八木澤の「堂園タイプ」の特徴と符合する。(註2)したがって、甕2類については「堂園タイプ中津野式土器」として捉えることが可能であることから、「中津野式新段階土器」として位置づけが可能と判断している。すなわち、編年的には、甕1類→甕2類→甕3類に推移すると認識している。なお、本田氏がその存在を予測する「過渡期の甕」とは若干異なる部分もあるが(註3)、八木澤の「堂園タイプ」や本遺跡「甕2類」は、具体的に抽出した過渡期の甕の一段階(中間形態)として提起し

たい。また、473や475に見られる軽量で器壁を薄く仕上げる手法は甕1類と甕2類寄り、甕3類のカキアゲ口縁は、甕2類からの継承を否定しきれないが、器形の大型化や器壁の重厚化傾向からは、製作技術の転換が介在した可能性も想起される。

埴も中村編年を踏襲しているが、本報告では埴1型式の前段階として埴0型式を設け、さらに二分し、埴0型式1と埴0型式2とした。総括(P246図3)が包含層出土の埴を一括表示したもので、上から埴0型式、埴1型式、埴2型式、埴3型式の順で配置した。

埴0型式は、長い口縁部と屈折する胴部を持つもので、埴0型式1は、口縁部が長く、胴部上位が偏球状に明瞭に屈折する一群で、口縁部に櫛描波状文を施すものが多数を占める。また、器の大部分を口縁部で構成し、中には器高の8割以上を占めるものもあり、明赤褐や橙2.5YRに発色するものが多いことから、精緻な水漉胎土を使用した可能性があり、器面調整も丁寧で、その出自を検証すべき資料でもある。埴0型式2もその大部分を口縁部で占め、胴上部が屈折する形状からは、埴0型式1からの派生が想定される。

埴1型式は、中村編年の埴1型式で、中津野式期に相当し、埴0型式2からの派生を想定し、その後、在地化したものと判断したもので、算盤玉状の胴部をなし、口縁部が短く直線的に立ち上がるものと、外に開くものとで構成する。

埴2型式は中村編年の埴2型式で、東原期に相当する。口縁部は外開きの傾向を示し、胴部は蕪状に膨らむ丸底で、丸底の中心に乳頭状の突起を持つものも見られる。なお、器面調整は横方向のナデが中心で、口縁部での縦方向のヘラミガキ等は見られない。埴3型式は不明瞭であるが、口縁部は坏形を呈し、屈折する胴部の重心は低く、基本的に平底をなすものである。

久住氏によると、精緻な水漉胎土を使用した877や878は久住編年の北部九州ⅡC期～ⅢA期古相に、589は小型の典型ではないがⅡC期に該当するとし、いずれも博多湾岸からの搬入品であり、同様な資料が複数存在することを指摘する。また、867・158は福岡平野や博多湾岸の典型精製器の模倣品のⅠB類で、佐賀平野あるいは熊本北部～中部からの搬入品であり、268・157・146・160・191は本遺跡周辺で生成した精製器種模倣品のⅡ類であることも指摘する。すなわち、埴2型式の成立段階で、遠隔の博多湾岸や有明海沿岸から搬入され、同時に多くのこれらの物資が搬入された背景に注目すべきとしている。

丸底甕も本遺跡の特徴であり(総括P245図2)、その多くが遠隔地からの搬入品と見られる。531は器壁が薄く精巧な造りから「筑前型庄内甕」の可能性が高く、福岡平野を含む佐賀平野からの搬入品と見られ、543は長

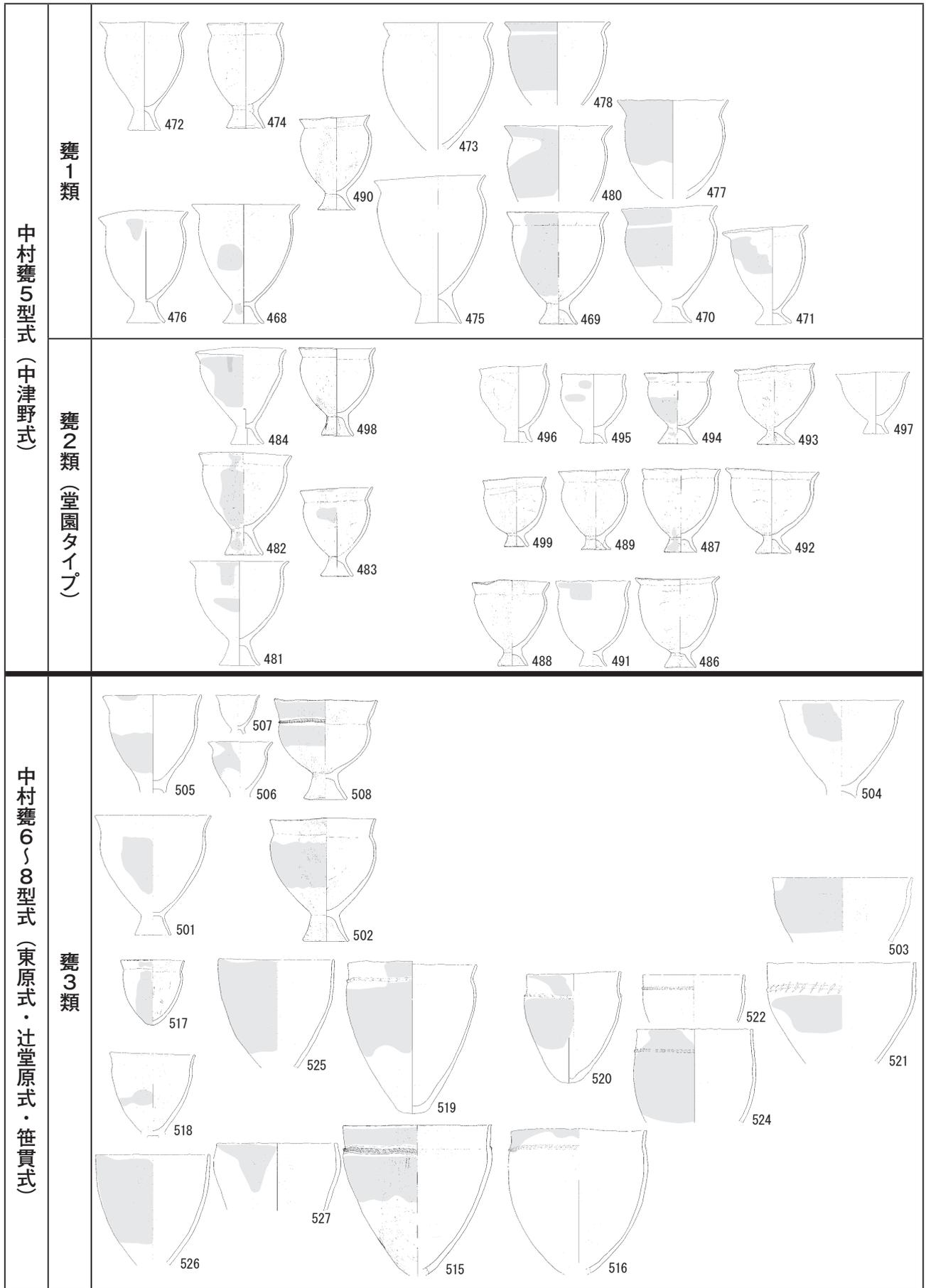


図1（甕）

胴部の形状やタタキ仕上げの様相から、佐賀平野ないしは肥後地域の有明海沿岸地域からの搬入品の可能性が高い。531・543は、いずれも久住編年ⅡA期の古墳時代初頭の所産とされるもので、本遺跡、甕1類及び甕2類に対比される。なお、「筑前型庄内甕」が搬出されたエリアとしては、本遺跡が最南端に位置する。次に、536・537は、胴部上半に横方向の刷毛目が無いこと、やや粗雑な造りが見られること、ナデ肩であり、胴部中部で成形の明らかな画期が行われていることなどから、肥後北部～中部ないしは肥前唐津地域からの搬入品と判断される。さらに、534・540は、久住編年ⅡC～ⅢA期の「庄内模倣甕」で、宇土市上松山遺跡や肥後北部～中部地域に類似品が求められることから、この時期の直接交流を裏付ける資料でもある。なお、533・535は、東原式期の標識資料とされる城山山頂遺跡の土器群に該当する在地化した最初期の甕と判断される。図4は、包含層出土の手捏土器を取り扱ったもので、特に、意図的破損部位別に一覧とした。なお、上から順に、口縁の対峙する2か所を欠く一群(914・967等)、両方とも加撃される。2段目が口縁部のほぼ全域打ち欠く一群(901・993等)、3段目が二つ以上に碎片化する一群(908・991等)、4段目が内底面に加撃して底部を打ち欠く一群(917・972等)、5段目が脚の一部を欠く一群(998・981等)、そして最下段が完形品となる。なお、破損の究明には至っていないが、改めて接合状況等の把握に努めるべき課題と言える。

本遺跡の出土品の最終評価は、松木蘭式期→中津野式

期→東原式期の漸移的移行と、中部九州や北部九州関連遺物との並行関係が推定可能と規定できる。

先に報告された清水前遺跡の布留甕は、久住編年北部九州ⅡC期に該当するとされ、在地甕は全て東原式土器とされる。また、東原式期の標識資料とされる城山山頂遺跡の布留甕について、久住氏は供伴する布留系長脚高坏や小型丸底壺から、北部九州ⅢA期新相を遡らないとする。

なお、上記を含め、本遺跡の出土品や出土量から判断すると、芝原の拠点集落化は松木蘭式後半期に始まり、中津野式前半期から中津野式後半期、東原式前半期に最盛期を迎え、東原式後半期にはその拠点としての機能は失われたと見られる。この、東原式後半期に於ける芝原の拠点集落終焉化は、城山山頂遺跡に出土する布留系長脚高坏やX字型器台等の外来系土器群の伝播がないことから推測できる。

〈註1〉 中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古』6,1987

〈註2〉 八木澤一郎「第Ⅵ章調査のまとめ第2節弥生時代終末～古墳時代初頭の堂園遺跡」『堂園遺跡B地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書123,2008

〈註3〉 本田道輝「第Ⅹ章下堀遺跡の検討」『下堀遺跡』金峰町教育委員会発掘調査報告書20,2005

〈註4〉 『清水前遺跡』南さつま市埋蔵文化財調査報告書7 鹿児島県南さつま市教育委員会2011

〈註5〉 『城山山頂遺跡』国分市埋蔵文化財調査報告書鹿児島県国分市教育委員会1985

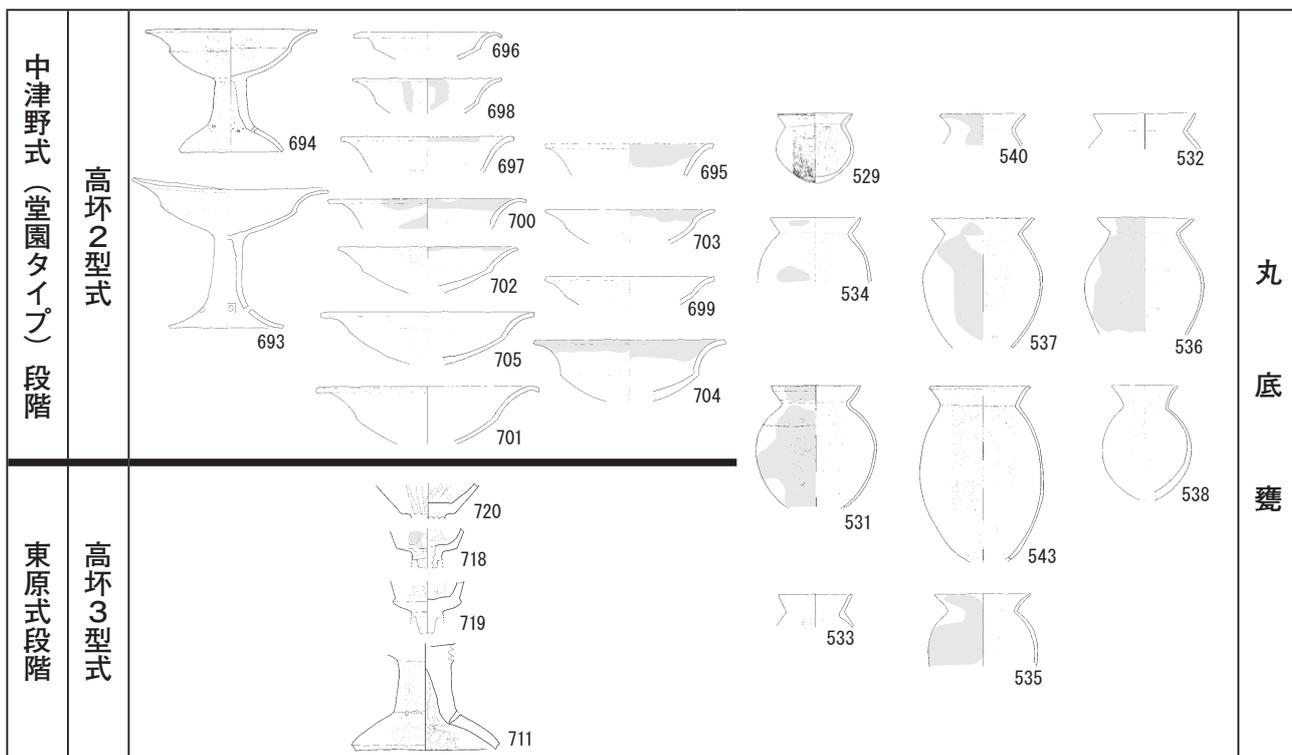


図2 (高坏・丸底甕)

	<p>中津野式 (堂園タイプ) 段階</p>	<p> </p> <p> 増0-1型式 813, 726, 728, 722, 723, 816, 725, 724, 821, 850, 825, 817, 814, 822, 852 </p> <p> 増0-2型式 836, 837, 831, 841, 830, 858, 839, 856, 833, 847, 843, 840, 853, 855, 838, 848, 832, 846, 834, 845, 842 </p> <p> 増1型式 854, 861, 860, 862, 857, 868, 863, 866, 864, 869, 859 </p>
<p>東原式段階</p>	<p>増2型式</p>	<p> </p> <p> 増2型式 880, 895, 877, 878, 884, 889, 876, 879, 896, 893, 886, 891 </p> <p> 増3型式 898, 897, 899 </p>

図3 (堦)

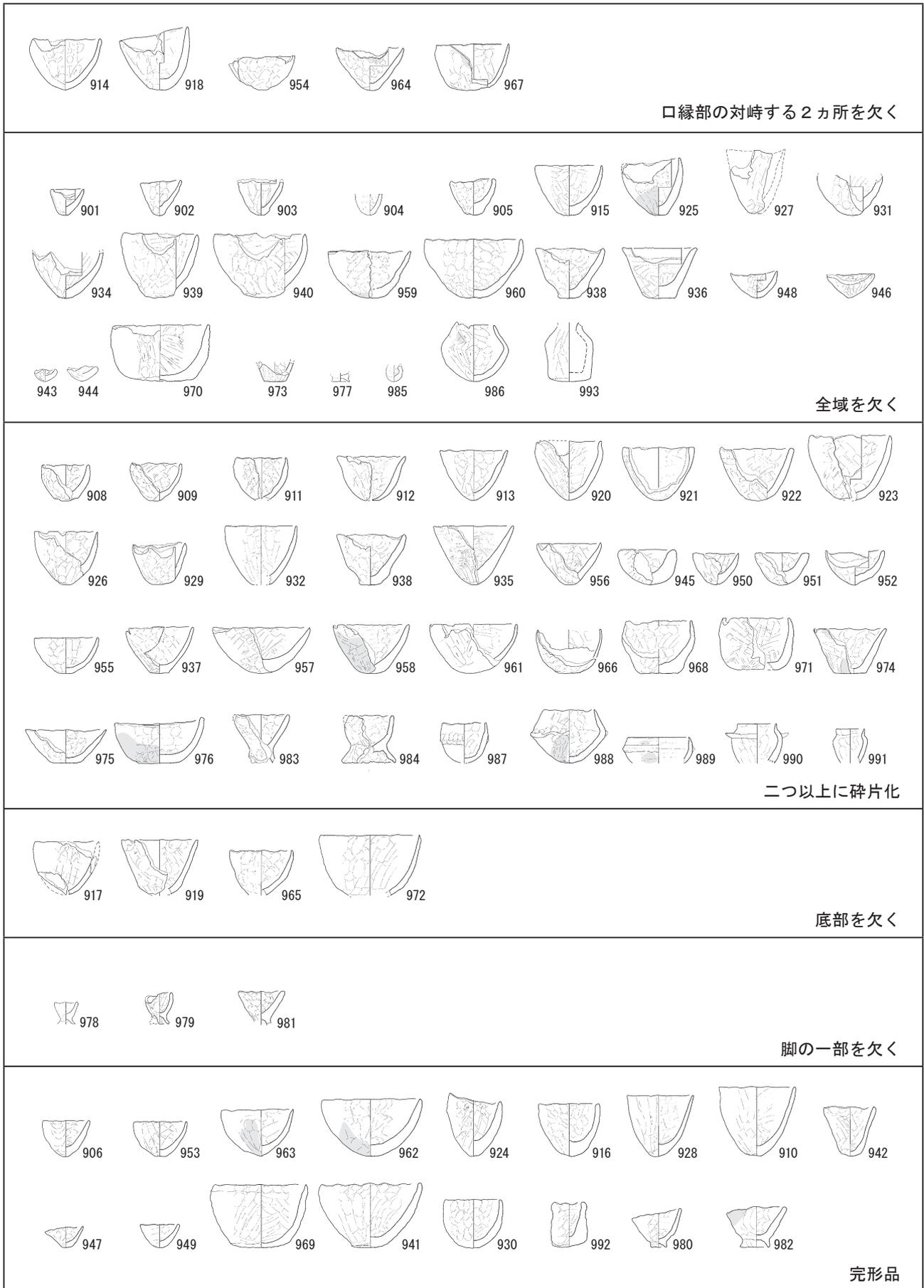


図4 (手捏土器)

第3節 中小河川改修事業関連発掘調査のまとめ

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴い、発掘調査を実施することになった遺跡は、南田代遺跡、古市遺跡、上水流遺跡、芝原遺跡、渡畑遺跡、持躰松遺跡の6遺跡である。平成5年度の分布調査に始まり、今年度（平成24年）の芝原遺跡4の報告書刊行まで、20年にもわたる長期間の事業となった。

本報告書の刊行をもって改修事業に一区切りがつけられることに伴い、万之瀬川の上流から下流に向けて、調査された各遺跡の概要を示すことにする。また、調査の経緯を表1に、刊行された報告書一覧を表2に、各報告書の抄録（遺構・遺物等）を表3にまとめた。各遺跡の所在地については図5に示したとおりである。

また、事業区内に残っている未調査部分についても図6に示す。

1 関連遺跡の概要

(1) 古市遺跡

南九州市川辺町永田に所在し、万之瀬川中流域左岸の自然堤防上に立地する。万之瀬川が左に大きく蛇行した内側の舌状微高地で、標高は約40mである。芝原遺跡などの下流の遺跡群からは、南東に約4,400m離れた中流域に所在する。

古市遺跡では、弥生時代から中世の遺構や遺物が発見された。弥生時代では2軒の竪穴住居跡が検出され、1号住居跡近くからは柱状片刃石斧が、2号住居跡床面からは弥生時代前期に位置付けられている高橋式の甕型土器完形品が出土している。また、弥生時代中期の山ノ口式土器・黒髪式土器は、古市遺跡から1kmほど離れた内陸部にある寺山遺跡出土の同時期の遺物（須玖式土器）との関連性を考える上で興味深い資料である。古墳時代でも5軒の竪穴住居跡が検出されている。

(2) 南田代遺跡

南九州市川辺町田部田に所在し、万之瀬川中流域右岸の自然堤防上に立地する。古市遺跡に続き万之瀬川が右に大きく蛇行する内側の舌状微高地で、標高は約38mである。

南田代遺跡では、縄文時代から中世の遺構や遺物が発見された。中でも、縄文時代前期の層から検出された石斧埋納遺構や西北九州産の黒曜石原石やサヌカイト剥片を集積した遺構は、当時の交流・交易や生活様式を知る上でたいへん貴重な資料となるものである。また、轟式系の土器が多量に出土しており、その編年研究に資するものと考えられる。

(3) 上水流遺跡

南さつま市金峰町花瀬に所在し、万之瀬川中下流の右岸、標高約6mの自然堤防上に立地する。下流域の遺跡群からは、南東約1,500m上流に位置する。

上水流遺跡では縄文時代前期から近世にかけての遺

構・遺物が発見された。縄文時代前期では曾畑式土器がほぼ単純な状態で出土し、該期の石器組成などを検討することのできる数少ない遺跡である。また、前期末から中期初頭の深浦式土器、中期前半の春日式土器が大量に出土しているが、一か所の遺跡でこれほど多量に出土した例は他になく注目に値する。同じ層からは上流の南田代遺跡にもみられたような黒曜石や安山岩などの石材の集積遺構も検出されている。

縄文時代中期から後期にかけては、阿高式系土器と指宿式土器が出土し、縄文時代晩期では黒川式土器及び後続する干河原段階と呼称される土器が出土した。中でも三叉文を有する資料が出土するなど、これまで不明瞭であった時期について良好な検討資料が出土している。また羽状の刺突文を有する南島系の壺形土器も出土しており、南島との時間的並行関係を知る手がかりを提供した。

弥生時代では、磨製穿孔具などの特徴的な石器が出土し、周辺遺跡との関係が注目される。

古墳時代では、11軒の竪穴住居跡が発見された。これに伴って、古式須恵器の器台・把手付鉢などや、県内では類例の少ない鉄製の摘鎌が発見された。

中・近世では、大溝（大型溝状遺構）から出土した16・17世紀を中心とした大量の陶器・磁器が注目される。これらの遺物は、中国・朝鮮・東南アジア産のものと国内産のものに大別される。国内産のものの中には、初期の薩摩焼である堂平窯で生産されたとみられるものも多くあり、この時期の流通を考える上で重要である。また、近世の溝状遺構や大規模土坑を中心とする一連の特徴的遺構群は製鉄・鍛冶に関係すると考えられ注目される。

(4) 芝原遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸標高約5mの自然堤防上に立地する。沖積平野に出た万之瀬川が大きく右に蛇行する右岸の微高地に、上流側から芝原、渡畑、持躰松の各遺跡が立地している。

芝原遺跡では、縄文時代中期から近世にかけての遺構・遺物が発見された。縄文時代中期では、春日式土器を伴う竪穴状遺構が2基と土坑1基が検出されている。縄文時代中期の竪穴状遺構は検出例が少なく注目される。また、竪穴状遺構からは、漁労具であると考えられている鋸歯縁石器（組合せ鋸の先端部）が3点出土している。縄文時代後期の遺跡から出土する例はあるが、縄文時代中期の遺構から出土したことは貴重な情報である。

縄文時代中期後葉から後期では、竪穴状遺構3基をはじめ集石や土坑、ピットなどが多数検出されたほか、阿高式土器や指宿式土器、市来式土器など多様な土器が大量に出土している。特に、磨消縄文系土器と指宿式土器が共伴して出土したことから、指宿式土器の成立を考える上で貴重な資料となった。

弥生時代・古墳時代については本報告書に詳しいところであるが、弥生時代については明らかな遺構は検出されておらず、遺物も少ない。しかしながら小型仿製鏡など貴重な遺物も出土している。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては、在地の中津野式土器などを中心に大量の遺物が出土している。その中に北部九州や有明海沿岸で在地化した技術を持って製作された庄内式土器・布留式土器が出土しており、当時の人々の動きや技術の伝播などを考察する上で重要な資料を提供している。

古代から中世にかけても非常に注目されるところである。古代では川に向かって「コ」の字に開いた溝に区画された遺構群や方形竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土師器や須恵器のほか、多量の墨書土器や多口瓶、石帯（丸鞘）などが出土している。

中世では掘立柱建物跡群や土坑墓、木棺墓、鍛冶炉跡など、当時の生活様式を知る上で貴重な遺構が多数検出された。加えて多量の輸入陶磁器や国内産陶磁器が出土し、万之瀬川の水運を利用した大規模な中国貿易の拠点であったと考えられる。周辺の持躰松遺跡、渡畑遺跡と比較しても、芝原遺跡がその中心的役割を果たしていたことが想定される。また、中世から近世にかけての製鉄関連の遺構・遺物も出土しており特筆される。

(5) 渡畑遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸標高約5mの自然堤防上に立地する。上流側に隣接して芝原遺跡、下流側に隣接して持躰松遺跡が所在する。

A地点（北側）とB地点（南側）に分けられているが、縄文時代中期から近世までの複合遺跡である。

縄文時代では中期の春日式・阿高式、後期の主体となる指宿式土器が多量に出土した。また、東側に隣接した芝原遺跡から出土した足部と渡畑遺跡から出土した足首部が接合した足形土製品が出土しており、他に類例のない資料である。また、鋸齒縁石器が6点出土している。

古代の遺物としては芝原遺跡や後述の持躰松遺跡と同様に墨書土器、なかでもヘラ書き土器が多数出土している。須恵器も出土しているが、近くに所在する「中岳山麓窯跡群」で焼かれた可能性が高い。これは芝原遺跡、持躰松遺跡等でも同様である。

中世は掘立柱建物跡や土坑墓、溝状遺構等が検出されている。遺物では輸入陶磁器や国内産陶磁器が多数出土しているが、特筆すべきものとして溝状遺構からまともな出土した青白磁がある。同安窯系の青磁碗2点と高台付皿1点、青白磁碗3点の計6点が伏せて重ねた状態で出土しており、同時期の一括資料として貴重なものである。6枚重ねて縄紐等で縛った状態であったことが想定され、流通の状態等も推察できる資料である。また、土坑墓の副葬品と思われる湖州鏡も出土している。

近世ではA地点で畠跡と考えられる約3600㎡に広がる畝間状遺構が検出された。また土坑墓と考えられる土坑も多く検出されている。

(6) 持躰松遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸標高約5mの自然堤防上に立地する。渡畑遺跡A地点の北側に隣接している。

持躰松遺跡では、縄文時代後期から近世までの遺構や遺物が発見された。縄文時代後期の南福寺式土器・出水式土器、晩期の入佐式土器・黒川式土器については、渡畑遺跡から出土したものと類似点が多い。

弥生時代から古墳時代では竪穴住居跡が5基検出され、1号住居跡からは袋状鉄斧が出土している。他に山ノ口式土器、松木菌式土器、中津野式土器など中期後半から終末期（古墳時代初頭）の特徴を持つ土器が出土している。

古代では掘立柱建物跡や畝間状遺構が検出されている。遺物では一般的な土師器・須恵器のほか、カマド形土器や多くのヘラ書き土器が出土している。

中世前半期においては掘立柱建物跡や溝状遺構・土坑墓等が検出された。また、それらに伴い多種多様な輸入陶磁器と、東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶磁器等が多量に出土している。発掘当時としては県内では例をみない出土状況であったため、「対外貿易の一大拠点か」として大きな話題となった。

(7) その他

平成5年の分布調査では上記の遺跡の他に、「松ヶ鼻遺跡」と「万之瀬川川床遺跡」が挙げられている。

松ヶ鼻遺跡については平成9年に試掘・確認調査を行い、本調査については不要という判断が出されている。

万之瀬川川床遺跡については、河床掘削の事業が未定であり、その事業計画がなされた時点で検討するとされている。

2 全体を概観して

表4に発掘調査を行った6遺跡の年表を作成してみた。時期の検討が可能な土器・陶磁器類のみを掲載している。これをみると上流に行くほど古い時代のものが出土していることがわかる。縄文時代早期における縄文海進の影響によるものと考えられる。

縄文時代前期以降、沖積平野が形成された下流域では、縄文時代前期から後期のまとまった資料が出土し、当時の生活の様相を明らかにする一助となった。

また、大量の貿易陶磁器・国産陶磁器が出土した古代から中世における万之瀬川下流域の遺跡の有り様は、対外貿易の拠点であった「博多」を思わせるようである。今後それぞれの遺跡を関連づけて検討し、その性格を明らかにしていく研究が進展していくことを期待する。

表1 中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯一覧

事業年度	遺跡名	事業内容	担当	備考
平成5年度 (1993)	南田代遺跡, 古市遺跡, 上水流遺跡, 芝原遺跡, 渡畑遺跡, 持鉢松遺跡, 松ヶ鼻遺跡, 万之瀬川川床遺跡	分布調査	鹿児島県教育委員会	
平成6年度 (1994)	持鉢松遺跡	確認調査	南さつま市(旧金峰町)教育委員会	県教委支援
平成7年度 (1995)	上水流遺跡	確認調査	南さつま市(旧金峰町)教育委員会	
平成8年度 (1996)	渡畑遺跡・持鉢松遺跡	確認調査(一部本調査)	南さつま市(旧加世田市)教育委員会	県教委支援
平成9年度 (1997)	持鉢松遺跡 松ヶ鼻遺跡	本調査 確認調査	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成10年度 (1998)	芝原遺跡・持鉢松遺跡	確認・本調査	鹿児島県教育委員会	
平成11年度 (1999)	芝原遺跡・持鉢松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成12年度 (2000)	上水流遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成13年度 (2001)	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成14年度 (2002)	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成15年度 (2003)	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡 ・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成16年度 (2004)	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流遺跡 南田代遺跡・古市遺跡	本調査 報告書刊行	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成17年度 (2005)	上水流遺跡 芝原遺跡	本調査・整理作業 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成18年度 (2006)	上水流遺跡 持鉢松遺跡・芝原遺跡	整理作業・報告書1刊行 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成19年度 (2007)	上水流遺跡 持鉢松遺跡 芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業・報告書2刊行 報告書刊行 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成20年度 (2008)	上水流遺跡 芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業・報告書3刊行 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成21年度 (2009)	上水流遺跡 芝原遺跡・渡畑遺跡	報告書4刊行 整理作業・報告書1刊行	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成22年度 (2010)	芝原遺跡 渡畑遺跡	整理作業・報告書2刊行 報告書2刊行	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成23年度 (2011)	芝原遺跡	整理作業・報告書3刊行	鹿児島県教育委員会	
平成24年度 (2012)	芝原遺跡	報告書4刊行	鹿児島県教育委員会	

表2 中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う発掘調査報告書一覧

巻次	書名	内容	シリーズ番号	発行年月
I ※	南田代遺跡		県埋文七報告書第88集	2005.3
II ※	古市遺跡		県埋文七報告書第89集	2005.3
I	上水流遺跡1	縄文時代中期後半から弥生時代編	県埋文七報告書第113集	2007.3
II	持鉢松遺跡		県埋文七報告書第120集	2007.12
III	上水流遺跡2	古墳時代から近世編	県埋文七報告書第121集	2008.3
IV	上水流遺跡3	縄文時代前期・中近世(遺物)編	県埋文七報告書第136集	2009.3
V	芝原遺跡1	縄文時代遺構編	県埋文七報告書第149集	2010.3
VI	上水流遺跡4	縄文時代前期末から中期前半・補遺編	県埋文七報告書第150集	2010.3
VII	渡畑遺跡1	縄文時代ほか	県埋文七報告書第151集	2010.3
VIII	芝原遺跡2	縄文時代遺物編	県埋文七報告書第158集	2011.3
IX	渡畑遺跡2	弥生・古墳時代以降編	県埋文七報告書第159集	2011.3
X	芝原遺跡3	古代・中世・近世編	県埋文七報告書第170集	2012.3
XI	芝原遺跡4	弥生時代・古墳時代編	県埋文七報告書第178集	2013.3

※ 副書名および巻次については、南田代遺跡と古市遺跡が「床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I・II」であり、上水流遺跡、持鉢松遺跡、芝原遺跡、渡畑遺跡については「中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う発掘調査報告書I～XI」である。

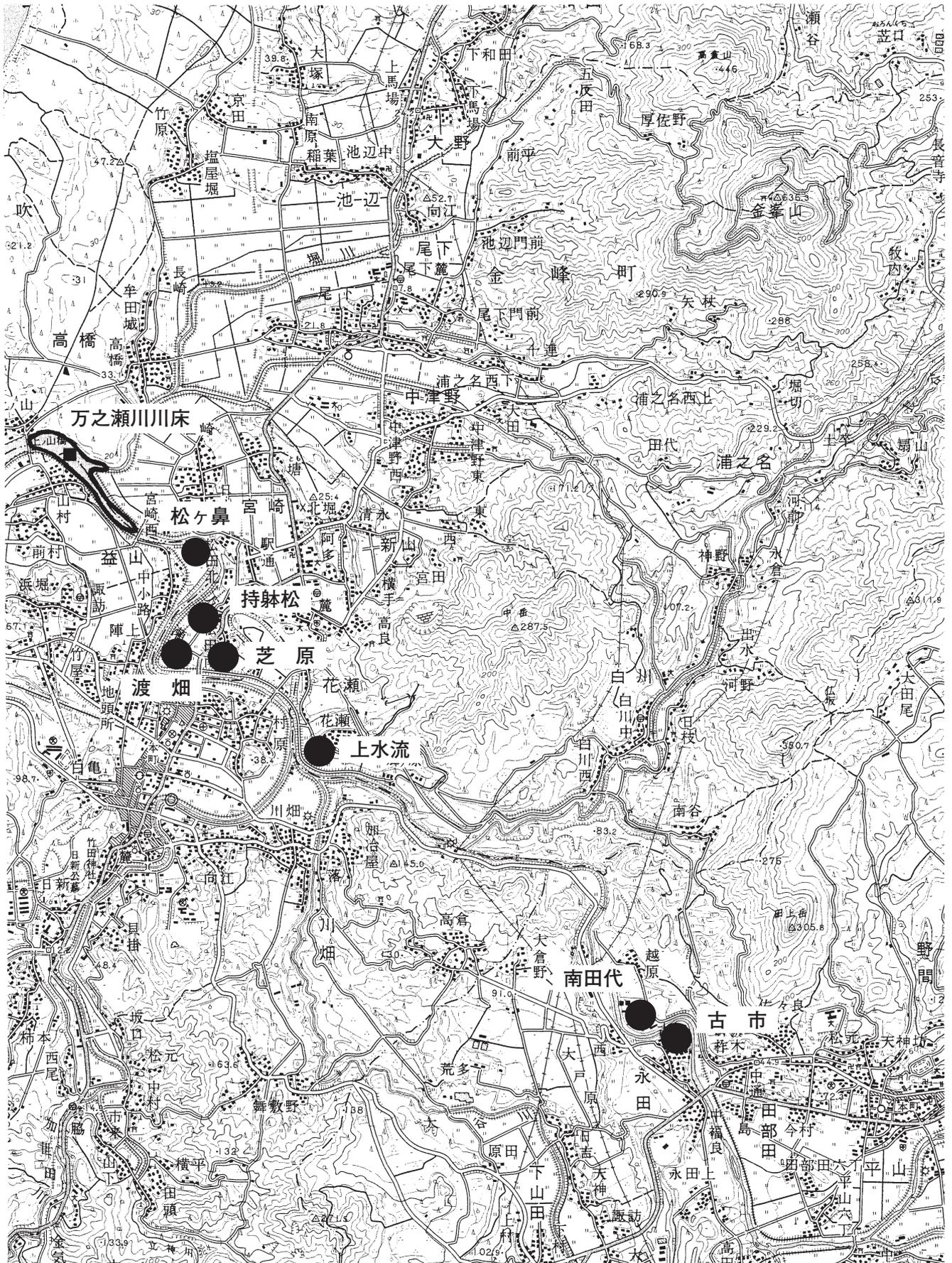


図5 中小河川事業関連遺跡位置図 (1 : 40,000)

表3 中小河川改修事業関連遺跡抄録一覧表

※各遺跡の報告書抄録をまとめたものである。

遺跡名	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物
南田代遺跡	01.5.7～01.8.29 02.10.4～03.3.20 03.5.6～03.5.27	13,700㎡	縄文時代早期		塞ノ神式土器
			縄文時代前期	集石, 磨石集積, 石斧埋納, 剥片集積, 黒曜石埋納	轟式土器, 曾畑式土器, 深浦式土器, 石鏃
			縄文時代中期	集石	阿高式土器, 春日式土器, 船元式土器
			縄文時代後期		御領式土器
			縄文時代晩期		黒川式土器
			弥生時代		高橋式土器, 松木菌式土器
			古墳時代		成川式土器
			古代		土師器, 須恵器
			中世		土師器, 青磁
古市遺跡	01.9.3～02.3.25 02.5.07～02.10.3 03.10.20～03.11.12	17,180㎡	弥生時代	竪穴住居	高橋式土器, 黒髪式土器, 山ノ口式土器, 松木菌式土器, 中津野式土器, 石鏃, 石斧, 石包丁
			古墳時代	竪穴住居, 溝状遺構	成川式土器, 砥石, 石製品
			中世	掘立柱建物	土師器, 須恵器, 白磁, 青磁
上水流遺跡	00.4.24～01.3.29 03.8.9～04.3.19 04.5.14～05.2.4 05.5.9～05.9.28	15,500㎡	縄文時代前期	集石, 土坑, 焼土, ビット, 礫集積	曾畑式土器, 方形土器, 焼成粘土塊, 石鏃, 石匙, 楔形石器, スクレイパー, 石錘, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 敲石, 石皿, 石製品
			縄文時代中期～後期	集石, 土坑, 焼土, ビット	阿高式土器, 南福寺式土器, 指宿式土器, 磨消縄文土器, 松山式土器, 土製品, 石鏃, 石匙, 石斧, 磨石, 石皿
			縄文時代晩期	集石, 土坑, 焼土, ビット	入佐式土器, 黒川式土器, 干河原段階, 三叉文施文の土器, 孔列土器, 刻目突帯文土器, 南島系壺形土器, 石鏃, 石匙, 石斧, 磨石, 石皿, 石製品
			弥生時代		高橋式土器, 入来Ⅱ式土器, 黒髪Ⅰ式土器, 磨製石鏃, 磨製穿孔具, 扁平片刃石斧
			古墳時代	竪穴住居跡, 土坑, 埋納ビット, 礫集積, 焼土	中津野式土器, 辻堂原式土器, 笹貫式土器, 古式須恵器, ミニチュア土器, 土製品, 勾玉, 菅玉, 鉄製摘鎌
			古代		土師器, 須恵器, 緑釉陶器
芝原遺跡	99.10.15～00.3.22 00.4.24～01.1.25 01.5.7～02.3.19 02.5.7～03.3.20 03.5.6～04.3.22 04.5.14～04.7.21	49,600㎡	縄文時代中期	竪穴状遺構, 土坑	春日式土器, 石鏃, 鋸歯尖頭器, 石匙, スクレイパー, 擦切石器, 石皿, 磨石
			縄文時代中期後半～後期前半	竪穴状遺構, 埋設土器, 土坑, 集石, ビット, 焼土, 石皿集積, 落ち込み	阿高式土器, 南福寺式土器, 出水式土器, 岩崎系土器, 指宿式土器, 市来式系土器, 土製品, 石鏃, 石匙, スクレイパー, 楔形石器, 石錘, 磨製石斧, 打製石斧, 礫器, 擦切石器
			弥生時代		井出下式土器, 高橋式土器, 入来式土器, 黒髪式土器, 須玖式土器, 山ノ口式土器, 松木菌式土器, 石包丁, 銅鏃, 銅鏡, 石製勾玉
			古墳時代	竪穴住居跡, 竪穴状遺構, 土坑, ビット, 溝状遺構, 焼土, 土器集中遺構	中津野式土器, 東原式土器, 辻堂原式土器, 笹貫式土器, 中～北部九州系庄内式土器・布留式土器, 鉄鏃, 砥石
			古代	掘立柱建物跡, 方形竪穴建物跡, 溝状遺構, 土坑墓, 土坑, ビット	土師器, 須恵器, 黒色土器, 赤色土器, 多口瓶, 墨書土器, 篋書土器, 紡錘車, 石帯, 古銭
			中世	掘立柱建物跡, 方形竪穴建物跡, 溝状遺構, 木棺墓, 土坑墓, 土坑, ビット, 製鉄関連遺構	土師器, 青磁, 白磁, 青白磁, 青花, 中国陶器, 朝鮮陶器, ベトナム陶器, 瓦器, 中世須恵器(東播磨系・樺万丈系), カムイヤキ, 国産陶器(瀬戸, 美濃, 常滑, 備前), 瓦質土器, 土師質土器, 中国瓦, 滑石製品, 砥石, 古銭, 人骨
			近世	掘立柱建物跡, 溝状遺構, カマド, 木棺墓, 土坑墓, 土坑, ビット, 焼土, 古道, 製鉄関連遺構	薩摩焼, 肥前陶磁器, 鍛冶滓, フイゴの羽口, 古銭, 煙管, 人骨

渡畑遺跡	00.8. 21 ~ 01.3. 27	43,400㎡	縄文時代中期	竪穴状遺構, 土坑	春日式土器, 石鏃, 鋸齒尖頭器, 鋸齒縁石器, 石匙, スクレイパー, 擦切石器, 石皿, 磨石
			縄文時代中期 後葉~後期	竪穴状遺構, 埋設土器, 土坑, 集石, ビット, 焼土, 石皿集積, 落ち込み状遺構	阿高式土器, 岩崎式土器, 南福寺式土器, 出水式土器, 磨消縄文土器, 指宿式土器, 松山式土器, 市来式土器, 鐘崎式土器, 北久根山式土器, 西平式土器, 入佐式土器, 円盤形土製品, 足形土製品 (足首部), 石鏃, 鋸齒尖頭器, 鋸齒縁石器, 石匙, 削器, 楔形石器, ストーンリタッチャー, 磨製石斧, 小型ノミ形石器, 打製石斧, リダクション敲打具, 石皿, 磨石, 敲石, 砥石, 石錘, 軽石加工品, 垂飾品
			縄文時代晩期		入佐式土器, 黒川式土器
			古墳時代	竪穴住居跡	成川式土器
			古代	竪穴住居跡, 古道, ビット	土師器, 須恵器, 刻書土器, 墨書土器, 土錘, 紡錘車
			中世	掘立柱建物跡, 方形竪穴, 土坑, ビット, 溝状遺構, 青磁集積	土師器, 須恵器, 青磁, 白磁, 合子, 常滑焼, 緑釉陶器, カムイヤキ, 滑石製石鍋, 布目瓦, 土錘, 古銭 (洪武通宝, 治平元宝, 崇寧通宝)
			近世	木棺墓, 土坑墓, 畝間状遺構	薩摩焼, 肥前陶磁, 古銭 (天保通宝, 寛永通宝, 加治木銭), 人骨, 数珠玉
持鉢松遺跡	97.9.1 ~ 98.2.27 98.10.12 ~ 99.3.25 99.4.20 ~ 99.10.14	7,038㎡	縄文時代後期		南福寺式土器, 出水式土器
			縄文時代晩期		入佐式土器, 黒川式土器, 石鏃, 磨製石斧, 打製石斧, スクレイパー, 磨石, 叩石
			弥生・古墳時代	竪穴住居跡, 土坑, 溝状遺構, ビット, 土器溜まり	刻目突帯文土器, 入佐式土器, 黒髪式土器, 山ノ口式土器, 須玖式土器, 松木菌式土器, 中津野式土器, 砥石, ガラス製品, 鉄製品
			古代	溝状遺構, 土坑, 掘立柱建物跡, 畝間状遺構, ビット	土師器, 須恵器, 墨書土器, 刻書土器, 篋書土器, 赤色土器, 黒色土器, 移動式カマド, 鉄製品, 紡錘車, 轆の羽口, 鉄滓
			中世	掘立柱建物跡, 竪穴建物跡, 溝状遺構, 畝間状遺構, 土師器集積遺構, 土坑墓, ビット, 杭列跡, 石列	土師器, 須恵器 (東播磨系・樺万丈系), 瓦質土器, 瓦器, 赤色土器, 黒色土器, 常滑焼, 瀬戸焼, 備前焼, カムイヤキ, 青磁, 白磁, 青白磁, 青花, 輸入陶器, 土錘, 土製品, 滑石製石鍋, 滑石製品, 砥石, 硯, 刀子, 鉄製品, 轆の羽口, 鉄滓
近世		苗代川焼 (薩摩焼), 肥前系陶磁器			

3 未調査部分と今後の遺跡の取扱いについて

持鉢松遺跡と渡畑遺跡に於いては、事業区内で工事見送りになった範囲があり (旧伊集院土木事務所時代), その範囲は未調査であり遺跡が残存している (図6)。今後工事計画がなされた場合には協議が必要である。

(持鉢松遺跡に約20,000㎡, 渡畑遺跡に約30,000㎡)

また、いずれの遺跡に於いても本調査を行ったのは河川改修にかかる事業区内だけであり、調査区外には遺跡の広がりがあるため、周辺の開発行為等には留意すること。

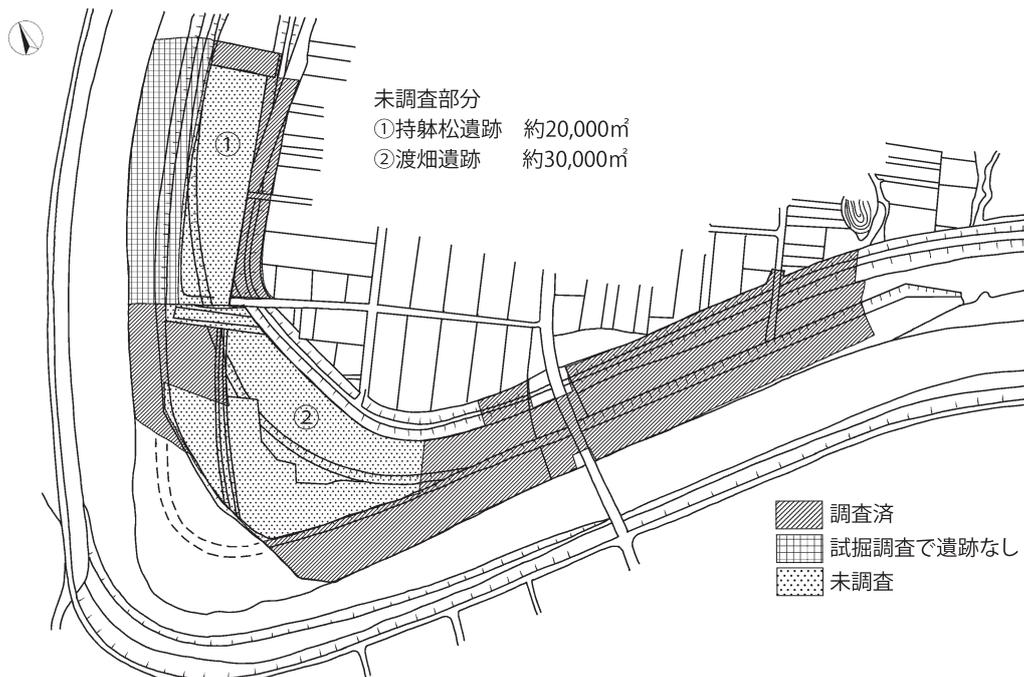


図6 未調査部分について

表4 中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査のまとめ（遺跡年表）

	早期	縄文時代			
		前期	中期	後期	晩期
南田代	塞ノ神	轟式土器 曾畑式土器	深浦式土器 船元式土器	春日式土器 阿高式土器	御領式土器 黒川式土器
古市					
上水流		(前期) 曾畑式土器	(前期末～中期初頭) 深浦式土器（日木山段階、石峰段階、 鞍谷段階） 条痕文土器 鷹島式土器 船元Ⅱ式土器 (中期前半) 春日式土器 中尾田Ⅲ類土器	(中期後半～後期) 阿高式土器 南福寺式土器 指宿式土器 磨消縄文土器 松山式土器	入佐式土器 黒川式土器 干河原段階 三叉文土器 刻目突帯文土器 南島系壺形土器
芝原			(中期前半) 春日式土器	(中期後半～後期) 阿高式土器 岩崎式土器 南福寺式土器 出水式土器 磨消縄文土器 指宿式土器 松山式土器 市来式土器 鐘崎式土器 北久根山式土器 西平式土器	入佐式土器
渡畑			春日式土器 轟ヶ迫式土器 阿高式土器	南福寺式土器 指宿式土器 出水式土器 市来式土器 磨消縄文土器	入佐式土器 黒川式土器
持躰松				南福寺式土器 出水式土器	入佐式土器 黒川式土器

	弥生時代	古墳時代	古代	中世	近世
南田代	高橋式土器 松木藪式土器	成川式土器	土師器 須恵器	土師器 青磁	
古市	高橋式土器 黒髪式土器 山ノ口式土器 松木藪式土器 中津野式土器	成川式土器		土師器 須恵器 白磁 青磁	
上水流	高橋式土器 入来Ⅱ式土器 黒髪Ⅰ式土器	中津野式土器 辻堂原式土器 笹貫式土器 古式須恵器	土師器 須恵器 緑釉陶器	土師器 常滑焼 備前焼 東播系須恵器 樺万丈 カムイヤキ 青磁 高麗青磁 白磁 景德鎮窯系青花 漳州窯系青花	薩摩焼 (堂平窯, 苗代川系, 竜門司系)
芝原	井出下式土器 高橋Ⅰ・Ⅱ式土器 入来Ⅰ・Ⅱ式土器 黒髪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器 須玖Ⅰ・Ⅱ式土器 山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器 下大隈式土器 松木藪式土器	中津野式土器 東原式土器 辻堂原式土器 笹貫式土器 庄内・布留式土器 (中～北部九州系)	土師器 黒色土器 赤色土器 須恵器 多口瓶 墨書土器 丸軆	土師器 青磁, 白磁, 青白磁 青花, 中国陶器 朝鮮陶器 ベトナム陶器 東播系須恵器, 樺万丈 カムイヤキ 国産陶器 (瀬戸・美濃・常滑・備前), 瓦器 瓦質土器, 土師質土器, 中国瓦	薩摩焼 肥前陶磁器
渡畑	入来式土器 黒髪式土器	成川式土器	土師器 須恵器 墨書土器	土師器, 須恵器, 青磁, 白磁 墨書土器 常滑焼, カムイヤキ 緑釉陶器, 布目瓦	薩摩焼 備前陶磁器
持躰松	刻目突帯文土器 入来式土器 黒髪式土器 山ノ口式土器 須玖式土器 松木藪式土器 中津野式土器		土師器 須恵器 墨書土器 赤色土器 黒色土器	土師器, 須恵器 (東播系, 樺万丈系), 青磁, 白磁, 青白磁 青花, 輸入陶器, 瓦質土器, 瓦器 赤色土器, 黒色土器 国産陶器 (常滑・瀬戸・備前) カムイヤキ	薩摩焼 (苗代川系) 肥前陶磁器

補遺

本校は、「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」2010.3と「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」2012.3の補遺編である。

1 「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」補遺

(1) 「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」正誤表

P.264参照のこと。

(2) 遺構

集石 (第①図)

すべてⅥ層上面で検出されたもので、縄文時代中期後葉～後期に相当する集石である。1号～3号はC-20区から3基が並ぶ状態で検出された。1号は総数79の礫で構成され、総重量は11.54kgである。明確な掘り込みを有し、礫は2段に分けて取り上げた。2号は総数87点の礫で構成され、総重量は8.75kgであった。掘り込みを有するが、礫は掘り込みの上面に散在する状況で検出された。3号は総数306個の礫で構成され、総重量は85.57kgであった。明確な掘り込みが確認され、礫は2段に分けて取り上げた。4号はC-18区で検出された。礫の総数は92点で、総重量は40.76kgである。掘り込みを有し、

最下層からは土器が1点出土しているが小片であったため、詳細は不明である。5号はB-35区で検出され、「芝原遺跡1」では10号集石として遺構配置図中に掲載されたが、実測図が掲載されていなかったため本稿で掲載した。軽石や安山岩で構成された礫は2段に分けて取り上げた。総数は17点、総重量は4.795kgである。縄文時代後期かと思われる土器が出土したが、小片で型式等不明である。6号はD-30区で検出された。「芝原遺跡1」で30号集石として掲載されている実測図は、31号集石の2段目の実測図であったことが判明したため、本来の30号集石となる実測図を6号集石として掲載した。

2 「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」の補遺

(1) 「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」正誤表

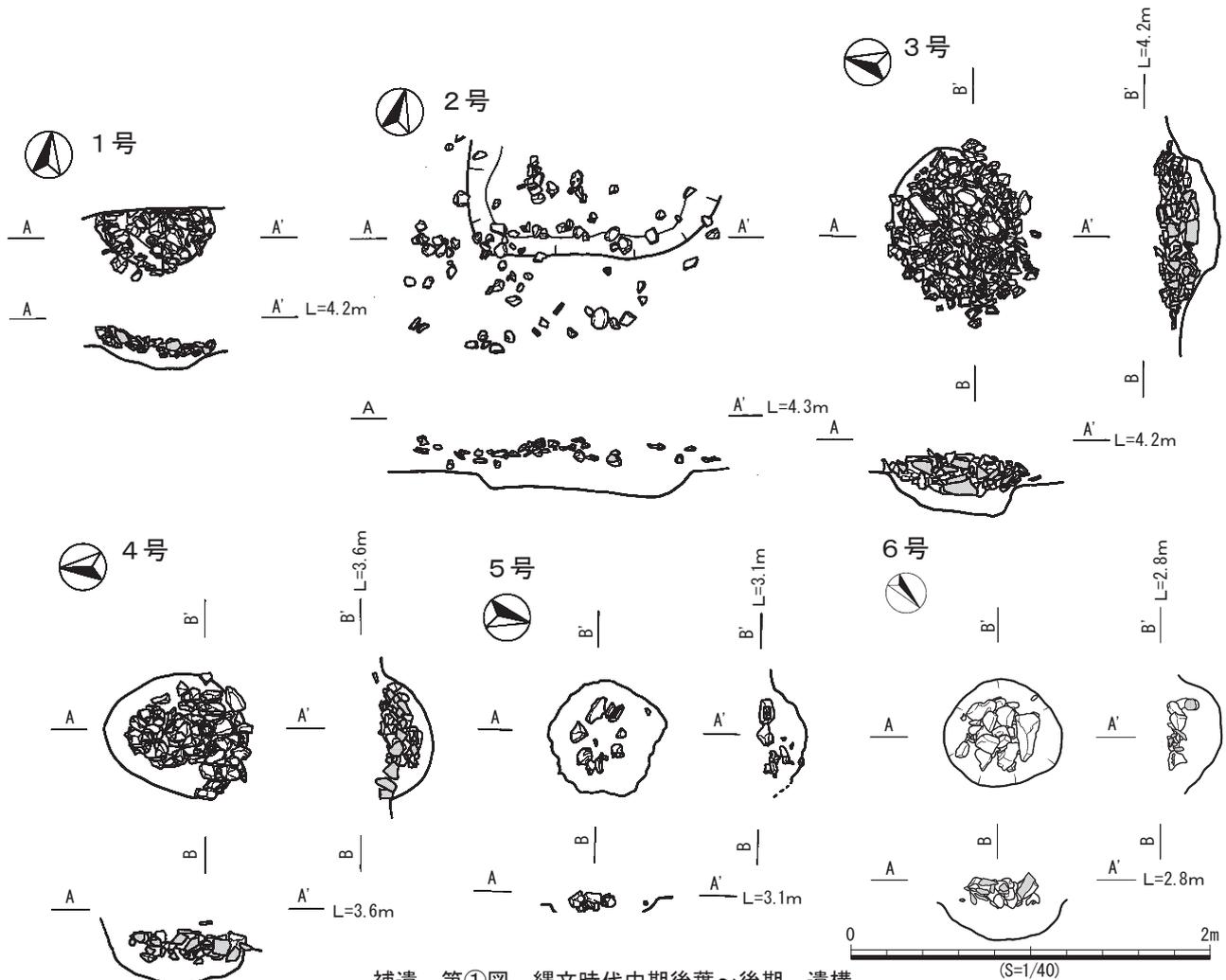
P.264参照のこと。

(2) 遺構

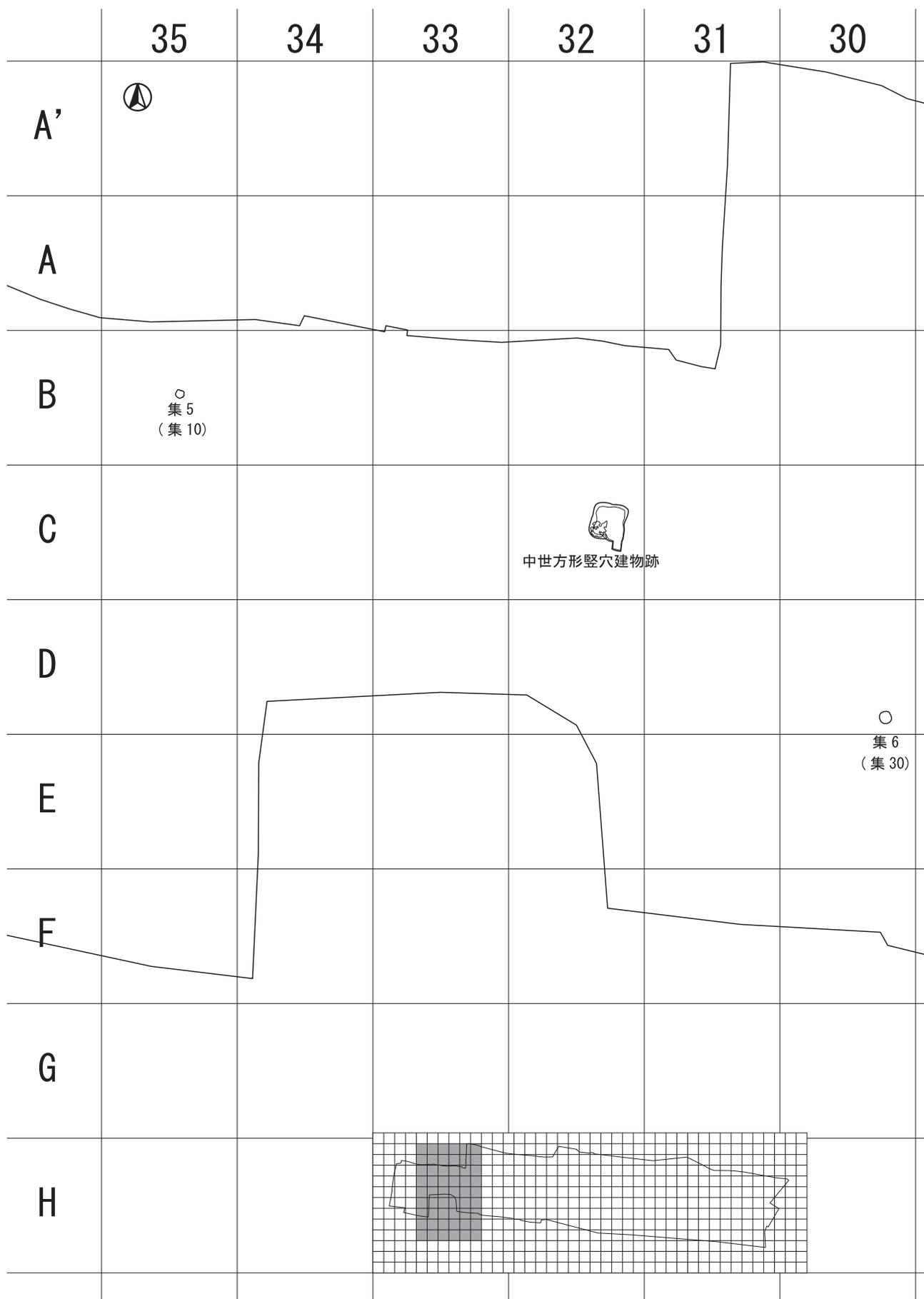
古代

竪穴建物状遺構 (第⑥図)

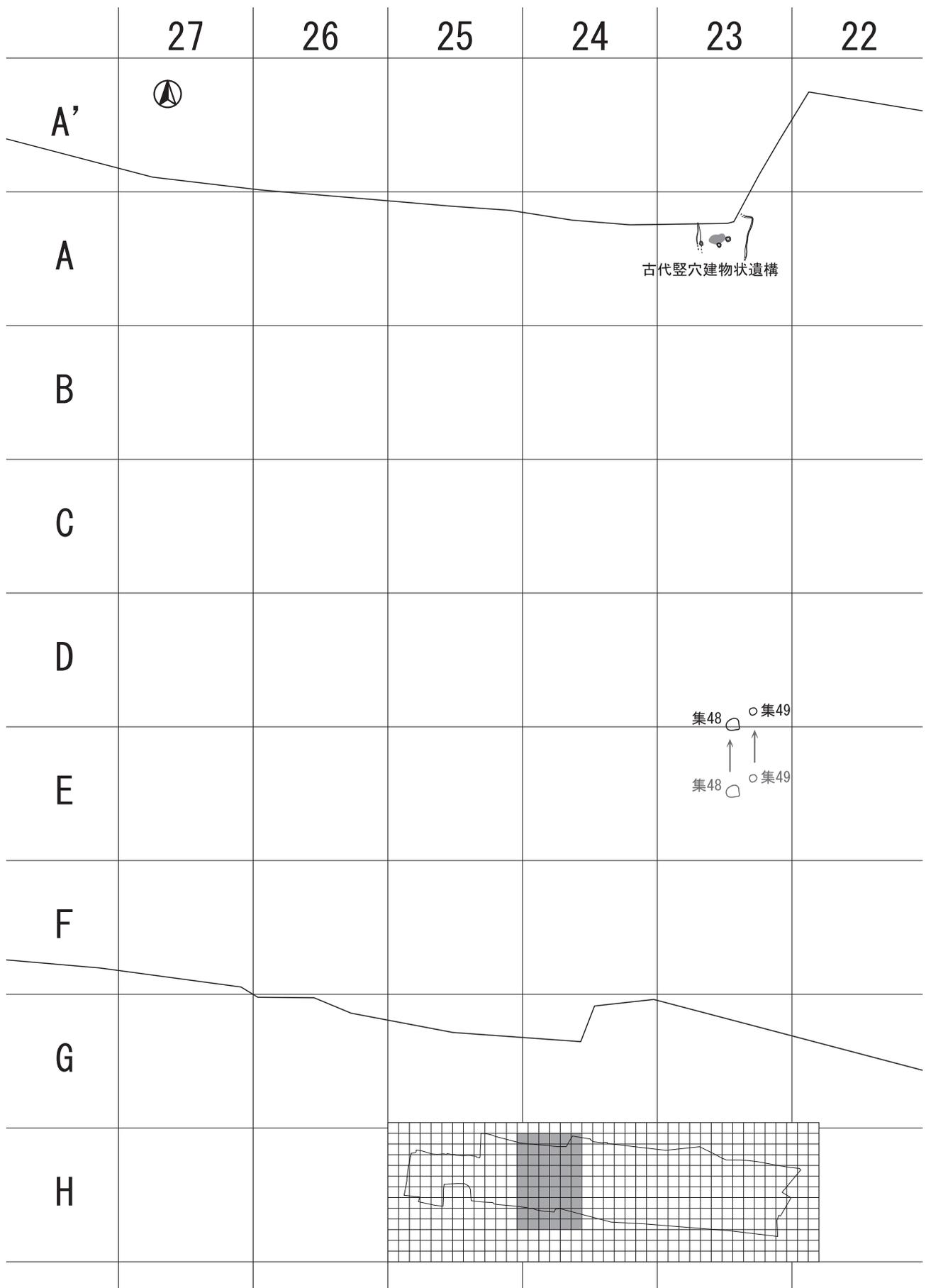
A-23区で検出された。遺構の北側は調査区外で南側は本遺構より新しい時期の古代の溝で削平される。遺



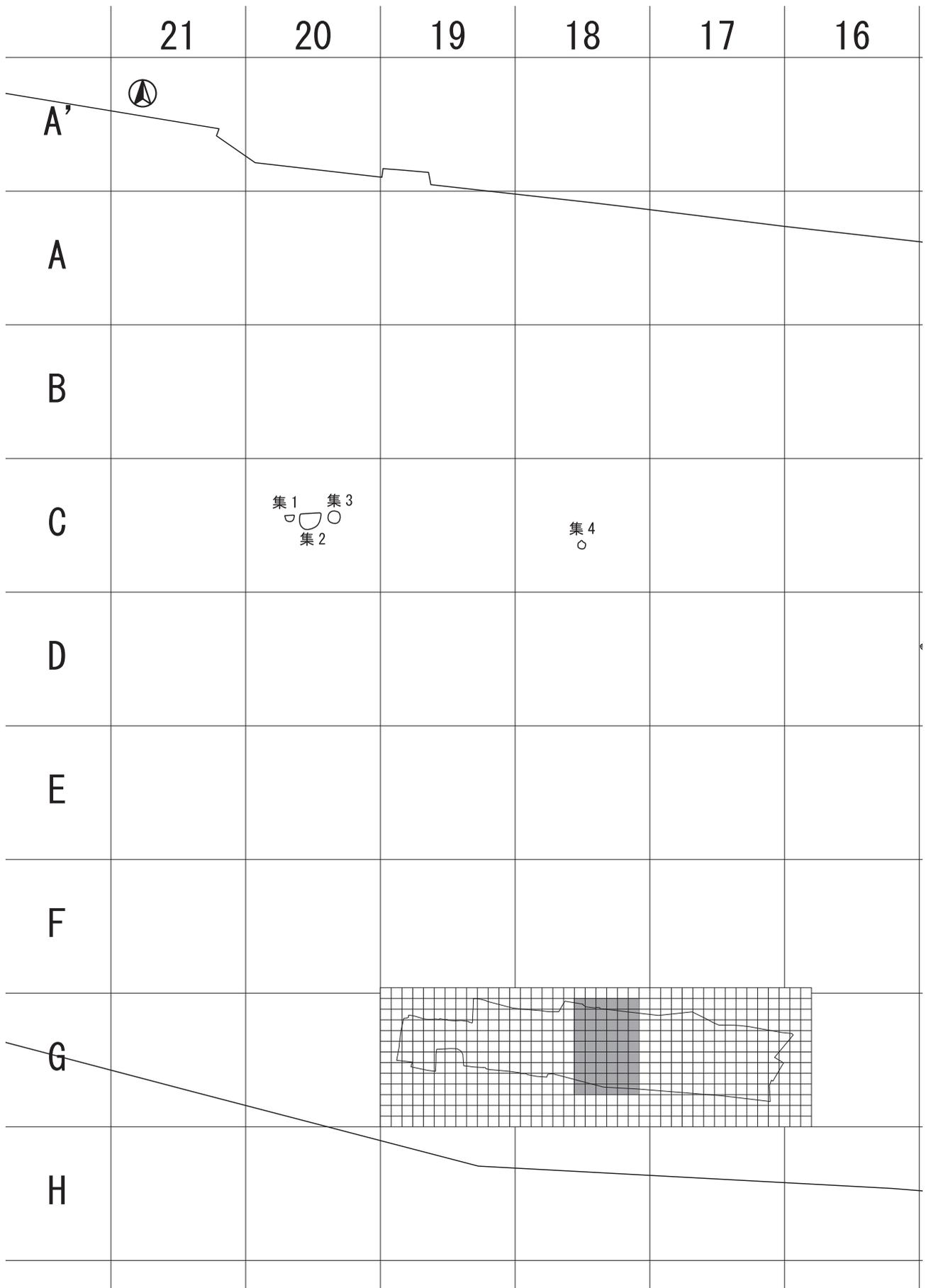
補遺 第①図 縄文時代中期後葉～後期 遺構



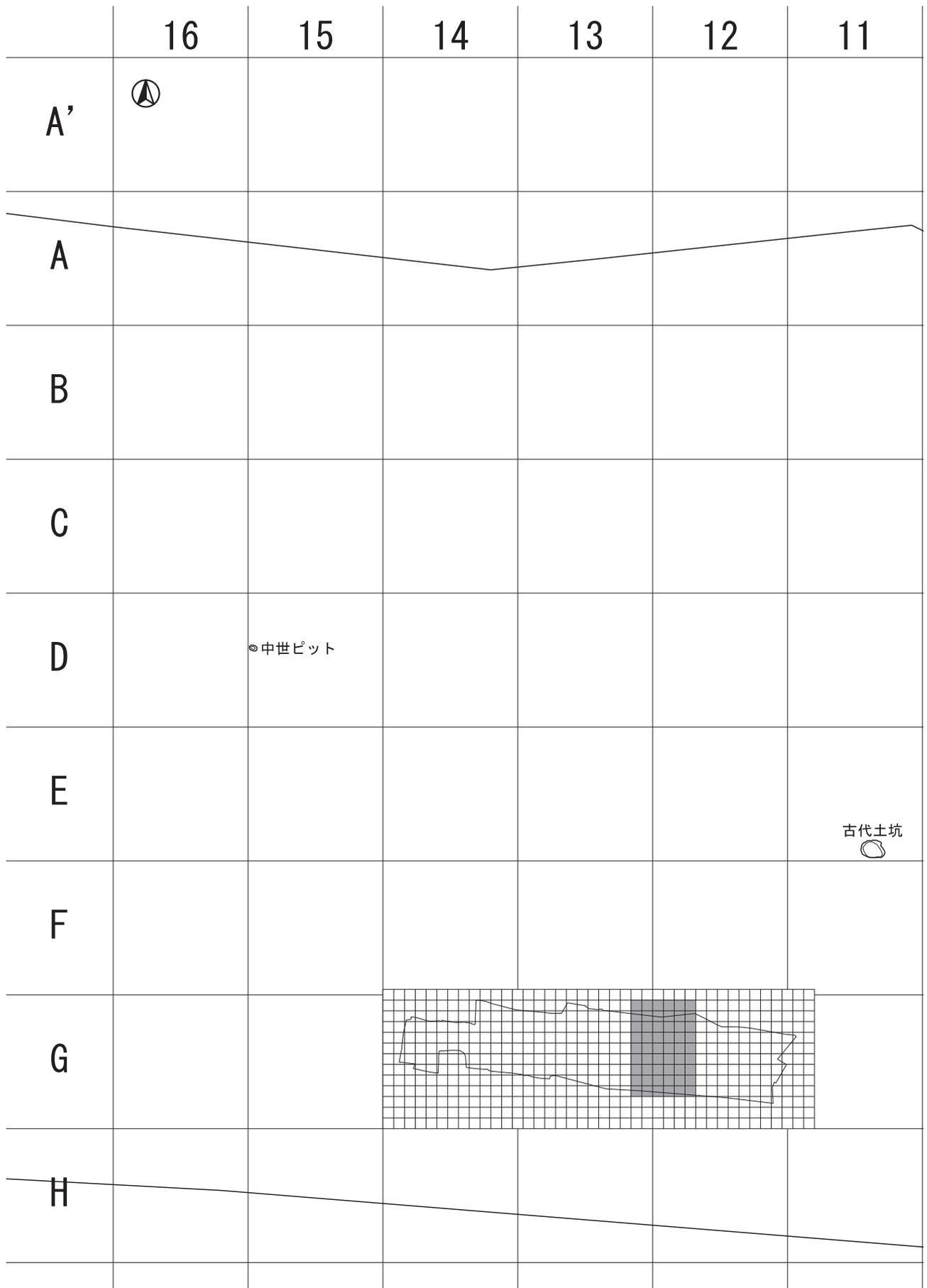
補遺 第②図 遺構配置図1



補遺 第③図 遺構配置図2

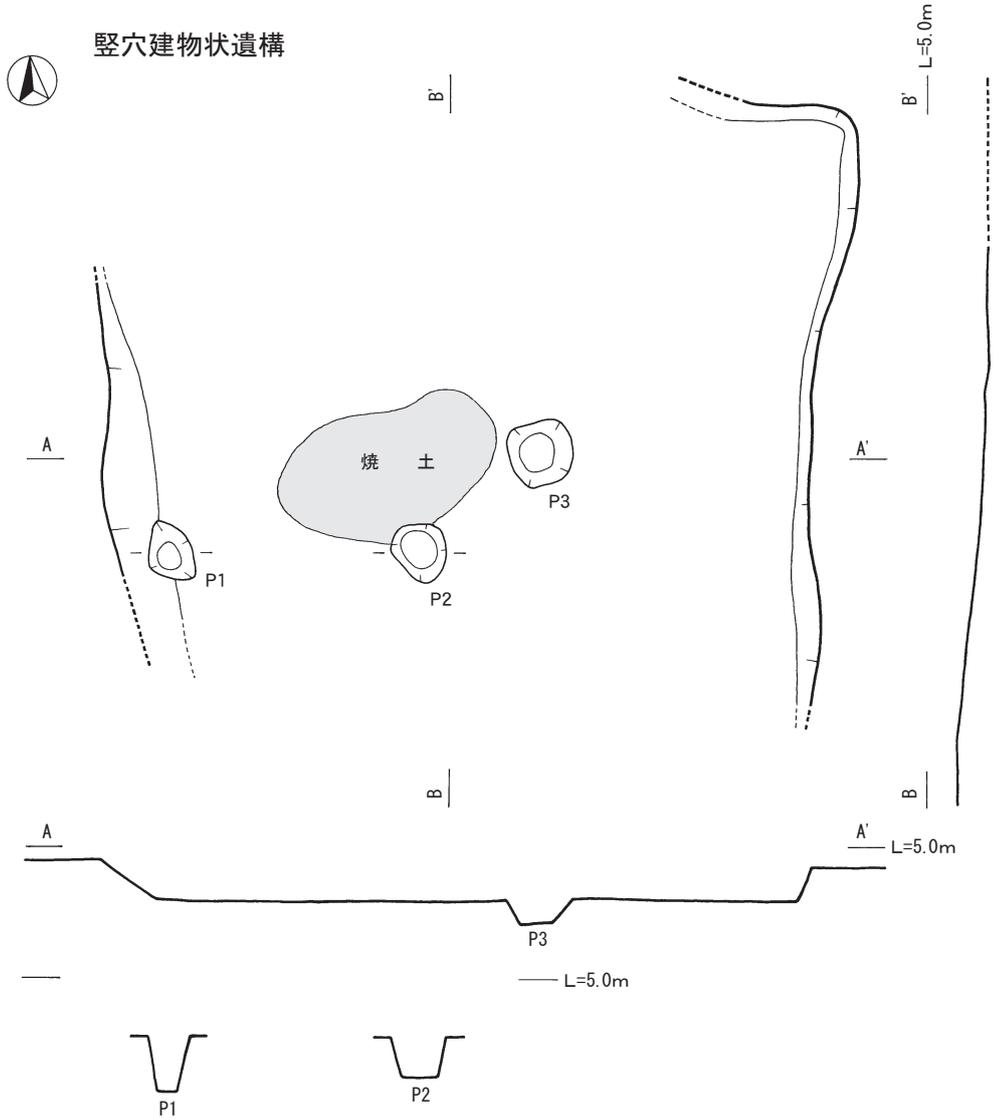


補遺 第④図 遺構配置図3

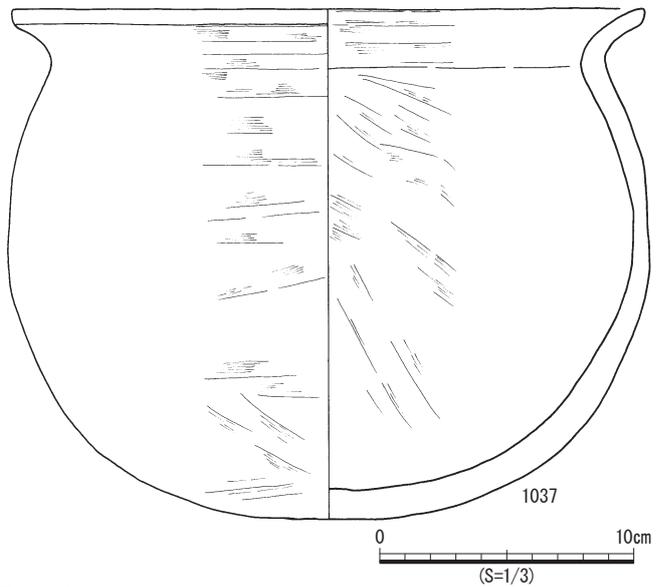
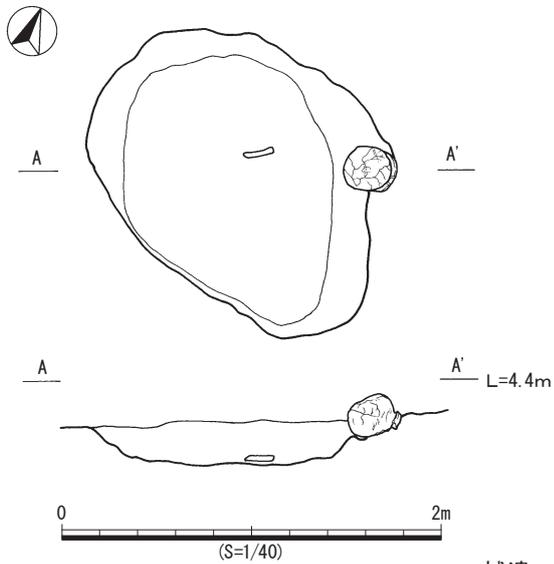


補遺 第⑤図 遺構配置図4

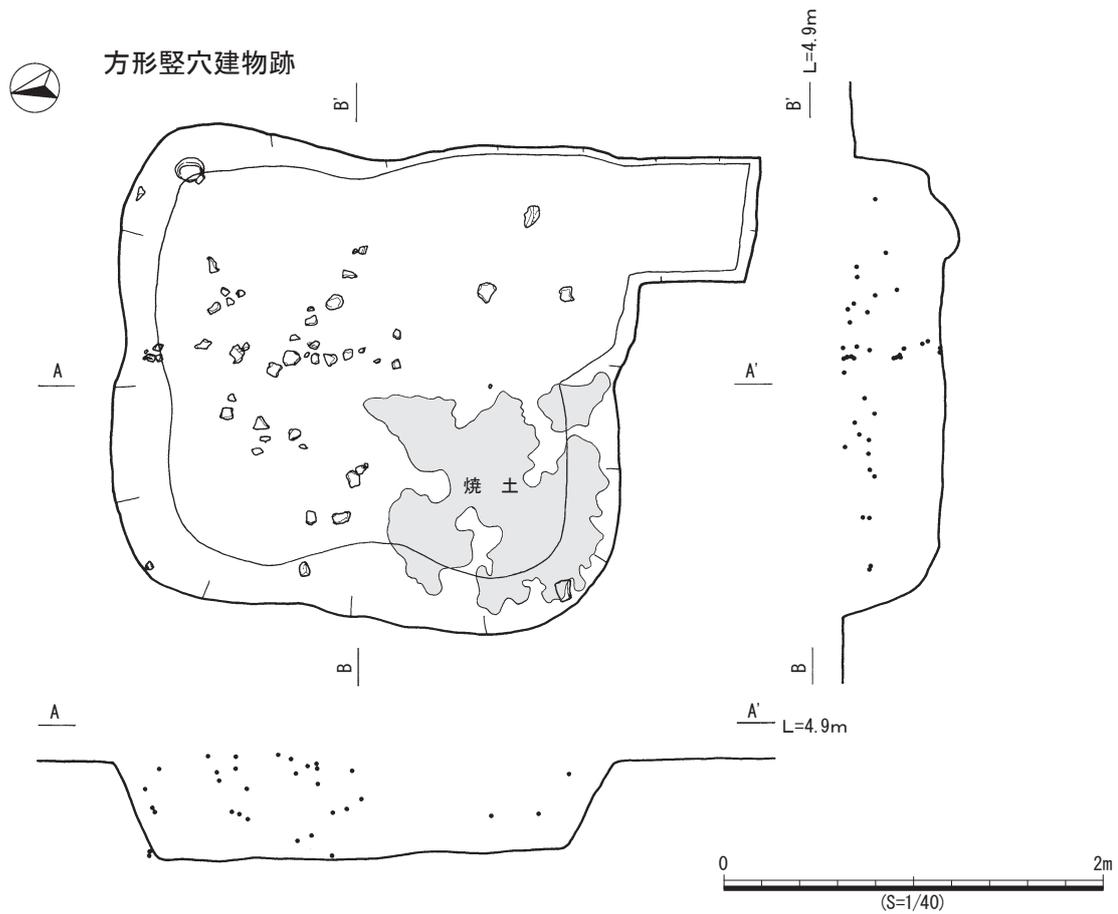
竪穴建物状遺構



土坑



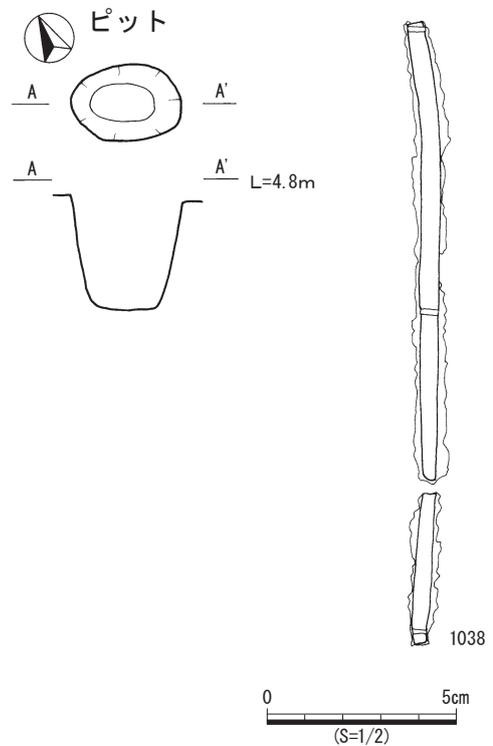
補遺 第⑥図 古代 遺構



構内よりピットが3基検出され、また、中央部に焼土が確認された。遺物は土師器が出土しているが小片であった。

土坑 (第⑥図 1037)

E-11区, IV層上面で検出された。埋土はⅢ層である。土坑の東端に完形の土師甕が伏せた状態で出土した。また、遺構内からは長さ16cm程の石棒状の礫も検出された。礫については加工痕等は見られなかった。土師甕と土坑の関係についても詳細は不明である。1037は土師器の甕である。口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状を呈する。内面はヘラケズリが施されるが使用によるものか摩滅が激しい。



中世

方形竪穴建物跡 (第⑦図)

C-32区, Ⅲ層上面で検出された。埋土はⅡ層である。遺構内からは土器が出土しているが、すべて小片で流れ込みと思われる。南西側の床面からは不定形な焼土層が確認された。

ピット (第⑦図 1038)

D-15区, Ⅱ層上面で検出された。平面プランは楕円形で、ピット内から鉄釘状の鉄製品が出土した。1038は長さ約18cm、幅約5mm、厚さ約2mmの断面が長方形を呈する鉄製品である。中世のものとしたが、近世の可能性も残る。

補遺 第⑦図 中世 遺構

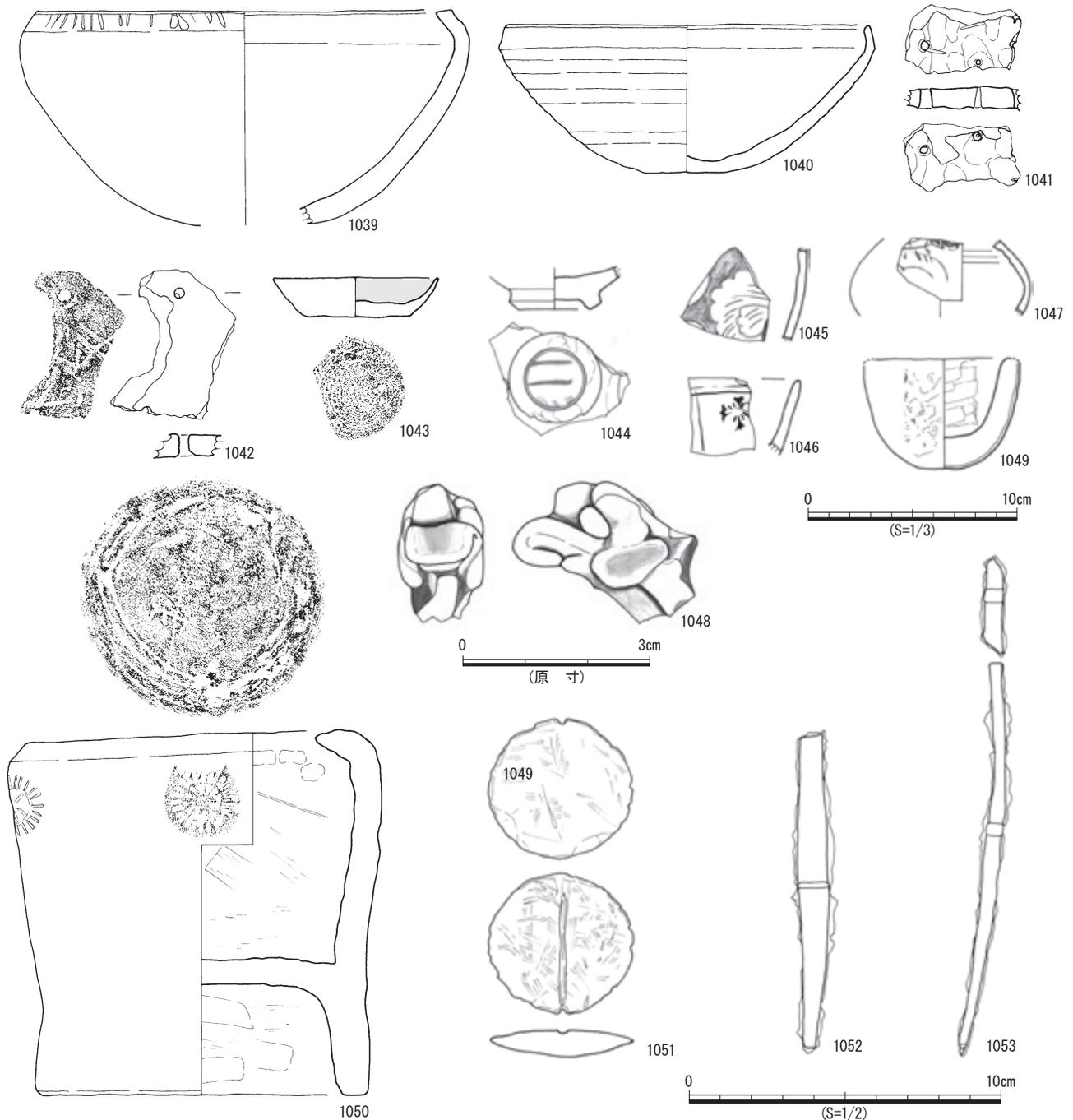
(3) 遺物

古代・中世 (第⑧~⑪図 1039~1086)

1039・1040は土師器の鉄鉢である。焼成が良好で、酸化焼成のかかった須恵器である可能性も残る。1039は口縁部外面に刻み目が施される。1040は底部が平底をなす。1041・1042は穿孔があけられた土師器であるが、器種等詳細は不明である。

1043は底部糸切りの土師器の小皿である。内面に純度の高い銅が熔着する。科学分析の結果 (P.269・270参照), わずかに水銀も含まれていることがわかった。埴塙として使用した可能性も考えられる。1044は森田D群に

分類される白磁皿である。高台内面に墨書が確認される。1045は磁州窯系の瓶の胴部である。1046は高麗青磁で碗または鉢と思われる。外面に白土による象眼が施される。1047は中国景德镇産の呉須赤絵で、瓶と思われる。1048は青白磁の水注や瓶等に裝飾される龍首部分と思われる。1049は埴塙である。内面には鉄が熔着する。1050は鉄鉢である。1051は上面に沈線を有する滑石製のメンコである。端部は加工され、断面がレンズ状を呈する。1052・1053は鉄製品である。1052は刀子と思われる。1053は平釘状であるが、詳細は不明である。



補遺 第⑧図 古代・中世 遺物 1

「芝原遺跡1」 縄文時代遺構編 レベル数値正誤表

頁	土層番号	誤レベル	正レベル
21	①	L=1.00m	L=3.6m
	②	L=2.00m	L=4.6m
24	⑥	記入なし	L=4.8m

P 54 第39図 縄文時代中期～後期遺構配置図(18) の集石48, 49は北へ5mスライド

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
69	集石1号	L=0.80m	L=3.4m
70	集石2号	L=-0.50m	L=2.1m
	集石3号	L=-0.50m	L=2.1m
	集石4号	L=-0.10m	L=2.5m
71	集石5号	L=-0.70m	L=1.9m
	集石6号	L=-0.10m	L=2.5m
	集石7号	L=-0.40m	L=2.2m
	集石8号	L=-0.20m	L=2.4m
72	集石9号	L=0.40m	L=3.0m
	集石11号	L=0.40m	L=3.0m
	集石12号	L=0.00m	L=2.6m
73	集石13号	L=0.00m	L=2.6m
	集石14号	L=0.20m	L=2.8m
	集石15号	L=0.20m	L=2.8m
	集石16号	L=0.00m	L=2.6m
	集石17号	L=0.00m	L=2.6m
74	集石18号	L=0.40m	L=3.0m
	集石20号	L=-0.20m	L=2.4m
	集石21号	L=-0.40m	L=2.2m
	集石22号	L=-0.20m	L=2.4m
	集石23号	L=-0.20m	L=2.4m
75	集石24号	L=-0.20m	L=2.4m
	集石25号	L=-0.40m	L=2.2m
	集石26号	L=-0.60m	L=2.0m
	集石27号	L=0.00m	L=2.6m
	集石28号	L=0.10m	L=2.7m
76	集石29号	L=-0.50m	L=2.1m
	集石30号	L=0.00m	L=2.6m
	集石31号	L=0.20m	L=2.8m
	集石33号	L=0.20m	L=2.8m
	集石34号	L=0.10m	L=2.7m
	集石35号	L=0.20m	L=2.8m
	集石36号	L=-0.50m	L=2.1m

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
76	集石37号	L=0.20m	L=2.8m
	集石38号	L=0.30m	L=2.9m
	集石39号	L=0.20m	L=2.8m
77	集石40号	L=-0.10m	L=2.5m
	集石41号	L=0.20m	L=2.8m
	集石42号	L=-0.20m	L=2.4m
	集石43号	L=-0.10m	L=2.5m
	集石44号	L=-0.20m	L=2.4m
	集石45号	L=-0.40m	L=2.2m
	集石56号	L=0.30m	L=2.9m
79	集石57号	L=0.50m	L=3.1m
93	土坑4号	L=0.60m	L=3.2m
	土坑5号	L=0.80m	L=3.4m
	土坑6号	L=0.80m	L=3.4m
	土坑15号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑16号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑17号	L=-0.20m	L=2.4m
	土坑18号	L=0.10m	L=2.7m
	土坑20号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑21号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑22号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑24号	L=0.40m	L=3.0m
	土坑30号	L=0.20m	L=2.8m
	土坑34号	L=0.30m	L=2.9m
	土坑42号	L=0.20m	L=2.8m
94	土坑43号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑44号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑48号	L=0.20m	L=2.8m
	土坑54号	L=0.40m	L=3.0m
95	土坑83号	L=-0.40m	L=2.2m
	土坑84号	L=-0.40m	L=2.2m
96	土坑101号	L=0.60m	L=3.2m

「芝原遺跡3」 古代・中世・近世編 レベル数値正誤表

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
46	掘立柱建物跡1号	L=2.2m	L=4.8m
59	土坑2号	L=1.8m	L=4.4m
204	土坑9号	L=2.2m	L=4.8m
231	溝1	L=2.0m	L=4.6m
	溝2	L=2.1m	L=4.7m
	溝3	L=2.0m	L=4.6m

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
231	溝4	L=1.2m	L=3.8m
	溝5	L=1.9m	L=4.5m
234	溝8	L=2.2m	L=4.8m
365	土坑1号	L=2.2m	L=4.8m
	土坑2号	L=2.4m	L=5.0m
	土坑3号	L=2.4m	L=5.0m

補遺観察表

挿図番号	レイト	出土区	層位	種別	器種	部位	法量 (cm)			器面調整		胎土の色調	備考
							口径	底径	器高	外面	内面		
①	1037	E-11		土師器	甕	完形	25.0		20.3	工具ナデ	ケズリ・工具ナデ		
③	1039	C-24	II・III	土師器?	鉄鉢	口縁部~胴部	20.0			工具ナデ・工具痕	ケズリ後・工具ナデ		
	1040	D-24 イワ 4933		土師器?	鉄鉢	口縁部~胴部	17.4			工具ナデ	工具ナデ		中世堅穴建物2号
	1041	C-32	II	土製品	穿孔土器	蓋?	(最大長) 5.1	(最大幅) 3.3	(最大厚) 1.1	指頭痕	指頭痕・工具ナデ	上面: 浅黄 下面: 浅黄	
	1049	D-35	III		埴埴	口縁部~胴部	6.8	1.8	5.3				
	1050	B-34	III b		陶質土器	火鉢	完形	16.0	15.5	17.3	工具ナデ・指頭痕	工具ナデ	にぶい橙 7.5YR

挿図番号	レイト	出土区	層位	種別	器種	胎土の色調	釉薬	施釉	部位	法量 (cm)			産地	時期	分類	備考
										口径	底径	器高				
③	1044	C-26	II	白磁	灰	透明釉	高台内軸なし	皿(底部)		3.3		中国産	14 c以降		底に墨書	
	1045	D-37	II	中国陶器	灰褐色	鉄釉	外面模様部分・内面露胎					磁州窯	11 c後半~12 c代		梅瓶	
	1046	F-26	I b	陶器	灰褐色	透明釉	内・外面施釉					朝鮮陶器				
	1047	A-26 ミ 1349			赤絵	灰白	透明釉	残存部全面施釉								
1048	E-28	II・III		青磁	灰白	透明釉	残存部全面施釉	耳?把手?								

挿図番号	レイト	出土区	層位	種別	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考
						口径	底径	器高		
③	1051	F-31			滑石製品	4.6	4.50	0.85	24.51	

墨書土器・ヘラ書き・刻書土器 (第⑩・⑪図)

1054～1086は、「芝原遺跡3」刊行後に、整理作業の中で新たに確認された古代・中世の遺物の中から、墨書土器について取り上げた。また、芝3-486～芝3-638は、「芝原遺跡3」に掲載された墨書土器のうち、文字の釈読が不明もしくは誤りがあったものである。文字の釈読については柴田博子氏（宮崎産業経営大学法学部教授）にご教示をいただいた。また、椀・坏については高台を確認できるもののみ、椀として扱った。

1054は、土師器坏で、口縁部内面に横位1条の縄目状の圧痕を確認できるものである。

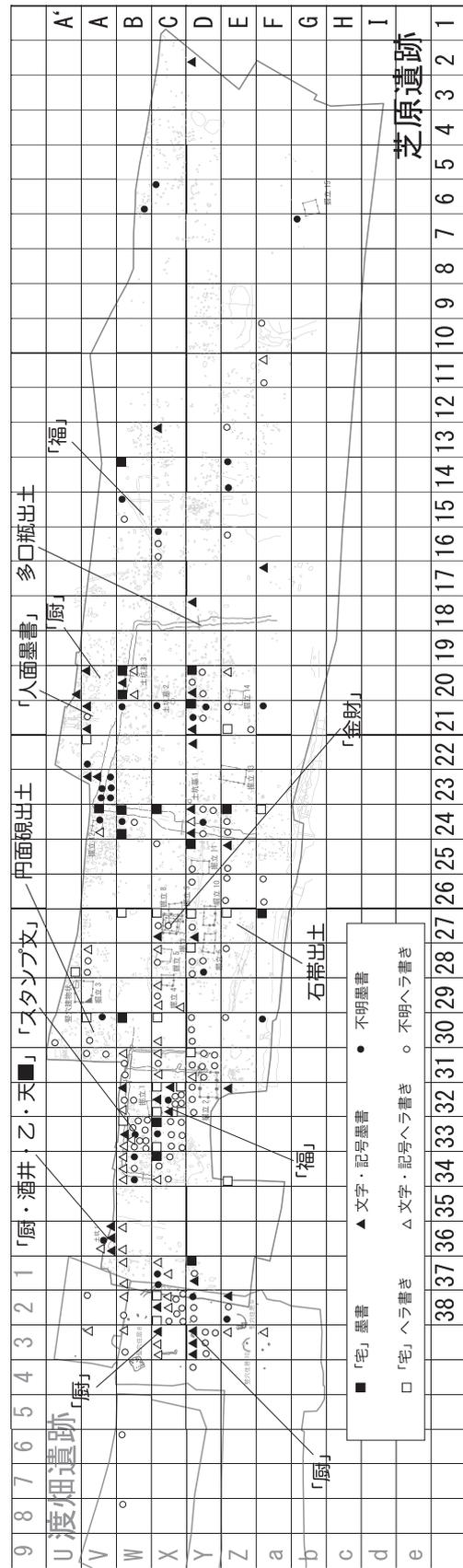
1055から芝3-638は、墨書、ヘラ書きが施された古代・中世の土師器・黒色土器・赤色土器・須恵器である。このうち、土師器1069と1076には底部に糸切り底の切り離しを確認できるので、中世の遺物である可能性がある。その他のものは古代の遺物と考えられる。

1055は、体部外面に墨書とヘラ書きが施された土師器であり、内面に煤痕がみられる。

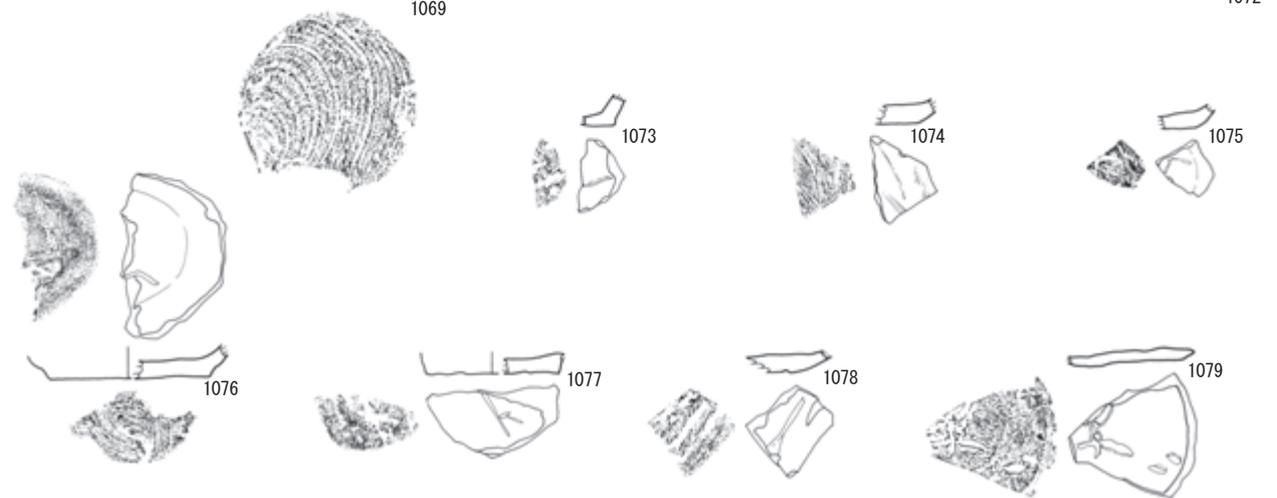
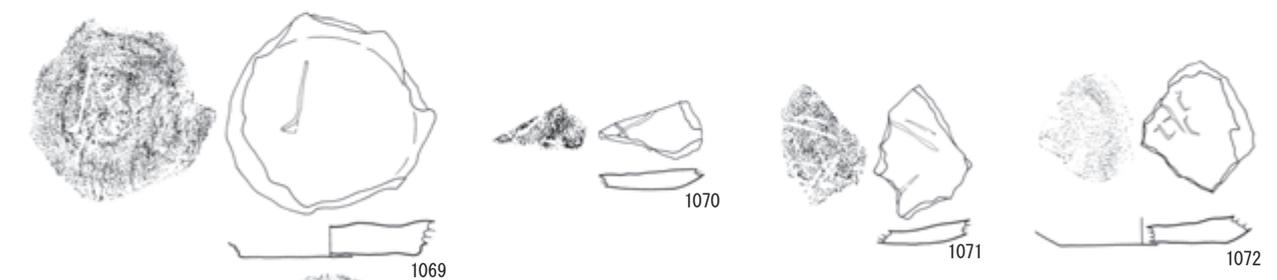
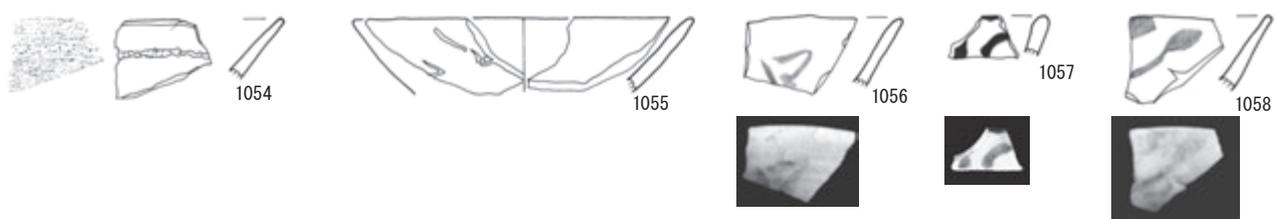
1056～1063と芝3-486・芝3-77は、墨書土器であり、焼成後に墨で文字・記号を施したものと考えられる。1056～1061と芝3-486・芝3-77は土師器であり、1062・1063は須恵器である。1055～1061では、墨書が施された部位はすべて坏の体部であり、外面7である。芝3-77はピット26から出土した。「厨」の「寸」の部分と考えられる。

1064～1086と芝3-95～芝3-638は、ヘラ書き土器であり、焼成前にヘラで文字・記号を施したものと考えられる。1064～1078と芝3-95～芝3-638は土師器であり、1079～1083は赤色土器、1084・1085は須恵器、1086は円形土製品である。1064～1086の椀・坏では、ヘラ書きが施された部位は、体部内面2・体部外面3・底部内面4・底部外面1になる。1064～1086の皿では、ヘラ書きが施された部位は、内面5・外面7になる。

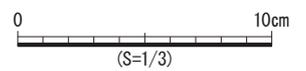
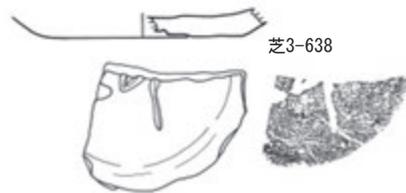
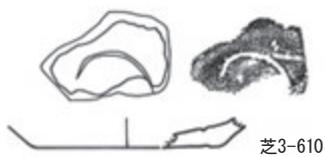
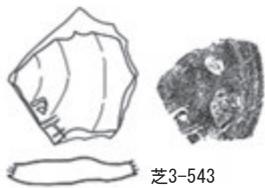
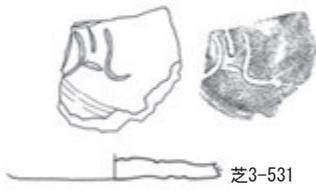
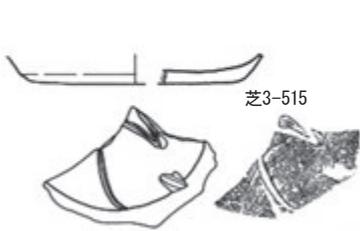
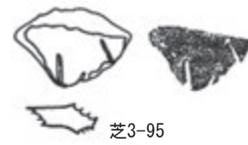
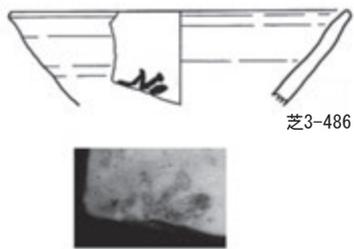
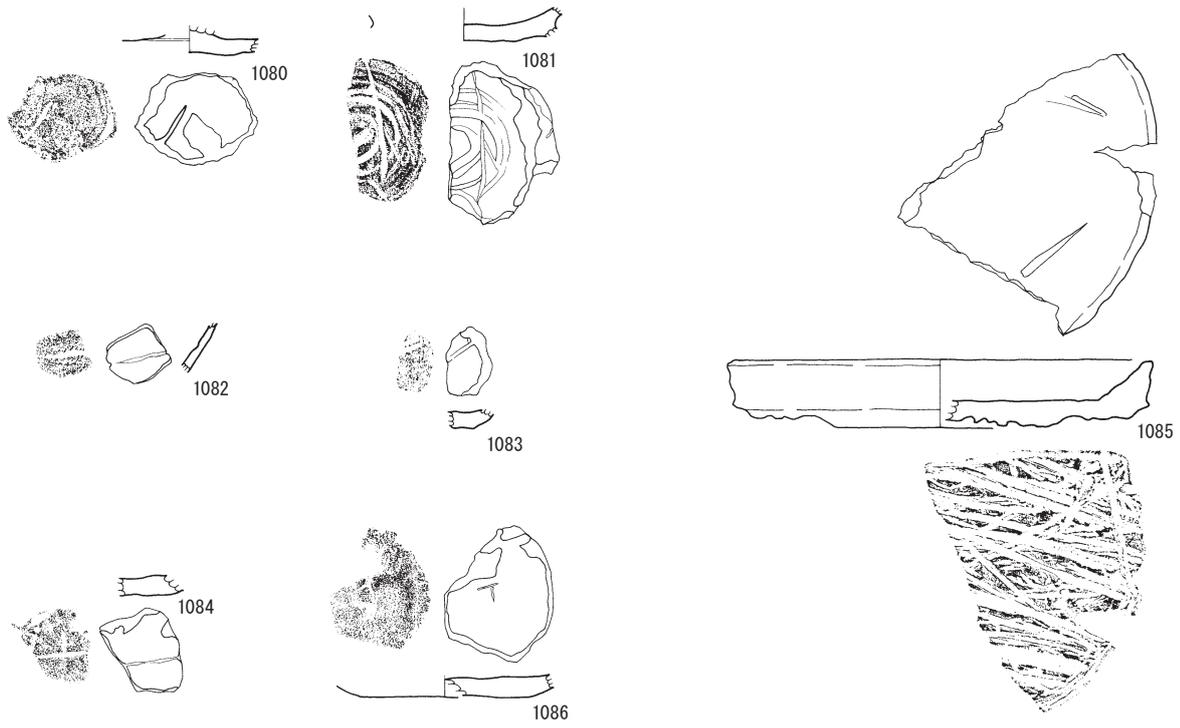
1080は内赤外黒の赤色土器蓋であり、内面にヘラ記号を確認できる。1085は底部外面から体部外面の底部にかけて、明瞭な繊維状圧痕を確認できる。1086は土師器坏の底部を、紡錘車に転用したものの可能性がある。芝3-95は、溝状遺構4号から出土した。芝3-531は「凡」であるとされる。



補遺 第⑨図 墨書土器分布図



補遺 第⑩図 古代・中世 遺物 2



補遺 第①図 古代・中世 遺物 3

古代中世土器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	施文	種別	器種	施文部 位	面	出土区	層	備考
補遺 第⑩図	1054	圧痕	土師器	坏	体部	外面	G 17	Ⅱ	横位1条の縄目状 圧痕
	1055	墨書・ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面	C 21	Ⅱ	内面に煤あり
	1056	墨書	土師器	坏	体部	外面	D 22	Ⅲ	「仮」
	1057	墨書	土師器	坏	体部	外面			
	1058	墨書	土師器	坏	体部	外面	F 17	Ⅱ	「万」
	1059	墨書	土師器	坏	体部	外面	A 30	Ⅲ	
	1060	墨書	土師器	坏	体部	外面	B 30	Ⅲ	「宅」
	1061	墨書	土師器	坏	体部	外面			
	1062	墨書	須恵器	坏	体部	外面	D 28	Ⅲ	
	1063	墨書	須恵器	坏	体部	外面	D 21	Ⅱ	
	1064	ヘラ書き	土師器	椀	体部	内面	E 34	Ⅲ	「宅」
	1065	ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面			
	1066	ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面			
	1067	ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面			
	1068	ヘラ書き	土師器	坏	底部	内面	D 37	Ⅳ	「門」
	1069	ヘラ書き	土師器	坏	底部	内面			底部糸切り
	1070	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面			
	1071	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面			
	1072	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面	B 33	Ⅲ	「宅」
	1073	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面			
1074	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面				
1075	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面				
1076	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面			底部糸切り	
1077	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面	E 16	Ⅱ		
1078	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面				
1079	ヘラ書き	赤色土器	皿	底部	外面	D 27	Ⅲ	「凡」	
補遺 第⑪図	1080	ヘラ書き	赤色土器	蓋		内面	D 26	Ⅲ	
	1081	ヘラ書き	赤色土器	椀	底部	外面			
	1082	ヘラ書き	赤色土器	坏	体部	内面			
	1083	ヘラ書き	赤色土器	坏	底部	内面			
	1084	ヘラ書き	須恵器	皿	底部	外面			
	1085	ヘラ書き	須恵器	皿	底部	内面	E 24	Ⅱ	底部に繊維状 圧痕
	1086	ヘラ書き	円形土製品	坏	底部	内面			「十」 紡錘車に転用か
	芝 3-486	墨書	土師器		体部	外面	B 15	Ⅲ	「福」
	芝 3-77	墨書	土師器		体部	外面	A' 20	ピット 26	「厨」
	芝 3-95	ヘラ書き	土師器	椀	底部	内面	B 33	溝4号	「門」
	芝 3-515	ヘラ書き	土師器	坏	底部	外面	D 27	Ⅲ	「乙」
	芝 3-531	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面	C 29		「凡」
	芝 3-542	ヘラ書き	土師器		体部	内面	C 30		「得」
	芝 3-543	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面	B 31	Ⅲ	「得」
芝 3-610	ヘラ書き	土師器	坏	底部	内面	E 21		「宅」	
芝 3-638	ヘラ書き	土師器	坏	底部	外面	D 28		「門」	

芝原遺跡出土の土師器表面付着の金属成分について

鹿児島県立 埋蔵文化財センター
南の縄文調査室 中村幸一郎

芝原遺跡から出土した須恵器内付着の金属成分について分析を行った。
近隣に所在する上水流遺跡にも同様の遺物が出土しているので試料とし、比較検討した。

1 試料（金属成分）

(1) 芝原遺跡

補遺 第⑧図 No.1043 1点

(2) 上水流遺跡

第163図 No.147 1点

(鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書121 上水流遺跡2)

2 観察・分析方法

(1) 表面観察

目視のほか、双眼実体顕微鏡（Nikon SMZ1000）による8～20倍観察を行い、表面の特徴的な色調や形態等を観察した。

(2) 金属粒子の分布調査

透過X線撮影装置（HITACHI PI-CR-1506）で撮影し、金属粒子の分布を調べた。

(3) 金属遺物の成分分析

非破壊では測定できない部分が大半のため、(1)および(2)の結果を踏まえて、遺物表面で確認できる金属粒子やその周辺の溶着層を採取して分析用の試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000, X線管球ターゲット：ロジウム, X線照射径100 μm）を使用して、非破壊で測定した。分析条件は次のとおりである。

X線照射径	: 100 μm
測定時間	: 200 s
X線管電圧	: 50kV
電流	: 1000/140 μA
パルス処理時間	: P2
X線フィルタ	: なし
試料セル	: なし
定量補正法	: スタンダードレス

(4) 分析対象

芝原遺跡に隣接する上水流遺跡からも鉄器や鉄滓のほか、古銭などの銅製品がそれぞれ出土している。また、今回分析対象の土師器を用いた遺物に相似したものも出土している。

2つの遺物に残留した主な金属成分をもとに、芝原遺跡と上水流遺跡の遺物の表面に付着している金属成分について分析を行った。

3 結果

(1) 表面観察及び金属粒子の分布調査

芝原遺跡の土師器内側の表面観察により、直径1mmに満たない程度の細かい金属粒子が点在していると共に、目視できる2mm大の金属粒子も7点存在していることがわかった（図1）。このことは透過X線画像でさらにはっきりと確認できた（図3）。金属粒子の中で、試料として確実に採取できたものはなく、金属粒子を含む周囲の溶着層（0.5mm角程度）を剥がして分析試料とした。

(2) 蛍光X線分析装置による成分分析

芝原遺跡の土師器内の金属粒子は、純度の高いCu粒子であることがわかった（図2）。さらにこの他にこの資料の表面3か所からサンプルを採取して分析したところ、場所によってはばらつきは大きいものの、AgやPbなども検出された。

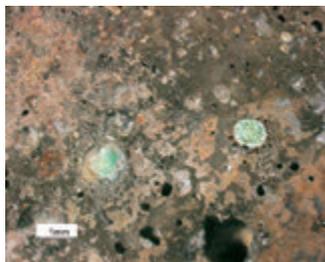
上水流遺跡 (No.147) の土師器からも目視できる金属粒子 (図5) とその分布を確認できた (図4)。成分分析の結果はCu, Feなどを検出した (図6)。試料全体の傾向としてCuのピークが顕著であり、純度の高いものと想定できる。また、Feのピークも見られるが、割合として少量であり、外面の胎土の分析でもFeのピークが現れることから、今回の分析では溶解したFeをこの土師器で使用したかどうかについて結論を得ることはできない。SnやPbについても検出された。

4 まとめ

芝原遺跡については、土師器の出土状況や成分分析の結果から銅を中心とした金属製品の生産活動が行われていた可能性が高いが、現段階ではこれらの金属製品にすぐに結び付く結果は得られていない。また、銀も少量の割合であるが成分として検出されており、遺構内から出土した例はないものの、溶解し利用していた可能性は高い。

上水流遺跡では銅製品や銭貨などなどが出土している。地金の成分はいずれもほぼ純銅に近く、当地で金具類の製造・細工を行っていたことも考えられる。2つの遺跡は近接しており、使用していた金属種類も似ていることから関連があることが想定できる。

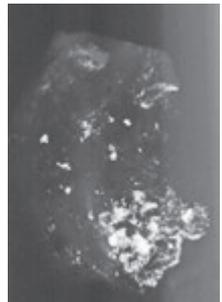
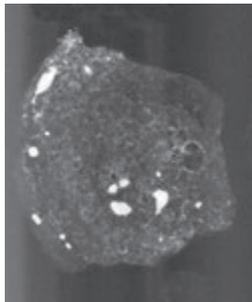
しかし、それぞれの遺物表面に残る金属成分は、透過X線画像や成分分析結果から場所によるばらつきが大きい。今後は、透過X線画像と対比させながらさらに分析を進める必要がある。



▲図1 実体顕微鏡

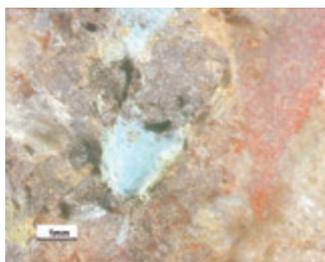


▲図2 成分分析



▲図3 X線撮影による金属分布(芝原遺跡)

▲図4 X線撮影による金属分布(上水流遺跡)



▲図5 実体顕微鏡



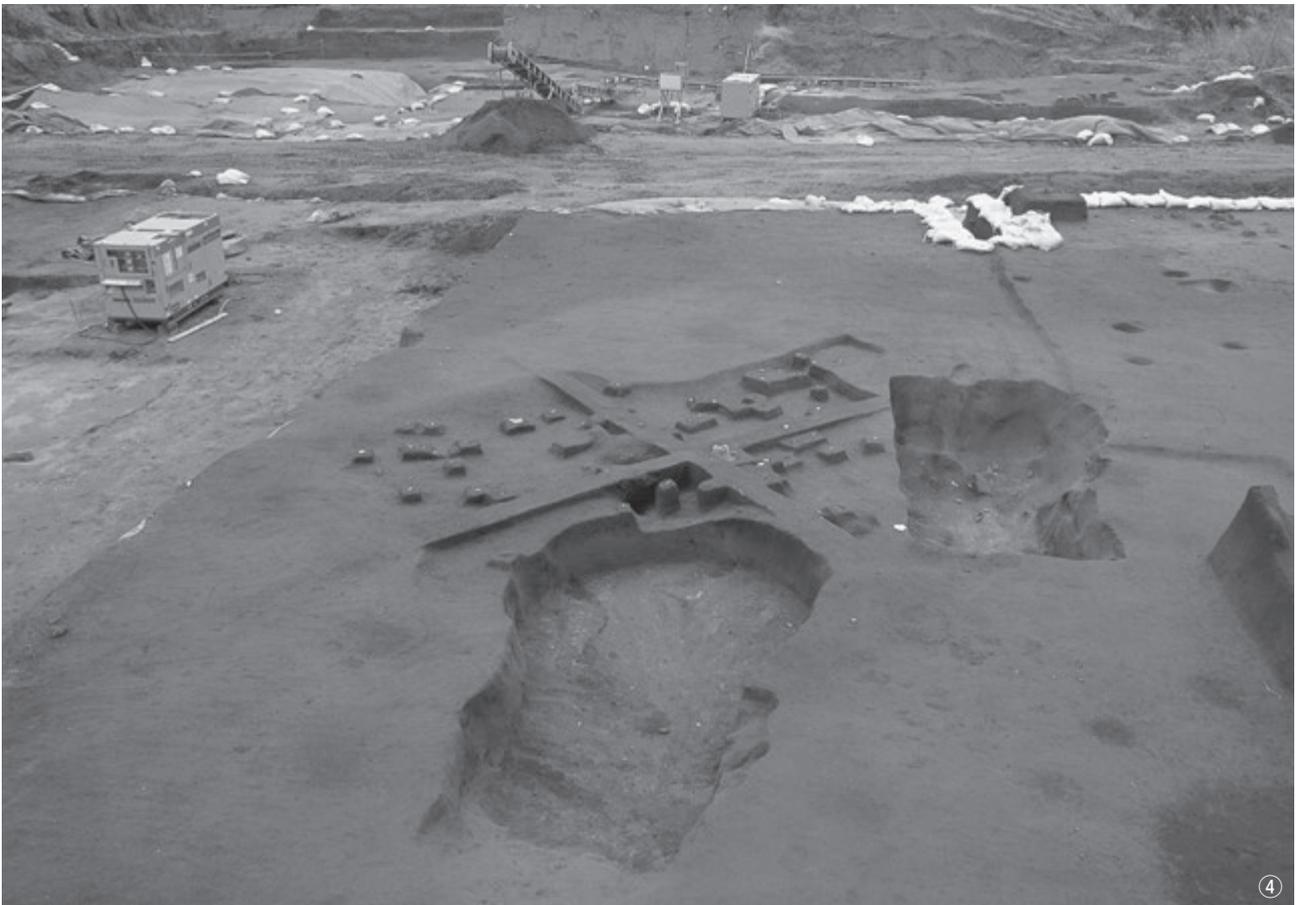
▲図6 成分分析

圖 版

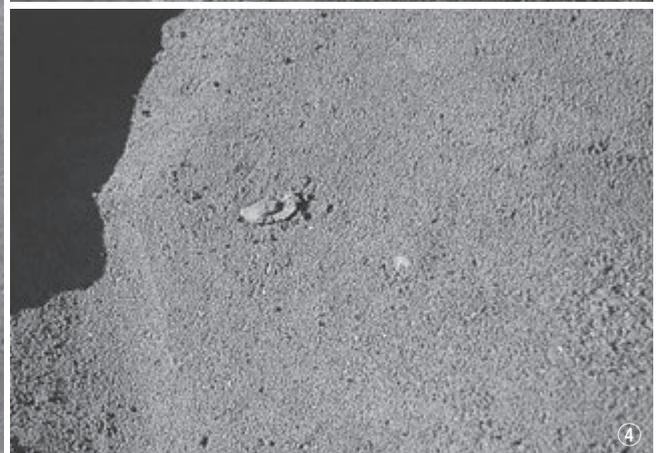


芝原遺跡遠景

図版2



①・②芝原遺跡近景 ③作業風景 ④竪穴住居跡1号



竪穴住居跡①2号 建物出土状況 ②・③銅鏡 ④鉄鍬

図版4

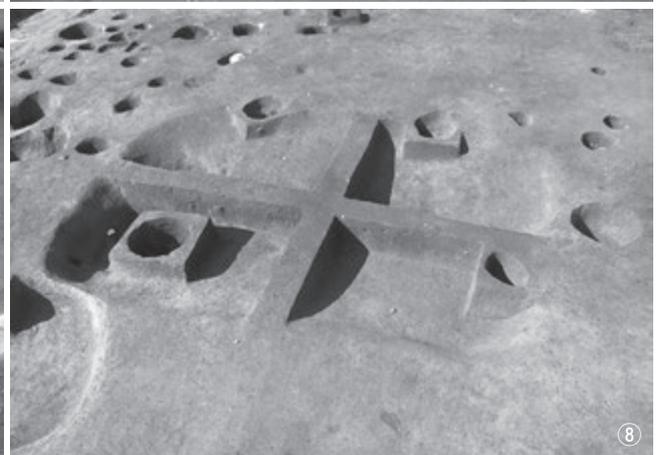
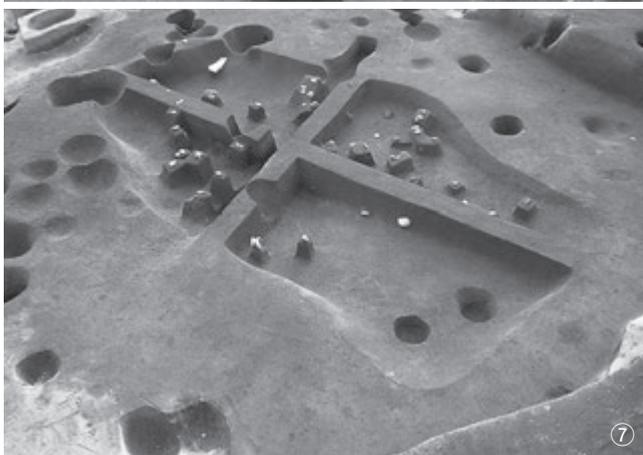
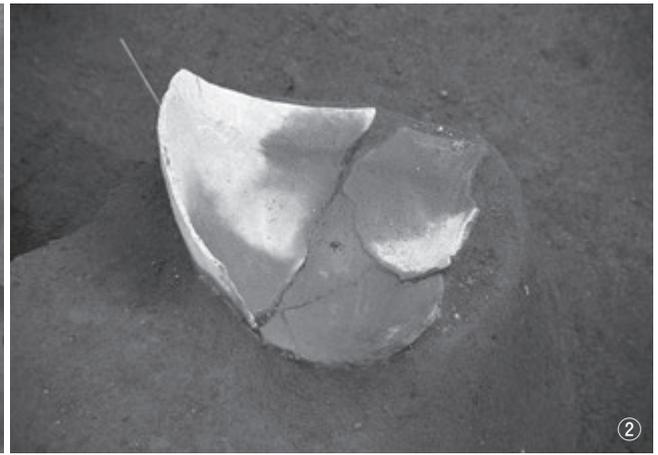


竖穴住居跡 ①3号 ②4号

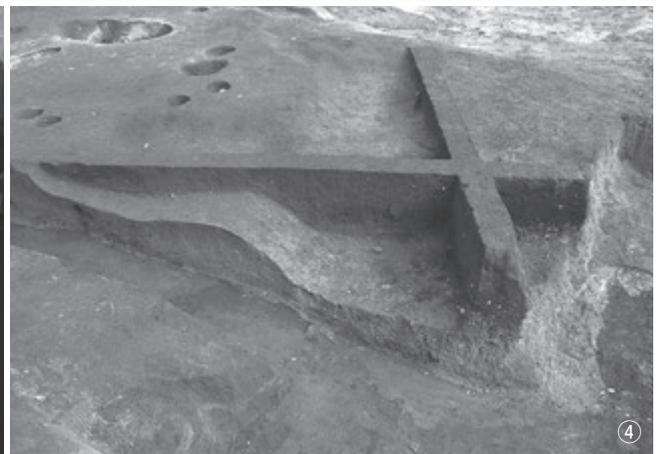
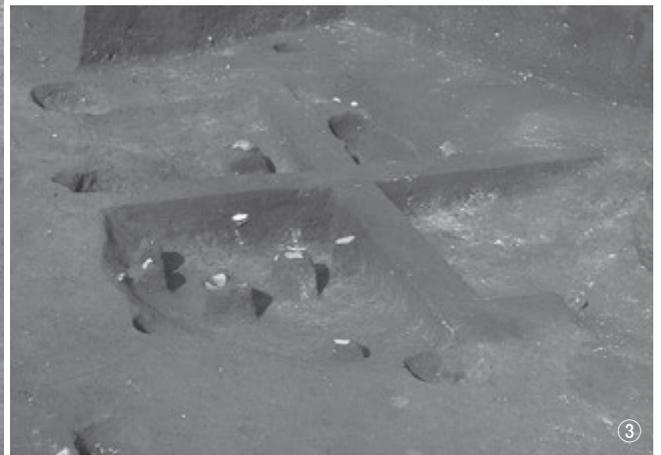


竖穴住居跡 ①5号 ②6号

図版6

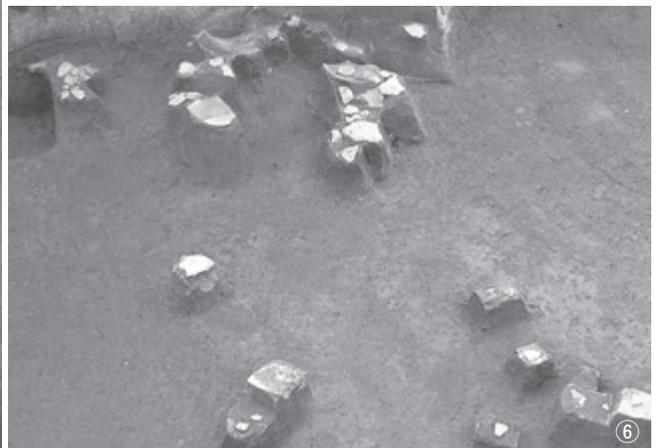


竪穴住居跡①7号 ②~④7号内出土遺物
 竪穴状遺構⑤6号 ⑥10号 ⑦11号 ⑧13号

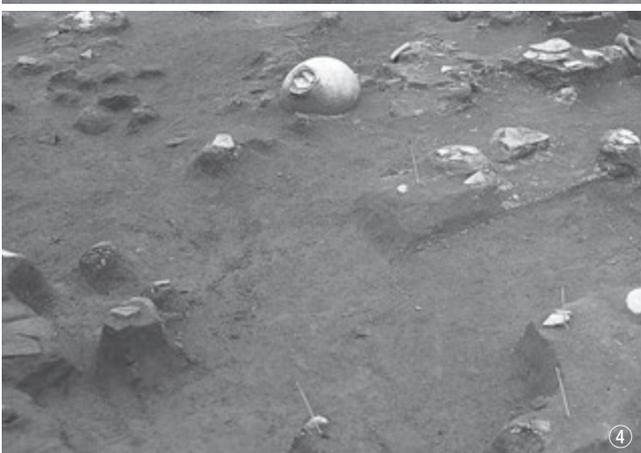


竖穴状遺構 ①16号 ②14号 ③18号 ④19号
土坑 ⑤1号 ⑥2号

図版8



①土坑5号 ②土坑6号 ③6号内遺物出土状況
④ピット8号 ⑤ピット10号 ⑥土器集中遺構2号



土器集中遺構 ①・②1号 ③~⑤3号

図版 10



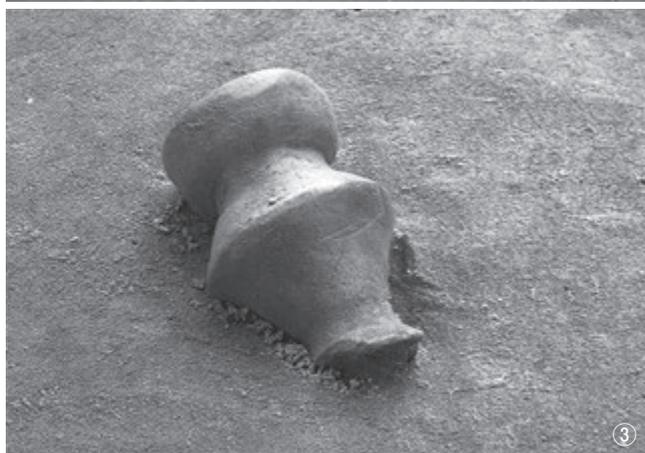
土器集中遺構 ①～③ 4号 ④7号 ⑤8号



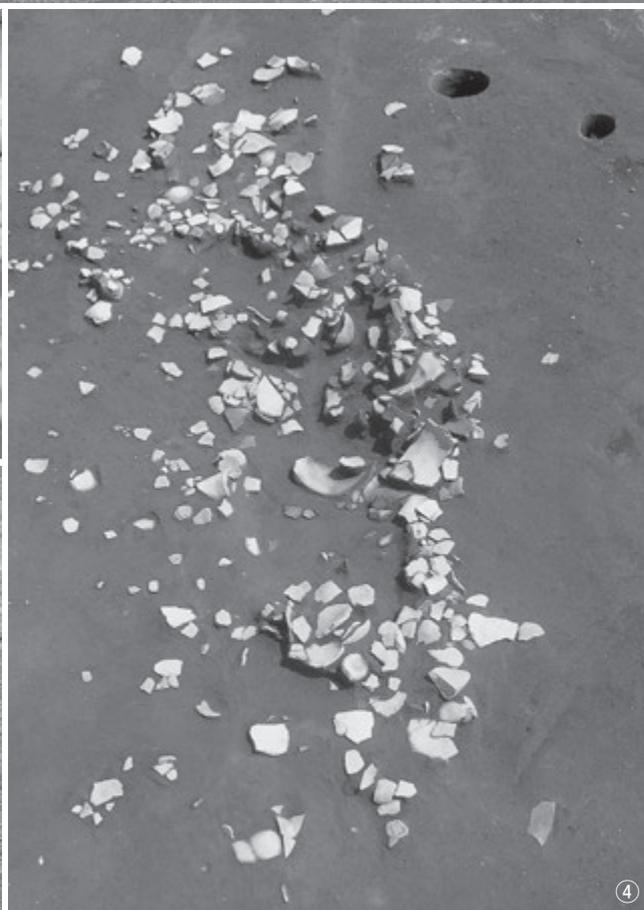
①



②



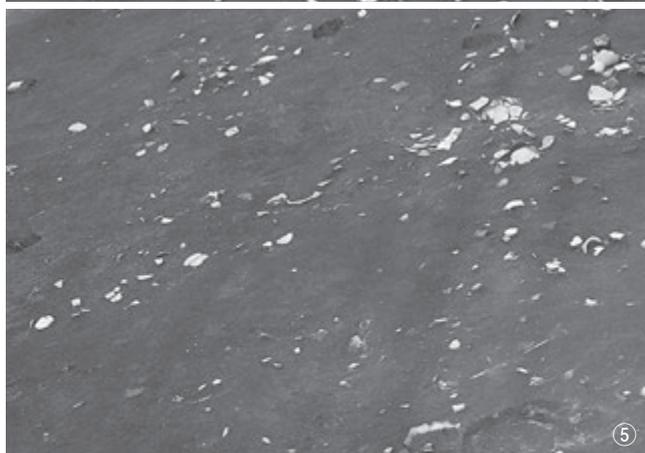
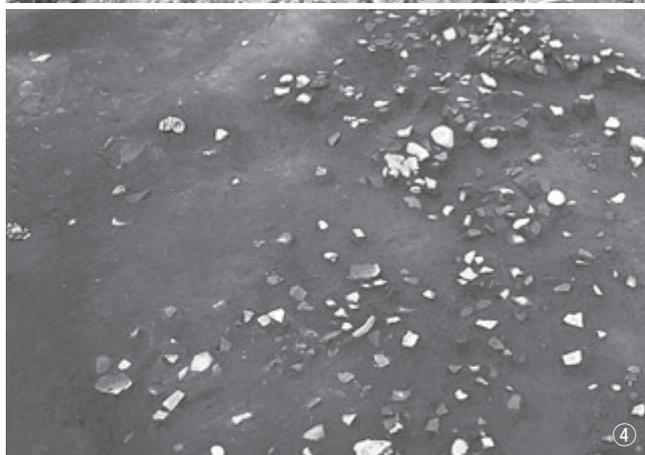
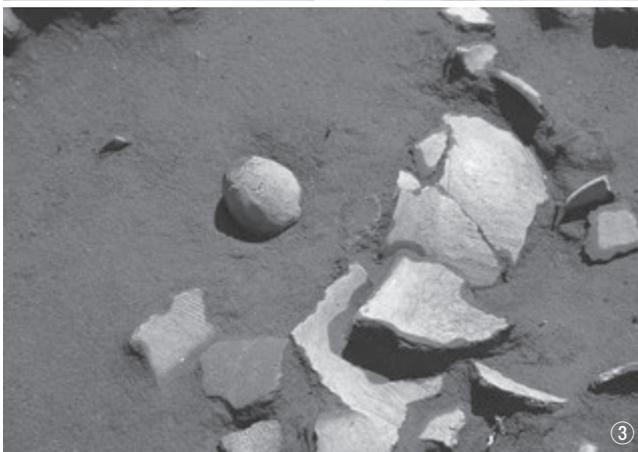
③



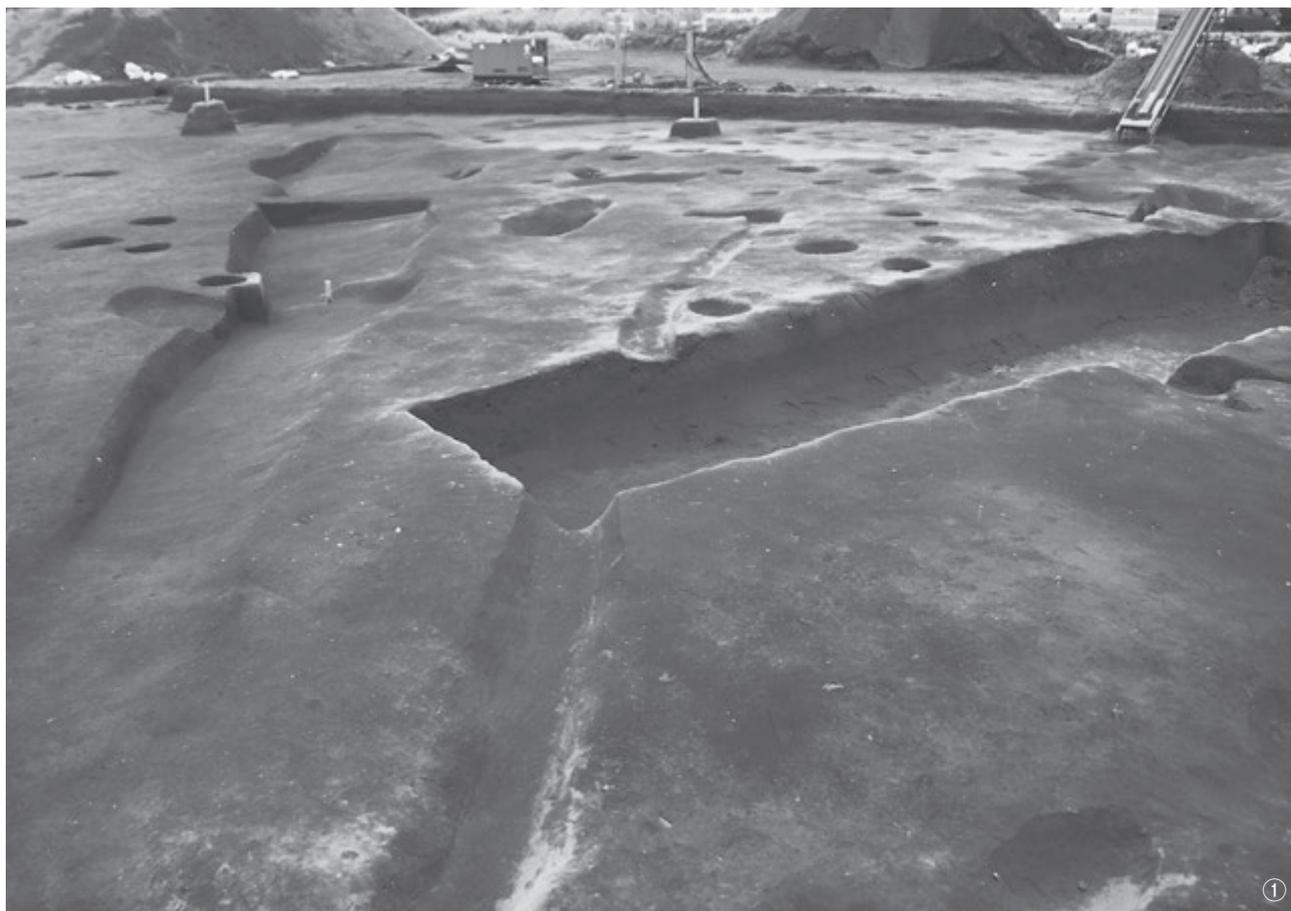
④

土器集中遺構 ①5号1段目 ②2段目
③3段目 ④A・B-24区土器集中出土状況

图版 12



土器集中出土状況 ①~③C・D-36・37区
④E-31区 ⑤D-37区 ⑥A・A'-27区

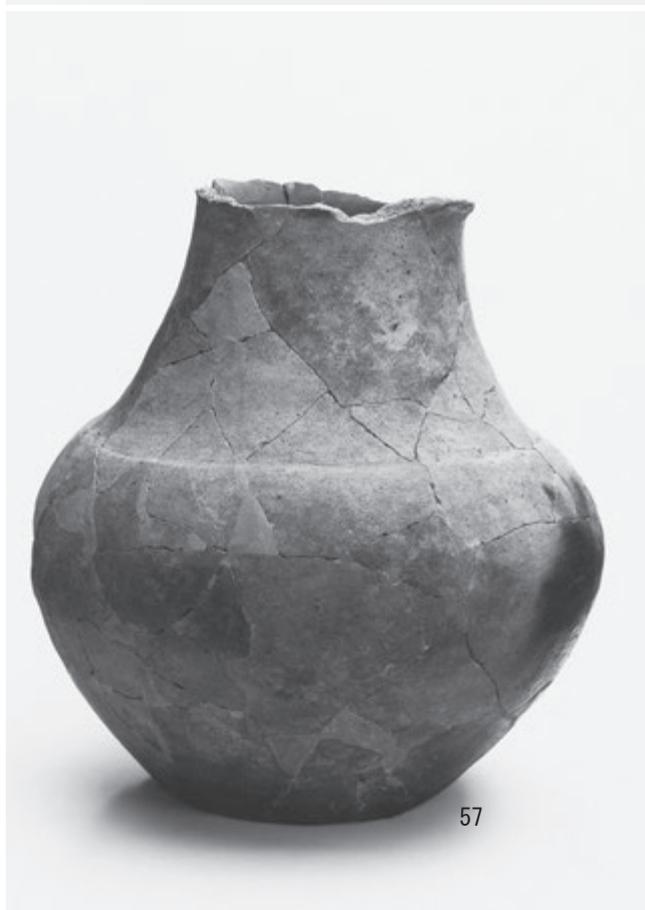


①溝状遺構 ②焼土遺構

図版 14

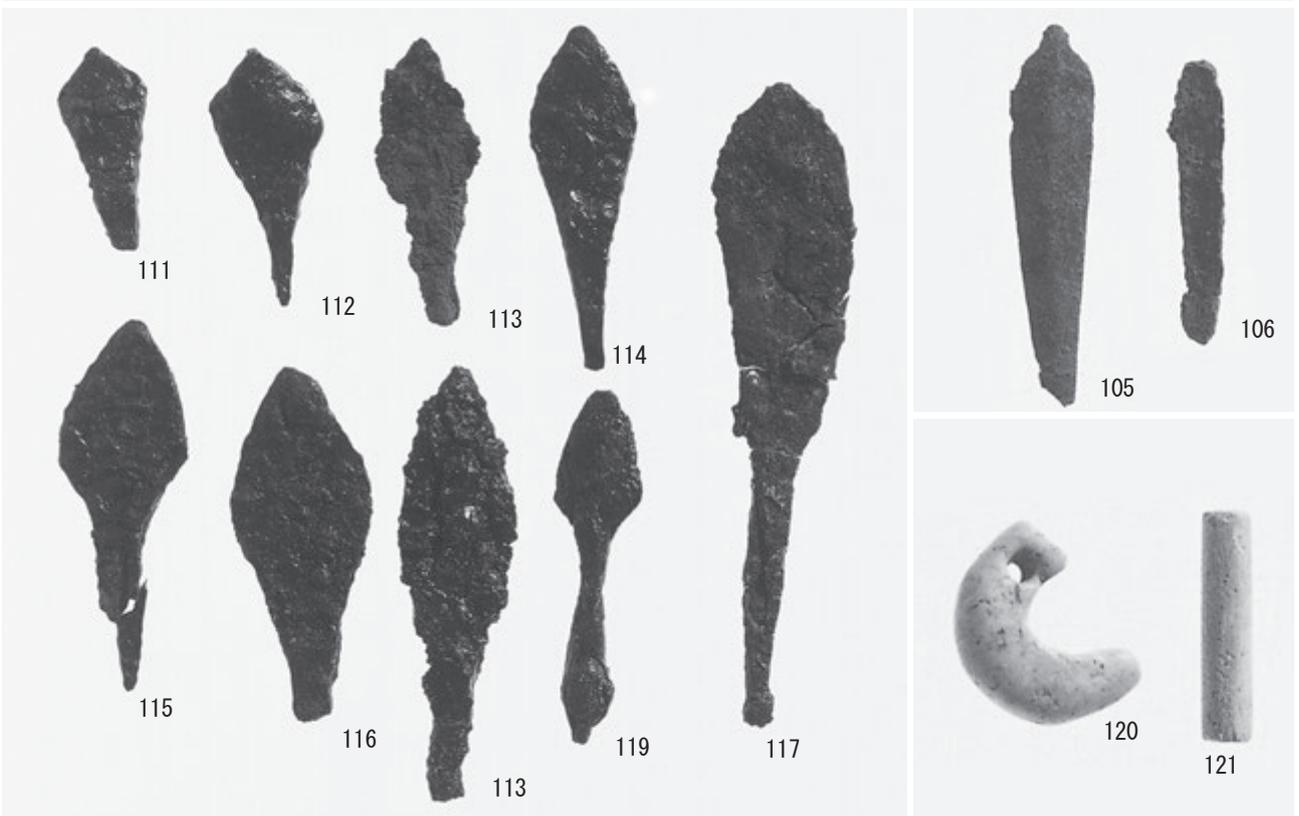
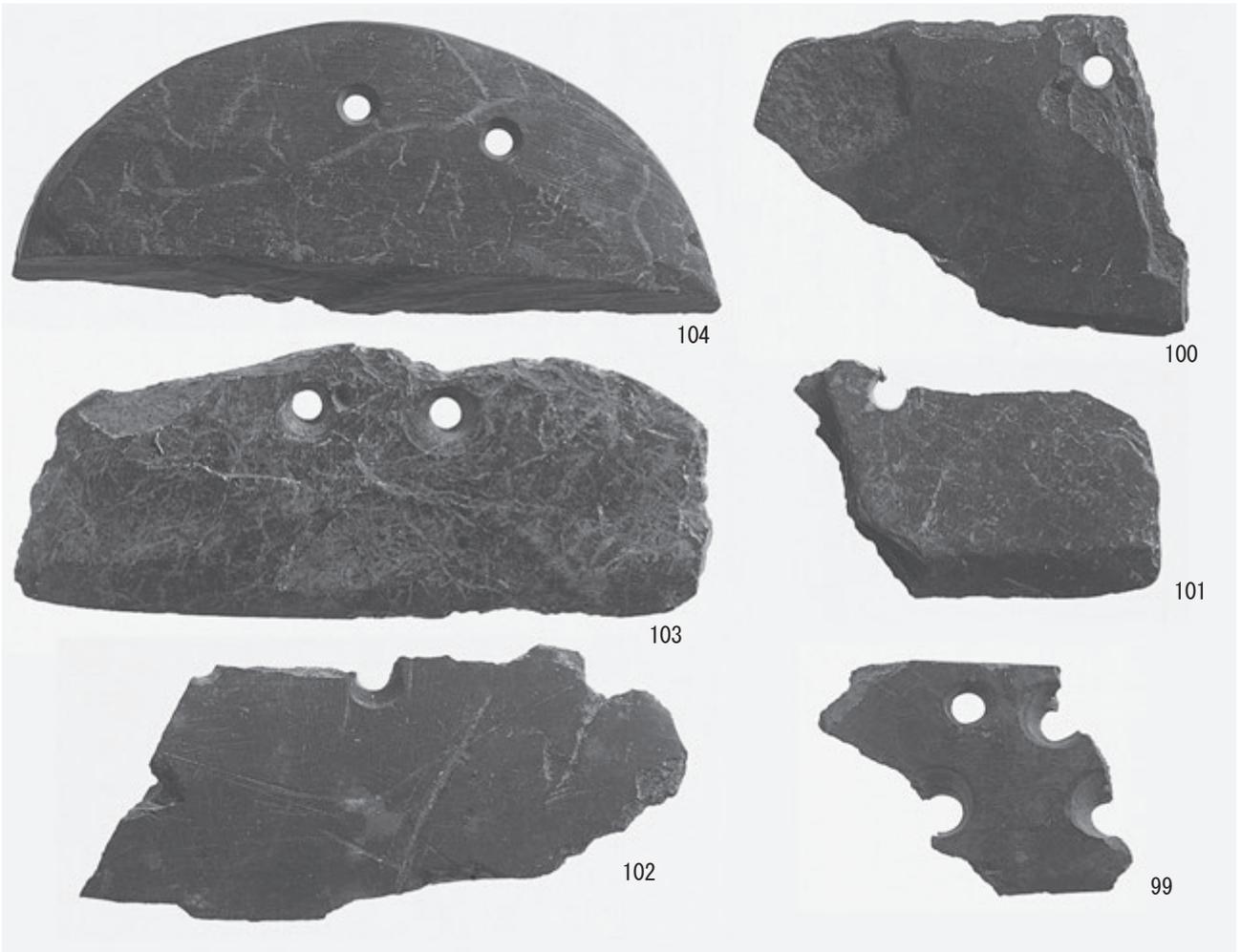


遺物出土状況 ①・②銅鏡 ③銅鏃
④線刻文のある鉢形土器



弥生土器

図版 16



①石包丁 ②鉄鏃・銅鏃・勾玉・管玉



竪穴住居
1号
123・122



竪穴住居
7号
143・145・144



竪穴住居
7号
132

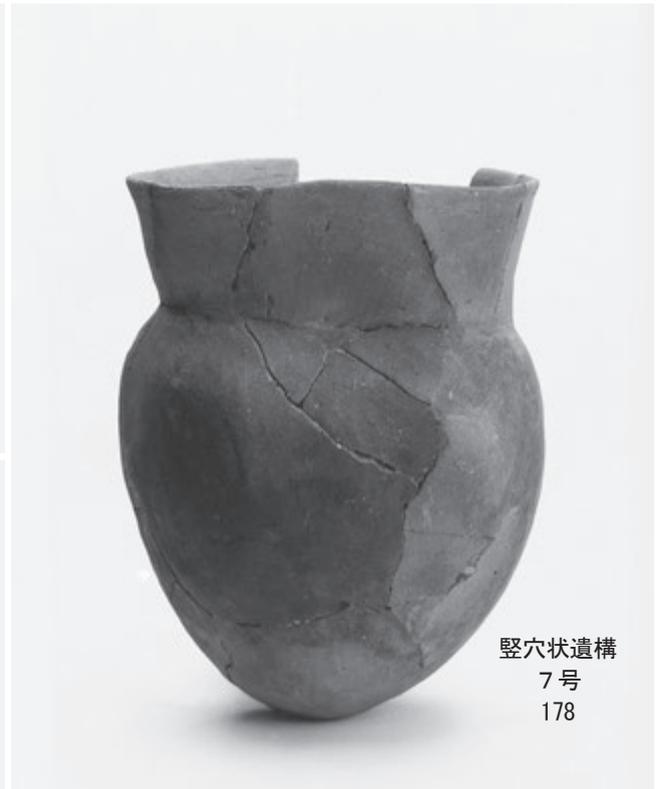
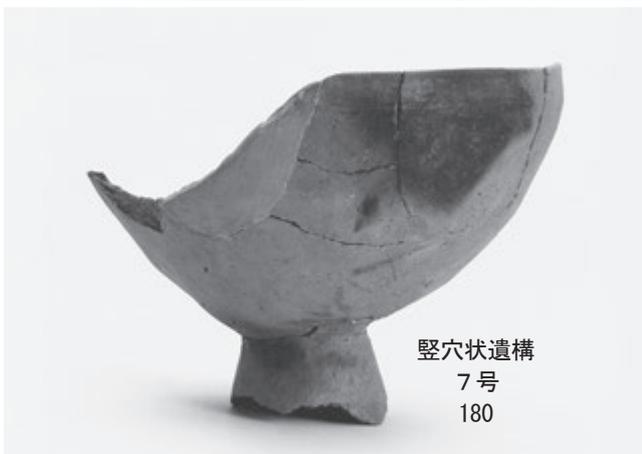


竪穴住居
7号
133

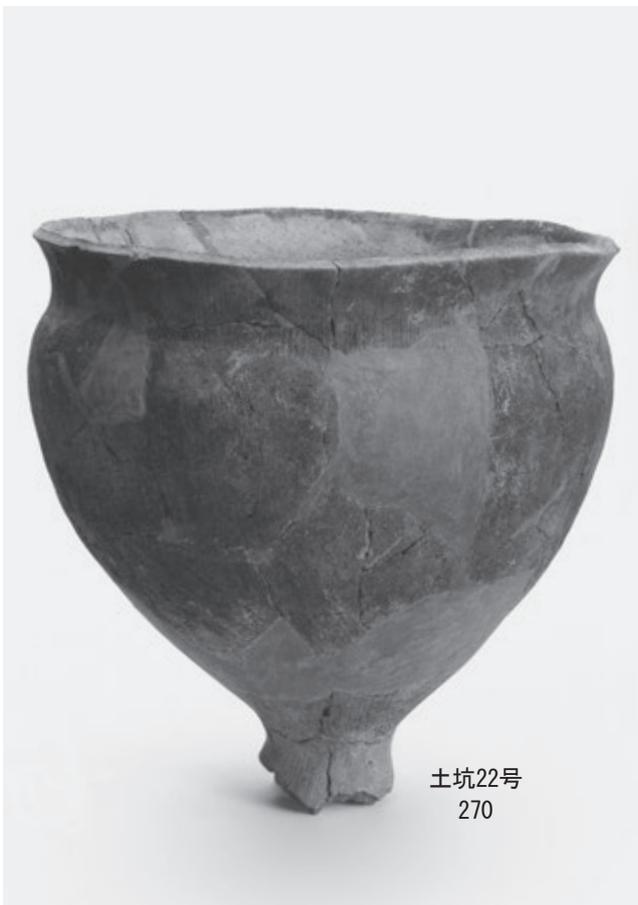


竪穴住居
7号
134

竪穴住居跡内出土遺物



豎穴状遺構内出土遺物

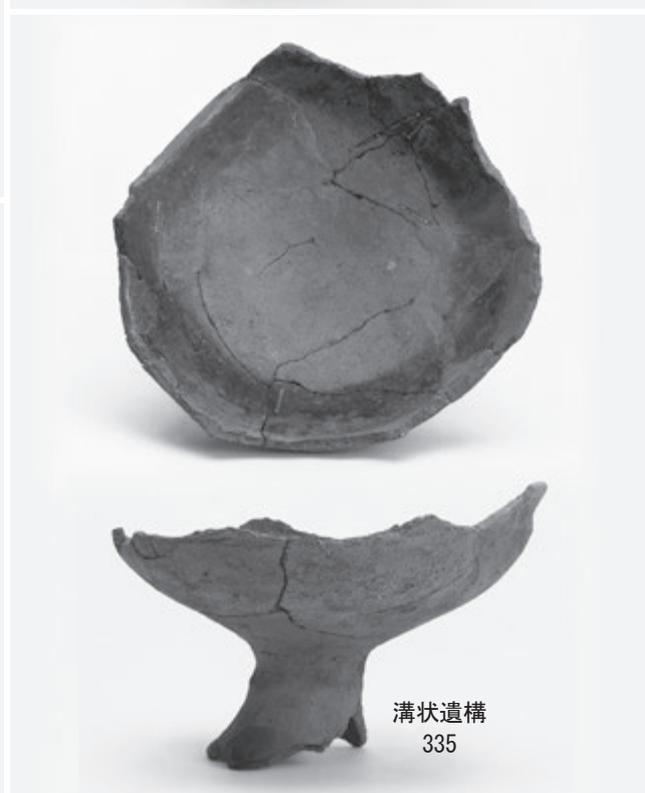


土坑内出土遗物

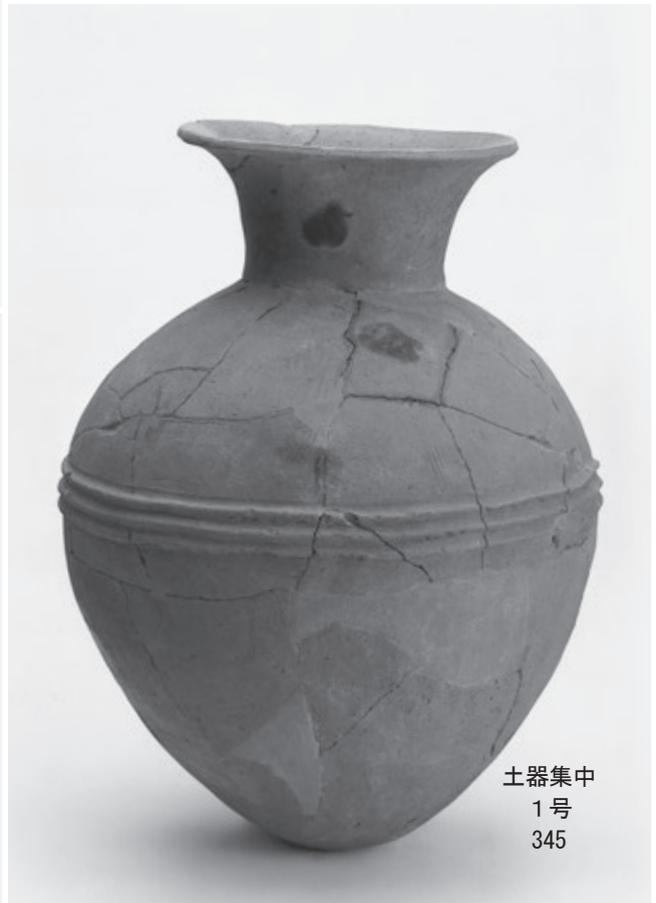
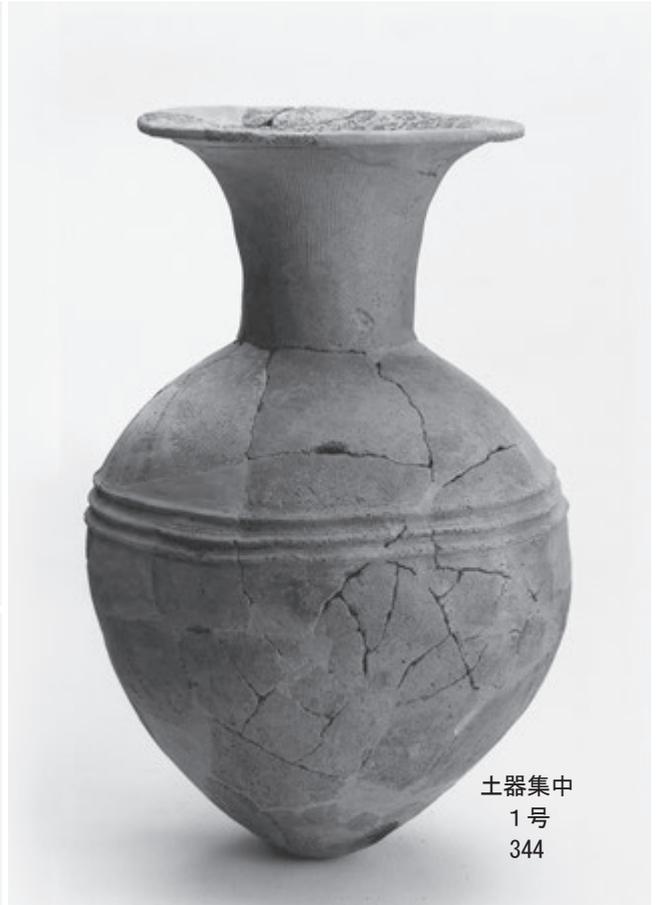
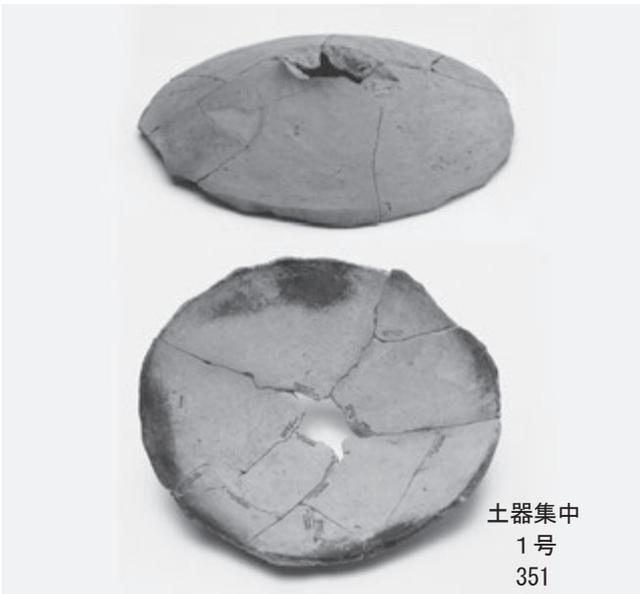
図版 20



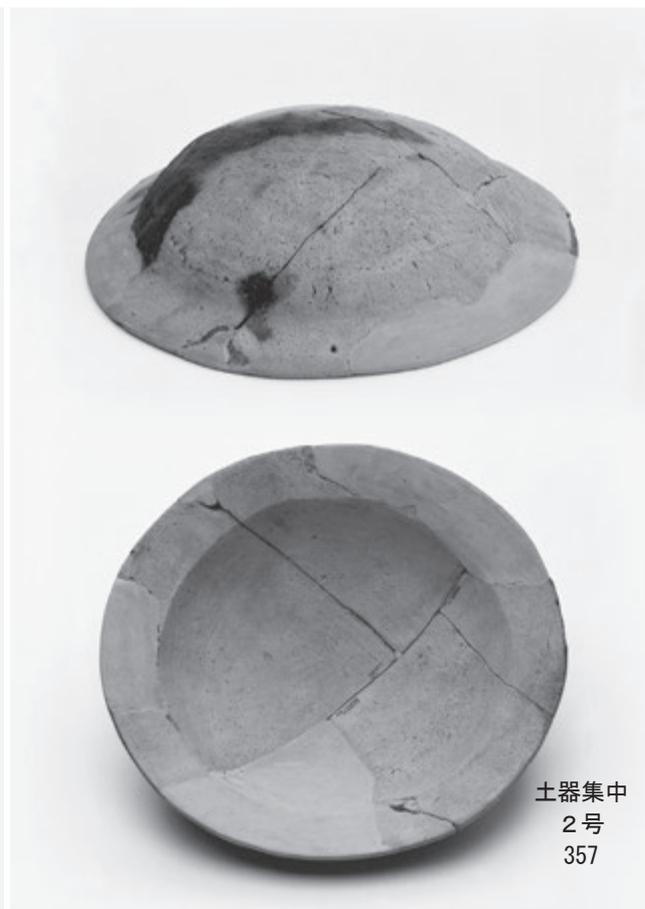
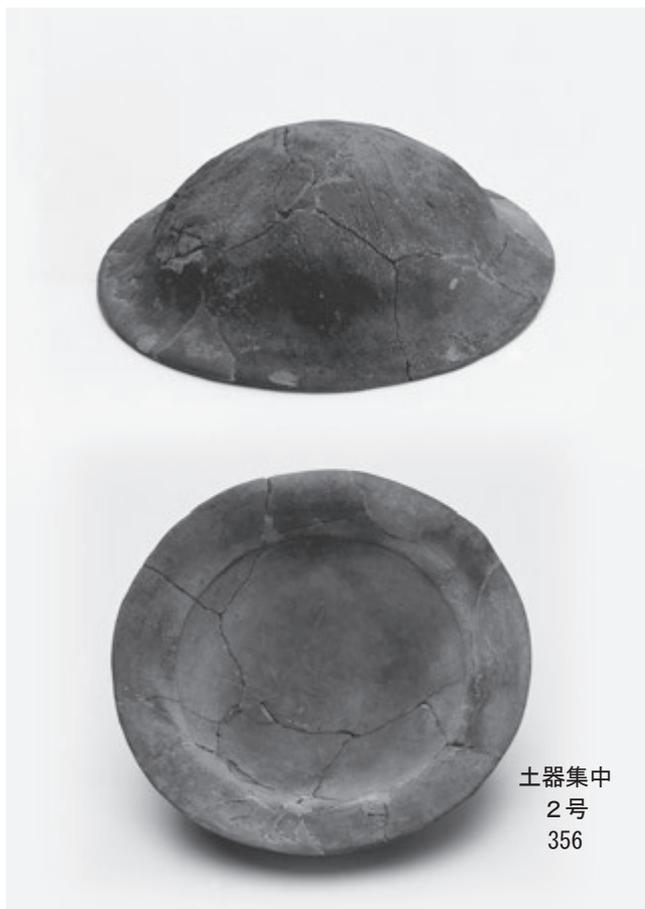
土坑・ピット・溝状遺構内出土遺物 1



溝状遺構内出土遺物 2



土器集中遺構内出土遺物 1



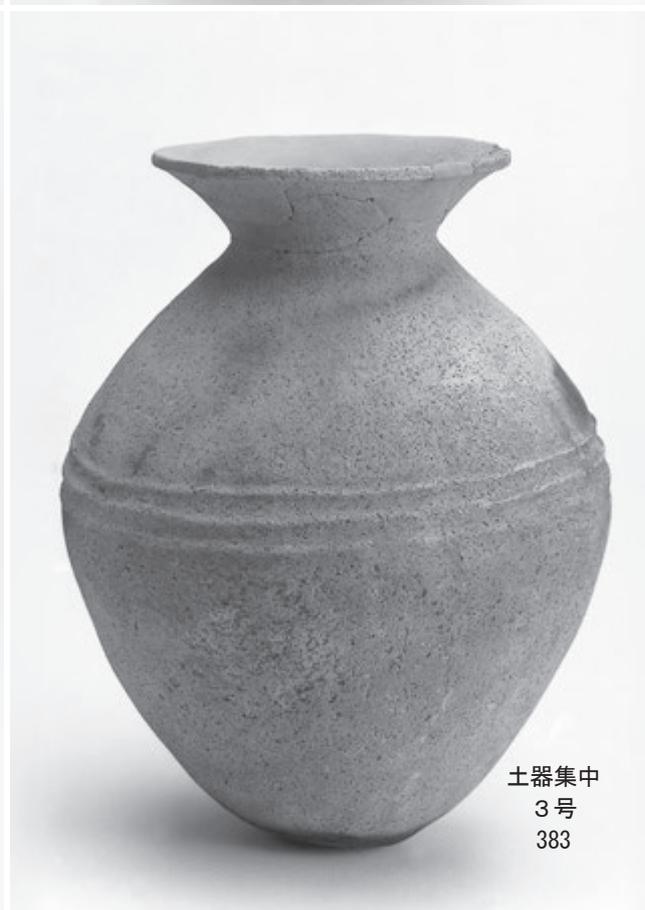
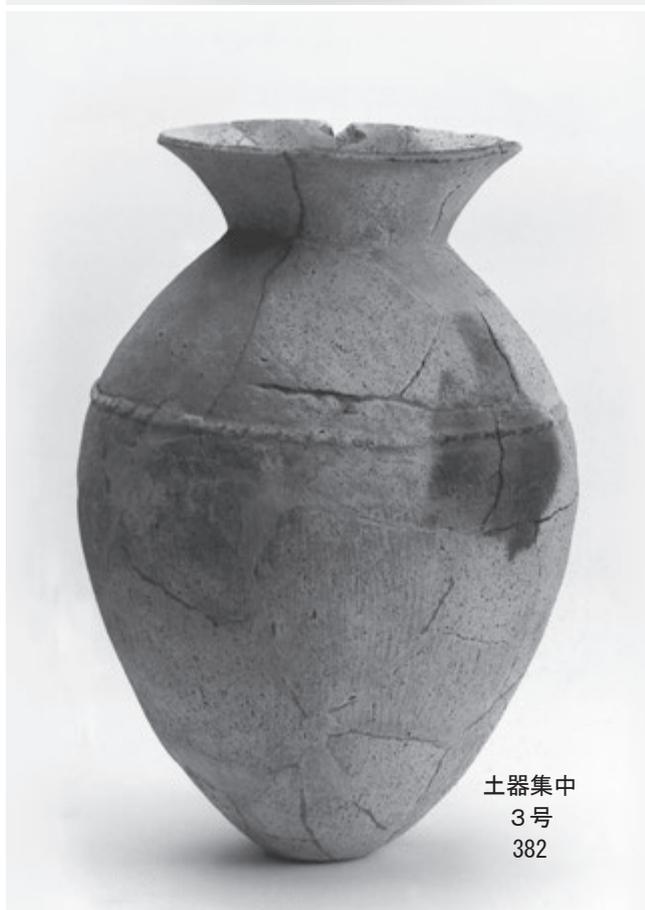
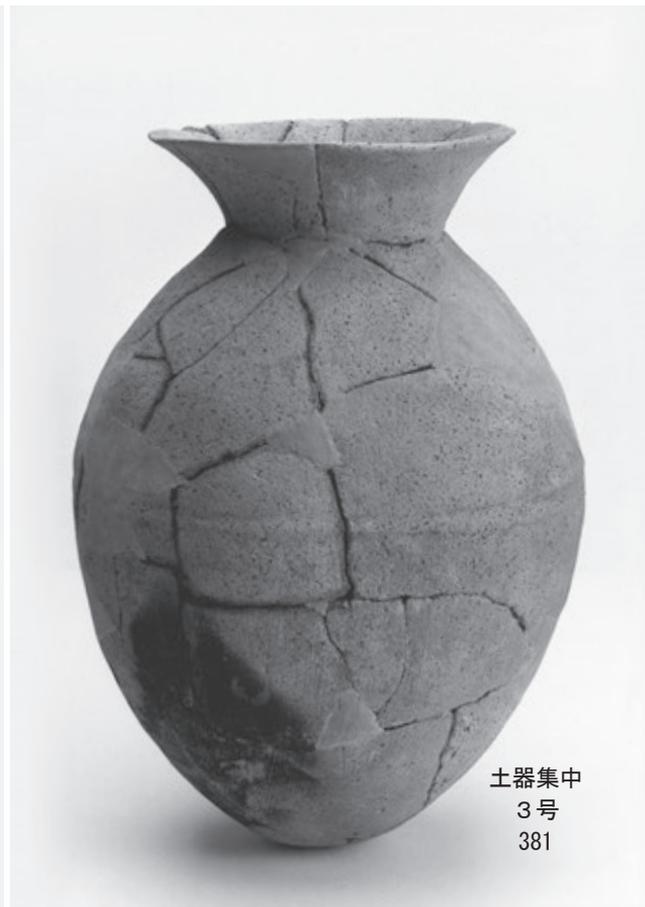
土器集中遺構内出土遺物 2



土器集中遺構内出土遺物 3



土器集中遺構内出土遺物 4

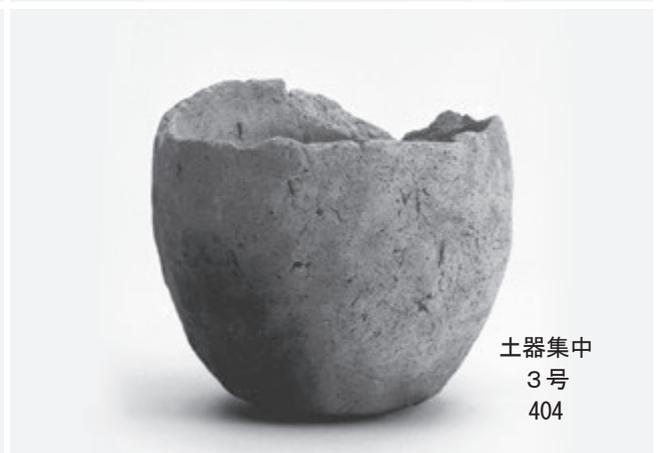


土器集中遺構内出土遺物 5



土器集中遺構内出土遺物 6

図版 28



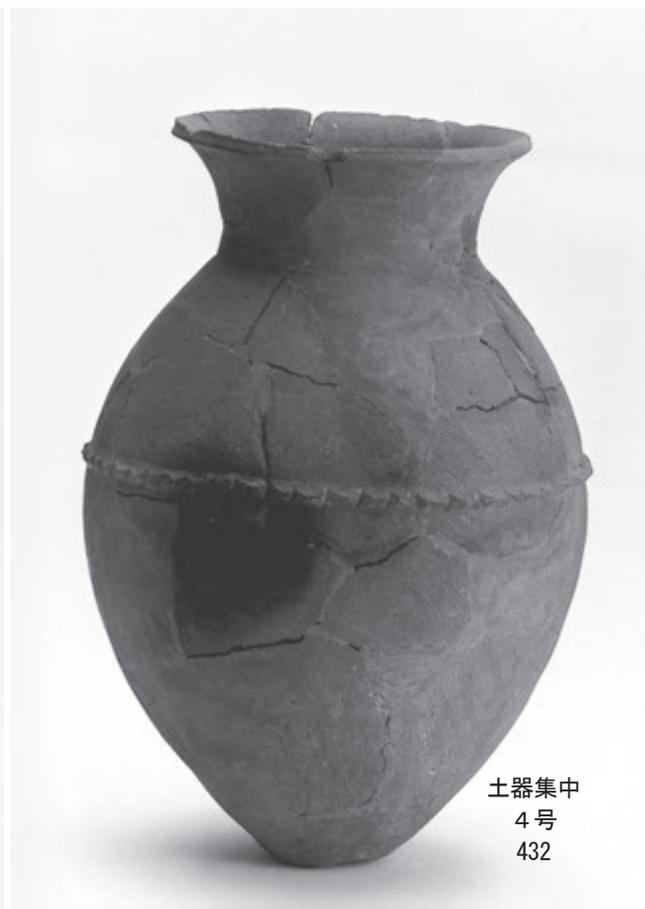
土器集中遺構内出土遺物 7



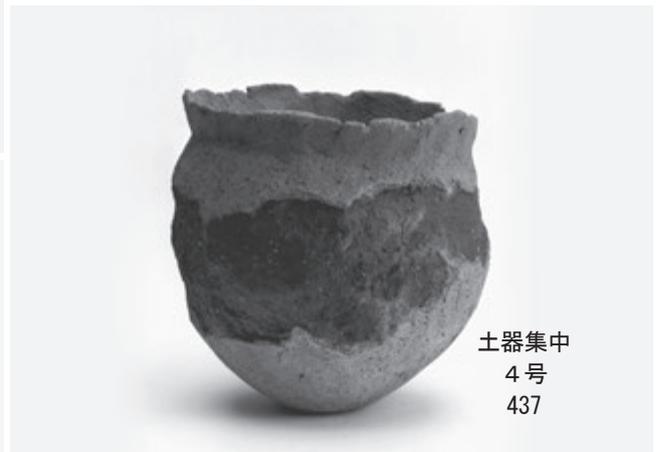
土器集中遺構内出土遺物 8



土器集中遺構内出土遺物 9



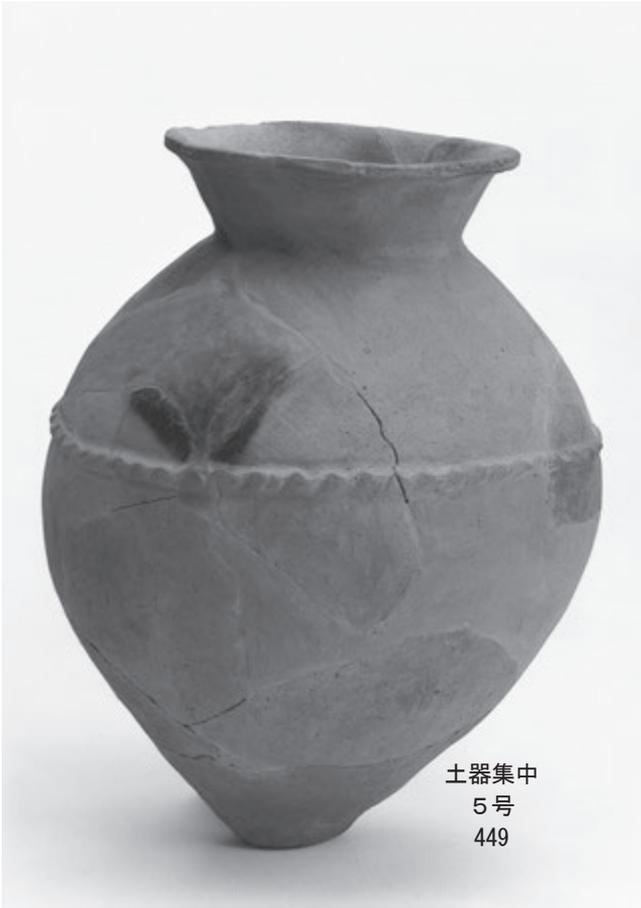
土器集中遺構内出土遺物10



土器集中遺構内出土遺物11



土器集中遺構内出土遺物12



土器集中遺構内出土遺物13



土器集中遺構内出土遺物14・古墳時代 土器 1





古墳時代 土器 3

図版 38



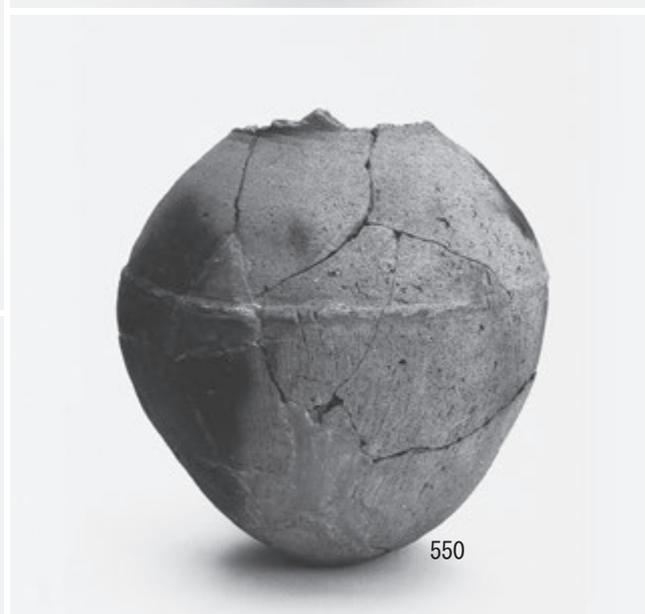
古墳時代 土器 4







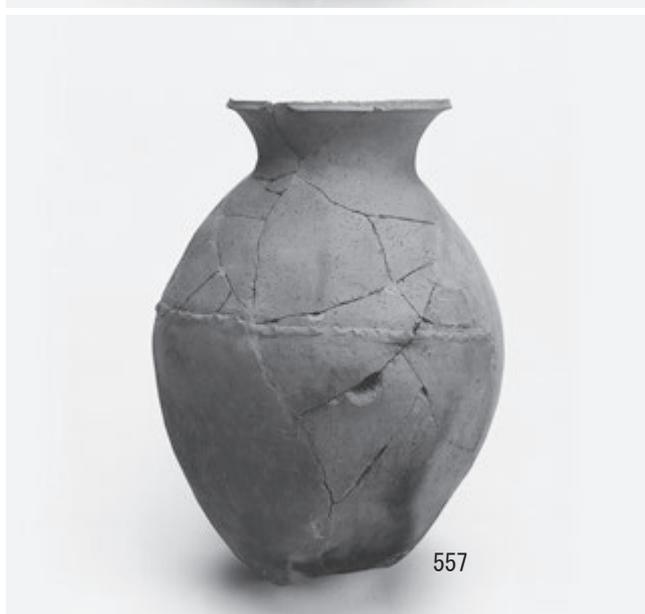
古墳時代 土器 7

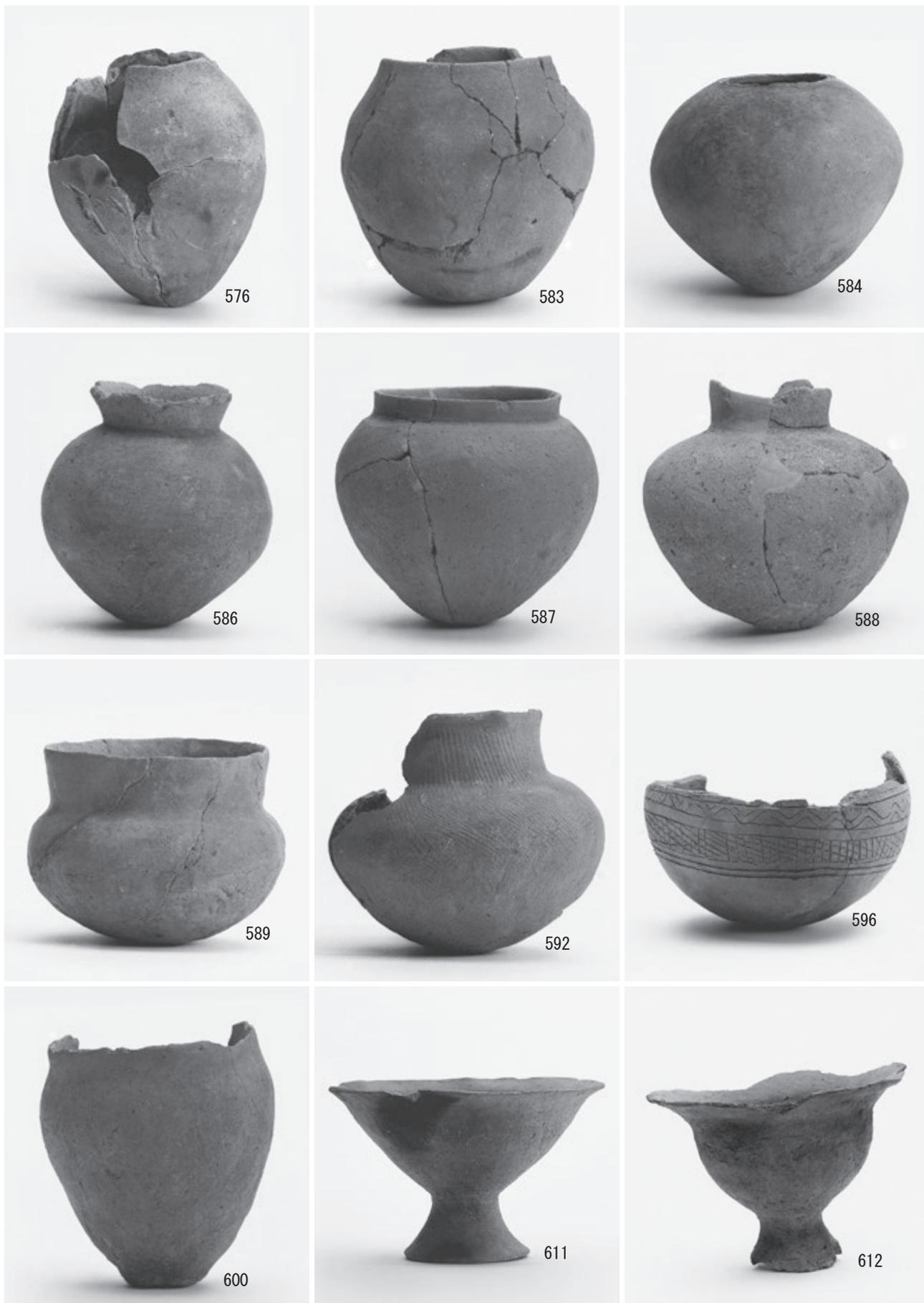




古墳時代 土器 9

図版 44





古墳時代 土器11





古墳時代 土器13

図版 48



古墳時代 土器14

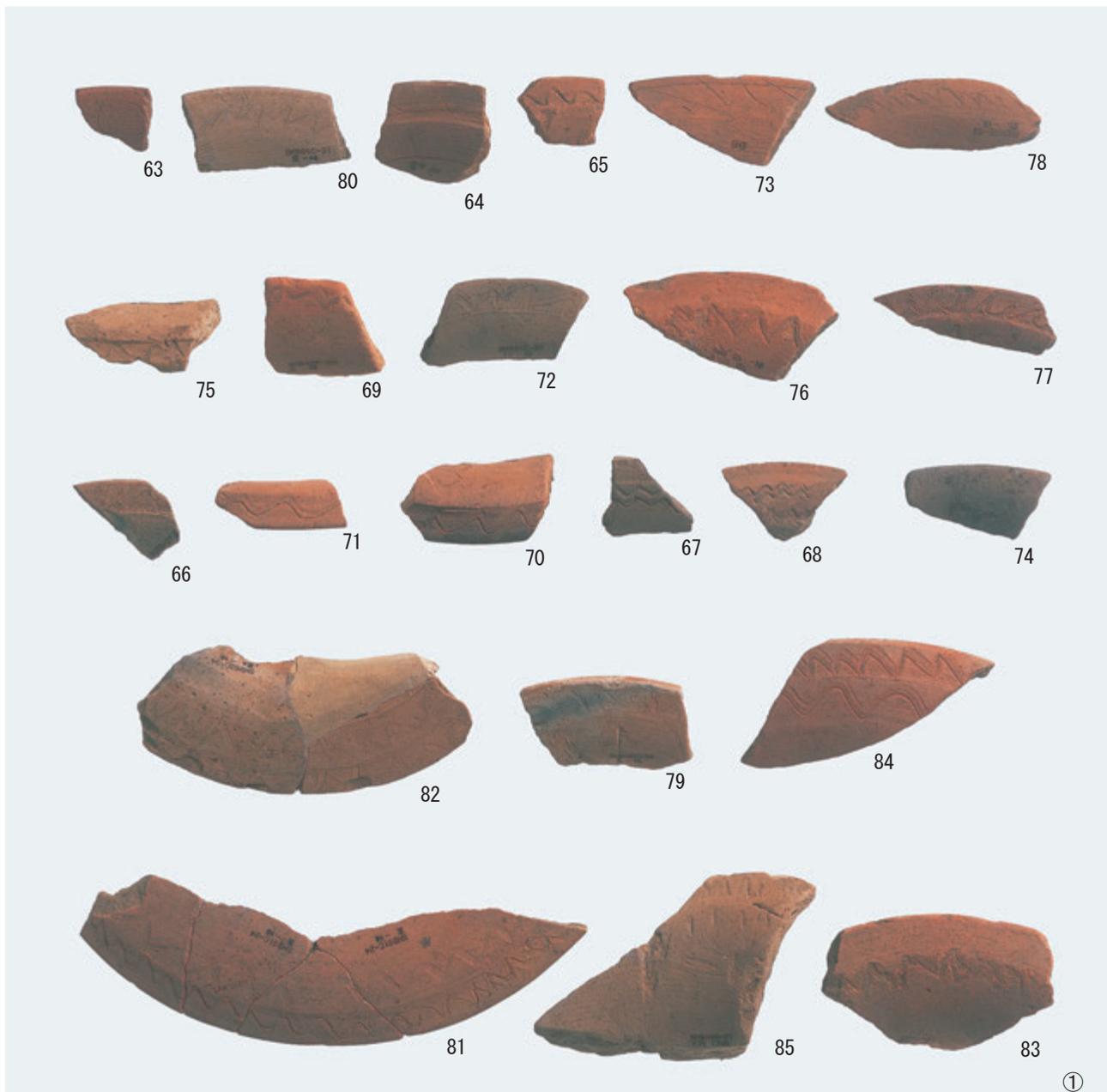


古墳時代 土器15

図版 50



古墳時代 土器16

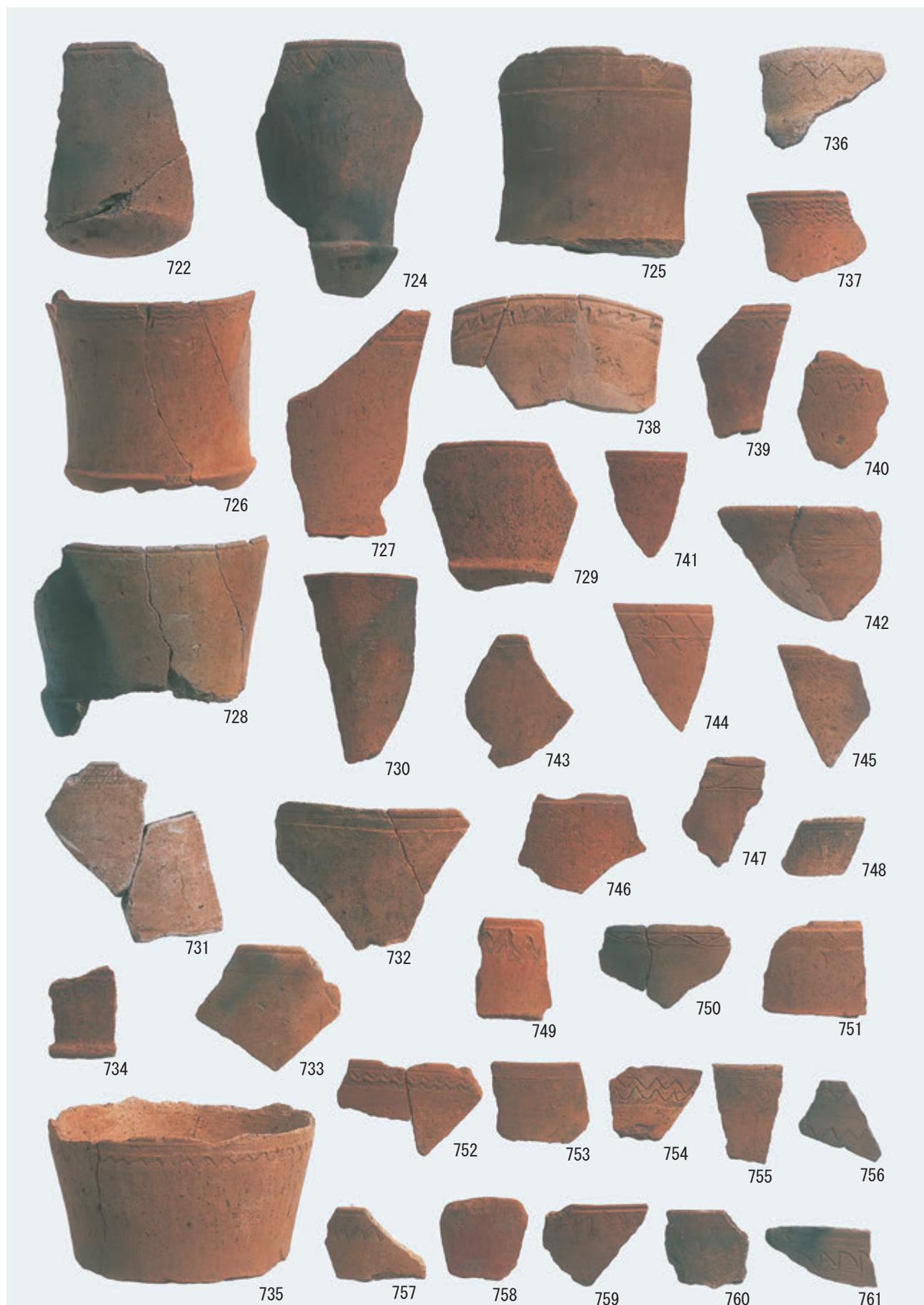


①

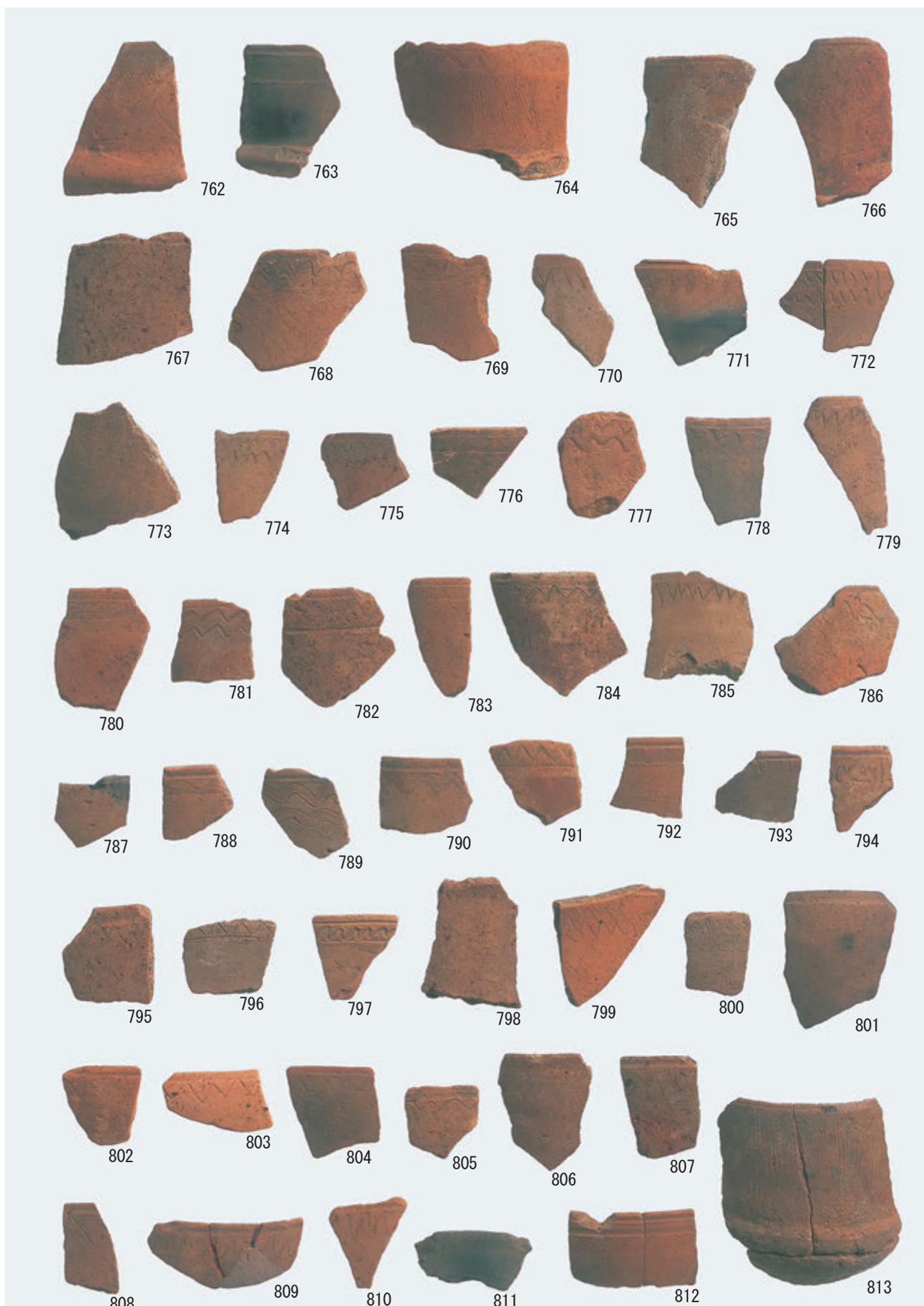


②

①弥生時代 鋸齒文付壺口縁部
②古墳時代 坏蓋・坏

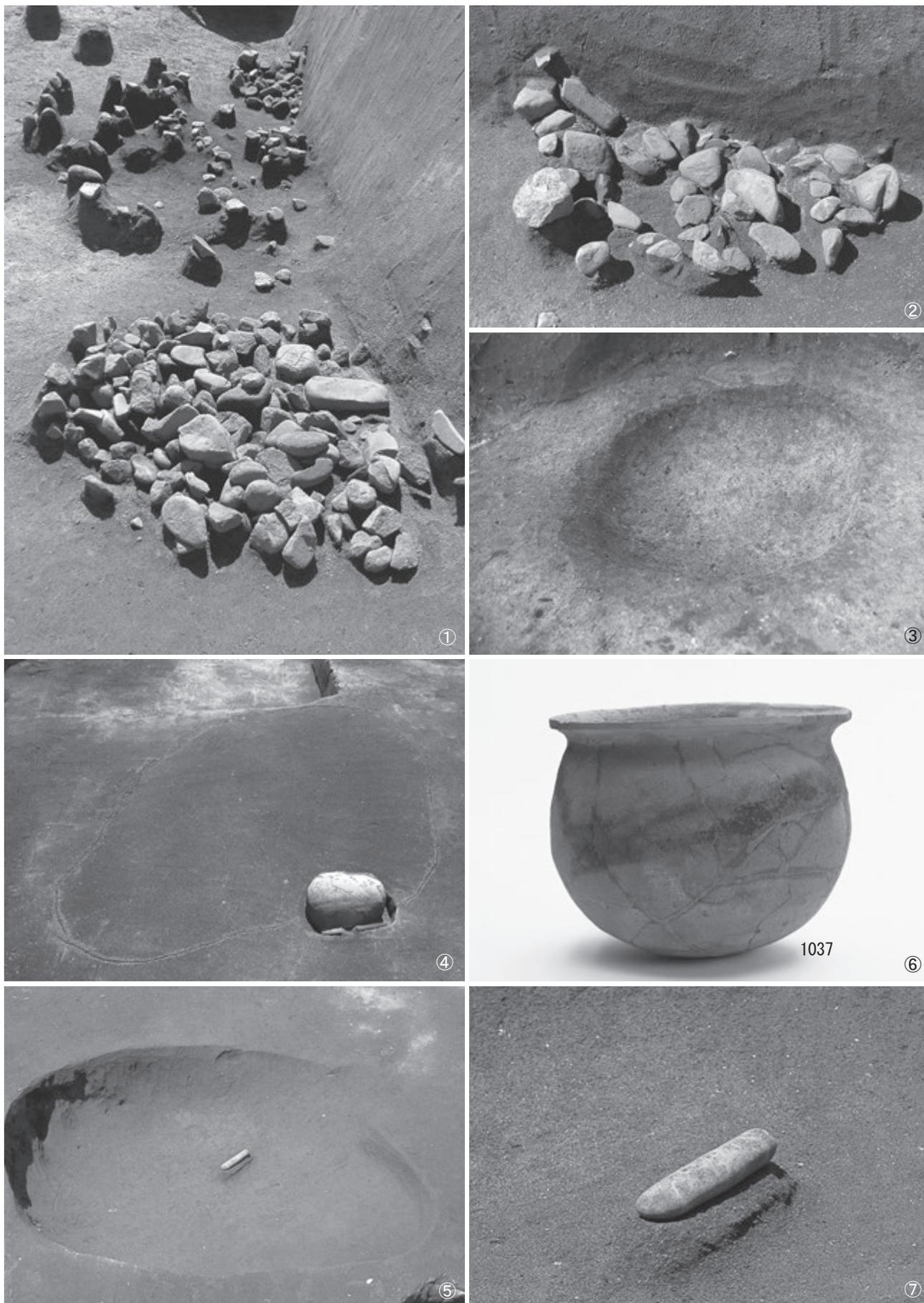


古墳時代 土器（鋸齒文） 1

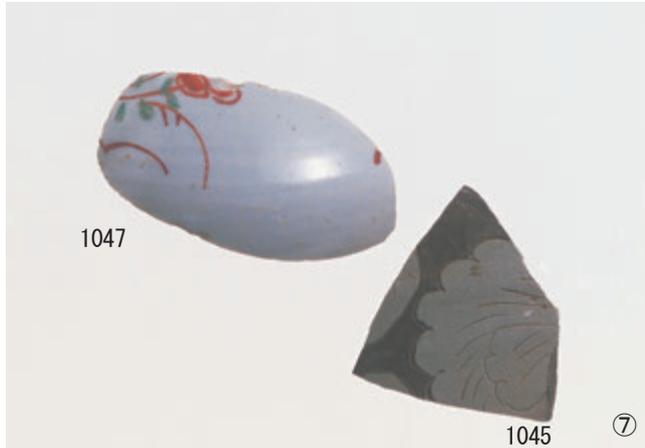
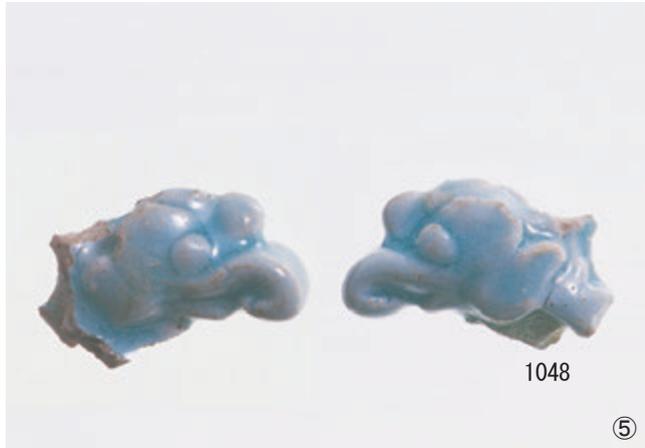


古墳時代 土器（鋸齒文）2

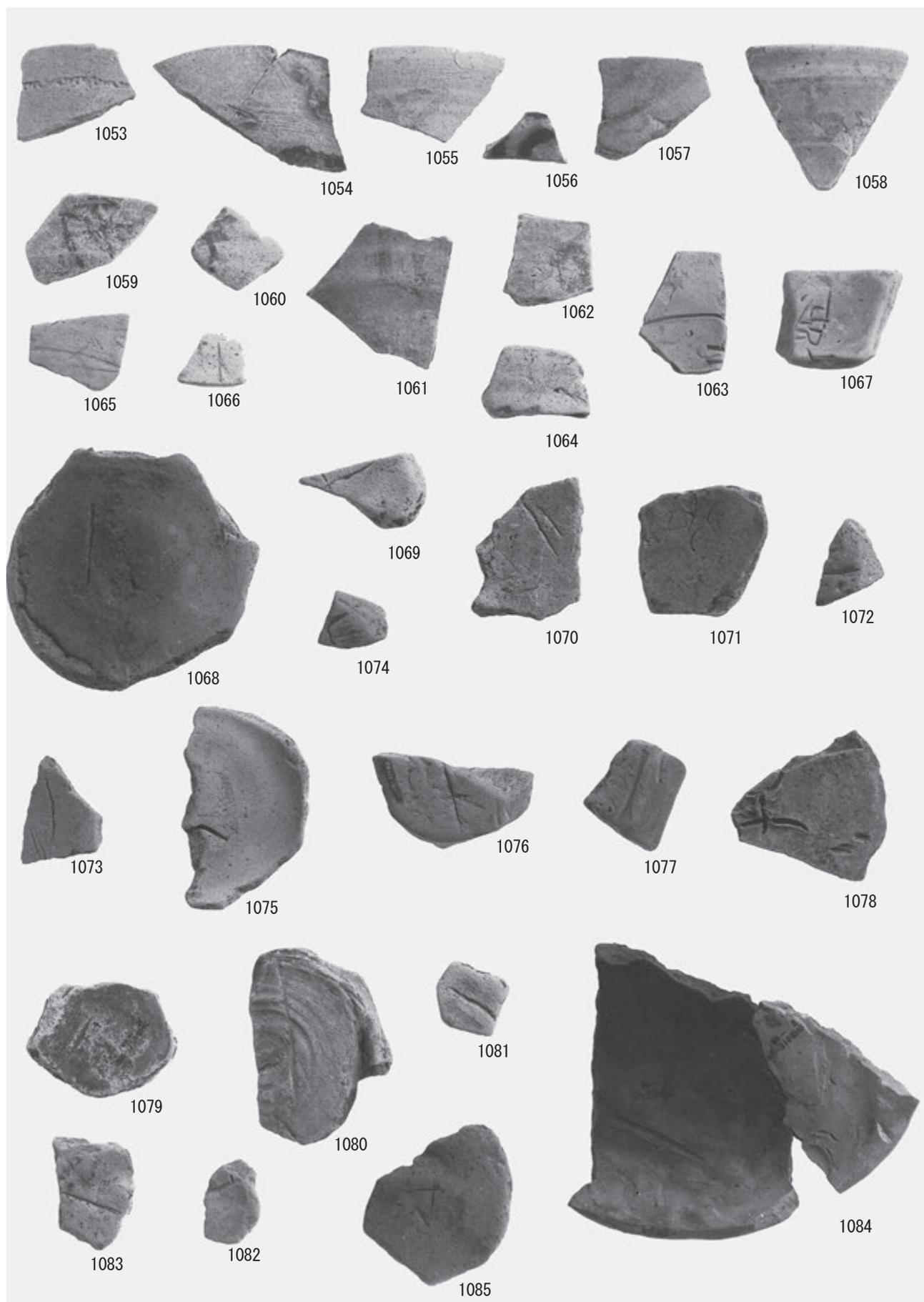
図版 54



補遺 1 縄文時代中期後葉～後期集石 ① 1号～3号
 ② 1号 ③ 3号完掘状況 古代土坑 ④ 検出状況
 ⑤ 完掘状況 ⑥・⑦ 出土遺物



補遺 2 ①古代竪穴建物状遺構 ②中世方形竪穴建物跡
 ③・④古代の出土遺物 ⑤～⑧中世の出土遺物



補遺 3 古代 墨書土器, 刻書土器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (178)

芝原遺跡 4

(弥生時代・古墳時代編)

発行年月 2013年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷所 濱島印刷株式会社
〒890-0052
鹿児島県鹿児島市上之園町17番2号
TEL 099-255-6121



鹿児島県